公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（3）

東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

天神段遺跡 1

（曽於郡大崎町）

弥生時代～近世編

2015 年 2 月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（3）
天神段遺跡 1（弥生時代～近世編）
二〇一五年二月
鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡全景



土坑墓１号内遺物出土状況



土坑墓内出土全遺物

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）の建設に伴って，平成19年度から平成25年度にかけて実施した曽於郡大崎町野方に所在する天神段遺跡の発掘調査の記録（弥生時代～近世編）です。

７年に及ぶ調査で，旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世といった複数の時代の遺構・遺物が数多く発見されており，当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものと考えます。

本報告書では，弥生時代～近世までの調査成果を報告していますが，特筆すべきは，中世初頭に該当する土坑墓が８基確認されたことで，土坑墓の中には，完形の鏡，青磁の碗や青白磁の小壺，鉄製のやじり等豊富な副葬品が発見されたものもあります。さらに，掘立柱建物跡や土坑等も多く確認されており，当時の集落の様相が窺える貴重な資料であると考えます。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただくとともに文化財保護の普及・啓発や研究などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘から報告書刊行までの一連の調査にあたり，御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県立埋蔵文化財センター，大崎町教育委員会及び志布志市教育委員会等の各関係機関並びに調査において御指導いただいた先生方や発掘作業，整理作業に従事された方々に対し，厚くお礼申し上げます。

平成27年２月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　　堂　込　秀　人

報　告　書　抄　録

ふりがな	てんじんだんいせきいち　　やよいじだいからきんせいへん
書名	天神段遺跡１　　弥生時代～近世編
副書名	東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第３集
編集者名	平木場秀男　田畑哲治　松下建生　井手上誉弘　花薗友美　岩元康成　花田寛典 江神めぐみ　深川祐子
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
発行年月	西暦2015年２月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
天神段遺跡 （てんじんだんいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 曽於郡（そおぐん） 大崎町（おおさきちょう）	46468	25-62	31° 30′ 18″	130° 55′ 48″	確認調査 2007.05.16～ 2007.07.13 本調査 ①2007.07.16～ 2008.03.19 ②2008.05.22～ 2009.03.19 ③2009.05.08～ 2010.03.19 ④2010.05.10～ 2011.03.11 ⑤2011.05.09～ 2012.03.09 ⑥2012.05.08～ 2013.03.08 ⑦2013.04.22～ 2013.10.25	19,042	東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う発掘調査

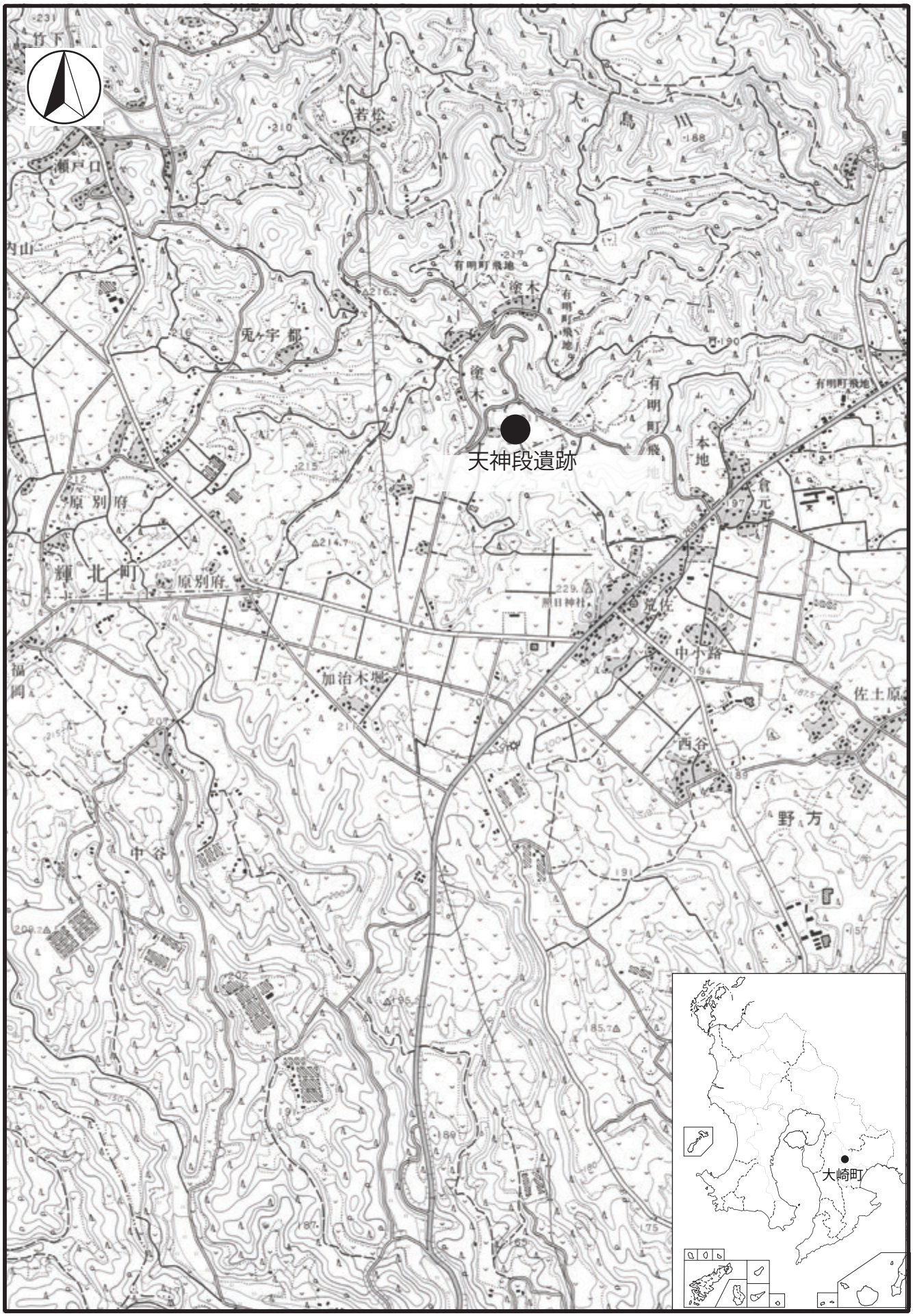
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天神段遺跡	散布地	弥生時代 （Ⅲ・Ⅳ層）	竪穴住居跡２軒	刻目突帯文土器，入来式土器	Ⅲ・Ⅳ層出土の石鏃，砥石，磨石，敲石，石皿，軽石製品等の石器は，一部を除き，詳細な時期判別が困難であったためまとめて掲載している。
	散布地	古代 （Ⅲ層）	掘立柱建物跡７棟，竪穴状遺構２基，土坑90基，ピット660基，炉跡１か所，焼土跡１か所，土器集中２か所	土師器（甕，坏，埦），墨書土器，刻書土器，須恵器，黒色土器，焼塩土器，紡錘車，鍛造剥片	
	集落跡	中世 （Ⅲ層）	掘立柱建物跡49棟，土坑墓８基，土坑113基，ピット765基，溝・古道66条，鍛冶関連遺構１基	青磁，白磁，青白磁，土師器，東播系須恵器，黒色土器，陶器，瓦器，滑石製石鍋，滑石製品，鏡，鉄製品，鉄片，古銭	
	散布地	近世 （Ⅱ層）	土坑７基，ピット１基，畝状遺構１か所	陶器，磁器，煙管（キセル）	

遺跡の概要

本遺跡は，古墳時代を除く旧石器時代～近世の複合遺跡で，各時代とも貴重な遺構や遺物が確認されている。

今回報告する弥生時代～近世においては，特に，中世の遺構や遺物が注目できる。中でも，中世初頭の湖州鏡や松喰鶴鏡などの鏡，古銭，鉄鏃や和鋏などの鉄製品，青磁，白磁，滑石製石鍋や小壺等質・量とも豊富な副葬品をもつ土坑墓や掘立柱建物跡は，ある程度高位の一族を中心とした集落の様相が窺え，当時の地域及びその周辺の歴史を紐解く上で貴重かつ注目される資料である。

※調査面積は，弥生時代～近世該当層の調査面積である。



天神段遺跡位置図（S＝1/25,000）

例　言

1　本編は，東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う天神段遺跡発掘調査報告書弥生時代～近世編である。

2　天神段遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町野方と一部，志布志市有明町に所在する。

3　発掘調査は，平成19年度から平成24年度まで国土交通省九州地方備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が実施した。平成25年度から県教委が公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）へ調査委託し，埋文調査センターが実施した。

4　発掘調査事業は，平成19年度から平成24年度まで埋文センターが，平成25年度は埋文調査センターが実施し，発掘調査事業のすべてを終了した。

5　整理・報告書作成事業は，平成22年度から平成24年度まで埋文センターで，平成25年度・平成26年度は埋文調査センターで実施した。

6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。掲載遺構番号は，時代及び遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。

7　遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＴＪ」である。

8　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

9　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

10　本書で使用した方位はすべて磁北である。

11　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は，(有)スカイサーベイ九州，ふじた航空写真，九州航空株式会社に委託した。

12　遺構実測図の作成及びトレースは，平成23年度は田畑哲治・永濵功治が，平成24年度は平木場秀男・花薗友美が，平成25年度は花田寛典が整理作業員とともに行った。また，本編に係る遺物出土状況図の作成は松下建生が整理作業員とともに行った。

13　本編に係る出土遺物の実測・トレースは，土器を関明恵・松下建生・岩元康成・江神めぐみ・深川祐子が担当し，石器を黒川忠広・花薗友美が担当し，鉄器等鉄製品を平木場秀男・新屋敷久美子が担当し，整理作業員とともに行った。また，遺物実測〈石器〉の一部を（株）九州文化財研究所，株式会社パスコに委託し冨田逸郎・黒川忠広・橋口卓也・花薗友美が監修した。

14　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘･辻明啓が行った。

15　本報告書に係る自然科学分析は，種実同定・放射性炭素年代測定をパレオ・ラボAMS年代測定グループ，(株)加速器分析研究所，パリノサーヴェイ(株)，植物珪酸体分析を（株）古環境研究所に委託した。

16　本編の執筆は次のように分担し，編集は松下建生が行った。

第Ⅰ章～第Ⅲ章　平木場秀男，松下建生

第Ⅳ章第１節（弥生時代）

遺構：松下建生

遺物：花薗友美，江神めぐみ

〃　第２節（古代）

遺構：松下建生，井手上誉弘，深川祐子

遺物：花薗友美，深川祐子

〃　第３節（中世）

遺構：平木場秀男，田畑哲治，岩元康成，江神めぐみ

遺物：岩元康成，中村和美

〃　第４節（近世）

遺構・遺物とも田畑哲治

第Ⅴ章　深川祐子

第Ⅵ章

弥生時代：江神めぐみ

古　　代：深川祐子

中　　世：岩元康成

近　　世：田畑哲治

付論：橋口尚武

写真図版：平木場秀男，田畑哲治，花薗友美，岩元康成，江神めぐみ，深川祐子

17　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図ることにしている。

本文目次

巻頭図版
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過……1
　第１節　調査に至るまでの経緯……1
　第２節　事前調査……2
　　１　分布調査……2
　　２　詳細分布調査・試掘調査……2
　　３　確認調査……2
　第３節　本調査……4
　第４節　整理・報告書作成作業……15
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……17
　第１節　地理的環境……17
　第２節　歴史的環境……17
　第３節　鹿屋串良JCT ～曽於弥五郎IC間の遺跡　…23
第Ⅲ章　調査の方法と層序……25
　第１節　調査の方法……25
　　１　発掘調査の方法……25
　　２　遺構の認定と検出方法……27
　　３　整理・報告書作成作業の方法及び内容……27
　第２節　層序……28
第Ⅳ章　発掘調査の成果……51
　第１節　弥生時代の調査成果……51
　　１　調査の概要……51
　　２　遺構……51
　　３　遺物……55
　第２節　古代の調査成果……75
　　１　調査の概要……75
　　２　遺構……75
　　３　遺物……109
　第３節　中世の調査成果……129
　　１　調査の概要……129
　　２　遺構……129
　　３　遺物……223
　第４節　近世の調査成果……241
　　１　調査の概要……241
　　２　遺構……241
　　３　遺物……241
第Ⅴ章　自然化学分析……247
　第１節　自然化学分析の概要……247
　第２節　放射性炭素年代測定……247
　第３節　種実同定……269
　第４節　植物珪酸体分析……278
第Ⅵ章　総括……283
付論　松喰鏡と和鏡の中の鶴・亀の展開……291
写真図版……297

挿図目次

第１図　確認トレンチ配置図……3
第２図　平成19年度調査範囲図……4
第３図　平成20年度調査範囲図……5
第４図　平成21年度調査範囲図……7
第５図　平成22年度調査範囲図……8
第６図　平成23年度調査範囲図……10
第７図　平成24年度調査範囲図……12
第８図　平成25年度調査範囲図……14
第９図　遺跡周辺地形写真……18
第10図　遺跡周辺地形図……19
第11図　周辺遺跡位置図……22
第12図　鹿屋串良JCT～曽於弥五郎IC間の遺跡位置図 24
第13図　天神段遺跡グリッド配置図……26
第14図　土層断面図１……29
第15図　土層断面図２……30
第16図　土層断面図３……31
第17図　土層断面図４……32
第18図　土層断面図５……33
第19図　土層断面図６……34
第20図　土層断面図７……35
第21図　土層断面図８……36
第22図　土層断面図９……37
第23図　土層断面図10……38
第24図　土層断面図11……39
第25図　土層断面図12……40
第26図　土層断面図13……41
第27図　土層断面図14……42
第28図　土層断面図15……43
第29図　土層断面図16……44
第30図　土層断面図17……45
第31図　土層断面図18……46
第32図　土層断面図19……47
第33図　土層断面図20……48
第34図　土層断面図21……49
第35図　土層断面図22……50
第36図　弥生時代の遺構配置図……51
第37図　弥生時代の竪穴住居跡１号……52
第38図　弥生時代の竪穴住居跡１号内出土遺物……53
第39図　弥生時代の竪穴住居跡２号……54
第40図　弥生時代の竪穴住居跡２号内出土遺物……55
第41図　弥生時代の土器全出土分布図……56
第42図　弥生時代の土器出土分布図(掲載分の器種別)　57
第43図　甕形Ⅰａ類土器……58
第44図　甕形Ⅰｂ類土器……59
第45図　甕形Ⅱａ類土器……60
第46図　甕形Ⅱｂ－１類土器１……61
第47図　甕形Ⅱｂ－１類土器２……62
第48図　甕形Ⅱｂ－２類土器１……63
第49図　甕形Ⅱｂ－２類土器２……64
第50図　甕形Ⅲ類土器……65
第51図　壺形土器１……66
第52図　壺形土器２……67
第53図　Ⅲ・Ⅳ層出土石器分布図……68
第54図　Ⅲ・Ⅳ層の石器１(石鏃・石斧)……70

第55図　Ⅲ・Ⅳ層の石器２(磨石・敲石・凹石) ……71
第56図　Ⅲ・Ⅳ層の石器３(磨石・砥石) ……72
第57図　Ⅲ・Ⅳ層の石器４(砥石・石皿) ……73
第58図　Ⅲ・Ⅳ層の石器５(石皿)……74
第59図　古代の掘立柱建物跡・ピット配置図……76
第60図　古代の掘立柱建物跡１号……77
第61図　古代の掘立柱建物跡２号……78
第62図　古代の掘立柱建物跡３号……79
第63図　古代の掘立柱建物跡４号……80
第64図　古代の掘立柱建物跡５号……81
第65図　古代の掘立柱建物跡６・７号……82
第66図　柱穴内出土遺物……83
第67図　古代の竪穴住居状遺構・土坑・炉跡・焼土跡・土器集中の配置図…84
第68図　古代の竪穴住居状遺構１号……85
第69図　古代の竪穴住居状遺構１号内出土遺物……85
第70図　古代の竪穴住居状遺構２号……86
第71図　古代の竪穴住居状遺構２号内出土遺物……86
第72図　古代の土坑１(Type１) ……88
第73図　古代の土坑２(Type１) ……89
第74図　古代の土坑３(Type１) ……90
第75図　Type１土坑内出土遺物 ……91
第76図　古代の土坑４(Type２) ……92
第77図　古代の土坑５(Type２) ……93
第78図　古代の土坑６(Type２) ……94
第79図　古代の土坑７(Type２) ……95
第80図　Type２土坑内出土遺物 ……96
第81図　古代の土坑８(Type３) ……97
第82図　古代の土坑９(Type４) ……98
第83図　古代の土坑10(Type５) ……99
第84図　古代の土坑11(Type５) …… 100
第85図　古代の土坑12(Type５) …… 101
第86図　古代のピット１…… 103
第87図　古代のピット２…… 104
第88図　古代のピット３…… 105
第89図　古代のピット内出土遺物…… 106
第90図　古代の炉跡…… 106
第91図　古代の焼土跡(１・２号)…… 107
第92図　古代の土器集中１号…… 107
第93図　古代の土器集中１号内出土遺物…… 108
第94図　古代の土器集中２号…… 108
第95図　古代の土器集中２号内出土遺物…… 109
第96図　古代の土器全出土分布図…… 110
第97図　古代の土師器出土分布図(掲載分)…… 111
第98図　古代の墨書・黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車出土分布図… 112
第99図　古代の土師器１(埦)…… 113
第100図　古代の土師器２(坏) …… 114
第101図　古代の土師器３(甕) …… 116
第102図　古代の土師器４(甕) …… 117
第103図　古代の墨書土器１ …… 118
第104図　古代の墨書土器２ …… 119
第105図　古代の黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車 120
第106図　軽石加工品出土分布図 …… 123
第107図　軽石加工品１ …… 124
第108図　軽石加工品２ …… 125
第109図　軽石加工品３ …… 126
第110図　軽石加工品４ …… 127
第111図　軽石加工品５ …… 128
第112図　中世の土坑墓配置図 …… 130
第113図　中世の土坑墓１号① …… 131
第114図　中世の土坑墓１号②(出土状況・断面図) 133
第115図　中世の土坑墓１号内出土遺物①(磁器・土器)134
第116図　中世の土坑墓１号内出土遺物②(石器・金属器)136
第117図　中世の土坑墓１号内出土遺物③(和鏡)… 137
第118図　中世の土坑墓２号(出土状況・出土遺物) 139
第119図　中世の土坑墓３号①(出土状況・出土遺物)140
第120図　中世の土坑墓３号②(出土遺物・鉄器) … 141
第121図　中世の土坑墓４号(出土遺物)・６号 …… 142
第122図　中世の土坑墓５号(出土状況・出土遺物) 143
第123図　中世の土坑墓７号①(出土状況・断面図) 145
第124図　中世の土坑墓７号内出土遺物①(磁器・土器・鉄器・古銭)146
第125図　中世の土坑墓７号内出土遺物②(歯出土状況)146
第126図　中世の土坑墓７号内出土遺物③(湖州鏡) 147
第127図　中世の土坑墓８号① …… 148
第128図　中世の土坑墓８号②(出土遺物) …… 149
第129図　中世の掘立柱建物跡配置図１(Ａ群) …… 151
第130図　中世の掘立柱建物跡１号 …… 153
第131図　中世の掘立柱建物跡２号 …… 154
第132図　中世の掘立柱建物跡３号 …… 155
第133図　中世の掘立柱建物跡４・５号 …… 156
第134図　中世の掘立柱建物跡６・７号 …… 157
第135図　中世の掘立柱建物跡８・９号 …… 158
第136図　中世の掘立柱建物跡10・11号 …… 159
第137図　中世の掘立柱建物跡12・13号 …… 160
第138図　中世の掘立柱建物跡14号 …… 161
第139図　中世の掘立柱建物跡配置図２(Ｂ群) …… 162
第140図　中世の掘立柱建物跡15・16号 …… 163
第141図　中世の掘立柱建物跡17・18号 …… 164
第142図　中世の掘立柱建物跡19・20号 …… 165
第143図　中世の掘立柱建物跡21 ～ 23号…… 166
第144図　中世の掘立柱建物跡配置図３(Ｃ群) …… 167
第145図　中世の掘立柱建物跡24号 …… 168
第146図　中世の掘立柱建物跡25・26号 …… 169
第147図　中世の掘立柱建物跡27・28号 …… 170
第148図　中世の掘立柱建物跡29・30号 …… 171
第149図　中世の掘立柱建物跡31・32号 …… 172
第150図　中世の掘立柱建物跡33・34号 …… 173
第151図　中世の掘立柱建物跡35・36号 …… 174
第152図　中世の掘立柱建物跡配置図４(Ｄ群) …… 175
第153図　中世の掘立柱建物跡37号 …… 176
第154図　中世の掘立柱建物跡38・39号 …… 177
第155図　中世の掘立柱建物跡配置図５(Ｅ群) …… 178
第156図　中世の掘立柱建物跡40・41号 …… 179
第157図　中世の掘立柱建物跡配置図６(その他) … 180
第158図　中世の掘立柱建物跡42号 …… 181
第159図　中世の掘立柱建物跡43・44号 …… 182
第160図　中世の掘立柱建物跡45号 …… 183
第161図　中世の掘立柱建物跡46・47号 …… 184
第162図　中世の掘立柱建物跡48・49号 …… 185
第163図　中世の杭列１～３ …… 186
第164図　中世の溝状遺構配置図１(溝１～ 20) …… 187
第165図　中世の溝１～３ …… 188
第166図　中世の溝４・５ …… 188
第167図　中世の溝６～９ …… 189
第168図　中世の溝10 ～ 15…… 189

第169図　中世の溝16～ 20 …… 189
第170図　中世の溝状遺構配置図２(溝21～ 28) …… 190
第171図　中世の溝21～ 26 …… 191
第172図　中世の溝27・28 …… 192
第173図　中世の溝29 …… 193
第174図　中世の溝状遺構配置図３(溝30～ 33) …… 194
第175図　中世の溝30～ 33 …… 194
第176図　中世の溝状遺構配置図４(溝34～ 37) …… 195
第177図　中世の溝34～ 37 …… 196
第178図　中世の溝状遺構配置図５(溝38～ 46) …… 197
第179図　中世の溝38～ 46 …… 198
第180図　中世の溝状遺構配置図６(溝47～ 58) …… 199
第181図　中世の溝47～ 51，58 …… 199
第182図　中世の溝52～ 57 …… 200
第183図　中世の溝状遺構配置図７(溝59～ 66) …… 201
第184図　中世の溝59～ 62 …… 201
第185図　中世の溝63～ 66 …… 202
第186図　中世の鍛冶関連遺構配置図 …… 203
第187図　中世の鍛冶関連遺構土層断面図 …… 203
第188図　鍛冶関連遺構内検出土坑 …… 204
第189図　鍛冶関連遺構内出土遺物 …… 204
第190図　中世の土坑・ピット配置図 …… 206
第191図　中世の土坑(Type１－①) …… 209
第192図　中世の土坑(Type１－②) …… 210
第193図　中世の土坑(Type１－③，Type５－①)　211
第194図　中世の土坑(Type１－④，Type２－①，Type５－②) 213
第195図　中世の土坑(Type２－②) …… 214
第196図　中世の土坑(Type３) …… 215
第197図　中世の土坑(Type４) …… 216
第198図　中世の土坑(Type５－③) …… 217
第199図　中世のピット …… 220
第200図　中世の遺物出土状況図１ …… 221
第201図　中世の遺物出土状況図２ …… 222
第202図　中世の遺物１ …… 223
第203図　中世の遺物２ …… 224
第204図　中世の遺物３ …… 225
第205図　中世の遺物４ …… 226
第206図　中世の遺物５ …… 227
第207図　中世の遺物６ …… 228
第208図　中世の遺物７ …… 229
第209図　中世の遺物８ …… 230
第210図　中世の遺物出土状況図(滑石・金属器) … 236
第211図　中世の遺物(滑石１) …… 237
第212図　中世の遺物(滑石２) …… 238
第213図　中世の遺物(金属器１) …… 239
第214図　中世の遺物(金属器２) …… 240
第215図　近世の遺構配置図・出土状況図 …… 242
第216図　近世の土坑・ピット …… 243
第217図　近世の畝状遺構 …… 244
第218図　近世の遺物 …… 245

付論の挿図

図１　県内出土の松喰鏡…… 291
図２　県内神社所蔵の大型松喰鏡…… 292
図３　蓬莱山がある法隆寺の袈裟箱…… 292
図４　蓬莱鏡の変遷…… 294
図５　室町時代の和鏡の変遷…… 294
図６　都城市尾崎第１遺跡出土柄鏡…… 295
図７　松竹柄鏡…… 295
図８　18世紀の蓬莱鏡(入来郷土館所蔵)…… 296
図９　松竹梅柄鏡(西之表市資料館所蔵)…… 296

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……21
第２表　鹿屋串良JCT～曽於弥五郎IC間の遺跡……23
第３表　天神段遺跡の基本土層……28
第４表　竪穴住居跡１号内出土土器観察表 ……53
第５表　竪穴住居跡１号内出土石器観察表……53
第６表　竪穴住居跡２号内出土土器観察表 ……55
第７表　竪穴住居跡２号内出土石器観察表……55
第８表　甕形Ⅰ類土器観察表……59
第９表　甕形Ⅱａ類土器観察表……60
第10表　甕形Ⅱｂ－１類土器観察表……62
第11表　甕形Ⅱｂ－２類土器観察表……64
第12表　甕形Ⅲ類土器観察表……65
第13表　壺形土器観察表……67
第14表　Ⅲ・Ⅳ層出土石器観察表 ……74
第15表　掘立柱建物跡１号計測表……77
第16表　掘立柱建物跡２号計測表……78
第17表　掘立柱建物跡３号計測表……79
第18表　掘立柱建物跡４号計測表……80
第19表　掘立柱建物跡５号計測表……81
第20表　掘立柱建物跡６号計測表……82
第21表　掘立柱建物跡７号計測表……82
第22表　柱穴内出土遺物観察表……83
第23表　竪穴住居状遺構１号内出土遺物観察表……85
第24表　竪穴住居状遺構２号内出土遺物観察表……86
第25表　Type１土坑内出土遺物観察表 ……91
第26表　Type２土坑内出土遺物観察表 ……96
第27表　古代の土坑計測表…… 102
第28表　古代のピット計測表…… 105
第29表　古代のピット内出土遺物観察表…… 106
第30表　土器集中１号内出土遺物観察表…… 108
第31表　土器集中２号内出土遺物観察表…… 109
第32表　古代の土師器観察表１…… 121
第33表　古代の土師器観察表２…… 122
第34表　古代の墨書土器観察表…… 122
第35表　古代の黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車観察表 122
第36表　軽石加工品観察表…… 128
第37表　土坑墓内出土遺物観察表１(磁器)…… 149
第38表　土坑墓内出土遺物観察表２(石器)…… 149
第39表　土坑墓内出土遺物観察表３(土器)…… 150
第40表　土坑墓内出土遺物観察表４(金属器)…… 150
第41表　掘立柱建物跡１号計測表…… 154
第42表　掘立柱建物跡２号計測表…… 154
第43表　掘立柱建物跡３号計測表…… 155
第44表　掘立柱建物跡４号計測表…… 156
第45表　掘立柱建物跡５号計測表…… 156
第46表　掘立柱建物跡６号計測表…… 157

第47表　掘立柱建物跡７号計測表…… 157
第48表　掘立柱建物跡８号計測表…… 158
第49表　掘立柱建物跡９号計測表…… 158
第50表　掘立柱建物跡10号計測表…… 161
第51表　掘立柱建物跡11号計測表…… 161
第52表　掘立柱建物跡12号計測表…… 161
第53表　掘立柱建物跡13号計測表…… 161
第54表　掘立柱建物跡14号計測表…… 161
第55表　掘立柱建物跡15号計測表…… 163
第56表　掘立柱建物跡16号計測表…… 163
第57表　掘立柱建物跡17号計測表…… 164
第58表　掘立柱建物跡18号計測表…… 164
第59表　掘立柱建物跡19号計測表…… 165
第60表　掘立柱建物跡20号計測表…… 165
第61表　掘立柱建物跡21号計測表…… 166
第62表　掘立柱建物跡22号計測表…… 166
第63表　掘立柱建物跡23号計測表…… 166
第64表　掘立柱建物跡24号計測表…… 168
第65表　掘立柱建物跡25号計測表…… 169
第66表　掘立柱建物跡26号計測表…… 169
第67表　掘立柱建物跡27号計測表…… 170
第68表　掘立柱建物跡28号計測表…… 170
第69表　掘立柱建物跡29号計測表…… 172
第70表　掘立柱建物跡30号計測表…… 172
第71表　掘立柱建物跡31号計測表…… 172
第72表　掘立柱建物跡32号計測表…… 172
第73表　掘立柱建物跡33号計測表…… 173
第74表　掘立柱建物跡34号計測表…… 173
第75表　掘立柱建物跡35号計測表…… 174
第76表　掘立柱建物跡36号計測表…… 174
第77表　掘立柱建物跡37号計測表…… 178
第78表　掘立柱建物跡38号計測表…… 178
第79表　掘立柱建物跡39号計測表…… 178
第80表　掘立柱建物跡40号計測表…… 179
第81表　掘立柱建物跡41号計測表…… 179
第82表　掘立柱建物跡42号計測表…… 181
第83表　掘立柱建物跡43号計測表…… 182
第84表　掘立柱建物跡44号計測表…… 182
第85表　掘立柱建物跡45号計測表…… 183
第86表　掘立柱建物跡46号計測表…… 184
第87表　掘立柱建物跡47号計測表…… 184
第88表　掘立柱建物跡48号計測表…… 185
第89表　掘立柱建物跡49号計測表…… 185
第90表　鍛冶関連遺構内出土遺物観察表…… 204
第91表　中世の土坑計測表…… 218
第92表　中世のピット計測表…… 220
第93表　中世の遺物観察表１…… 231
第94表　中世の遺物観察表２…… 232
第95表　中世の遺物観察表３…… 233
第96表　中世の遺物観察表４…… 234
第97表　中世の遺物観察表５…… 235
第98表　中世の遺物観察表(滑石)…… 238
第99表　中世の遺物観察表(金属器)…… 240
第100表　近世の土坑計測表…… 243
第101表　近世のピット計測表…… 243
第102表　近世の遺物観察表…… 246

図版目次

巻頭図版
巻頭図版１　遺跡全景
巻頭図版２　土坑墓１号内遺物出土状況
巻頭図版３　土坑墓内出土全遺物
本文中写真
土坑墓１号内出土青磁碗…… 135
土坑墓１号内出土古銭(開元通宝)…… 136
土坑墓１号内出土古銭(Ｘ線写真)…… 136
土坑墓１号内出土古銭(繊維に包まれた状態)…… 136
土坑墓５号内出土青磁碗…… 144
土坑墓７号内出土和鋏(繊維付着)…… 146
土坑墓７号内出土古銭(政和通宝)…… 146
土坑墓７号内出土古銭(Ｘ線写真)…… 146
土坑墓７号内出土湖州鏡(和紙付着)…… 147
土坑墓７号内出土湖州鏡(Ｘ線写真)…… 147
土坑墓７号内出土湖州鏡(紐状繊維付着)…… 147
紡錘車(Ｘ線写真)…… 239
巻末図版
図版１…… 297
　遺跡遠景
図版２…… 298
　土層断面・発掘作業風景
図版３…… 299
　①～④弥生竪穴住居跡１号
　⑤・⑥・⑧弥生竪穴住居跡２号
　⑦弥生竪穴住居跡２号内焼土跡
図版４…… 300
　弥生時代の土器１
図版５…… 301
　弥生時代の土器２
図版６…… 302
　弥生時代の土器３
図版７…… 303
　弥生時代の土器４
図版８…… 304
　弥生時代の土器５
　遺構内石器
　Ⅲ・Ⅳ層の石器１
図版９…… 305
　Ⅲ・Ⅳ層の石器２
図版10…… 306
　①～④古代竪穴住居状遺構１号
　⑤～⑧古代竪穴住居状遺構２号
図版11…… 307
　①～③古代土坑６号
　④・⑤古代土坑３号・８号
　⑥・⑦古代土坑10号
　⑧古代土坑11号
図版12…… 308
　①古代土坑11号
　②・③古代土坑14号
　④・⑤古代土坑15号

⑥～⑧古代土坑20号
図版13…… 309
①・②古代土坑22号
③・④古代土坑24号
⑤古代土坑４・25・40・46・84号
⑥・⑦古代土坑25号
⑧古代土坑26号
図版14 …… 310
①・②古代土坑26号
③～⑤古代土坑28号
⑥・⑦古代土坑40号
⑧古代土坑41号
図版15…… 311
①・②古代土坑41号
③・④古代土坑43号
⑤・⑥古代土坑50号
⑦・⑧古代土坑51号
図版16…… 312
①古代土坑52～ 59号
②・③古代土坑50号
④～⑥古代土坑64号
⑦・⑧古代土坑84号
図版17…… 313
①古代の炉跡
②～⑤古代の焼土跡
図版18…… 314
古代の土器１
図版19…… 315
古代の土器２
図版20…… 316
古代の土器３
図版21…… 317
古代の土器４
図版22…… 318
古代の土器５
図版23…… 319
古代の土器６
図版24…… 320
古代の土器７
図版25…… 321
軽石加工品１
図版26…… 322
軽石加工品２
図版27…… 323
土坑墓１号内遺物出土状況１
図版28…… 324
土坑墓１号内遺物出土状況２
図版29…… 325
①～③土坑墓２号内遺物出土状況
④土坑墓３号内遺物出土状況
図版30…… 326
①土坑墓３号検出状況
②～⑤土坑墓３号内遺物出土状況
⑥土坑墓４号完堀
⑦土坑墓６号検出状況
図版31…… 327
①・②土坑墓５号内遺物出土状況
③土坑墓５号内出土遺物
④・⑤土坑墓８号内遺物出土状況
⑥土坑墓８号内出土遺物
図版32…… 328
①・③～⑤土坑墓７号内遺物出土状況
②土坑墓７号検出状況
図版33…… 329
①掘立柱建物跡１号
②掘立柱建物跡１・２号
③掘立柱建物跡３号
④掘立柱建物跡６号
⑤掘立柱建物跡７号
⑥・⑦掘立柱建物跡８号
⑧掘立柱建物跡９号
図版34…… 330
①・②掘立柱建物跡10号
③掘立柱建物跡11号
④掘立柱建物跡12号
⑤掘立柱建物跡13号
⑥掘立柱建物跡14号
⑦・⑧掘立柱建物跡15号
図版35…… 331
①・②掘立柱建物跡16号
③・④掘立柱建物跡19号
⑤・⑥掘立柱建物跡20号
⑦・⑧掘立柱建物跡21号
図版36…… 332
①・②掘立柱建物跡22号
③・④掘立柱建物跡27号
⑤・⑥掘立柱建物跡28号
⑦・⑧掘立柱建物跡32号
図版37…… 333
①・②掘立柱建物跡33号
③・④掘立柱建物跡34号
⑤・⑥掘立柱建物跡35号
⑦・⑧掘立柱建物跡37号
図版38…… 334
①・②掘立柱建物跡38号
③・④掘立柱建物跡39号
⑤・⑥掘立柱建物跡40号
⑦掘立柱建物跡41号
⑧掘立柱建物跡49号
図版39…… 335
①溝状遺構２号
②溝状遺構４号
③溝状遺構５号
④溝状遺構７号
⑤溝状遺構６・７・９号
⑥溝状遺構14・15号
図版40…… 336
①・②溝状遺構22・23号
③溝状遺構29号
④溝状遺構24・27号
⑤溝状遺構27号
⑥・⑦溝状遺構28号
図版41…… 337
①～⑥溝状遺構29号

図版42…… 338
①・②・④・⑥溝状遺構34号
③溝状遺構35･36号
⑤溝状遺構35号
⑦溝状遺構36号
図版43…… 339
①溝状遺構40号
②溝状遺構41号
③・⑤・⑦溝状遺構38号
④溝状遺構43号
⑥・⑧溝状遺構44号
図版44…… 340
①溝状遺構47号
②・④溝状遺構49号
③・⑥溝状遺構48号
⑤溝状遺構58号
図版45…… 341
①溝状遺構52・54・55・56・57号，古道53号
②溝状遺構30･31号
③溝状遺構55号
④溝状遺構54号
⑤溝状遺構56号
⑥溝状遺構52号　古道53号
図版46…… 342
①溝状遺構59号
②古道60号
③古道61号
④溝状遺構63号
⑤溝状遺構65・66号
⑥溝状遺構64号
図版47…… 343
①～⑤鉄滓と出土状況及び土の変色部分
⑥変色部分の土の採取の様子
⑦・⑧鍛冶関連遺構内検出土坑
図版48…… 344
①～③中世の土坑27号
④・⑤中世の土坑32号
⑥～⑧中世の土坑40号
図版49…… 345
①～③中世の土坑46号
④・⑤中世の土坑48号
⑥～⑧中世の土坑52号
図版50…… 346
①・②中世の土坑81号
③中世の土坑81・99号
④・⑤中世の土坑94号
⑥・⑦中世の土坑102号
⑧中世の土坑113号
図版51…… 347
土坑墓１号内出土遺物１
図版52…… 348
土坑墓１号内出土遺物２
図版53…… 349
土坑墓１号内出土遺物３
図版54…… 350
①土坑墓１号内出土遺物４
②～④土坑墓２号内出土遺物
⑤土坑墓3号内出土遺物１
図版55…… 351
土坑墓３号内出土遺物２
図版56…… 352
①土坑墓３号内出土遺物３
②土坑墓５号内出土遺物
図版57…… 353
土坑墓７号内出土遺物１
図版58…… 354
①土坑墓７号内出土遺物２
②～⑦土坑墓８号内出土遺物
図版59…… 355
中世の遺物１
図版60…… 356
中世の遺物２（外面）
図版61…… 357
中世の遺物２（内面）
図版62…… 358
中世の遺物３
図版63…… 359
中世の遺物４
図版64…… 360
中世の遺物５
図版65…… 361
中世の遺物６
図版66…… 362
中世の遺物７
図版67…… 363
中世の遺物８
図版68…… 364
中世の遺物９
図版69…… 365
中世の遺物10
図版70…… 366
中世の遺物11
図版71…… 367
中世の遺物12
図版72…… 368
中世の遺物13
図版73…… 369
中世の遺物14
図版74…… 370
中世の遺物15
図版75…… 371
①～④近世の畝状遺構
⑤近世の土坑５号（手前）
図版76…… 372
近世の遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，平成11年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間を，平成12年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センターの４者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。

このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

そこで，県教委は，まず，平成13年１月29日～平成13年２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石縊遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成13年７月10日～７月26日に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と，平成13年９月17日～10月26日，平成13年12月３日～12月25日の２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成13年10月１日～平成14年３月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について再度分布調査を実施した。

その後，日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅ＩＣ（平成21年４月28日，「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）から末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が行われ，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま生きるということになった。ただし，日本道路公団からの委託は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

平成24年度，国土交通省は，平成25年度から東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）の建設工事をさらに推進する意向を示し，発掘調査期間の短縮を要請してきた。

このような状況に対応するため，県は関係機関で協議を重ね，職員確保や予算運用が柔軟にでき，発掘調査を効率かつ効果的に実施できる財団の設置を決定した。

これを受けて，平成25年４月に公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下「(公財)埋蔵文化財調査センター」という。）が設置された。そして，文化財課は，国事業に関する業務を（公財）埋蔵文化財調査センターへ委託し，（公財）埋蔵文化財調査センターが県立埋蔵文化財センターから業務を引き継ぎ実施することとなった。

天神段遺跡の調査経過は，以下のとおりである。

発掘調査

１　分　布　調　査：平成11年１月
２　詳細分布調査：平成13年７月
３　試　掘　調　査：平成13年12月
４　確　認　調　査：平成19年５月～７月
５　本　　調　　査：平成19年12月～平成25年10月

整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は，平成22年度から実施しており，今年度，弥生時代～近世編を刊行する運びとなった。

縄文時代・旧石器時代の報告書については，次年度以降刊行する予定である。

なお，各調査の調査期間，調査体制等詳細については次節以降で報告することとする。

第２節　事前調査

１　分布調査

天神段遺跡に関する分布調査は，日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道第13次区間のうち，鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間の分布調査依頼を受け，平成11年１月に実施した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（分布調査：平成10年度）

事業主体　日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会

２　詳細分布調査・試掘調査

天神段遺跡の試掘調査は，平成10年度の分布調査の結果を受けて，平成13年７月に再度詳細な分布調査を行った後，調査の利便性や面積等を考慮し，包含層等の状況を確認するため，平成13年12月３日～12月25日の17日間実施した。

調査方法は，遺跡内の３か所にトレンチを設定し，重機を使用しながら掘り下げを行った。地層，遺構・遺物の有無の確認を行いながら，約1.5mまで掘り下げた。調査の結果，２か所で良好な遺物包含層が確認された。

試掘調査の調査体制は次のとおりである。

調査体制（詳細分布調査・試掘調査：平成13年度）

事業主体	日本道路公団九州支社鹿児島事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	井上明文
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮久志
調査担当	〃	主任文化財主事	長野眞一
	〃	文化財研究員	桑波田武志
事務担当	〃	総務係長	前田昭信
	〃	主査	栗山和巳
	〃	主事	池　珠美

３　確認調査

確認調査は，平成19年５月16日から平成19年７月13日まで実施した（実働30日）。調査は，５×４ｍを基本とした確認トレンチを18箇所設定し，重機で表土を剥いだ後，人力で掘り下げた。

調査の結果，表土下は耕作による撹乱がわずかに見られるものの，大規模な圃場整備を受けておらず，全トレンチで遺物包含層が確認された。包含層の残存が確認されたので，引き続き本調査を行うこととした。

調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	宮原景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東晃一
	〃	調査第二課長	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮久志
調査担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	〃	木内敏生
	〃	文化財調査員	佐藤真人
事務担当	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主事	五百路真

調査の詳細（調査日誌より）

調査の詳細を調査日誌より月単位で記す。本調査の詳細も同様に月単位で記すこととする。なお，数字の後の「Ｔ」はトレンチのことである。

【５月】

現場開始に向けての準備（調査範囲確認，現場内の危険個所点検，駐車場整備，遺跡案内板設置，重機による表土剥ぎ等）。調査に関する作業員向けのオリエンテーション。調査区内外の環境整備（発掘機材等の搬入・分配・整理，除草作業等）。グリッド及び確認トレンチ設定（１～13Ｔ）。確認トレンチ調査（Ⅲ～Ⅵ層の掘り下げ，遺構配置や遺物取上に係る平板実測，遺構実測，平板実測を基に遺構配置図作成，写真撮影等）。図面・遺物整理（図面台帳作成，土器・石器の仕分け，出土区及び出土層による仕分け等）

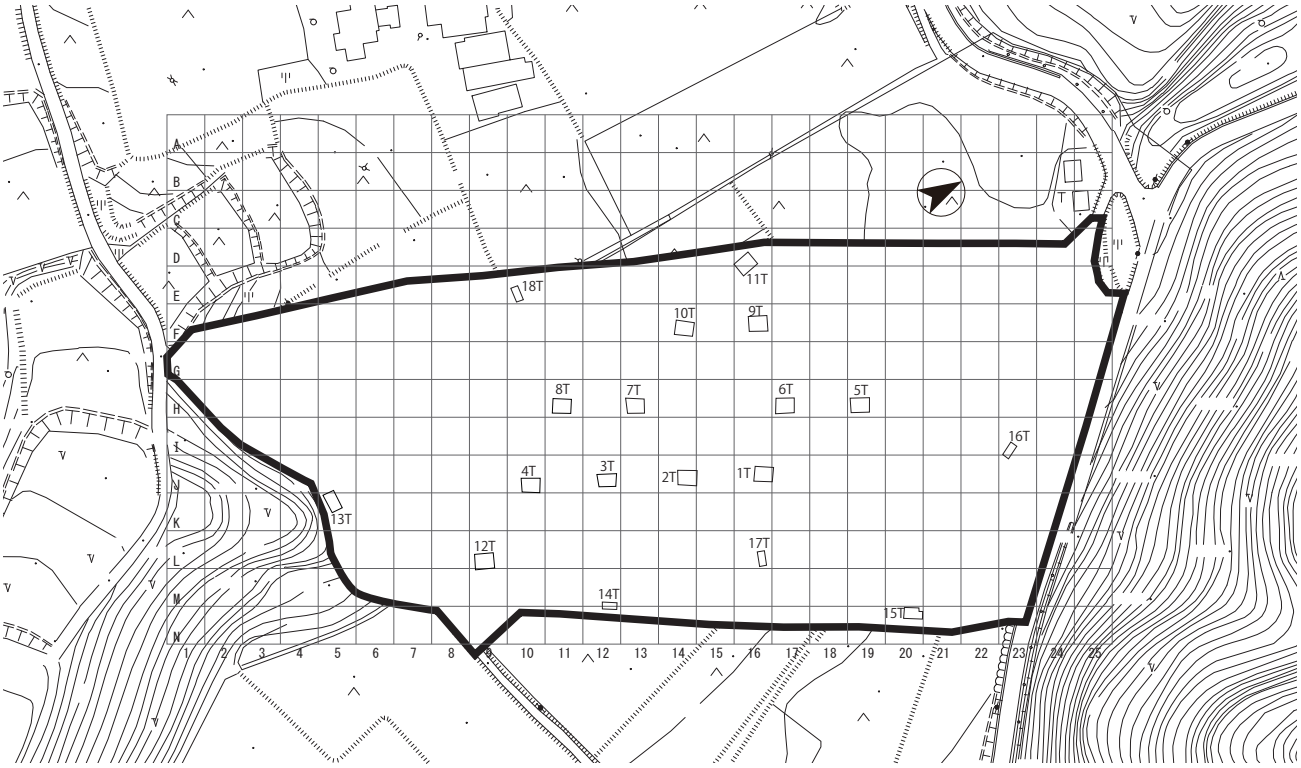
【６月】

グリッド設定。Ｈ・Ｉ－３～６区の重機による表土剥ぎ。確認トレンチ調査（１Ｔ：Ⅳ～ⅩⅥ層の掘り下げ，

遺物取上，土層断面実測，写真撮影。２Ｔ：Ⅳ層の掘り下げ，竪穴状遺構検出のためトレンチ拡張，遺物取上，写真撮影。３Ｔ：Ⅵ・Ⅶ層の掘り下げ，遺物取上。４Ｔ：Ⅳ～ⅩⅥ層の掘り下げ，遺物取上，土層断面実測，写真撮影。５Ｔ：Ⅲ層の掘り下げ，Ⅲｂ層で土坑・ピット・溝状遺構検出，遺物取上，写真撮影。６Ｔ：Ⅲ・Ⅳ層の掘り下げ，Ⅲａ層で土坑検出，遺物取上，写真撮影。７Ｔ：Ⅲ・Ⅳ層の掘り下げ，Ⅲａ層でピット検出，遺物取上，写真撮影。８Ｔ：Ⅵ・Ⅶ層の掘り下げ，遺物取上。９Ｔ：Ⅳ～ⅩⅡ層の掘り下げ，Ⅶ層で集石遺構検出，遺物取上，土層断面実測，写真撮影。10Ｔ：Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ，Ⅵ層で土坑検出，遺物取上，土層断面実測，写真撮影。11Ｔ：Ⅴ～Ⅶ層の掘り下げ，Ⅵ層で土坑検出，遺物取上，写真撮影。12Ｔ：Ⅳ～Ⅷ層の掘り下げ，遺物取上，土層断面実測，写真撮影。13Ｔ：Ⅲ・Ⅳ層の掘り下げ，土層断面実測，写真撮影。地形及び安全面を考慮し，Ⅳ層で調査終了）。トレンチ配置図作成。図面・写真整理。現場内危険個所点検及び養生。崩落部分の養生。駐車場の入口整地，安全・雨水対策，階段部分養生

【７月】

３Ｔ：Ⅶ層掘り下げ，遺物取上。９Ｔ：ⅩⅢ～ⅩⅥ層掘り下げ，土層断面実測，写真撮影。10Ｔ：掘り下げ，遺物取上。新たに14Ｔを設定し調査。14Ｔ：Ⅰ～Ⅲ層の掘り下げ，遺物取上，写真撮影。Ⅵ層出土状況図作成。遺物・図面・写真整理。現場内危険個所点検及び台風養生。環境整備（周辺清掃，現場内除草作業等）



第１図　確認トレンチ配置図

第３節　本調査

本調査を平成19～25年度の７か年にわたり実施した。各年度の調査期間は以下のとおりであるが，平成19年度は確認調査実施後引き続き本調査を実施した。

平成19年度：平成19年７月16日～平成20年３月19日
平成20年度：平成20年５月22日～平成21年３月19日
平成21年度：平成21年５月８日～平成22年３月19日
平成22年度：平成22年５月10日～平成23年３月11日
平成23年度：平成23年５月９日～平成24年３月９日
平成24年度：平成24年５月８日～平成25年３月８日
平成25年度：平成25年４月22日～平成25年10月25日

また，各年度の調査体制及び調査の詳細（日誌抄より）については次のとおりである。

調査体制（平成19年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	宮原景信
調査企画	〃 次長兼総務課長	平山　章
	〃 次長兼南の縄文調査室長	新東晃一
	〃 調査第二課長	立神次郎
	〃 主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮久志
調査担当	〃 文化財主事	平木場秀男
	〃 〃	木内敏生
	〃 文化財調査員(9月まで)	佐藤真人
	〃 文化財調査員(10月から)	岩永勇亮
事務担当	〃 総務係長	寄井田正秀
	〃 主事	五百路真
現地指導者	鹿児島大学 理学部 教授	小林哲夫
	〃 法文学部 准教授	本田道輝
	〃 埋蔵文化財調査室准教授	中村直子

調査の詳細（日誌抄より）※Ｔ＝トレンチ

【７月】

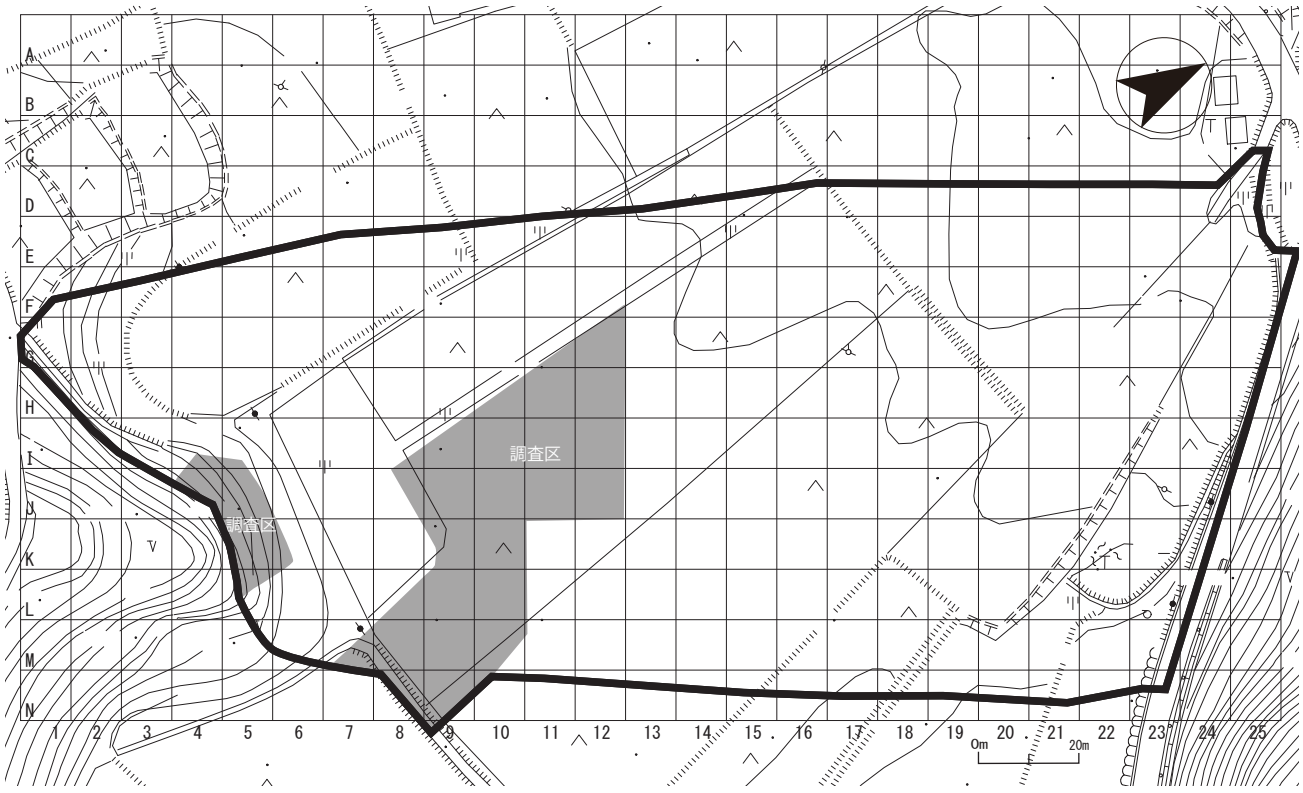
確認調査から本調査へ移行して実施。14Ｔは調査継続。新たに15・16Ｔを設定し調査（掘り下げ，遺物取上，土層断面実測等）

【８月】

14～16Ｔ調査継続（掘り下げ，遺構確認作業，遺構の調査，遺物取上，土層断面実測，トレンチ配置図作成，写真撮影等）

【９月】

遺構調査。土器溜り実測。重機による埋め戻し。下層確認。小林哲夫教授（鹿児島大学理学部）による調査指導。野方前段遺跡の先行調査のため，調査を一時中断



第２図　平成19年度調査範囲図

【12月】

調査再開。Ｊ～Ｌ－４～６区：遺構実測，コンター図作成，写真撮影を実施し，調査終了。Ｉ～Ｎ－８～10区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業，写真撮影等）。Ｇ～Ｊ－11・12区：重機による表土剥ぎ

【１月】

Ｉ～Ｍ－８～10区：12月に引き続き調査を実施。Ｇ～Ｊ－11・12区：Ⅱ・Ⅲ層の調査（掘り下げ，遺構確認作業）。本田道輝准教授（鹿児島大学法文学部）による調査指導。大崎町教育長来跡。空中写真撮影の実施

【２月】

Ｉ・Ｊ－９・10区：掘立柱建物跡，土坑墓の調査（実測，写真撮影）。Ｇ～Ｍ－８～12区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業，遺構の調査（掘り下げ，実測等），写真撮影，コンター図作成）。中村直子准教授（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）による調査指導

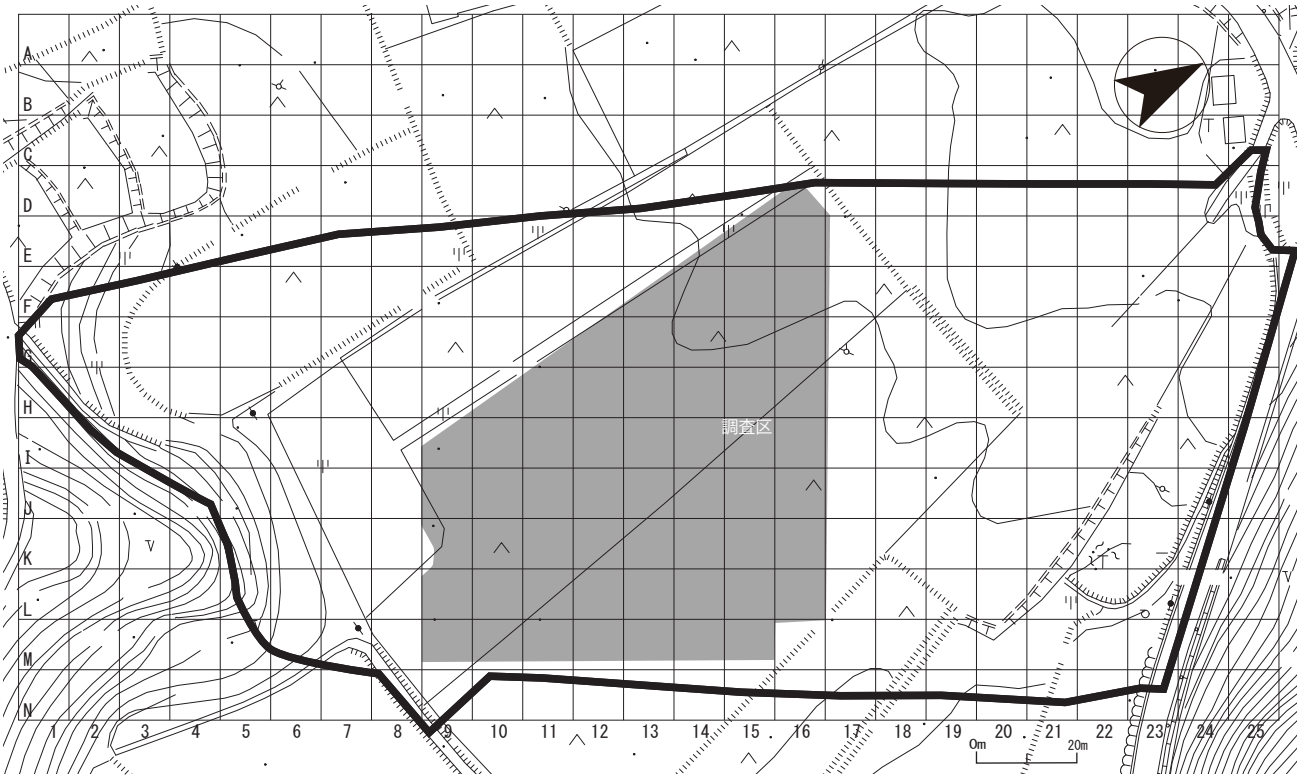
【３月】

Ｉ・Ｊ－９～12区：掘立柱建物跡，土坑墓の継続調査。Ｇ～Ｍ－８～12区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業，遺構の調査（掘り下げ，実測等），写真撮影）

本年度の調査終了

調査体制（平成20年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	宮原景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑耕一
	〃	調査第二課長	彌榮久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中村耕治
調査担当	〃	文化財主事	大久保浩二
	〃	〃	竪山貴理
	〃	文化財調査員(10月まで)	岩永勇亮
	〃	文化財調査員(11月から)	森幸一郎
事務担当	〃	総務係長	紙屋伸一
	〃	主査	五百路真
現地指導者	鹿児島大学	名誉教授	五味克夫
	元興寺文化財研究所		狭川真一



第３図　平成20年度調査範囲図

調査の詳細（日誌抄より）

【５月】

環境整備。Ｋ・Ｌ－11・12区：表土剥ぎ。Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業）。Ｋ･Ｌ－９･10区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｍ・Ｎ－８・９区：Ⅳａ層の調査（掘り下げ，遺構確認作業，遺物取上，写真撮影）

【６月】

Ｋ・Ｌ－11・12区：土坑墓の調査。Ｅ・Ｆ－13・14区及びＫ・Ｌ－９・10区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｍ･Ｎ－８・９区:溝状遺構（Ⅳａ層検出）の調査，埋め戻し。Ｅ～Ｌ－13・14区：表土剥ぎ，Ⅳａ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業）

【７月】

Ｅ～Ｇ－13・14区：Ⅳａ～Ⅴａ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構実測等）。Ｅ～Ｌ－15・16区：表土剥ぎ

【８月】

Ｆ・Ｇ－13・14区：Ⅳａ～Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構実測）。Ｅ～Ｇ－15･16区:Ⅳ層の調査（掘り下げ,遺物取上）。大崎町の小学生発掘体験。教職員(初任者）及び専門職員（新任者）の現場研修

【９月】

Ｅ・Ｆ－15・16区：Ⅴａ～Ⅴｃ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｆ・Ｇ－13・14区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。現地説明会開催

【10月】

Ｅ～Ｈ－13～16区：Ⅳａ層～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｋ～Ｍ－11･12区:Ⅳａ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｉ・Ｊ－９～12区:柱穴群の検討。Ｈ－12区:下層先行トレンチ調査（掘り下げ，礫群検出及び実測）。穿孔のある磨製石鏃出土。空中写真撮影。大崎町立野方小学校６年生地層見学

【11月】

Ｄ～Ｆ－15・16区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｇ・Ｈ－14～16区：Ⅳａ～Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｋ～Ｍ－11・12区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｉ・Ｊ－16及びＨ－13区：掘立柱建物跡の調査。Ｊ－16区：土坑墓５号の調査。鹿児島大学名誉教授五味克夫先生による調査指導。野方小学校及び大崎小学校の６年生による地層見学・発掘体験

【12月】

Ｄ～Ｈ－14～16区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構の調査（掘り下げ，実測等），写真撮影）。Ｉ～Ｋ－13･14区:Ⅳａ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構の調査（掘り下げ，実測等），写真撮影）。Ｈ・Ｉ－13及びＩ・Ｊ－16区：掘立柱建物跡の調査。Ｊ－16区：土坑墓５号の調査。旧石器先行トレンチ調査(Ｅ－16区，Ｆ－14・16区，Ｌ－11・12区)。狭川真一先生（元興寺文化財研究所）による調査指導

【１月】

Ｆ－16区：Ⅷ層上面検出の遺構調査（掘り下げ，実測等）。Ｇ・Ｈ－14～16区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構の調査（掘り下げ，実測等）。Ｉ～Ｌ－13～16区：Ⅳａ～Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｊ・Ｋ－14・15及びＭ－13～16区：古代・中世の遺構の調査（掘り下げ，実測）。Ｊ－16区：土坑墓５号の調査。旧石器先行トレンチ調査（Ｅ－16区，Ｆ－14・16区，Ｋ－11区，Ｌ－11・12区）

【２月】

Ｉ～Ｍ－13～16区：Ⅳａ～Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，古代の遺構の調査（Ｉ・Ｊ－15・16区），集石遺構（Ｈ－15区），晩期土坑（Ｌ－13区），早期土坑（Ｇ･Ｈ－15･16区），連穴土坑（Ｇ－16区）等の掘り下げ，実測，写真撮影等）。旧石器確認トレンチ調査（Ｅ－16区，Ｋ－11区，Ｌ－11・12区）

【３月】

Ｉ～Ｌ－13～16区：Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構（集石，土坑等）の調査。Ｋ－13区：晩期土坑の調査（掘り下げ，実測，写真撮影）。Ｉ･Ｊ－15･16区:古代の遺構調査（掘り下げ，実測，写真撮影）。Ｆ－16区：連穴土坑の調査（掘り下げ，実測，写真撮影）。旧石器先行トレンチ調査（Ｆ－14・16区は調査終了。Ｈ－12・13区：ＸＩ層まで調査，Ⅸ層から細石刃核等出土）。19日で調査終了

調査体制（平成21年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	山下吉美
調査企画	〃	次長兼総務課長	齋藤守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青崎和憲
	〃	調査第二課長	彌榮久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	長野眞一
調査担当	〃	文化財主事	新保朋久(10月～３月)
	〃	〃	竪山貴理
	〃	〃	西園勝彦
	〃	文化財研究員	藤島伸一郎(11月～３月)
	〃	文化財調査員	岩下直樹
事務担当	〃	総務係長	紙屋伸一

〃　主　　事　髙崎智博

調査の詳細（日誌抄より）

【5月】

K～M－8～12区：Ⅸ層（細石器文化期）の調査。Ⅰ～M－13～16区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構の調査（掘り下げ，実測等），写真撮影）。Ⅰ・J－15・16区：Ⅲc・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構の調査（掘り下げ，実測等），写真撮影）

【6月】

K～M－8～12区:Ⅸ層（細石器文化期）の調査終了。Ⅰ～M－13～16区:Ⅵ・Ⅶ層の調査(掘り下げ,遺物取上,遺構の調査（掘り下げ，実測等），写真撮影）。Ⅰ・J－15・16区：Ⅲc～Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構の調査（掘り下げ,実測等),写真撮影）。K－12区:Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構の調査（掘り下げ，実測等），写真撮影）

【7月】

Ⅰ・J－9～12，15･16区:Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ,遺物取上,遺構調査（掘り下げ,実測),写真撮影）及びⅡ・Ⅲ層検出の掘立柱建物跡の調査。K－12区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の調査（掘り下げ，実測），写真撮影）

【8月】

Ⅰ・J－9～12，15･16区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の調査（掘り下げ，実測），写真撮影）

【9月】

Ⅰ・J－9～12，15･16区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の調査（掘り下げ，実測），写真撮影）。E～L－17～20区：Ⅲa～Ⅲc層検出の掘立柱建物跡の調査

【10月】

E～L－17～20区：Ⅲ～Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，掘立柱建物跡の調査）。G～J－11～14区：Ⅸ～ⅩⅡ層の調査（掘り下げ，遺物取上）

【11月】

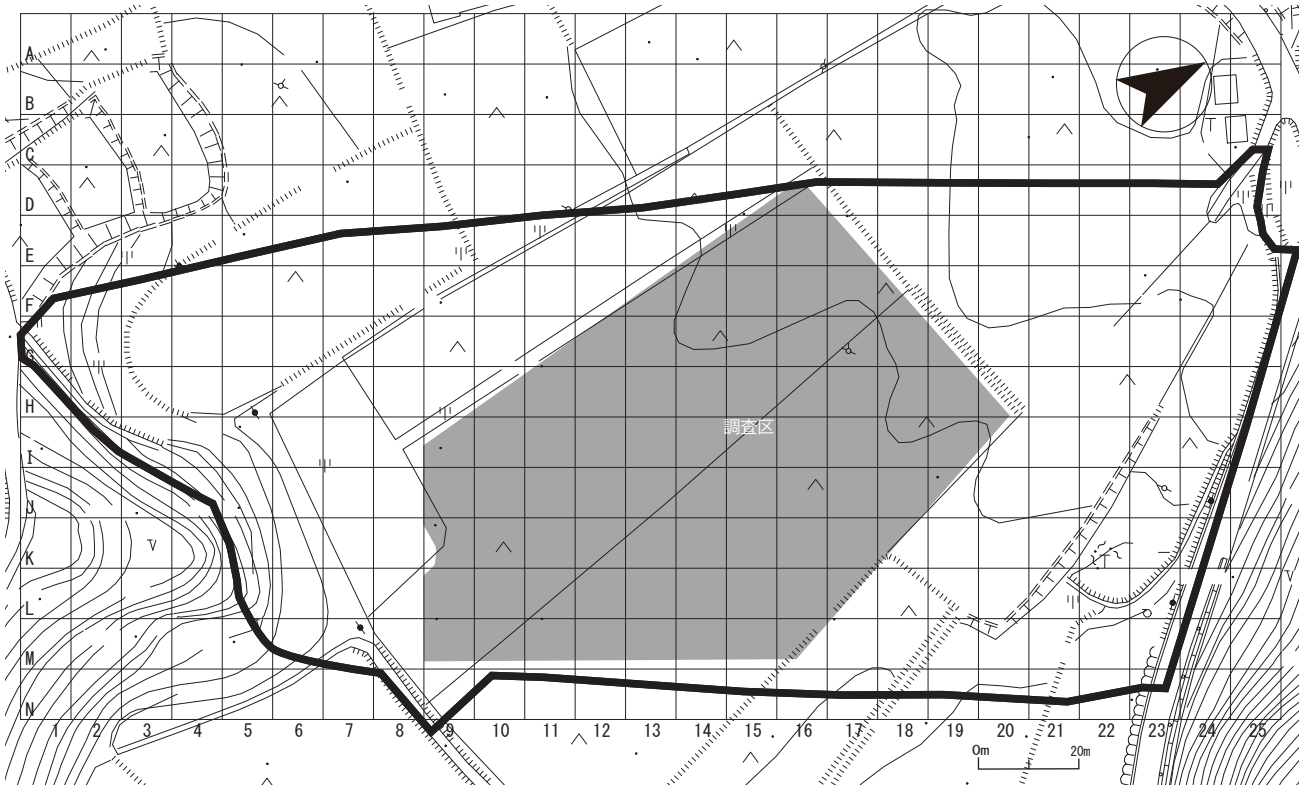
E～L－17～20区：Ⅲ～Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，掘立柱建物跡の調査）。H～L－11～14区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。大崎町立中沖小学校及び菱田小学校6年生理科学習で遺跡見学

【12月】

E～L－17～20区：Ⅲ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，縄文時代早期の落とし穴状遺構や連穴土坑の調査）。H～L－11～14区:Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。大崎町立大崎小学校6年生理科学習で遺跡見学

【1月】

E～L－17～20区：Ⅲ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，縄文時代早期の連穴土坑や土坑，集石遺構の調査）。



第4図　平成21年度調査範囲図

Ｇ～Ｌ－11～14区：Ⅸ～ⅩⅥ層の調査（掘り下げ，遺物取上）

【２月】

Ｅ～Ｌ－17～20区：Ⅲ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，縄文時代早期の連穴土坑や土坑，集石遺構の調査）。Ｇ～Ｌ－11～14区:Ⅸ～ⅩⅥ層の調査（掘り下げ，遺物取上，礫群検出）。手向山式土器完形品出土。空撮実施

【３月】

Ｅ～Ｌ－17～20区：Ⅲ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，縄文時代早期の連穴土坑や土坑，集石遺構の調査）。Ｇ～Ｌ－11～14区:Ⅸ～ⅩⅥ層の調査（掘り下げ，遺物取上，礫群調査）。岡山理科大学小林博昭教授現地見学

調査体制（平成22年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下吉美
調査企画	〃 次長兼総務課長	田中明成
	〃 次長兼南の縄文調査室長	中村耕治
	〃 調査第二課長	井ノ上秀文
	〃 文化財主事兼調査第二課第一調査係長	前迫亮一
調査担当	〃 文化財主事	平木場秀男
	〃 〃	馬籠亮道
	〃 文化財調査員	岩下直樹
事務担当	〃 総務係長	大園祥子
	〃 主事	髙﨑智博

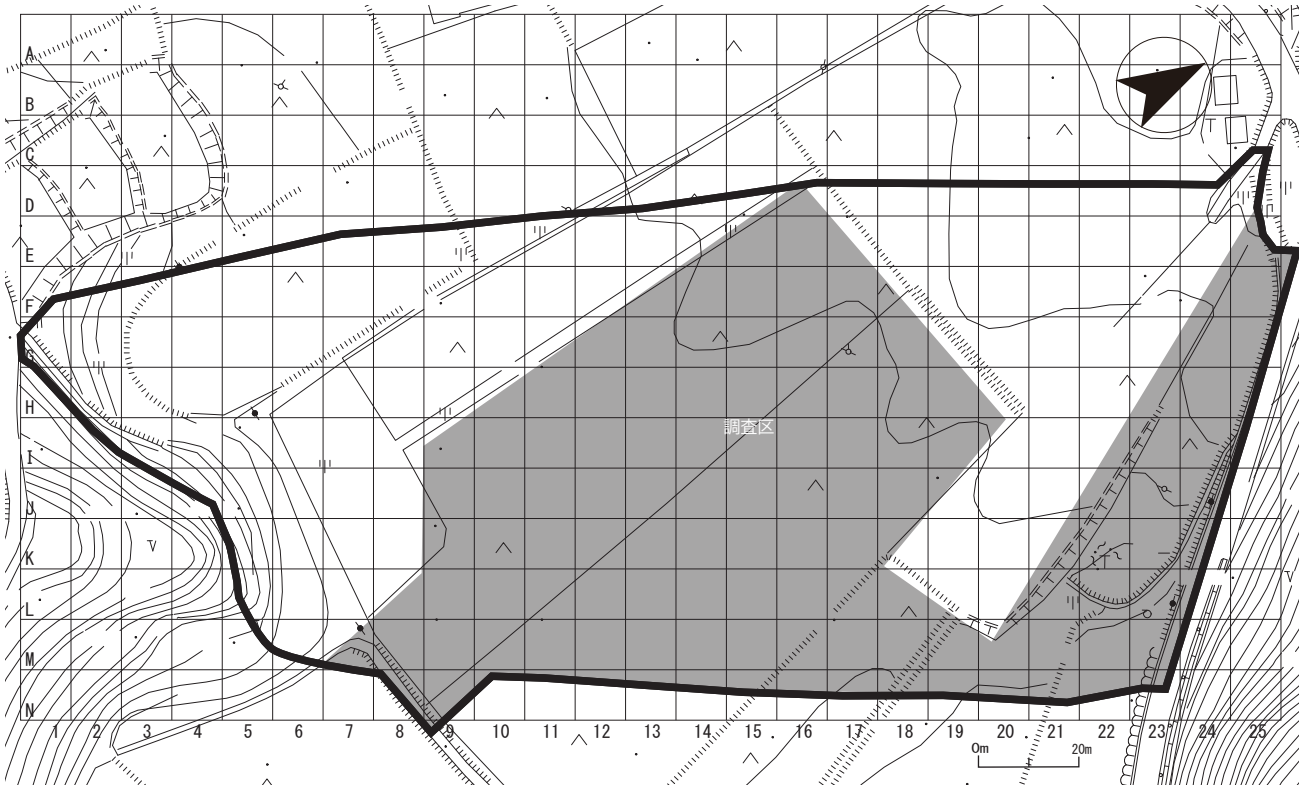
調査の詳細（日誌抄より）

【５月】

Ｇ・Ｈ－11・12区，Ｅ～Ｈ－15～18区，Ｋ・Ｌ－15・16区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ⅰ～Ｌ－17～20区：Ⅶ・Ⅷ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑･落とし穴状遺構等の調査（掘り下げ，実測），写真撮影）。Ｌ・Ｍ－16～20区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑の調査）

【６月】

Ｇ～Ｈ－11・12区：ⅩⅢ～ⅩⅤ層の調査（掘り下げ）。Ｅ～Ｈ－15～18区，Ⅰ～Ｌ－15・16区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ⅰ～Ｌ－17～20区：Ⅶ・Ⅷ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構等の調査（掘り下げ，実測），写真撮影）。Ｌ・Ｍ－16



第５図　平成22年度調査範囲図

～19区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，掘立柱建物跡･ピットの調査)。Ⅰ～Ｌ－20～24区:表土剥ぎ，Ⅲ層の調査（掘り下げ，遺物取上，溝状遺構の調査)。志布志市教育委員会による口蹄疫防疫対策状況視察

【７月】

Ｇ～Ｈ－11・12区：ⅩⅢ～ⅩⅤ層の調査（掘り下げ)。Ｅ～Ｈ－15～18区，Ⅰ～Ｌ－15・16区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ⅰ～Ｌ－17～20区：Ⅶ・Ⅷ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構等の調査（掘り下げ，実測)，写真撮影)。Ｌ・Ｍ－17～19区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ⅰ～Ｌ－20～24区：表土剥ぎ，Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，溝状遺構の調査)。口蹄疫対策

【８月】

Ｇ～Ｈ－11・12，15・16区：ⅩⅤ層の調査（掘り下げ，遺物取上，礫群の調査)。Ｅ～Ｇ－16・17区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査(掘り下げ,遺物取上)。Ⅰ～Ｌ－17～20区:Ⅶ・Ⅷ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構等の調査（掘り下げ，実測)，写真撮影)。Ｌ・Ｍ－17～19区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ⅰ～Ｌ－20～24区：Ⅲ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，溝状遺構の調査)。口蹄疫対策

【９月】

Ｇ～Ｈ－11・12，15・16区：ⅩⅤ層の調査（掘り下げ，遺物取上，礫群の調査)。Ｅ～Ｇ－16・17区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査(掘り下げ,遺物取上)。Ⅰ～Ｌ－17～20区:Ⅶ・Ⅷ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構･集石遺構等の調査（掘り下げ,実測),写真撮影)。Ｌ・Ｍ－17～19区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の調査)。Ⅰ～Ｌ－20～24区：Ⅵ・Ⅶ層の調査(掘り下げ，遺物取上，遺構の調査)。Ｍ･Ｎ－７～14区:Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ｌ・Ｍ－17～19区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上）

【10月】

Ｇ～Ｈ－11・12，15・16区，Ｊ～Ｎ－22・23区：旧石器時代（Ⅸ～ⅩⅤ層）の調査終了。Ｅ～Ｇ－16・17区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ｍ・Ｎ－７～14区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ｌ・Ｍ－17～19区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の調査)。Ｌ・Ｍ－20・21区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上)，土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ，実測）

【11月】

Ｍ・Ｎ－10～14区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑墓の調査)。Ｌ～Ｍ－17～19区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の調査)。Ｍ・Ｎ－８・９区，Ⅰ・Ｊ－23･24区，Ｌ・Ｍ－20･21区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ，実測)，写真撮影)。Ⅰ～Ｊ－17・18区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ｅ～Ｇ－16・17区：旧石器時代（Ⅸ～ⅩⅤ層）の調査終了

【12月】

Ｇ・Ｈ－23・24区，Ｍ・Ｎ－10～14・17・18区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑墓の調査)。Ⅰ・Ｊ－22･23区:Ⅳ・Ⅴ層の調査(掘り下げ，遺物取上)。Ｍ・Ｎ－８・９区，Ｋ・Ｍ－17～22区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ，実測)，写真撮影)。Ⅰ・Ｊ－23・24区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。竹中正己教授（鹿児島女子短期大学）遺跡見学

【１月】

Ｇ・Ｈ－23・24区，Ｍ・Ｎ－10～14・17・18区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ,遺物取上)。Ⅰ・Ｊ－22･23区:Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ,遺物取上)。Ｍ･Ｎ－８・９区,Ⅰ・Ｊ－23・24区，Ｋ・Ｍ－17～22区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ，実測)，写真撮影)。Ⅰ～Ｊ－17・18区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上）

【２月】

Ｍ･Ｎ－10～14･17･18区:Ⅲ･Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ⅰ・Ｊ－22・23区:Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ｇ・Ｈ－23・24区，Ｍ・Ｎ－８・９区，Ⅰ・Ｊ－23・24区，Ｌ・Ｍ－17～22区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ，実測)，写真撮影)。Ⅰ・Ｊ－17・18区，Ⅰ～Ｎ－21～24区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。空撮実施

【３月】

Ｍ･Ｎ－10～14･17･18区:Ⅲ･Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上)。Ｃ～Ｅ－25・26区：Ⅳ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構等の調査)。Ｇ・Ｈ－23・24区：Ⅵ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構等の調査)。Ｍ・Ｎ－８・９区，Ｌ・Ｍ－17～22区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ，実測)，写真撮影)。Ⅰ・Ｊ－17・18区，Ⅰ～Ｎ－21～24区：Ⅸ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ，遺物取上，礫群の調査）及びⅩⅢ層確認調査。11日で平成22年度の調査終了

調査体制（平成23年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	寺田仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〃	調査第二課長	冨田逸郎
	〃	文化財主事兼調査第二課第一調査係長	八木澤一郎
調査担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	〃	國師洋之（10月～3月）
	〃	〃	藤山賢一郎（5月～9月）
	〃	〃	黒川忠広
	〃	〃	湯場﨑辰巳
	〃	〃	益山郁恵
	〃	文化財研究員	今村結記
事務担当	〃	総務係長	大園祥子
	〃	主査	髙﨑智博

調査の詳細（日誌抄より）

【5月】

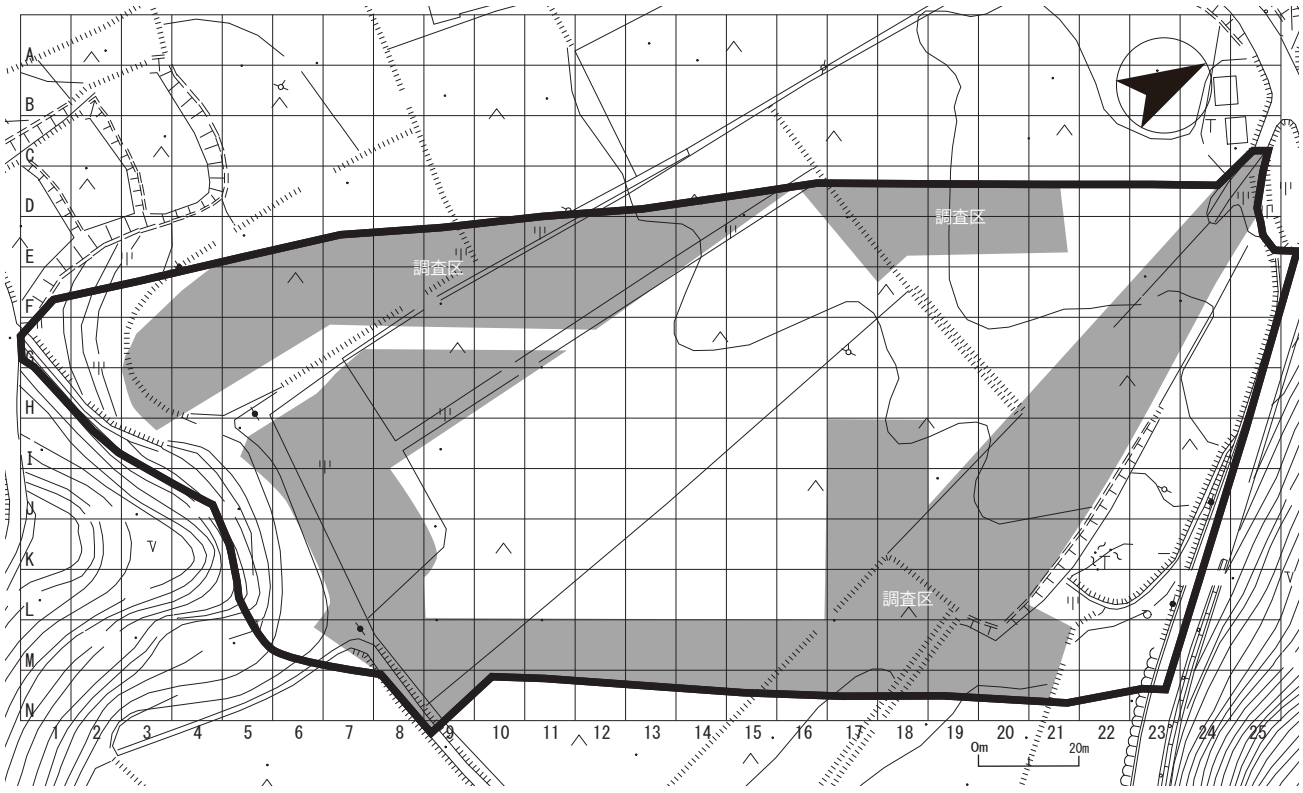
重機による表土剥ぎ。オリエンテーション，環境整備，道具搬入。C・D－25区，J～L－18～22区，M・N－16～20区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業）。L～N－17～21区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業）。M・N－7・8区：Ⅸ層以下旧石器時代の調査（遺構・遺物なし）。文化財課長現場視察

【6月】

Ⅰ～L－18～22区，M・N－12～18区：Ⅲ～Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業，掘立柱建物跡・ピット・土坑・溝状遺構・古道の調査）。L～N－17～21区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上の調査）。C・D－25区：Ⅴ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，竪穴状遺構・連穴土坑・集石遺構の調査）及び旧石器時代（Ⅸ～ⅩⅦ層）の調査（遺構・遺物は確認できず調査を終了）。Ⅰ・J－17・18区：ⅩⅡ～ⅩⅦ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。調査が終了したC・D－25区及びN－22・23区を引き渡し

【7月】

D～F－11～16区：重機による表土剥ぎ。E～N－12～25区：Ⅳb層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構確認作業，土坑墓の調査）。L～N－16～21区：Ⅷ層（薩



第６図　平成23年度調査範囲図

摩火山灰層）上面での遺構確認作業で竪穴状遺構・土坑・集石遺構等検出。K－17・18区，M・N－10・11区：Ⅸ～ⅩⅡ層の調査（掘り下げ，遺物取上，礫群の調査），M・N－10・11区は調査終了。Ⅰ・J－17・18区：ⅩⅥ層まで調査を行ったが遺構・遺物は確認できず調査終了。大崎町母子寡婦会遺跡見学。産業医の遺跡訪問

【８月】

D～F－９～16区：Ⅲ層で遺構確認作業。E～L－18～24区，M・N－15・16区：Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，弥生時代竪穴住居跡及び縄文時代晩期土坑の調査）。M・N－12～14・16～18区：Ⅷ層（薩摩火山灰層）上面での遺構確認作業，落とし穴・集石遺構の検出・調査。M・N－19～21区：ⅩⅢ～ⅩⅥ層の調査。NHK鹿児島気象予報士今村氏の取材。聖徳大学学生の職場見学。大崎町みのり福祉作業所作業員の遺跡見学

【９月】

E～H－３～７区：表土剥ぎ。D～F－10～16区：Ⅲａ層検出の遺構調査（掘り下げ，実測，写真撮影，遺構内埋土フローテーション）。M・N－16～18区：縄文時代早期の竪穴住居跡・集石遺構の調査及び旧石器時代の調査。E～L－21～25区：Ⅳｂ層掘り下げ。縄文時代晩期～近世までの遺構実測。Ⅰ～L－18～20区：Ⅴ層の調査（掘り下げ，縄文時代晩期土坑検出）。テフラ分析・植物珪酸体分析・放射性炭素年代測定等科学分析委託

【10月】

E～H－３～７区：表土剥ぎ。D～F－10～16区：Ⅲａ層検出の遺構調査（掘り下げ，実測，写真撮影，遺構内埋土フローテーション）。M・N－16～18区：縄文時代早期の竪穴住居跡・集石遺構の調査及び旧石器時代の調査（調査終了）。E～L－21～25区：Ⅳｂ層掘り下げ。縄文時代晩期～近世までの遺構実測。Ⅰ～L－18～20区：Ⅴ層の調査（掘り下げ，縄文時代晩期土坑検出）。M・N－７～19区：引渡し

【11月】

D～H－３～16区：古代・中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査（掘り下げ，実測，写真撮影）。G～J－７～11区：中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査（掘り下げ，実測，写真撮影，遺構内埋土フローテーション）。Ⅰ～M－18～23区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，縄文時代早期集石遺構の実測等）。D～Ⅰ－20～24区：Ⅴ～Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上，縄文時代晩期及び早期の土坑・集石遺構の実測等）。放射性年代測定の委託。大崎町立菱田小学校６年生遺跡見学

【12月】

D～H－３～16区：古代・中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査（掘り下げ，実測，写真撮影）。G～J－７～11区：中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査（掘り下げ，実測，写真撮影，遺構内埋土フローテーション）。D・E－16～18区，H～M－５～８区：重機による表土剥ぎ。D～M－18～24区：Ⅴ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，縄文時代早期土坑・集石遺構の実測等）。集石遺構実測委託。長崎県埋蔵文化財センター職員遺跡視察

【１月】

D～H－３～16区：古代・中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査（掘り下げ，実測，写真撮影）。D～M－５～11区：中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査（掘り下げ，実測，写真撮影，遺構内埋土フローテーション）。Ⅰ～M－18～20区：Ⅶ層及びⅨ層（旧石器時代該当層）の調査。F～L－21～24区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・集石遺構・石斧デポの実測等）。D・E－23～25区：Ⅸ～ⅩⅡ層の調査（遺構・遺物なし）。E・F－16～19区：重機による表土剥ぎ

【２月】

D～H－３～16区，D～M－５～11区：遺構確認のための精査。D・E－23～25区，Ⅰ～M－18～23区：Ⅸ～ⅩⅥ層の調査（掘り下げ，遺物取上，礫群実測等を実施し，調査終了）。D～H－16～24区：重機による表土剥ぎ及びⅢ層の調査。空中写真撮影実施

【３月】

F～H－21～24区：Ⅸ～ⅩⅥ層の調査及び調査終了。土坑・住居埋土フローテーション実施。D～H－16～24区：重機による表土剥ぎ及びⅢ層の調査。９日で平成23年度の調査終了

調査体制（平成24年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	寺田仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〃	調査第二課長	冨田逸郎
	〃	文化財主事兼調査第二課第一調査係長	八木澤一郎
調査担当	〃	文化財主事	平木場秀男（10月～３月）
	〃	〃	松下建生（5月～９月）
	〃	〃	黒川忠広
	〃	〃	光永　誠
	〃	〃	湯場﨑辰巳
	〃	文化財調査員	岩元康成
	〃	〃	花田寛典

〃　　〃　　深川祐子
事務担当　〃　総務係長　大園祥子
〃　主査　岡村信吾
現地指導者　鹿児島大学法文学部　教授　森脇　広

調査の詳細（日誌抄より）

【５月】

重機による表土剥ぎ。オリエンテーション，環境整備，道具搬入。Ｊ～Ｍ－６～８区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，過年度分の遺構の調査，写真撮影）。Ｄ～Ｆ－９～12区，16～24区：Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，縄文時代晩期・弥生時代竪穴住居跡，土坑，溝状遺構等の調査）。Ｄ～Ｆ－13～16区：Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上）

【６月】

Ｊ～Ｍ－４～８区：Ⅳ～Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。Ｄ～Ｆ－９～12区：Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構の調査）。Ｄ～Ｆ－13～16区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の実測）。Ｄ～Ｈ－16～24区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，石斧デポ・掘立柱建物跡・溝状遺構等遺構の調査，石剣出土）

【７月】

Ｊ～Ｍ－４～８区：Ⅵ層の調査（遺構・遺物なし）。Ｄ～Ｆ－９～12区：Ⅴ層の調査（遺構・遺物なし）。Ｄ～Ｆ－13～16区：Ⅷ層上面の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・集石遺構の調査）。Ｄ～Ｈ－16～24区：Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・集石遺構の調査）。石剣に関する評価委員会

【８月】

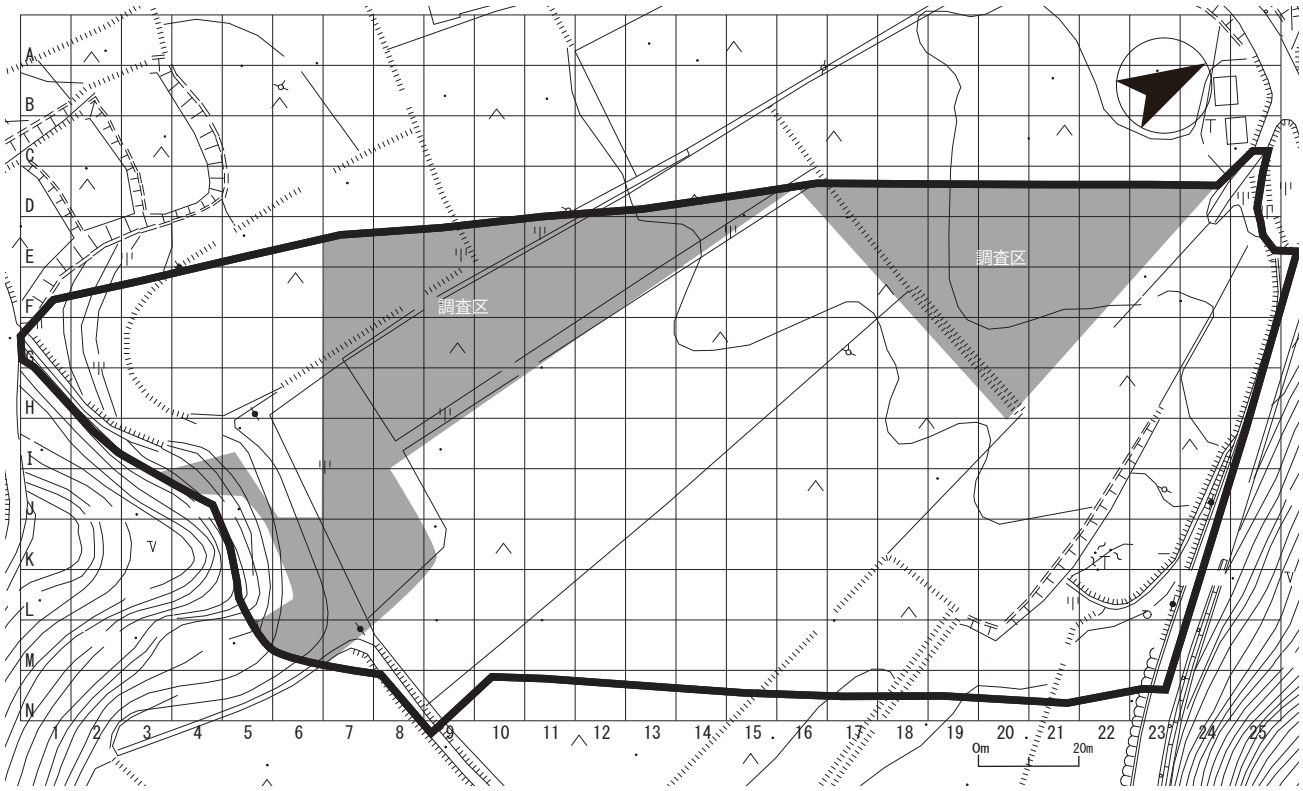
Ｊ～Ｍ－４～８区：Ⅵ層の調査（遺構・遺物なし）。Ｄ～Ｆ－９～12区：Ⅴ層の調査（遺構・遺物なし）。Ｄ～Ｆ－13～16区：Ⅷ層上面の調査（遺物取上，土坑・集石遺構の調査）及びⅨ・Ⅹ層（旧石器時代）の調査。Ｄ～Ｈ－16～24区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，連穴土坑・土坑・集石遺構等の調査）。垂水市立協和小学校職員研修のため遺跡見学及び発掘体験。専門職員初級講座及び新任教職員研修のため遺跡見学及び発掘体験

【９月】

Ｊ～Ｍ－４～８区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺構の調査）。Ｄ～Ｆ－９～12区：Ⅴ層の調査（遺構・遺物なし）。Ｄ～Ｆ－13～16区：ＸⅠ～ⅩⅣ層（旧石器時代）の調査（遺構・遺物なし）。Ｄ～Ｈ－16～20区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・集石遺構の調査）。Ｄ～Ｈ－21～24区：Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・集石遺構・手向山式土器埋設遺構の調査）。石剣に関する記者発表

【10月】

Ｊ～Ｍ－４～８区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺構の調



第７図　平成24年度調査範囲図

査）及びⅨ～ⅩⅥ（旧石器時代）の確認調査（遺構・遺物確認できず調査終了）。D～F－9～12区：Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。D～F－13～16区：ⅩⅤ・ⅩⅥ層（旧石器時代）の調査（遺構・遺物確認できず調査終了）。D～H－16～20区：Ⅸ～ⅩⅡ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。D～H－21～24区：Ⅷ層上面の調査（遺物取上，竪穴住居跡・連穴土坑・土坑・集石遺構の調査）。作業員の健康診断。空中写真撮影。森脇広教授（鹿児島大学法文学部）調査指導

【11月】

J～M－4～8区：埋め戻し。D～F－9～12区：Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。D～F－13～16区：土層断面実測。D～H－16～24区：Ⅷ層上面検出の竪穴住居跡・連穴土坑・土坑・集石遺構の調査及び旧石器時代の調査を実施し調査終了。塗木自治会遺跡見学（国交省職員随行）。大崎町立菱田小学校６年生遺跡見学。いきいき木曜クラブ遺跡見学

【12月】

E～G－7・8区：Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。G～J－7～12区：Ⅲ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・柱穴の検出・調査）。D～G－Ⅸ～ⅩⅡ層（旧石器時代）の調査（掘り下げ，遺物取上）。火山灰の放射性炭素年代測定委託。大崎町立大崎第一中学校生徒による遺跡見学

【１月】

E～J－6～9区：Ⅳ～Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。G～I－9～11区：Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，掘立柱建物跡の調査）。D～G－10～12区：ⅩⅠ～ⅩⅥ層（旧石器時代）の調査（遺構・遺物は確認できず調査終了）。G・H－11・12区：Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。大崎町立野方小学校児童による遺跡見学

【２月】

E～J－6～9区：Ⅸ～ⅩⅡ層の調査（遺構・遺物なし）。G～I－9～11区：Ⅴ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の調査）及び掘立柱建物跡の調査。G・H－11・12区：Ⅵ～ⅩⅥ層の調査（遺構・遺物は確認できず掘り下げのみ）

【３月】

E～J－6～9区：Ⅸ～ⅩⅥ層の調査（遺構・遺物は確認できず調査終了）。次年度調査区の一部にトレンチを４か所設定し先行調査（掘り下げのみ）。土層断面剥ぎ取り実施。埋め戻し，安全対策等の措置。８日で平成24年度の調査終了

調査体制（平成25年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

		センター長	冨田逸郎
調査企画	〃	総務課長兼総務係長	山方直幸
	〃	調査課長	鶴田靜彦
	〃	調査第一係長	八木澤一郎
調査担当	〃	文化財専門員	平木場秀男
	〃	〃	田畑哲治
	〃	文化財調査員	岩元康成
	〃	〃	深川祐子
事務担当	〃	総務課長兼総務係長	山方直幸
	〃	主査	岡村信吾

調査の詳細（日誌抄より）

【４月】

重機による表土剥ぎ。オリエンテーション，環境整備，道具搬入。E～G－3～6区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，検出した土坑・ピットの調査）

【５月】

E～G－5区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・ピットの調査）。E～H－2～6区：Ⅲ～Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・ピット・集石遺構の調査）。M－6～8区：Ⅲ～Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，集石遺構の調査）。大崎町立野方小学校の児童33人遺跡見学

【６月】

E～G－5区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・ピットの調査）。E～H－2～6区：Ⅲ～Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・集石遺構・石器集積遺構の調査）。M－6～8区：Ⅸ層以下旧石器時代の調査，遺構・遺物は確認されず調査終了

【７月】

E～G－6区：Ⅸ層以下旧石器時代の調査，遺構・遺物は確認されず調査終了。E～G－5区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑の調査）。F・G－4区：Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑の調査）。F・H－3～6区：Ⅸ～ⅩⅡ層（掘り下げ，遺物取上）。I－2～6区：重機による表土剥ぎ。Ⅲ層の調査（掘り下げ，遺物取上，ピットの調査）。大崎町野方いきいき講座受講者による遺跡見学

【８月】

E～G－5区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，連穴土坑の調査）。F・G－4区：Ⅸ～ⅩⅡ層の調査（掘

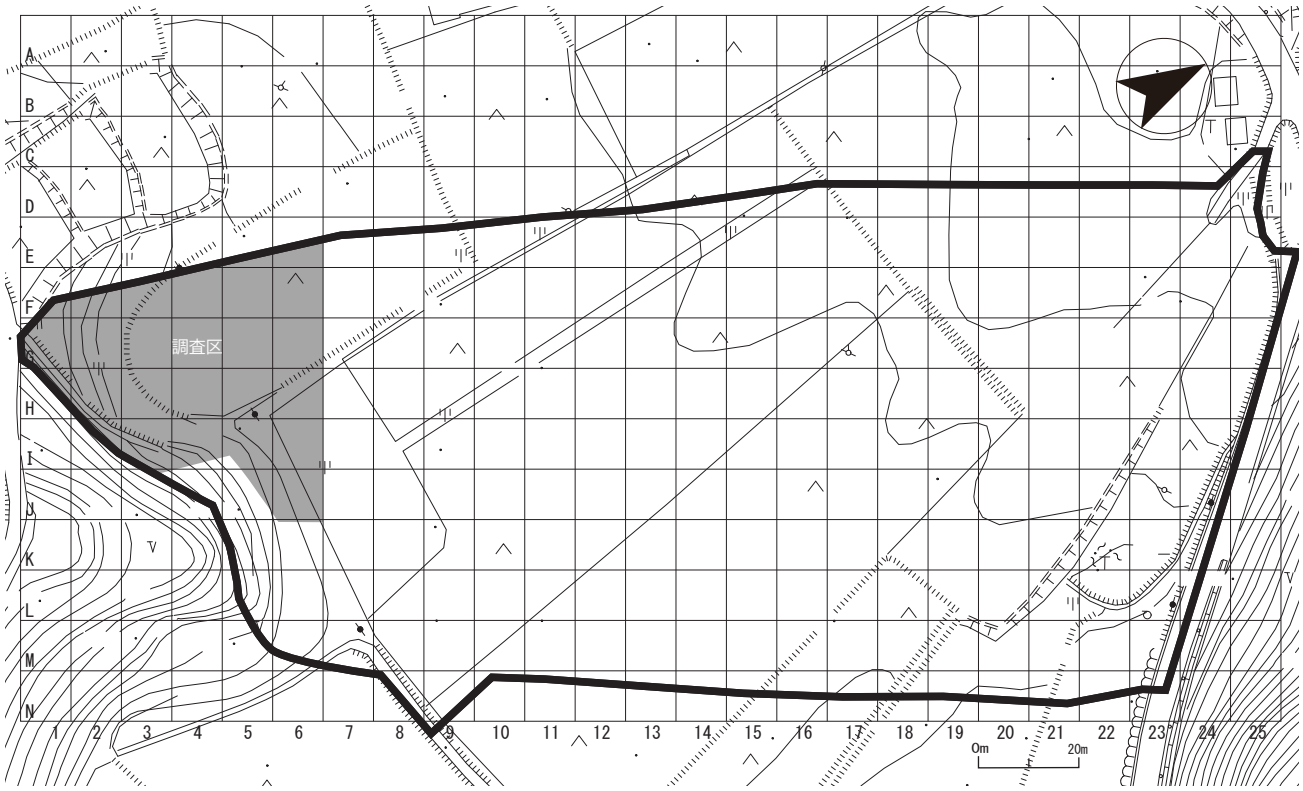
り下げ，遺物取上)。Ⅰ－２～６区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑･ピット･溝状遺構の調査)。Ｆ・Ｈ－３～６区：ⅩⅡ～ⅩⅥ層の調査（掘り下げ，遺物取上)，ⅩⅥ層までで調査終了。小能いきいきサロン受講者遺跡見学

【９月】

Ｅ～Ｇ－５区：Ⅷ層～ⅩⅥ層の調査（掘り下げ，遺物取上)，ⅩⅥ層までで調査終了。Ｆ・Ｇ－４区：ⅩⅢ～ⅩⅥ層の調査，遺構・遺物は確認できず調査終了。Ⅰ－２～６区：Ⅳ～Ⅵ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑の調査)。Ｊ－５・６区：重機による表土剥ぎ。Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑・溝状遺構・古道の調査)。公益財団法人鹿児島県文化振興財団橋口和弘専務理事発掘調査現場視察。空中写真撮影

【10月】

Ⅰ・Ｊ－２～６区：Ⅳ～ⅩⅥ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土坑･集石遺構の調査)，ⅩⅥ層までで調査終了。重機による埋め戻し。現地引渡により天神段遺跡における本調査のすべてを終了。国交省九州整備局会計課長発掘現場視察



第８図　平成25年度調査範囲図

第４節　整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成22年度から発掘調査作業と並行して実施した。

平成22年度から平成24年度までは鹿児島県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で，平成25年度・平成26年度は公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター第一整理作業所で実施した。

作業内容は，以下のとおりである。

１　整理作業

(1)　遺構

実測図と図面台帳との照合，遺構別・時代別に実測図の仕分け等

(2)　遺物

ア　土器・石器共通

水洗い，遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け，遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合

イ　土器

注記，分類，実測する土器の選別

ウ　石器と一般礫の仕分け，分類，実測する石器の選別

２　報告作成作業

(1) 遺構図のペントレースやデジタルトレース，遺構配置図の作成，報告書掲載用写真選別

(2) 土器の実測，拓本，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載用写真撮影

(3) 石器の実測及び実測委託，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載用写真撮影

(4) 土器・石器以外の遺物の実測，トレース，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載用写真撮影

また，大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事の小野正敏先生に中世の集落に関する指導を，日本考古学協会並びに鹿児島県考古学会会員の橋口尚武先生に和鏡に関する指導をいただいた。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制（平成22年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	山下吉美
作成企画	〃	次長兼総務課長	田中明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	中村耕治
	〃	調査第二課長	井ノ上秀文
	〃	文化財主事兼調査第二課第一調査係長	前迫亮一
作成担当	〃	調査第二課長	長﨑慎太郎
	〃	文化財調査員	岩永勇亮
事務担当	〃	総務係長	大園祥子
	〃	主事	髙﨑智博

作成体制（平成23年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	寺田仁志
作成企画	〃	次長兼総務課長	田中明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〃	調査第二課長	冨田逸郎
	〃	文化財主事兼調査第二課第一調査係長	八木澤一郎
作成担当	〃	調査第二課長	冨田逸郎
	〃	文化財主事	國師洋之(5月～9月)
	〃	〃	田畑哲治
	〃	〃	永濵功治
	〃	〃	藤山賢一郎(10月～3月)
	〃	〃	市村哲二
事務担当	〃	総務係長	大園祥子
	〃	主査	髙﨑智博

作成体制（平成24年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	寺田仁志
作成企画	〃	次長兼総務課長	田中明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〃	調査第二課長	冨田逸郎
	〃	文化財主事兼調査第二課第一調査係長	八木澤一郎
作成担当	〃	文化財主事	平木場秀男(5月～9月)
	〃	〃	松下建生(10月～3月)
		文化財調査員	橋口拓也

		〃	花薗友美
事務担当	〃	総務係長	大園祥子
	〃	主査	岡村信吾

作成体制（平成25年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター		
		センター長	冨田逸郎
作成企画	〃	総務課長兼総務係長	山方直幸
	〃	調査課長	鶴田靜彦
	〃	調査第一係長	八木澤一郎
作成担当	〃	文化財専門員	平木場秀男(10月～3月)
	〃	〃	田畑哲治(10月～3月)
	〃	〃	松下建生
	〃	〃	井手上誉弘
	〃	文化財調査員	花薗友美
	〃	〃	岩元康成(10月～3月)
	〃	〃	花田寛典
	〃	〃	江神めぐみ
	〃	文化財調査員	深川祐子(10月～3月)
事務担当	〃	総務課長兼総務係長	山方直幸
	〃	主査	岡村信吾
作成指導	大学共同利用機関法人人間文化研究機構		
		理事	小野正敏
	日本考古学協会並びに鹿児島県考古学会		
		会員	橋口尚武

作成体制（平成26年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター		
		センター長	堂込秀人
作成企画	〃	総務課長兼総務係長	山方直幸
	〃	調査課長	八木澤一郎
	〃	調査第二係長	寺原徹
作成担当	〃	文化財専門員	長野眞一
	〃	〃	松下建生
編集補助(弥生~近世)	〃	〃	平木場秀男
	〃	〃	田畑哲治
	〃	〃	井手上誉弘
	〃	文化財調査員	花薗友美
	〃	〃	江神めぐみ
	〃	〃	深川祐子
事務担当	〃	総務課長兼総務係長	山方直幸
	〃	主査	岡村信吾

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

天神段遺跡は，曽於郡大崎町野方に所在する。大崎町は，鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し，東西に約８㎞，南北に約18㎞，総面積は100.82ｋ㎡である。東側に志布志市，西側に鹿屋市，南側に肝属郡東串良町，北側は曽於市と接し，南部では黒潮の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は，九州山地の延長をなす東西の山地と，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から形成されている。東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地質からなっている。西側の山地は，北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳･荒磯岳など500 ～ 600m級の山々と，南部の大篦柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で，山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は，高隈山周辺に分布している新生代古第３紀の日南層群によって大隅半島の基盤をなしている。山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は，堆積後現在に至るまで大小多くの河川で開析され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。一方，低地は，高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が走り志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。この河川は，上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また何段かの河岸段丘も認められる。

大崎町の地形は，志布志湾に面した大崎地区と，内陸部に位置する野方地区の二つの地区が南北に連結する瓢箪状を呈する。南部は海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形である。北部は，標高150mから200mの丘陵地帯であり，北端部では谷間の多い起伏の激しい地形である。高隈山系などに端を発する菱田川，田原川，持留川の三つの川が南流し，志布志湾に注いでいる。南部は，この３河川によってシラス台地を開析された水田地帯がひらけている。北部は，台地上に畑地が形成されている。地質は，シラス台地上に形成された黒色火山灰土壌が多く，低地部に位置する水田の一部では泥炭層をなしているところがある。

遺跡が所在する野方地区は，標高200mのシラス台地を菱田川の支流である大鳥川が浸食し，小台地群に分断された起伏の多い地形である。台地上は，畜産や畑作地として利用されており，天神段遺跡はこの台地の縁辺部に位置している。（第９図・第10図）

第２節　歴史的環境

天神段遺跡の所在する大崎町では，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は，これまで本格的な発掘調査がなされていないため詳細は不明であったが，近年，大崎町や東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果等から，次第に様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

天神段遺跡から，ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が検出・出土している。

縄文時代

近年，町内において，縄文時代の遺跡の発掘調査が増えつつある。金丸城跡で石坂式土器・石鏃・凹石，二子塚Ａ遺跡からは塞ノ神式土器・落とし穴状遺構２基，下堀遺跡からは土器・集石遺構13基，天神段遺跡からは前平式土器・桑ノ丸式土器・石坂式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器・石鏃・打製石斧・多数の集石遺構・連穴土坑・落とし穴状遺構といった縄文時代早期の遺構・遺物の発見が報じられている。

天神段遺跡と同じ野方地区にある立山Ｂ遺跡では，前期の曽畑式土器，中期の阿高式土器，晩期の黒川式土器が出土している。下堀遺跡では後期の指宿式土器，細山田段遺跡からは後期の西平式土器が出土している。

弥生時代

名勝「くにの松原」の砂丘後背地に立地する沢目遺跡は，砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年の町による発掘調査では，53軒の住居跡・約20基の土坑・約180基の柱穴が発見され，入来Ⅰ式土器，入来Ⅱ式土器，山ノ口Ⅰ式土器，山ノ口Ⅱ式土器，須玖式土器・鉄製品・軽石製加工品が出土している。内陸部の標高約50mの台地に立地する下堀遺跡からは，山ノ口式土器の他，須玖式土器を伴い直径８ｍの円形大型住居２軒・掘立柱建物跡５棟が検出されている。桜迫遺跡からは山ノ口式土器が出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し，特に河口付近に当たる横瀬地域では甕棺破片が採集されている。



第９図　遺跡周辺地形写真



第10図　遺跡周辺地形図

古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは，南九州では数少ない前方後円墳をはじめとした古墳群を有し，畿内との関連をうかがわせる。

横瀬古墳は古墳時代中期（５世紀後半頃）の大型前方後円墳で，隣接する肝属郡東串良町唐仁大塚古墳について県内第２の規模を誇る。平成２年の鹿児島大学と琉球大学の測量調査では，全長160m，墳長132m，前方部幅72m，前方部長68m，後円部径64m，くびれ部幅48mを測り，墳丘からは円筒埴輪片，象形埴輪片が出土している。昭和53年の大隅地区埋蔵文化財分布調査で実施した範囲確認調査では周濠跡も確認され，周濠跡からは伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器も出土している。なお，濠の幅は12 ～ 23m，深さは約1.5mである。墳丘の高さについては，後円部が10.5m，前方部が11.5mであるが，後円部の頂上部に石室が露呈していることから，もともとの後円部は現在より高かったと考えられる。被葬者については明らかにされていないが，明治35年に盗掘を受け，その際に腐食した直刀や鎧，勾玉類が出土し，石室内は朱塗りであったと伝えられ，被葬者の実力をうかがわせる。

神領古墳群では，前方後円墳４基，円墳８基で構成され，また，地下式横穴墓７基の存在が知られている。特に６号墳は全長43m，後円部径19m，高さ３m，前方部幅16m，高さ２mの前方後円墳で，後円部に竪穴石室がある。昭和37年に日光鏡･彷製獣帯鏡各１面が採集され，昭和43年の調査では，石室は花崗岩質板石６枚を使用した組合せ石棺で，鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が確認された。神領古墳群の地下式横穴１号は，昭和35年に調査され，長方形で家形の玄室，妻入りの羨道部取り付け，鉄剣・イモガイ製貝釧・内向花文鏡などの副葬品が確認された。地下式横穴３・４号は，昭和55年に調査された。地下式横穴５号は，昭和62年に調査され，イモガイ製貝釧が出土した。地下式横穴６号は，平成２年に調査され，玄室内には南側に歯が数本，北側に大腿骨が残存しており，副葬品は確認できなかった。

町内では他に，高塚古墳として飯隈遺跡群・田中古墳群・後迫古墳群が知られ，地下式横穴墓として飯隈地下式横穴墓群・鷲塚地下式横穴墓群が知られている。

その他，二子塚遺跡Ａで住居跡・土師器・成川式土器，沢目遺跡で古墳時代初頭の住居跡や布留式土器をまねて作られた土師器，下堀遺跡で住居跡・溝状遺構・地下式横穴墓・鉄剣・鉄鏃が確認されている。

古代・中世

古代の遺跡としては，天神段遺跡で古代の掘立柱建物跡が確認されている。また，下堀遺跡では土師器と土坑が確認されている。

中世の遺跡はほとんどが山城であり，大崎城跡･胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・栫谷城・遠見ヶ丘があげられる。金丸城跡は，平成11 ～ 12年に調査され，溝状遺構・土坑・龍泉窯系及び同安窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前焼擂鉢・天目碗などが確認されている。

また，近年の発掘調査から，下堀遺跡では，溝状遺構・畝跡・青磁・青花・中国陶器などが確認されている。天神段遺跡では，掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓・土坑・土師器・須恵器・青磁・白磁・天目碗・鉄製品・青銅製品・鉄滓・砥石・滑石製石鍋片などが確認されている。中でも土坑墓１号からは，同安窯系青磁６点・青磁１点・青白磁１点・銅鏡１点・滑石製石鍋２点・鉄製品・木製品・土師器などの副葬品が確認されている。

近世

金丸城跡では，掘立柱建物跡・焼土を伴う土坑・軽石集積区・肥前系染付・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓などが確認されている。天神段遺跡では，安永ボラ（1779年）を埋土とする畝状遺構・薩摩焼などが確認されている。

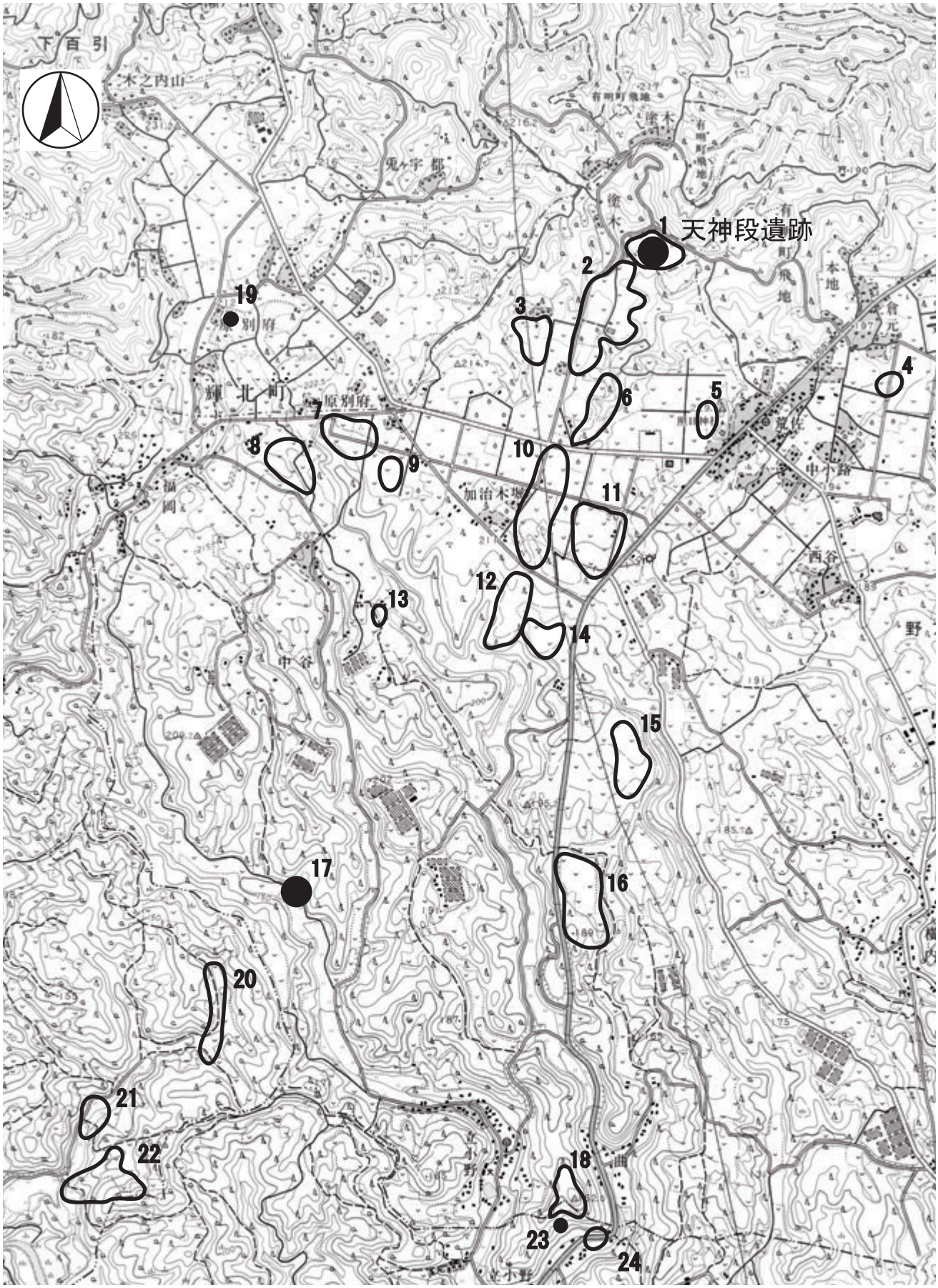
近世の野方地区は，寛永年間（1624 ～ 1643）に薩摩藩の私領主（一門家）である加治木島津家の領地（持切在）として開墾された。一方，荒佐野の照日神社には，大坂夏の陣後の元禄２年（1689）に摂津・河内・和泉から薩摩藩へ移住し，荒佐野を開拓した人々の記念碑がある。荒佐野の氏神として移住の際に勧進された伊勢神社は，明治期に旧野方村の村社であった照日神社に合祀され，現在の照日神社となった。字名の加治木堀の由来については，荒佐衆と加治木衆の領地境界を示す堀があったことから，名付けられたと言われている。

（参考・引用文献）

○　救仁郷断二　1951 「大崎町史」
○　大崎町　1975 「大崎町史（明治百年）」
○　大崎町教育委員会　2001 「立山Ｂ遺跡」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
○　大崎町教育委員会　2005 「金丸城跡」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
○　大崎町教育委員会　2005 「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
○　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2010 「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡Ａ地点」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）
○　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2012 「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡Ｂ地点・柿木段遺跡２」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（173）

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所　在　地	種類	現状	時　代	地形	遺物等	備考
1	70	62	天神段	鹿児島県曽於郡大崎町野方天神段	散布地		旧石器～近世	台地	貝殻条痕文・前平式・土師器・白磁	本報告書
2	70	63	野方前段	鹿児島県曽於郡大崎町野方前段	散布地		縄文，古墳	台地	塞ノ神式・黒川式・吉ヶ崎式・土師器	H21年度，H23年度，刊行
3	70	64	内ヶ迫	鹿児島県曽於郡大崎町野方内ヶ迫	散布地		古墳	台地	成川式	Ｈ９年農政分布
4	70	45	倉元	鹿児島県曽於郡大崎町野方倉元	散布地			台地	土器片	Ｈ３年農政分布
5	70	14	荒佐野	鹿児島県曽於郡大崎町野方荒佐野	散布地	畑地	弥生(中)	台地	土器片・磨製石斧	
6	70	91	宮ノ本	鹿児島県曽於郡大崎町野方	散布地		弥生	台地		H19年発掘調査
7	70	108	亀形	鹿児島県曽於郡大崎町野方2622-1外	散布地		弥生	台地	土器	H12年農政分布
8	70	107	岩井場	鹿児島県曽於郡大崎町野方2572-2外	散布地		古墳	台地	土器	H12年農政分布
9	70	10	原別府	鹿児島県曽於郡大崎町野方	散布地	畑地	縄文(後)	台地	土器片・打製石斧	
10	70	7	加治木堀	鹿児島県曽於郡大崎町野方加治木堀	散布地	畑地	縄文，弥生，中世	台地	土器片・山之口式・鉄鏃	H19年発掘調査
11	70	109	椿山	鹿児島県曽於郡大崎町野方3179-5	散布地		縄文，弥生，古代	台地	岩崎式・吉ヶ崎式	H19～20年発掘調査
12	70	118	椿山	鹿児島県曽於郡大崎町野方	散布地		古墳	台地		
13	70	54	岩井場段	鹿児島県曽於郡大崎町野方中段	散布地		縄文，弥生	台地		H8年農政分布
14	70	65	瀬ノ堀A	鹿児島県曽於郡大崎町野方瀬ノ堀・椿山・又合流	散布地		縄文，古墳	台地	敲石・土器片・成川式	H9年農政分布
15	70	66	瀬ノ堀B	鹿児島県曽於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地			台地		H9年農政分布
16	70	39	二松	鹿児島県曽於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地		弥生，歴史	台地		
17	25	139	柿木段	鹿児島県曽於郡大崎町立小野柿木段	散布地		縄文，古代，中世	低地	入佐式・石斧・土師器・須恵器・鉄鏃	H21年度，H23年度，刊行
18	70	43	遠見ヶ丘	鹿児島県曽於郡大崎町野方立小野	散布地		中世	台地		
19	64	2	徳光ヶ丘	鹿児島県鹿屋市輝北町下百引東原別府	散布地		縄文（前・後・晩）	台地	春日式・岩崎式・草野式・敲石・夜臼式	S56年度分布調査
20	12	151	大牧	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地		古代			H19年分布調査
21	12	152	樋ノ口Ⅰ	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地		古墳，古代			H19年分布調査
22	12	153	樋ノ口Ⅱ	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地		古墳，古代			H19年分布調査
23	71	2,3	立小野A，B	鹿児島県鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	畑地	市来式・指宿式・石器	
24	71	8	立小野	鹿児島県鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文(後)，弥生	畑地	弥生土器	



第11図　周辺遺跡位置図（１：25,000）

第３節　鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間の遺跡

東九州自動車道の鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間には，第２表に示すとおり13の遺跡が存在する。報告書が刊行されている遺跡もあるが，ここでは各遺跡の概要だけを記載するので，詳細については報告書を参照していただきたい。

第２表　鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間の遺跡

	遺　跡　名	発掘調査	報告書刊行
1	十三塚遺跡	終了	H 22 年度刊行
2	石縊遺跡	（鹿屋串良ＪＣＴ）	
3	樋ノ口遺跡	終了	概要報告のみ
4	大牧遺跡	試掘調査のみ実施	
5	柿木段遺跡	終了	H 21・H 23 年度刊行
6	椿山遺跡	終了	H 21 年度刊行（合本）
7	加治木堀遺跡		
8	宮ノ本遺跡		
9	野方前段遺跡	終了	A 地点はH 21 年度，B 地点はH 23 年度，合本で刊行
10	天神段遺跡	終了	一部，H 26 年度刊行
11	宮ヶ原遺跡	終了	H 23 年度刊行（合本）
12	チシャノ木遺跡	終了	H 19 年度刊行
13	鳥居川遺跡	（曽於弥五郎ＩＣ）	

１　十三塚遺跡　鹿屋市串良町細山田字十三塚に所在し，標高約140mの台地上に立地している。調査の結果，遺構は弥生時代中期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・古道跡，近世以降の溝状遺構等が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器，弥生時代中期の土器・勾玉・石器・鉄器・鉄製品，近世の古銭等が出土した。

弥生時代中期の竪穴住居跡は遺跡に比較的近い王子遺跡（鹿屋市王子町）や益畑遺跡（鹿屋市串良町）でも確認されており，当時の南九州の集落形成の在り方を解明する上で貴重な資料となると考える。

２　石縊遺跡　鹿屋市串良町細山田字石縊に所在し，標高約140mの台地の縁辺部に立地している。また，十三塚遺跡とは隣接しており，十三塚遺跡とともに鹿屋串良ＪＣＴに立地している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑が検出された。遺物は縄文時代早期と弥生時代の土器や石器が出土した。

３　樋ノ口遺跡　鹿屋市下高隈町樋ノ口に所在し，標高約110mの台地上に立地している。確認調査の結果，遺物包含層の残存が少なく，遺構・遺物は確認されなかったので本調査は行わず調査を終了した。

４　大牧遺跡　鹿屋市下高隈町大牧に所在し，標高約130mの台地上に立地している。試掘調査の結果，対象地には包含層の残存は確認できなかった。

５　柿木段遺跡　曽於郡大崎町立小野字柿木段に所在し，標高約150mの小さな谷の窪地とその下部にある標高145mの広い谷の平坦部に立地している。

平成19・20・22年度に発掘調査が行われ，平成19・20年度の調査終了箇所については平成21年度に報告書が刊行された。平成19・20年度の調査の結果，遺構は縄文時代晩期の落とし穴・石斧埋納遺構・土坑，古代のカマド跡・溝状遺構・古道が検出された。遺物は縄文時代晩期の土器や石器，弥生時代の土器，古墳時代の土器や鉄鏃，古代の土師器や須恵器，中世～近世の青磁・白磁・染付・薩摩焼等が出土した。平成22年度の調査の結果，遺構は古代及び中世～近世の溝状遺構・道跡・土坑が検出された。遺物は縄文時代晩期の土器や石器，古代の土師器，近世の陶器・染付・石鏃・鉄製品等が出土した。

６　椿山遺跡　曽於郡大崎町野方字椿山に所在し，標高約200mの台地縁辺部に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代の落とし穴，古代～中世の溝状遺構や古道跡等が検出された。遺物は縄文時代中期・後期の土器や石器，弥生時代中期の土器が出土した。

７　加治木堀遺跡　曽於郡大崎町野方字加治木堀に所在し，標高約200mの台地中央部に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代中期の落とし穴，古代～中世の溝状遺構・古道跡・畝状遺構・土坑等が検出された。遺物は縄文時代中期の土器や石器，弥生時代中期の土器，古墳時代の土器や鉄器，古代～中世の青磁・白磁・軽石製品等が出土した。

８　宮ノ本遺跡　曽於郡大崎町野方字宮ノ本に所在し，標高約200mの台地縁辺部に立地している。加治木堀遺跡とは県道72号線を挟んで隣接している。調査の結果，遺構・遺物は確認されなかった。

９　野方前段遺跡　曽於郡大崎町野方字野方前段に所在し，標高約200mの台地縁辺部に立地している。調査区をＡ・Ｂの２地点に分けて調査し，Ａ地点は平成21年度に報告書が刊行された。Ａ地点の調査の結果，遺構は縄文時代の集石遺構・落とし穴・土坑，弥生時代の土坑，古代～中世の溝状遺構・古道跡・土坑，近世の土坑が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器や石器，弥生時代中期の土器，古代～中世の須恵器，近世の染付や薩摩焼等が出土した。Ｂ地点の調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑や縄文時代中・後期の落とし穴・土坑が検出された。遺物は，縄文時代早期の土器や石器，弥生時代の土器が出土した。

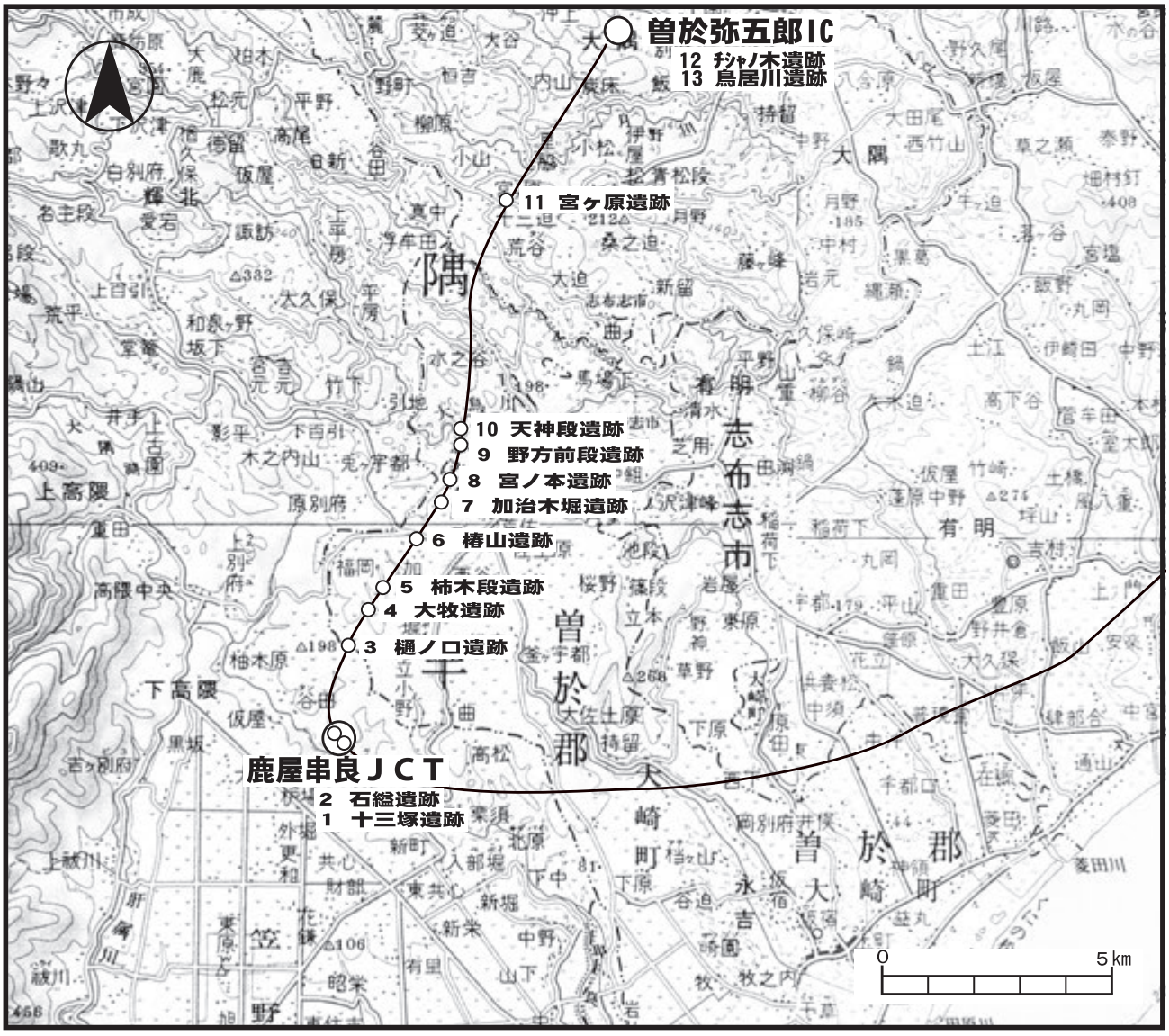
10　天神段遺跡　曽於郡大崎町野方及び志布志市有明町に所在し，標高200mの台地縁辺部に立地している。調査の結果，遺構は旧石器時代の礫群，縄文時代早期・前期・晩期の集石遺構・落とし穴・連穴土坑・土坑，古代の掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・ピット・炉跡・焼土跡，中世の土坑墓・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・ピット，近世の畝状遺構，土坑等が検出された。遺物は

旧石器時代の石器，縄文時代早期～晩期の土器や西日本最古級の石剣をはじめとする石器，古代の土師甕や墨書土器・刻書土器，中世の土坑墓内から青磁や白磁の碗や皿などの陶磁器・銅鏡・和鋏，完形品で入れ子状態で出土した滑石製石鍋，近世の陶磁器等が出土した。各時代とも遺構・遺物の数が多く，遺跡内外における人々の生活の変遷を知る上で貴重な資料となると考える。

11　宮ヶ原遺跡　曽於市大隅町荒谷及び大谷に所在し，標高約230mの台地上に立地している。調査の結果，遺構は旧石器時代の礫群，縄文時代早期の集石遺構・石皿集積遺構・落とし穴，縄文時代前期の落とし穴，縄文時代中期～後期の集石遺構，落とし穴，縄文時代後期～晩期の集石遺構，近世以降の硬化面を伴う道跡及び溝状遺構等が検出された。遺物は旧石器時代の遺物，縄文時代早期の土器や石器，縄文時代前期の土器，縄文時代中期～後期の土器，弥生時代中期の土器，硬化面を伴う道跡から近世の煙管や薩摩焼等が出土した。

12　チシャノ木遺跡　曽於市大隅町岩川字チシャノ木に所在し，標高約220mの台地上に立地している。また，鳥居川遺跡とは谷を挟んで隣接しており，鳥居川遺跡とともに曽於弥五郎ＩＣ内に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑，古代～中世の落とし穴，近世の溝状遺構が検出された。遺物は旧石器時代の遺物，縄文時代早期・後期・晩期の土器（組織痕土器を含む）や石器が出土した。その他，火打ち石，寛永通宝，軽石製品等も出土した。

13　鳥居川遺跡　曽於市大隅町岩川字鳥居川に所在し，標高約220mの台地上に立地している。調査の結果，縄文時代早期，縄文時代後・晩期の遺跡であることが判明した。遺構は確認されず，遺物は土器では縄文時代早期の押型文土器・塞ノ神式土器，縄文時代晩期の組織痕土器が，石器では石鏃が出土した。



第12図　鹿屋串良JCT～曽於弥五郎IC間の遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

天神段遺跡の発掘調査は，平成19年度から平成25年度まで７年に渡り実施した。調査対象表面積は19,042㎡，調査対象延面積は97,240㎡である。

調査区割り（グリッド）は，センターライン上の「STA76＋60」と「STA76＋80」の延長線を中心に，南側から北側に向かって10m間隔に，１，２，３・・・，西側から東側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ・・・と設定した。

このグリッドを基にして，遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また，トータルステーションで測量作業を行う場合，測量座標はＮ－１区の左下を原点（０，０）とし，縦軸をＸ，横軸をＹとした。

発掘調査は，基本的に重機で表土を除去した後，確認調査の結果に基づき，遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層，火山灰の硬化層については，一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構については，移植ごて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し，実測，写真撮影等を行い，遺物については，平板実測，またはトータルステーションで取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細については，第Ⅰ章に掲載）は，以下のとおりである。

平成19年度

確認調査と本調査を隣接する野方前段遺跡と並行して実施し，調査延面積は5,400㎡であった。

確認調査は，平成19年５月16日から７月13日までの約２か月間，調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを18箇所設定し，調査区全体の包含層の有無について調査した。トレンチの形状は５×４ｍの長方形を基本とした。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後，重機で表土を除去し，トレンチ内の掘り下げを人力で行った。検出した遺構については，写真撮影，平板実測のみを行った。出土遺物については，平板実測で取り上げを行った後，掘り下げを続けた。いくつかのトレンチでは，遺構に影響のない部分について，安全対策を施しながら下層確認トレンチを設定し，ⅩⅥ層上面まで確認調査を実施した。しかしながら，未買収地が調査対象区の半分近くを占め，かつ，多くのトレンチから遺構も検出されたため，旧石器時代の全体把握は不十分であった。

本調査は，平成19年12月から本格的に実施し，平成20年３月19日まで行った。調査区は，南東側の谷地形の斜面にあたるＪ～Ｌ－４～６区，台地上に広がるＧ～Ｎ－７～12区の平坦面である。Ｊ～Ｌ－４～６区は谷地形のため，表土下の黒色土が傾斜しながら厚く堆積していた。しかも，下層に掘り進むに従って傾斜が険しくなったため，安全対策上，Ⅴ層上面で調査を終了した。Ｇ～Ｎ－７～12区は，Ⅲ層で多くの溝状遺構，土坑，ピット等が検出されたため，大部分はⅣ層上面で調査を終了した。その後，安全対策として，立入禁止柵の設置や一部埋め戻しを行った。

平成20年度

隣接する野方前段遺跡と並行して調査を実施した。調査期間は平成20年５月22日～平成21年３月19日で，調査延面積は10,800㎡であった。調査区は，前年度からの引き続きとなるＧ～Ｎ－７～12区と隣接するＤ～Ｍ－13～16区の平坦面であった。主に，Ｇ～Ｎ－７～12区はⅣ～Ⅷ層上面まで，Ｄ～Ｍ－13～16区はⅠ～Ⅷ層上面までの調査を実施した。Ⅷ層上面までの調査終了後，２×５ｍを基本としたトレンチを設定し，旧石器時代の確認調査を行った。

平成21年度

調査期間は平成21年５月８日～平成22年３月19日，調査延面積は14,800㎡であった。調査区は，前年度からの引き続きとなるＤ～Ｍ－９～16区と隣接するＥ～Ｍ－17～20区の平坦面である。Ｄ～Ｍ－９～16区はⅨ～ⅩⅥ層上面まで調査を行い，一部を除き調査を終了した。Ｅ～Ｍ－17～20区はⅠ～Ⅷ層上面までの調査を実施した。

平成22年度

調査期間は平成22年５月10日～平成23年３月９日，調査延面積は13,720㎡であった。調査は，前年度からの引き続きとなるＤ～Ｌ－15～20区のⅨ～ⅩⅥ層，林道迂回路用地となるＣ～Ｎ－21～25区のⅠ～ⅩⅥ層，東側側道予定地のＬ～Ｎ－８～21区のⅠ～Ⅳ層上面まで行った。Ｃ～Ｎ－21～25区は調査終了後部分的に引き渡しを行い，Ｄ～Ｌ－15～20区は，一部を除き調査を終了した。

平成23年度

調査期間は平成23年５月９日～平成24年３月９日，調査延面積は27,000㎡であった。調査は，前年度からの引き続きとなるＬ～Ｎ－８～21区のⅣ～ⅩⅥ層上面と新たに林道迂回路用地となったＣ～Ｍ－18～25区のⅠ～ⅩⅥ層，さらにＤ～Ｍ－３～24区で未調査部分をⅢ層途中まで行った。東側側道予定地は10月に，林道迂回路用地は３月に，それ以外の調査終了箇所は次年度以降の調査に支障がない範囲で引き渡しを行った。

平成24年度

調査期間は平成24年５月８日～平成25年３月８日，調



第13図　天神段遺跡グリッド配置図

査延面積は17,520㎡であった。調査区は，営繕用地の１～６区を除き，７～25区の未調査部分であった。調査は，Ⅲ～ⅩⅥ層上面まで行ったが，工事の関係上，14～25区の調査を先行して行い，11月末に引き渡しを行った。その後残りの箇所の調査を行い，３月に次年度の調査に支障のない範囲で引き渡しを行った。

平成25年度

調査期間は平成25年４月22日～平成25年10月25日，調査延面積は8,000㎡であった。調査区は前年度の営繕用地であったＥ～Ｊ－１～６区で，そのうちＥ～Ｇ－３～６はⅢ～ⅩⅥ層上面，それ以外はⅠ～ⅩⅥ層上面まで調査を行い調査を終了した。その後，引き渡しを行い，７年に及ぶ本遺跡の本調査のすべてを終了した。

２　遺構の認定と検出方法

本遺跡では，多く検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

(1)　遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，担当職員で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居状遺構は，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断し住居跡というには根拠の薄い遺構を竪穴住居状遺構とした。溝状遺構は，底面に硬化面を有するものが多く，古道としての役割も兼ねていたと想定されるため，溝・古道という呼称で統一して掲載した。土坑及びピットについては，検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが，色調の違いや時期の違う遺物が混在するものについては，詳細な時期判定ができなかった。また，掘立柱建物跡については発掘調査担当で検討し，判断したものを基本的には掲載した。

(2)　遺構の検出方法

遺構の検出については，各年度とも共通の調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に，黒色土に掘り込まれた黒色系埋土の中世の遺構については，掘りすぎのものもあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので，調査のあり方を再検討し，今後の調査に生かしたい。

また，ゴボウ畑や雑木林があった箇所の調査では，撹乱を受けている箇所があり，遺構の検出をはじめ調査が難しかった。この場合，ミニトレンチの設定，撹乱部分の埋土除去等最善の調査方法を担当職員で検討し，遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

３　整理・報告書作成作業の方法及び内容

第Ⅰ章第４節で概要を報告したが，平成22年度から平成25年度までは発掘調査作業と同時並行で行われていたため，基本的には整理作業の方法及び内容は変わらない。そのため，本項では整理・報告書作成作業が開始された平成22年度の作業方法及び内容を中心に述べ，平成23年度以降は簡潔に述べることとする。

平成22年度

平成19～21年度までの発掘調査成果品の整理を行った。図面整理は，遺構実測図，遺物出土分布図，土層断面図等に仕分けし，台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは，未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。その際，遺物に付着している重要な情報を除去することがないように洗ったり，細石刃等微細な剥片石器については，超音波洗浄機を使用したりした。

注記は，水洗い終了後順次行った。注記を行う際，薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり，遺跡名を表す記号を「ＴＪ」とした。

分類・接合は，遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，包含層出土土器については，土器の胎土や文様等で分類し，さらにグリッドごとに分けた後接合を行い，その後エリアを広げて接合する方法をとった。石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。出土石器については，作業の効率化を図るため，予算の範囲内で石器実測委託を行った。

遺物出土分布図は，平板実測で取り上げた情報はデジタイザーを用いてデータ化し，トータルステーションで取り上げたデータと統合し，図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は，実測図や写真等を用いて，各年度の発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し，確定した。

土層断面や遺構のトレースは，鉛筆トレースで下図を作り，点検・修正後，ペントレース及びデジタルトレースを行った。

平成23年度～平成25年度

各年度とも前年度の発掘調査成果品の整理作業を行った。方法及び内容は，平成22年度と基本的に同じである。特に，平成23年度には注記作業の効率化を図るためジェットマーカーを使用し，原稿執筆も開始した。また，平成25年度は年度途中で調査がすべて終了することになったため，整理作業だけでなく，本編（弥生時代～近世編）の報告書作成作業も同時に行った。

平成26年度

本編の印刷・製本，縄文時代晩期編の印刷・製本以外の報告書作成作業，縄文時代前期～後期編の整理作業を行った。

第２節　層序

天神段遺跡の基本土層は隣接する野方前段遺跡Ｂ地点（2012年３月報告書刊行済）と同じで，包含層や遺構や遺物の年代を把握する手掛かりの１つとなる火山灰等の詳細については，以下のとおりである。

Ⅰ層は表土（旧耕作土）である。

Ⅱ層はＰ２（安永ボラ，1779年の桜島起源の噴出物）が点在する層である。耕地改良等でボラ抜きが行われており，集めたボラを使った畦状の「ボラ塚」もみられた。

Ⅲ層は黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで３層に分層した。

Ⅲａ層：黒色土で，中・近世の遺物包含層である。

Ⅲｂ層：暗茶褐色土で，弥生時代～古代の遺物包含層である。

Ⅲｃ層：オリーブ褐色土で，Ⅲｂ層と同じく，弥生～古代の遺物包含層である。

Ⅳ層は黄褐色パミス（Ｐ７，約5,000年？前の桜島起源の噴出物）を含む層で，色調の違いで２層に分層した。

Ⅳａ層：茶褐色土で，Ｐ７の腐植土層である。縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層である。

Ⅳｂ層：黄褐色土（Ｐ７を含む。）で，縄文時代晩期の遺物包含層である。

第３表　天神段遺跡の基本土層

層　位	色　調　等	平均厚
Ⅰ　層	表土	20cm
Ⅱ　層	明黄色パミス（Ｐ２）	３cm
Ⅲａ　層	黒色土	５cm
Ⅲｂ　層	暗茶褐色土	５cm
Ⅲｃ　層	オリーブ褐色土	５cm
Ⅳａ　層	茶褐色土	10cm
Ⅳｂ　層	黄褐色土（Ｐ７混）	20cm
Ⅴａ　層	褐色土	20cm
Ⅴｂ　層	赤褐色土	30cm
Ⅴｃ　層	明赤褐色パミス層（アカホヤ一次）	10cm
Ⅵ　層	明黄褐色土	20cm
Ⅶ　層	黒褐色土（Ｐ12混）	50cm
Ⅷ　層	黄白色火山灰（Ｐ14）層	25cm
Ⅸ　層	黒褐色粘質土	10cm
Ⅹ　層	茶褐色粘質土	20cm
ⅩⅠ　層	黒褐色粘質土	５cm
ⅩⅡ　層	茶褐色硬質土（Ｐ16混）	20cm
ⅩⅢ　層	暗茶褐色硬質土（Ｐ16混）	40cm
ⅩⅣ　層	黄茶褐色硬質土（Ｐ17混）	20cm
ⅩⅤ　層	暗黄褐色土	５cm
ⅩⅥ　層	明黄白色砂質土	20cm
ⅩⅦ　層	黄白色砂質土（ＡＴ＝シラス） ※シラス上面で調査終了	－

Ⅴ層はアカホヤ火山灰関連の層である。色調の違いで３層に分層した。

Ⅴａ層：褐色土で，アカホヤ火山灰の腐植土層である。縄文時代前期～中期の遺物包含層である。

Ⅴｂ層：赤褐色土で，アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。縄文時代前期～中期の遺物包含層である。

Ⅴｃ層：アカホヤ火山灰一次の軽石（約7,300年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）層。無遺物層である。

Ⅵ層は明黄褐色土で，縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層である。

Ⅶ層は黒褐色土で，縄文時代早期前葉～中葉の遺物包含層である。Ｐ12を含む層である。

Ⅷ層は薩摩火山灰層（Ｐ14，約12,800年前の桜島起源の噴出物）である。無遺物層である。

Ⅸ層は黒褐色粘質土である。この層から下位の層は旧石器時代該当層となり，細石刃文化期の遺物包含層である。

Ⅹ層は茶褐色粘質土である。Ⅸ層と同じく細石刃文化期の遺物包含層である。

ⅩⅠ層は黒褐色粘質土で，Ⅸ層よりも粘質が弱い。ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。

ⅩⅡ層は茶褐色硬質土で，Ｐ16（桜島起源の噴出物で，詳細な年代は不詳）と呼ばれるパミスを含む層である。

ⅩⅢ層は暗茶褐色硬質土で，Ｐ16（桜島起源の噴出物で，詳細な年代は不詳）と呼ばれるパミスを含む層である。

ⅩⅣ層は黄茶褐色硬質土で，Ｐ17（約28,000年前の桜島起源の噴出物）と呼ばれるパミスを含む層である。

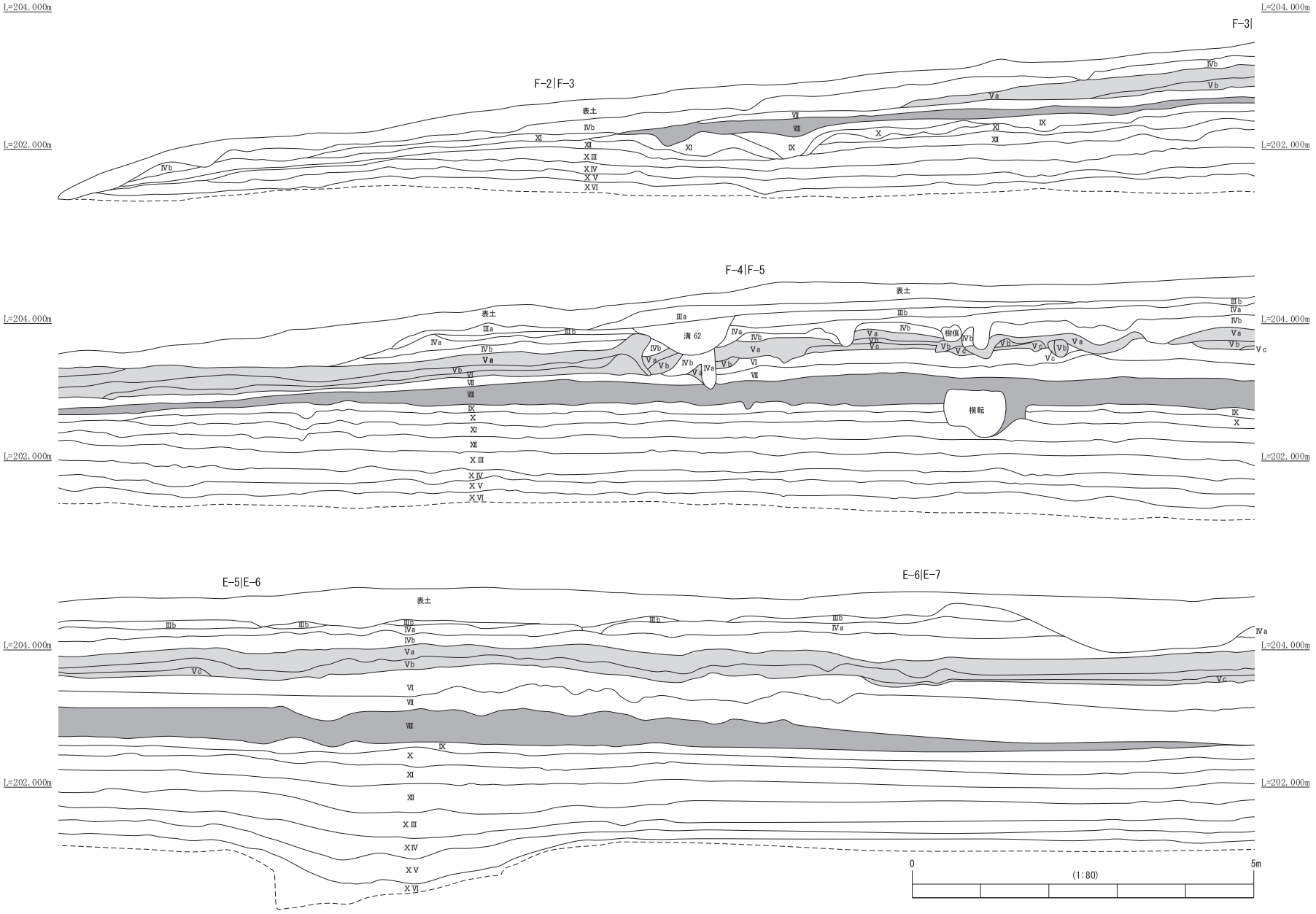
ⅩⅤ層は暗黄褐色土で，ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。

ⅩⅥ層は明黄白色砂質土である。

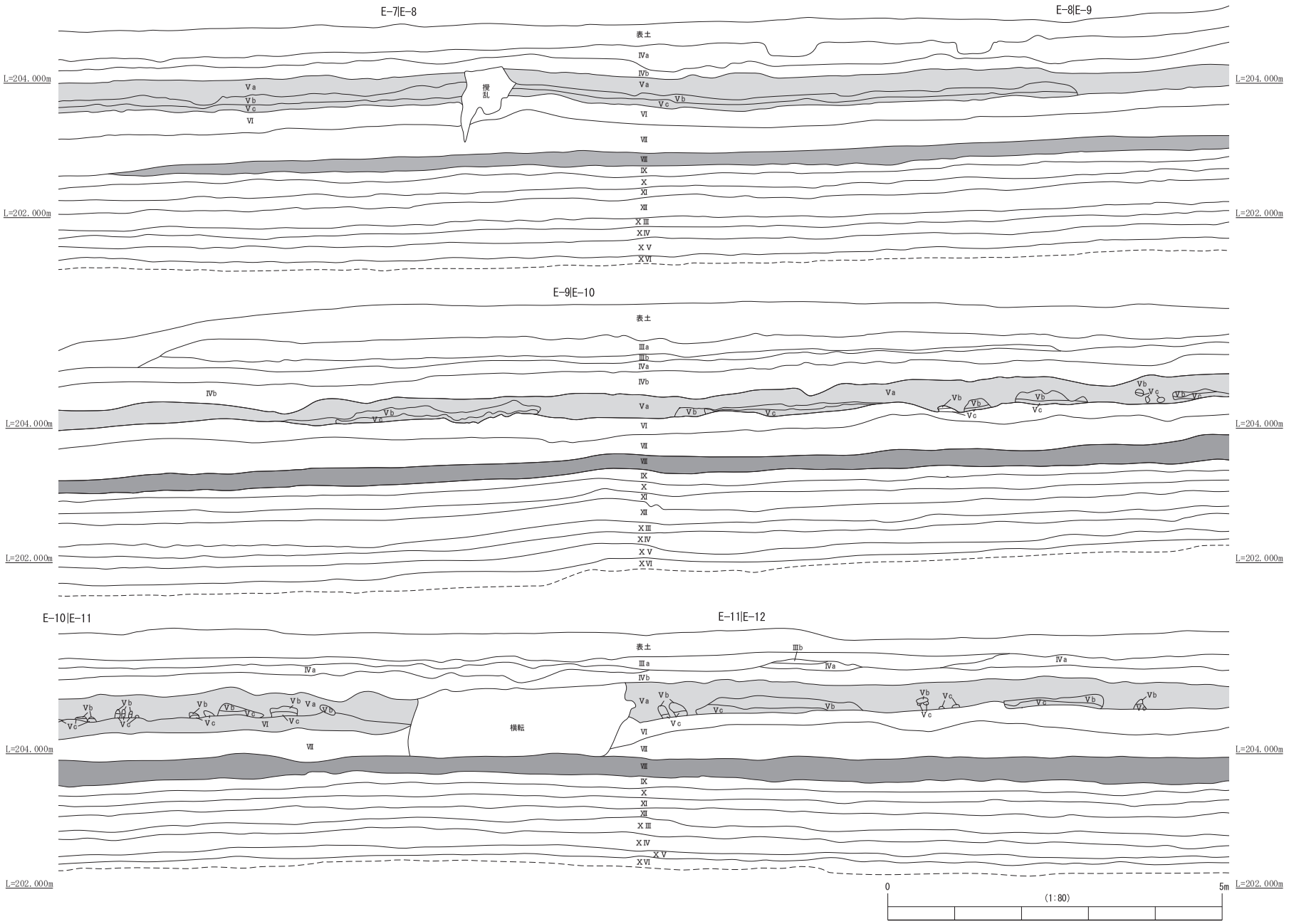
ⅩⅦ層は黄白色砂質土で，この層からＡＴ（シラス）と呼ばれる約26,000～29,000年前の姶良カルデラ起源の火山灰層となる。

この層は無遺物層で，南九州本土では厚く堆積していることが，これまでの調査や火山の研究等で周知されている。そのため必然的に掘削深度が深くなるので，安全面や調査の効率化を図るという観点から，このシラス上面で調査を終了した。

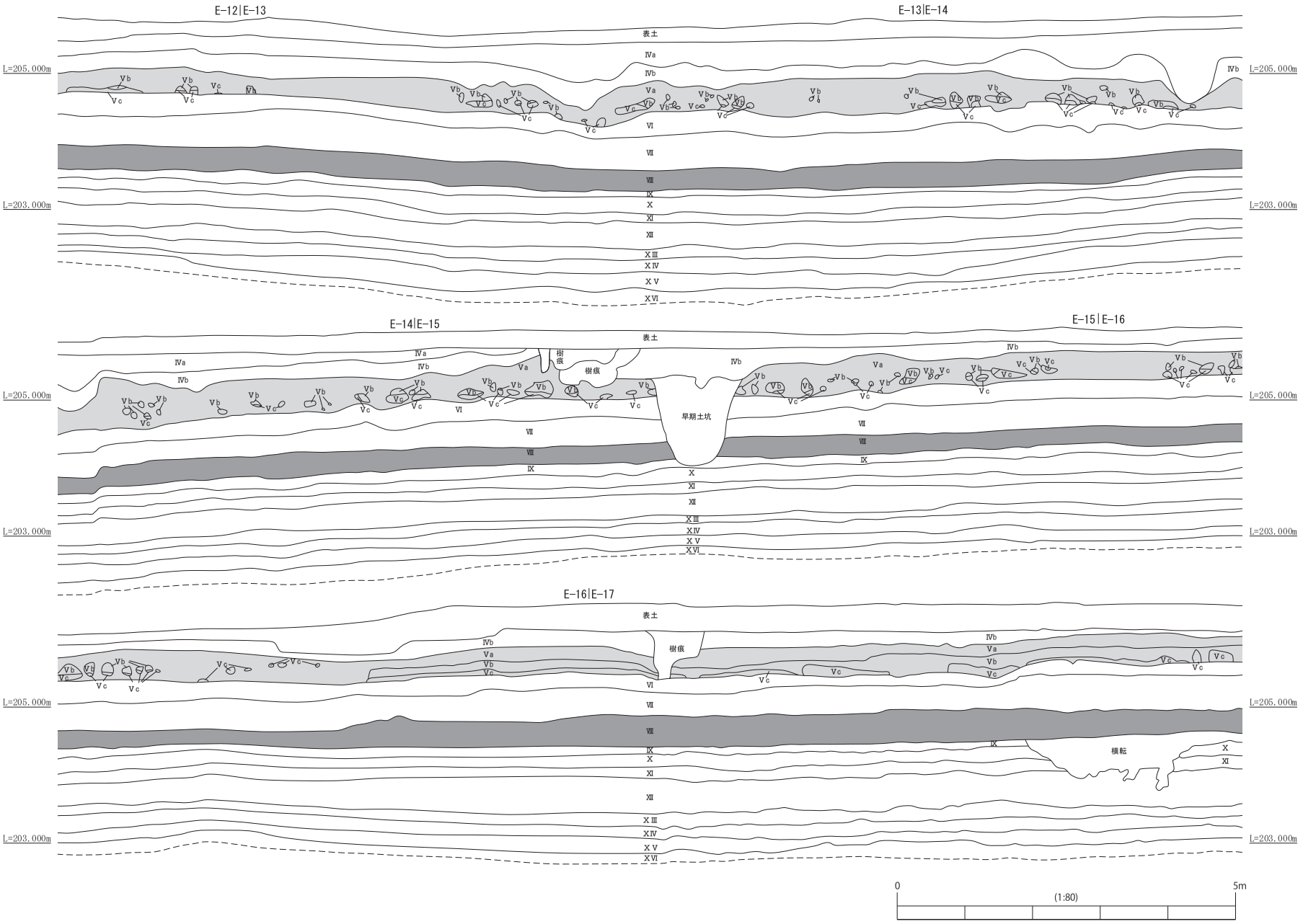
※火山灰の年代については，2003　町田洋　新井房夫著　東京大学出版会　『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』（ｐ108～110）から引用した。なお，年代は放射性炭素年代測定法で算出され，暦年較正した年代である。



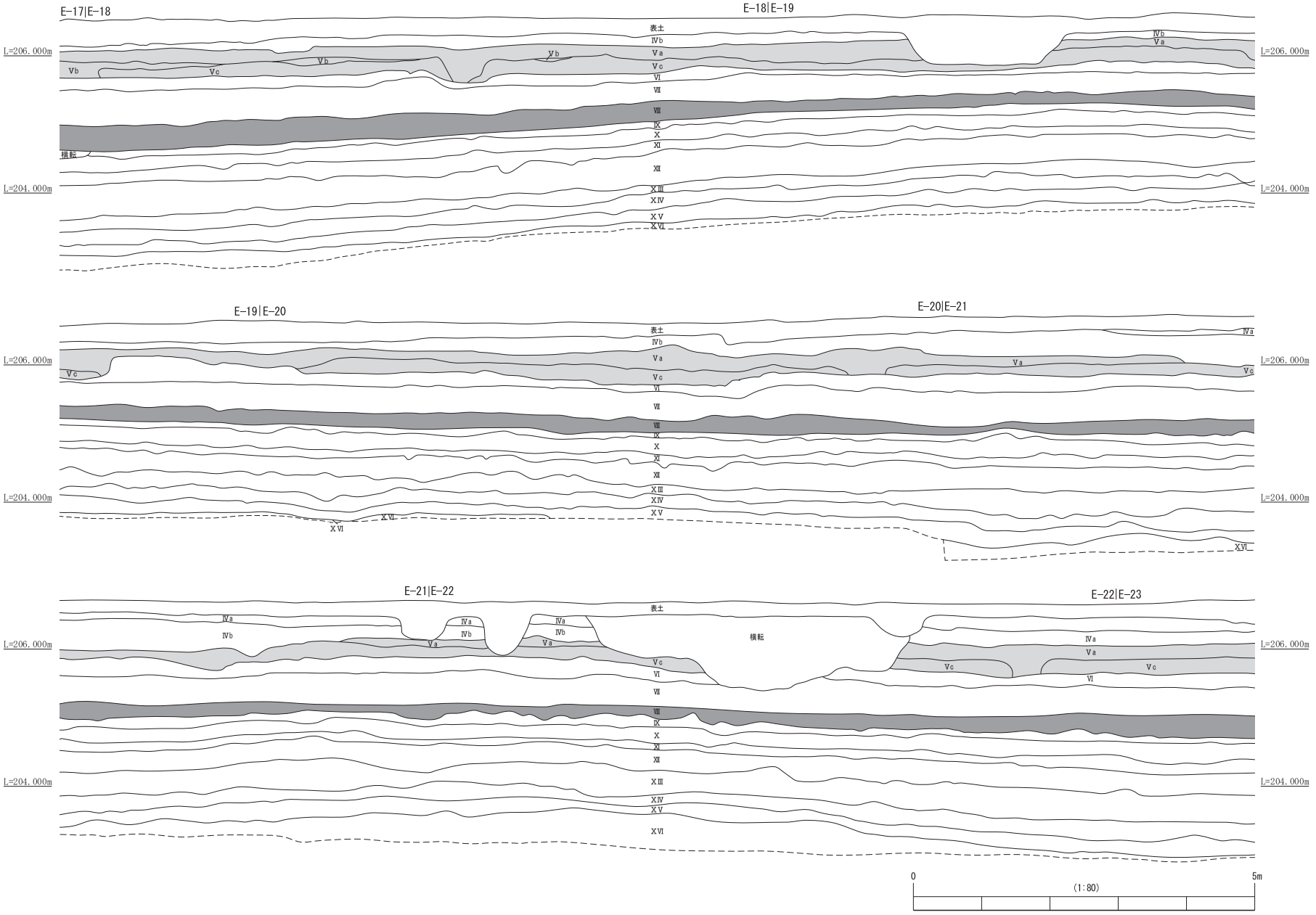
第14図　土層断面図１(E・F-2～24区①)



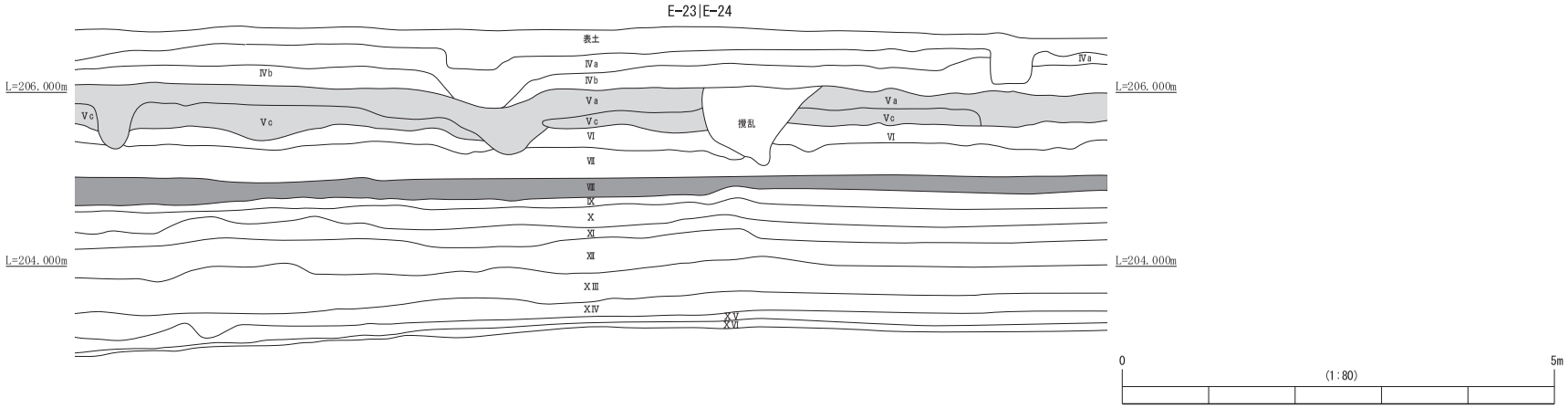
第15図　土層断面図２(E・F-2～24区②)

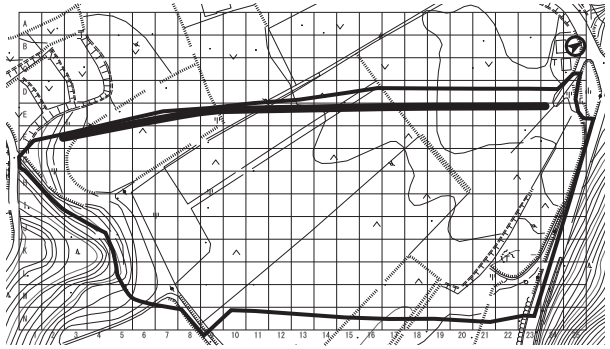


第16図　土層断面図３(E・F-2～24区③)

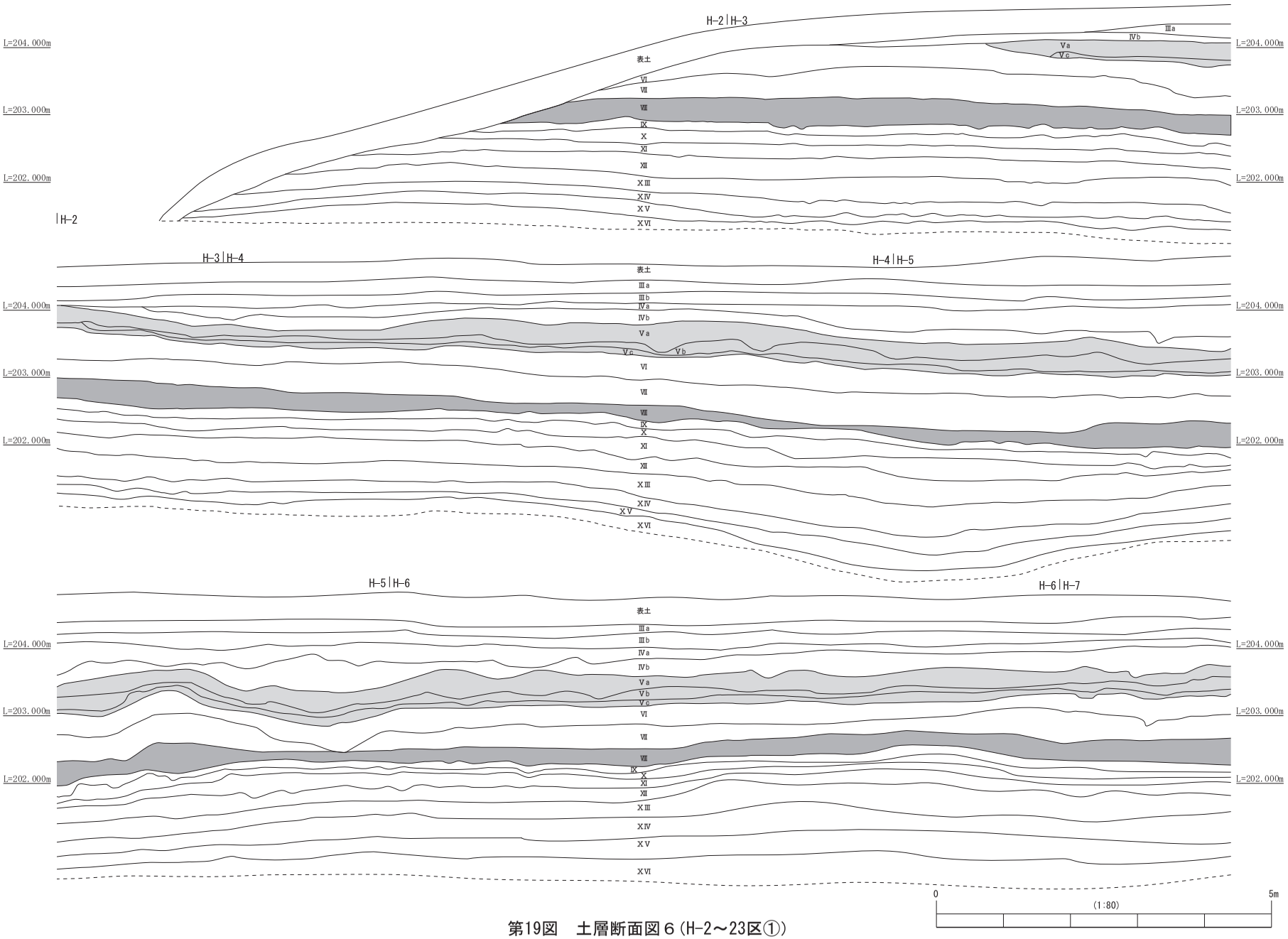


第17図　土層断面図４(E・F-2～24区④)

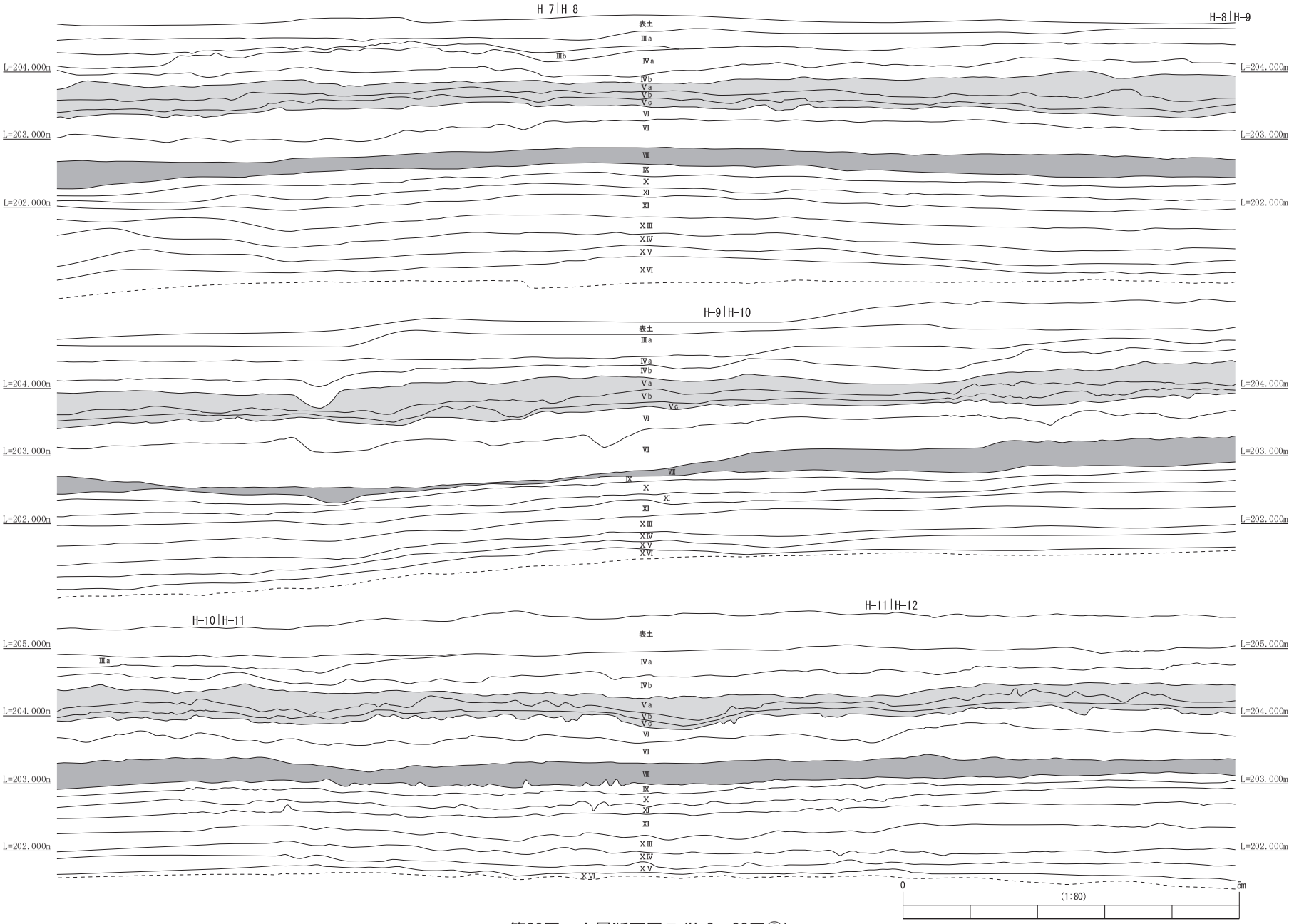




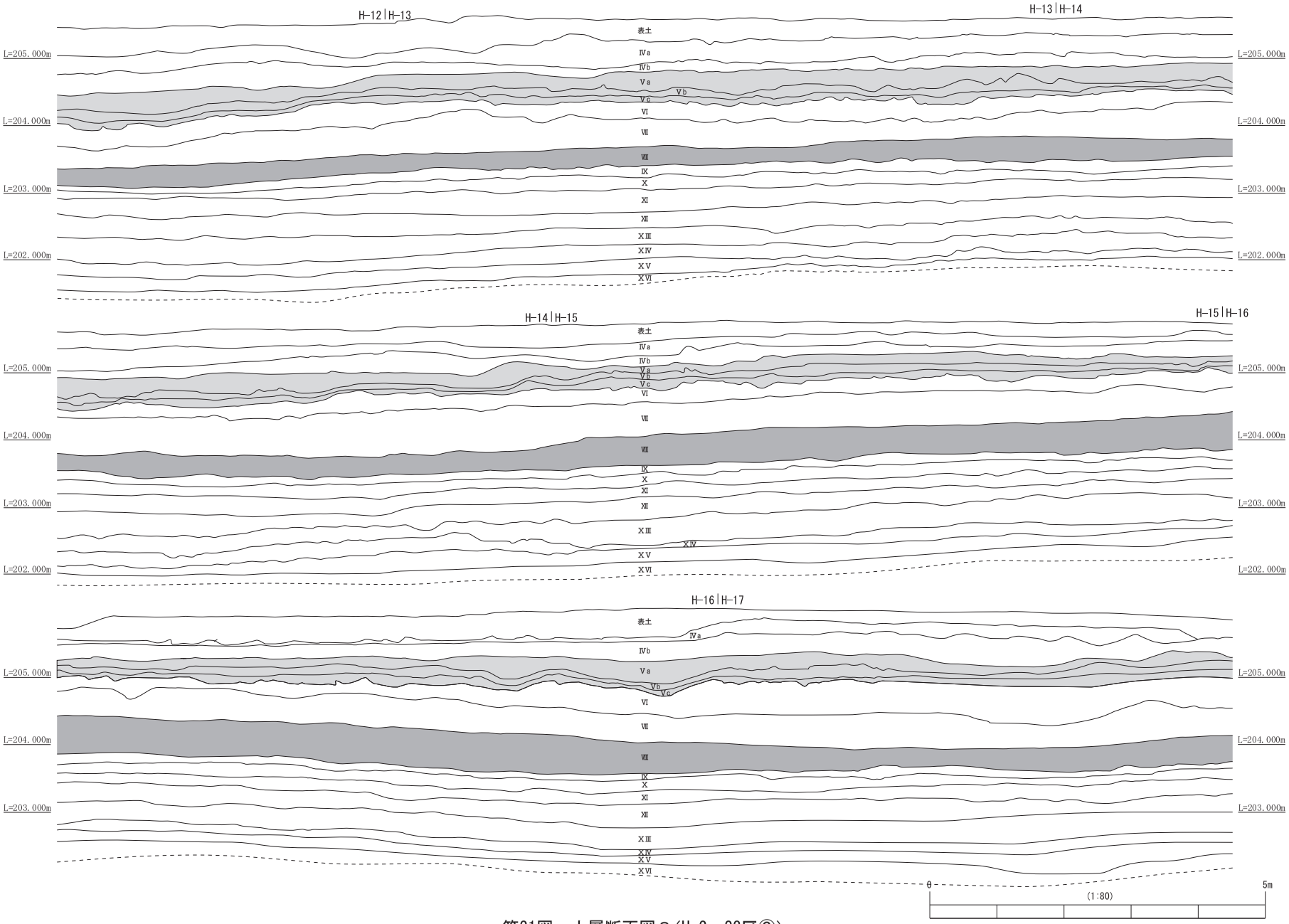
第18図　土層断面図５(E・F-2～24区⑤)



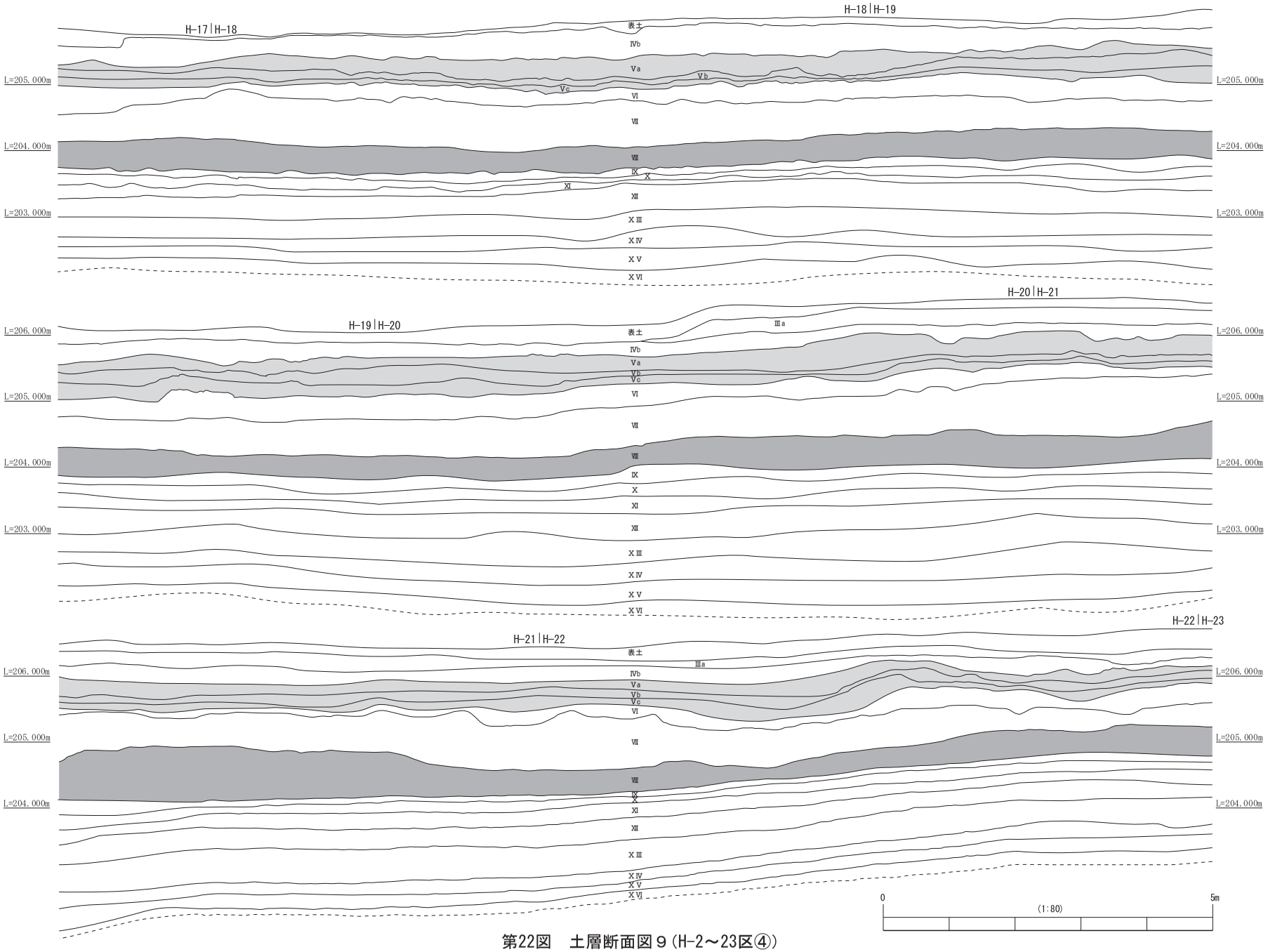
第19図　土層断面図６(H-2～23区①)



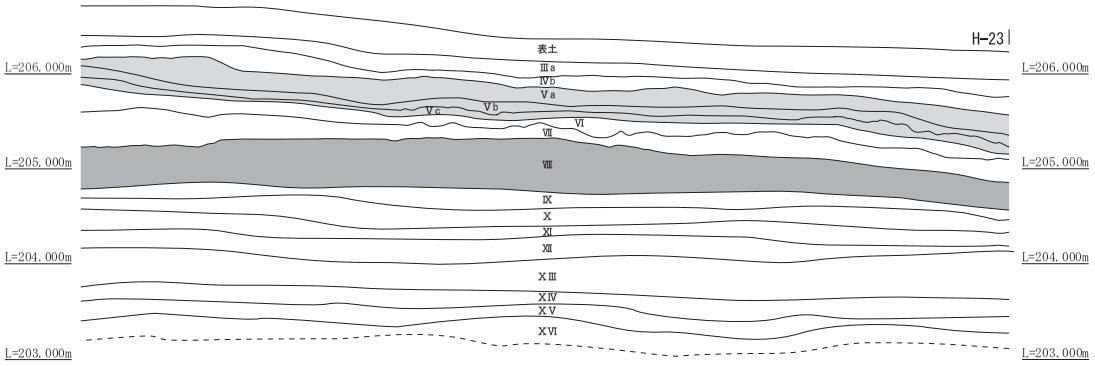
第20図　土層断面図７(H-2～23区②)

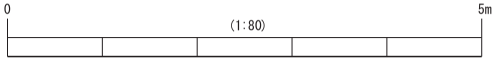


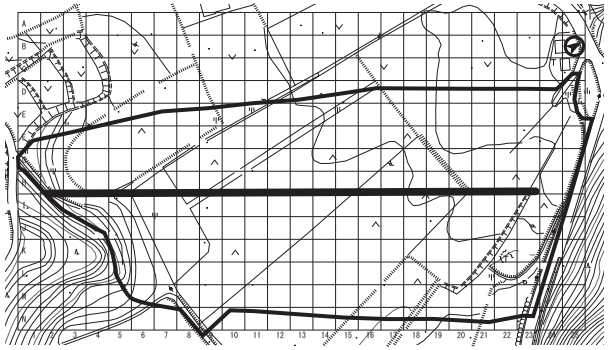
第21図　土層断面図８(H-2～23区③)



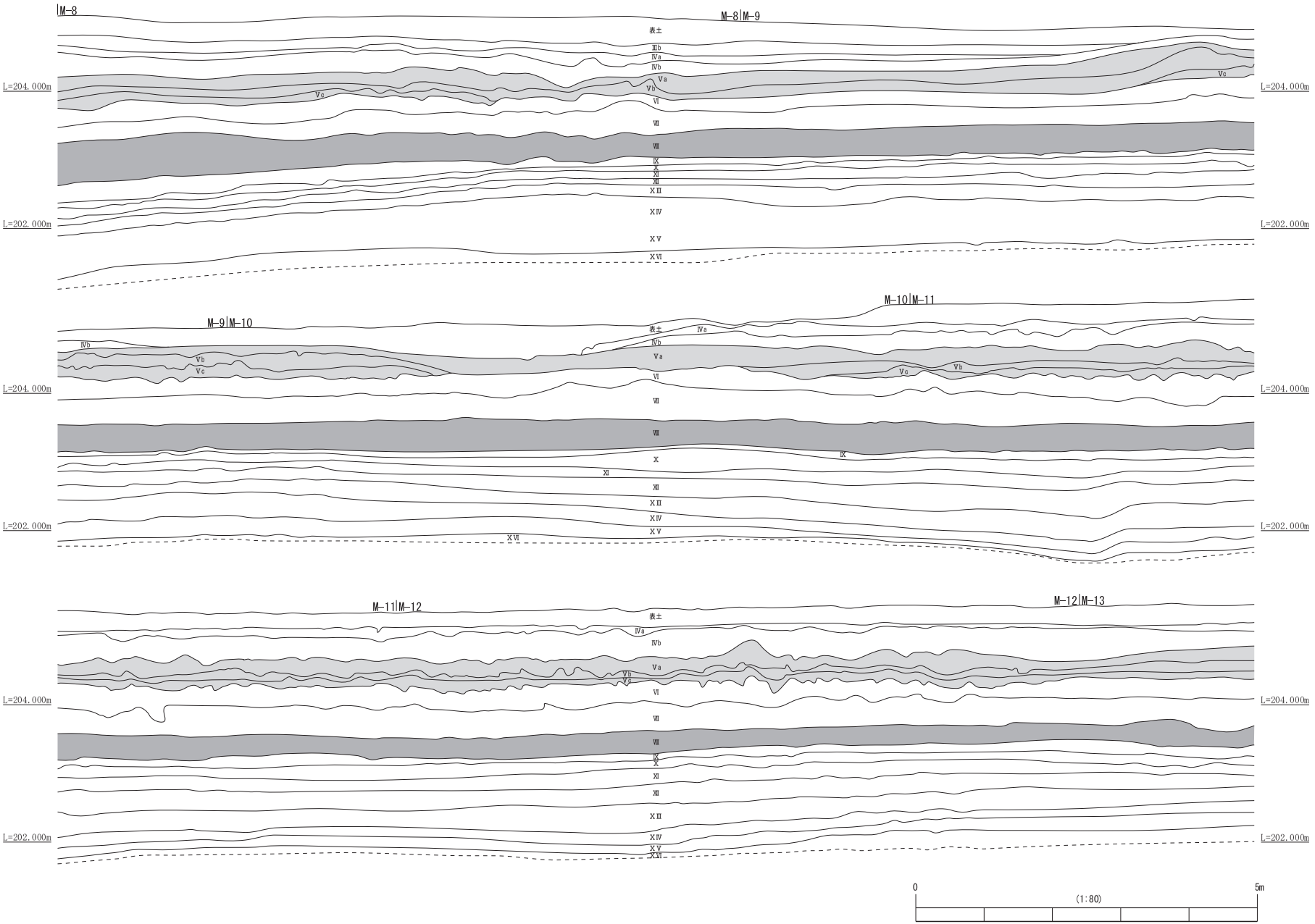
第22図　土層断面図９(H-2～23区④)



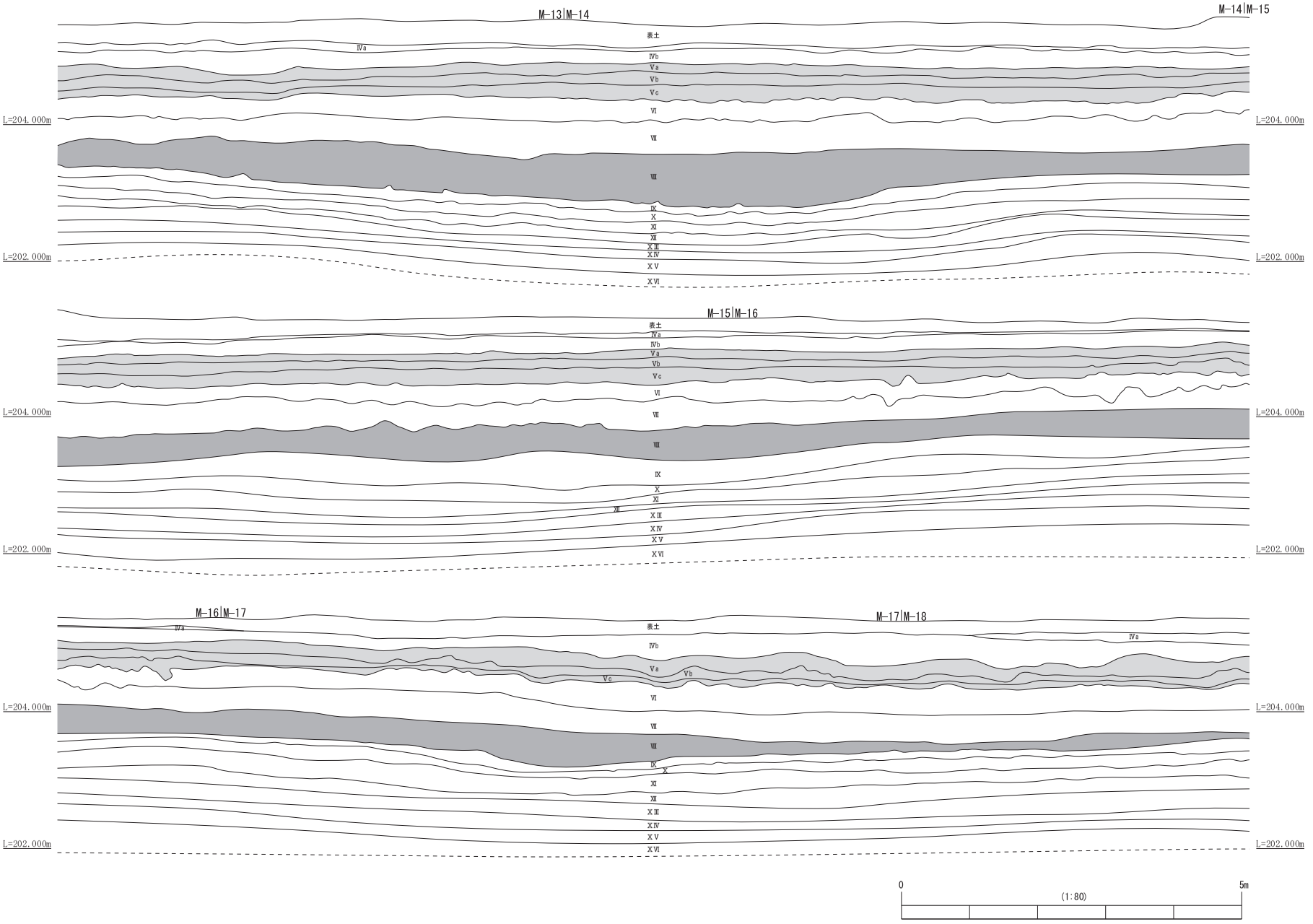




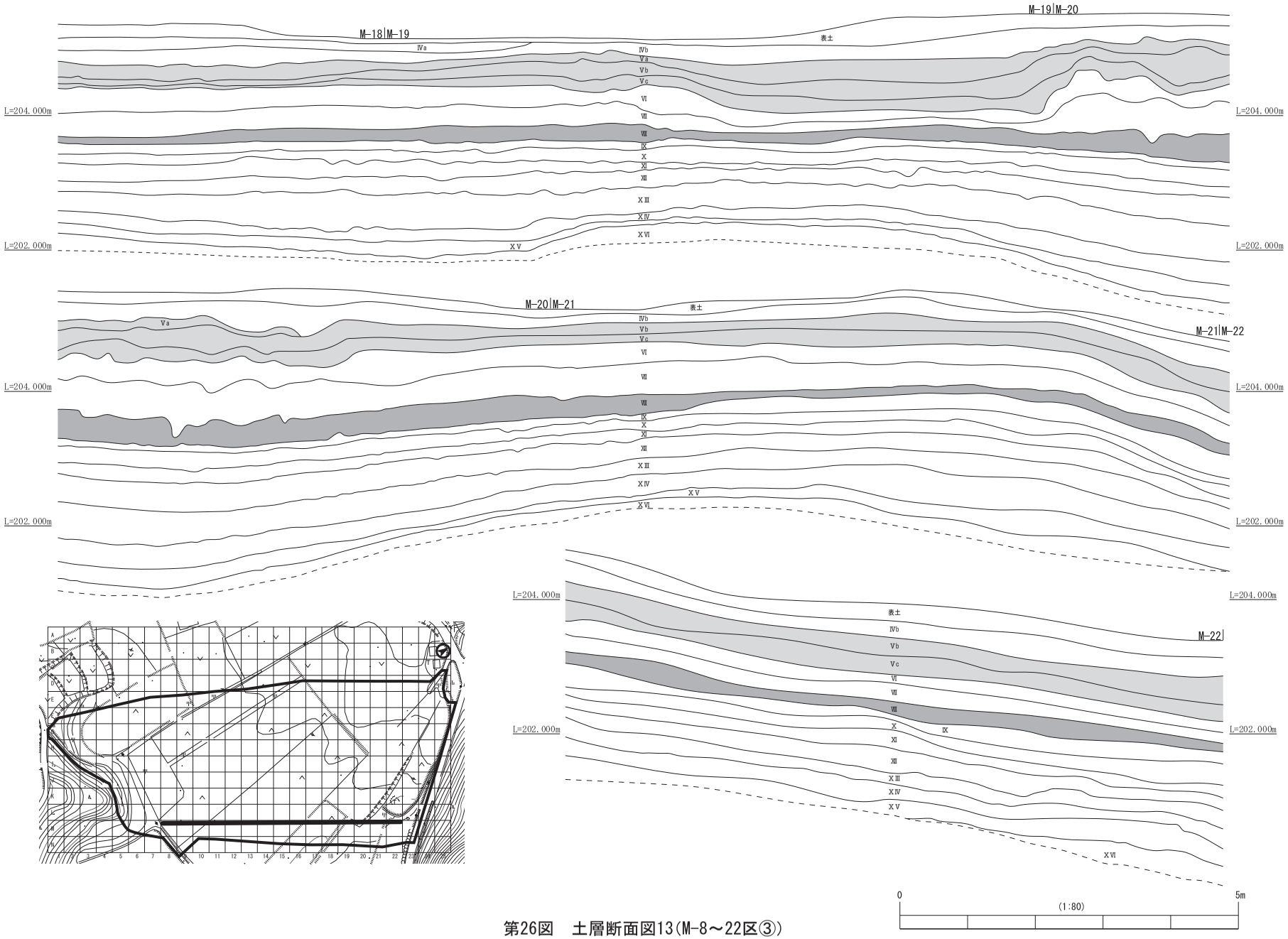
第23図　土層断面図10(H-2～23区⑤)



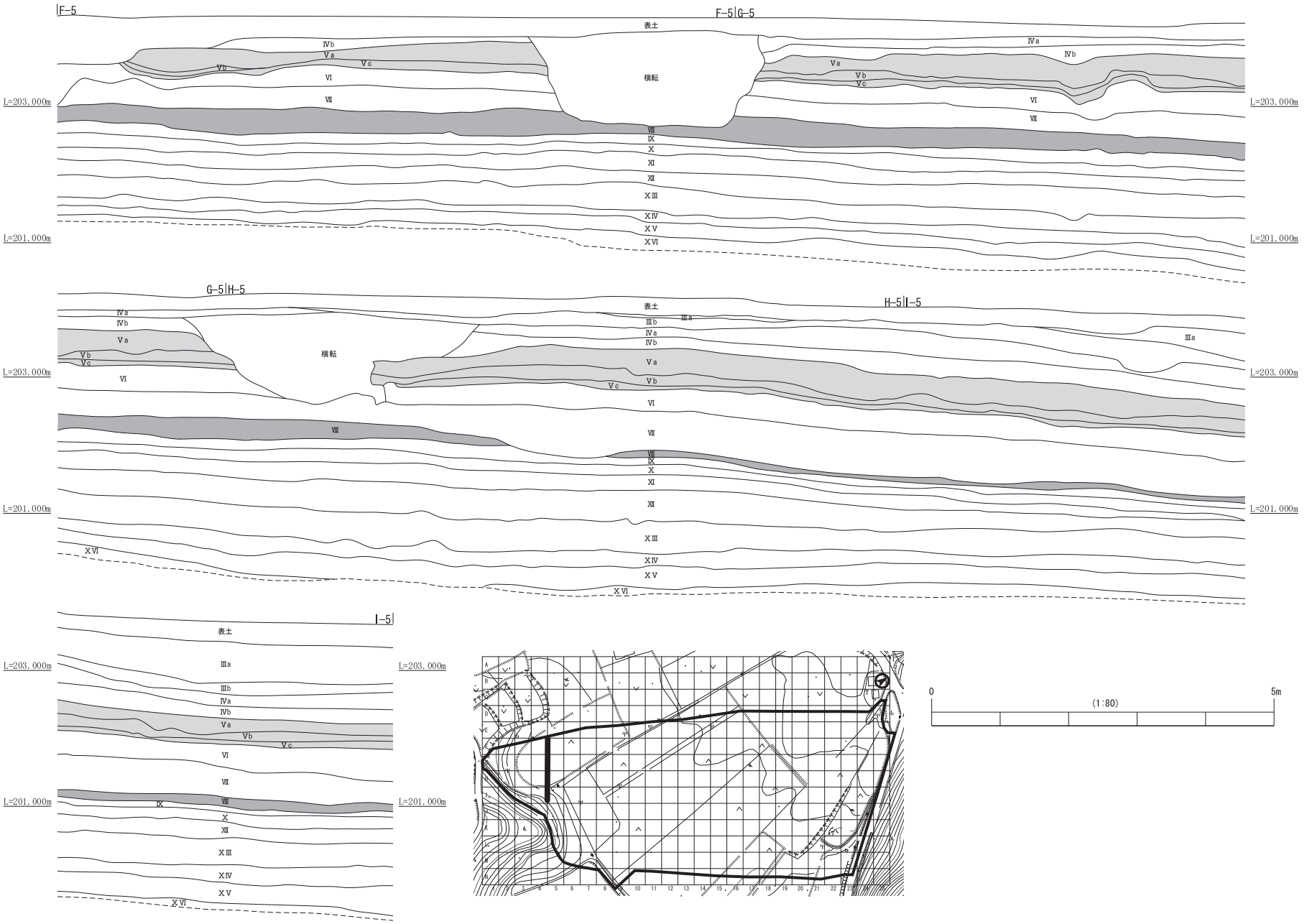
第24図　土層断面図11(M-8～22区①)



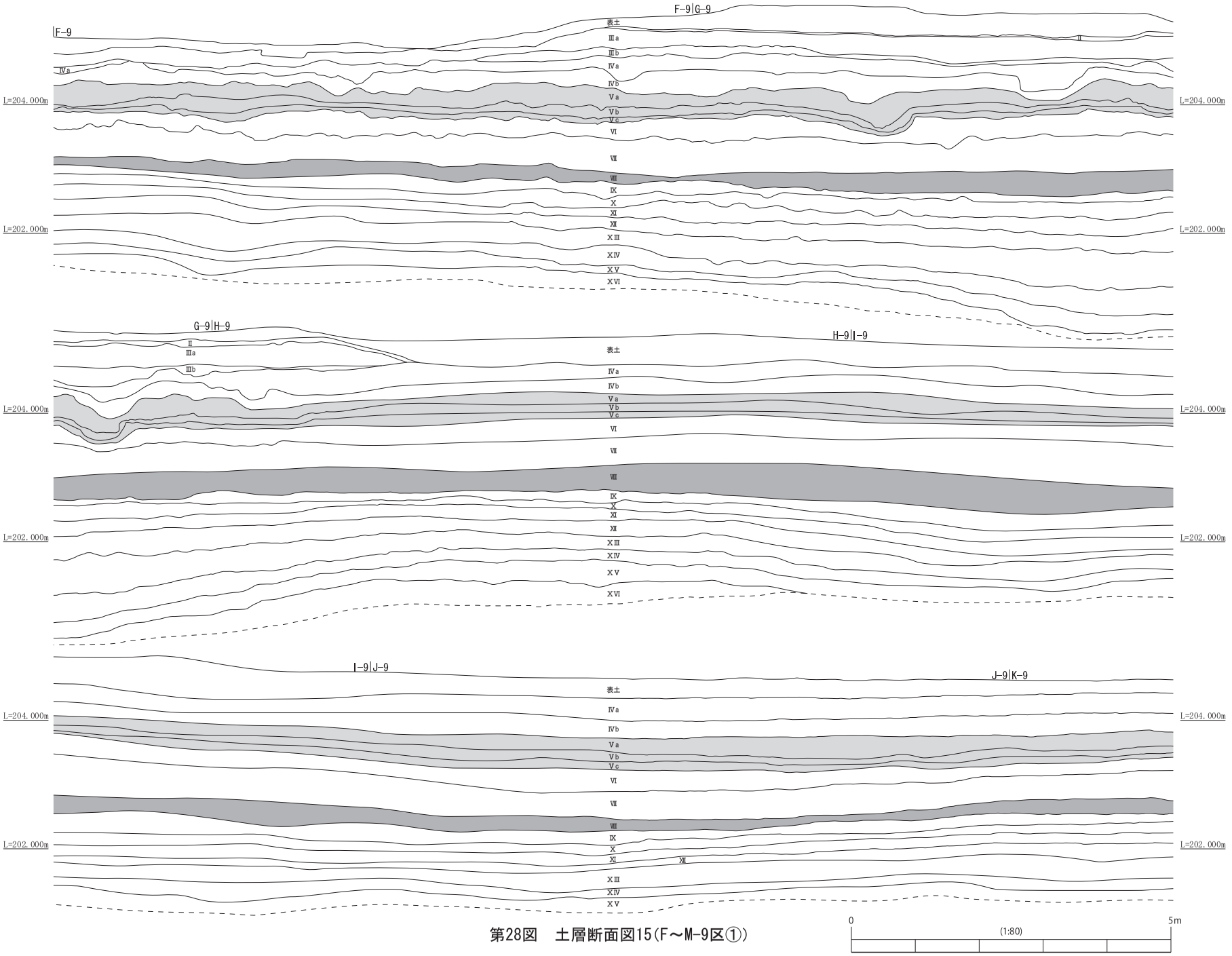
第25図　土層断面図12(M-8～22区②)



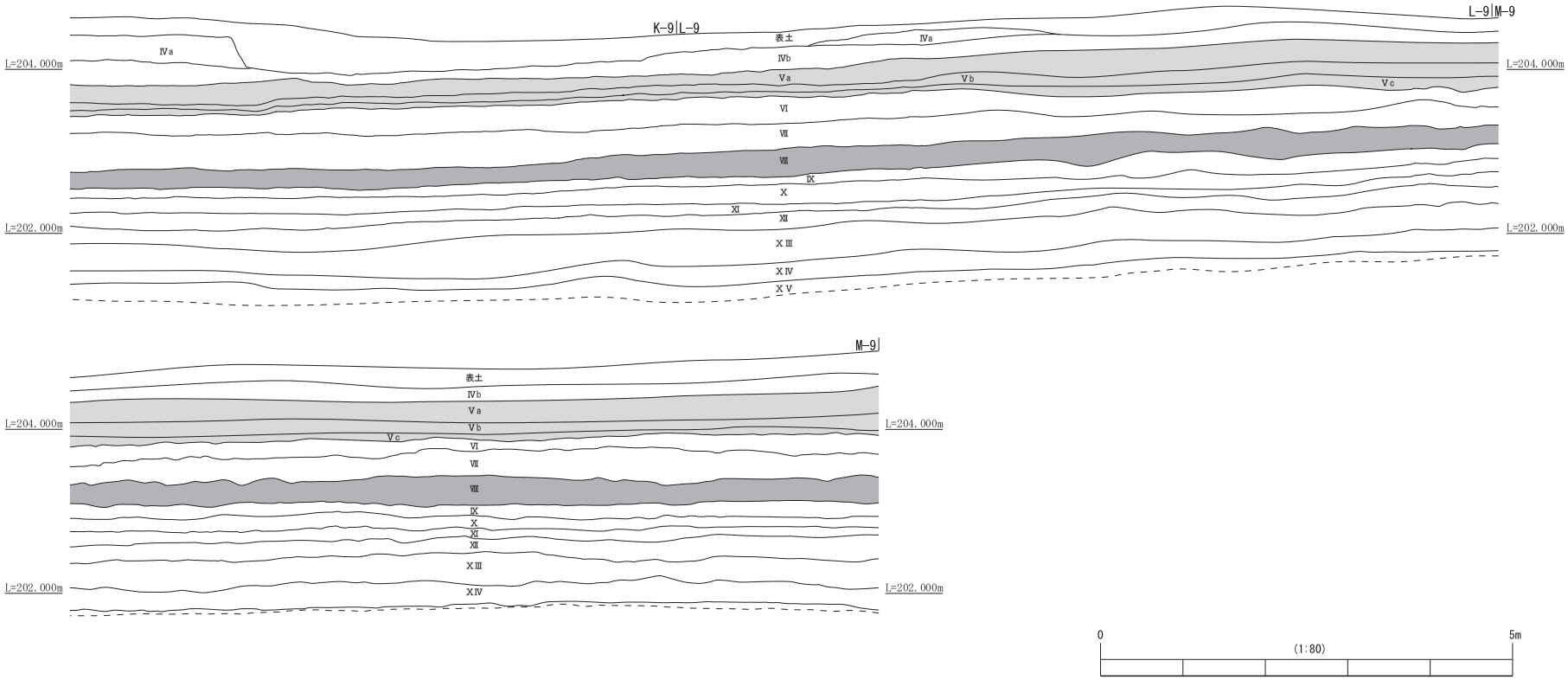
第26図　土層断面図13(M-8～22区③)



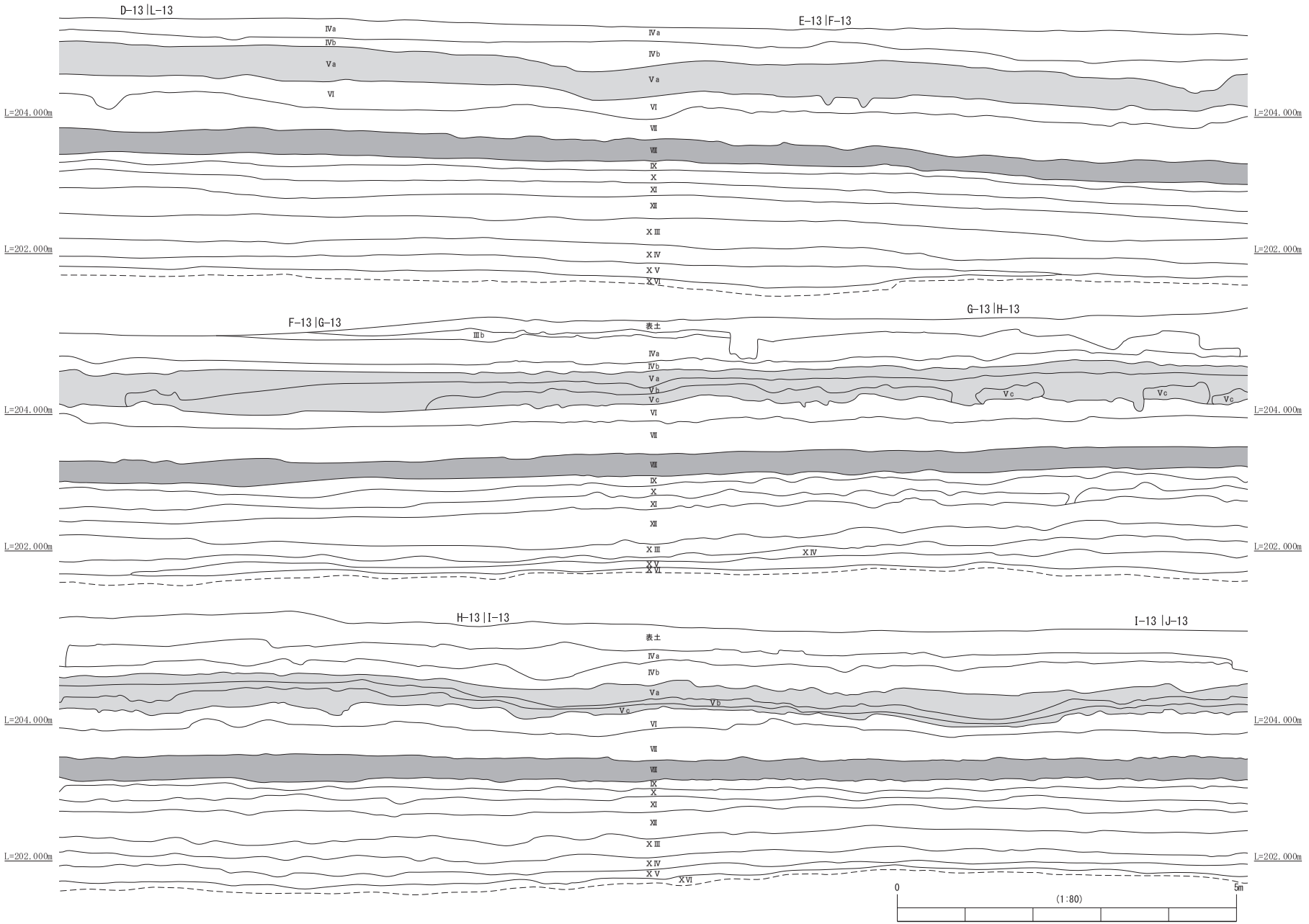
第27図　土層断面図14(F～I-5区)



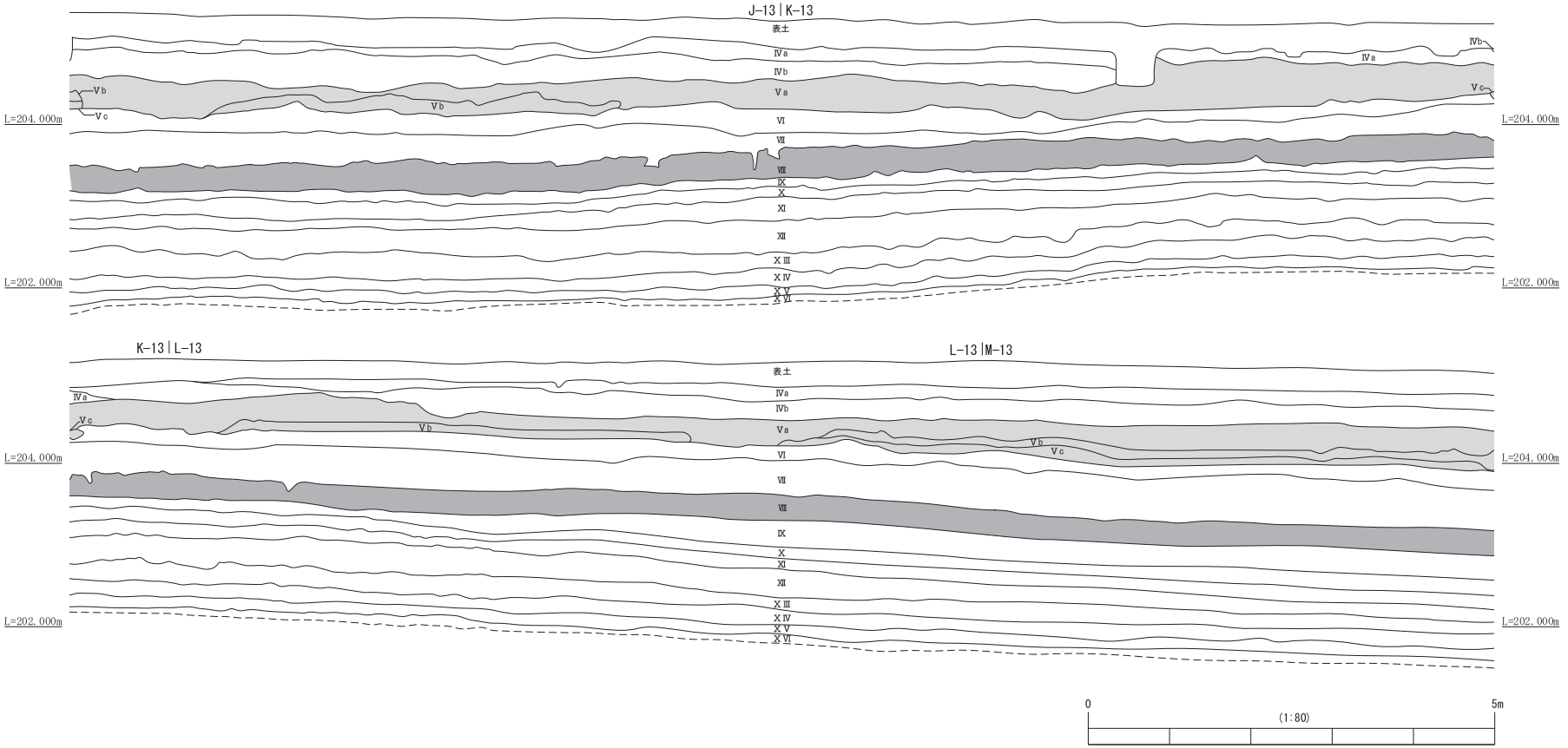
第28図　土層断面図15(F～M-9区①)

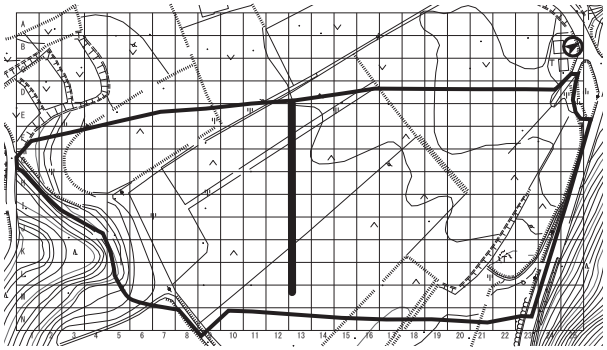


第29図　土層断面図16(F～M-9区②)

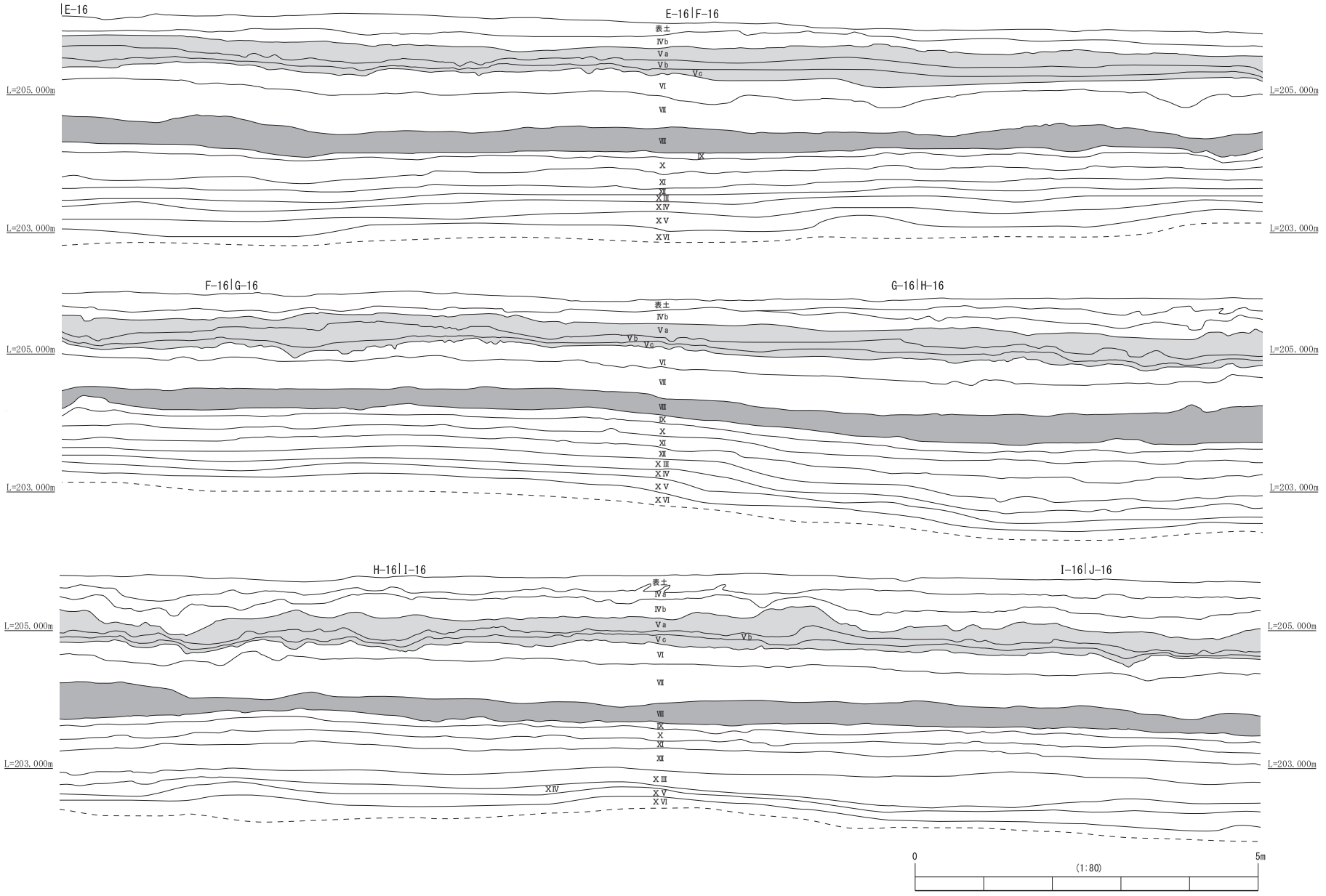


第30図　土層断面図17(D～M-13区①)

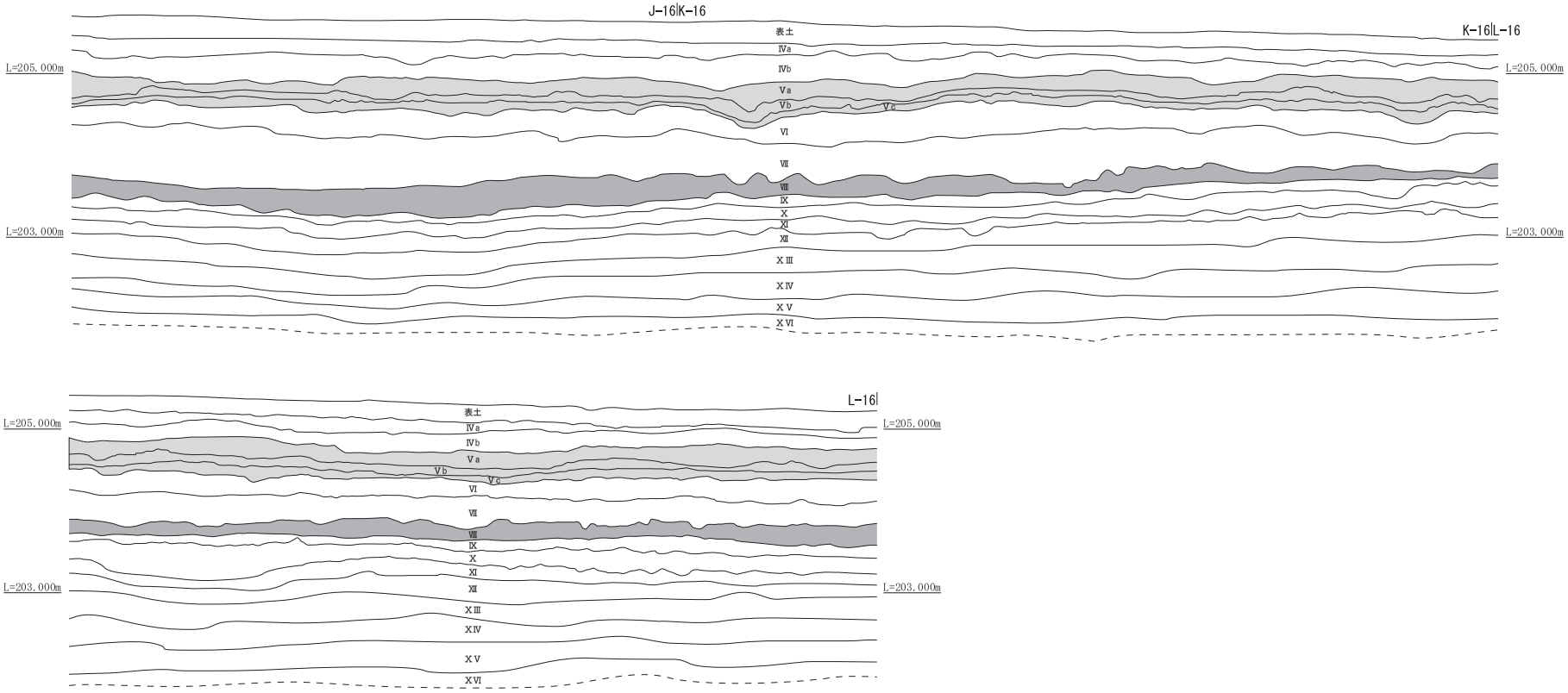




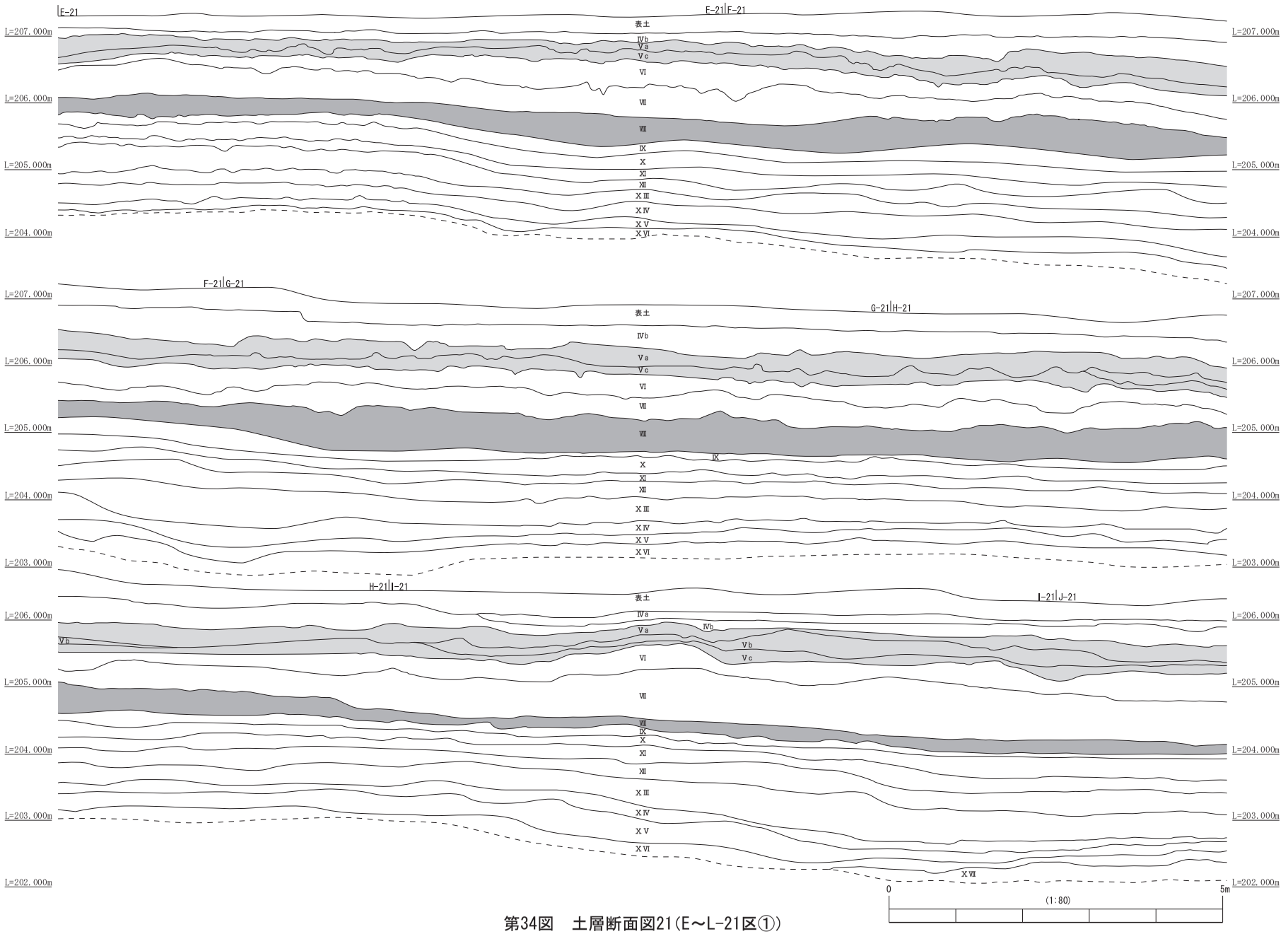
第31図　土層断面図18(D～M-13区②)



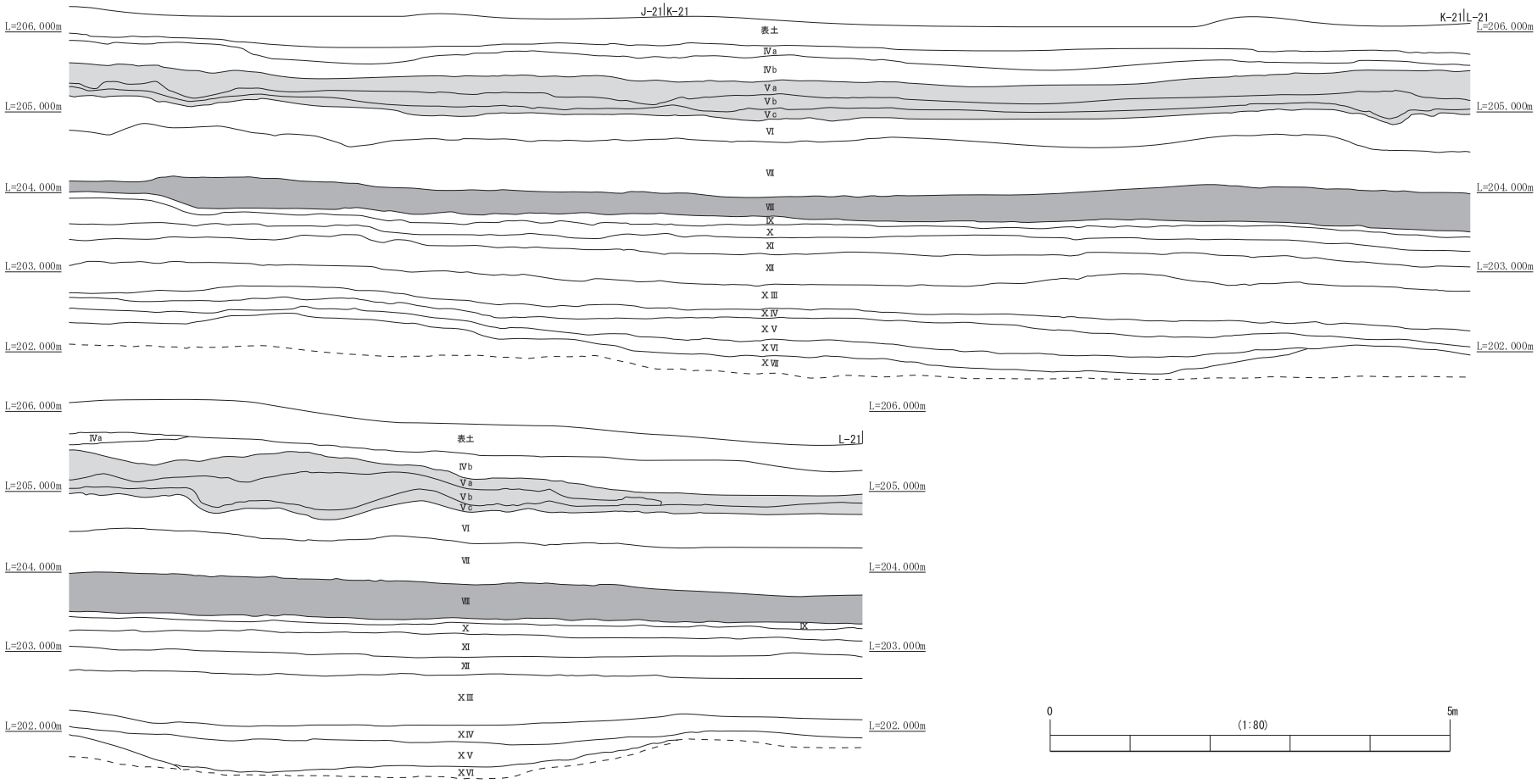
第32図　土層断面図19(E～L-16区①)



第33図　土層断面図20(E～L-16区②)



第34図　土層断面図21(E～L-21区①)



第35図　土層断面図22(E～L-21区②)

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節　弥生時代の調査成果

１　調査の概要

本遺跡の弥生時代の該当層はⅢb～Ⅳａ層であるが，Ⅲｃ層は遺跡全体に残存していたわけではなく，部分的に残存していた。

そのため，調査は，人力による掘り下げで進められたが，遺構や遺物を当時の生活面であるⅢｃ層でできるだけ確認しようと慎重に調査を進めた。

調査の結果，遺構については，Ⅲｃ層で検出することはできなかったが，Ⅳｂ層上面で竪穴住居跡を２軒検出することができた。

遺物については，Ⅲｃ層での出土量は少なく，Ⅳａ層・Ⅳｂ層で多く出土し，特に，Ⅳａ層での出土量が多かった。また，竪穴住居跡内からも41点出土している。

２　遺構

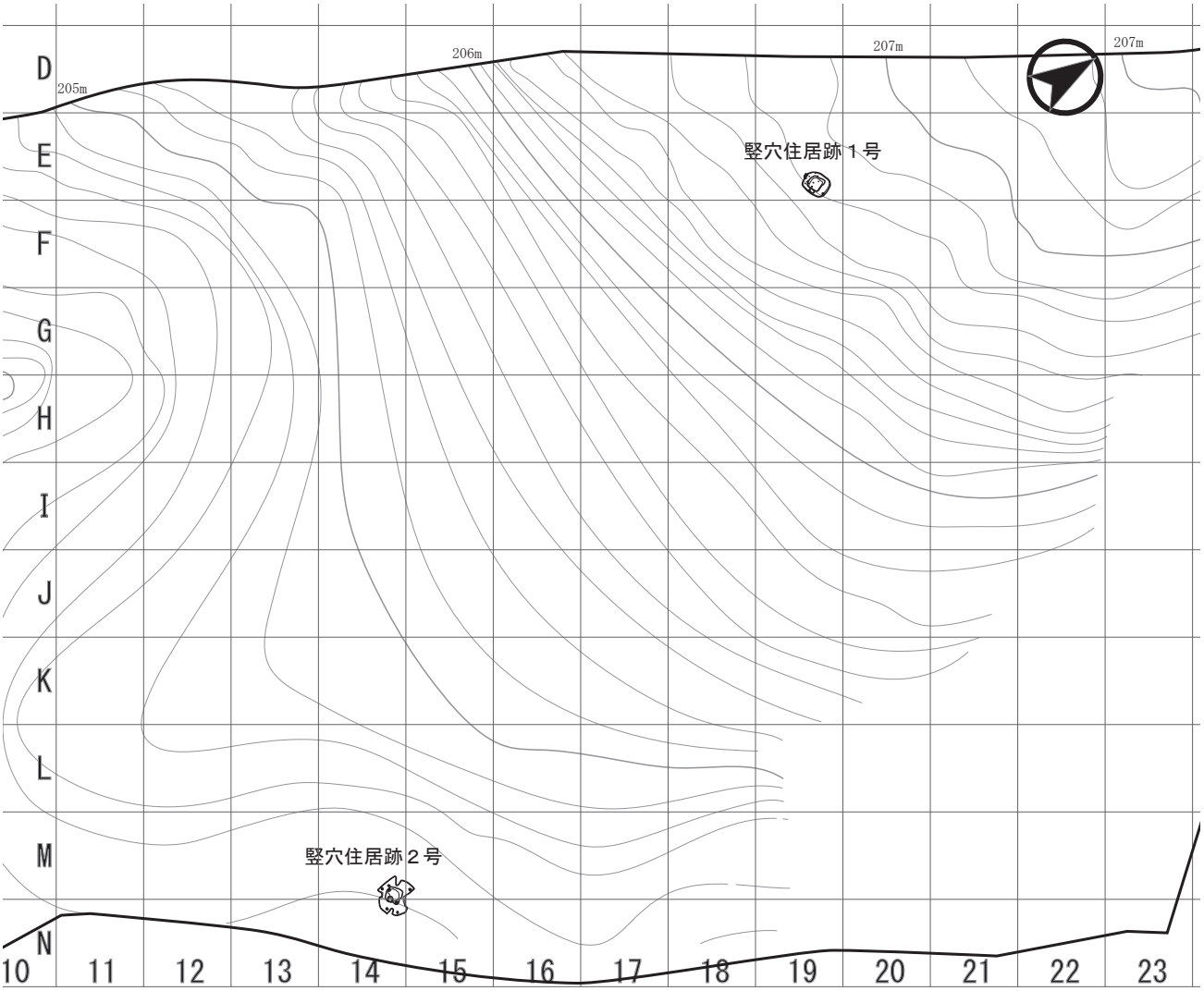
Ｅ－19区及びＭ・Ｎ－14・15区のⅣｂ層上面で竪穴住居跡が２軒検出された。**（第36図）**

竪穴住居跡１号（第37図）

検出状況　Ｅ－19区で検出され，検出面はⅣｂ層であった。２号住居跡と同様，当時の生活面であるⅢｂ・Ⅲｃ層では検出できなかった。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形で，長軸約270cm，短軸約220cmを測る。検出面からの深さは，約40cmを測る。２号住居跡と同様やや浅く感じるが，掘り込み面は，検出面より上位の層であるので実際はもう少し深さがあったと考える。

検出面から埋土を除去していくと，検出面から深さ約30cmのところで，１辺が約140cmを測る方形の硬化面が



第36図　弥生時代の遺構配置図

検出され，その厚さは約10cmであった。この硬化面は貼床と考えられる。また，東西の壁近くの底面で小ピットが２基検出された。ピットの検出面からの深さは１基が約20cm，残りの１基が約40cmとやや浅いが建物の構造上位置的に柱穴の可能性がある。

埋土　パミスを含む茶褐色土を主とし，パミスを含むにぶい茶褐色土や明茶褐色土等が堆積していた。パミスは茶褐色土の方が多く含む。貼床は茶褐色土と黒褐色土が混在した硬質土であった。

出土遺物　住居内から出土した遺物は14点で，そのうち埋土中から９点，貼床直上から５点出土した。種類別では土器片13点，軽石１点であった。14点のうち５点を図化した。（**第38図　１～５**）

１～４は甕形土器である。弥生時代中期前半の在地系土器が３点と，弥生時代前期末から中期初頭のものが１点である。

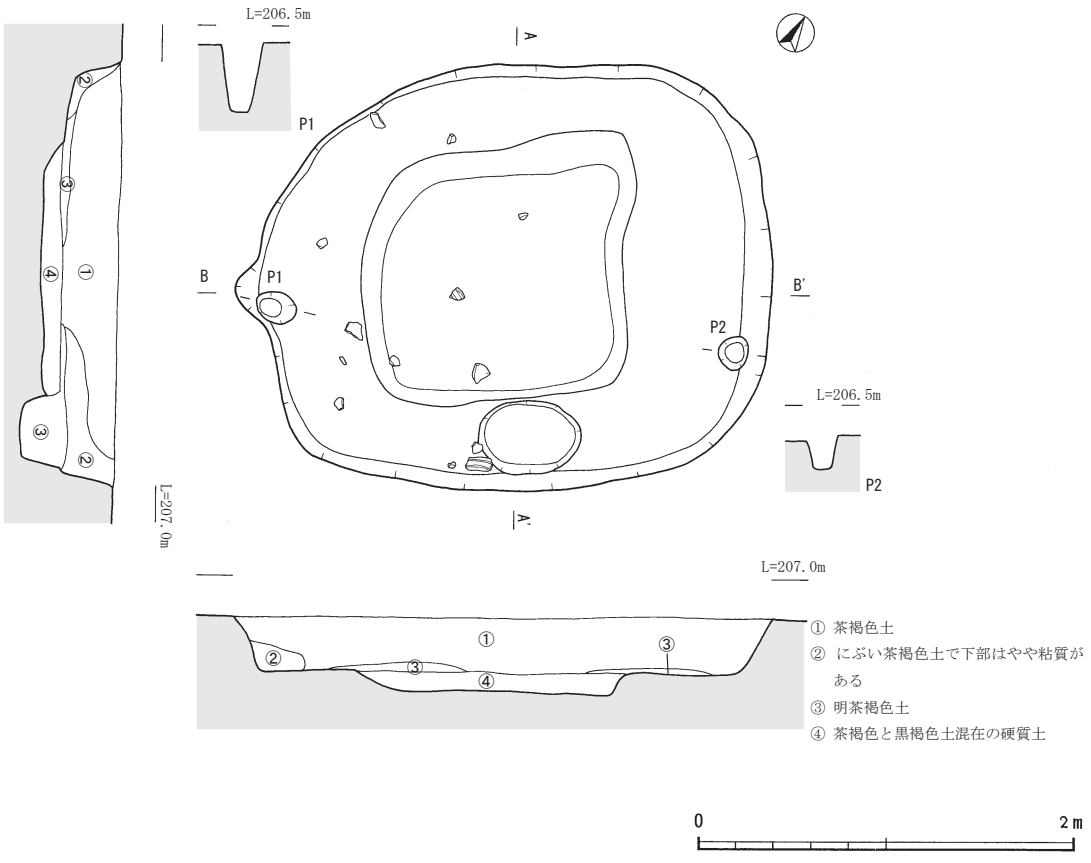
１は口縁部断面が台形状を呈し，口唇部に凹みをもつ。胴部上面に断面三角形状の突帯を２条施している。一部ススが付着しており，外面はナデ調整を施し，内面はハケメ調整である。雲母を多く含んでいる。入来Ⅱ式に比定できる。

２・３は口縁部が逆L字状を呈し，やや細長い印象を受ける。２は口唇部の凹みも明瞭で，器壁が薄く整形されている。外面には，小さな工具によるハケメ調整がみられ，内面もナデ調整である。口縁部形態から入来Ⅱ式と思われるが，外来系の影響を受けていると考えられる。

３は突帯貼付け後の丁寧なナデ消しがみられる。内面も丁寧なハケメ調整が施されている。また，口縁部上面にナデ調整時の布の痕跡がみられた。胎土には雲母が含まれている。

４は口縁部が断面三角形を呈している。口縁部のみで，判断が難しいが，口縁部先端に刻目，あるいは胴部突帯に刻目を施すものと同時期のものと思われる。弥生時代中期初頭に相当する。

５は幅が約２cm，深さが約0.3cmを測る溝を有する（有溝）軽石製品で，最大長が5.5cm，最大幅が6.5cm，最大厚が1.9cmを測る。溝の部分から外側にかけて加工の痕跡がみられるが，欠損部が多いのが特徴である。



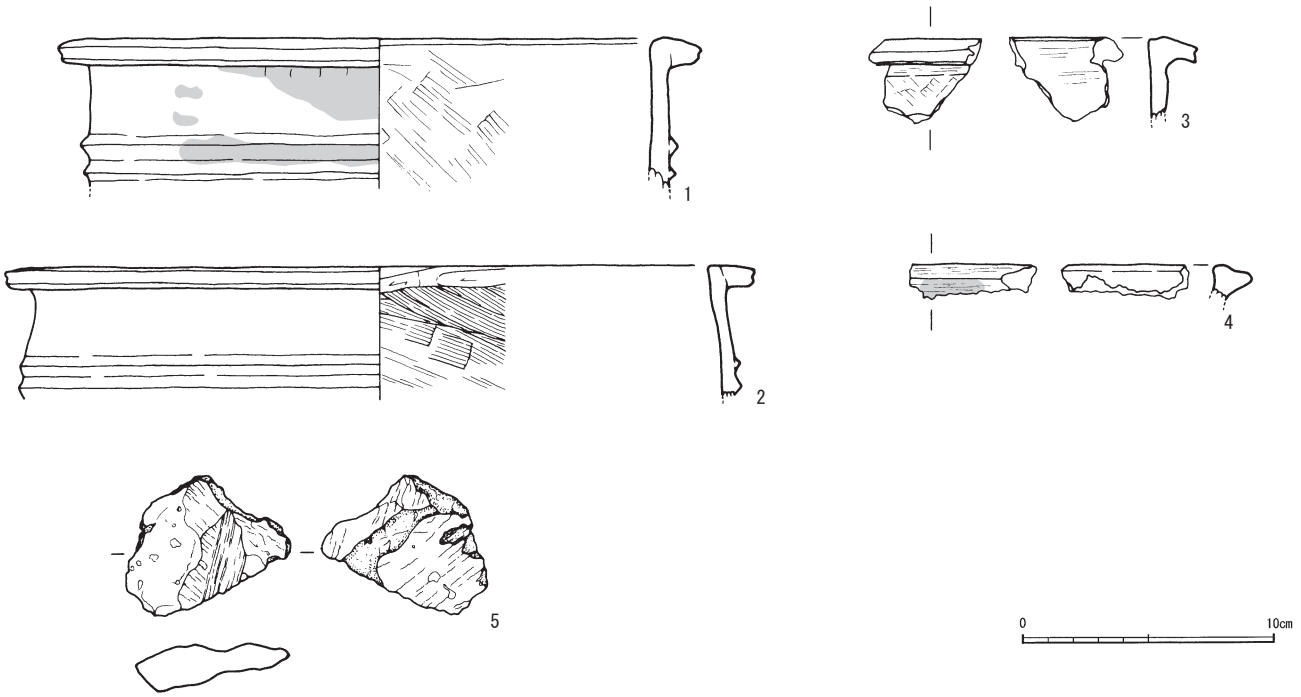
第37図　弥生時代の竪穴住居跡１号

竪穴住居跡２号（第39図）

検出状況　M・N－14・15区で検出され，検出面はⅣｂ層であった。調査の概要でも述べたとおり，当時の生活面であるⅢｂ・Ⅲｃ層では検出できなかった。

形状と規模　基本となる平面プランは，隅丸方形を主体部とし，４箇所の張り出しをもつ花弁型であると考えられる。主体部である隅丸方形の規模は，一辺が約180cmである。張り出し部の規模は，幅が約180cm～260cm，主体部からの奥行きが約80cm～130cmで統一性がみられない。検出面からの深さは，主体部の最深部が約45cm，張り出し部の最深部は約10cmとやや浅く感じるが，掘り込み面は，検出面より上位の層であるので実際はもう少し深さがあったと考える。

検出面から埋土を除去していくと，主体部において検出面から深さ約40cmのところで貼床と思われる半径約60cmを測る円形の硬化面が検出され，その厚さは約５cmで



第38図　弥生時代の竪穴住居跡１号内出土遺物

第４表　竪穴住居跡１号内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	口径(cm) 外径	口径(cm) 内径	底径(cm)	器高(cm)	色調 外面	色調 内面	文様・調整 外面	文様・調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	備考
38	1	甕	口縁部	25.6	21.4	－	－	橙	暗灰黄	ナデ	ハケメ・ナデ				○	スス付着
	2	甕	口縁部	29.8	26	－	－	明赤褐	明赤褐～橙	ナデ	ハケメ・ナデ		○		○	
	3	甕	口縁部	－	－	－	－	暗褐	明赤褐	ハケメ	ナデ				○	
	4	甕	口縁部	－	－	－	－	オリーブ黒	橙	ナデ	ナデ	○		○	○	スス付着

第５表　竪穴住居1号内出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
38	5	軽石製品	－	－	5.5	6.5	1.9	13.23	－	

あった。また硬化面上部の一部で焼土が検出された。

また，小ピットが主体部で２基，張り出し部で５基検出された。主体部内の２基は建物の構造を考えたときに位置的に主柱穴と考えることもできるが，小ピットの断面を見ると深さが浅いため主柱穴であったかどうかは判断しがたい。ただし，張り出し部で検出された５基も含め建物を支えるための柱穴であったのではないかと考えている。

埋土　主体部の埋土は黄色パミスを少量含み，しまりが良くて粘性のない暗褐色土を主とし，黒褐色土が堆積していた。貼床は黄色パミス（Ｐ７）とアカホヤの二次堆積層が混在した硬質の暗褐色土であった。

出土遺物　住居内から出土した遺物は27点で，そのうち埋土中から24点，床面直上から３点（主体部１点，張り出し部２点）出土した。種類別では土器片23点，磨石１点，剥片３点であった。

また，土器片23点のうち19点が接合できたため，全体としては大きく分けて12点となり，そのうちの５点（土器４点，磨石１点）を図化した。（**第40図　６～10**）

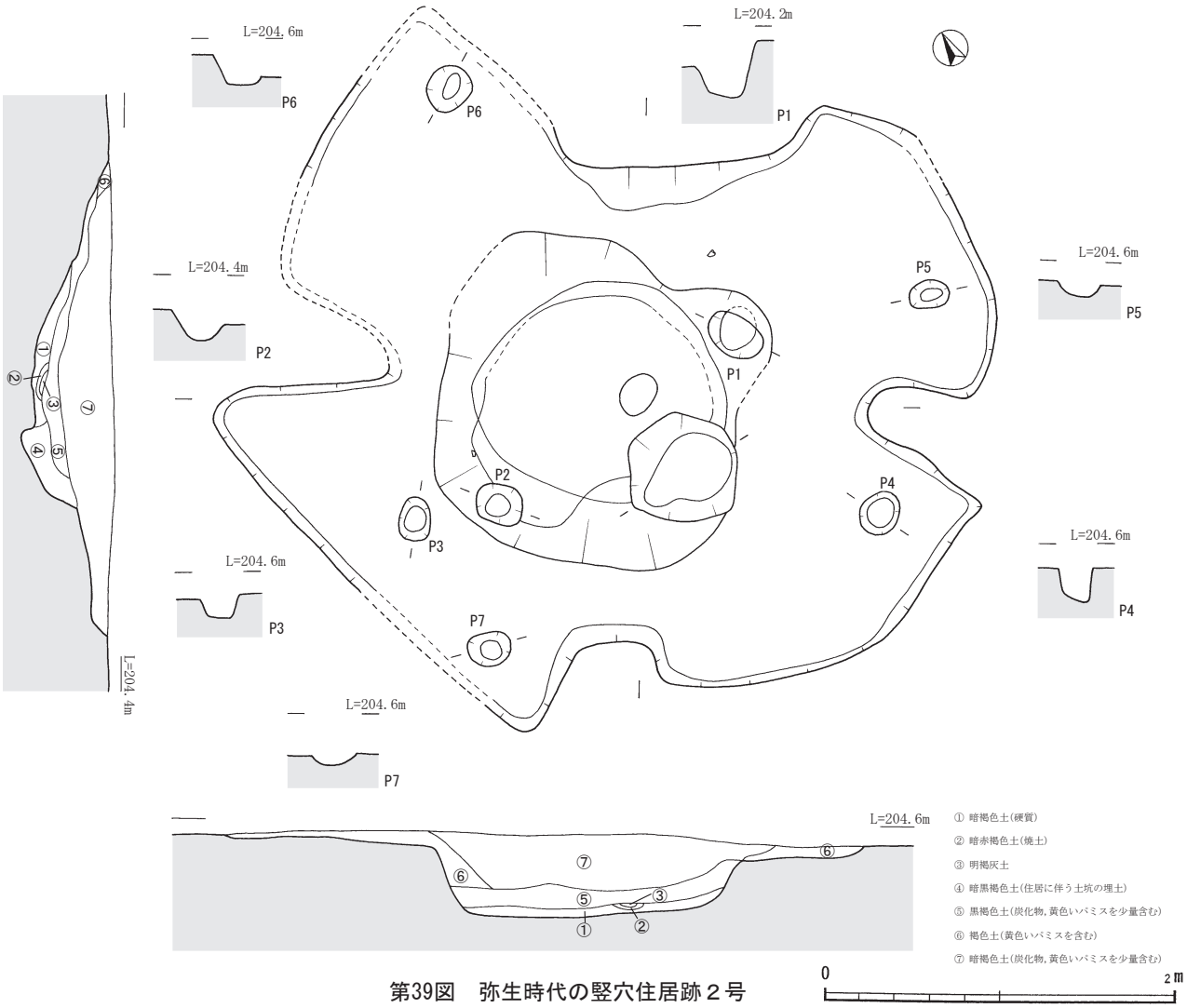
６～９は壺形土器で，６～８は肩部，９は底部である。これらは，本遺跡の包含層遺物の出土状況や土器の形態的特徴から入来式土器に比定できる土器である。

６は浅い突帯を３条施している。胴部の張りが目立ち，外面・内面ともにミガキ調整が施されている。外面にはススが付着しており，雲母も含まれている。

７・８は外面がミガキ調整が施され，内面がナデ調整が施されている。どちらも胎土は良精である。

９は器形が安定しており，外面はミガキ調整が施され，ススが付着している。雲母が多く含まれており，在地的な胎土である。

10は安山岩の磨石である。最大長が５㎝程度と小型で小判状の形態を持つものである。表面から側部にかけて敲打痕がみられ，特に中央部に集中している。裏面には擦痕があり，特に裏面上部にかけて集中して使用された痕跡がみられる。



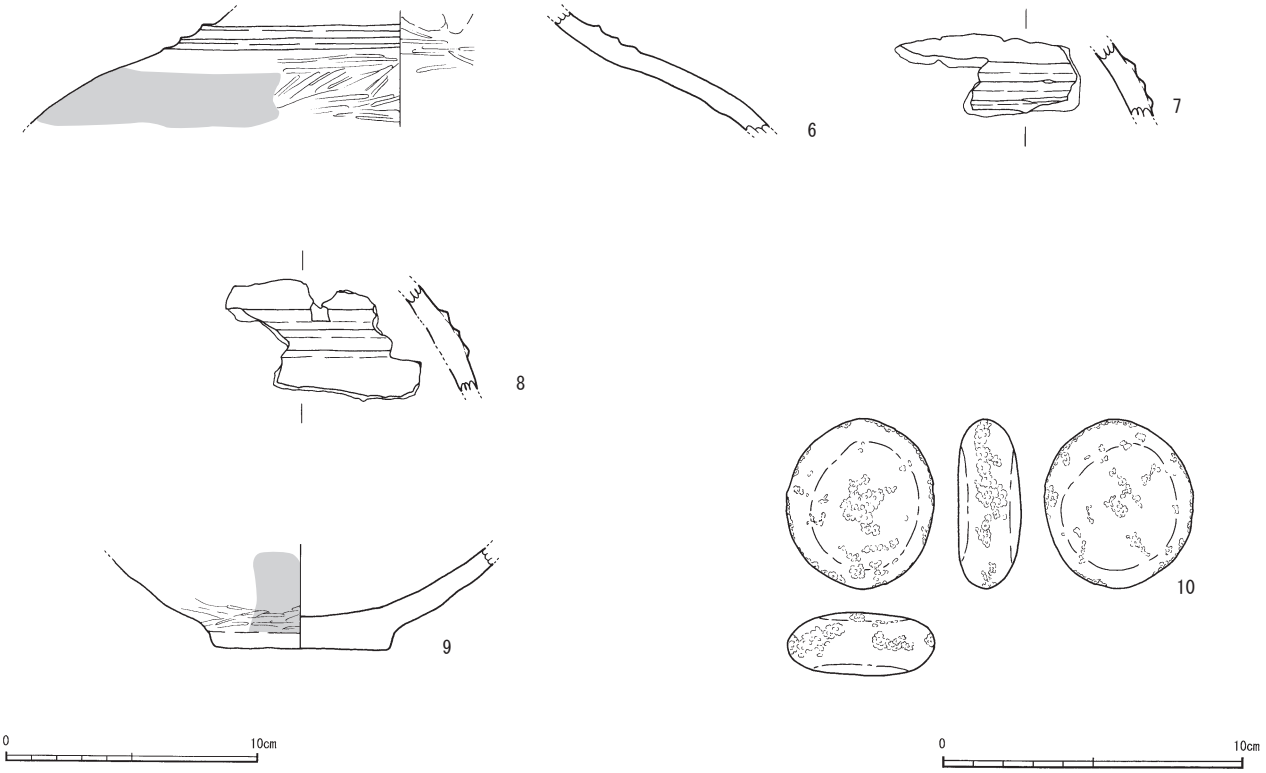
第39図　弥生時代の竪穴住居跡２号

3　遺物

(1)　土器

弥生時代の遺物は，Ⅳａ層を主体とし，Ⅲ層及びⅣｂ層からも出土している。主に甕形土器と壺形土器が出土している。時期は，弥生時代前期末から中期初頭，中期前半のものが出土している。ほとんどが在地で製作されたものであるが，一部に他地域の影響を受けているものもみられる。

本報告書では，器形・口縁部の形態・突帯や刻目等の装飾の違いから甕形土器を大きく３つに分類した。



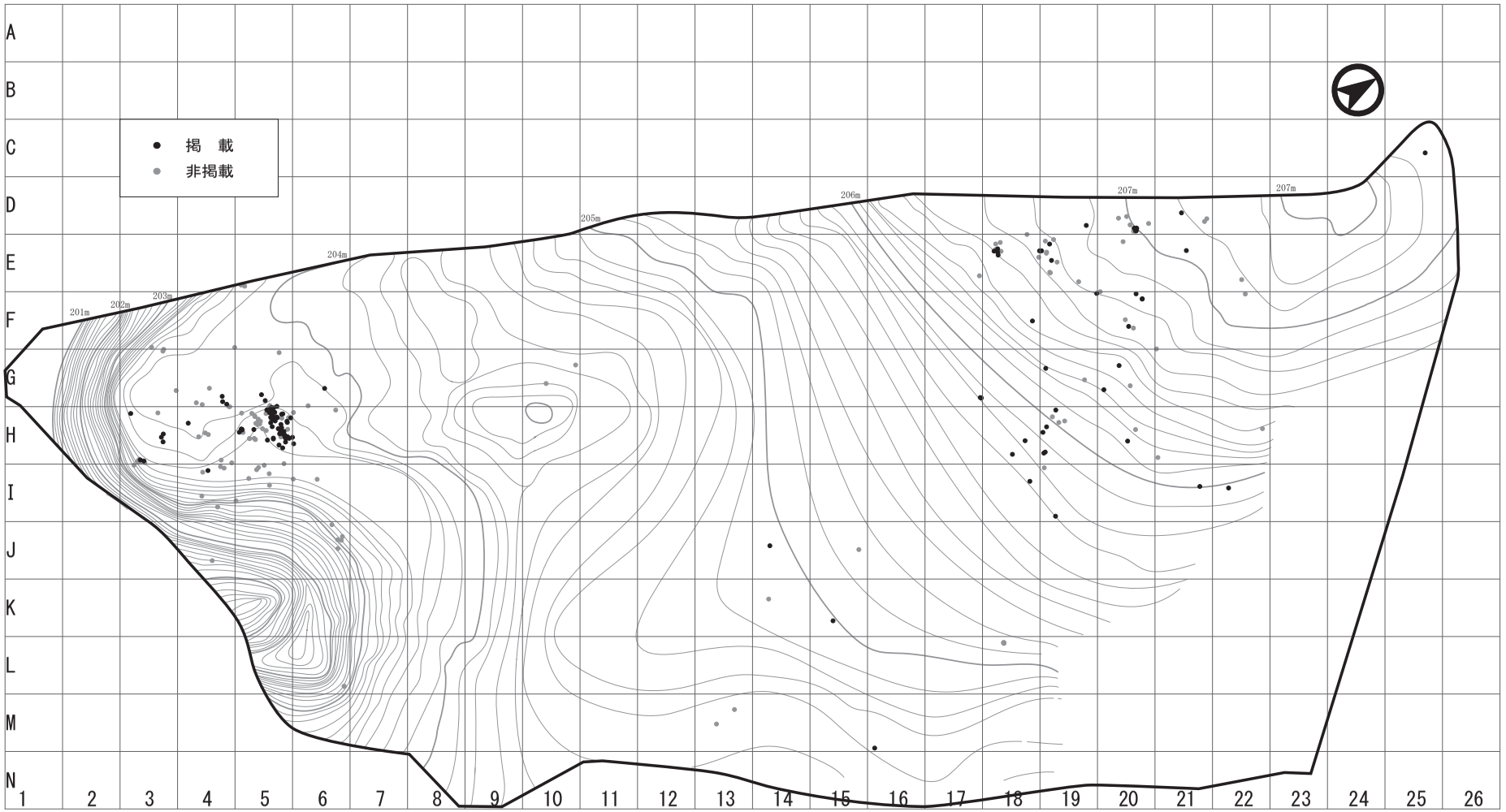
第40図　弥生時代の竪穴住居跡２号内出土遺物

第６表　竪穴住居跡２号内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	口径(cm) 外径	口径(cm) 内径	底径(cm)	器高(cm)	色調 外面	色調 内面	文様・調整 外面	文様・調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	備考
40	6	壺	肩部	－	－	－	－	にぶい赤褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	○			○	スス付着
	7	壺	肩部	－	－	－	－	黒褐	灰黄褐	ミガキ	ナデ	○			○	
	8	壺	肩部	－	－	－	－	黒褐	灰黄褐	ミガキ	ナデ	○			○	
	9	壺	底部	－	－	6.8	－	にぶい橙	褐灰	ナデ	ミガキ･ナデ	○			○	スス付着

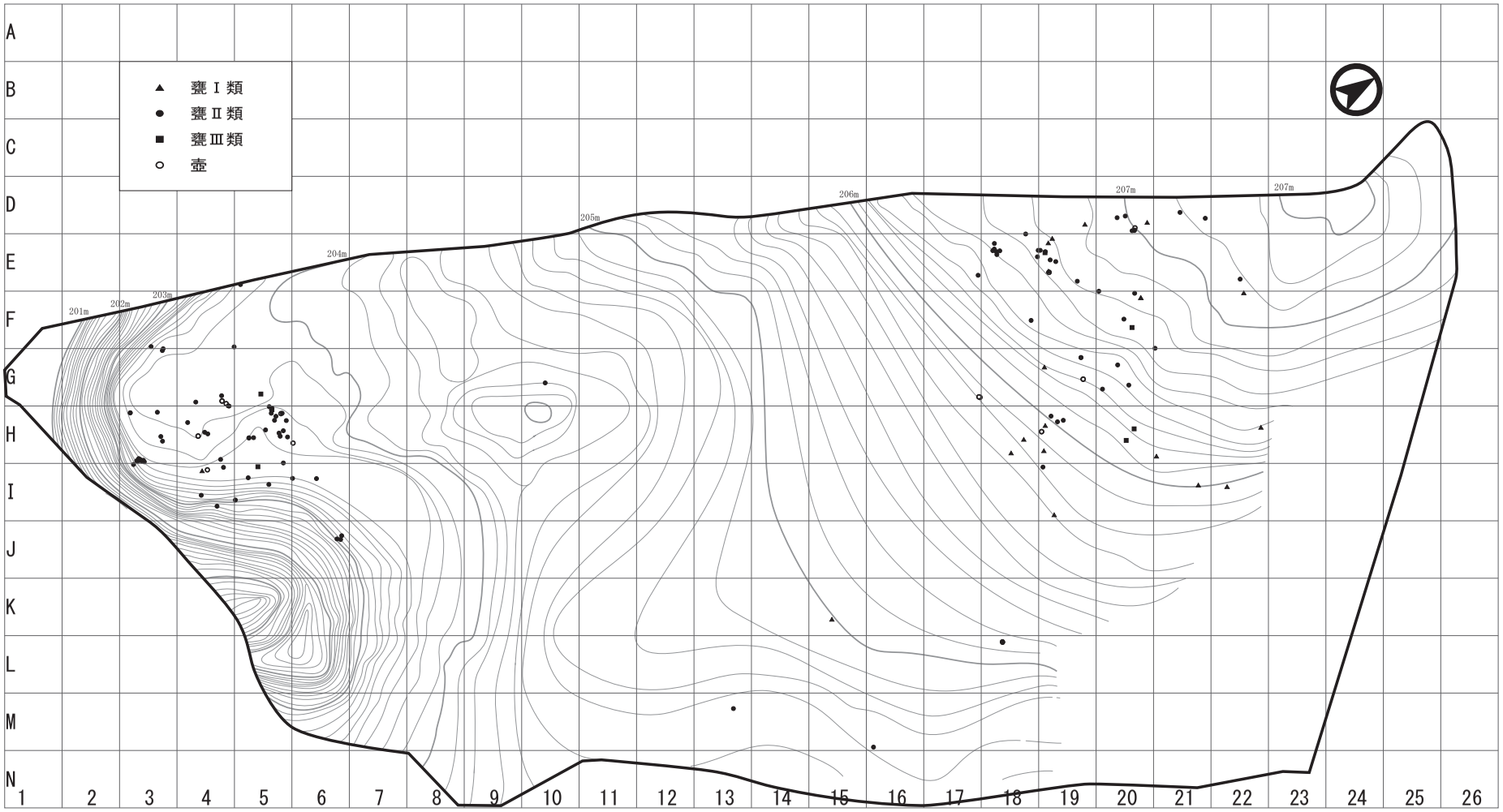
第７表　竪穴住居跡２号内出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	石材	備考
40	10	磨石	M－14	Ⅳｂ	5.6	4.9	2.1	76	一括	安山岩	



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第41図　弥生時代の土器全出土分布図



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第42図　弥生時代の土器出土分布図(掲載分の器種別)

甕形Ⅰ類土器

口縁部や突帯が短く，断面形がやや丸みを帯びた三角形状を呈する土器をⅠ類土器とした。

さらに，口縁部や口唇部及び突帯等に刻目の有無によりⅠａ類とⅠｂ類に分類した。

Ⅰａ類土器（第43図　11～18）

口縁部や突帯が短く，断面形がやや丸みを帯びた三角形状を呈し，口縁部や口唇部及び突帯に刻目が施されている土器をⅠａ類とした。

この特徴から，Ⅰａ類土器は，弥生時代前期の「亀の甲系統」の口縁部を呈する刻目突帯文土器や高橋式土器に比定できる土器である。

11・12は口縁部に刻目を施し，口縁部の接合痕がみられる。口縁部の長さは短い。

11は内面に一部ナデ調整が施されている。12は縦にやや長めの刻目が施され，内面・外面ともに工具による小さなナデ調整が施されている。

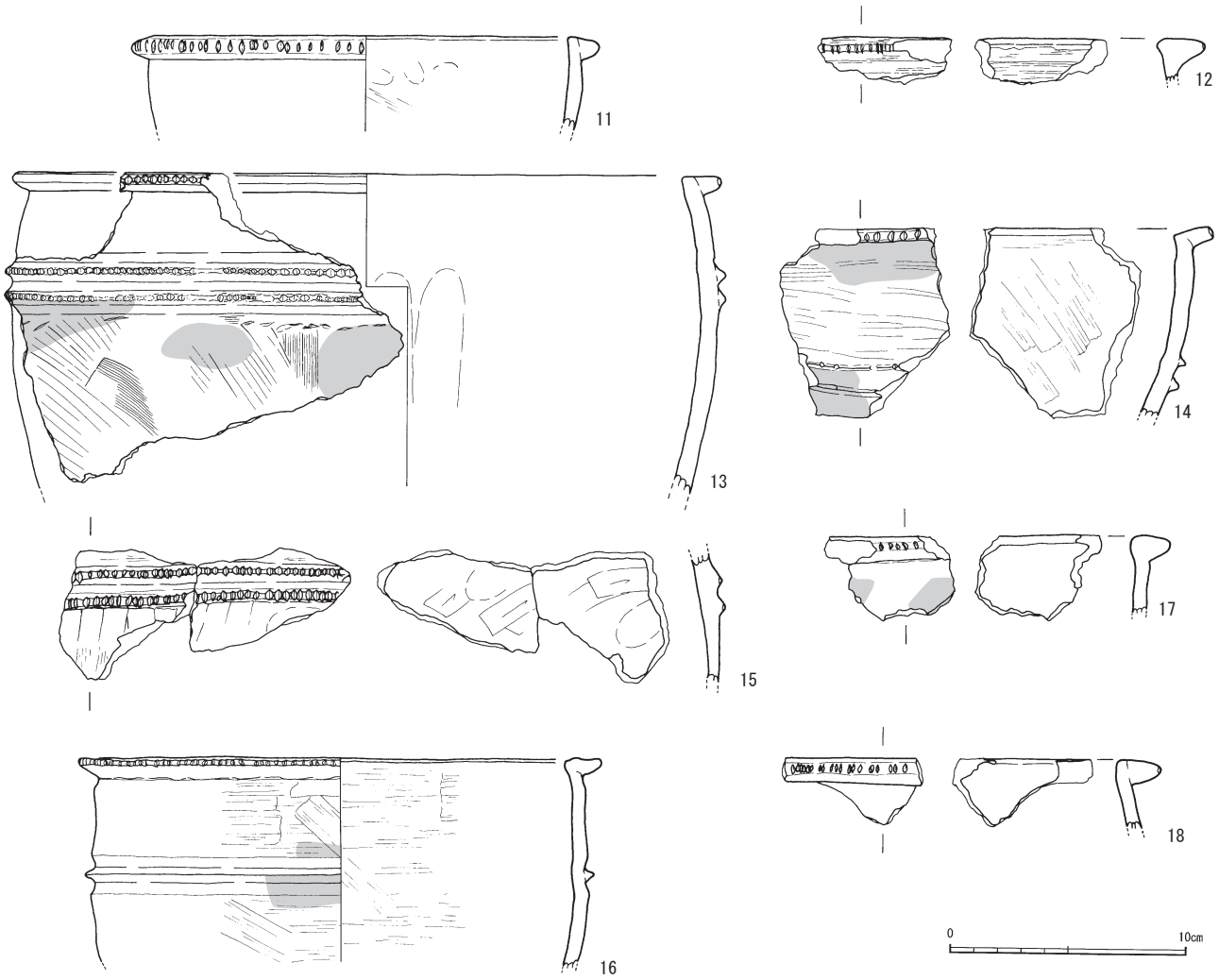
13・14は口縁部断面三角形状を呈し，胴部に２条の突帯を施すものである。口唇部・突帯ともに細かい刻目を施し，胴部外面はハケメ・ナデ調整を施している。内面には指圧痕が残る。13は突帯上面，14は口縁部内面までススが付着している。

15も13と同様に胴部突帯に刻目を施す。若干のゆがみがみられるが，全体の器形としては13と同様の器形を呈すると思われる。

16は口縁部が立ち上がり，口唇部平坦面に浅く刻目が施されている。胴部突帯は貼付け後のナデ調整により，突帯下の凹みが目立つ。外面にハケメ調整を施している。

17の口縁部は小さな膨らみをもち，短いが口唇部平坦面には浅い刻目を施している。口縁部はナデ調整を施している。

18は口縁部が断面三角形状を呈し，口唇部の平坦面に刻目を施している。口縁部は横に延び，やや長い印象を受ける。



第43図　甕形Ⅰａ類土器

Ⅰｂ類土器（第44図　19～23）

口縁部や突帯が短く，断面形がやや丸みを帯びた三角形状を呈し，口縁部や口唇部及び突帯に刻目が施されていない土器をⅠｂ類土器とした。

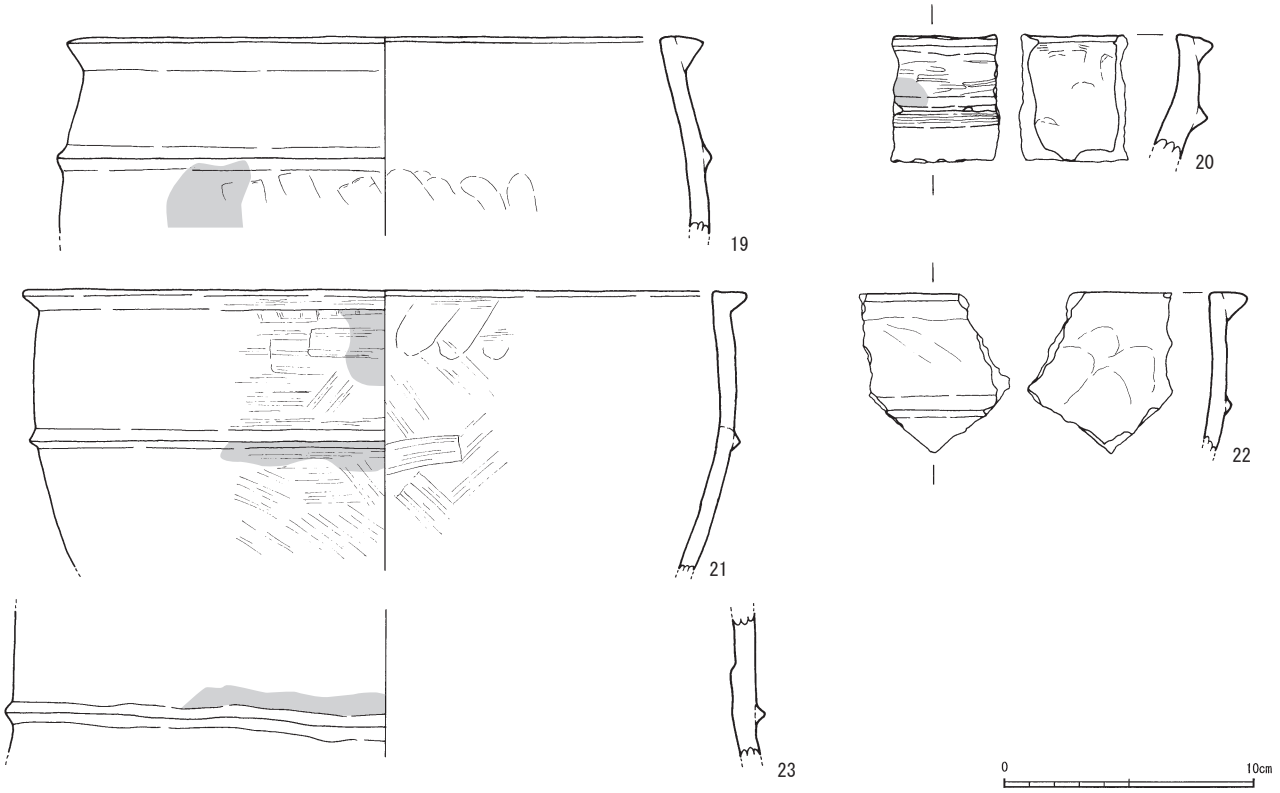
19は雲母を含み，在地性の強い胎土である。口縁部の接合痕が明瞭である。調整はあまり目立たず，特徴がみられないが，口縁部断面の三角形が大きく目立つ傾向がある。突帯の貼付けはやや浅く，内外面ともに指圧痕が残る。

20の口縁部は突帯の厚みと等しく，胴部の器壁の厚みよりも小さい。口縁部下に一部ミガキ調整を施している。

21は突帯付近の粘土帯の輪積みが認められる。輪積みされた箇所にかかるように断面三角形状の突帯が施されている。内外面ともにハケメ調整が施されている。全体の器形における厚みが小さく，断面三角形状の口縁部と突帯の大きさがほぼ等しい。

22は突帯が胴部に施され，口縁部もやや横に延びている。

23は突帯を１条施している胴部片である。突帯は浅くゆるやかな印象をうける。胴部にゆがみがあり，突帯の貼付けも適当である。



第44図　甕形Ⅰｂ類土器

第８表　甕形Ⅰ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	
43	11	口縁部	I-21	Ⅳb	75226	19.6	17	－	にぶい黄褐~黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	○			○	
	12	口縁部	E・F-17・18	表土	－	－	－	－	明黄褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○		○		
	13	口縁部	G-19	Ⅳa	121062	29.8	26.4	－	にぶい黄褐	赤褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○	○			スス付着
	14	口縁部	H-18	Ⅴa	29910	－	－	－	橙	褐~黒褐	ハケメ	ナデ	○			○	スス付着
	15	胴部	K-15	Ⅳa	6409	－	－	－	にぶい黄橙	橙~にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○	
	16	口縁部	H-18	Ⅲa	25492	22	18.8	－	にぶい褐	橙	ハケメ	ナデ	○	○	○	○	スス付着
	17	口縁部	J-19	Ⅲb	2970	－	－	－	黒褐	明褐	ナデ・ミガキ	ナデ	○			○	スス付着
	18	口縁部	E-19	Ⅳb	111831	－	－	－	黄灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ				○	
44	19	口縁部	I-21	Ⅳb	－	25.4	21.8	－	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	○			○	スス付着
	20	口縁部	I-22	Ⅳb	75209	－	－	－	橙	褐灰	ナデ	ナデ・指圧痕	○			○	
	21	口縁部	H-19	Ⅳa	30713他	28.8	26	－	橙	橙	ナデ	ナデ	○				スス付着
	22	口縁部	D-19	Ⅴb	120446	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○			○	
	23	胴部	F-20	Ⅴa	119462他	－	－	－	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○			○	スス付着

甕形Ⅱ類土器

口縁部や口唇部及び突帯の刻目がなくなり，口縁部や突帯の断面形がⅠ類土器と違って明瞭な形状を呈する土器をⅡ類土器とした。

さらに，口縁部形態及び突帯や沈線等の装飾，口唇部に凹みの有無等によりⅡａ類とⅡｂ類に分類した。

Ⅱａ類土器（第45図　24～26）

口縁部が短く，口縁部や突帯の断面形が三角形状を呈し，口唇部平坦面に凹みを施していない土器をⅡａ類とした。

この特徴から，Ⅱａ類土器は，弥生時代中期初頭から中期前半の入来Ⅰ式土器に比定できる土器である。

24は口縁部がやや横に延びている。外面に一部ナデ調整を施しており，細かな雲母を多く含む在地性の強い胎土である。

25・26は口縁部や胴部にゆがみがなく安定しており，丁寧に製作されている。口縁部直下にススが付着しているため，煮炊きに使用された可能性が考えられる。また，26は断面の接合痕や貼付け後のナデ調整がみられる。

Ⅱｂ類土器（第46図～第49図　27～48）

口縁部や突帯の断面形が三角形状や台形状を呈し，口唇部平坦面に凹みをもち，胴部に突帯及び沈線を施す土器をⅡｂ類土器とした。

この特徴から，Ⅱｂ類土器は，弥生時代中期前半の入来Ⅱ式土器に比定できる土器である。

さらに，口縁部や口唇部及び胴部の形状からⅡｂ－１類土器とⅡｂ－２類土器に分類した。

Ⅱｂ－１類土器（第46図　27～36・第47図　37～39）

Ⅱａ類土器と同様，口縁部は短いが，口唇部平坦面に浅い凹みをもち，胴部に張りが弱い土器をⅡｂ－１類土器とした。

27は口縁部が膨らみをもち，丸みを帯びている。口唇部に浅い凹みがみられる。28も同様に口唇部に浅い凹みがみられる。口縁部は横に水平に延びており，外面はナデ調整が施されている。29は口唇部の平坦面に浅い凹みを施している。口縁部の長さは短いが，口縁部上面の膨らみが認められる。

30は口縁部が水平に伸び，口唇部の平坦面に浅い凹みがみられる。口縁部の内面に小さな工具によるハケメ調整が施されている。

31は口縁部断面が台形状を呈している。口唇部の平坦面に浅い凹みを施している。口縁部先端に向けて先細りになっている。32は口縁部断面が台形状を呈し，口唇部の平坦面に浅い凹みがみられる。胴部に３条の沈線が施されている。外面はススが付着しており，胴部沈線下までハケメ調整が施されている。内面は横位のハケメ調整，口縁部下の指圧痕が残る。

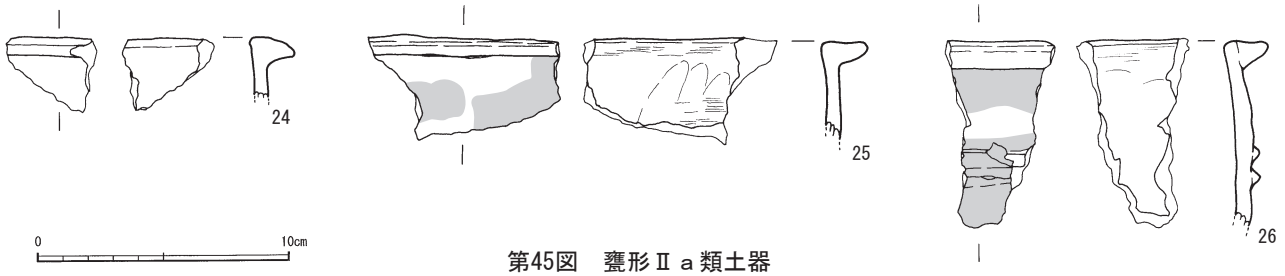
33は口縁部下に断面三角形状の突帯が３条施されている。口縁部には明瞭な接合痕がみられる。胴部外面は丁寧な縦位のミガキ調整が施されており，突帯付近は横位のナデ調整がみられる。内面は工具による横位のハケメ調整と指圧痕が残る。器形は安定している。

34は胴部に突帯を３条施しており，内面は丁寧な横位のハケメ調整を施している。35も口縁部先端が先細りになっている。

36は口唇部上面の膨らみが目立ち，口縁部や突帯の接合痕が明瞭である。胴部に突帯を３条施し，外面の口縁部下や胴部のハケメ調整がみられる。内面はナデ調整や指圧痕が残る。口縁部下から胴部にかけてススが付着している。口唇部の凹みや突帯の凹凸が同類の他の土器よりは明瞭であるのが特徴的である。

37は厚みがある口縁部が水平に伸び，胴部上面に突帯を施している。内面に工具による横位のハケメ調整を施している。

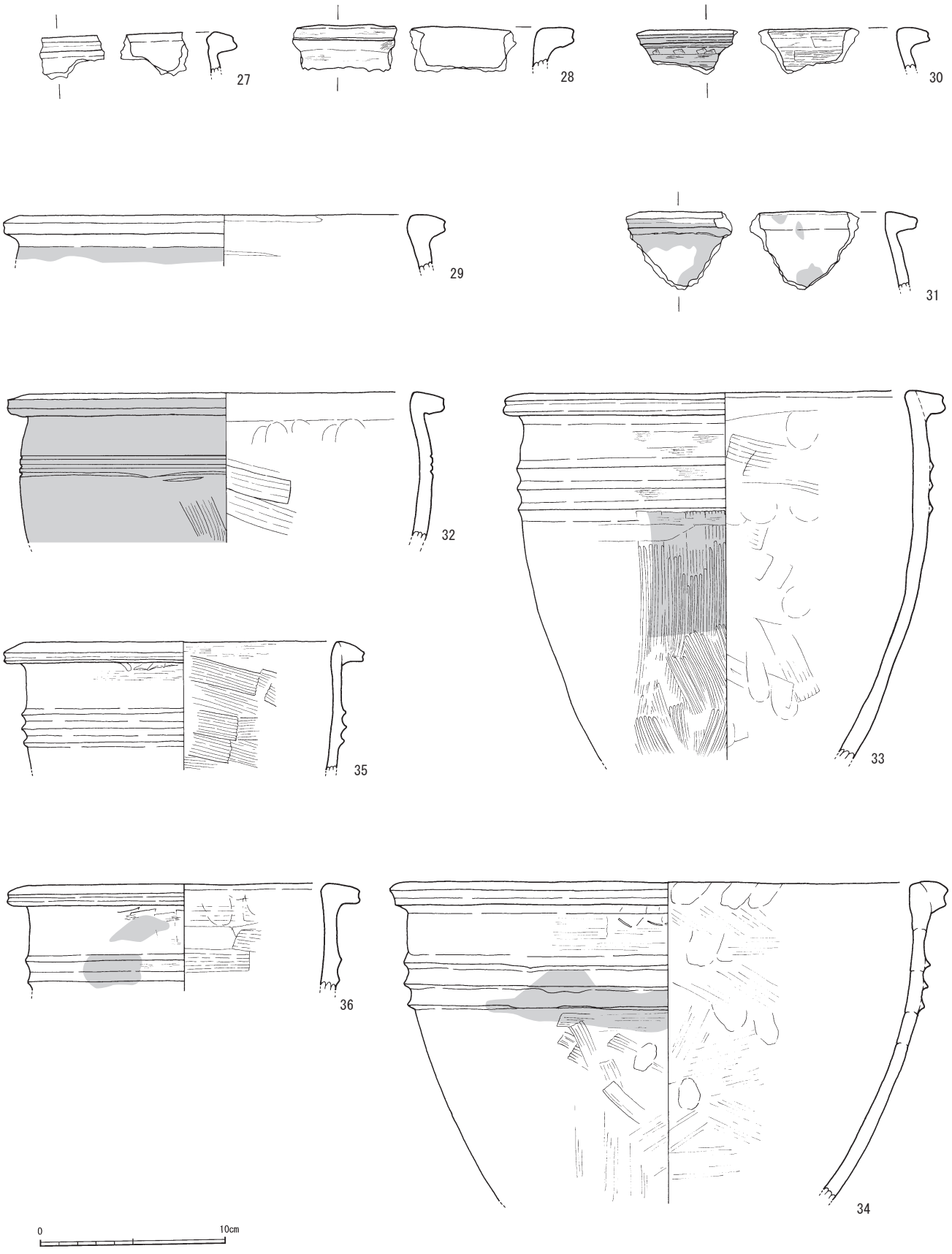
38も口縁部上面が膨らみ，口縁部が水平にのびる。胎土・技法ともに在地性が強い。34 ～ 38は突帯が薄く貼付けが明瞭でないことからⅡｂ類に含めることにした。また，39は38と同一個体と思われる胴部片である。



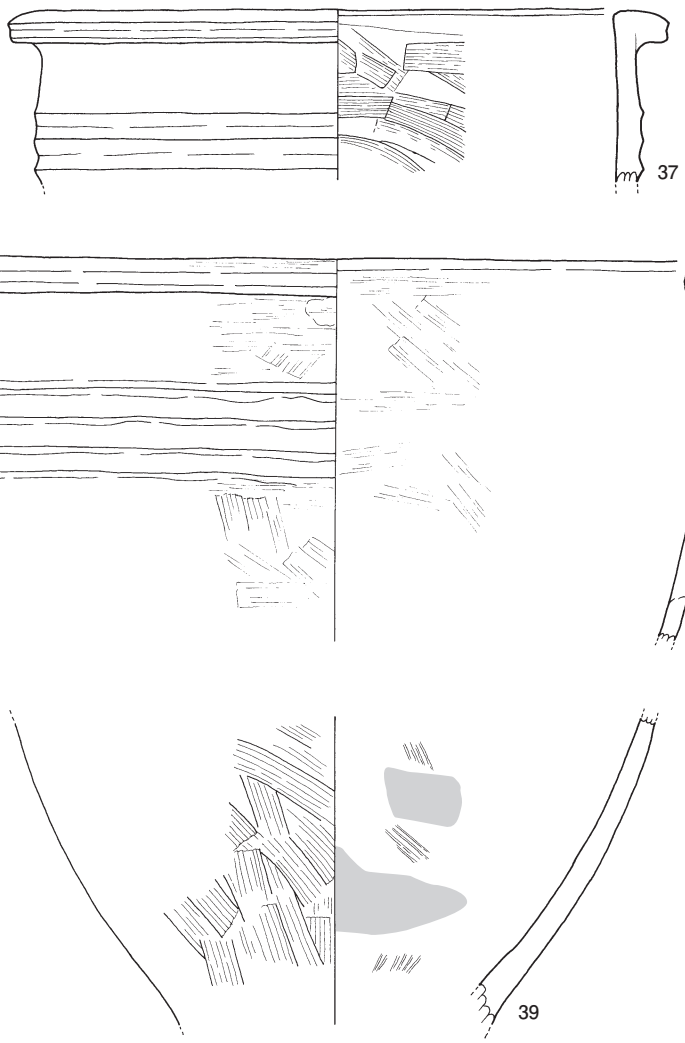
第45図　甕形Ⅱａ類土器

第９表　甕形Ⅱａ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	
45	24	口縁部	G-20	Ⅳａ	113080	－	－	－	褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○			○	
	25	口縁部	E-18	横転	－	－	－	－	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○	スス付着
	26	口縁部	E-18	Ⅳｂ	110972	－	－	－	黒褐	暗褐	ハケメ	ナデ	○			○	スス付着



第46図　甕形Ⅱｂ－１類土器１



第47図　甕形Ⅱｂ－１類土器２

0　10cm

第10表　甕形Ⅱｂ－１類土器観察表

挿図番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	
46	27	口縁部	H-3	Ⅳa	142398	－	－	－	明褐	褐～黒褐	ナデ	ナデ	○			○	
	28	口縁部	G-4	Ⅳa	87497	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ				○	
	29	口縁部	H-4	Ⅳa	87528	38	20	－	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ				○	スス付着
	30	口縁部	E-18	Ⅳb	110968	－	－	－	黒	橙	ナデ	ナデ	○		○	○	スス付着
	31	口縁部	E-19	Ⅳa	113511	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○				丹塗
	32	口縁部	G-20	Ⅳa	112991	23.6	20	－	黒	明赤褐	ハケメ	ハケメ・ナデ	○			○	スス付着
	33	口縁～胴部	H-3	Ⅳa	87525他	23.5	19.4	－	赤褐	明赤褐	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ナデ				○	スス付着
	34	口縁～胴部	H-5	Ⅳa	142200他	30	26	－	橙	明赤褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	スス付着
	35	口縁部	E-18	Ⅳb	—	19.4	16	－	黒褐	橙	ハケメ	ハケメ	○	○		○	
	36	口縁部	H-3	Ⅳ	143866	19	14.8	－	赤褐	明赤褐	ナデ	ハケメ・ナデ	○		○	○	スス付着
47	37	口縁部	H-3	Ⅳ	143870	26.2	21.8	－	明赤褐	橙	ナデ	ハケメ・ナデ	○		○	○	
	38	口縁部	H-5	Ⅳa	142123他	32	27.4	－	明赤褐	明赤褐	ハケメ	ハケメ・ナデ	○			○	
	39	胴部	H-5	Ⅳa	142066他	－	－	－	明赤褐	橙	ハケメ	ハケメ・ナデ				○	スス付着

Ⅱｂ－２類土器（第48図　40～42・第49図　43～48）

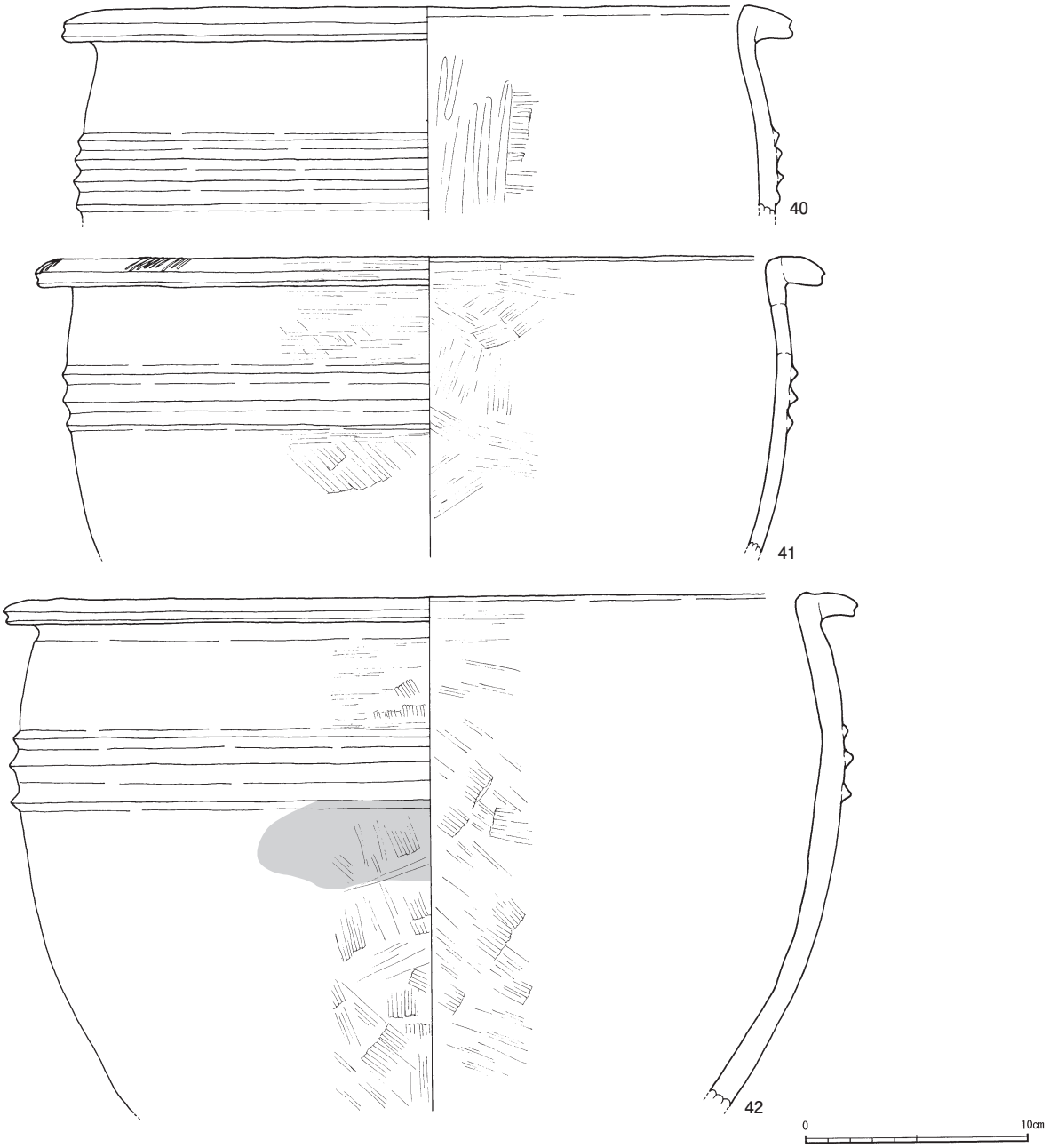
Ⅱｂ－１類土器と比べて，口縁部が長く逆Ｌ字に近い形状を呈し，口唇部平坦面に明瞭な凹みをもち，胴部の張りがみられる土器をⅡｂ－２類土器とした。

40は口縁部がやや下がり，胴部に突帯を４条施している。内面は一部に横位のハケメ調整が施された後，縦位のミガキが施されている。胎土には雲母が多く含まれている。

41は口縁部がやや長く垂れ下がり，胴部突帯も断面三角形状を呈している。また，口縁部上面に横位の浅い沈線が施されており，間隔を開けて４か所に施されている。一定の間隔で装飾されているとすれば，６か所程施されていると想定される。この類例は金峰町の上水流遺跡でも確認されている。外来系の影響があると考えられる。

42は大型の甕である。口縁部先端がやや垂れ下がり，口唇部の凹みが明瞭である。口縁部下の胴部の張りが目立ち，器壁の厚みも大きい。器形全体に重みがあり，特徴的である。胴部最大径に突帯を３条施している。外面のハケメ調整や内面のハケメ調整がみられ，雲母を多く含む在地的な胎土である。

43は逆Ｌ字状に近い口縁を呈し，胴部に突帯を３条施している。口縁部がやや長く，頸部に縦位の浅い沈線が施されている点が注目できる。内面に一部ハケメ調整がみられる。口縁部がやや下方に垂れ下がることや頸部の



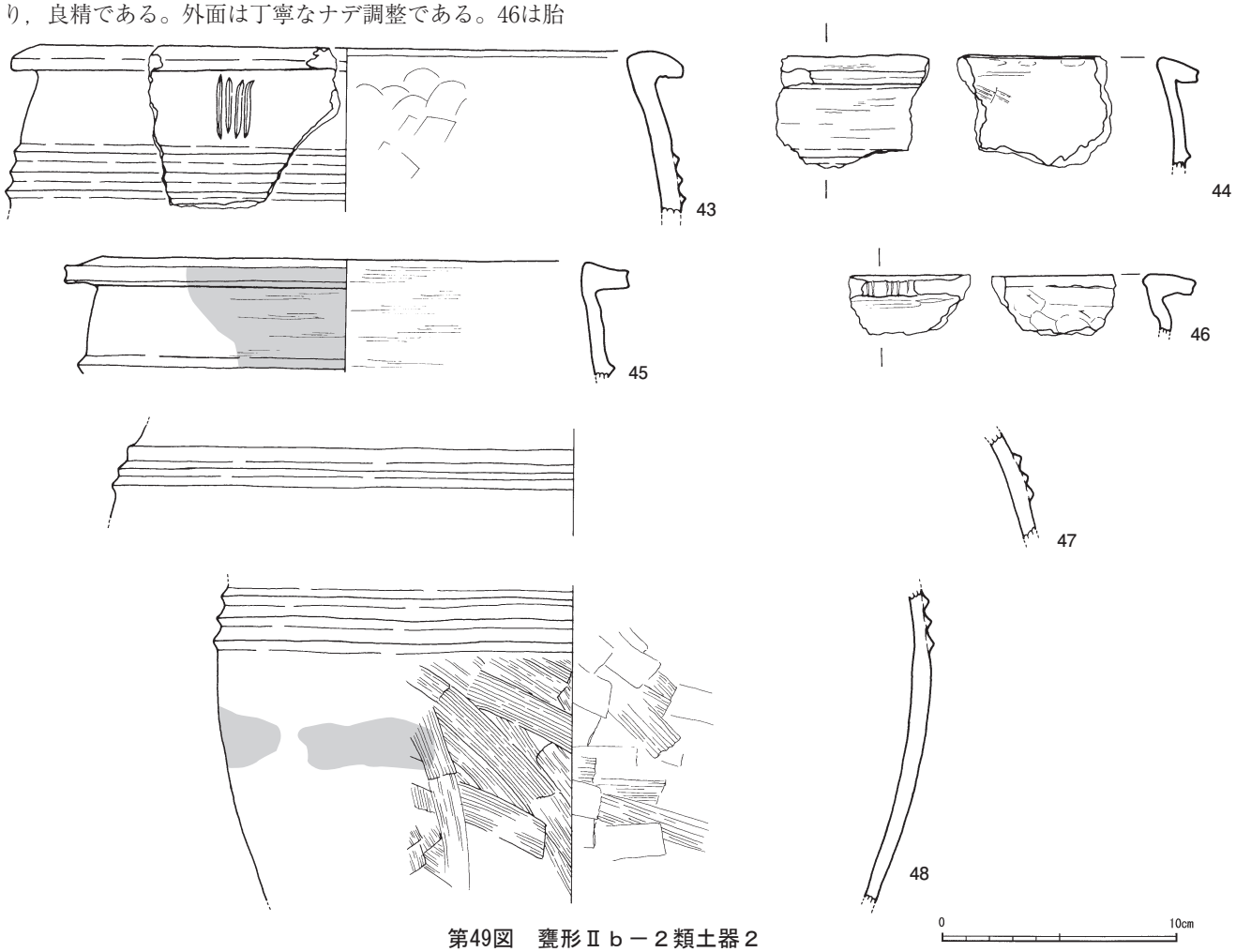
第48図　甕形Ⅱｂ－２類土器１

沈線から，外来系の影響を受けているものと考えられるが，胎土や技法は在地のものである。須玖式の丹塗甕にみられるような頸部に暗文を施すものを模倣したものかと思われる。

44は器壁の厚みが小さく，断面三角状の突帯も小さい。口唇部の凹みはそれほど目立たないが，口縁部の垂れ下がりが顕著である。

45・46は口縁部がやや細長い。いわゆる鋤先状に近い口縁を呈している。45の胎土は細かい雲母を含んでおり，良精である。外面は丁寧なナデ調整である。46は胎土に赤みがあり，口唇部に刻目が施されるのが特徴的である。口縁部形態から外来系の影響を受けているとおもわれる。47は甕の胴部片である。３条の断面三角突帯は胴部最大径より上位に施されている。

48は器壁が非常に薄く，良精な胎土である。胴部外面には明瞭なハケメ調整が目立ち，内面もハケメ調整が施されている。胴部突帯も丁寧に貼付けされており，器形も安定している。外面・内面ともにススが付着しているため，火熱を受けた可能性がある。



第49図　甕形Ⅱｂ－２類土器２

第11表　甕形Ⅱｂ－２類土器観察表

挿図番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径(cm) 外径	口径(cm) 内径	底径(cm)	色調 外面	色調 内面	文様・調整 外面	文様・調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	備考
48	40	口縁部	D-21	Ⅳb	111170	32.6	28.4	－	明赤褐	明赤褐	ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	
	41	口縁部	H-5	Ⅳa	142160他	35.4	30	－	明褐	明赤褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	
	42	口縁～胴部	D-20	Ⅳa	113556他	38.4	33	－	橙	黄褐～にぶい黄褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	ス ス付着
49	43	口縁部	E-19	Ⅳa	113506	28.5	23.8	－	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○			○	
	44	口縁部	E-19	Ⅳb	115524	－	－	－	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○			○	
	45	口縁部	E-18	Ⅳb	110330他	24	20	－	黒	にぶい黄褐	ハケメ	ナデ	○			○	ス ス付着
	46	口縁部	F-18	Ⅳb	110979	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ	○				
	47	胴部	M-16	Ⅲb	76603	－	－	－	赤褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○				
	48	胴部	G-19・20	Ⅴa	119483	－	－	－	にぶい赤褐	明赤褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	ス ス付着

甕形Ⅲ類土器（第50図　49～54）

出土数が少なく，細分できなかった甕形土器をⅢ類土器とした。

49は口縁部先端が丸みを帯び，胴部文様をもたない土器である。口縁部下に粗いハケメ調整を施し，胴部に若干ゆがみが生じている。内面の指圧痕も残る。口縁部に少し立ち上がりがみられる。

50は壺の底部かと思われたが，把手から外側に大きく外反していることや内側の反り具合から甕形土器の蓋と判断した。外面は一部ミガキ調整がみられる。外面・内面ともにススが付着している。器形は鍔の部分がさらに横にのびていくものと想定される。蓋と確認できたものは１点のみである。

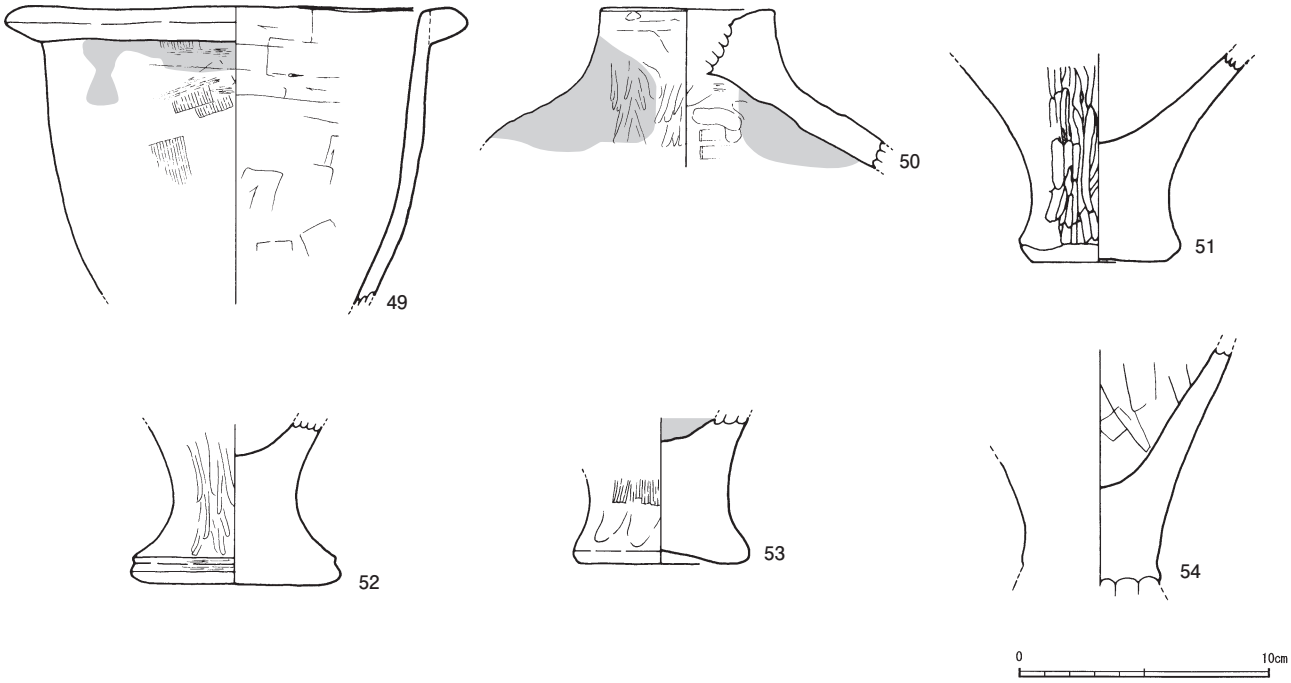
51 ～ 54は甕形土器の底部である。また，51・52は入来式土器の様相が窺えるが明瞭な根拠がないため，ここではⅢ類として掲載した。

51の底部の器形は安定しており，胴部は大きく外反するものである。外面は縦方向の丁寧なミガキ調整がみられる。胎土も在地的な様相を示す。

52は底部に明瞭な凹みをもち，外面はミガキ調整を施している。底部下から胴部にかかるくびれが目立つ。

53は上げ底ぎみで，外面にハケメ調整を施している。

54は器壁の厚みが大きく，底部から胴部まで直線的に外反する。内面は工具によるナデ調整を施している。



第50図　甕形Ⅲ類土器

第12表　甕形Ⅲ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径 (cm) 外径	口径 (cm) 内径	底径 (cm)	色調 外面	色調 内面	文様・調整 外面	文様・調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	備考
50	49	口縁～胴部	H-5	Ⅳ a	142061他	18.4	14.8	－	橙	明赤褐	ナデ・ハケメ	ナデ	○			○	ススト付着
	50	蓋	E-19	オウテン	－	6.8	－	－	にぶい褐	橙	ミガキ・ナデ	ナデ・指圧痕	○				ススト付着
	51	底部	H-20	Ⅳ a	108745他	－	－	5.4	赤褐	黒褐	ハケメ	ナデ	○			○	
	52	底部	J-5	Ⅲ	一括	－	－	6.8	明赤褐	黒褐	ハケメ・ミガキ	ナデ	○				
	53	底部	F・G-10	－	－	－	－	6.3	にぶい褐	黒	ナデ	ナデ・指圧痕	○			○	ススト付着
	54	底部	G-5	Ⅳ a	87439	－	－	－	にぶい黄褐	暗褐	ナデ	ナデ	○			○	

壺形土器（第51図　55～58・第52図　59～61）

壺形土器は，弥生時代前期から中期前半と弥生時代後期と思われるものが７点出土している。

55・56は弥生時代前期の壺である。55は壺の肩部である。２条の沈線が施されている。外面にはミガキ調整がみられる。

56は口縁部が欠損しているが，高さ26cm，胴部最大径23.4cmを呈する。肩部に２条の沈線を施し，胴部最大径より上に同様の浅い沈線を施している。胴部外面は工具によるナデ調整の後，横位のミガキ調整を施している。調整は器面全面に施されており，器形は安定している。ススが付着しており，火熱を受けた可能性がある。

57 ～ 60は口縁部断面が台形状を呈し，口唇部平坦面に凹みをもつものである。これらは弥生時代中期前半のものである。

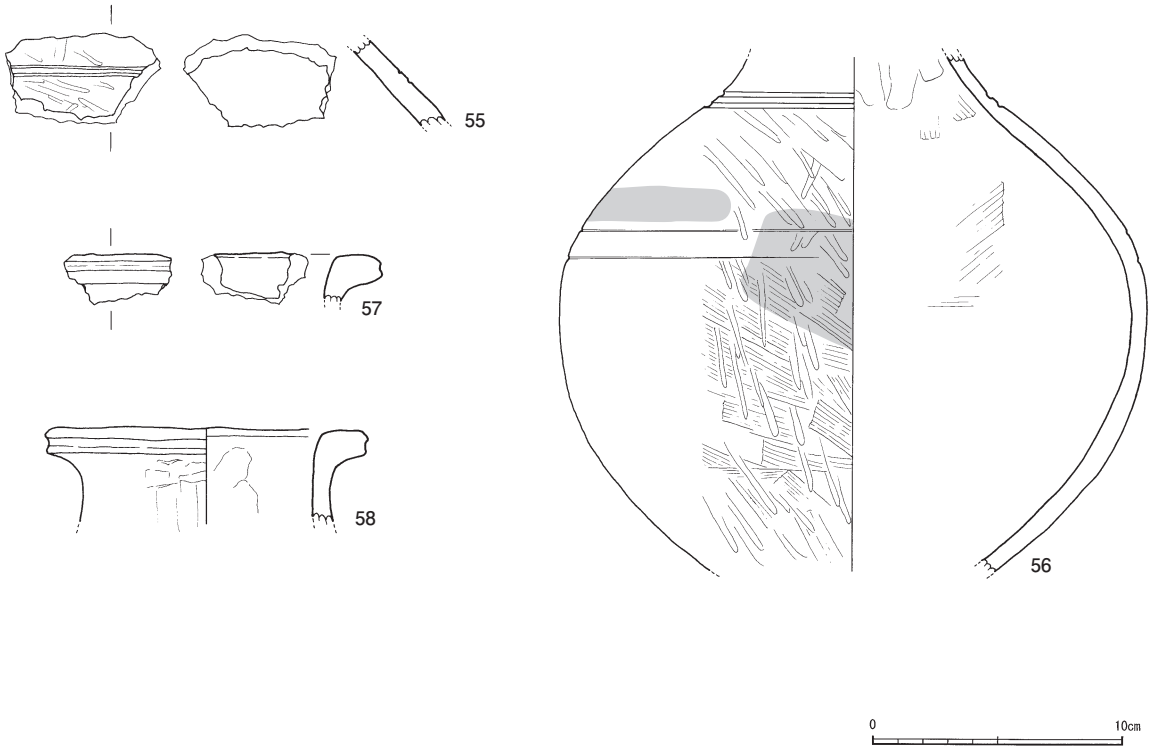
57・58は口縁部が台形状を呈し，口唇部の平坦面に凹みがみられる。調整が粗いが，在地的な胎土である。

59・60は入来Ⅱ式の壺に比定できるものである。59の口縁部は垂れ下がり，口唇部に凹みがみられる。外面頸部に縦位のハケメ調整が施されている。雲母が含まれており，在地性の強い胎土である。

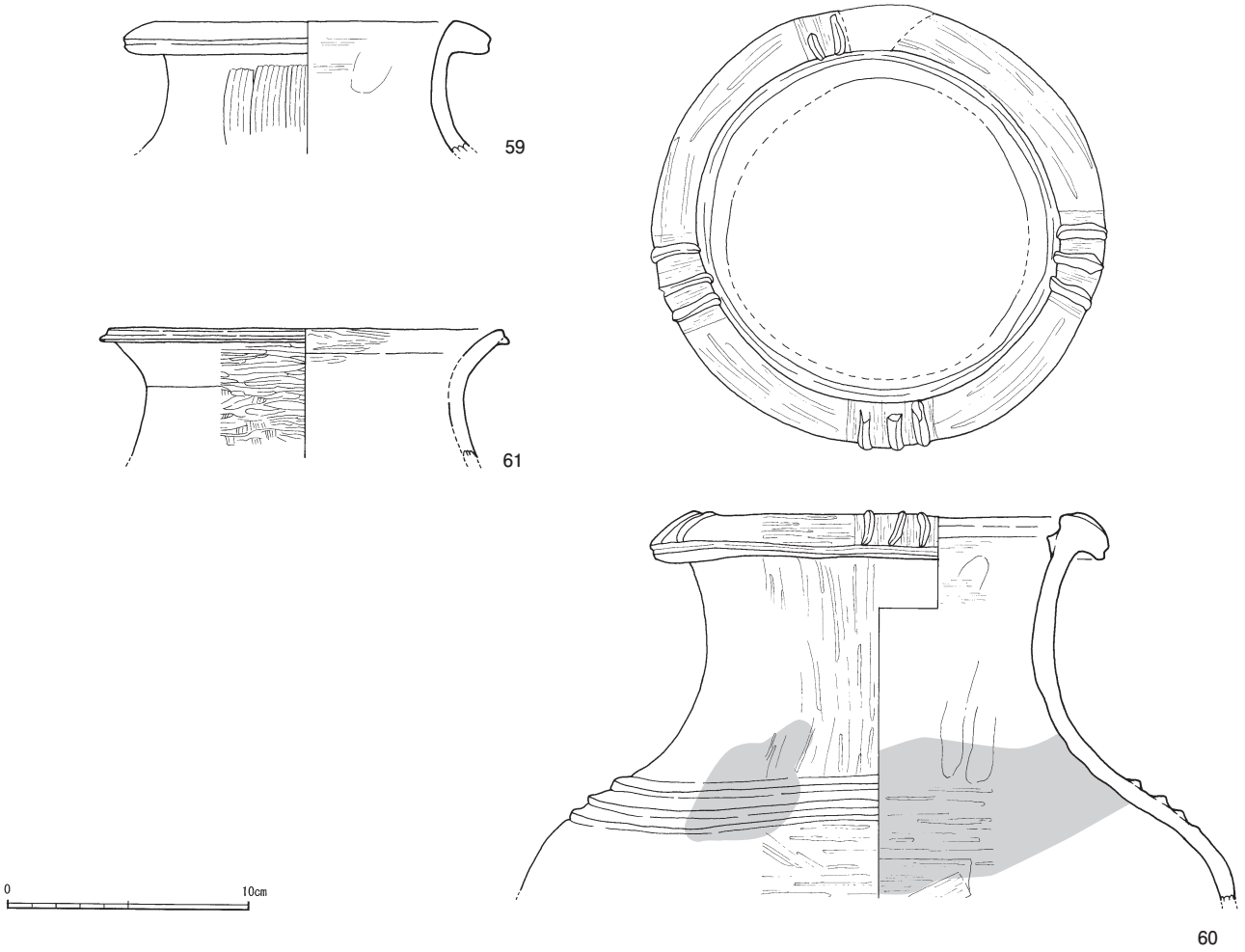
60は大型の壺である。口縁部外径19.4cm，口縁部内径14.2cm，胴部最大径30cmを呈する。肩部に断面三角形状の突帯を３条施している。口縁部上面には，粘土帯の貼付けがみられる。この装飾は，間隔をおいて３条のものが４か所に施されている。装飾間には横位のミガキ調整が施されている。頸部は縦位のミガキ調整，突帯下は横位のミガキ調整が施されている。

また，口縁部内面には断面三角形状の突帯を１条施し，胴部内面も工具によるナデ調整後ミガキ調整が施されている。器形が安定しており，丁寧に製作されている。外面・内面ともに突帯上までススが付着しており，煮炊に使用された可能性が考えられる。鹿屋市の西ノ丸遺跡でも類例があり，同様の装飾を施す壺が出土している。

61の口縁部が大きく外反し，先端に細い粘土帯を貼付け，ナデ消し調整されている。外面・内面ともに横位のミガキ調整が施され，器形は安定している。弥生時代後期のものかと思われる。



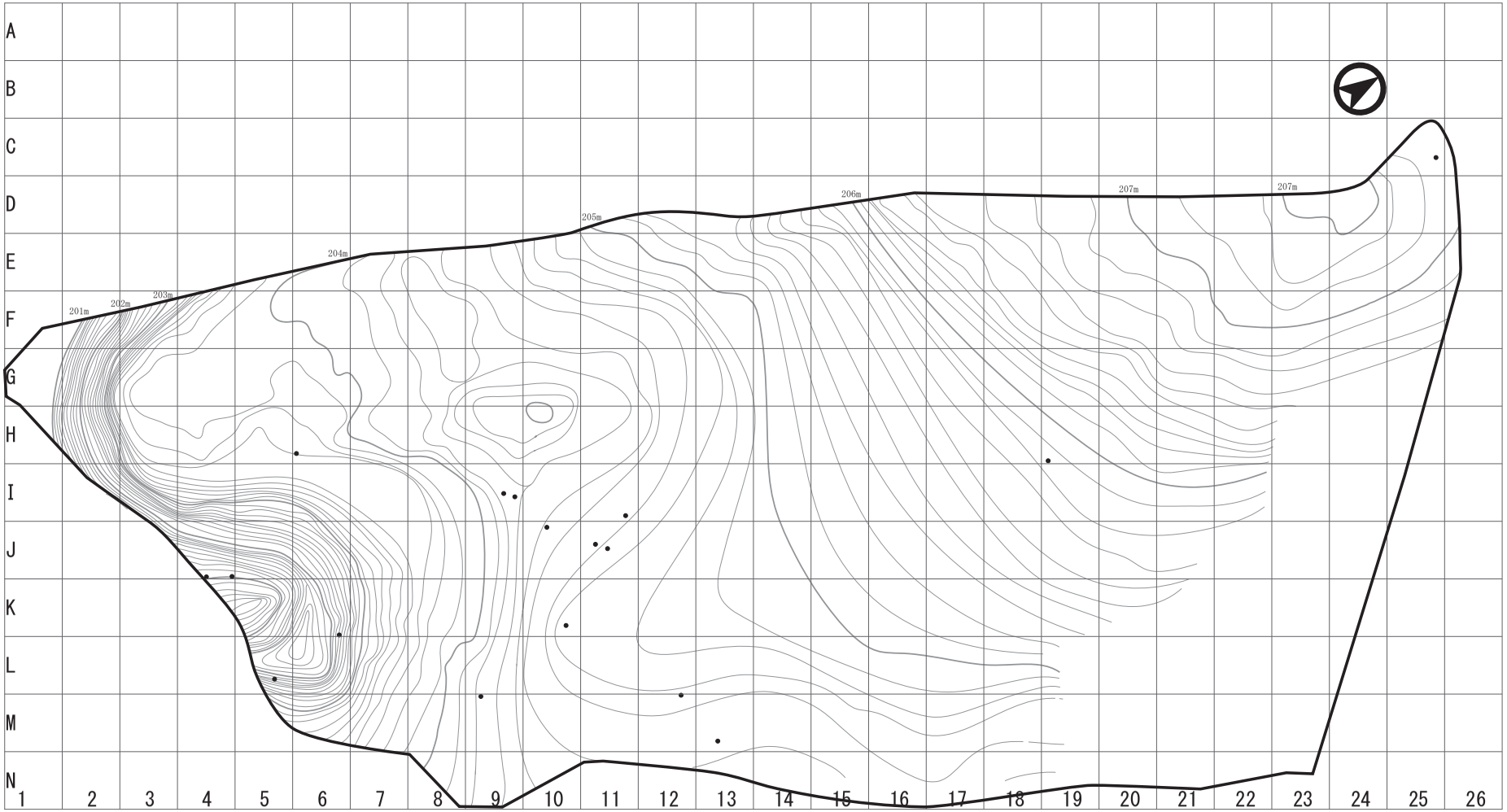
第51図　壺形土器１



第52図　壺形土器２

第13表　壺形土器観察表

挿図番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	
51	55	肩部	G-4	Ⅳa	87499	−	−	−	赤褐	明赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ	○			○	
	56	肩～胴部	H-19	Ⅳa	3251	−	−	−	明褐～にぶい赤褐	黄褐	ミガキ	ナデ・指圧痕	○				スス付着
	57	口縁部	I-4	Ⅳa	143835	−	−	−	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○		○	
	58	口縁部	G-4	Ⅳa	87500	12.8	9	−	にぶい褐	明赤褐～にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○			○	
52	59	口縁部	D-20	Ⅳa	113548	15.2	11.2	−	橙～褐	にぶい褐～にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	○			○	
	60	口縁～胴部	H-5	Ⅳa	142128他	19.4	14.2	−	明赤褐～褐	明赤褐～褐	ハケメ・ミガキ	ナデ・ミガキ	○		○	○	スス付着
	61	口縁部	G-17・18	Ⅳa	28426他	16.8	15.8	−	暗褐	褐	ミガキ	ナデ	○				



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第53図　Ⅲ・Ⅳ層出土石器分布図

(2)　Ⅲ・Ⅳ層の石器（第54図～第58図）

Ⅲ・Ⅳ層の出土の石器は一部の磨敲石を除き，供伴する土器も少なく時期判断が難しかったため一括して報告する。

打製石鏃（第54図　62）

62は安山岩製の打製石鏃である。二等辺三角形状を呈し，基部に浅い抉りが入る。脚部に比べ先端部に細かい加工が見られる。

磨製石鏃（第54図　63）

63は頁岩製の磨製石鏃である。上部を欠損しているが，二等辺三角形状である。器面には長軸方向の擦痕が溝状に凹み，その両側に横軸方向へ擦痕が入る。わずかではあるが，刃部に２㎜程度の成形痕が見られる。

打製石斧（第54図　64～67）

64と65はともに頁岩製の打製石斧である。刃部に敲打剥離加工がされており，さらに先端部にかけて摩耗のような擦痕が見られる。それらに対し，66・67には擦痕は見られない。

66は安山岩製であり，表面に自然面を残している。

67は頁岩製で，表裏の周囲に活発な剥離が見られる。遺物の状態からこれら2点はもともとの石斧からの破損，もしくは再加工ではないかと考えられる。

磨製石斧（第54図　68・69）

68と69は頁岩製の磨製石斧である。摩耗の痕に剥離が見られたり，稜線が滑らかになるように擦痕が残っている。これにより擦りによる加工と剥離を繰り返しながら形成し，使用したと考えられる。

磨石・敲石・凹石（第55図・第56図　70～83）

16点中14点を図化した。この14点を形態によってⅠ～Ⅲ類に分けて掲載した。

Ⅰ類…直径５センチ未満の小型のもので，５点を図化した。それぞれ小型で有りながら一部に敲打の痕も見られる為，使用は多岐にわたったのではないかと思われる。

70と71は共に安山岩の磨石である。共に楕円形状で一部にそれぞれ敲打の痕が見られる。

72は安山岩製である。楕円形を為しているが上部がツマミ状になっており集中的な使用が伺える。

73と74も同様に安山岩製であり，裏面にかけて集中的な敲打の痕が見られる事から磨敲石としての使用が主として考えられる。

Ⅱ類…直径５㎝以上の玉状・楕円形状をなすもので，６点を図化した。

75は安山岩の磨敲石で大部分を欠損している。表面中心部に集中的な敲打痕が見られ，側面部に滑らかな擦痕が残る。

76は縦長の楕円形で表裏に擦痕が残る。上下に敲打と剥離が見られる。

77と78は楕円形状を呈し，目立った敲打の痕は見られない。77に対し，78は擦痕は見られないが，上下側面部に敲打痕が残る。

79は安山岩製の凹石である。表裏中心部と側面に敲打が見られ，裏面ススの付着や若干の赤化などの被熱の痕が見られる。

80は砂岩製で全体に赤く，被熱痕が見られる。表裏面に擦痕が見られ，特に右側面にかけて活発な使用の痕が見られる。

Ⅲ類…形状が石鹸型をなすもので，３点を図化した。

81は安山岩製で側面部に使用の際についたと思われる摩耗痕が見られる。中央部から下部にかけて斜めに盛り上がる一方で裏面は平坦である。

82は安山岩製で正方形に近い形状を為し，81と同様に側面部に使用の際についたと思われる摩耗痕が周囲の側面部に見られる。また，中心部に小さな敲打痕と表面に擦痕が見られる。

83も安山岩製で前述の二つのように側面に使用の際にできた摩耗の痕が見られる。表裏に擦痕が見られ，下部一帯に集中的な敲打の痕が見られる。

砥石（第56図・第57図　84～88）

７点中５点を図化した。

84および85は穿孔が見られる砥石であり，ひもを通して携帯していたと考えられる。84は砂岩製である。方柱状を為し表裏だけでなく側縁部にかけて磨面が形成されている。

85は泥岩製の板状砥石である。上部が欠損しているが穿孔の加工の痕が見られ加工途中で欠損した物と思われる。表面に横方向，裏面に縦方向の荒い擦痕が見られる。

86 ～ 88は砂岩製の砥石である。

86は表面に砥石特有の光沢の磨面が見られ，端部が丸みを帯びている。欠損により全体像が不明であり，石皿に使用された可能性も否定できない。

87は全体が赤化し，被熱痕が見られる。表面に光沢をもつ擦痕を持ち裏面・側面部にも擦痕が見られる。

88は比較的大型で扁平な形状に多面にかけて磨面が展開される。端部に元の大きさが残り，中央付近は極端な差が出るほど使用されている。

石皿（第57図・第58図　89～92）

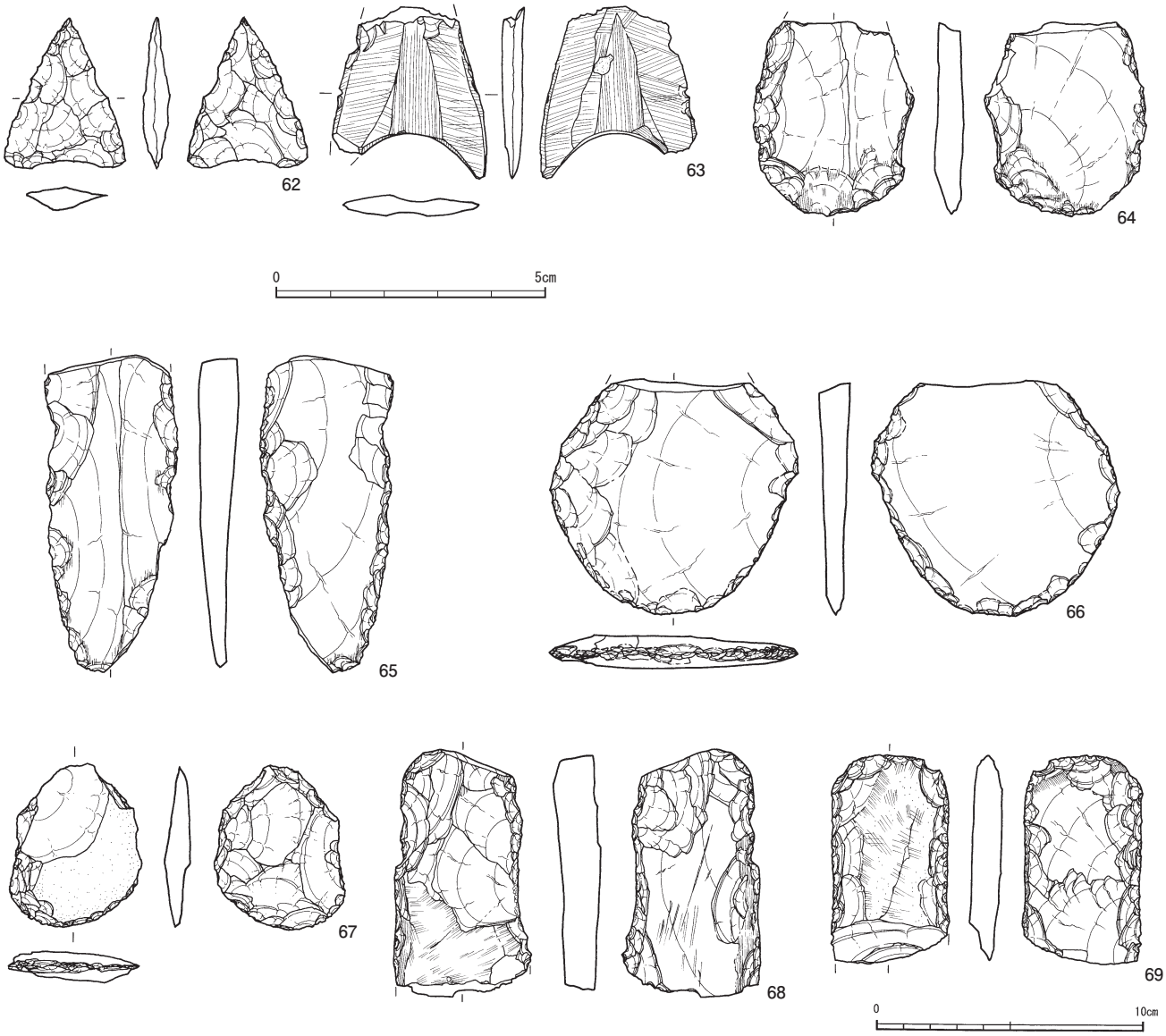
５点中，４点を図化した。

89も同じく安山岩製である。大部分を欠損しているが，表面は平坦で滑らかである。また，一部側面部に光沢を持つ擦痕が見られることから砥石として使われていた可能性も考えられる。

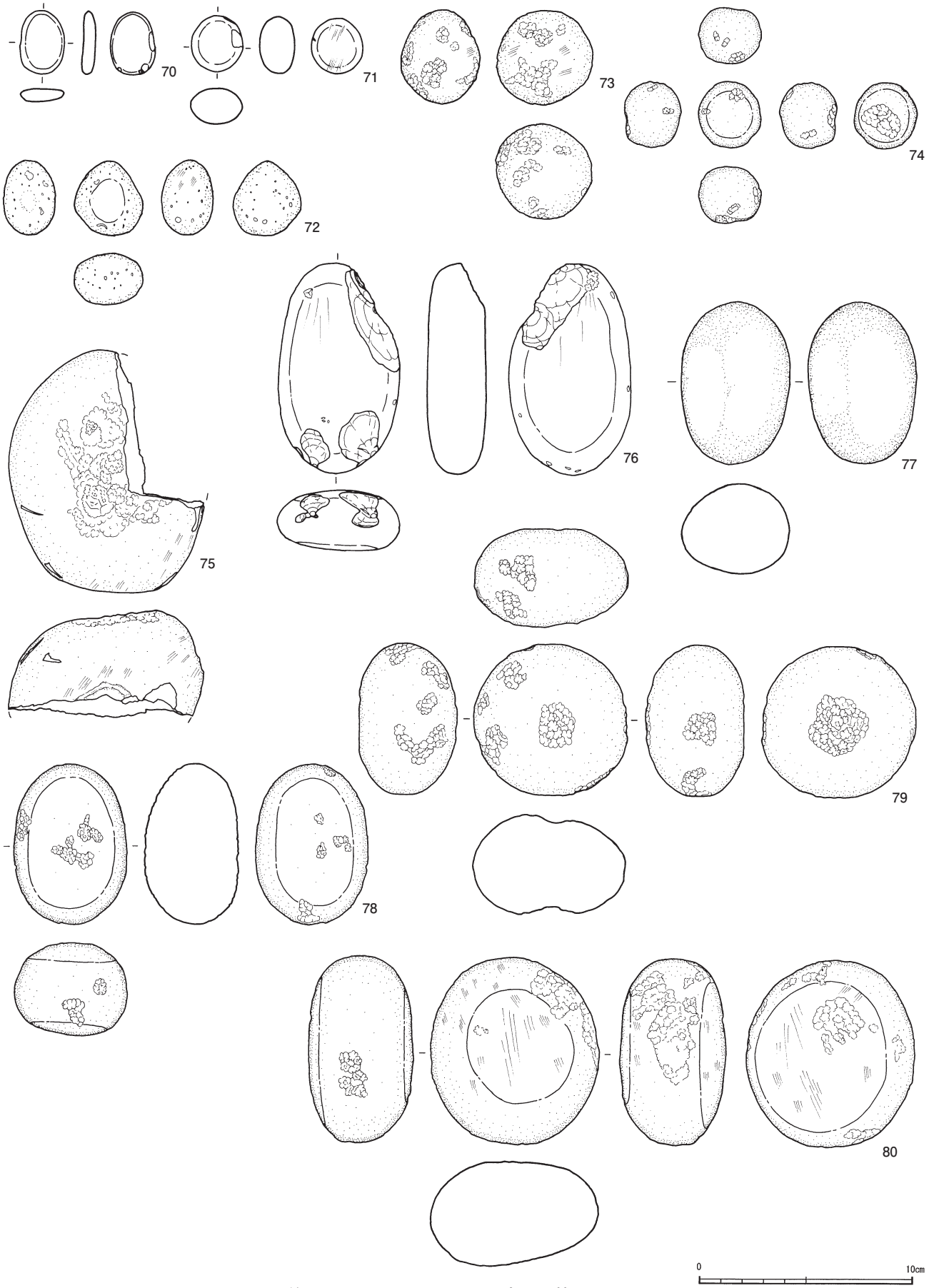
90は全体が滑らかに台上になっている。大部分を欠損してしまっているため全体像は不明であるが，側面部に擦痕が見られる。全体は滑らかで日常的な利用が想定される。

91は安山岩製の石皿である。楕円に近い形状で全体に敲打が見られ横断面は凸レンズ状に変形している。下部と表面左側に集中的な敲打の痕が見られるため別の遺物の可能性も考えられる。皿として食材をすりつぶしたりなどして加工に利用していた可能性は低い。

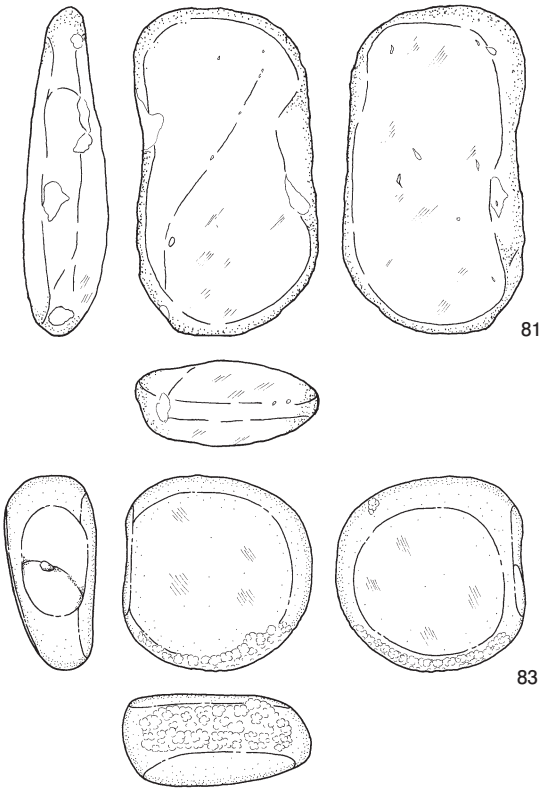
92は凝灰岩製で，欠損が激しく全体の形状は不明である。全体に被熱痕を持ち表面に敲打による大きな抉りが見られ，抉りに沿って擦痕が残る。所々に鉄片が残っているものの，擦痕が表裏両面に見られる。金床石かと思われるが台石などの別の用途での使用も考えられるためここで取り上げた。

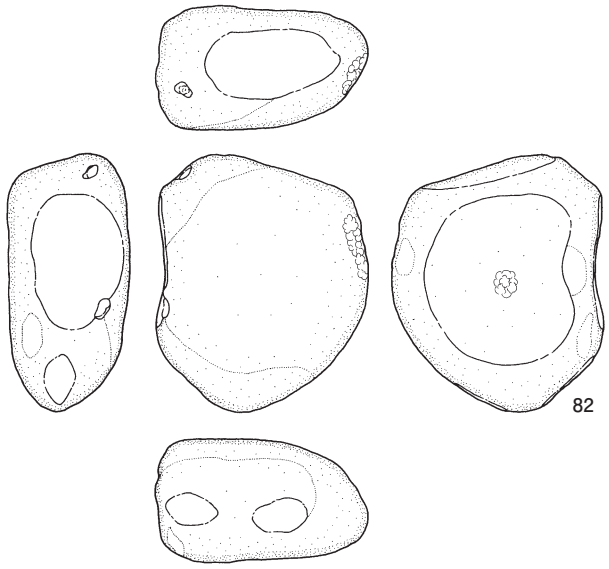


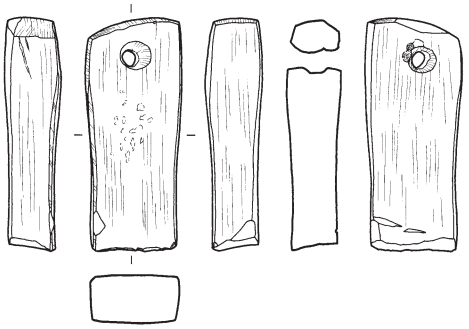
第54図　Ⅲ・Ⅳ層の石器１（石鏃・石斧）

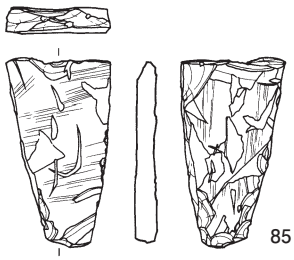


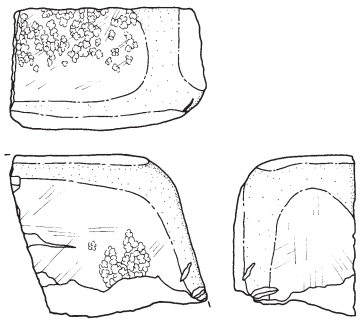
第55図　Ⅲ・Ⅳ層の石器２（磨石・敲石・凹石）







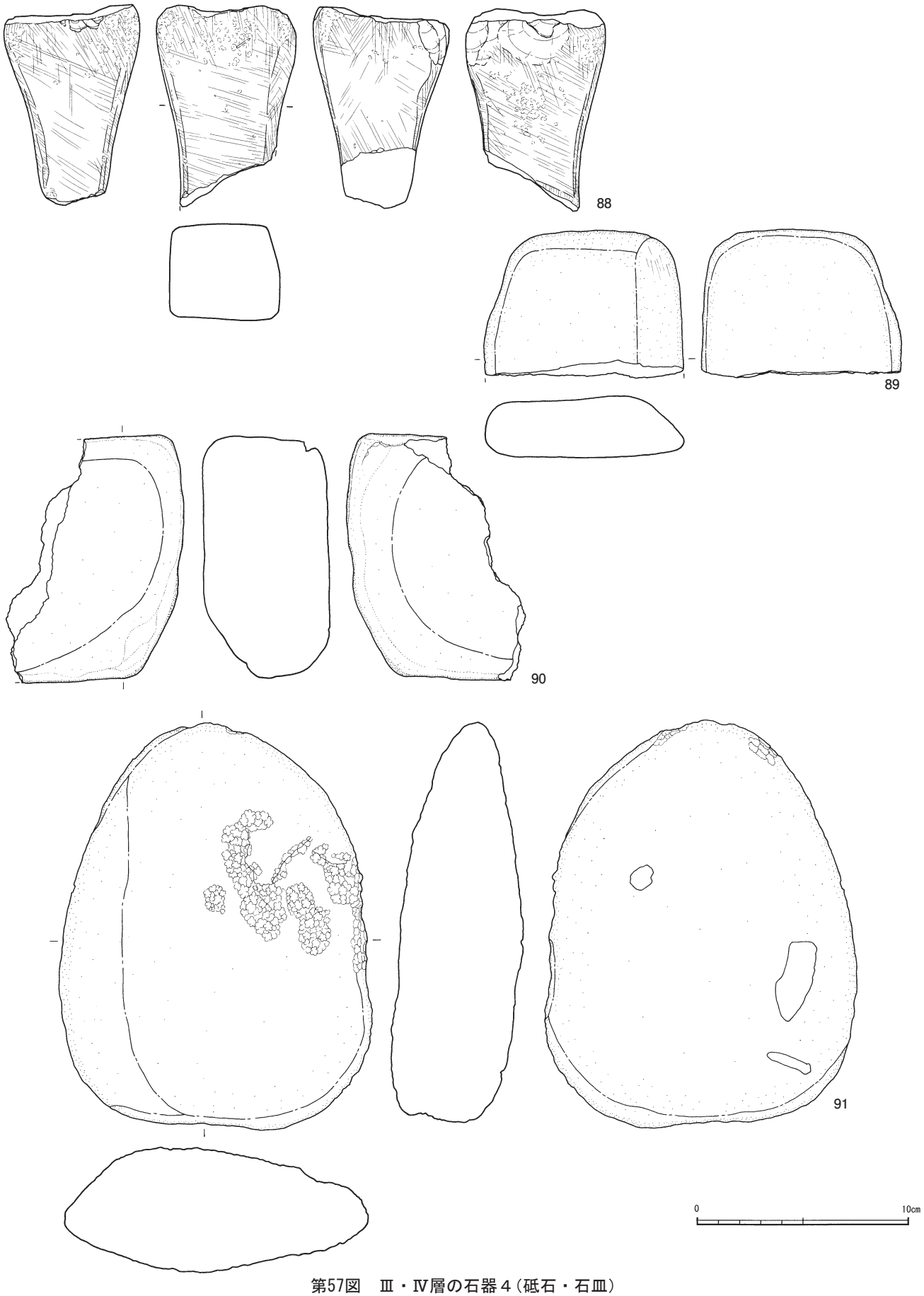




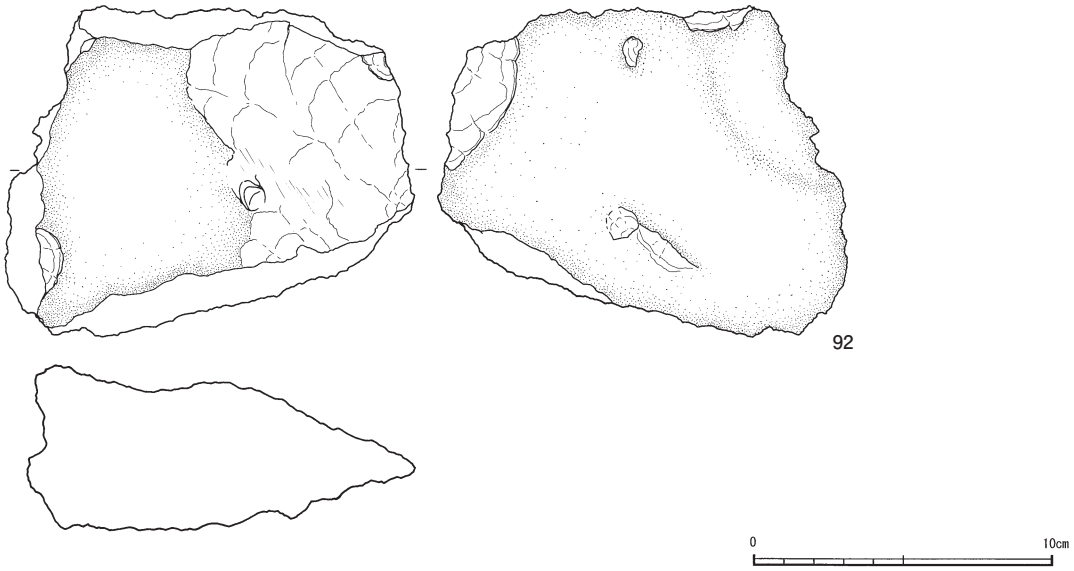


0 10cm

第56図　Ⅲ・Ⅳ層の石器３（磨石・砥石）



第57図　Ⅲ・Ⅳ層の石器４（砥石・石皿）



第58図　Ⅲ・Ⅳ層の石器５（石皿）

第14表　Ⅲ・Ⅳ層出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号	石材	備考
54	62	打製石鏃	H-6	Ⅲa	2.8	2.3	0.5	4.1	142152	安山岩	
	63	磨製石鏃	K-7	Ⅲa	3.16	2.88	0.41	3.63	110067	頁岩	
	64	打製石斧	I-11	Ⅲb	7.2	6	1.2	61.96	2669	頁岩	
	65	打製石斧	L-9	Ⅲb	11.7	4.9	1.5	8.96	291	頁岩	
	66	打製石斧	－	－	8.7	9.2	1.2	110	①	安山岩	溝35
	67	打製石斧	－	－	6.1	4.4	1	33	一括	頁岩	溝29
	68	磨製石斧	J-4	Ⅲa	9.2	5.2	1.8	105.9	1550	頁岩	
	69	磨製石斧	K-10	Ⅲb	7.7	4.4	1.2	64.7	2431	頁岩	
55	70	磨石	J-10	Ⅲa	2.9	2.1	0.6	6.37	2304	安山岩	
	71	磨石	J-11	Ⅲb	2.6	3.1	1.6	14.2	2473	安山岩	
	72	磨石	I-7・8	Ⅳa	3.5	3.1	2.5	38.6	－	安山岩	溝29
	73	磨敲石	E-7	Ⅳa	4.5	4.4	4.5	97	一括	安山岩	古代土坑26
	74	磨敲石	－	－	3	2.9	2.9	30	－	安山岩	
	75	磨敲石	J-11	Ⅲa	11.2	8.7	4.45	547	2737	安山岩	
	76	磨石	K-6	Ⅲa	9.5	5.6	2.6	208	110003	砂岩	
	77	磨石	M-14	Ⅲd	7.7	5.1	5	210	47765	砂岩	
	78	磨石	C-25	Ⅲ	7.5	5.2	4.5	251	65415	砂岩	
	79	凹石	N-14	－	7.1	7.2	4.7	341	－	安山岩	P-1070-①
	80	磨石	－	－	8.7	7.9	4.8	458	一括	砂岩	
56	81	磨石	－	－	11	6.15	2.9	271	一括	安山岩	溝29
	82	磨石	D-17・18	Ⅳa	8.4	6.8	4.1	392	一括	安山岩	溝34
	83	磨石	I-9	Ⅲ	6.4	6.15	3.05	189	2240	安山岩	
	84	砥石	I-9	Ⅲa	7.7	3.2	1.9	78.5	2220	砂岩	
	85	砥石	L-5	Ⅲ	6.3	3.4	0.8	20.5	1774	泥岩	
	86	砥石	－	－	5.4	5.5	4.1	225	一括	砂岩	溝29
	87	砥石	－	－	13.7	10	5.3	1124	－	砂岩	
57	88	砥石	H-18	Ⅲa	9.4	6.5	6.3	480	33195	砂岩	
	89	石皿	L-12	Ⅲb	6.9	9.4	2.9	369	－	安山岩	古代ピット22
	90	石皿	D-17・18	Ⅳa	11.4	6.6	5.9	926	一括	安山岩	溝34
	91	石皿	K-4	Ⅲb	18.9	14.4	5.8	1826	1792	安山岩	
58	92	石皿	－	－	10.9	12.7	5.4	824	－	凝灰岩	

第２節　古代の調査成果

１　調査の概要

古代該当の遺物包含層はⅢｂ層・Ⅲｃ層である。一部，畑地等の利用などでⅣａ層上面まで削平を受けていたが，Ｄ～Ｎ－３～23区で包含層が残存しており調査を行った。

遺構を当時の生活面であるⅢｂ層・Ⅲｃ層で検出しようと慎重に調査を行ったができず，当時の生活面より下のⅣａ層・Ⅳｂ層上面で遺構を検出することができた。

調査の方法は，遺構については検出状況の記録写真を撮影した後，各遺構の調査を進めた。特に，本遺跡ではピットが多数検出されたため，位置を記録し，それを基に調査軸の設定や埋土の確認等調査の方法を検討し，調査を進めた。また，古代の土師器甕の集中出土箇所を２か所検出したため，調査の効率化を図り，民間会社に実測を委託した。

遺物については，遺構内遺物以外の比較的大型の破片はトータルステーションで取り上げを行った。小破片はグリッド毎に一括で取り上げを行った。

２　遺構

古代該当の遺構は，掘立柱建物跡７棟，竪穴住居状遺構２基，土坑90基，ピット660基，土器集中２か所が確認された。

（１）　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は７棟検出された。柱穴の形状に共通性は見られないが，規模が２間×３間の建物が大半を占める。

掘立柱建物跡１号（第60図）

検出状況　Ⅰ－15・16区，Ⅳa層上面で検出された。

規模　規模は２間×３間で，主軸はN16°Eを示す。柱間は，桁行が１間159～195cm，梁行が１間175～192cmである。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径29～55cm，検出面からの深さ34～66cmで，Ｐ２，Ｐ７以外の柱穴には直径15～20cm，深さ23～45cm程度の柱痕跡がみられる。埋土はオリーブ黒色で，しまりがよい。

遺物　Ｐ７から土師器が１点出土したが，図化には至らなかった。

掘立柱建物跡２号（第61図）

検出状況　Ⅰ－16区，Ⅳb層で検出された。

規模　規模は２間×３間で，主軸はN80°Eを示す。柱間は，桁行が１間172～185cm，梁行が１間165～200cmである。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径21～52cm，検出面からの深さ18～64cmで，柱痕跡はみられなかった。埋土は暗黄褐色で，やや粘性がある。遺物はみられなかった。

掘立柱建物跡３号（第62図）

検出状況　Ｊ・Ｋ－17区，Ⅳb層で検出された。

規模　規格は２間×３間で，主軸はN71°Wを示す。柱間は，桁行が１間117～230cm，梁行が１間173～224cmである。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径12～37cm，検出面からの深さ11～78cmで，P1には直径20cm，深さ50cmの柱痕跡がみられる。埋土は暗茶褐色で，Ｐ３は下部にやや粘性がある。

遺物　Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ８から土師器等が合計８点出土したが，図化には至らなかった。

掘立柱建物跡４号（第63図）

検出状況　Ｍ・Ｎ－12区，Ⅳa層で検出された。

規模　規格は２間×３間で，主軸はN24°Eを示す。柱間は，桁行が１間145～180cm，梁行が１間156～186cmである。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径26～56cm，検出面からの深さ30～72cmで，Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７の床面には直径14～16cm，深さ８～12cm程度の柱痕跡がみられる。埋土は暗褐色である。P10の埋土内の炭化物については放射性炭素年代測定を実施し，1270±20yrBPという値を示されている。

遺物　Ｐ８から１点出土したが，図化には至らなかった。

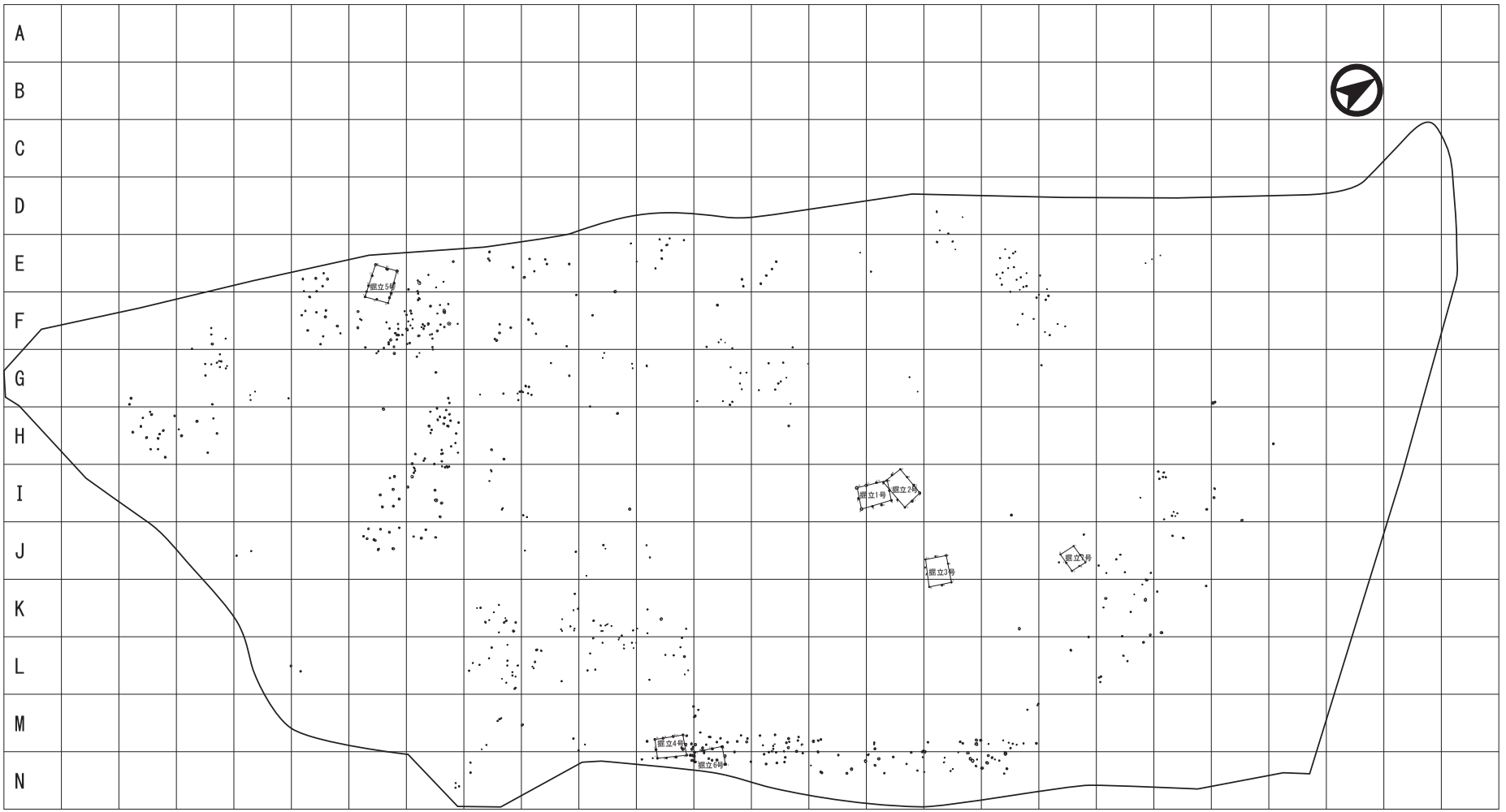
掘立柱建物跡５号（第64図）

検出状況　Ｅ・Ｆ－７区，Ⅳa層で検出された。

規模　規格は３間×２間で，主軸はN40°Wを示す。柱間は桁行が１間181～215cm，梁行が190～210cmである。建物跡内に土坑２基と焼土２基がみられるが，建物との関連は不明である。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径21～45cm，検出面からの深さ50～150cmで規格にばらつきがみられる。埋土は暗黄褐色である。P8の埋土内の炭化物について放射性炭素年代測定を実施し，1220±30yrBPという値を示している。

遺物　Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ９から土師器が合計５点出土し，Ｐ５出土の墨書土器１点を図化した（**第66図　93**）。



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第59図　古代の掘立柱建物跡・ピット配置図

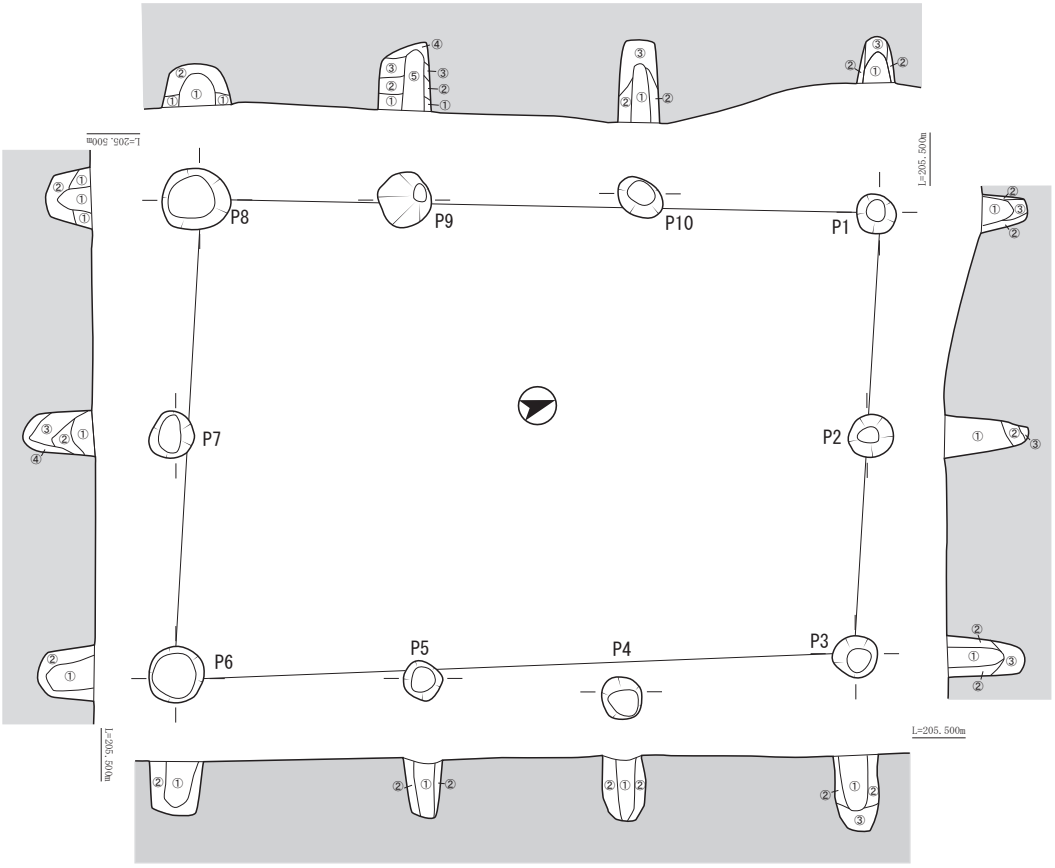
掘立柱建物跡６号（第65図）

検出状況　M・N－12・13区，Ⅳa層で検出された。

規模　東側が調査区外に延びているため正確な全体像は不明であるが，規模は２間×３間の可能性が高い。主軸はN20° Eを示す。柱間は，桁行が１間142 ～ 174cm，梁行が１間148 ～ 176cmである。建物内に土坑が数基みられるが，建物との関連は不明である。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径30 ～ 46cm，検出面からの深さ37 ～ 85cmである。埋土は暗黄褐色で，Ｐ１・Ｐ３・Ｐ７には直径14 ～ 17cm，深さ14 ～ 25cm程度の柱痕跡がみられる。

遺物　Ｐ１・Ｐ５・Ｐ６から土師器甕等が合計４点出土し，Ｐ１出土の土師器埦１点を図化した（**第66図94**）。



第15表　掘立柱建物跡１号計測表

柱穴(cm)				主軸		N16° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	34	31	37	桁行（cm）	P1 ～ P8	545
P2	36	33	66		P1 ～ P10	188
P3	35	34	62		P10 ～ P9	190
P4	36	33	54		P9 ～ P8	167
P5	33	32	49		P3 ～ P6	538
P6	47	45	44		P3 ～ P4	188
P7	37	36	55		P4 ～ P5	159
P8	55	49	34		P5 ～ P6	195
P9	45	44	56	梁行（cm）	P1 ～ P3	352
P10	40	29	66		P1 ～ P2	176
					P2 ～ P3	175
					P8 ～ P6	378
					P8 ～ P7	187
					P7 ～ P6	192

P1　①灰色　②オリーブ黒色　③オリーブ黒色
P2　①オリーブ黒色　②灰色鉄分が沈着　③灰オリーブ
P3　①オリーブ黒色　②黒褐色　③暗オリーブ褐色
P4　①オリーブ黒色　②暗灰黄色
P5　①オリーブ黒色　②灰オリーブ色
P6　①オリーブ黒色　②灰オリーブ色
P7　①灰色　②暗灰黄色　③オリーブ褐色　④黄褐色
P8　①暗褐色　②褐色
P9　①暗オリーブ色　②黒褐色　③暗灰黄色
　　④オリーブ褐色　⑤オリーブ黒色
P10　①オリーブ黒色　②灰色　③暗オリーブ褐色

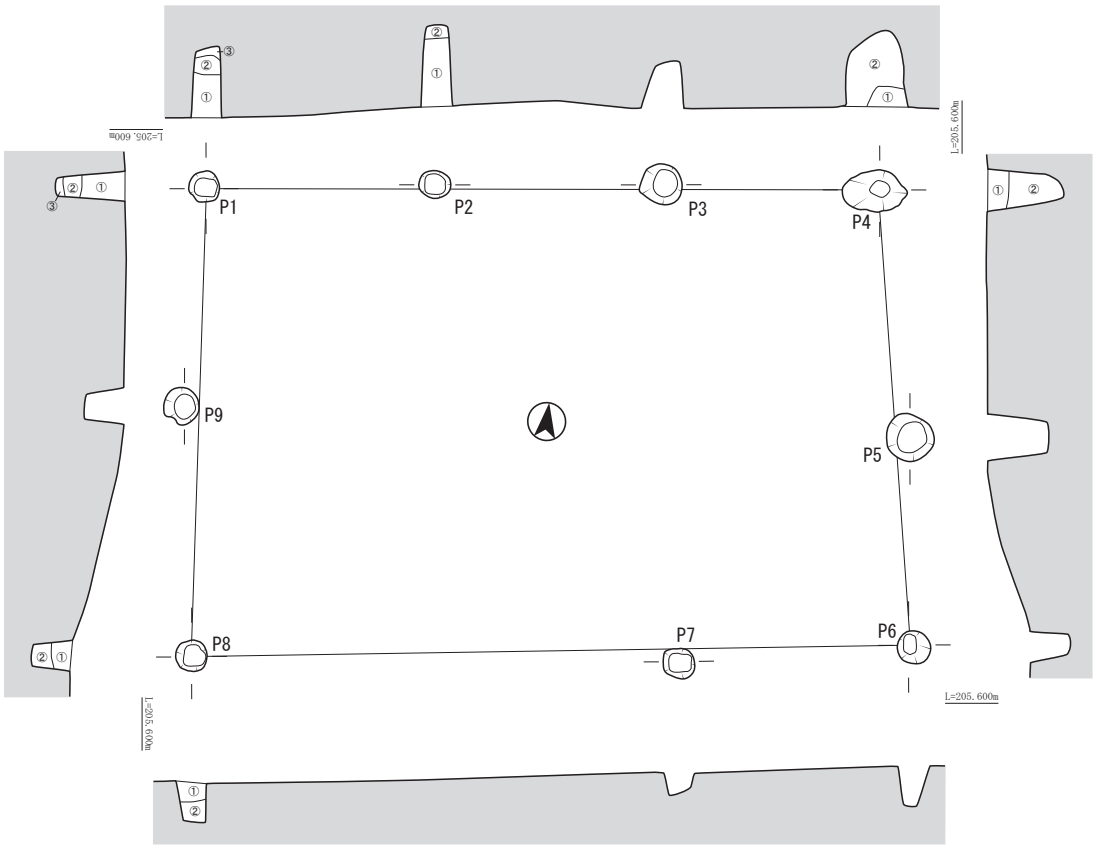
第60図　古代の掘立柱建物跡１号

掘立柱建物跡７号（第65図）

検出状況　J－19区，Ⅳa層で検出された。

規模　規格は２間×２間で,主軸はN86° Eを示す。柱間は，桁行が１間161 ～ 191cm，梁行が１間124 ～ 163cmである。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径18 ～ 27cm，検出面からの深さ14 ～ 24cmである。埋土は黒色で，Ｐ４の底面は硬化している。遺物はみられなかった。



第16表　掘立柱建物跡２号計測表

柱穴(cm)				主軸		N80° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	26	24	57	桁行（cm）	P1 ～ P4	540
P2	25	21	64		P1 ～ P2	184
P3	34	33	36		P2 ～ P3	184
P4	52	32	60		P3 ～ P4	172
P5	39	36	46		P8 ～ P6	575
P6	28	26	30		P8 ～ P7	392
P7	28	24	18		P7 ～ P6	185
P8	26	25	33	梁行（cm）	P1 ～ P8	374
P9	29	28	31		P1 ～ P9	175
					P9 ～ P8	200
					P4 ～ P6	364
					P4 ～ P5	199
					P5 ～ P6	165

P1　①粘性のある褐色土。細かい砂粒を含む。
②濃い褐色土
③②より色が薄く，粘性があり，細かい砂粒を含む。

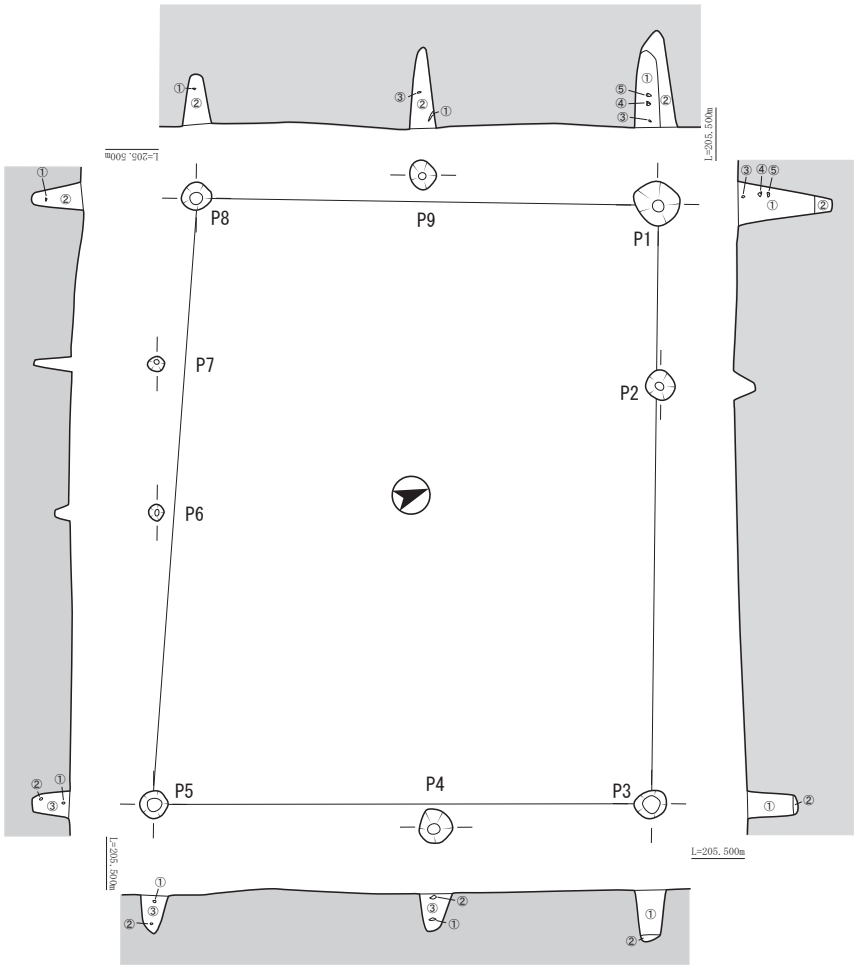
P2　①粘性のある褐色土。細かい砂粒を含む。
②褐色土＋灰色土。粘性があり①より砂粒を多く含む。

P4　①樹痕
②粘性のある褐色土。細かい砂粒を含む。

P8　①褐色土＋灰色土。粘性があり砂粒を多く含む。
②褐色土＋やや濃い褐色土。粘性があり砂粒を少し含む。

0　2m

第61図　古代の掘立柱建物跡２号



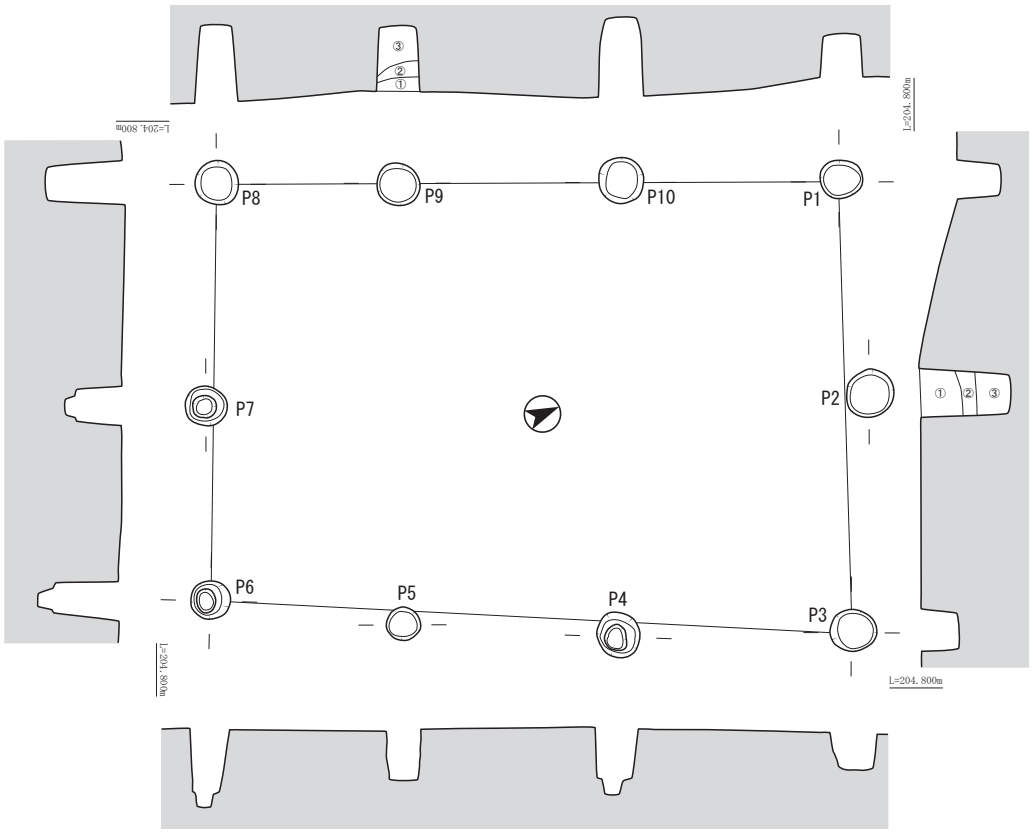
第17表　掘立柱建物跡３号計測表

柱穴(cm)				主軸		N71° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	37	34	78	桁行（cm）	P1 ～ P3	477
P2	24	23	17		P1 ～ P2	145
P3	26	22	42		P2 ～ P3	332
P4	27	26	31		P8 ～ P5	483
P5	23	22	30		P8 ～ P7	137
P6	13	12	11		P7 ～ P6	117
P7	13	12	30		P6 ～ P5	230
P8	24	22	40	梁行（cm）	P1 ～ P8	365
P9	24	21	65		P1 ～ P9	188
					P9 ～ P8	180
					P3 ～ P5	395
					P3 ～ P4	173
					P4 ～ P5	224

P1　①オリーブ黒　②暗茶褐色土
　　③チップ　④土器　⑤土器
P3　①パミスを含んだ暗茶褐色土
　　②粘質のある少し明るめの暗茶褐色土
P4　①土器　②土器　③パミスを含んだ暗茶褐色土
P5　①土器　②土器　③パミスを含んだ暗茶褐色土
P8　①土器　②暗茶褐色土
P9　①アカホヤ（Vc）が入っている
　　②暗茶褐色土　③土器

0　2m

第62図　古代の掘立柱建物跡３号

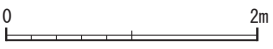


第18表　掘立柱建物跡４号計測表

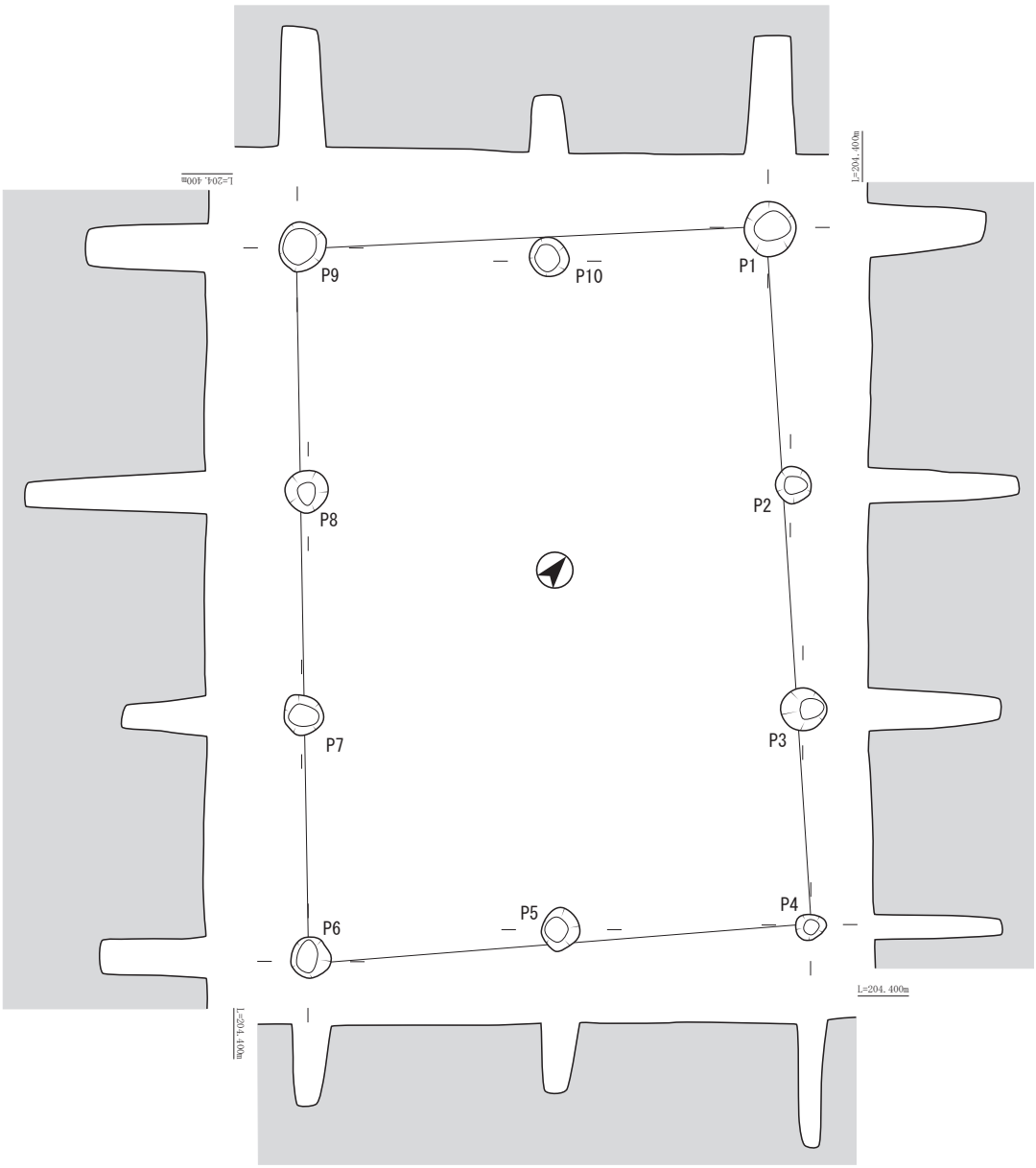
柱穴(cm)				主軸		N24° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	35	30	35	桁行（cm）	P1 ～ P8	505
P2	40	37	72		P1 ～ P10	180
P3	40	35	30		P10 ～ P9	176
P4	35	56	55		P9 ～ P8	145
P5	27	26	41		P3 ～ P6	510
P6	33	40	62		P3 ～ P4	180
P7	34	33	45		P4 ～ P5	177
P8	36	35	61		P5 ～ P6	155
P9	36	35	54	梁行（cm）	P1 ～ P3	355
P10	38	35	63		P1 ～ P2	170
					P2 ～ P3	186
					P8 ～ P6	335
					P8 ～ P7	175
					P7 ～ P6	156

P2　①暗褐色土，砂質，黄色パミス小混
②褐色土，黄色パミス小混
③暗茶褐色土，パミス小混

P9　①暗褐色土，砂質，黄色パミス小混
②褐色土，黄色パミス小混
③暗茶褐色土，パミス小混



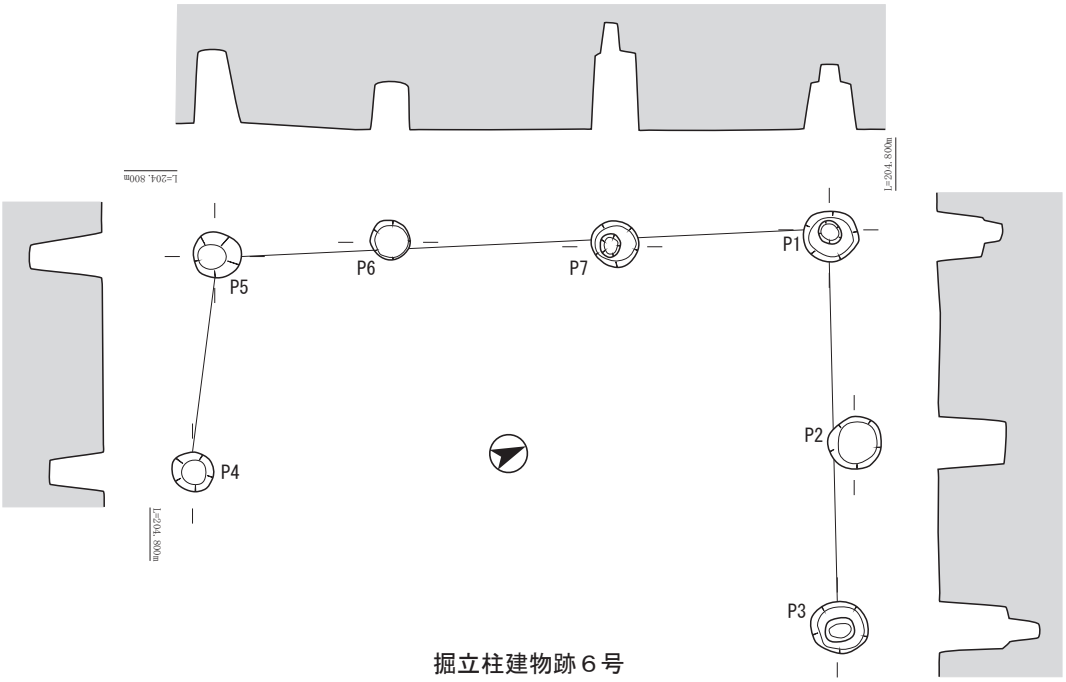
第63図　古代の掘立柱建物跡４号



第19表　掘立柱建物跡５号計測表

柱穴(cm)				主軸		N40° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	45	44	100	桁行（cm）	P1 ～ P4	580
P2	31	29	125		P1 ～ P2	215
P3	38	35	110		P2 ～ P3	185
P4	26	21	105		P3 ～ P4	181
P5	36	32	58		P9 ～ P6	590
P6	35	32	87		P9 ～ P8	205
P7	34	31	72		P8 ～ P7	183
P8	36	36	150		P7 ～ P6	203
P9	41	37	110	梁行（cm）	P1 ～ P9	390
P10	33	29	50		P1 ～ P10	190
					P10 ～ P9	205
					P4 ～ P6	414
					P4 ～ P5	210
					P5 ～ P6	207

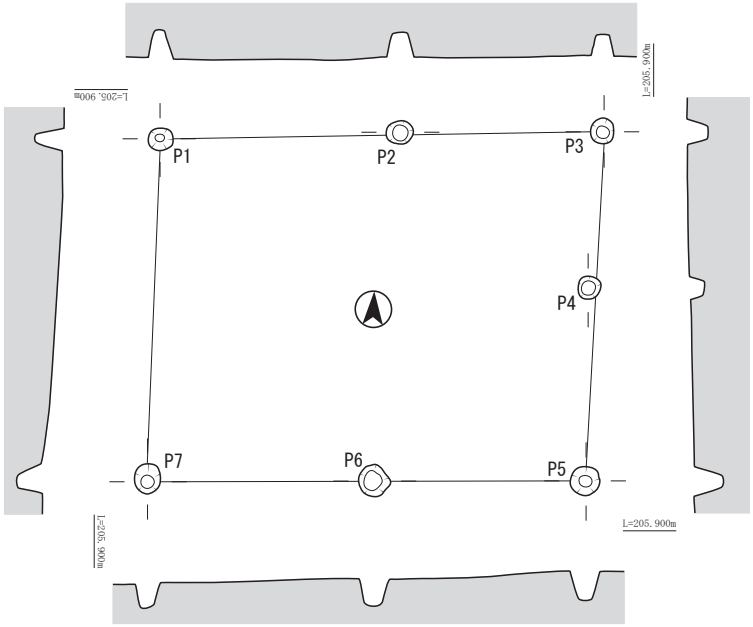
第64図　古代の掘立柱建物跡５号



掘立柱建物跡６号

第20表　掘立柱建物跡６号計測表

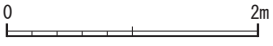
柱穴(cm)				主軸		N20° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	43	40	54	桁行（cm）	P1 ～ P5	495
P2	44	43	56		P1 ～ P7	174
P3	46	42	81		P7 ～ P6	177
P4	32	30	44		P6 ～ P5	142
P5	38	36	58	梁行（cm）	P1 ～ P3	315
P6	32	30	37		P1 ～ P2	166
P7	40	36	85		P2 ～ P3	148
					P5 ～ P4	176



掘立柱建物跡７号

第21表　掘立柱建物跡７号計測表

柱穴(cm)				主軸		N86° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	18	23	桁行（cm）	P1 ～ P3	350
P2	22	20	21		P1 ～ P2	191
P3	21	18	18		P2 ～ P3	161
P4	19	19	14		P7 ～ P5	346
P5	25	24	24		P7 ～ P6	181
P6	27	25	23		P6 ～ P5	163
P7	25	23	21	梁行（cm）	P1 ～ P7	269
					P3 ～ P5	274
					P3 ～ P4	124
					P4 ～ P5	163



第65図　古代の掘立柱建物跡６・７号

柱穴内出土遺物（第66図）

93は掘立柱建物跡５号のP ５から出土した墨書土器である。坏もしくは埦の口縁部下に墨書が観察できるが，書かれている内容については不明である。

94は掘立柱建物跡６号のP １から出土した須恵質の土師器である。高台が0.7㎝と低く，底部は１㎝以上の厚さがある。焼成は良好で，やや硬質である。見込みが盛り上がり，布目痕が見られる。

(2)　竪穴住居状遺構

竪穴住居状遺構は，中世の土坑に切られる形で２基検出された。規模･形状から竪穴住居跡の可能性もあるが，明確な根拠がないため竪穴住居状遺構として報告する。

竪穴住居状遺構１号（第68図）

検出状況　Ｆ－５区で，一部，中世の土坑48号・49号に切られた状態で検出された。検出面はⅣａ層であった。

形状と規模　２基の土坑によって一部切られているが，基本となる平面プランは隅丸長方形である。規模は，長軸は約400㎝，短軸は約300㎝を測る。検出面からの深さは中央の最深部で約30㎝と浅く感じるが，当時の生活面がⅢｂ層であることを考えれば，掘込面も同じⅢｂ層で，実際はもう少し深かったと考える。

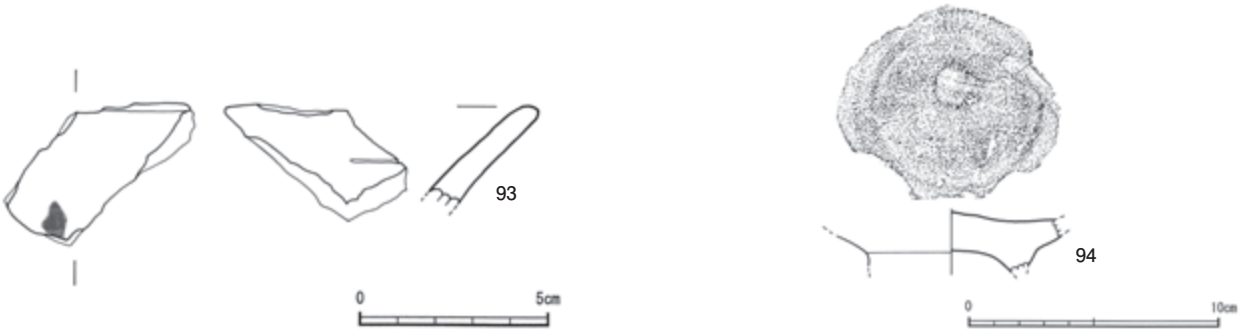
また，検出面から約25㎝の深さのところで硬化面が確認された。調査の結果，硬化面は地層の横転等の影響を受けていたためか住居の底面の約半分のみ確認できた。

埋土　褐色系の土層が基本となっている。埋土①は砂質の黒褐色土，埋土②は砂質の暗褐色土，埋土③は砂質の褐色土である。埋土④は硬質の灰黄褐色土で，貼床と考えられる。多くの遺物は埋土①から出土した。

出土遺物　遺構内からは土師器を主として，遺物が22点出土し，そのうちの３点を図化した（**第69図　95～97**）。

なお，文中記載の遺物分類はP109の「３　遺物」の項で述べてあることに準ずる。

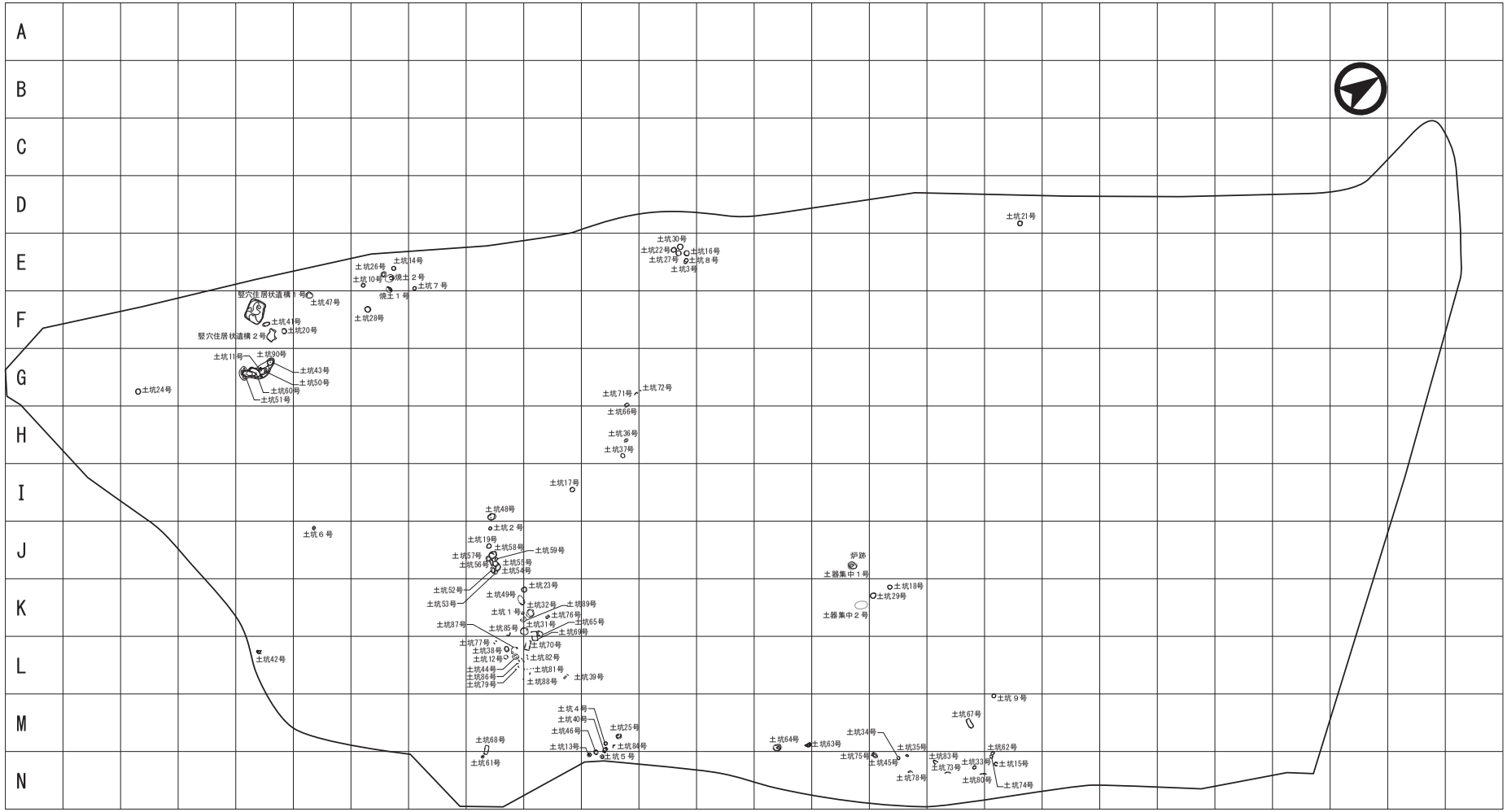
95は甕Ⅲｂ類の口縁部である。強めのナデ調整により口縁端部が玉縁状になる。96は口縁部に近い甕Ⅲａ類の胴部である。外面は強めのナデ調整が施され，一部ハケメも観察できる。97は坏Ⅲ類の口縁部である。内外面ともナデ調整が施され，口縁が内側にやや肥厚する。



第66図　柱穴内出土遺物

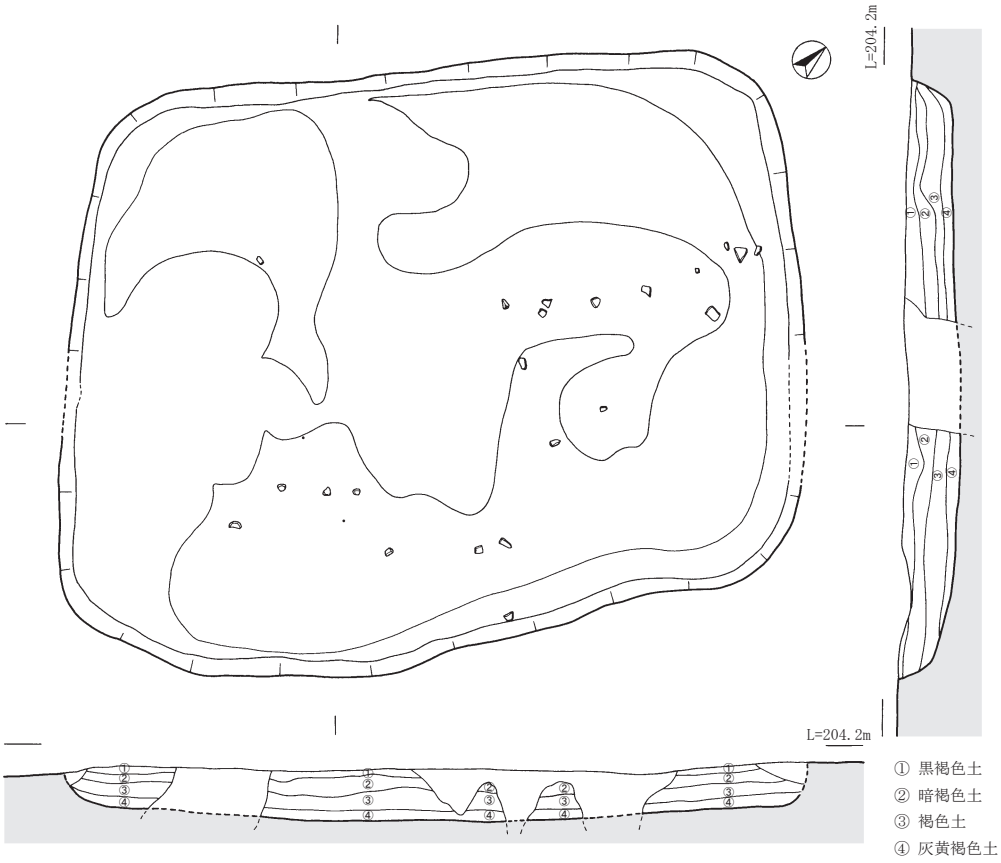
第22表　柱穴内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位/遺構	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
66	93	Ｆ−7	掘立5 P5	−	土師器	坏・埦	口縁部	−	橙色	橙色	ナデ	ナデ	−	−	−	−					
	94	M−13	掘立6 P1	−	土師器	埦	底部	−	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	布目痕	−	6.8	−	−	○				

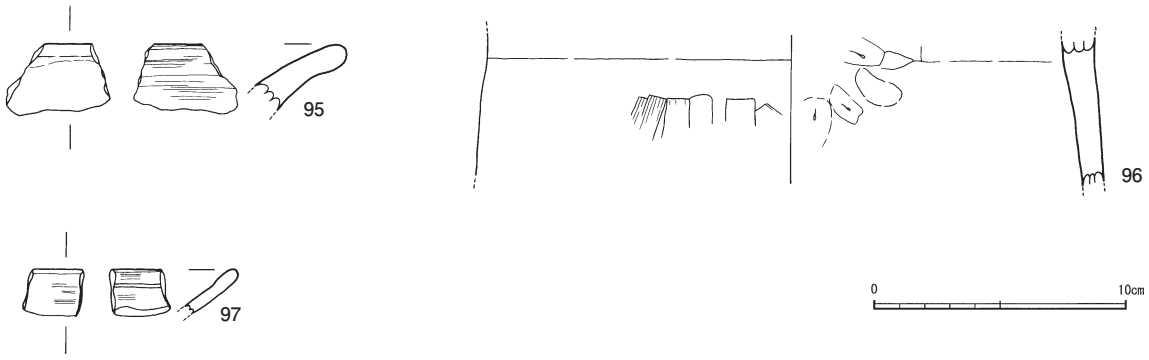


（ 1グリッド　10m X 10m ）

第67図　古代の竪穴住居状遺構・土坑・炉跡・焼土跡・土器集中の配置図



第68図　古代の竪穴住居状遺構１号



第69図　古代の竪穴住居状遺構１号内出土遺物

第23表　竪穴住居状遺構1号内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
								外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
69	95	F-5	6	土師器	甕	口縁部	Ⅲb	にぶい褐色	橙色	ナデ	ナデ	－	－	－	－	○		○		
	96	F-5	5	土師器	甕	胴部	Ⅲa	橙色	橙色	ナデハケメ	ヘラケズリ	－	－	－	－	○				
	97	F-5	18	土師器	坏	口縁部	－	橙色	橙色	ナデ	ナデ	－	－	－	－					

竪穴住居状遺構２号（第70図）

検出状況　Ｆ－５区で，一部，中世の土坑52号に切られたり，撹乱を受けたりした状態で検出された。検出面はⅣａ層であった。

形状と規模　重複遺構や撹乱の影響で，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は約200cm，短軸は推定で約160cmを測る。検出面からの深さは，最深部で約30cmと浅く感じるが，竪穴住居状遺構１号と同様に，当時の生活面がⅢｂ層であることを考えれば，掘込面も同じⅢｂ層で，実際はもう少し深かったと考える。

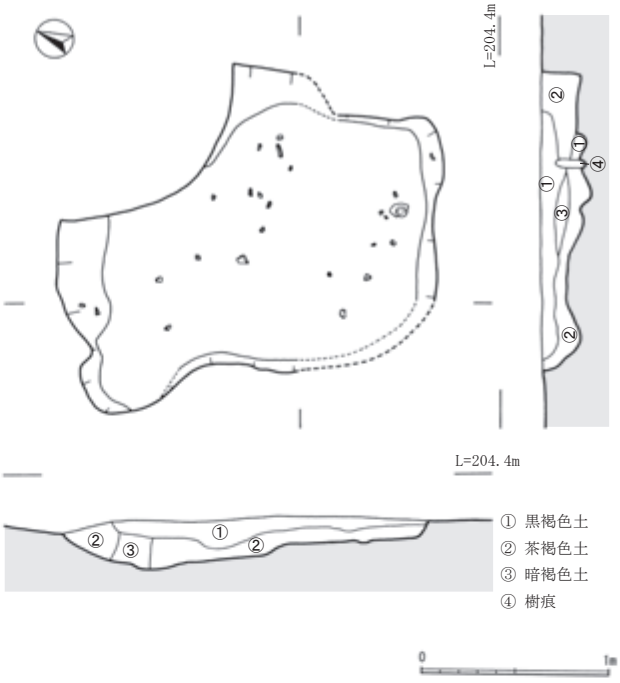
埋土　パミスをほとんど含まない黒褐色土（埋土①）を基本とし，その下位に一部表面が硬化した茶褐色土（埋土②），やや硬質の暗茶褐色土（埋土③）が堆積していた。硬化面の残存率が低かったため，貼床であったかどうかは不明である。

出土遺物　遺構内からは土師器を主として，遺物が26点出土し，そのうちの３点を図化した（**第71図　98～100**）。

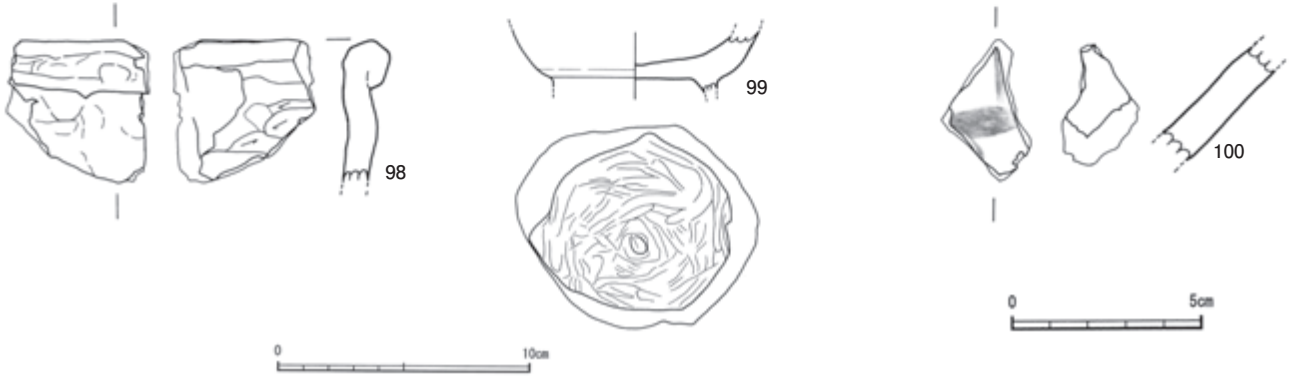
98は土師器の甕もしくは鍋と思われる。胎土と作りが粗雑で，口縁部は外側から内側に折り返して作られ，内外面とも一部にナデ調整が施される。さらに，内面は横方向のケズリによる調整が施される。

99は黒色土器の椀である。内面は丁寧にミガキ調整が施され，見込みが押圧され凹む。外面はナデ調整が施され，高台は端部に向かってやや内湾している。

100は墨書土器である。坏か椀と思われる。線状の墨書が書かれているが,文字の判読には至らなかった。



第70図　古代の竪穴住居状遺構２号



第71図　古代の竪穴住居状遺構２号内出土遺物

第24表　竪穴住居状遺構２号内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
								外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
71	98	F-5	12	土師器	甕・鍋	口縁部	－	明赤褐色	橙色	ナデ	ヘラケズリ	－	－	－	－					
	99	F-5	1	黒色土器	椀	底部	－	橙色	暗灰色	ナデ,ヘラ切り（底部）→ナデ（高台）	ミガキ押圧	－	－	－	－	○				
	100	F-5	一括	墨書土器	坏・椀	体部	－	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ→墨書	ナデ	－	－	－	－					

(3) 土坑

古代該当の土坑は，90基検出された。これらの土坑を平面形をもとに以下の５タイプに分類した。

Type １・・・ほぼ円形を呈する円形タイプ
Type ２・・・楕円形状を呈する楕円形タイプ
Type ３・・・隅丸方形状を呈する隅丸方形タイプ
Type ４・・・隅丸長方形状を呈する隅丸長方形タイプ
Type ５・・・その他（不定形や形状が不明なもの）

Type １ （円形タイプ：第72図～第74図）

土坑１号

Ｋ－９区，Ⅳａ層で，一部，トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸52cm，短軸40cm，底面までの深さは樹痕の影響もあり起伏があるが最深部で５㎝を測る。断面形は皿状を呈するものと想定される。残存部の埋土は，暗茶褐色土の単一埋土であった。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑２号

Ｊ－９区，Ⅳａ層上面で検出された。規模は長軸58cm，短軸53cm，底面までの深さはやや起伏があるが最深部で11cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は，暗褐色土と黄色土ブロックの混在土が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑３号

Ｅ－12区，Ⅳａ層で古代の土坑８号と中世の溝21に切られる形で検出された。規模は推定で長軸64cm，短軸55cm，底面までの深さは最深部で10cmを測る。断面形は，舟形状を呈する。残存部の埋土は，暗褐色土の単一埋土であった。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑４号

Ｍ－11区，Ⅳ層で検出された。規模は長軸66cm，短軸62cm，底面までの深さは最深部で９㎝を測る。断面形は，舟形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土を主体とし，１㎜大の白色パミスと黄橙色パミスが混在し堆積していた。埋土中からは２点の遺物が出土したが細片のため図化できなかった。

土坑５号

Ｎ－11区，Ⅳｂ層で検出された。規模は長軸67cm，短軸66cm，底面までの深さは最深部で22cmを測る。断面形は台形状を呈している。埋土は，茶褐色土を主体とし，１㎜大の白色及び黄色パミスが混在し堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑６号

Ｊ－６区，Ⅲｃ層で検出された。規模は長軸64cm，短軸50cm，底面までの深さは最深部で36cmを測る。断面形は台形状を呈している。埋土は，１～２㎜大の橙色パミスを含む暗褐色土（埋土①）を主体とし，１～２㎜大の橙色パミスを含むにぶい褐色土（埋土②）が堆積していた。

土坑７号

Ｅ－８区，Ⅳａ層で検出された。規模は長軸68cm，短軸62cm，底面までの深さは最深部で７㎝を測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，黄色パミスを含む暗黄褐色土が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑８号

Ｅ－12区，Ⅳａ層で，古代の土坑３号を切る形で検出された。規模は長軸65cm，短軸64cm，底面までの深さは最深部で15cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑９号

Ｌ・Ｍ－18区，Ⅳ層上面で検出された。平面形が直径69cmの正円形を呈し，底面までの深さは最深部で４㎝を測る。断面形は皿状を呈する。埋土は，褐色系の土が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑10号

Ｅ－７区，Ⅳａ層で検出された。規模は長軸73cm，短軸73cm，底面までの深さは最深部で６㎝を測る。断面形は皿状を呈する。埋土は，黄色パミスを含む暗黄褐色土が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑11号

Ｇ－５区，Ⅳａ層で，古代の土坑51号と土坑90号を切る形で検出された。規模は長軸56cm，短軸48cm，底面までの深さは最深部で85cmを測る。断面形はコップ状を呈する。埋土は，炭化物を全体的に含む暗褐色土が堆積していた。底面付近に炭化物の集中が見られた。埋土中から遺物が６点出土したが細片のため図化できなかった。

土坑12号

Ｌ－９区，Ⅳａ層上面で西側半分と東側一部をトレンチャーにより切られる形で検出された。規模は推定で長軸71cm，短軸70cm，底面までの深さは最深部で７㎝を測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，黒褐色土（埋土①）を主体とし，暗茶褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑13号

Ｎ－11区，Ⅳａ層上面で検出された。規模は長軸72cm，短軸68cm，底面までの深さは樹痕の影響を受けているが最深部で18cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，１㎜大の白色及び黄色パミスが混ざる茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が１点出土したが細片のため図化できなかった。

土坑14号

Ｅ－７区，Ⅳｂ面で検出された。平面形が直径70cmの正円形を呈し，底面までの深さは最深部で34cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，１～３㎜大の黄パミスを含む褐色土（埋土①）と褐色土（埋土②）が堆積していた。また，黄色パミス（Ｐ７）が点在する黄褐色土

のブロック（埋土③）も確認できた。埋土中からは遺物の出土は無かった。

土坑15号

Ｎ－18区，Ⅳｂ層で検出された。規模は北側を掘りすぎて不明の部分があるものの，推定で長軸68cm，短軸65cm，底面までの深さは最深部で37cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，黄色パミスを少量含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑16号

Ｅ－12区，Ⅳｂ層で，一部，中世の土坑51号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸95cm，短軸92cm，底面までの深さは最深部で28cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑17号

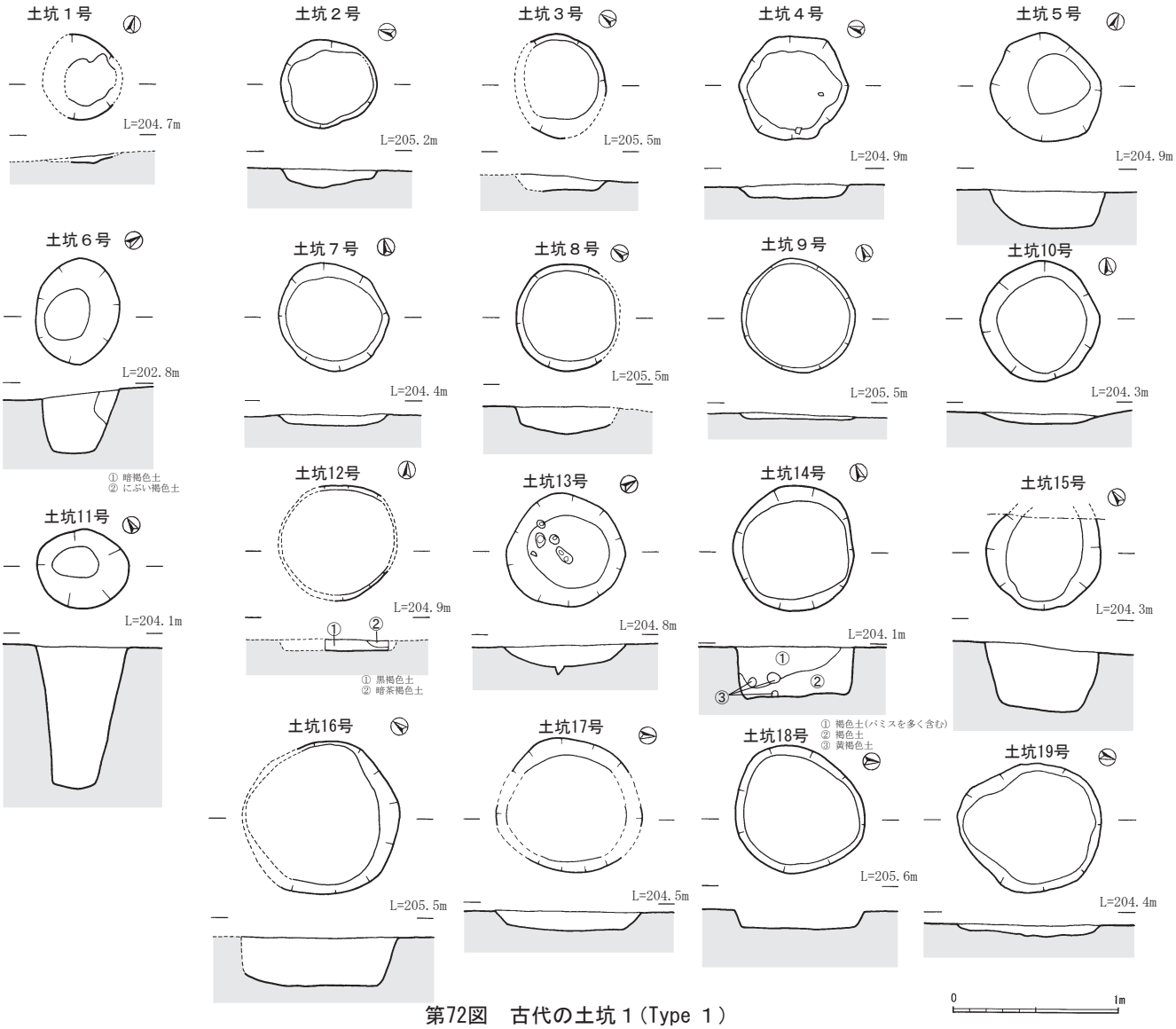
Ｉ－10区，Ⅳａ層上面で検出された。規模は長軸88cm，短軸81cm，底面までの深さは７cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗褐色土と黄褐色土が混在する暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑18号

Ｋ－16区，Ⅳａ層において検出された。規模は長軸78cm，短軸76cm，底面までの深さは最深部で11cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が２点出土したが細片のため図化できなかった。

土坑19号

Ｊ－９区，Ⅳａ層上面で検出された。規模は長軸86cm，短軸78cm，底面までの深さは最深部で７cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土と黒褐色土のブロックを少量含む暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。



第72図　古代の土坑１（Type １）

土坑20号

Ｆ－５区，Ⅳａ層で，一部，中世の土坑99号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸93cm，短軸80cm，底面までの深さは最深部で６cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は，２～３㎜大の黄色パミスを含む黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が10点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑21号

Ｄ－18区，Ⅳｂ層で検出された。規模は長軸100cm，短軸90cm，底面までの深さは最深部で８cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は，基本土層のⅢｂ層に近いにぶい黄褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑22号

Ｅ－12区，Ⅳｂ層で，一部，中世の溝21に切られる形で検出された。規模は推定で長軸95cm，短軸84cm，底面までの深さは26cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，褐色系の小ブロックが混在する暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑23号

Ｋ－９・10区，Ⅳａ層上面で，一部，トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸98cm，短軸91cm，底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は単一の暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から東播系土器が出土したが，埋土の堆積及び溝の形成過程で流れ込んだものと考える。

土坑24号

Ｇ－３区，Ⅳｂ層で検出された。規模は長軸95cm，短軸91cm，底面までの深さは最深部で12cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は，１㎜大の黄橙色パミスが混ざる黄褐色土が堆積していた。

土坑25号

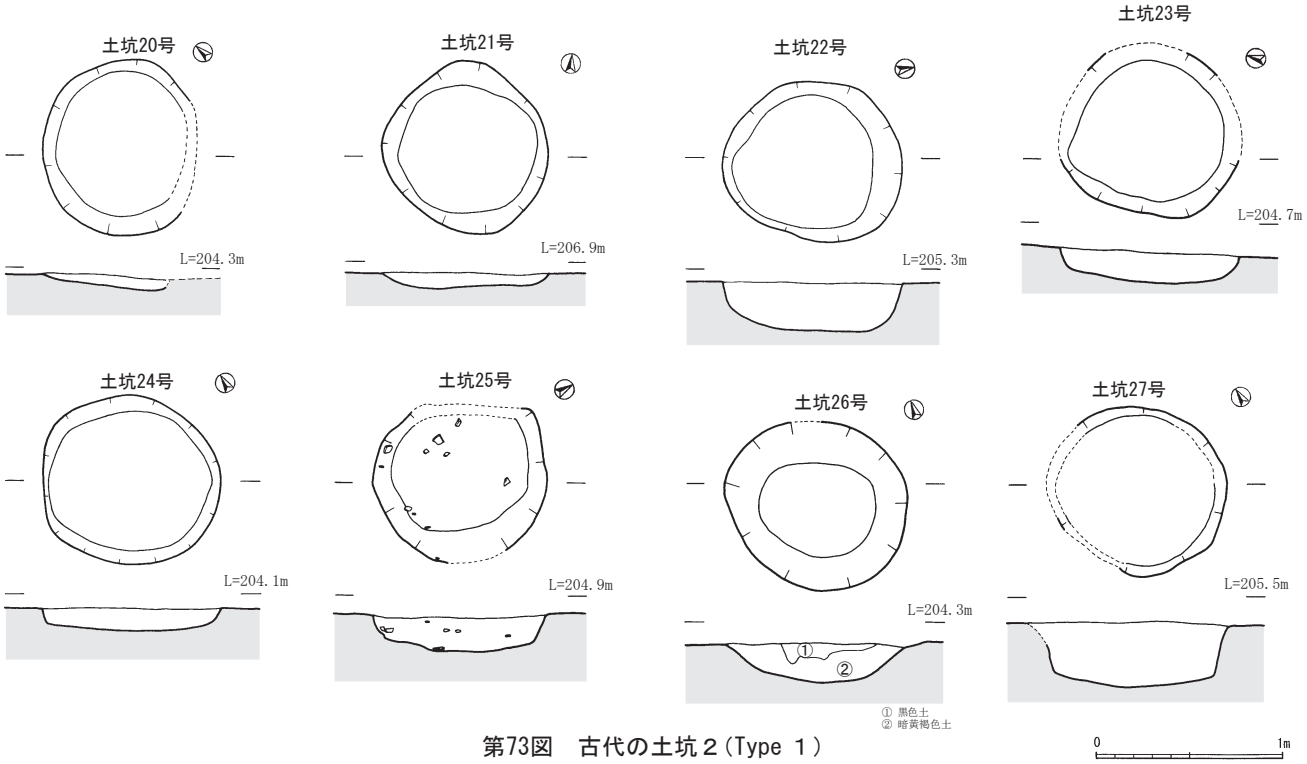
Ｍ－11区，Ⅳｂ層で，一部，イモ穴に切られる形で検出された。規模は推定で長軸94cm，短軸85cm，底面までの深さは最深部で18cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は，極小粒の白色パミスと１㎜大の黄橙色パミスが混ざる暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が12点出土したが，細片や流れ込み等による時期の違う遺物のため今回は図化しなかった。

土坑26号

Ｅ－７区，Ⅳａ層において検出された。規模は長軸92cm，短軸90cm，底面までの深さは最深部で21cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，黒色土（埋土①），黄色パミスを含む暗黄褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から遺物が16点出土しており，そのうちの３点を図化した。

土坑27号

Ｅ－12区，Ⅳａ層で中世の土坑61号と溝21に切られた形で検出された。規模は長軸96cm，短軸90cm，底面までの深さは最深部で34cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。



第73図　古代の土坑２（Type １）

土坑28号

Ｆ－７区，Ⅳａ層で検出された。平面形が直径104cmの正円形を呈し，底面までの深さは最深部で15cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は，黄色パミスを含む暗黄褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が14点出土したが，細片や土坑の該当期と違う遺物のため図化はしなかった。

土坑29号

Ｋ－16区，Ⅳａ層で検出された。規模は長軸97cm，短軸96cm，底面までの深さは最深部で８cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は，単一の黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が２点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑30号

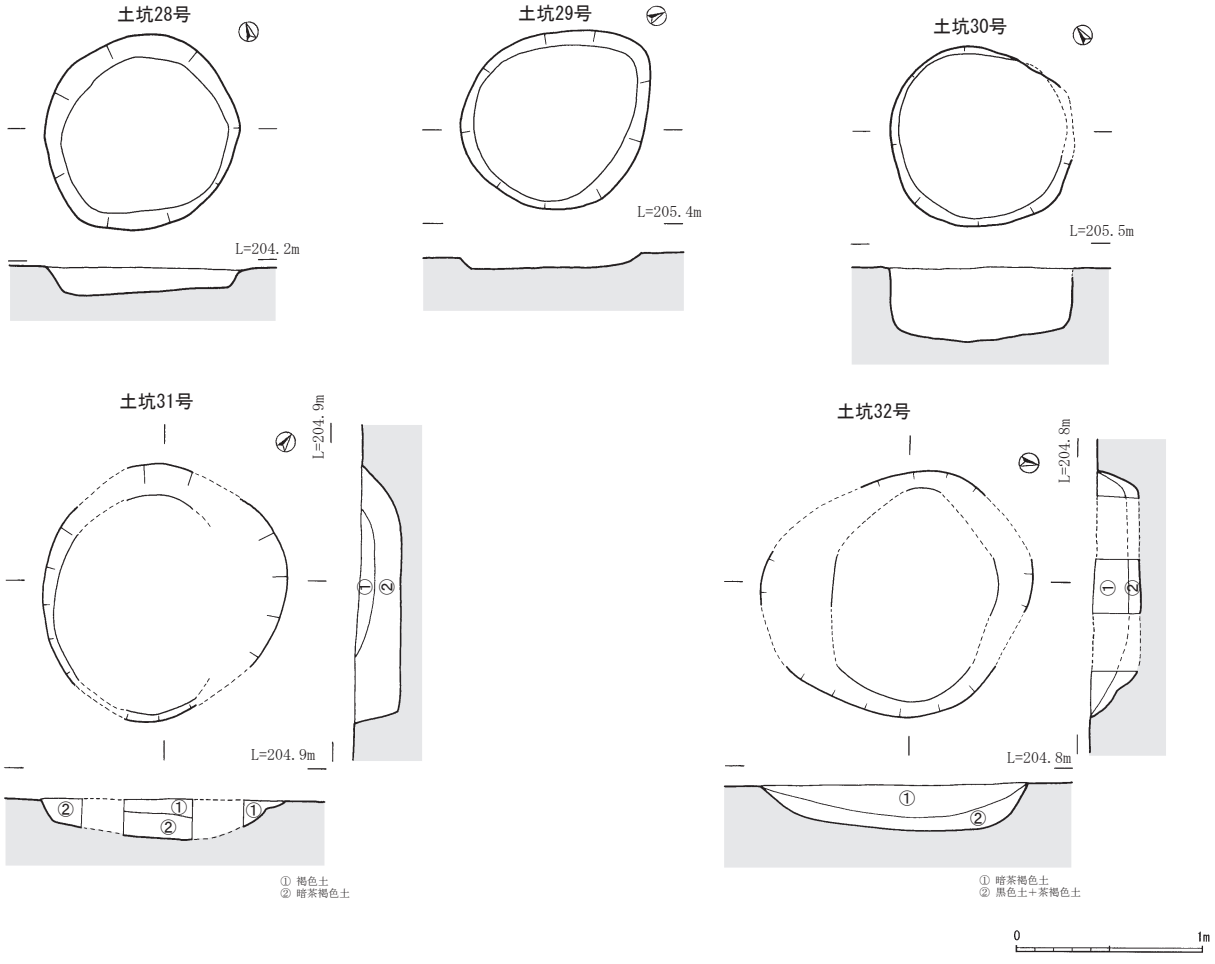
Ｅ－12区，Ⅳａ層で，一部，中世の土坑67号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸99cm，短軸98cm，底面までの深さは最深部で39cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑31号

Ｋ－９・10区，Ⅳａ層上面で，一部，トレンチャーに切られた形で検出された。規模は推定で長軸137cm，短軸131cm，底面までの深さは最深部で22cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する埋土は，粘性の強い暗茶褐色土（埋土②）を主体とし，その上部の検出面中央部に黒色土（埋土①）がレンズ状に堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑32号

Ｋ－10区，Ⅳａ層で，一部，トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸144cm，短軸131cm，底面までの深さは最深部で25cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。残存する埋土は，暗茶褐色土（埋土①）を主体とし，粘性が強い黒色土と茶褐色土の混土（埋土②）がレンズ状に堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。



第74図　古代の土坑３（Type １）

Type 1 土坑内出土遺物（第75図　101～103）

Type 1 土坑内から出土した遺物３点を図化した。３点とも土坑26号から出土した。

101は土師器甕の口縁である。口径が20cmと最も小さく，胎土が比較的粗い。内面のケズリは斜位へ施され，上端が揃っている。後述する「甕の分類」ではⅤ類に相当する。

102は土錘である。最長が4.5cm，最大幅が1.2cm，内孔の径が0.4cmで，片方欠損している。土錘の出土はこの１点のみである。

103は黒色土器である。外面に一部，墨書が確認できたが文字の判読はできなかった。内面は丁寧なミガキが施されている。

Type　2（楕円形タイプ：第76図～第79図）

土坑33号

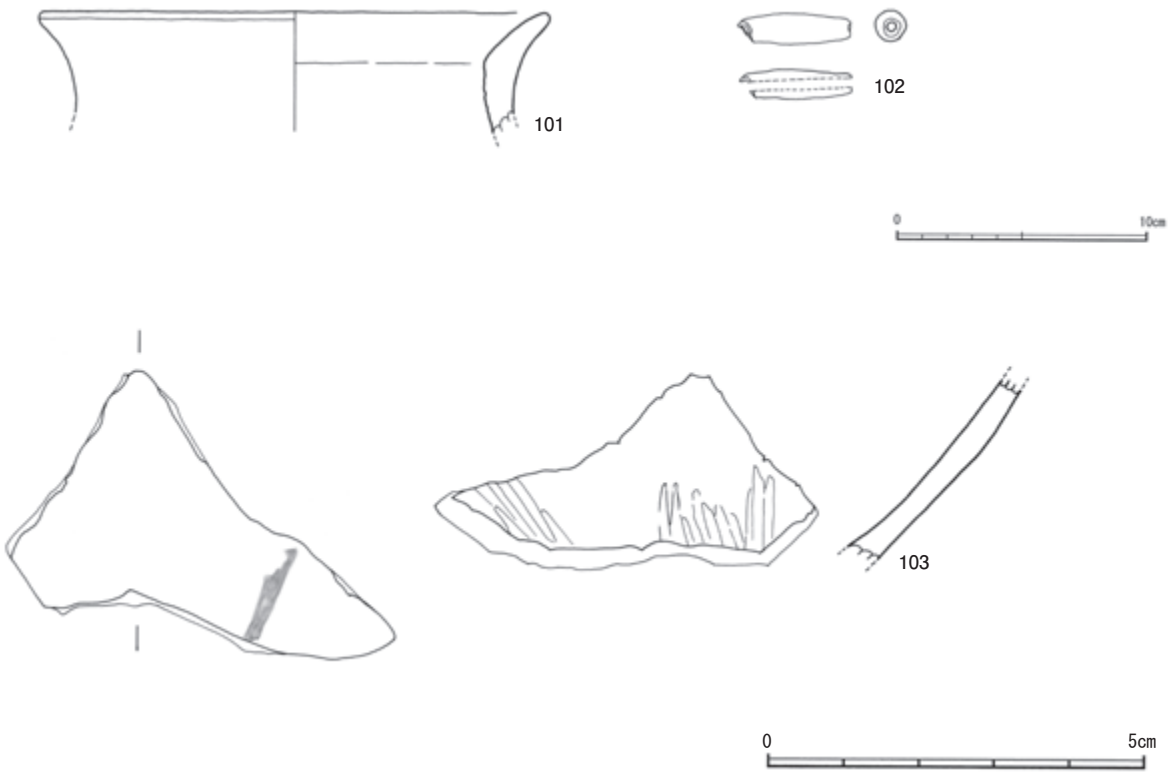
Ｎ－17区，Ⅳｂ層で検出された。規模は長軸68cm，短軸54cm，底面までの深さは最深部で８cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，黄色パミスを含む褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑34号

Ｎ－16区，Ⅳｂ層で，一部，撹乱を受けた形で検出された。規模は推定で長軸66cm，短軸53cm，底面までの深さは最深部で７cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，黄褐色の土塊が混ざる暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑35号

Ｎ－16区，Ⅳｂ層面で検出された。規模は長軸53cm，短軸32cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，黄色パミスを含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が１点出土したが細片のため図化できなかった。



第75図　Type 1 土坑内出土遺物

第25表　Type 1 土坑内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	遺構名	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調 外面	色調 内面	文様・調整 外面	文様・調整 内面	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	備考
75	101	E-7	土坑26号	－	土師器	甕	口縁部	Ⅴ	橙色	にぶい褐色	ナデ	ヘラケズリ	20	－	－	－		○		○	
	102	E-7	土坑26号	－	土錘	－	－	－	淡黄色	淡黄色	－	－	－	－	－	－					
	103	E-7	土坑26号	－	黒色土器	坏・埦	体部	－	橙色	黒色	ナデ	ミガキ	－	－	－	－					

土坑36号

Ｈ－11区，Ⅳａ層上面で，一部，トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸74cm，短軸47cm，底面までの深さは最深部で19cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，茶褐色の土塊が少し混ざった暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が３点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑37号

Ｈ－11区，Ⅳａ層上面で，一部，トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸81cm，短軸70cm，底面までの深さは最深部で10cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色の土塊が少し混ざった暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑38号

Ｌ－９区，Ⅳａ層上面で，一部，トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸94cm，短軸75cm，底面までの深さは最深部で19cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土（埋土①）と埋土①より明るい茶褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から遺物が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑39号

Ｌ－10区，Ⅳａ層で，一部，トレンチャーに切られた形で検出された。規模は推定で長軸95cm，短軸45cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。残存する埋土は暗茶褐色土（埋土②）を主体とし，その上部に黒色土（埋土①）がレンズ状に堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑40号

Ｍ・Ｎ－11区，Ⅳ層で，一部，イモ穴に切られた形で検出された。規模は推定で長軸101cm，短軸74cm，底面までの深さは最深部で21cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は，１㎜大の白色パミス・黄橙色パミスを含む暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が11点出土したが，細片や流れ込みで時期の違う遺物のため図化しなかった。

土坑41号

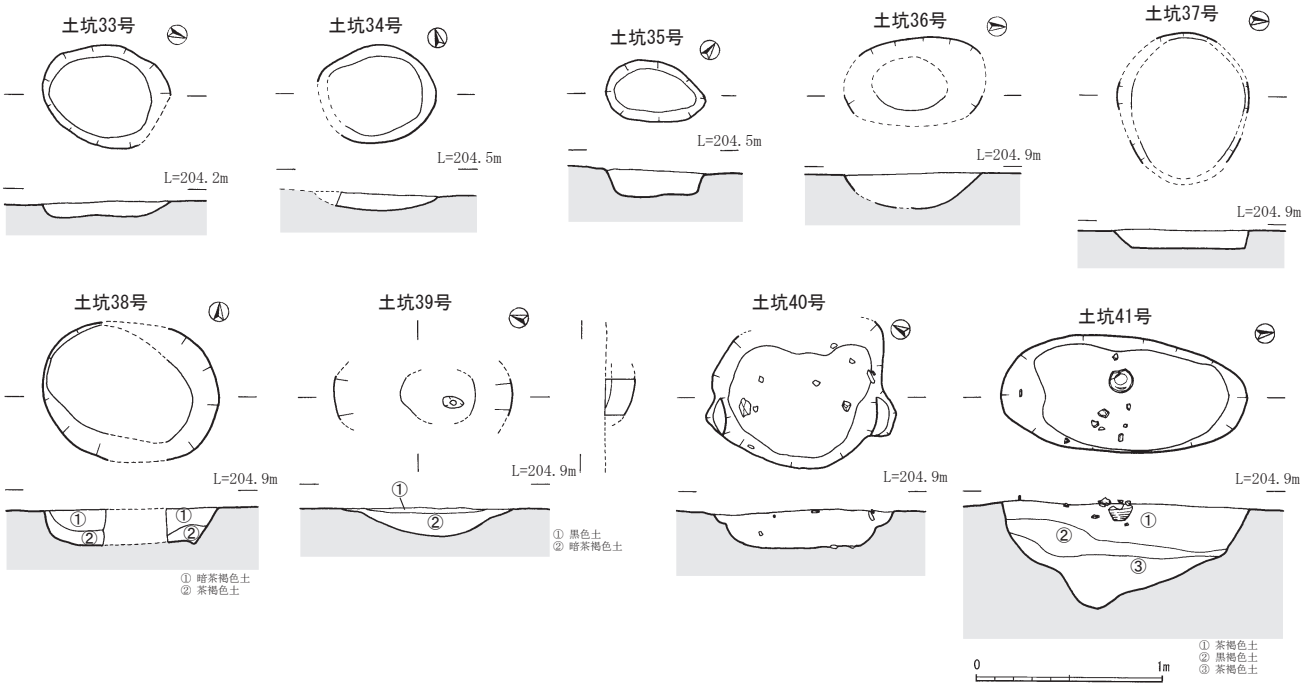
Ｆ－５区，Ⅳａ層で検出された。規模は長軸136cm，短軸61cm，底面までの深さは最深部で51cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，１㎜大の黄色パミスを少量含む茶褐色土（埋土①），１㎜大の黄色パミスを含む黒褐色土（埋土②），２～３㎜大の黄色パミスを含む茶褐色土（埋土③）が堆積していた。埋土中から遺物が16点出土したが，そのうちの２点を図化した。

土坑42号

Ｌ－５区，Ⅳａ層で，北側が調査区外へ延びる形で検出された。規模は推定で長軸89cm，短軸60cm，底面までの深さは最深部で30cmを測る。断面形は台形状を呈する。南側壁面に床面から深さ74cmのピットが検出されたが，用途は不明である。埋土は，オリーブ褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が２点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑43号

Ｇ－５区，Ⅳa層において検出された。規模は長軸114cm，短軸95cm，底面までの深さは最深部で32cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は，炭化物を多く含む黒褐色土（埋土①），暗褐色土（埋土②）が堆積していた。



第76図　古代の土坑４（Type ２）

埋土中から遺物が７点出土した。そのうち，土坑50号の３点，土坑51号の19点，土坑60号の44点と接合できたものをはじめとし，合計２点を図化した。

土坑44号

Ｌ－９区，Ⅳa層上面で中央と両端をトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸114cm，短軸89cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑45号

Ｎ－16区，Ⅳb層で検出された。規模は長軸91cm，短軸70cm，底面までの深さは最深部で30cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，３～10㎜大の黄褐色土を含む褐色土（埋土④），黄色パミスを含む暗褐色土（埋土③），２～８㎜大の黄褐色土を含む暗褐色土（埋土②），黄色パミスを少量含む暗褐色土（埋土①）が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑46号

Ｍ・Ｎ－11区，Ⅳa層上面でイモ穴の影響を受ける形で検出された。規模は長軸87cm，短軸73cm，底面までの深さは最深部で17cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，１㎜大の白と黄色のパミスが混ざる茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑47号

Ｆ－６区，Ⅳa層で検出された。規模は東側が検出時の掘りすぎで不明な部分（破線で予想範囲を提示）があるものの，長軸120cm，短軸114cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は，一部ピットで切られているもののほぼ台形状を呈する。埋土は，黄色パミスを含む暗黄褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が６点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑48号

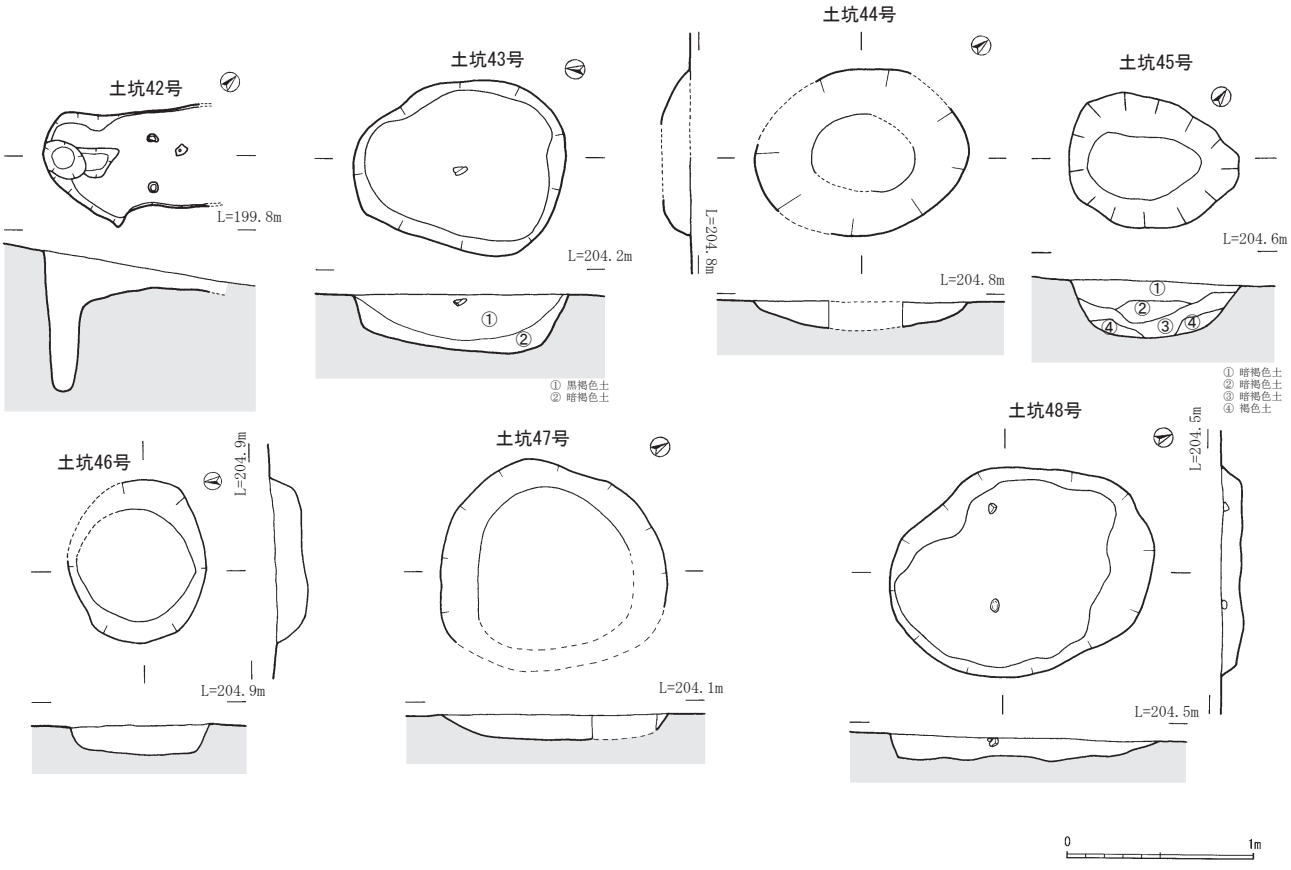
Ｉ－９区，Ⅳa層上面で検出された。規模は長軸140cm，短軸112cm，底面までの深さは最深部で13cmを測る。断面形は台形状を呈する。床面は平坦面を形成するものの起伏がある。埋土は，黄褐色土ブロックを少量含むオリーブ褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑49号

Ｋ－９・10区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸167cm，短軸94cm，底面までの深さは最深部で８cmを測る。断面形は浅い皿状を呈している。残存する箇所の埋土は，オリーブ褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑50号

Ｇ－５区，Ⅳa層において土坑90号を切り，土坑11号・



第77図　古代の土坑５（Type ２）

土坑60号に切られる形で検出された。規模は長軸180cm，短軸93cm，底面までの深さは最深部で60cmを測る。断面形は深い擂鉢状を呈する。埋土は，炭化物を含む黒褐色土（埋土①），黄パミス少量・炭化物大量に含む暗褐色土（埋土②），炭化物を含む褐色土（埋土③），黄色パミス少量・褐色土ブロックが混ざる黄褐色土（埋土④）が堆積していた。埋土中に遺物が７点出土し，土坑43号・土坑51号・土坑60号の遺物と接合でき，図化した。

土坑51号

Ｇ－５区，Ⅳa層で検出された。規模は長軸224cm，短軸103cm，底面までの深さは最深部で61cmを測る。断面形は擂鉢状を呈している。埋土は，黒色土（埋土①），黄白色パミスを少量含む褐色土(埋土②)，黄白色パミス，黄色土ブロックを含む暗褐色土（埋土③)，黄褐色土（埋土④），灰黄褐色土（埋土⑤）が堆積していた。どの埋土も全体的に炭化物を含み，部分的に集中域も確認された。埋土中に遺物が79点出土した。そのうちの20点は，土坑43号・土坑50号・土坑60号の遺物と接合でき，図化した。

土坑52号

Ｊ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーと土坑53号に切られる形で検出された。規模は長軸110cm，短軸75cm，底面までの深さは最深部で19cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色系の土塊が少量混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑53号

Ｊ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーと土坑54号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸79cm，短軸62cm，底面までの深さは最深部で８cmを測る。断面形は擂鉢状を呈している。埋土は，茶褐色土が少量ブロック状に混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑54号

Ｊ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーと土坑55号に切られる形で検出された。平面形の規模は長軸137cm，短軸86cm，底面までの深さは最深部で18cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色土と黒色土がまだらに混ざる黒褐色の土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑55号

Ｊ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーと56号土坑に切られる形で検出された。推定で長軸102cm，短軸95cm，底面までの深さは最深部で21cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色土がごく少量混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑56号

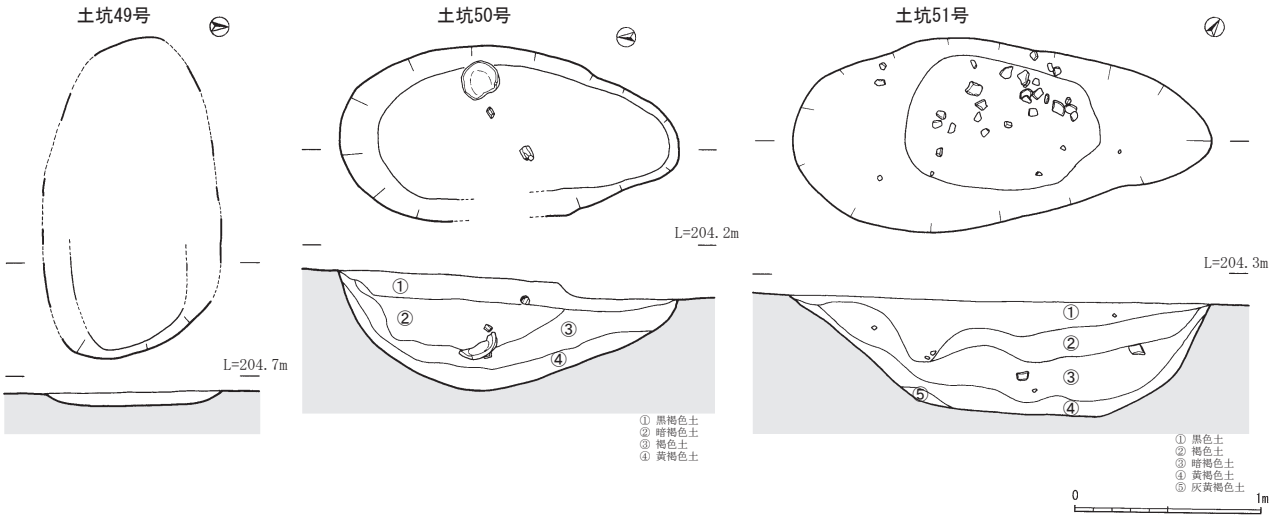
Ｊ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーと土坑57号及び土坑58号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸140cm，短軸53cm，底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色土が少量まだらに混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑57号

Ｊ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーと土坑58号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸96cm，短軸90cm，底面までの深さは最深部で25cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色土がまだらに混ざる黒褐色土（埋土①），下部に茶褐色土が少量ブロック状に混ざる黒褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑58号

Ｊ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸147cm，短軸118cm，底面までの深さは最深部で20cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色土がまだらに混ざる黒褐色土が堆積して



第78図　古代の土坑６（Type ２）

いた。埋土中に遺物が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑59号

Ｊ－９区，Ⅳa層上面で検出された。規模は推定で長軸53㎝，短軸43㎝，底面までの深さは最深部で10㎝を測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑60号

Ｇ－５区，Ⅳa層において土坑50号を切る形で検出された。規模は長軸208㎝，短軸128㎝，底面までの深さは最深部で22㎝を測る。断面形は皿状を呈する。埋土は，黄色土･黒色土のブロックを少量含む暗褐色土(埋土①)，炭化物を少量含む褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中に遺物が64点出土した。そのうち44点が，土坑43号･土坑50号・土坑51号の遺物と接合でき，図化した。

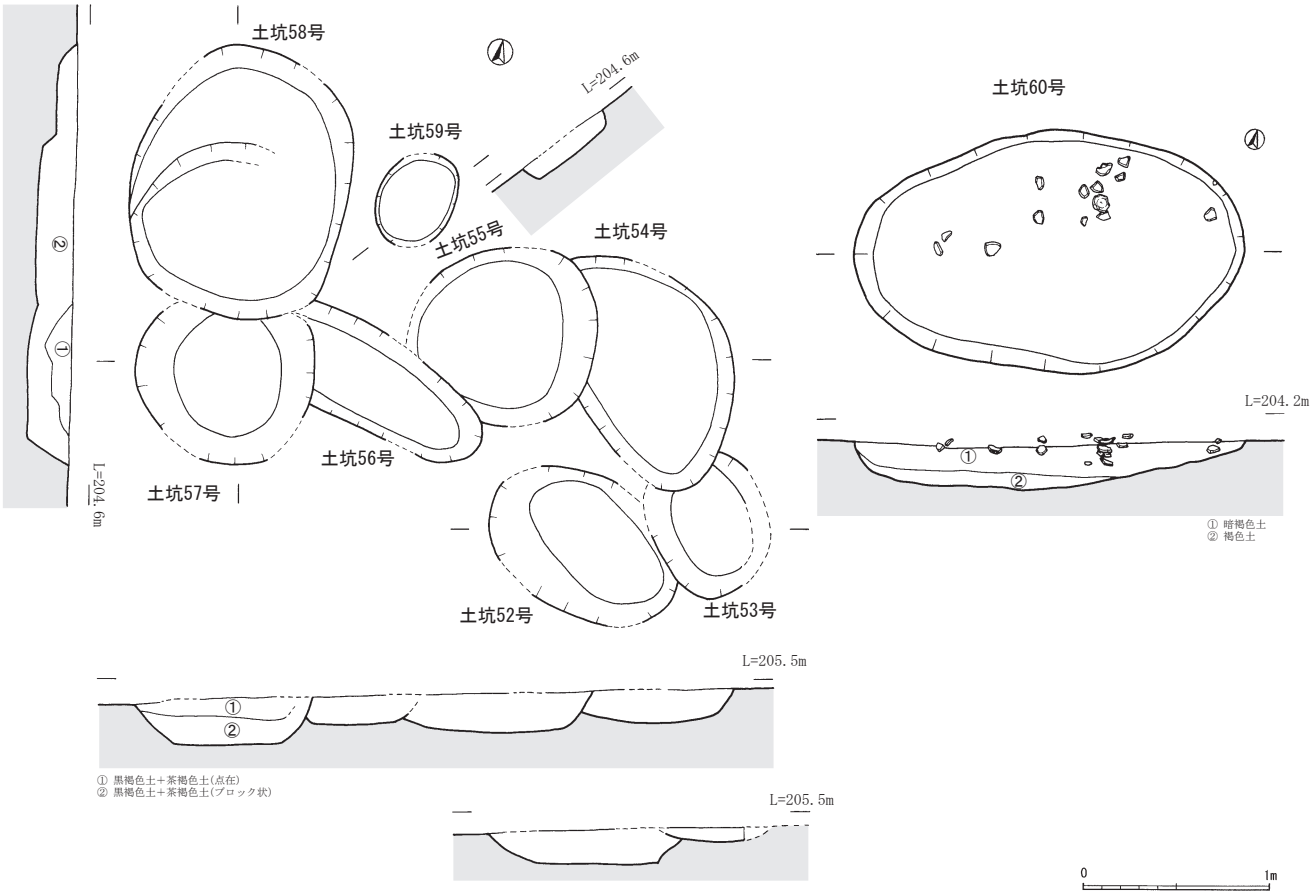
Type ２土坑内出土遺物（第80図　104～110）

Type ２土坑内から出土した遺物７点を図化した。

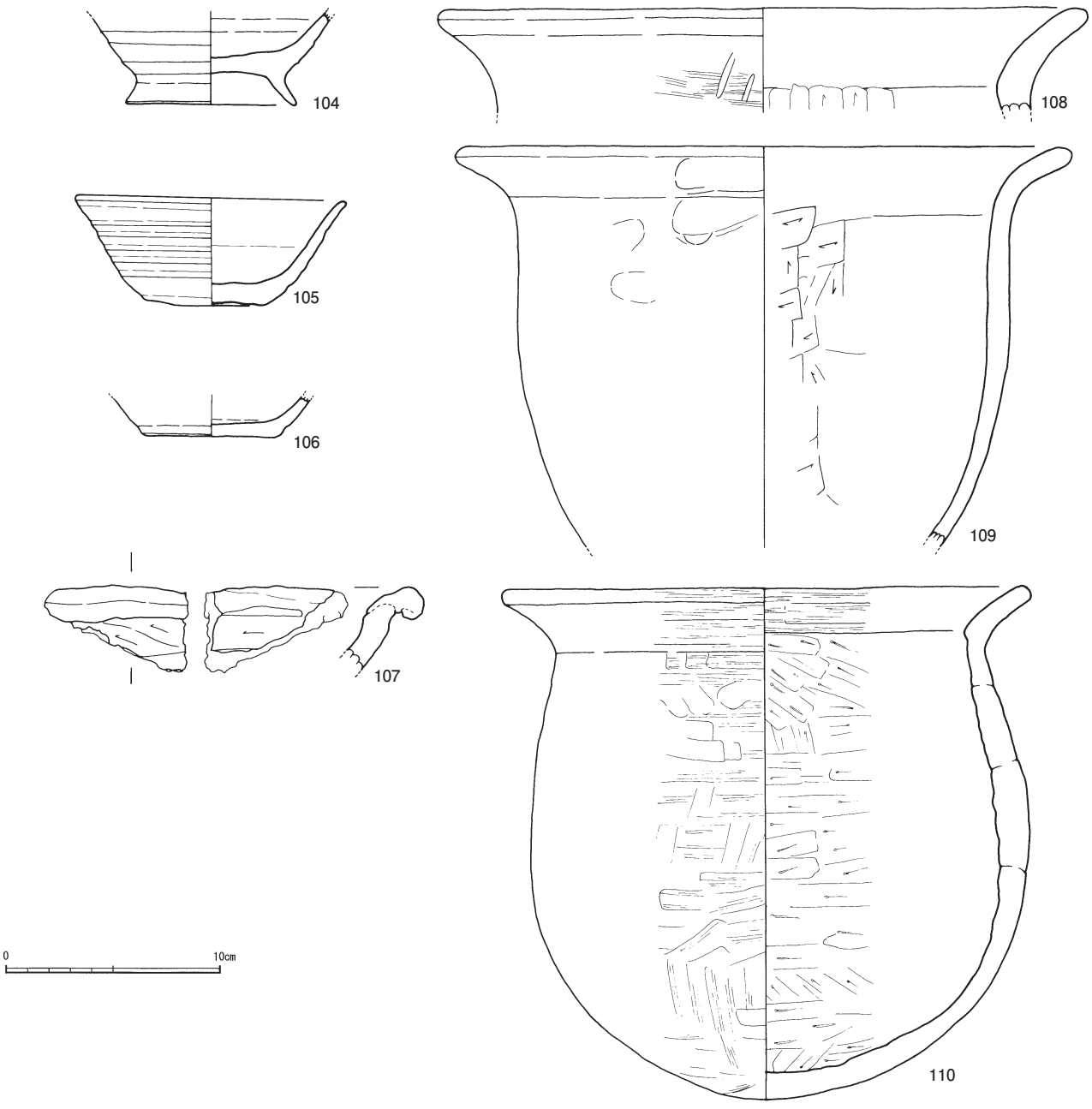
104は土師器の埦である。高台がハの字状に開き，体部はやや内湾して立ち上がる。体部外面はケズリによって凹凸がつき，体部上面にかけて器壁が薄くなる。底部内面はナデにより凹凸が残り，外面にはヘラ切り痕が残る。高台内面に接合痕が残り，明瞭な稜が入る。

105･106は土師器の坏である。105は口縁がやや外反し，体部はナデにより明確な凹凸がつく。底部端には稜がつき,底部にはヘラ切り痕が残る。内面は体部下にナデによる凹凸がつく。106は142と胎土が類似し，円盤状の底部を有する。底部のヘラ切り痕はナデて消されており，内面は一部にススが付着する。

107は胎土と作りが共に粗く，甕もしくは鍋と思われる。古代の竪穴住居状遺構１号のものと類似する。口縁部は外側から内側に折り返して作られる。外面はわずかにナデており，内面は口縁部下の胴部に横方向のケズリが施される。108 ～ 110は土師器甕である。108は口縁内外に強いナデが施され，やや玉縁状になる。内面のケズリは横位へ丁寧に施される。後述する「甕の分類」ではⅣb類に相当する。109は口縁が短く,底部に向けて器壁が薄くなる。胴部内面のケズリは上端はそろっているが一部不揃いのため，器壁が厚くなる部分がある。分類ではⅡ類に相当する。110は口縁は短く端部に丸味を帯び，胴部が張る。口縁部内外にはナデを施し，胴部内面はケズリが全面に施される。外面には一部ハケメも見られる。分類ではⅢa類に相当する。



第79図　古代の土坑７(Type ２)



第80図　Type ２土坑内出土遺物

第26表　Type ２土坑内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	遺構名	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
80	104	G-5	土坑60号	7	土師器	埦	体～底部	Ⅵ	橙色	にぶい橙色	ケズリ,ヘラ切り→ナデ（底部）→高台→ナデ	ナデ	－	8.0	－	1.5	○				
	105	F-5	土坑41号	8	土師器	坏	ほぼ完形	Ⅴb	橙色	橙色	ヘラ切り ナデ	ナデ	12.4	5.5	4.9	－	○				
	106	F-5	土坑41号	4	土師器	坏	底部	Ⅳ	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	－	6.0	－	－					ススト付着
	107	G-5	土坑43号	－	土師器	甕・鍋	口縁部	その他	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ヘラケズリ	－	－	－	－	○				
	108	G-5	土坑51号	－	土師器	甕	口縁部	Ⅳb	橙色	橙色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	29.4	－	－	－	○				
	109	G-5	土坑51・60号	－	土師器	甕	口縁～胴部	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	27.5	－	－	－	○		○		ススト付着
	110	G-5	土坑43・50・51・60号	－	土師器	甕	口縁～底部	Ⅲa	にぶい橙色	にぶい褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	24.2	－	23.7	－				○	

Type　3（隅丸方形タイプ：第81図）

土坑61号

Ｎ－９区，Ⅳa層でトレンチャーにより切られる形で検出された。長軸53cm，短軸51cm，底面までの深さは最深部で49cmを測る。断面形は深い擂鉢状を呈している。埋土は，２㎜大の黄色パミスと茶褐色土が部分的にブロック状に混ざる暗茶褐色土（埋土①）と，茶褐色土に暗茶褐色土が混じった色調で茶褐色土が部分的にブロック状に入る土（埋土②）と，暗茶褐色土（埋土③）が堆積していた。埋土中に遺物が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑62号

Ｎ－18区，Ⅳb層ではピットに一部切られる形で検出された。規模は推定で長軸55cm，短軸53cm，底面までの深さは最深部で67cmを測る。断面形は袋状を呈し，下部がやや広くなっている。埋土は，黄色パミスを含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑63号

Ｍ－14区，Ⅳb層面で検出された。規模は長軸70cm，短軸38cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は台形状を呈し，底部が大きくすぼまる形をしている。埋土は，２～４cm大のアカホヤブロックを少量含む暗褐色土（埋土①），黄色パミスを含む褐色土（埋土②），３～６cm大の茶褐色土ブロックと黄色パミスを少量含む暗褐色土(埋土③)，黄色パミスを微量含む褐色土(埋土④)，１～５cm大の茶褐色土ブロックを微量と黄色パミスを多量に含む黒褐色土(埋土⑤)が堆積していた。埋土内(埋土⑤）には，炭化材１点が含有される。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑64号

Ｍ－14区，Ⅳa層でピットと切り合う形で検出された。規模は長軸134cm，短軸110cm，底面までの深さは最深部で27cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，黄色粒・炭化粒を含む暗褐色土（埋土①）を基本に，１cm程の黄褐色土ブロックを微量含む暗褐色土（埋土②），下部には黄色パミスを含む黒褐色土（埋土③），１～４cm程度の焼土ブロックを含む暗褐色土（埋土④）が堆積していた。埋土中から土器片36点，軽石製品９点が出土した。土師器甕片は細片のため図化できなかった。軽石製品については接合した後，１点を図化した。

床面付近に焼土や炭化物を含む土がみられること，埋土中の土師器甕と支脚と思われる軽石製品の出土，また，裾や煙道がないことからカマド状遺構の可能性は低く，炉状遺構の可能性もある。

土坑65号

Ｋ・Ｌ－10区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸123cm，短軸99cm，底面までの深さは最深部で７cmを測る。断面形は浅い擂鉢状を呈する。残存する埋土は古代該当の暗茶褐色土であった。埋土中から同一固体と思われる玉縁状口縁の白磁片が２点出土したが，流れ込みの遺物であると考える。２点のうち１点を図化し，「中世の遺物」の項で報告している。

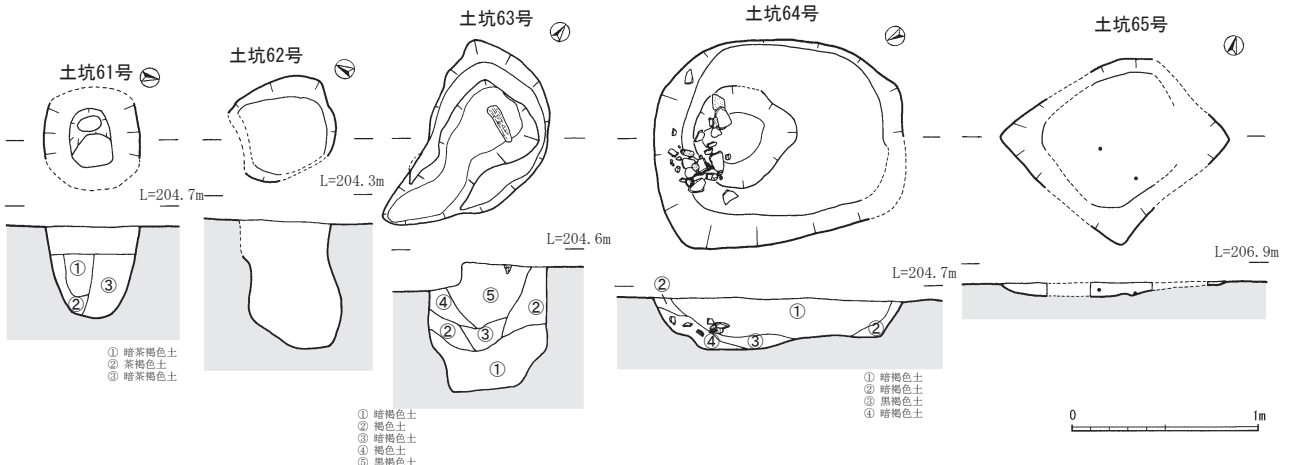
Type　4（隅丸方形ロングタイプ：第82図）

土坑66号

Ｇ・Ｈ－11区，Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸80cm，短軸55cm，底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色土が少量ブロック状に混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑67号

Ｍ－17区，Ⅳa層で検出された。規模は長軸172cm，短軸79cm，底面までの深さは最深部で８cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，茶褐色土がマーブル状に混ざる暗茶褐色土（埋土①），一部茶褐色土が混ざる暗茶褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から遺物2点



第81図　古代の土坑８(Type ３)

が出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑68号

Ｍ・Ｎ－９区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸158cm，短軸70cm，底面までの深さは最深部で28cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は，暗茶褐色土と茶褐色土の混合土（埋土①），暗茶褐色土と茶褐色土の混ざる黒色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から遺物が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑69号

Ｋ・Ｌ－10区，Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸160cm，短軸95cm，底面までの深さは最深部で７cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は，黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑70号

Ｌ－10区，Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸171cm，短軸91cm，底面までの深さは最深部で５cmを測る。断面形は浅い舟形状を呈する。残存する箇所の埋土は暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

Type　5　（その他，不確定なもの等：第83図～第85図）

土坑71号

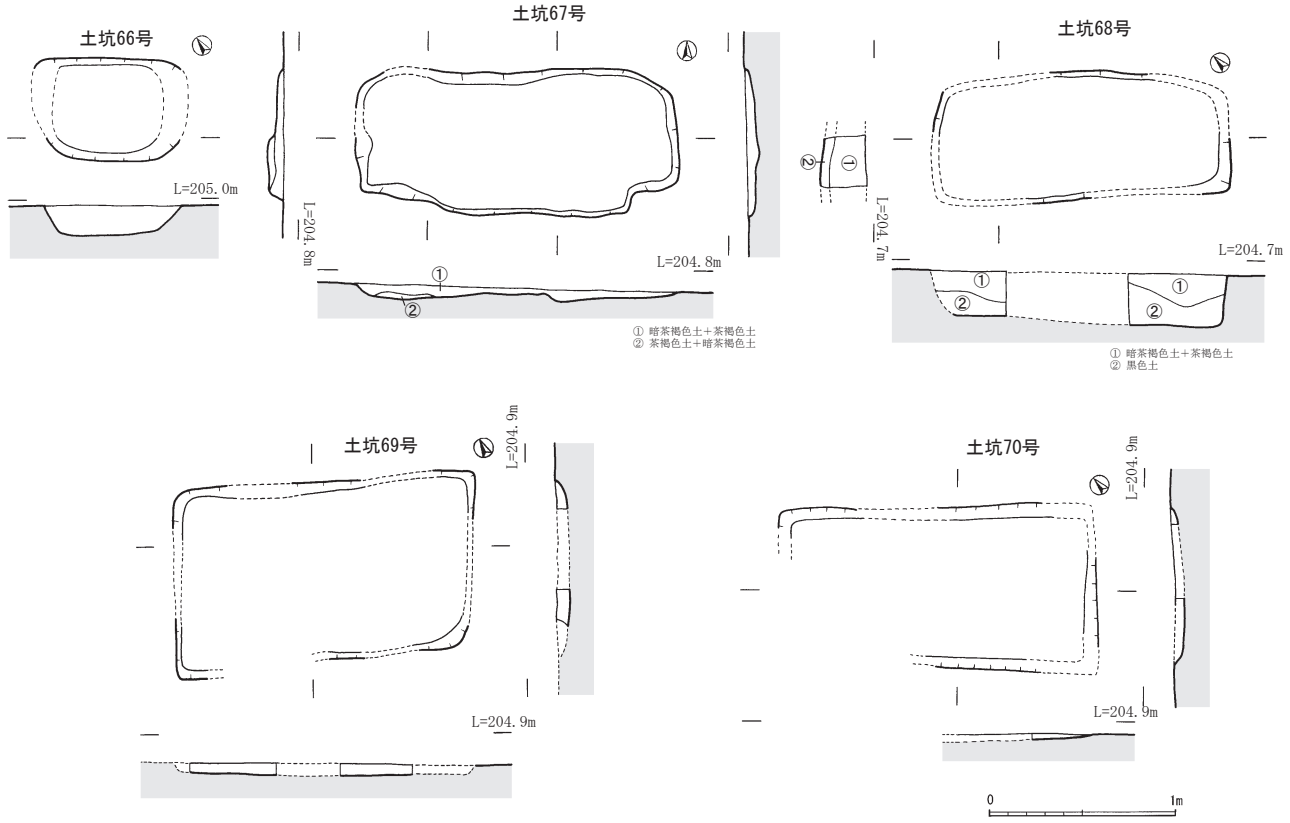
Ｇ－11区，Ⅳa層上面で北西側を土坑72号に，北東側をトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸52cm，短軸14cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は，トレンチャーの影響を受け全体像は見えない。残存する箇所の埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑72号

Ｇ－12区，Ⅳa層上面で南西側が調査区外，北東側をトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸75cm，短軸20cm，底面までの深さは最深部で23cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は，茶褐色土が少量ブロック状に混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑73号

Ｎ－17区，Ⅳb層で東側が調査区外，さらに撹乱の影響を受ける形で検出された。規模は推定で長軸108cm，短軸24cm，底面までの深さは最深部で24cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は，黄色パミ



第82図　古代の土坑９（Type ４）

スを含むにぶい黄褐色土（埋土①），黄色パミスを少量含む暗褐色土（埋土②），黄色パミスを少量含む黒褐色土（埋土③）が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑74号

Ｎ－18区，Ⅳb層で南側を撹乱とピットに切られる形で検出された。規模は推定で長軸54cm，短軸47cm，底面までの深さは最深部で13cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は，黄色パミスを含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑75号

Ｎ－16区，Ⅳa層でピットと土坑45号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸111cm，短軸67cm，底面までの深さは最深部で66cmを測る。断面形は舟形状を呈する。残存する箇所の埋土は，暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑76号

Ｋ－10区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定長軸67cm，短軸46cm，底面までの深さは最深部で８cmを測る。断面形は浅い擂鉢状を呈する。残存する箇所の埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑77号

Ｌ－９区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸59cm，短軸22cm，底面までの深さは最深部で13cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑78号

Ｎ－16区，Ⅳb層で東側が調査区外という形で検出された。規模は推定で長軸73cm，短軸30cm，底面までの深さは最深部で18cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，黄色パミスを少量含む暗褐色土（埋土①）と黄色パミスを含むにぶい黄褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑79号

Ｌ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸73cm，短軸18cm，底面までの深さは最深部で９cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑80号

Ｎ－17・18区，Ⅳb層で東側が調査区外という形で検出された。規模は推定で長軸118cm，短軸24cm，底面までの深さは最深部で24cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，黄色パミスと炭化物を微量含む褐色土（埋土①）と黄色パミスと炭化物を微量含む暗褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑81号

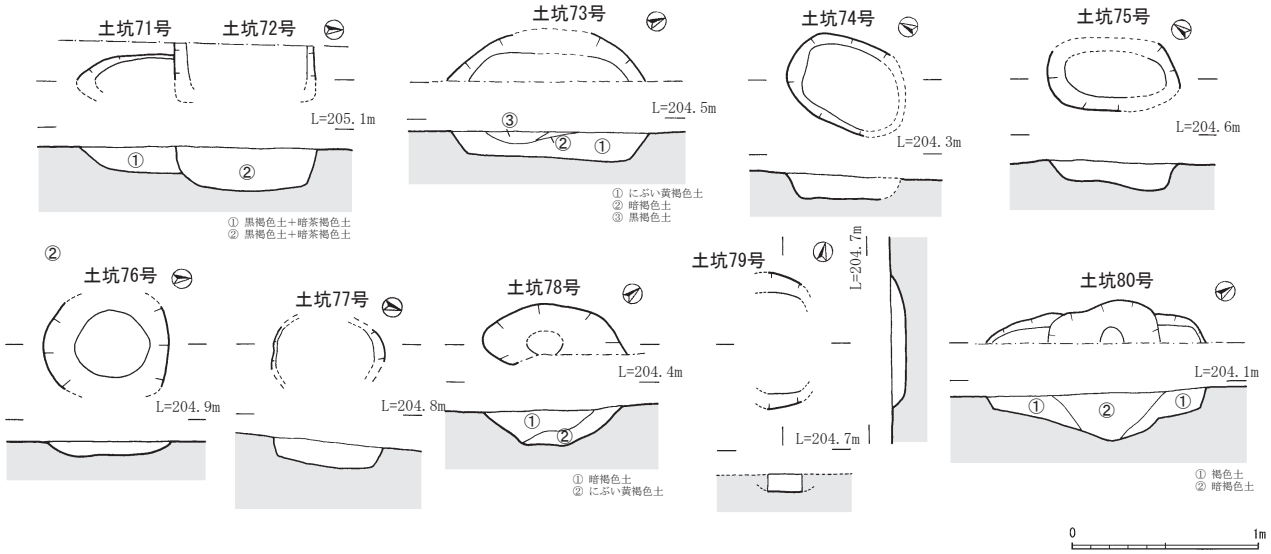
Ｌ－10区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸157cm，短軸11cm，底面までの深さは最深部で33cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。残存する埋土は，暗茶褐色土（埋土②）を主体とし，粘性が強い黒色土と茶褐色土の混土（埋土①）がレンズ状に堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑82号

Ｌ－９・10区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸115cm，短軸74cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は，２㎜大の白パミスを少量含む暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑83号

Ｎ－17区，Ⅳb層で東側に大きく撹乱の影響を受ける形で検出された。規模は推定で長軸80cm，短軸53cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。残存する箇所の埋土は，黄色パミスを含む暗褐



第83図　古代の土坑10（Type ５）

色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑84号

Ｍ－11区，Ⅳb層でイモ穴の影響を受ける形で検出された。規模は推定で長軸63cm，短軸30cm，底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形は舟形状を呈する。残存する箇所の埋土は，１㎜大の白と黄色のパミスが混ざる茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物４点が出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑85号

Ｋ－９区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸75cm，短軸25cm，底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は暗茶褐色土の単一埋土で，埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑86号

Ｌ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸70cm，短軸21cm，底面までの深さは最深部で９cmを測る。断面形は浅い台形を呈する。埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

土坑87号

Ｌ－９区，Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸138cm，短軸76cm，底面までの深さは最深部で17cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は，暗茶褐色土を中心に部分的に２cm大の黒色土のブロックが混ざり堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑88号

Ｌ－10区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模はトレンチャーの影響で全体像は見えず，長軸，短軸測定不可能である。底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形もトレンチャーの影響で全体像は見えない。残存する箇所の埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

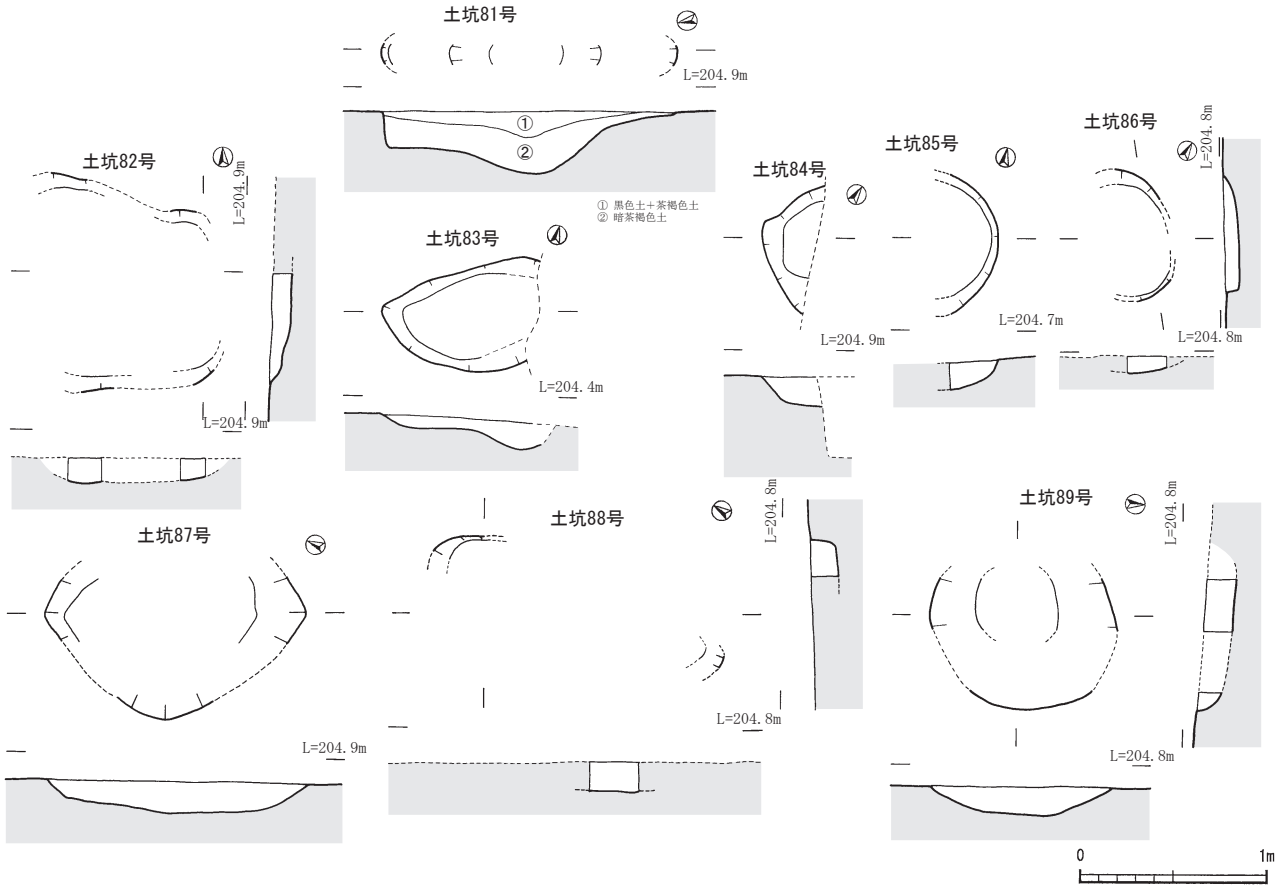
土坑89号

Ｋ－９・10区，Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸99cm，短軸70cm，底面までの深さは最深部で15cmを測る。断面形は台形状を呈する。

残存する箇所の埋土は，暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑90号

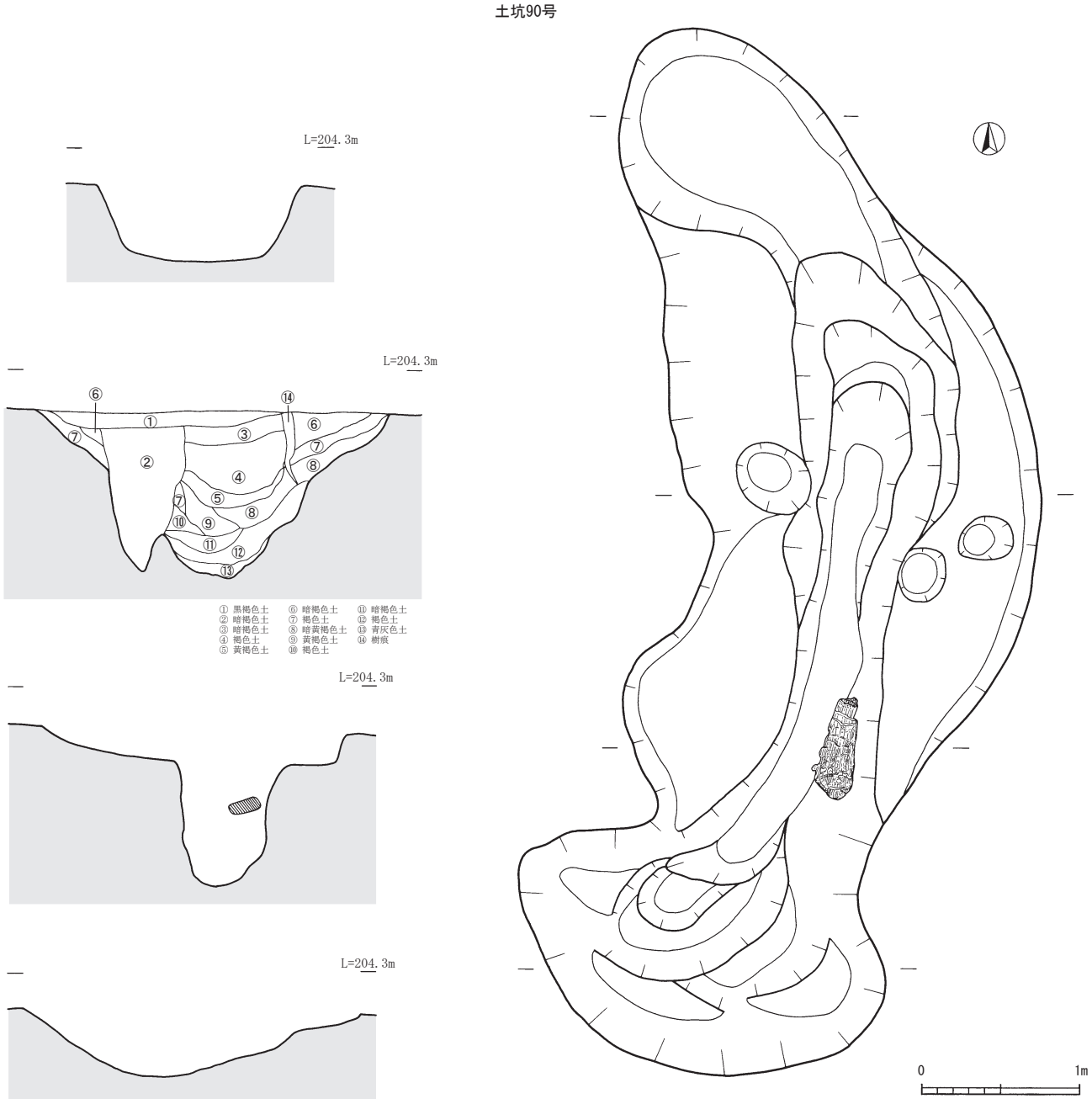
Ｇ－５区，Ⅳa層において検出された。規模は長軸622



第84図　古代の土坑11（Type ５）

cm，短軸330cm，底面までの深さは最深部で104cmを測る。断面形は最深部付近は擂鉢状を呈しているが，所々深く掘り込まれた部分もあるが，全体的にみて不定形な形状である。埋土は，黒褐色土（埋土①），炭化物を含む暗褐色土（埋土②），黄パミス少量・炭化物大量に含む暗褐色土（埋土③），炭化物を含む褐色土（埋土④），黄色パミス少量･褐色土ブロックが混ざる黄褐色土(埋土⑤)，黒褐色土ブロックが部分的に混ざる暗褐色土（埋土⑥），白黄色パミスを少量含む褐色土（埋土⑦），黄色パミスを少量含む暗黄褐色土（埋土⑧），黄色パミスを少量含む黄褐色土（埋土⑨），黄色パミスを少量含み黄褐色土ブロック状に混ざる褐色土（埋土⑩），黄色パミスを少量含む暗褐色土（埋土⑪），褐色土（埋土⑫），部分的に鉄分の付着した赤橙色の硬化土が見られる青灰色土（埋土⑬）が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

連続的に拡張されたためか南北に細長く，三日月状に弧を描く形状で不定形な大型土坑である。この土坑90号の上部では，土坑11号・43号・50号・51号・60号の５基が確認されており，一部，土坑11号・50号に切られる形で検出された。



第85図　古代の土坑12(Type ５)

第27表　古代の土坑計測表

（　）内は欠損部分までの測定値

挿図番号	形状Type	掲載番号	検出区	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	調査時番　号	備考
72	1	1号	K－9	52	(40)	5	63	
		2号	J－9	58	53	11	184	
		3号	E－12	64	(55)	10	927-2	
		4号	M－11	66	62	9	751	
		5号	N－11	67	66	22	754	
		6号	J－6	64	50	36	1354	
		7号	E－8	68	62	7	1043	
		8号	E－12	65	64	15	927-1	
		9号	L·M－18	69	69	4	745	
		10号	E－7	73	73	6	1046	
		11号	G－5	56	48	85	1302	
		12号	L－9	71	(70)	7	33	
		13号	N－11	72	68	18	747	
		14号	E－7	70	70	34	1276	
		15号	N－18	68	(65)	37	809-1	
		16号	E－12	(95)	92	28	946	
		17号	I－10	88	81	7	202	
		18号	K－16	78	76	11	P2009	
		19号	J－9	86	78	7	186	
73		20号	F－5	93	(80)	6	1303-1	
		21号	D－18	100	90	8	1099	
		22号	E－12	95	84	26	923	
		23号	K－9·10	98	91	16	116	
		24号	G－3	95	91	12	1308	
		25号	M－11	94	85	18	749	
		26号	E－7	92	90	21	1051	
		27号	E－12	(96)	90	34	942	
74		28号	F－7	104	104	15	1045	
		29号	K－16	97	96	8	P2008	
		30号	E－12	99	98	39	924	
		31号	K－9·10	137	131	22	56	
		32号	K－10	144	131	25	70	
76	2	33号	N－17	68	54	8	813	
		34号	N－16	66	53	7	835	
		35号	N－16	53	32	14	837	
		36号	H－11	74	(47)	19	136	
		37号	H－11	(81)	70	10	137	
		38号	L－9	94	75	19	35	
		39号	L－10	95	(45)	14	52	
		40号	M·N－11	101	(74)	21	752	
		41号	F－5	136	61	51	1306	
77		42号	L－5	(89)	60	30	4	
		43号	G－5	114	95	32	1321	
		44号	L－9	114	89	14	41	
		45号	N－16	91	70	30	914	

挿図番号	形状Type	掲載番号	検出区	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	調査時番　号	備考
77	2	46号	M·N－11	87	73	17	753	
		47号	F－6	120	(114)	14	1057	
		48号	I－9	140	112	13	183	
78		49号	K－9·10	167	94	8	73	
		50号	G－5	180	93	60	1323	
		51号	G－5	224	103	61	1301	
79		52号	J－9	110	75	19	80	
		53号	J－9	(79)	(62)	8	81	
		54号	J－9	137	86	18	82	
		55号	J－9	(102)	95	21	83	
		56号	J－9	(140)	53	16	84	
		57号	J－9	(96)	90	25	85	
		58号	J－9	147	118	20	86	
		59号	J－9	(53)	43	10	87	
		60号	G－5	208	128	22	1322	
81	3	61号	N－9	(53)	51	49	317	
		62号	N－18	55	(53)	67	848	
		63号	M－14	70	38	14	919	
		64号	M－14	134	110	27	798	
		65号	K·L－10	123	99	7	58	
82	4	66号	G·H－11	(80)	55	16	139	
		67号	M－17	172	79	8	721	
		68号	M·N－9	158	70	28	315	
		69号	K·L－10	160	95	7	57-1	
		70号	L－10	171	91	5	50	
83	5	71号	G－11	(52)	(14)	14	143	
		72号	G－12	75	(20)	23	142	
		73号	N－17	108	(24)	24	825	
		74号	N－18	(54)	47	13	847	
		75号	N－16	111	(67)	66	918	
		76号	K－10	67	(46)	8	66	
		77号	K－9	59	(22)	13	92	
		78号	N－16	73	(30)	18	833	
		79号	L－9	73	(18)	9	38	
		80号	N－17·18	118	(24)	24	811	
84		81号	L－10	157	(11)	33	44	
		82号	L－9·10	(115)	(74)	14	37	
		83号	N－17	(80)	53	14	827	
		84号	M－11	(63)	(30)	16	750	
		85号	K－9	(75)	(25)	14	60	
		86号	L－9	(70)	(21)	9	40	
		87号	L－9	138	(76)	17	42	
		88号	L－10	測定不能	測定不能	16	115	
		89号	K－9·10	(99)	70	15	71	
85		90号	G－5	622	330	104	1329	

(4)　古代のピット

古代該当のピットは660基検出された。このうち遺物が出土したピット32基について掲載・報告することとした。(第86図～第88図)

ピット１（Ｐ１）

Ｅ－15区，Ⅳb層で検出された。トレンチャーにより切られてはいるものの，円形を呈しているものと予想される（13cm×６cm)。深さは８cmを測り，埋土内から土器片が１点出土した。

ピット２（Ｐ２）

Ｆ－７区，Ⅳa層で検出された。長径21cm×短径20cmの円形を呈する（深さは測定不能)。埋土内から「カ」と刻まれた須恵器の小壺１点と土師器片４点が出土し，須恵器の小壺１点と土師器片２点を図化した。

ピット３（Ｐ３）

Ｌ－12区，Ⅳ層で検出された。長径24cm×短径24cmの円形を呈し，深さは62cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット４（Ｐ４）

Ｎ－14区，Ⅳb層で検出された。長径24cm×短径23cmの円形を呈し，深さは53cmを測る。埋土内から土師器片が１点，土器片が２点出土した。

ピット５（Ｐ５）

Ｅ－８区，Ⅳa層で検出された。長径24cm×短径20cmの円形を呈し，深さは37cmを測る。埋土内から土師器片が１点出土した。

ピット６（Ｐ６）

Ｍ－14区，Ⅳa層で検出された。長径25cm×短径24cmの円形を呈し，深さは10cmを測る。埋土内から土師器甕片（口縁部）が１点出土した。

ピット７（Ｐ７）

Ｆ－７区，Ⅳb層で検出された。長径25cm×短径25cmの円形を呈し，深さは46cmを測る。埋土内から土師器甕片が１点出土した。

ピット８（Ｐ８）

Ｍ－14区，Ⅳb層で検出された。長径28cm×短径18cmの楕円形を呈し，深さは26cmを測る。埋土内から土師器片が１点出土した。

ピット９（Ｐ９）

Ⅰ－21区，Ⅳb層で検出された。長径28cm×短径25cmの円形を呈し，深さは35cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット10（Ｐ10）

Ｎ－14区，Ⅳb層で検出された。長径30cm×短径28cmの円形を呈し，深さは41cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット11（Ｐ11）

Ｎ－14区，Ⅳb層で検出された。長径31cm×短径30cmの円形を呈し，深さは16cmを測る。埋土内から土師器片が２点出土した。

ピット12（Ｐ12）

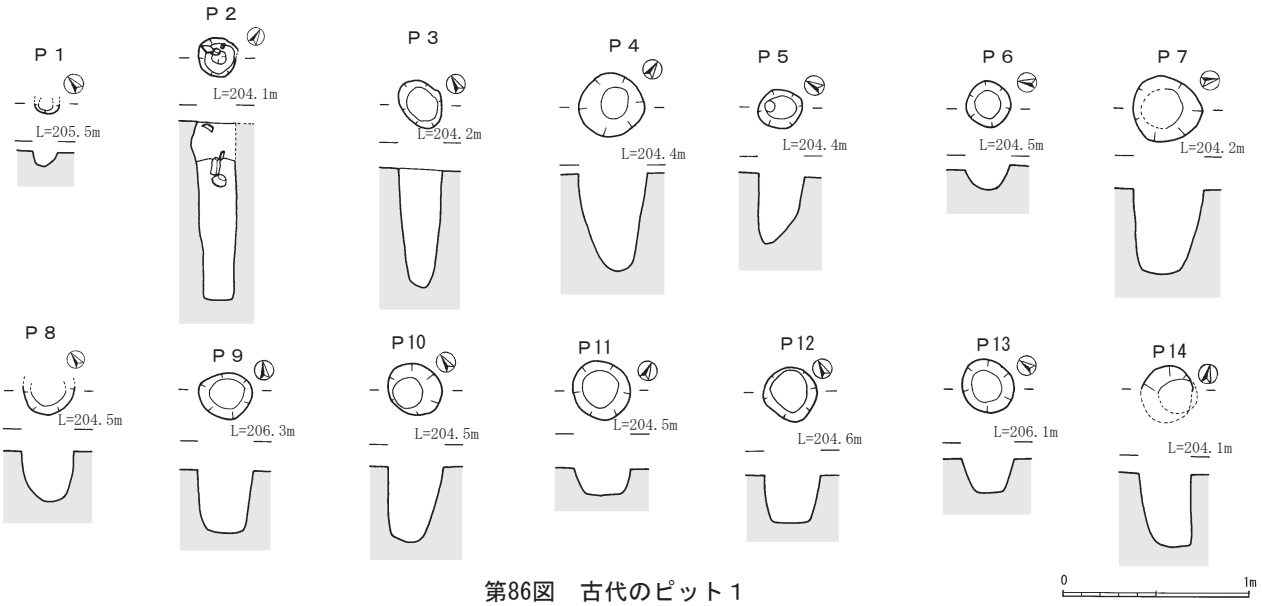
Ｍ－14区，Ⅳa層で検出された。長径30cm×短径30cmの円形を呈し，深さは24cmを測る。埋土内から土師器片が１点出土した。

ピット13（Ｐ13）

Ⅰ－21区，Ⅳb層で検出された。長径30cm×短径28cmの円形を呈し，深さは33cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット14（Ｐ14）

Ｆ－７区，Ⅳa層で検出された。長径30cm×短径27cmの円形を呈するものと考える。深さは40cmを測る。埋土内から土器片が２点出土した。



第86図　古代のピット１

ピット15（Ｐ15）

Ｎ－14区，Ⅳa層で検出された。長径31cm×短径31cmの円形を呈し，深さは36cmを測る。埋土内から土師器甕片が１点，土器片が１点出土した。

ピット16（Ｐ16）

Ｎ－14区，Ⅳb層で検出された。長径32cm×短径31cmの円形を呈し，深さは23cmを測る。埋土内から土器片が１点，黒曜石のチップが１点出土した。

ピット17（Ｐ17）

Ｍ－12・13区，Ⅴa層で検出された。長径35cm×短径34cmの円形を呈し，深さは64cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット18（Ｐ18）

Ｎ－16区，Ⅳb層で検出された。長径35cm×短径31cmの円形を呈し，深さは70cmを測る。埋土内から土器片が２点出土した。

ピット19（Ｐ19）

Ｍ－14区，Ⅳa層で検出された。長径35cm×短径32cmの円形を呈し，深さは20cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット20（Ｐ20）

Ｆ－７区，Ⅳa層で検出された。長径35cm×短径24cmの楕円形を呈する（深さは測定不能）。埋土内から土器片が２点出土した。

ピット21（Ｐ21）

Ｈ－22区，Ⅴa層で検出された。長径36cm×短径35cmの円形を呈し，深さは28cmを測る。埋土内から土器片が２点出土した。

ピット22（Ｐ22）

Ｌ－12区，Ⅳa層で検出された。長径37cm×短径34cmの円形を呈し，深さは56cmを測る。埋土内から石皿が１点出土した。

ピット23（Ｐ23）

Ｎ－14区，Ⅳb層で検出された。長径37cm×短径35cmの円形を呈し，深さは47cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット24（Ｐ24）

Ｍ－14区，Ⅳa層で検出された。長径38cm×短径23cmの楕円形を呈し，深さは33cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット25（Ｐ25）

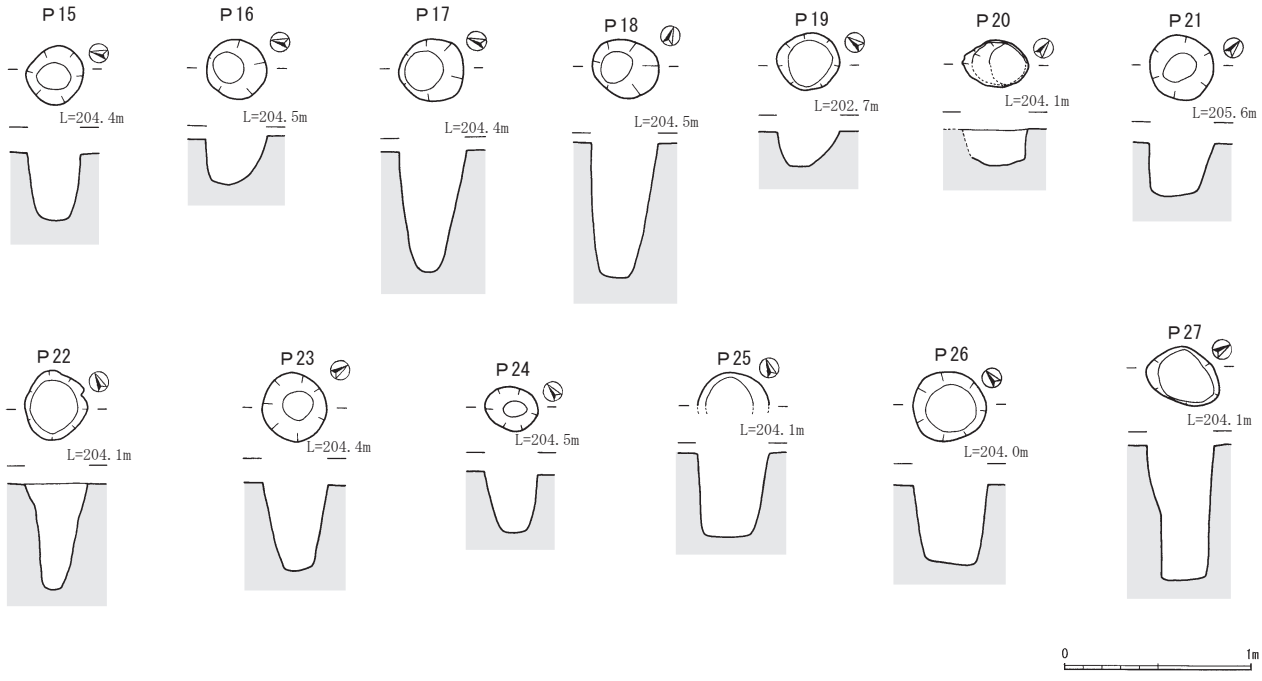
Ｅ－7区，Ⅳb層で検出された。長径38cm×短径36cmの円形を呈するものと考える。深さは46cm，埋土内から土器片が１点出土した。

ピット26（Ｐ26）

Ｇ－３区，Ⅳb層で検出された。長径40cm×短径36cmの円形を呈し，深さは43cmを測る。埋土内から土器片が１点出土した。

ピット27（Ｐ27）

Ｆ－６区，Ⅳa層で検出された。長径40cm×短径30cmの楕円形を呈し，深さは72cmを測る。埋土内から土師器甕片が２点出土した。



第87図　古代のピット２

ピット28（Ｐ28）

Ｎ－12区，Ⅳa層で検出された。長径42cm×短径40cmの円形を呈し，深さは75cmを測る。埋土内から土師器甕片が１点，土器片が２点，軽石が１点出土した。

ピット29（Ｐ29）

Ｎ－12区，Ⅳa層で検出された。長径43cm×短径37cmの楕円形を呈し，深さは71cmを測る。埋土内から土師器甕片が１点出土した。

ピット30（Ｐ30）

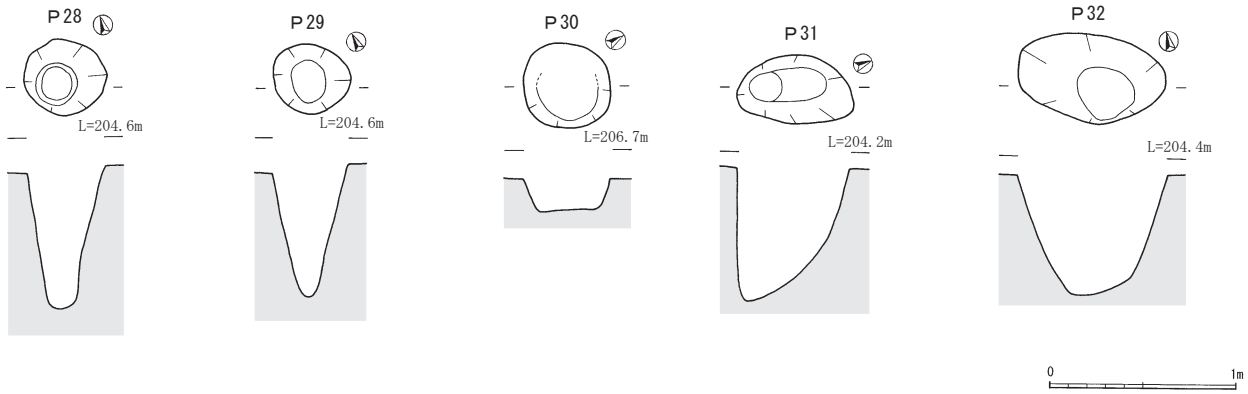
Ｇ－22区，Ⅳb層で検出された。長径45cm×短径45cmの円形を呈し，深さは18cmを測る。埋土内から土器片が27点出土した。

ピット31（Ｐ31）

Ｆ－７区，Ⅳa層で検出された。長径60cm×短径35cm，深さは77cmを測る。形状から大きな柱穴と考えられるが，周辺で検出されたピットと掘立柱建物跡になるかどうか検討した結果，掘立柱建物跡にはならなかった。埋土内から土師器甕片が１点出土した。

ピット32（Ｐ32）

Ｆ－８区，Ⅳa層で検出された。長径77cm×短径44cm，深さは65cmを測る。ピット31号と同様，形状から大きな柱穴と考えられるが，掘立柱建物跡にはならなかった。埋土内から土器片が１点出土した。



第88図　古代のピット３

第28表　古代のピット計測表

（　）内は欠損部分までの測定値

挿図番号	掲載番号	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	調査時番　号	備考
86	1	Ｅ－15	(13)	(6)	8	540	
	2	Ｆ－７	21	20	－	184	
	3	Ｌ－12	24	24	62	607	
	4	Ｎ－14	24	23	53	352	
	5	Ｅ－８	24	20	37	596	
	6	Ｍ－14	25	24	10	370	
	7	Ｆ－７	25	25	46	190	
	8	Ｍ－14	28	(18)	26	359	
	9	Ⅰ－21	28	25	35	447	
	10	Ｎ－14	30	28	41	342	
	11	Ｎ－14	31	30	16	356	
	12	Ｍ－14	30	30	24	372	
	13	Ⅰ－21	30	28	33	451	
	14	Ｆ－７	(30)	27	40	187	
87	15	Ｎ－14	31	31	36	354	
	16	Ｎ－14	32	31	23	355	

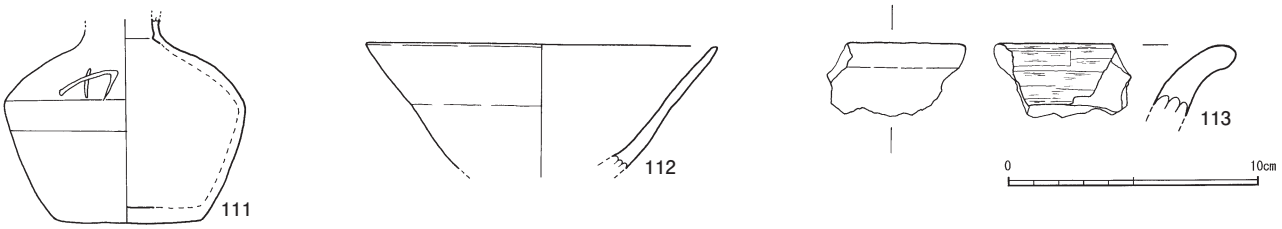
挿図番号	掲載番号	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	調査時番　号	備考
87	17	Ｍ－12･13	35	34	64	140	
	18	Ｎ－16	35	31	70	235	
	19	Ｍ－14	35	32	20	368	
	20	Ｆ－７	35	24	－	185	
	21	Ｈ－22	36	35	28	431	
	22	Ｌ－12	37	34	56	611	
	23	Ｎ－14	37	35	47	351	
	24	Ｍ－14	38	23	33	362	
	25	Ｅ－７	38	(36)	46	218	
	26	Ｇ－３	40	36	43	518	
	27	Ｆ－６	40	30	72	605	
88	28	Ｎ－12	42	40	75	145	
	29	Ｎ－12	43	37	71	146	
	30	Ｇ－22	45	45	18	471	
	31	Ｆ－７	60	35	77	585	
	32	Ｆ－８	77	44	65	554	

ピット内出土遺物（第89図　111～113）

111は須恵器の小型の壺である。肩部が張り，屈曲部の稜線が明確である。全体的に丁寧なナデにより整形されており，肩部に「カ」あるいは「ヤ」のような文字が刻まれている。

112は土師器の坏である。口縁部が薄く，体部にはナデを施すが体部中央に段をつけている。

113は土師器甕である。口縁内外に強いナデを施し，土坑51号から出土した108よりも明確に玉縁状になる。



第89図　古代のピット内出土遺物

第29表　古代のピット内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	ピット番号	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
89	111	Ｆ－7	2	H24･P184－1	須恵器	小壺	頸～底部	－	灰色	灰色	ナデ	－	－	5.8	－	－	○				刻書土器
	112	Ｆ－7	2	H24･P184－2	土師器	坏	口縁～体部	Ⅲ	橙色	橙色	ナデ	ナデ	14	－	－	－	○				
	113	Ｆ－7	2	H24･P184－3	土師器	甕	口縁	Ⅳ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	－	－	－	－	○				

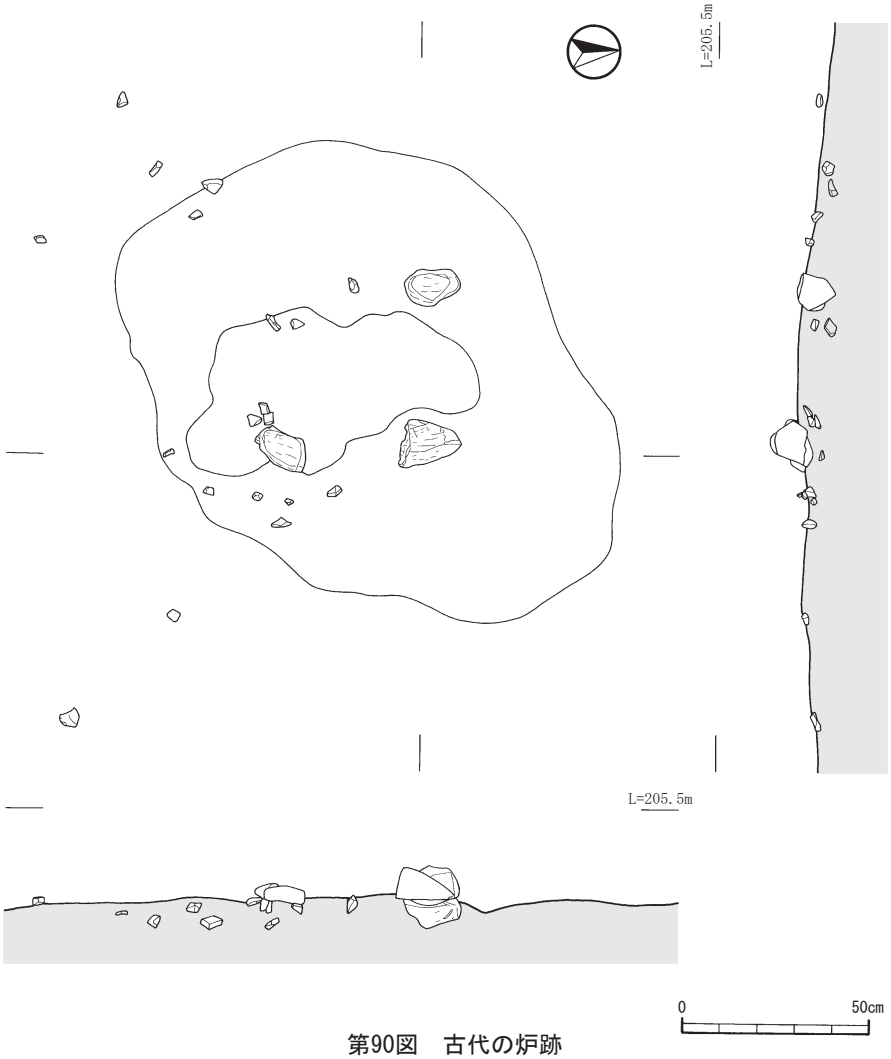
(5)　炉跡（第90図）

古代の炉跡は，Ｊ－15区，Ⅳａ層で１基検出された。

内側の焼土は，赤及び橙色が単一及び混ざった色調であったことから，被熱の割合が高く，火を使用した箇所であると考える。また，外側に比べて，数は少ないが，少し大きめパミスも観察できた。

外側の焼土は，内側より被熱の割合が低かったためか赤及び橙系の色調が所々見られるだけで，ススと地山の色調である暗茶褐色が混ざった色調が主であった。

炉跡内から，軽石８点，土師器片27点，土師器片以外の土器片12点，土壁の一部と考えられる粘土塊２点が出土した。そのうちの軽石３点を図化したが「第２節３－(２)石器（軽石加工品)」の項で報告している。



第90図　古代の炉跡

(6)　焼土跡（第91図）

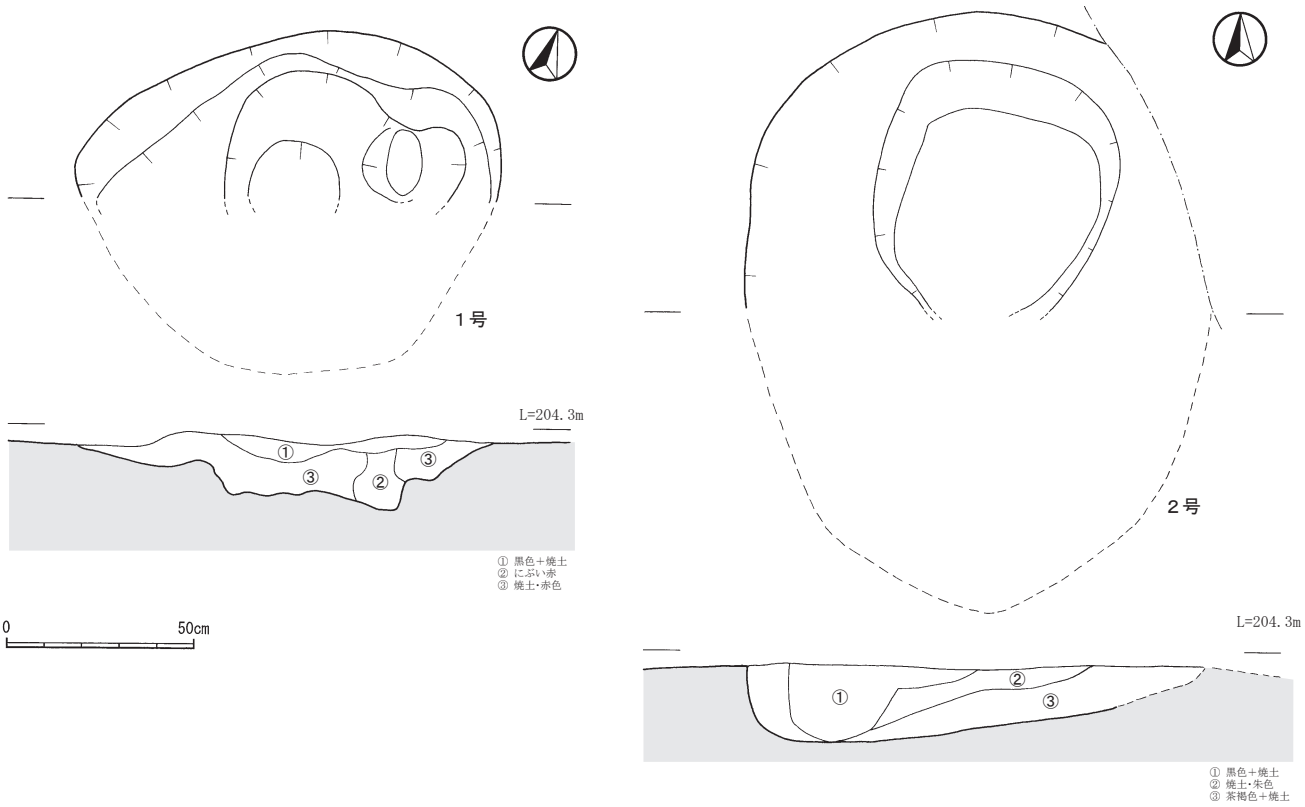
古代の焼土跡は，２基検出された。

焼土跡１号はＥ・Ｆ－７区，Ⅳａ層で検出され，焼土跡２号はＥ－７区，Ⅳａ層で検出された。２基の焼土跡はわずか１m弱離れているだけである。

「黒の中の黒」で遺構を見つけようと慎重に調査を進めたが，２基とも南側を掘りすぎてしまい全体のプランは不明である。そのため推定で全体プランを示している。

２基の焼土跡が，周辺で検出された掘立柱建物跡や土坑等との関連性について明確にすることはできなかった。

残存している焼土跡１号内からは土師器片２点が，焼土跡２号内からは土師器片11点と土師器以外の土器片３点が出土したが，被熱の痕跡を残す遺物はなく，細片のため図化できなかった。



第91図　古代の焼土跡（１・２号）

(7)　土器集中

土器集中箇所を２か所検出した。集石遺構と同様に「遺物の集中」という観点から，遺構として報告する。

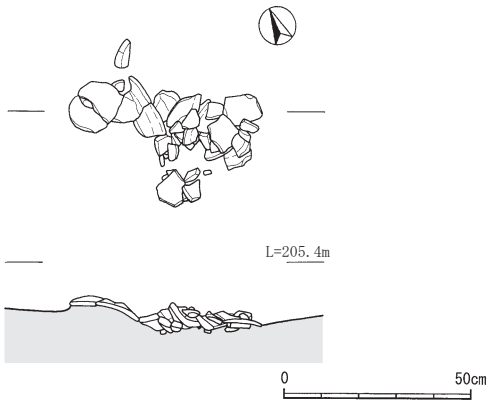
土器集中１号（第92図）

Ｊ－15区，Ⅳａ層で検出された。51cm×45cmの範囲内で検出された。土師器を主として22点の遺物が確認された。わずかに落ち込みが確認できるが明確な掘り込みは確認できなかった。直近には炉跡，周辺に土坑18号，29号があるが，どのような関連があるか不明である。

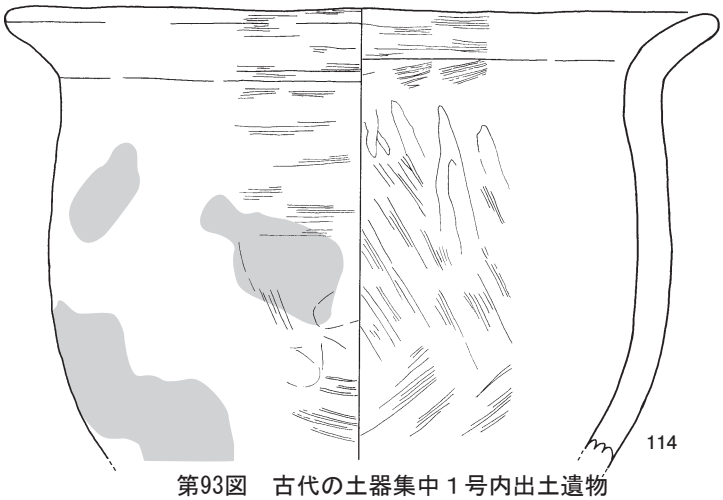
出土した土師器片を接合したところ胴部の一部と底部を除き，ほぼ完形に近い形で復元することができた。

出土遺物（第93図　114）

114は土師器甕である。口縁部は「く」の字状に大きく外反している。口縁部が胴部下まで直線的におさまるものである。外面は縦方向の丁寧なハケメ調整がみられる。



第92図　古代の土器集中１号



第93図　古代の土器集中１号内出土遺物

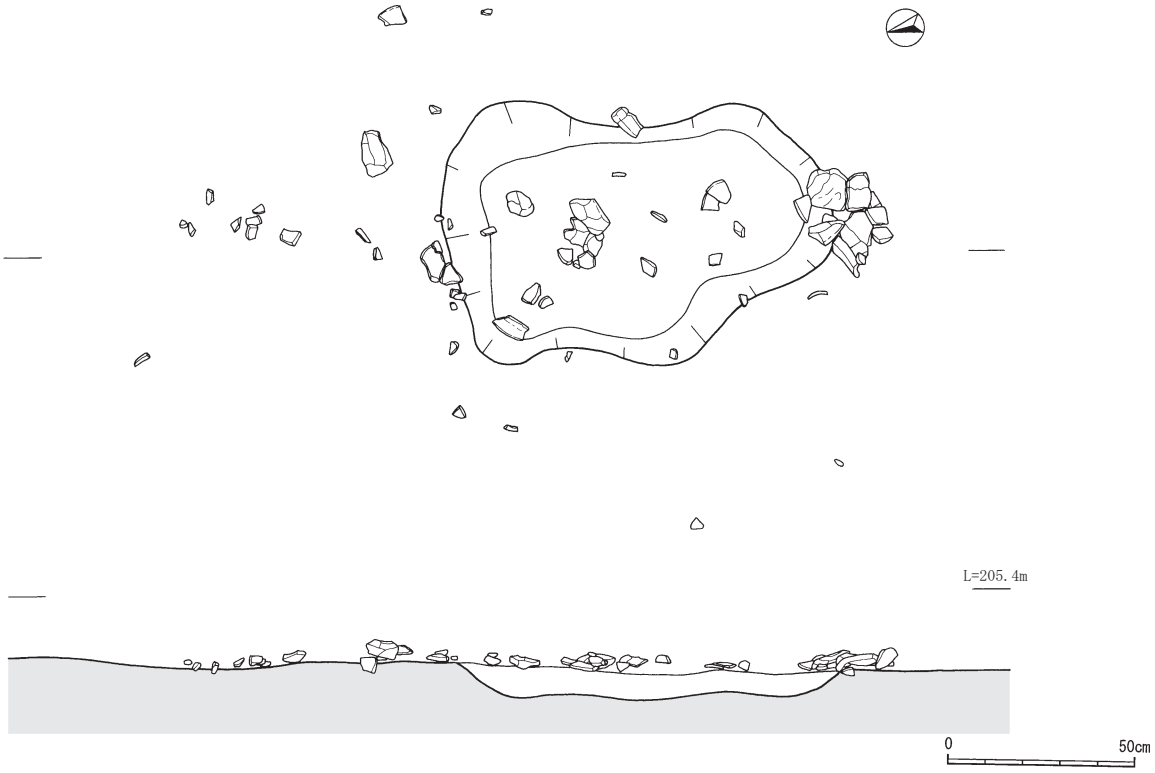
第30表　土器集中１号内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
								外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
93	114	Ｊ－15	－	土師器	甕	口縁～胴部	Ⅲa	橙色	浅黄橙色	ハケメ	ヘラケズリ	28.6	－	－	－	○				スス付着

土器集中２号（第94図）

Ｋ－15区，Ⅳａ層で検出された。土器の集中部と散在部があるが，200㎝×140㎝の範囲内で検出された。土師器を主として54点の遺物が確認された。

遺物の直下には掘り込みのような不定形をした深さ約10㎝の土坑も検出されたが，土坑内からは遺物の出土はなく，かつ，埋土の堆積状況等の情報がないため土器集中との関連については不明である。また，土器集中１号と同じく土坑18号，29号が周辺にあるがこれらの遺構との関連も不明である。



第94図　古代の土器集中２号

出土遺物（第95図　115～117）

115は土師器甕である。口縁部がやや短く，外反している。胴部下まで器壁の厚みが一定しており重心が下にある安定した器形である。外面は横方向のハケメ調整を施し，内面も下から上にヘラケズリ調整が施されている。

116は131と同様に精製された褐色の胎土だが，摩耗している。外面はナデによりやや凹凸がつき，内面はミガキが施されている。

117は体部外面にナデを施し，底部端には円盤状底部の名残があるが，見込みを押圧するため中央にかけて器壁が薄くなる。底部はヘラ切り後ナデを施すため痕跡は残っていない。

3　遺物

(1)　土器

ここでは石器以外の包含層出土及び一括遺物を報告する。主な遺物としては土師器（埦，坏，甕），墨書土器，黒色土器，赤色土器，須恵器，焼塩土器，刻書土器，紡錘車，土錘などがある。出土した遺物総数は2480点で，72点を図化した。

土師器

総点で2323点出土し，60点を図化した。坏については底部外面の切り離し技法がヘラ切りのものを対象とした。

埦（第99図　118～130）

高台のあるものを埦とし，13点を図化した。法量及び器形，調整技法から３類に分類した。

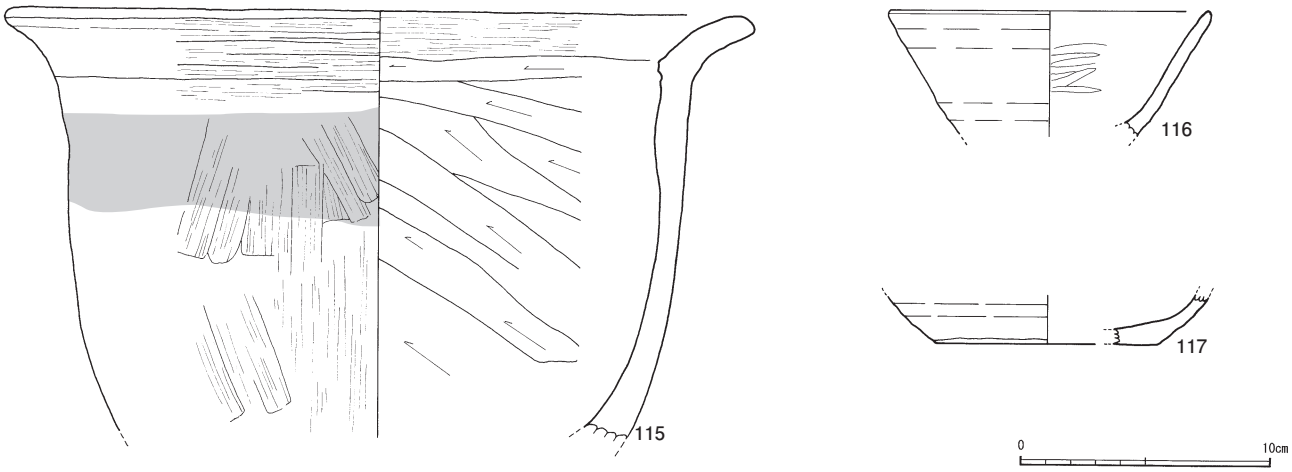
埦Ⅰ類（第99図　118～121）

高台が低く，底部は水平になる。内外面に回転ナデが施され，底部外面には凹凸がみられるものをⅠ類とした。

118は高台高が0.4cmと低く，端部は丸味を帯びる。内外面は回転ナデが施され，底部外面には凹凸が明瞭に残る。119は118と同様に高台高が0.8cmと低く，端部は丸味を帯びる。胎土は坏116・131に類似する。底部外面にナデによる凹凸がわずかに残る。120は底径が8.6cmと大型だが，高台高は0.9cmと低い。119と同様に胎土は精製されているが摩耗している。外面は回転ナデが施されており，底部外面にはわずかに凹凸が残る。底部内面は磨きが施され，水平になる。121は高台が0.8cmと低く，端部はほぼ平坦になる。内外面に回転ナデが施され，見込みはやや押圧される。高台内部には稜が明瞭に入り，工具痕が残る。胎土は精製された白褐色土を呈する。

埦Ⅱ類（第99図　122～127）

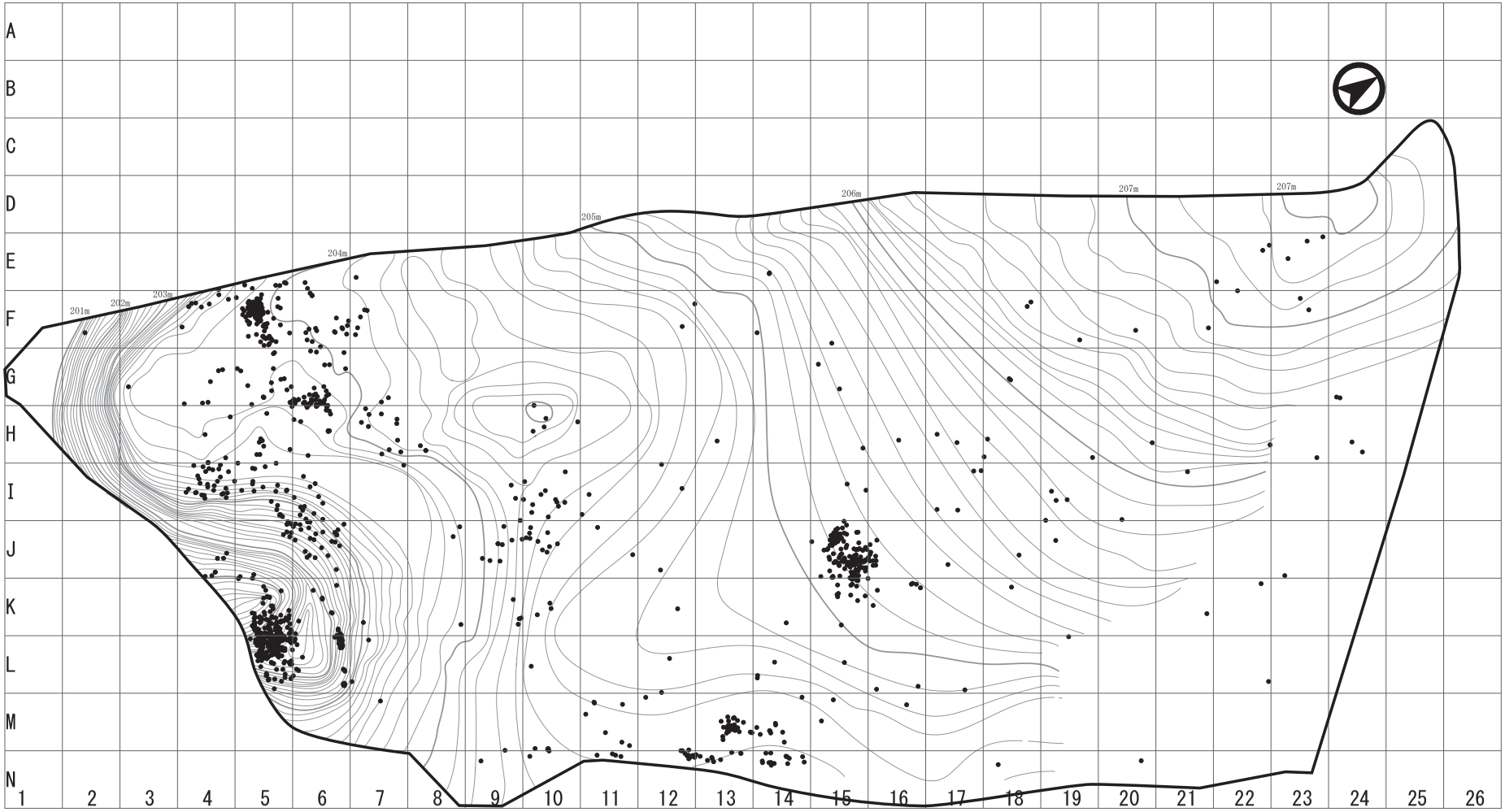
Ⅰ類に比べ高台がやや高いものをⅡ類とした。さらに，高台が開かないものをⅡａ類，「ハ」の字状に開くものをⅡｂ類と分類した。



第95図　古代の土器集中２号内出土遺物

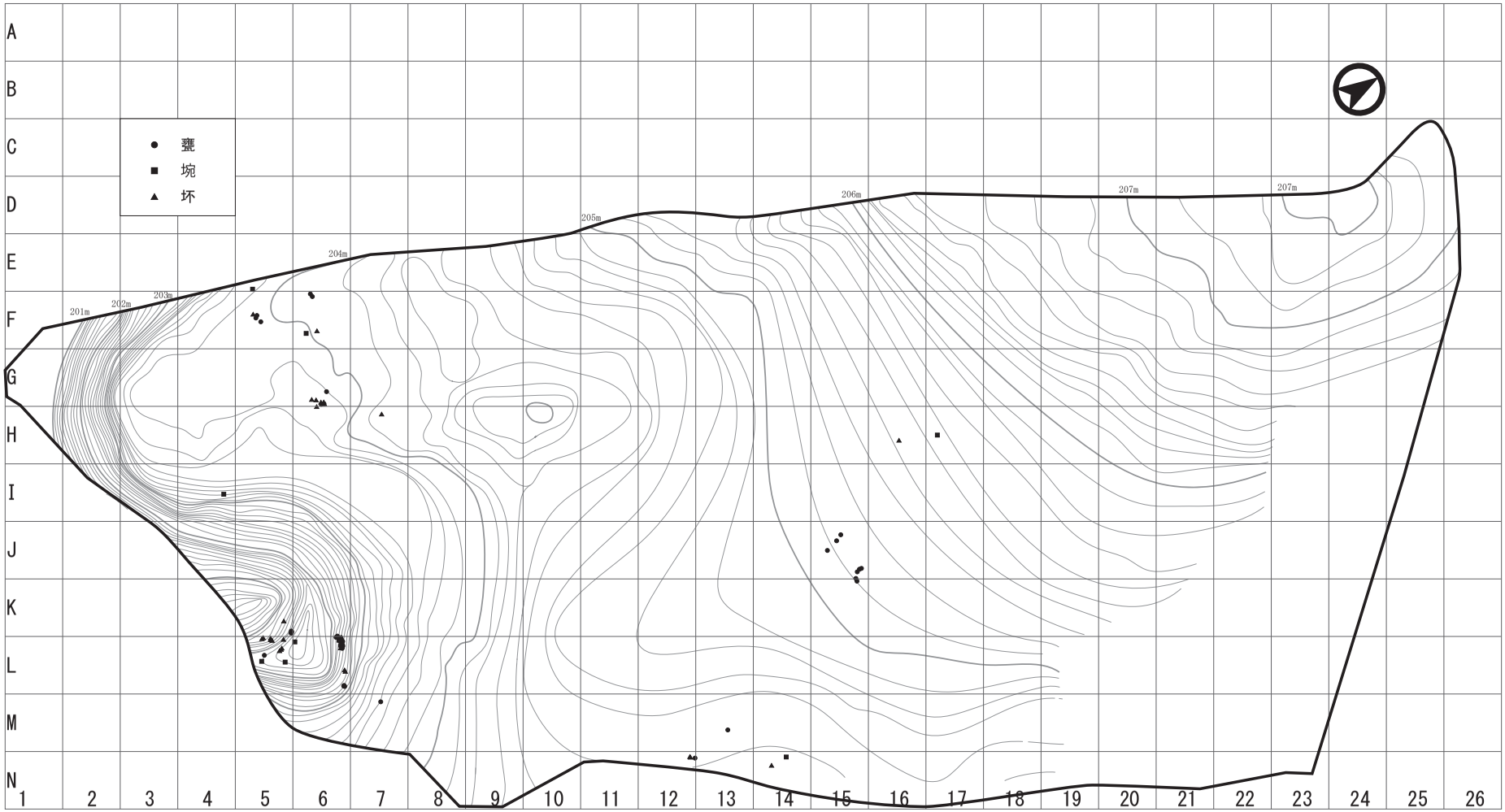
第31表　土器集中２号内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調 外面	色調 内面	文様・調整 外面	文様・調整 内面	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	備考
95	115	K－15	－	土師器	甕	口縁～胴部	Ⅲa	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケメ	ヘラケズリ	27.4	－	－	－	○		○		スス付着
	116	K－15	39	土師器	坏	口縁～体部	Ⅳ	橙色	橙色	ナデ	ミガキ	12.8	－	－	－					摩耗
	117	K－15	15	土師器	坏	体～底部	Ⅴ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヘラ切りナデ	ナデ	－	8.8	－	－			○		スス付着



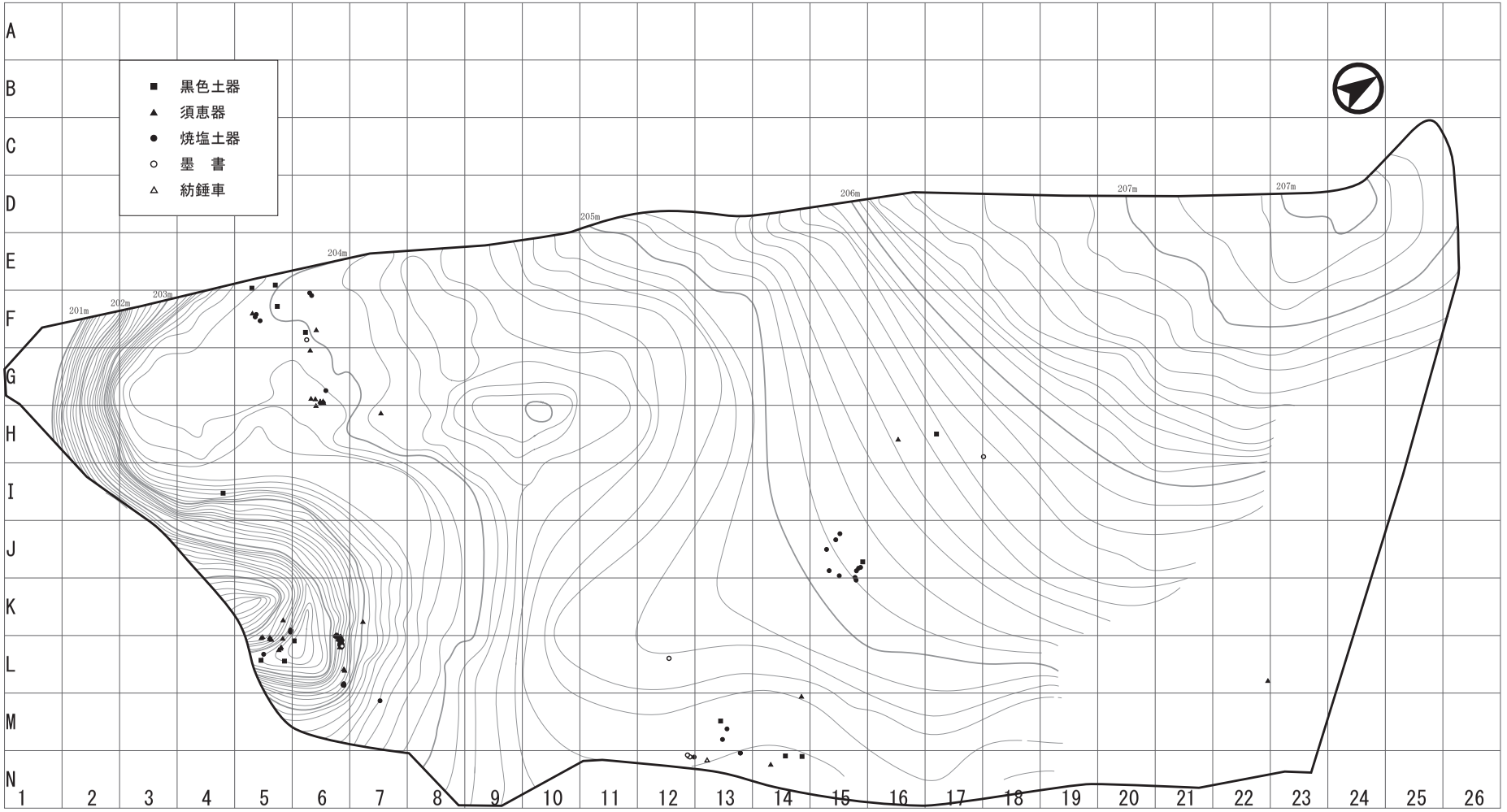
（ 1グリッド　10m X 10m ）

第96図　古代の土器全出土分布図



(1グリッド　10m X 10m)

第97図　古代の土師器出土分布図(掲載分)



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第98図　古代の墨書・黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車出土分布図

Ⅱａ類（第99図　122・123）

122は高台高が1.2㎝で，端部は丸く整形される。体部から底部まで内外面とも回転ナデが施され，底部外面はヘラ切り痕が残る。見込みを強く押圧し，高台内面に一部接合痕が残る。123は体部が直線的に立ち上がり，内外面は回転ナデが施される。底部はナデによる凹凸がわずかに残り，ヘラ切り痕が残る。見込みは強く押圧され，底部中央は器壁が薄くなる。

Ⅱｂ類（第99図　124～127）

124は高台が「ハ」の字状に開き，その角度から高台の高さは１㎝以上と想定される。内外面にナデ調整を施し，見込みをやや押圧する。底部に高台接合時の凹凸が残る。125は高台高1.1㎝で，端部は丸味を帯びる。高台内部には接合痕がみられる。内外面にナデを施し，底部内面はほぼ平坦になる。126は，高台が緩く「ハ」の字状に開き，高台内部に明瞭な稜がつく。底部から体部にかけてはやや内湾して立ち上がる。体部外面にナデを施し，底部内面にはミガキを施す。底部にはヘラ切り痕を残す。胎土が他の埦と比較してやや硬質な須恵質の土師器である。127は高台は緩く「ハ」の字状を呈し，端部は丸く整形される。底部はほぼ平坦になり，126と同様にミガキが施される。高台内部には明瞭な稜が入る。

埦Ⅲ類（第99図　128～130）

高台高が1.5㎝以上と高いものをⅢ類とした。

128は高台高1.8㎝と高く，ほとんど開かない。端部は平坦でやや外反する。内外面にナデを施し，見込みは強く押圧するため中央部は器壁が薄くなる。高台内部には明瞭な稜が入り，接合痕が残る。129は底径が9.2㎝と大きく，高台高も1.7㎝と高い。高台は緩く「ハ」の字状を呈し，端部は丸く整形される。底部から体部にかけてやや内湾し，内外面ともにナデが施される。底部外面には高台貼り付け後のナデによる凹凸が残る。130は底部から口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がり，口縁部は薄く，やや外反する。内外面ともナデを施し，体部下面に高台の接合痕を残す。

坏（第100図　131～146）

法量及び器形，調整技法から３類に分類し，16点を図化した。ただし，口縁部のみ残存しているものについては，埦との判別が困難なため坏として掲載することにした。器形では底部の形状と体部から口縁部の形態に，調整技法では底部外面から体部の調整に特に注目した。

坏Ⅰ類（第100図　131～133）

口径が大きく，外面にナデによる凹凸が多いものをⅠ類とした。

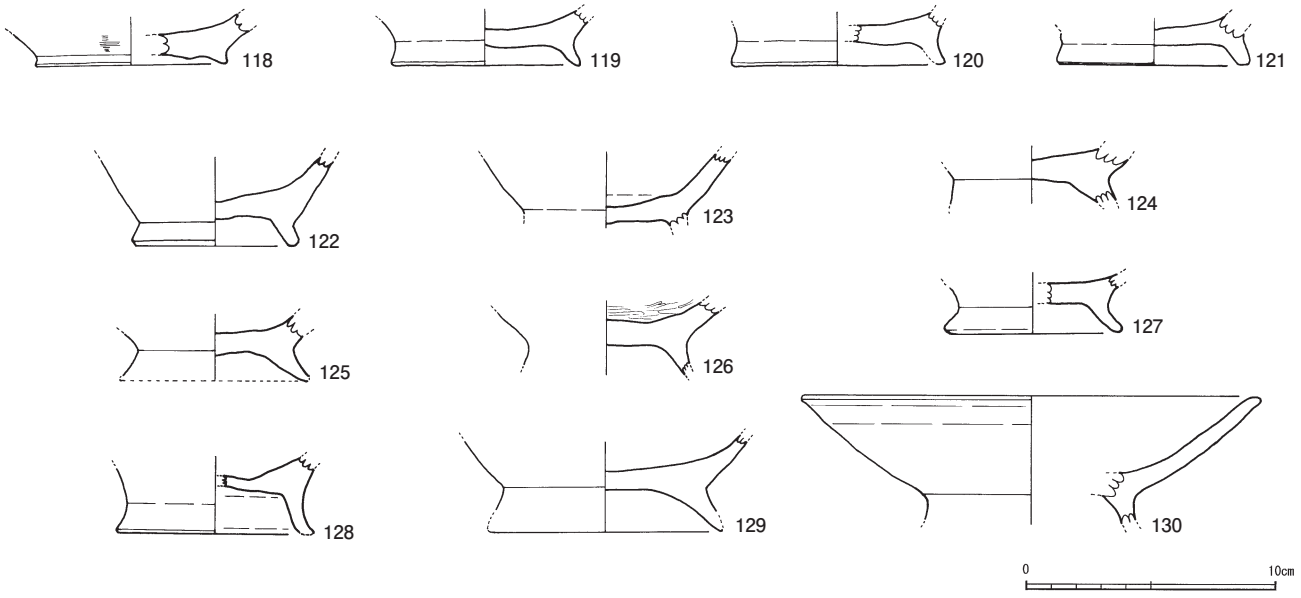
131は精製された褐色の胎土を呈しているが，やや摩耗している。口径は16.8㎝を計り，口縁部から体部外面はナデにより凹凸を残す。132は口径15.6㎝を計り，体部から口縁部まで直線的に外傾する。内外面ともに回転ナデによる凹凸が明瞭に残る。133は体部から直線的に外傾し，口縁部はやや外反する。外面は回転ナデによる凹凸が明瞭に残る。

坏Ⅱ類（第100図　134～140）

口径がⅠ類に比べ小さいものをⅡ類とした。さらに，器形が内湾するものをⅡａ類，直線的に立ち上がるものをⅡｂ類とした。

Ⅱａ類（第100図　134～136）

134は口縁部に丸味をもち，やや外反する。体部は若干内湾し，外面はナデによる凹凸を残す。やや硬質の須恵質の土師器である。底部はヘラ切り後ナデ調整を行っ



第99図　古代の土師器１（埦）

ている。135は体部外面に強めのナデによる凹凸がある。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を行っているが，一部ヘラ切り痕が残る。内面は見込みを押圧し，中央にかけて器壁が薄くなっている。136は底部から体部に稜線がなく，丸味をもつ。底部はヘラ切り後ナデ調整を行っている。

Ⅱｂ類（第100図　137～140）

137は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。外面は回転ナデによる凹凸がややみられる。138は137と同様に体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。外面は回転ナデの痕跡を残すが，凹凸はない。139は口縁部にかけて直線的に外傾し，器壁が薄くなる。外面はナデにより凹凸がつく。140は口縁部がやや外反し，体部外面は強いナデにより明確な凹凸がつく。底部端には稜はつかず，ヘラ切り後ナデを施す。見込みは一部押圧される。

坏Ⅲ類（第100図　141～146）

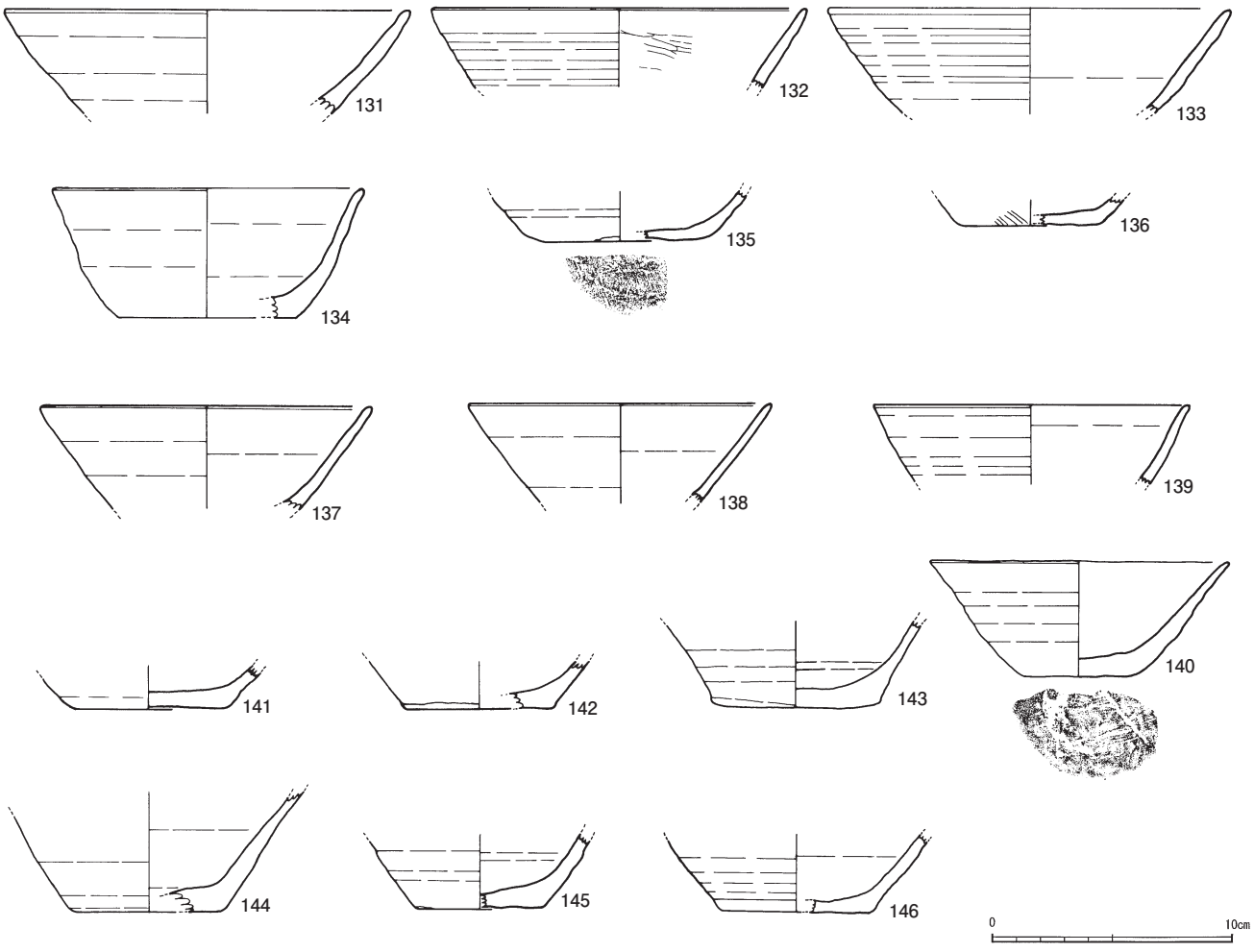
底部の形態が円盤状を呈するものをⅢ類とした。さらに，明らかに円盤状を呈するものをⅢａ類，円盤状の名残があるものをⅢｂ類とした。

Ⅲａ類（第100図　141～143）

141は円盤状底部を有する。底部はヘラ切り後ナデを施し，一部にススが付着している。142は精製された白褐色の胎土だが，やや摩耗した円盤状の底部である。143は円盤状の底部を有し，ヘラ切り後ナデを施すが，やや痕を残す。他の坏と比べて器壁がやや薄い。内面はナデを施し，底部は見込みをやや押圧している。

Ⅲｂ類（第100図　144～146）

144は外面はナデによりやや凹凸がつき，体部から口縁部にかけて器壁が薄くなる。底部端に円盤状底部の名残を残すが，見込みを押圧するため底部中央の器壁はやや薄くなる。145は体部外面にナデによる凹凸が残り，底部端には円盤状底部の名残がある。底部はヘラ切り後ナデを施している。内面は底部までナデを施しており，見込みをやや押圧する。146は体部外面にナデによる凹凸がやや残り，底部端は円盤状底部を有する。底部はヘラ切り後丁寧なナデを施し，見込みを押圧することによって中央の器壁が薄くなっている。



第100図　古代の土師器２（坏）

甕（第101図　147～155　第102図　156～163）

1504点出土し，17点を図化した。特にF－5区とL－5区，またJ－15区で集中して出土している。口縁部形態と胴部の器形を中心にⅠ～Ⅳ類に細分した。

甕Ⅰ類（第101図　147～155　第102図　156）

口縁が長いものをⅠ類とした。さらに，胴部が張るものをⅠａ類，直線の器形を呈するものをⅠｂ類とした。

Ⅰａ類（第101図　147～151）

147は横方向に粗いケズリが施されている。口縁部と胴部の境に指頭圧痕があり，稜がはっきりしている。148は口縁部が大きく外反し，口縁部から胴部の器壁に厚みがある。口縁にナデを施し，胴部外面にハケメ，内面に左方向へのケズリを施す。149は胴部がやや張り出す。口縁にはナデが施され，胴部内面には斜位へ丁寧なケズリが施される。150は口縁と胴部の境界と，その上に稜線が入り，間には強いナデが施される。内面はケズリの上端が一部揃わないところがある。151は口縁端部は丸味を帯び，胴部がやや張る。胴部から口縁部下にかけて左上へのケズリが施されている。

Ⅰｂ類（第101図　152～155　第102図　156）

152は口縁部が「く」の字状に外反し，胴部下にかけて器壁が薄くなっている。外面は口縁から胴部上半にかけてナデが施される。胴部にはタタキ痕がみられ，一部をナデで擦り消している。内面は口縁にナデが施され，横方向の丁寧なヘラケズリが施されている。タタキ痕を施しているものはこの１点のみである。153は口縁にナデ，胴部内面のケズリは左方向へ丁寧に施されている。154は口縁部が大きく外反し，口縁部から胴部の器壁に厚みがある。外面には縦方向のハケメ調整が施されている。155は口縁が「く」の字状に外反し，稜によって口縁と胴部の境が明確になっている。口縁にはナデ調整を施し，胴部内面のケズリは胴部から口縁部に向かって縦方向へ丁寧に施されている。

156は細分はできなかったがⅠ類に属するものである。口縁が長く外反し，端部に稜が入る。内外にナデを施し，口縁下胴部には右上に向かってケズリが施されている。

甕Ⅱ類（第102図　157・158）

口縁が短いものをⅡ類とした。さらに，胴部の張るものをⅡａ類，直線状のものをⅡｂ類とした。

Ⅱａ類（第102図　157）

157は口縁部が外反しているが，内面は左上方向のヘラケズリ調整により胴部の器壁の厚みが不安定である。外面は丁寧な横方向のハケメ調整が施されており，一部ミガキ調整もみられる。

Ⅱｂ類（第102図　158）

158は斜位に粗いヘラケズリが施されている。器壁の厚みが目立つものである。

甕Ⅲ類（第102図　159・160）

Ⅰ・Ⅱ類に比べ，口径が小さいものをⅢ類とした。

159は口縁がやや立ち上がり，口縁部にはミガキが施される。内面は，稜により口縁部と胴部の境が明確になっており，胴部には左方向のケズリが施される。160は口縁部が短く内面の稜も明瞭に残る。内面調整は比較的粗く，胴部下のヘラケズリも目立っている。外面は一部ハケメによる調整がみられる。

甕Ⅳ類（第102図　161～163）

器形は甕というよりも鍋に近い器形を呈し，外面にススが付着しており，煮炊具として判断されるものをⅣ類とした。

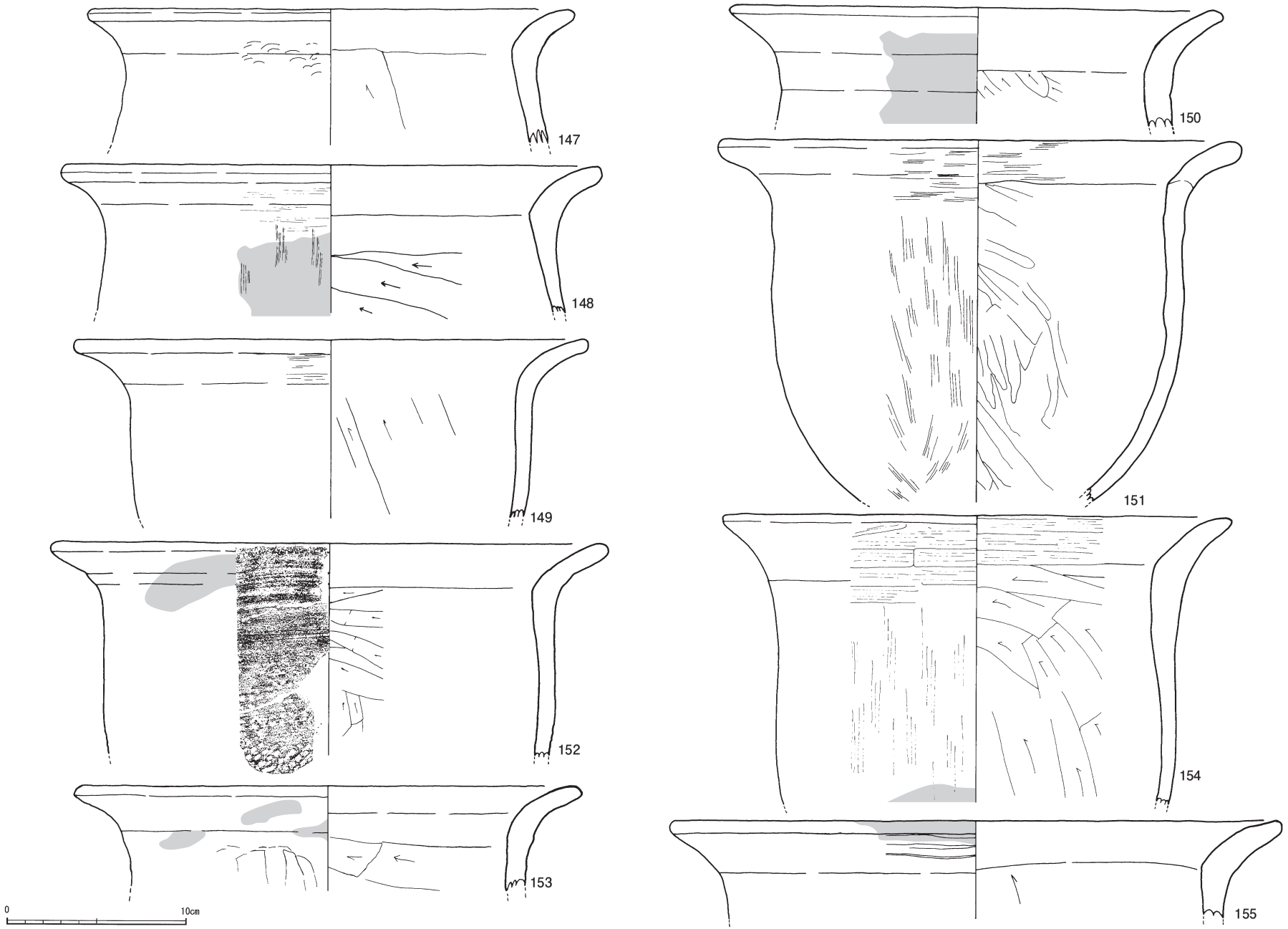
161は口縁部先端の器壁が薄く，胴部からやや内湾し口縁部が外反する。口縁部下の胴部にススが付着している。内面は口縁部と胴部の境に明瞭な稜線がみられ，胴部に横方向のヘラケズリが施されている。162は口縁部先端の厚みが薄く，内面の稜はほとんど目立たない。口縁部はナデが施され，胴部には縦方向の丁寧なヘラケズリが施されている。163は胴部と口縁部の境の内面に明瞭な稜線があり，口縁部は胴部より外反して開く。胴部内面は丁寧な横方向のヘラケズリが施される。口縁部下胴部外面には，一部ケズリがみられる。口縁部はススが付着している。

墨書土器（第103図　164　第104図　165～172）

９点を図化した。164はやや円盤状底部の名残をもち，口縁までやや内湾して立ち上がる。底部にはヘラ切り痕が残る。内外面は回転ナデを施し，見込みは中心部が盛り上がる。内面にのみ墨書が描かれており，十字を太くした記号のようなものの中に，「鬼」「正」と判読できるような文字が書かれている。その他にも色々と描かれているが，判読には至らなかった。165は坏の体部外面に「十」の墨書が確認できる。円盤状底部の名残があり，底部はヘラ切り痕が残る。内面はナデを施し，見込みは押圧され凹む。坏Ⅴａ類である。166 ～ 172は土師器の坏または埦の体部に墨書が確認できる。いずれも文字の判別には至らなかった。170は黒色土器の体部外面に墨書が認められる。「円」のような墨書が確認できる。

黒色土器（第105図　173～177）

総点で59点出土し，５点図化した。いずれも内面が黒色を呈する。173 ～ 176は坏である。いずれも内面はミガキによる光沢をもち，外面はナデにより凹凸がつくため土師器の坏Ⅱｂ類に属する。177は埦である。高台は緩くハの字状に開き，端部は丸く整形される。外面はナデが施され，一部高台貼り付け時の痕跡が残る。内面はミガキが施される。土師器の埦Ⅲ類に相当する。



第101図　古代の土師器３（甕）

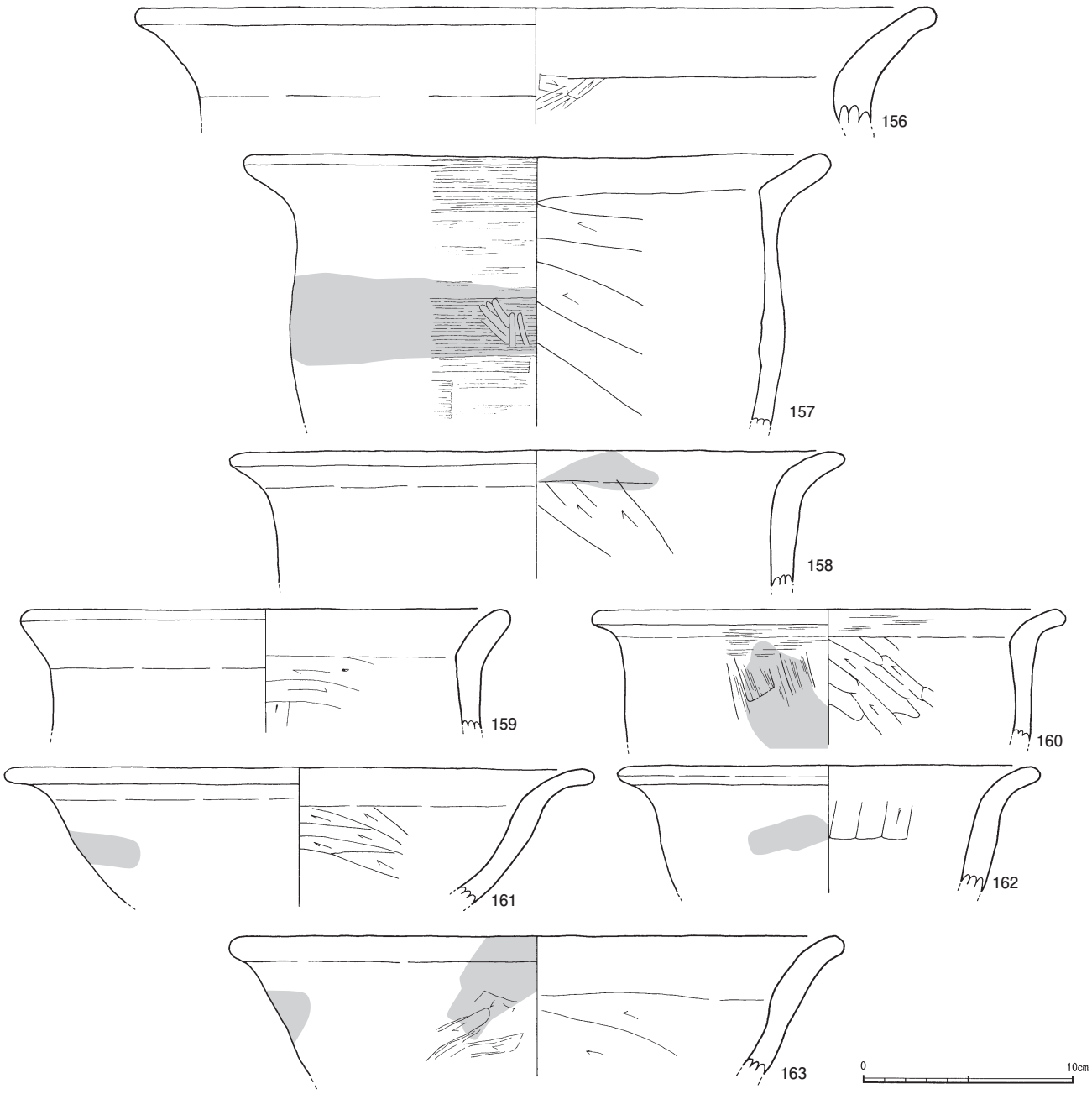
須恵器（第105図　178～183）

総点で50点出土し，６点を図化した。178，179は坏である。２点とも内外面がナデにより整形され，178は体部下の内面に，179は口縁部下に一部凹凸が残る。180は坏である。底部にかけて器壁が厚くなる。181 ～ 183は甕である。181は外面に平行タタキが施される。内面はいずれも青海波の当具痕が見られる。182は口縁がやや開き，外面には格子目タタキが施される。183は181・182と胎土が異なる。外面は同心円状のタタキが施され，内面は輪積み痕が残り，一部ナデ消している。また，図化には至らなかったが，東播系須恵器と思われる羽状タタキの須恵器も出土している。ただし，時期は古代もしくは中世の可能性がある。

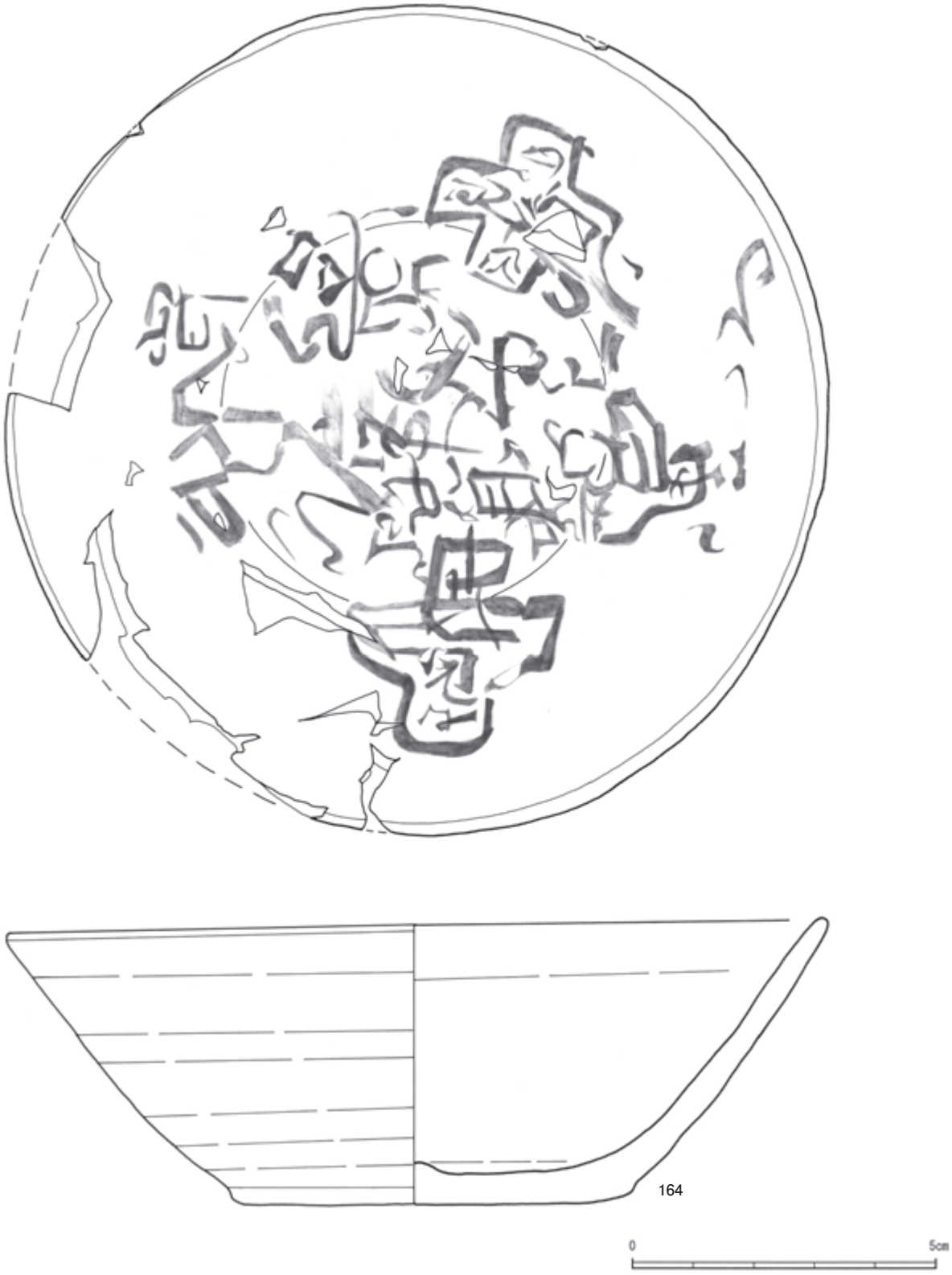
焼塩土器（第105図　184～188）

総点で34点出土し，５点を図化した。いずれも胎土に小石を含む砂粒が混ざり，外面に指圧痕が残る。器壁が凹凸しており粗雑なつくりである。色調は赤橙色を呈する。内面は細かい目をもつ布圧痕が残っている。

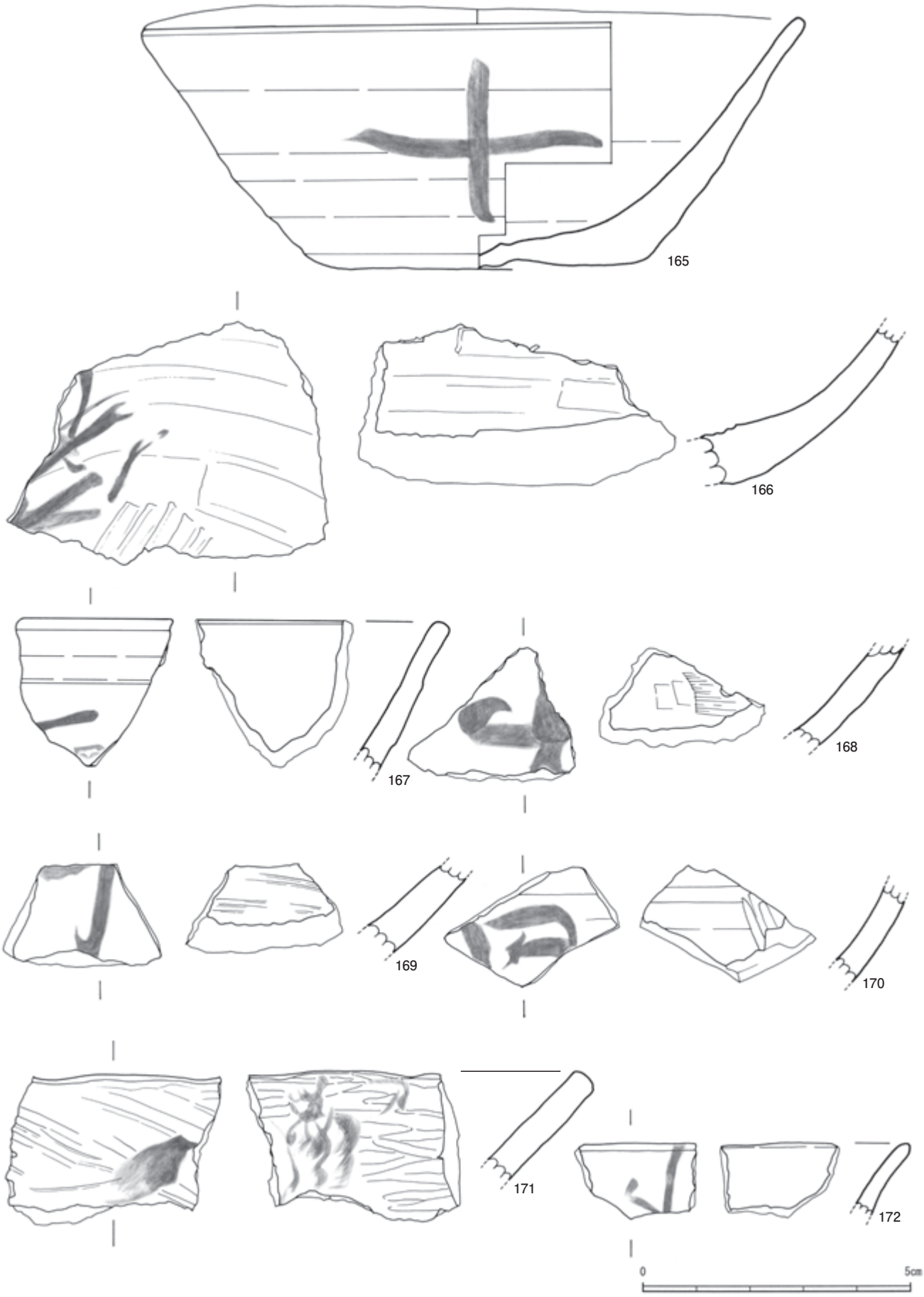
184・185は器壁が厚く，外面から内傾した口縁部を呈している。器形は胴部からやや内湾して立ち上がりをみせている。186は口縁部先端が先細りになる部分があり，外面整形時の指圧痕やナデ調整による凹凸が目立つ。胴



第102図　古代の土師器４（甕）



第103図　古代の墨書土器１

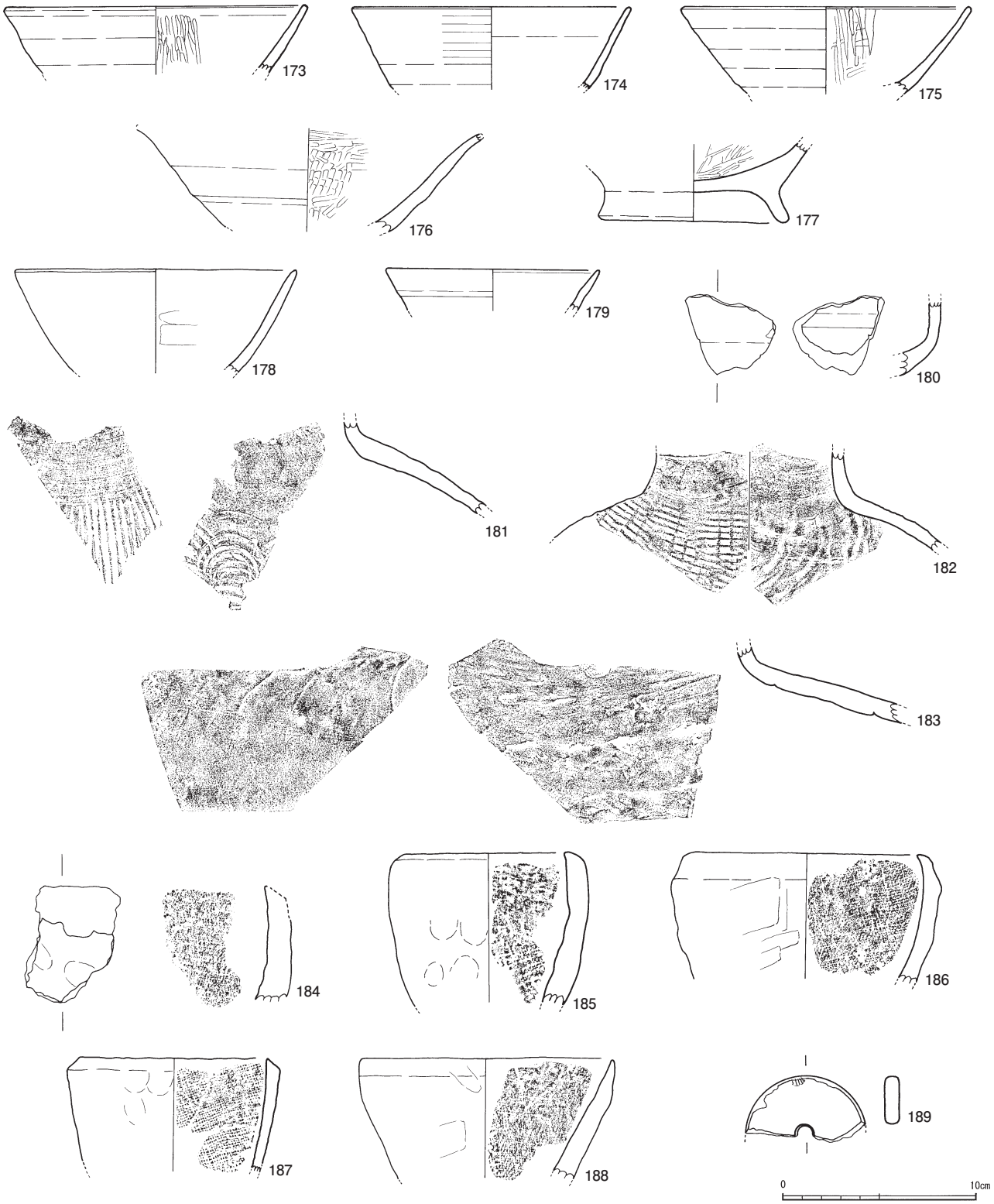


第104図　古代の墨書土器２

部に丸みを帯びるものである。187も同様に口縁部先端が先細りになっているが，器壁が薄く，胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものである。内面の布圧痕も明瞭に残っており，他のものと比較してゆがみがなく丁寧なつくりである。188は器壁が厚く，口縁部先端の尖りが目立つものである。胴部下にかけて器壁の厚みが大きくなっている。

紡錘車（第105図　189）

環状で，中心部分が穿孔される。土師質であるが，両面ともにほぼ水平に作られているため，土師器の坏を転用した可能性は低いと考えられる。



第105図　古代の黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車

第32表　古代の土師器観察表１

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
99	118	J－15	Ⅳa	イモ60	土師器	埦	底部	Ⅰ	橙色	橙色	ヘラ切り，ナデ	ナデ	－	7.5	－	0.4	○				
	119	J－15 J－16	表土	－	土師器	埦	底部	Ⅰ	橙色	橙色	ヘラ切り，ナデ	ナデ	－	7.6	－	0.8	○				摩耗
	120	N－14	Ⅲb	71646	土師器	埦	底部	Ⅰ	橙色	橙色	ヘラ切り，ナデ	ミガキ	－	8.6	－	0.9	○				摩耗
	121	L－5	Ⅲb	1881	土師器	埦	底部	Ⅰ	浅黄橙色	浅黄橙色	ヘラ切り，ナデ（高台）	ナデ，押圧（底部）	－	7.5	－	0.8			○		
	122	L－6	Ⅲa	110013	土師器	埦	体部～底部	Ⅱa	橙色	橙色	ナデ，ヘラ切り，ナデ（高台）	ナデ，押圧（底部）	－	6.1	－	1.2	○		○		
	123	M－15	掘立25 P4	－	土師器	埦	体部～底部	Ⅱa	橙色	橙色	ヘラ切り，ナデ（底部）	ナデ，押圧（底部）	－	－	－	－	○		○		
	124	H－19	Ⅲb	5T，73	土師器	埦	底部	Ⅱb	橙色	橙色	ケズリ，ヘラ切り（底部）ナデ（高台）	ナデ	－	－	－	－	○				
	125	J－15 J－16	表採	－	土師器	埦	底部	Ⅱb	明赤褐色	橙色	ナデ，ヘラ切り（底部）ナデ（高台）	ナデ	－	7.5	－	1.1	○		○		
	126	I－4	Ⅲb	143462	土師器	埦	底部	Ⅱb	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ，ヘラ切り（底部），ナデ（高台）	ミガキ	－	－	－	－	○				
	127	F－6	Ⅲa	87427	土師器	埦	底部	Ⅱb	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ヘラ切り，ナデ（底部，高台）	ミガキ	－	6.7	－	1.1	○				
	128	E－5	Ⅲa	83102	土師器	埦	底部	Ⅲ	橙色	橙色	ケズリ，ヘラ切り（底部），ナデ（高台）	ナデ，押圧	－	7.8	－	1.8	○		○		
	129	L－5 L－6	Ⅲa	1841 1650	土師器	埦	底部	Ⅲ	橙色	にぶい橙色	ナデ，ヘラ切り（底部），ナデ（高台）	ナデ	－	9.2	－	1.7	○				
	130	J－15	表土	－	土師器	埦	口縁～底部	Ⅲ	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	18	－	－	－	○				
100	131	J－15 J－16	表土	－	土師器	坏	口縁	Ⅰ	橙色	橙色	ナデ	ナデ	16.8	－	－	－	○				摩耗
	132	L－5	Ⅲb	1658	土師器	坏	口縁	Ⅰ	明黄褐色	橙色	ナデ	ナデ	15.6	－	－	－	○				
	133	K－5	Ⅲb	1616	土師器	坏	口縁～体部	Ⅰ	明黄褐色	橙色	ナデ	ナデ	16.6	－	－	－	○				
	134	N－12 N－13	Ⅲb Ⅳa	47816 49247	土師器	坏	口縁～底部	Ⅱa	浅黄橙色	浅黄橙色	ヘラ切り ナデ	ナデ	13	7.4	－	－	○				
	135	F－5	Ⅲa	87476	土師器	坏	底部	Ⅱa	橙色	橙色	ヘラ切り，ナデ	ナデ	－	6.2	－	－	○		○		
	136	F－6	Ⅲa	87424	土師器	坏	底部	Ⅱa	橙色	橙色	ヘラ切り，ナデ	ナデ	－	6	－	－	○	○			
	137	L－6	Ⅳa	110510	土師器	坏	口縁	Ⅱb	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	13.5	－	－	－	○		○		
	138	L－6	Ⅳa	110511	土師器	坏	口縁	Ⅱb	にぶい橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	12	－	－	－	○		○		
	139	L－6	Ⅳb	111788	土師器	坏	口縁	Ⅱb	橙色	橙色	ナデ	ナデ	13	－	－	－	○				
	140	L－5 K－5	Ⅲa Ⅲb	1704 他12点	土師器	坏	口縁～底部	Ⅱb	橙色	橙色	ヘラ切り ナデ	ナデ	12.4	4.5	－	－	○		○		
	141	L－5	Ⅲb	2486	土師器	坏	底部	Ⅲa	橙色	橙色	ヘラ切り，ナデ	ナデ	－	6.4	－	－	○				スス付着
	142	N－15	Ⅲ	47700	土師器	坏	底部	Ⅲa	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	－	6.1	－	－			○		
	143	L－6	Ⅲa	110043 110044	土師器	坏	底部	Ⅲa	橙色	浅黄橙色	ヘラ切り，ナデ	ナデ	－	6.95	－	－	○		○		
	144	N－14	掘立43	－	土師器	坏	口縁～底部	Ⅲb	橙色	橙色	ヘラ切り ナデ	ナデ	－	6.4	－	－	○		○		
	145	H－7	Ⅲa	87595	土師器	坏	体部～底部	Ⅲb	橙色	橙色	ヘラ切り ナデ	ナデ	－	5.2	－	－	○				
	146	L－6	Ⅲa	110036	土師器	坏	体部～底部	Ⅲb	橙色	橙色	ヘラ切り ナデ	ナデ	－	6	－	－	○		○		
101	147	L－6	Ⅲa	110050 他3点	土師器	甕	口縁	Ⅰa	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	26	－	－	－	○		○		
	148	L－5	Ⅲb	1896 2108	土師器	甕	口縁	Ⅰa	にぶい褐色	にぶい橙色	ナデ ハケメ	ナデ ヘラケズリ	29.4	－	－	－	○				スス付着
	149	J－15 K－16	Ⅲb	掘立27 他3点	土師器	甕	口縁	Ⅰa	橙色	橙色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	28.2	－	－	－	○	○	○		
	150	J－15 K－16	Ⅲb	5023 他2点	土師器	甕	口縁	Ⅰa	橙色	橙色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	26	－	－	－	○				スス付着
	151	J－15 J－16	Ⅲb Ⅳa	5229 他2点	土師器	甕	口縁～胴部	Ⅰa	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	29.2	－	－	－	○		○		
	152	F－5 F－6	Ⅲa Ⅳa	83208 他3点	土師器	甕	口縁	Ⅰb	橙色	にぶい黄橙色	ナデ 格子状タタキ	ナデ ヘラケズリ	30	－	－	－	○				スス付着
	153	L－6	Ⅲa	110024	土師器	甕	口縁	Ⅰb	にぶい褐色	明赤褐色	ナデ，ハケメ	ナデ ヘラケズリ	27.6	－	－	－	○	○	○		スス付着
	154	L－5	Ⅲb	2090 2079	土師器	甕	口縁～胴部	Ⅰb	にぶい赤褐色	にぶい橙色	ナデ	ヘラケズリ	28.2	－	－	－	○	○		○	スス付着
	155	N－12	Ⅳa	49243	土師器	甕	口縁	Ⅰb	にぶい橙色	明黄褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	33	－	－	－	○		○		スス付着

第33表　古代の土師器観察表２

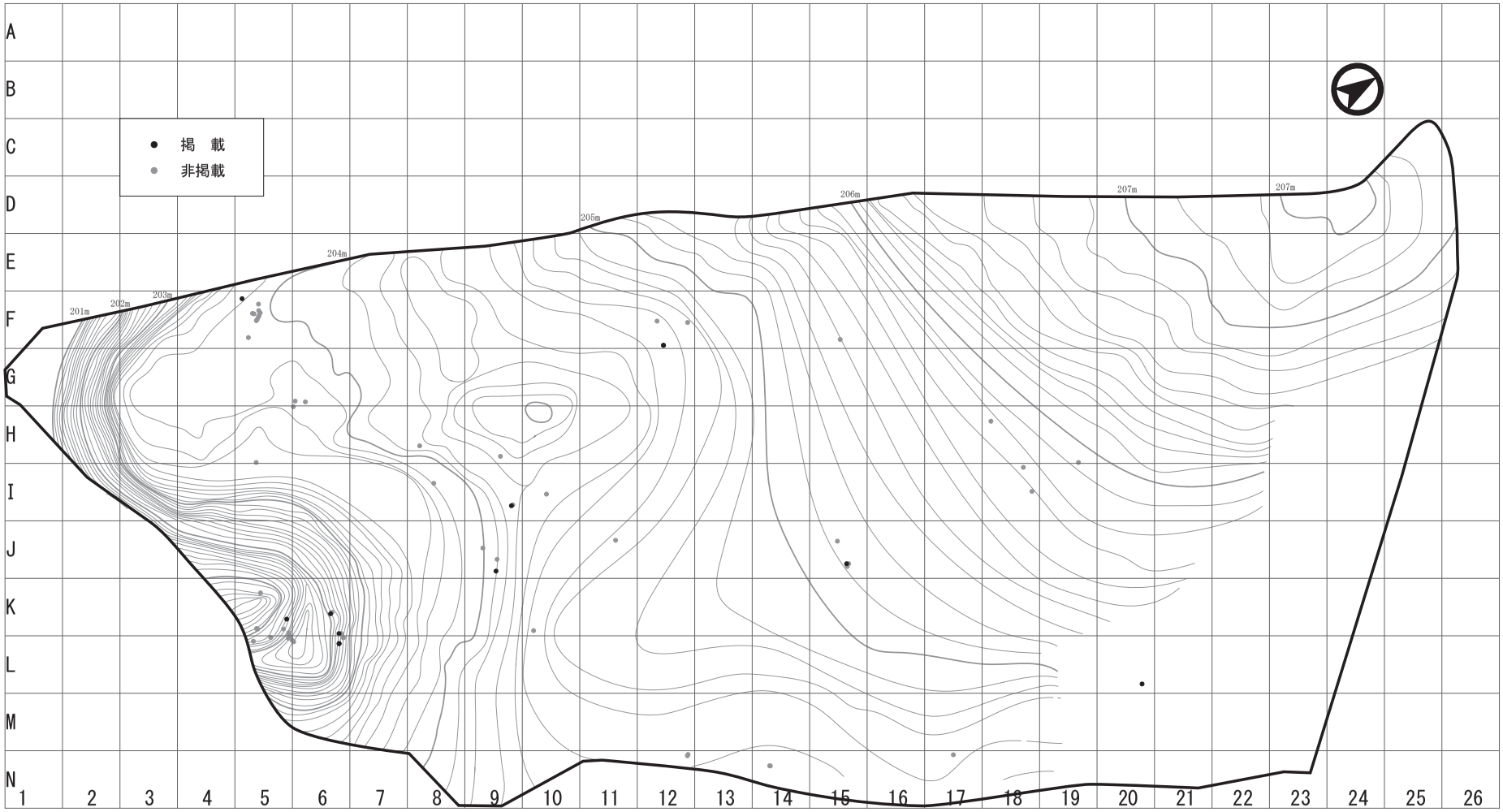
挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
102	156	F－6	Ⅳa	87406	土師器	甕	口縁	Ⅰb	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	37	－	－	－				○	
	157	L－6	Ⅲa Ⅳa	110033 他8点	土師器	甕	口縁～胴部	Ⅱa	明赤褐色	橙色	ハケメ	ナデ ヘラケズリ	27.3	－	－	－	○		○		スス付着
	158	K－6 L－6	Ⅲa	110006 他6点	土師器	甕	口縁	Ⅱb	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ヘラケズリ	28	－	－	－	○		○		スス付着
	159	K－5	Ⅲb	1646 他3点	土師器	甕	口縁	Ⅲ	橙色	橙色	ナデ	ヘラケズリ	22	－	－	－	○				
	160	J－15	Ⅲb	5132	土師器	甕	口縁	Ⅲ	橙色	にぶい黄橙色	ハケメ，ナデ	ヘラケズリ	21.8	－	－	－	○	○			スス付着
	161	J－15	Ⅲb	5078	土師器	甕	口縁	Ⅳ	にぶい赤褐色	橙色	ナデ	ヘラケズリ	27	－	－	－	○				スス付着
	162	J－16	Ⅲb	6587	土師器	甕	口縁	Ⅳ	橙色	にぶい赤褐色	ナデ	ヘラケズリ	19	－	－	－	○				スス付着
	163	M－13	Ⅲc	18226	土師器	甕	口縁	Ⅳ	橙色	橙色	ナデ	ヘラケズリ	28	－	－	－	○		○		スス付着

第34表　古代の墨書土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種類	器種	部位	色調		文様・調整		文字	法量（cm）			備考
								外面	内面	外面	内面		口径	底径	器高	
103	164	L－12	Ⅳa	4355	土師器	坏	完形	橙色	橙色	ナデ	ナデ	鬼･正	13.7	6	4.7	
104	165	L-6	Va	110500	土師器	坏	口縁～底部	橙色	橙色	ナデ，ヘラ切り（底部）	ナデ 押圧	十	12.2	6.4	5	
	166	N-13	Ⅲb	562	土師器	（坏・埦）	体部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	－	－	－	－	
	167	F-6	Ⅳa	142339	土師器	（坏・埦）	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	－	－	－	－	
	168	J-15	表土		土師器	（坏・埦）	体部	橙色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	－	－	－	－	
	169	J・K－14・15	Ⅳa	一括	土師器	（坏・埦）	体部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	－	－	－	－	
	170	N－13	Ⅳa	一括	黒色土器	（坏・埦）	体部	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ミガキ	円	－	－	－	
	171	H－17	Ⅳ	30704	土師器	（坏・埦）	口縁	橙色	橙色	ハケメ，ナデ	ミガキ	－	－	－	－	
	172	N－12	Ⅲb	47818	土師器	（坏・埦）	口縁	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	－	－	－	－	

第35表　古代の黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量（cm）				胎土				備考
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	角閃石	雲母	
105	173	M－13	Ⅲb	10397	黒色土器	坏	口縁	Ⅱb	にぶい黄橙色	黒色	ナデ	ミガキ	15.4	－	－	－	○				
	174	F－5	Ⅳa	87485	黒色土器	坏	口縁	Ⅱb	橙色	黒色	ナデ	ミガキ	14.2	－	－	－	○				
	175	M－14	Ⅳa	71402	黒色土器	坏	口縁	Ⅱb	にぶい黄橙色	黒色	ナデ	ミガキ	14.6	－	－	－	○				
	176	J－15	Ⅲb	4987	黒色土器	坏	口縁	Ⅱb	浅黄橙色	暗灰色	ナデ	ミガキ	－	－	－	－	○				
	177	E－5	Ⅲa	87489	黒色土器	埦	底部	Ⅲ	橙色	暗灰色	ナデ	ミガキ	－	9.5	－	1.5	○		○		
	178	G－6	Ⅲa	87429	須恵器	坏	口縁～体部	－	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	14.4	－	－	－					
	179	M－14	Ⅳa	6931	須恵器	坏	口縁	－	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	11	－	－	－					
	180	K－7	Ⅲa	110066	須恵器	坏	体部	－	灰色	灰色	ナデ	ナデ	－	－	－	－					
	181	F－7	一括	－	須恵器	甕	頸部～胴部	－	灰色	灰色	平行タタキ ナデ	青海波当具痕 ナデ	－	－	－	－					
	182	L－22	Ⅳa	42695	須恵器	甕	頸部～胴部	－	黄灰色	灰色	格子目タタキ ナデ	青海波当具痕 ナデ	－	－	－	－					
	183	I－7 I－8	Ⅳa	溝･古道52	須恵器	甕	頸部～胴部	－	浅黄橙色	にぶい黄橙色	同心円タタキ ナデ	ナデ 指頭痕	－	－	－	－	○				
	184	N－13	Ⅳa	49353	焼塩土器	鉢	口縁	－	橙色	橙色	指押さえ	布目圧痕	－	－	－	－	○				
	185	J－15 K－16	表土 Ⅲb	6573 5090	焼塩土器	鉢	口縁～胴部	－	橙色	橙色	指押さえ	布目圧痕	8.6	－	－	－					
	186	L－6	Ⅳa	110519 110528	焼塩土器	鉢	口縁～胴部	－	橙色	橙色	指押さえ ナデ	布目圧痕	11.2	－	－	－					
	187	M・N－13	Ⅳa	49104 49157	焼塩土器	鉢	口縁～胴部	－	明赤褐色	橙色	指押さえ	布目圧痕	9.6	－	－	－	○				
	188	L－6	Ⅲa	110032	焼塩土器	鉢	口縁～胴部	－	橙色	橙色	指押さえ ナデ	布目圧痕	13	－	－	－	○				
	189	N－13	Ⅲb	47781	紡錘車	－	－	－	淡黄色	浅黄橙色	－	－	0.9	6.2	－	0.8					



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第106図　軽石加工品出土分布図

(2)　石器（軽石加工品，第107図～第111図　190～211）

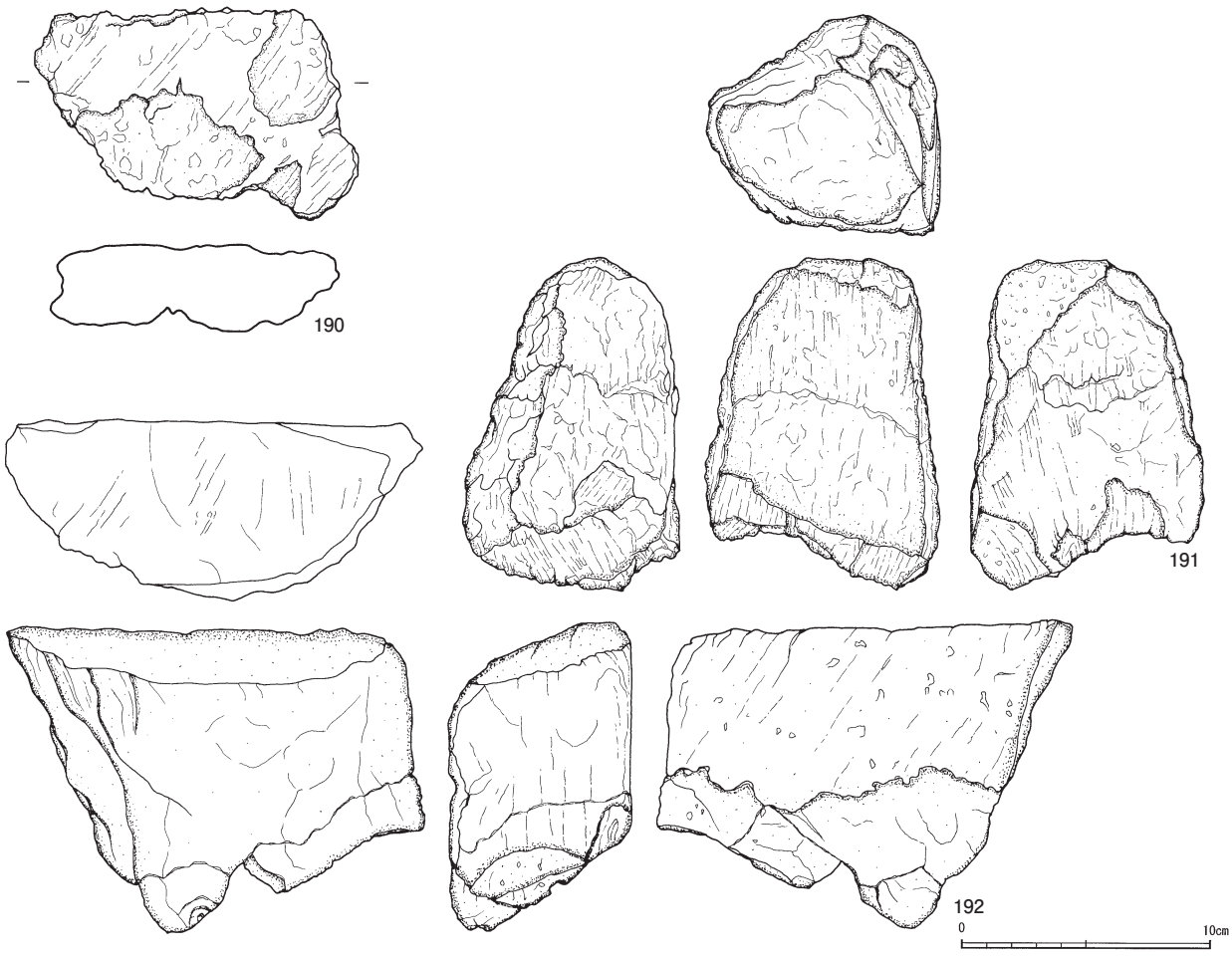
軽石加工品は，Ⅲ・Ⅳ層検出の遺構内及びⅢ・Ⅳ層から41点出土した。このうち，特に，残存状態がよく，明らかに人為的な加工が見られる22点を図化した。

軽石加工品以外の石器については，第１節３－(2)「Ⅲ・Ⅳ層の石器」で報告している。

190 ～ 192は炉跡から出土し，比較的大型の軽石加工品である。被熱痕だけでなく，わずかな調整痕が観察でき器具の固定や炉本体に使われたのではないかと考える。

190は191・192に比べ小型であるものの，全体に被熱痕がみられ，ケズリによって表面を平らに調整されている。191も同様に全体に被熱痕が見られるものの，所々に摩耗や被熱などの跡が残る。192は190・191に比べ，大型で半円の柱型に加工されている。一部，側面はケズリやスリ等で鋭く加工されているが用途は不明である。

193 ～ 199は土坑及びピットから出土した。193は表面部を平らに加工してあることから台石・石皿と思われるが，裏面上部に抉りが施されているため，煮炊きの際の固定具として使われた可能性も考えられる。194は上部と側面が平らに成形されており，一部，使用痕も見られる。石皿か台石の破片と考えられる。195は台石の破片と思われる。上部と下部に平らに加工した痕が見られ，特に上部にはケズリによる調整がされている。196は明確な形状は不明であるものの，軽量な軽石に一部階段状の抉りが施されている。用途は不明である。197・198は同一のピットから出土した。197は表面と裏面・側面の三面にケズリによる調整が細かく施されている。調整に切り合いが見られることから目的の形状へと加工したと考えられる。198は大きな抉りが特徴的である。全体の欠損が大きいため実際の形状は不明であるが197と同様にケズリによる細かい調整が見られ，抉りは土器や道具などを固定した際に調整して加工したものと考えられる。どちらも被熱痕があるため調理施設や土器等を製作する際に使われたとも考えられるが用途の詳細は不明である。199は破損部が多く数個の破片を接合している。周辺を丸く加工しており，下部にかけて安定させるように平らにしている。一部に黒い焦げが観察できる以外は被熱を受けていない。用途は不明である。



第107図　軽石加工品１

200 ～ 211はⅢ・Ⅳ層から出土した軽石加工品である。200は円筒形で，欠損部分が多いが，残存部の形状から円形に整えられていたと想定できる。一部，被熱の痕が見られ，破損部が鋭角になっている。そのため軽石加工品を使用した後の再加工品と考えられるが用途は不明である。201は全体的に丸く滑らかに調整され，中心部に溝状の加工が見られる。202は上下・側面にかけて平らに加工されており，全体に被熱痕が観察できる。一部，穿孔のような溝が観察できるが目的・用途等については不明である。203は表面のみ平坦になっており，角が丸くなっている。裏面に特別な加工はされていない。用途は不明である。204は側面部が丸く裏面に平らな面をもつ。被熱痕が観察できるが用途は不明である。205は表面に平らなケズリが見られ全体に被熱痕が観察できる。台石の破片と考えられる。206は擦痕が全体的に，被熱痕が所々に観察できる。先端が鋭角に加工され，各面が平坦に調整されている。火を使用した際に道具の固定や使用した後に再加工されたと考えられる。207は表面が



第108図　軽石加工品２

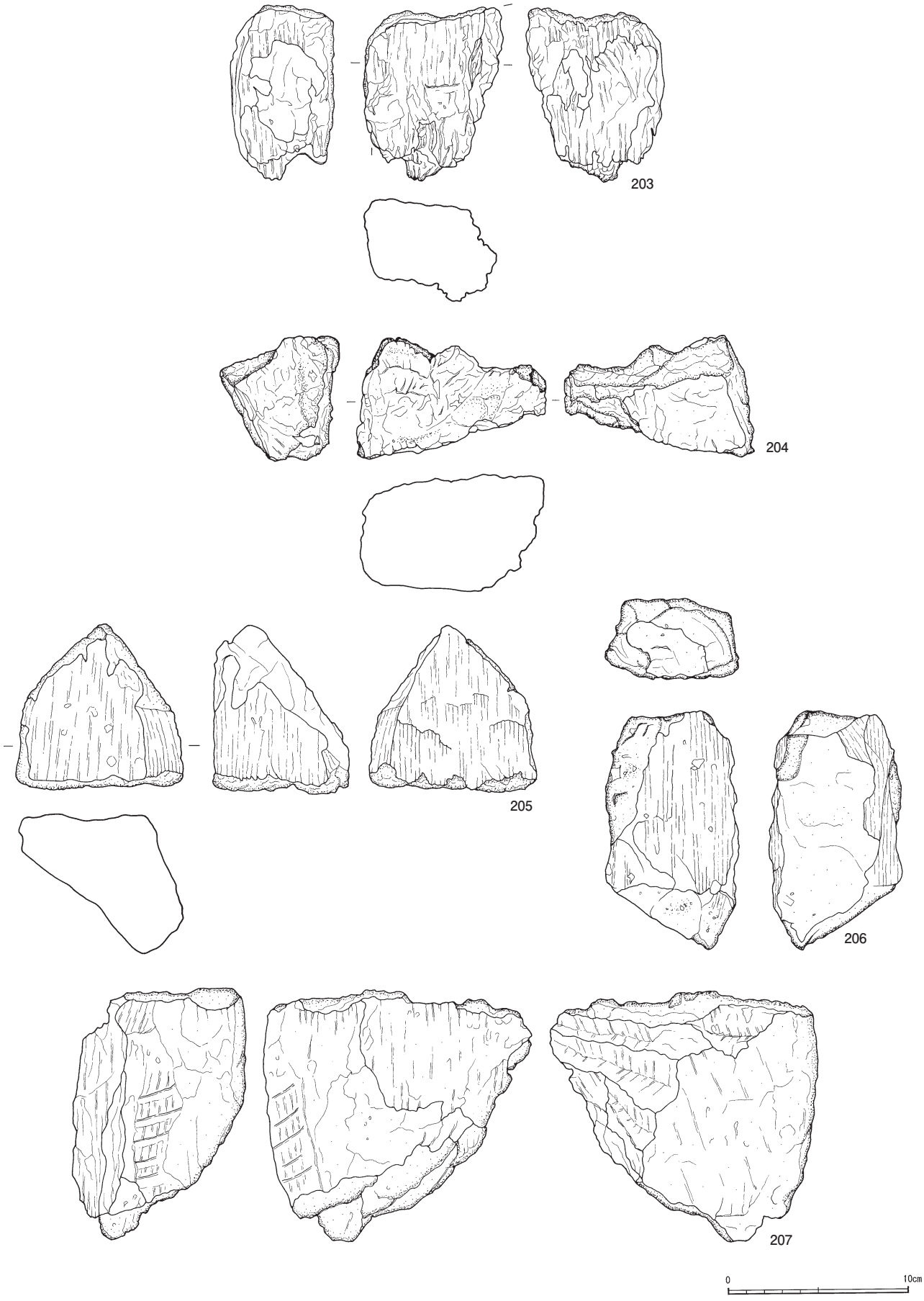
平らに削られており，被熱痕はないものの一部，節理が見られる。節理面を剥ぐようにケズリが見られるため，軽石部分のみを使用するために加工されたと考えるが，詳細は不明である。208は表面に使用痕と思われる擦痕が見られ，側面部に階段状のケズリによる調整が見られる。欠損により全体の形状を把握できないが残存状態から物や道具をのせて使用した石皿か台石と考えられる。

209は明瞭な被熱痕が観察できない。表面は平らで，裏面は鋭角な抉りが観察できることから石皿や台石の破片と考えられる。

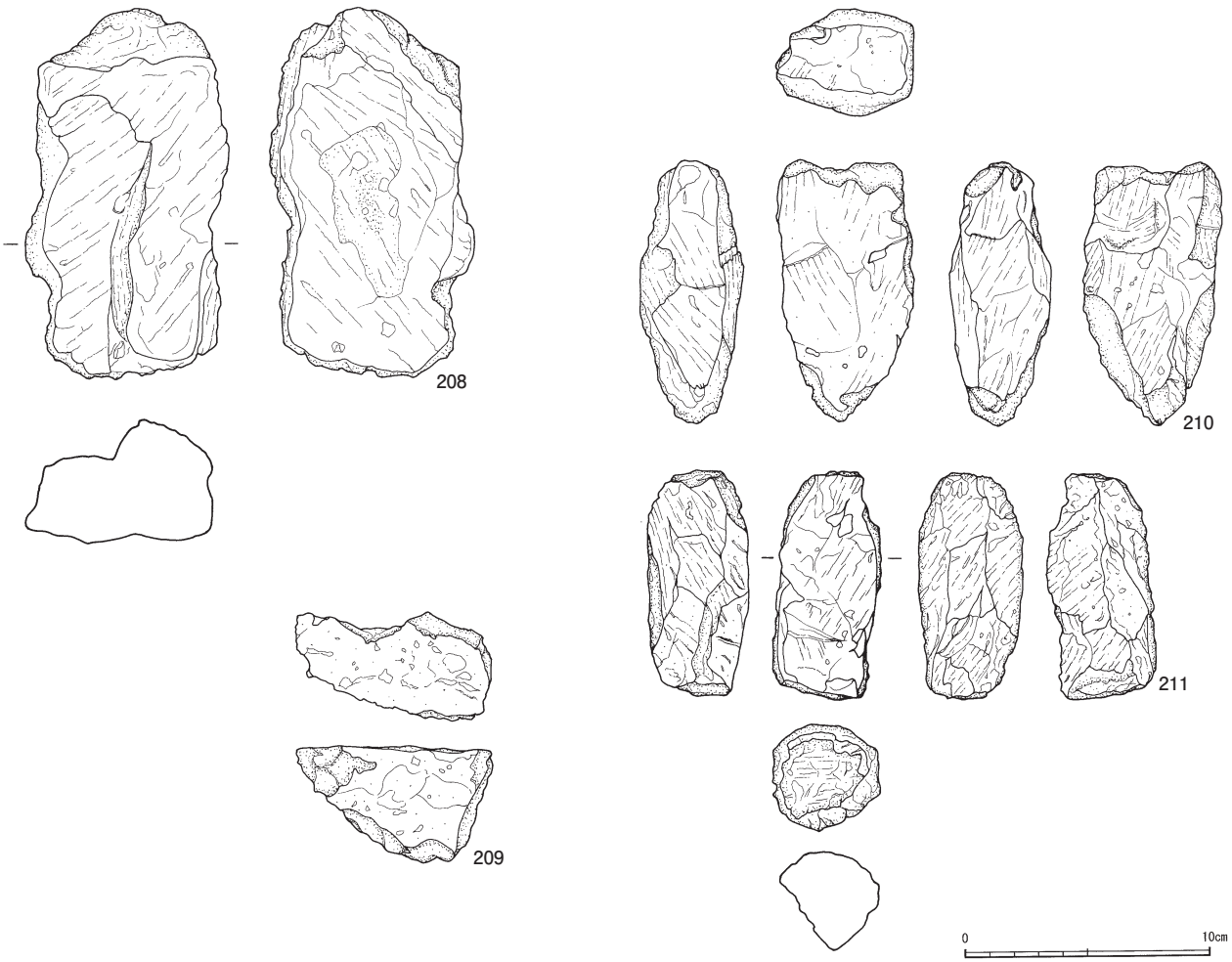
210・211は同一地点で出土した。大きさにわずかな違いがあるが，いずれも被熱痕は観察できず，面取りをされ棒状に加工されている。用途は不明である。



第109図　軽石加工品３



第110図　軽石加工品４



第111図　軽石加工品５

第36表　軽石加工品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
107	190	軽石加工品	J－15	Ⅳa	8.5	12.9	3.6	76.0	－	炉跡
	191	軽石加工品	J－15	Ⅳa	13.3	9.3	8.8	295.0	－	炉跡
	192	軽石加工品	J－15	Ⅳa	16.6	12.3	7.3	537.0	－	炉跡
108	193	軽石加工品	－	－	18.4	14.2	7.9	372.0	－	土坑
	194	軽石加工品	－	－	7.7	5.5	6.0	104.0	－	土坑
	195	軽石加工品	G－5	Ⅳa	4.4	5.8	7.9	68.0	－	土坑
	196	軽石加工品	－	Ⅲa	13.5	10.2	6.4	205.0	掘立7号P15	ピット
	197	軽石加工品	－	Ⅳa	10.8	11.3	8.8	505.0	H25-P86－1	ピット
109	198	軽石加工品	F－6	Ⅳa	15.7	10.7	7.5	294.5	H25-P86－2	ピット
	199	軽石加工品	H－8	Ⅳa	11.5	11.7	10.0	324.0	H24-P257	ピット
	200	軽石加工品	J－9	Ⅲb	7.8	6.2	6.3	80.0	2520	
	201	軽石加工品	K－5	Ⅲb	6.1	4.8	3.5	20.0	2011	
	202	軽石加工品	J－15	Ⅲb	6.5	7.2	6.7	95.0	5042	
110	203	軽石加工品	I－9	Ⅲb	9.6	7.5	5.6	138.0	2515	
	204	軽石加工品	F－5	Ⅲa	6.7	10.5	6.4	150.0	83104	
	205	軽石加工品	K－6	Ⅲa	9.2	9.3	7.5	145.0	109992	
	206	軽石加工品	L－20	Ⅲb	13.0	7.1	4.4	269.0	72806	
	207	軽石加工品	G－5	Ⅲa	13.9	14.8	9.6	563.5	87441	
111	208	軽石加工品	L－6	Ⅲa	15.0	8.3	5.0	195.0	110029	
	209	軽石加工品	K－6	Ⅲa	4.4	8.0	4.8	47.7	110002	
	210	軽石加工品	F－12	Ⅲa	10.7	5.6	4.3	74.7	75303-1	
	211	軽石加工品	F－12	Ⅲa	9.2	4.4	4.2	54.0	75303-2	

第３節　中世の調査成果

１　調査の概要

中世の遺構・遺物は，出土点数も多く土坑墓など貴重な発見も多いことから，本遺跡の中心となる時代のひとつである。調査は遺物包含層であるⅢa層を中心に行ったが，近世～現代にかけての圃場整備等により残存状況や堆積状況に違いがある。遺跡の北側から南西方向の大部分は削平を受けており遺構調査が中心となった。対して遺跡南東部については，一部耕作による撹乱も含まれるが，包含層が良好に残存しており，遺構・遺物ともに多くの調査成果が得られた。

検出遺構は，土坑墓，掘立柱建物跡，溝・古道，鍛冶遺構，土坑，ピットなどであり，遺跡全体に広がっている。出土遺物は，黒色土器，土師器，瓦器，須恵器，青磁，白磁，中国陶器などで，撹乱による一括品やⅢb層出土品も含まれる。遺跡南部からのものが中心であるが，出土量が多く，遺跡全体で約1645点出土している。

２　遺構

中世の遺構は，土坑墓８基，掘立柱建物跡49棟，溝・古道66条，鍛冶関連遺構１基，土坑114基，ピット765基である。いずれも遺物包含層であるⅢa層下面から検出されたものであるが，残存状況によりⅢb～Ⅴ層まで検出面が異なるものも含まれる。

遺構内からは多くの遺物が出土しており，土坑墓内からは青磁，白磁，和鏡，和鋏など多彩な副葬品が出土した。土坑墓内の副葬品や，包含層からの流れ込みなどを含めた遺構内遺物総数は510点である。

(1) 土坑墓(第112図)

中世の土坑墓と思われるものは，遺跡全体で８基検出された。すべて検出面はⅣ層で，埋土はⅢa層を主体とする黒色土である。２m弱の方形もしくは隅丸方形を呈するのが主流である。主軸はいずれも略南北方向で，遺跡中央のG～N－12～16区で検出されている。時代的には12世紀後半から13世紀前半のもので，庇を伴う主屋を核とする建物群がA～Eの５群に分けられることから，台地全体に集落が広がり，多少時期差が見られるが土坑墓のすべてがいわゆる屋敷墓と考えられる。

土坑墓１号（第113～第114図）

J－12区，Ⅳa層上面で検出されたもので，長辺2.09m，短辺1.14m，深さ0.53mを測り，平面形は方形を呈する。坑壁は直線的に立ち上がり，底面はほぼ平坦であるが中央部に浅い凹みが確認される。この凹みの存在と木棺等の痕跡が見られないことから，土坑墓と考えられる。

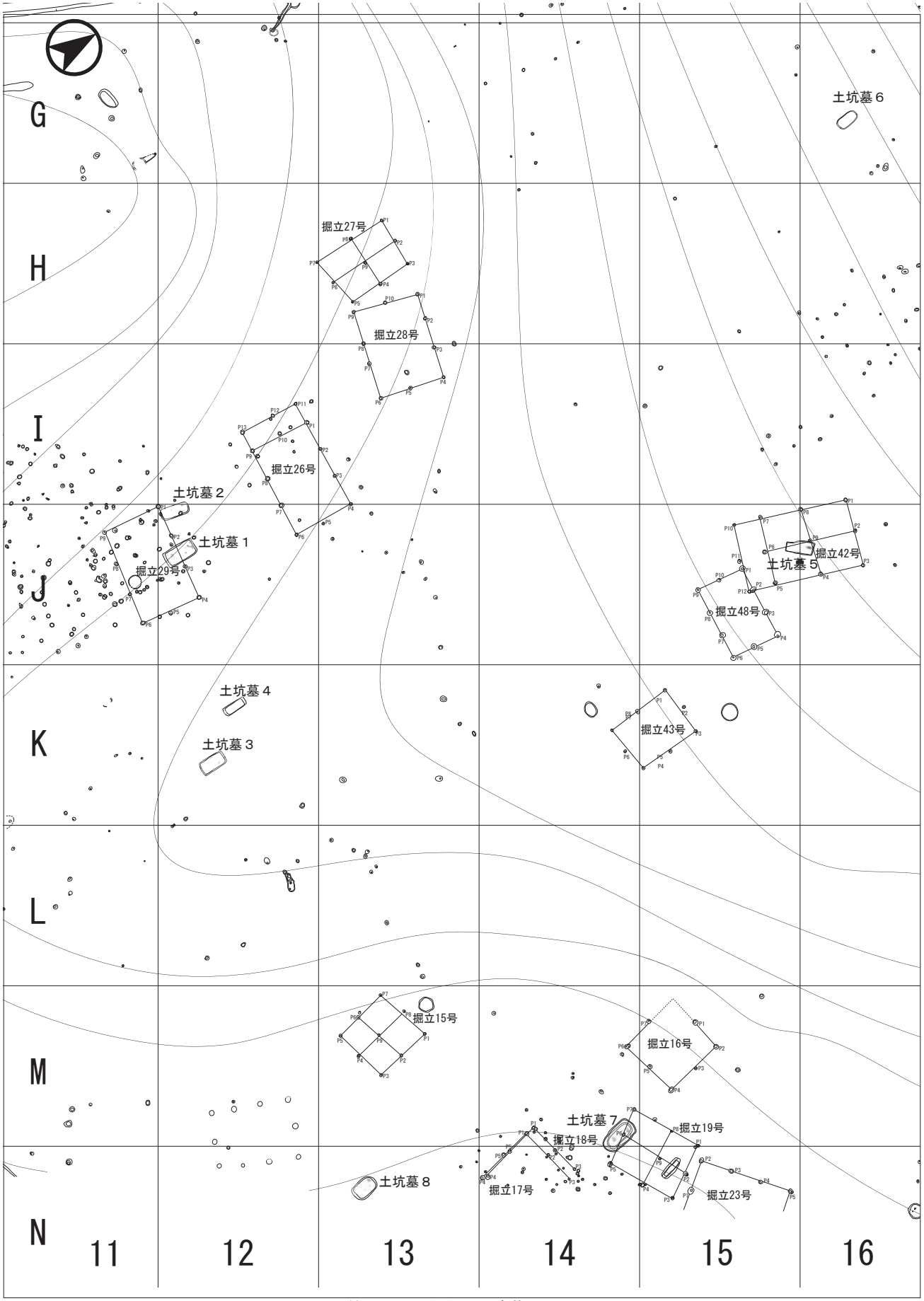
現代の耕作による撹乱が埋土深く残るが，奇跡的に主体部まで達しておらず，副葬品の残存状況は良好であった。土坑の北側では，青磁碗２点，白磁皿５点が東西方向に整然と並べられた状態で出土した。両端より中央がやや沈み気味で，全体的に南側に傾いていた。床面から約10cm上方に並べられており，北側に位置することから，頭位の上を板状のもので塞ぎ，その板の上に高価な青磁などを供えたと推測される。

南側からは完形の滑石製石鍋が，大小１個ずつ入れ子状に出土した。胴部下位に大量のススが付着しており，直前まで使用していたと思われる。また，その約25cm南からは，鉄製の紡錘車も出土している。これらの出土位置は北側の青磁類とほぼ同じことから，遺体上位に置かれたものと思われる。また，南側の両隅からは土師器の鍋の土器片が出土している。これと同一個体の土器片は，北側の青磁などとも出土しており，埋葬後意図的に割られた土器片を土坑墓の四隅に置いたと思われ，祭祀的な意味をもっていたと考えられる。

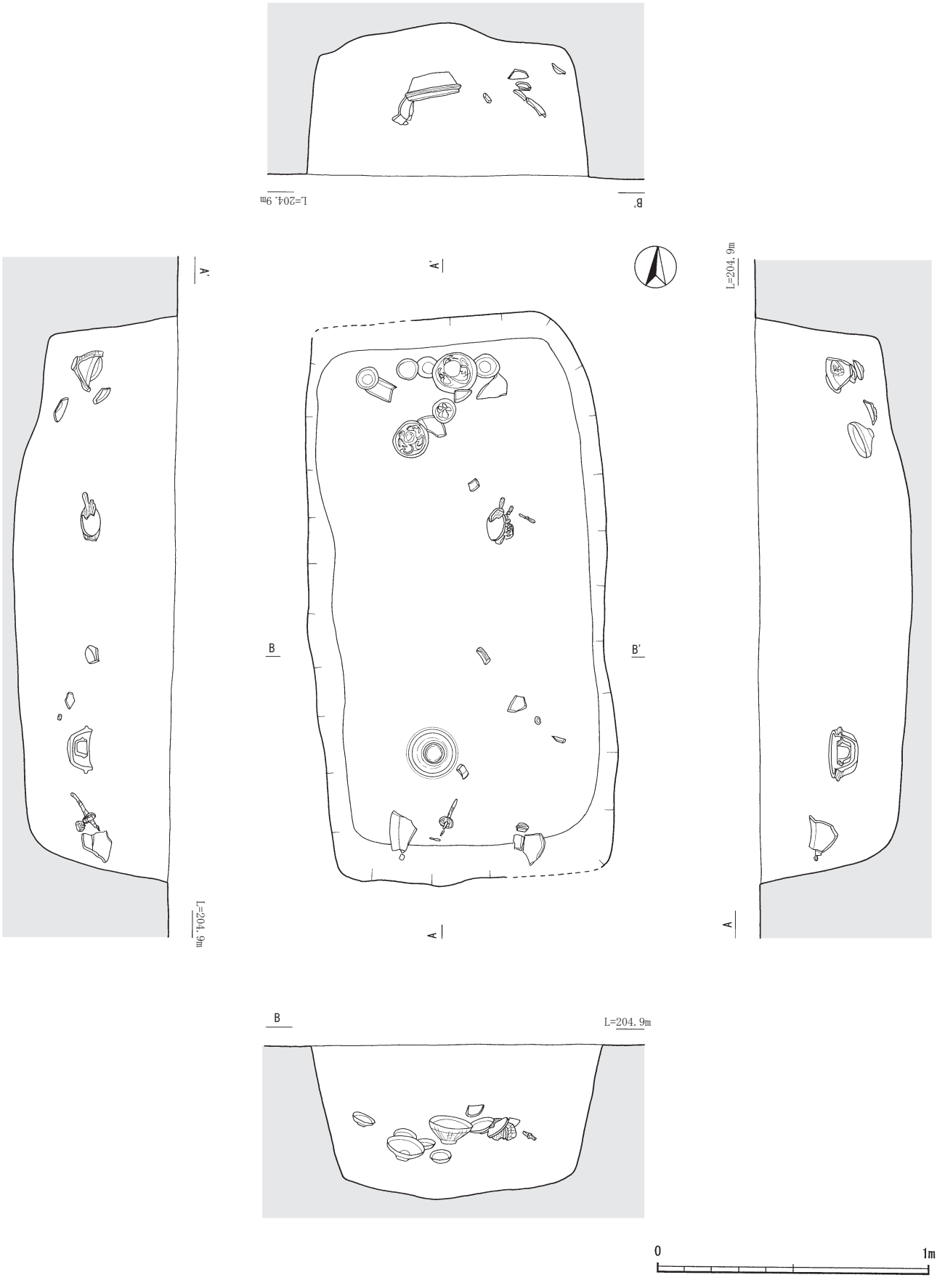
中央部からは，和鏡，青白磁の蓋付小壺，古銭，鉄製の和鋏，毛抜きが出土した。これらは密集して土坑墓中央のやや東寄りに位置し，全体が中心部へ向かって倒れるように傾いていた。和鏡の両面には黒漆塗りの木片がわずかに貼り付いており，木箱に収められていたと思われる。小壺と木片はほぼ密着しており，古銭は木片の外側に１枚貼り付いていた。古銭の表裏両面には繊維状のものが付着し，布状のもので大事に包まれて供えられていたことが分かる。鉄製の和鋏や毛抜きは和鏡や小壺の直下に位置していた。これらの折り重なるような出土状況から，全てを箱状のものに整然と収納したとは考えにくく，袋状のものに詰めていたのではないかと想定される。また，検出面が床面から約23cmと近く，他の副葬品と比べて一段低いことから，遺体の胸部付近に置かれていたと推測される。

これらの検出状況から，断定は出来ないが，南北を主軸とする方形の土坑を掘り，床面を浅く凹ませ遺体を安置し，生前使用していた和鏡や小壺，和鋏など身近なものを傍らに置いた後で側板を置いて蓋をした。その後，埋葬のために青磁碗や白磁皿を頭上に並べ，足元には日常使用していた滑石製石鍋や鉄製紡錘車を供え，呪術的な意味合いの土師鍋片を四隅に配置し埋めたと推測することもできる。

１号墓の副葬品は多種であり，経済力豊かで屋敷墓を造営できうるだけの権力者の存在が想定される。当時(12世紀後半～13世紀前半）大崎町一帯は，日向国救仁郷の北辺に位置し，入植者の開拓により大隅半島南部では唯一の島津一円荘が存在していた。また，大隅の南北各地を結ぶ交通の要衝でもあり，この野方地方を治める権力者が大きな経済力を有していてもおかしくない。この土坑墓は，大隅地方の中世前期の集落様相を知るうえで大きな発見となった。



第112図　中世の土坑墓配置図



第113図　中世の土坑墓１号①

遺物（第115～第117図）

土坑墓１号の遺物は，青磁，白磁，土師器，滑石製石鍋，磨石，鉄製品，古銭，和鏡などである。副葬品と埋土中，耕作による撹乱部を含め出土した遺物総数32点中26点について図化した。

212 ～ 214は青磁碗である。212は同安窯系青磁碗で，大宰府分類同安窯系青磁碗Ⅰ-Ⅰb類に比定されるものである。体部上位でわずかに屈曲し，黄色味を帯びた薄緑色の釉が外面胴部下位まで掛かる。発色が弱く，釉垂れも見られる。外面に細かい縦の櫛目文を施す。体部最下位から高台にかけて，回転ヘラ削りの跡が残る。内面には，ヘラ状工具による文様と櫛状工具によるジグザグの点描文を施す。213は212と同様に同安窯系青磁碗であり，Ⅰ-Ⅰa類に比定されるものである。外面は無文で，茶色味を帯びた薄緑色の釉が体部下位まで掛かり，上げ底気味の高台は露体である。内面は，ヘラ状工具による文様と櫛状工具による点描文を施す。214は青磁碗であり，浅緑色の施釉で，内面無文，外面に粗めの櫛状文を施す。部分的出土のため型式は不明である。

215 ～ 220は白磁で，215は碗，216 ～ 220は皿である。

215は胴部下位に膨らみをもち口縁部へ向かって延びるものである。口縁部がわずかに外反し，水平面をもち尖るもので，大宰府編年白磁碗Ⅴ類に比定される。内外面とも無文で，透明釉が施される。

216 ～ 218は，直口する口縁をもち，底面がわずかに突き出し高台状に残るものである。大宰府編年白磁皿Ⅵ－１a類に比定されるものである。216は，灰白色の胎土に発色の弱い浅黄色の釉が掛かるもので，内面屈曲部に明瞭な段をもつ。外面施釉は，体部下位は無釉であるが，施釉の幅は不規則である。底面は，切り離し後削り調整を施す。217は，体部上位の屈曲部と口縁の間に，わずかな凹みをもつものである。内面の段は明瞭で，見込み付近に砂粒が熔着している。外面下位は無釉で，高台切り離し後はナデ調整を施す。218は，体部の屈曲が弱く，直口するものである。灰白色の胎土に内面全面，外面底部近くまで飴色をした釉が掛かるが，外面の施釉は拭き取られ，改めて口縁部付近に施釉を施した痕跡が残る。全体的に発色にムラがあり，釉垂れも見られる。口唇部の釉を掻き取られた口禿げ皿である。

219は，やや膨らみをもちながら直口する体部をもち，底部が高台状に残るもので，大宰府編年Ⅵ-１b類に比定されるものである。浅黄色の釉が掛かり，内面に弱い屈曲をもち沈線状に巡る。底面に工具による切り離し痕が残り，218と同じく口唇部の釉を掻き取られた口禿げ皿である。220は，体部が膨らみをもちながら立ち上がるもので，底面は平底である。大宰府編年Ⅷ-１b類に比定される。灰白色の釉が底面以外の全面に厚く施され，口縁部付近に釉垂れが見られる。内面に弱い屈曲をもち，段が沈線状に巡る。見込みにヘラ状工具による草花文が描かれる。

221，222は，白色の胎土に青白色の釉が掛かる青白磁の小壺で，221は蓋部，222は身部である。発色の美しい釉は，蓋部の上面と身部の内面全面，外面下位まで施され，受け口部分は削り取られている。

221は，つまみがなく天井部が平坦で，庇にかけてほぼ水平である。上面に花文が施され，身受け部の口唇は身部に合うように削り出しにより作られている。222は，削り出された浅い高台から丸みをもちながら立ち上がり，肩部で大きく内傾し，蓋部に合う受け口が形成される。外面には，４段の鏑連弁文を施される。

223 ～ 228は，土師器である。223 ～ 227は，埋土内出土の小片であり，土坑墓への副葬品の可能性は低い。228も同じく破片であるが，意図的に割られたものを四隅に配置した副葬品と思われるものである。

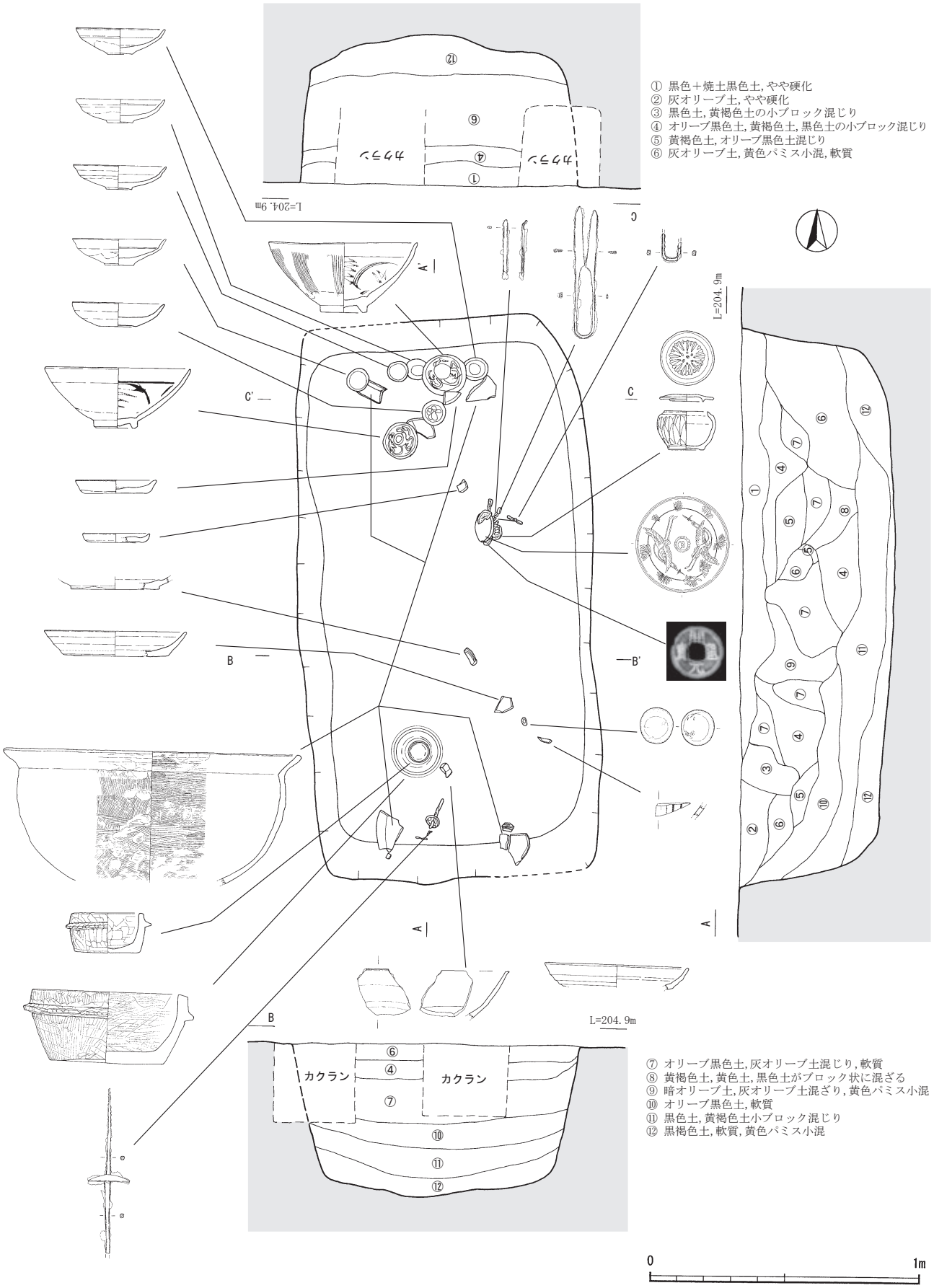
223 ～ 225は坏である。223は精製された胎土で，底面との境に明瞭な稜をもつもので，底面にヘラ状工具による切り離し痕が残る。224は外面に黒斑が残り，横ナデ調整痕が凹みとなって巡っている。225は坏の底部で，充実気味の底部はわずかに張り出している。

226，227は，器高が１～ 1.5cm程度の皿である。226は，底面切り離し後ナデ調整を施す。全体に黒斑が見られ，灯明皿として使用された可能性がある。227は，内面のナデ調整痕が凹みとなって残り，全体的に歪んでいる。

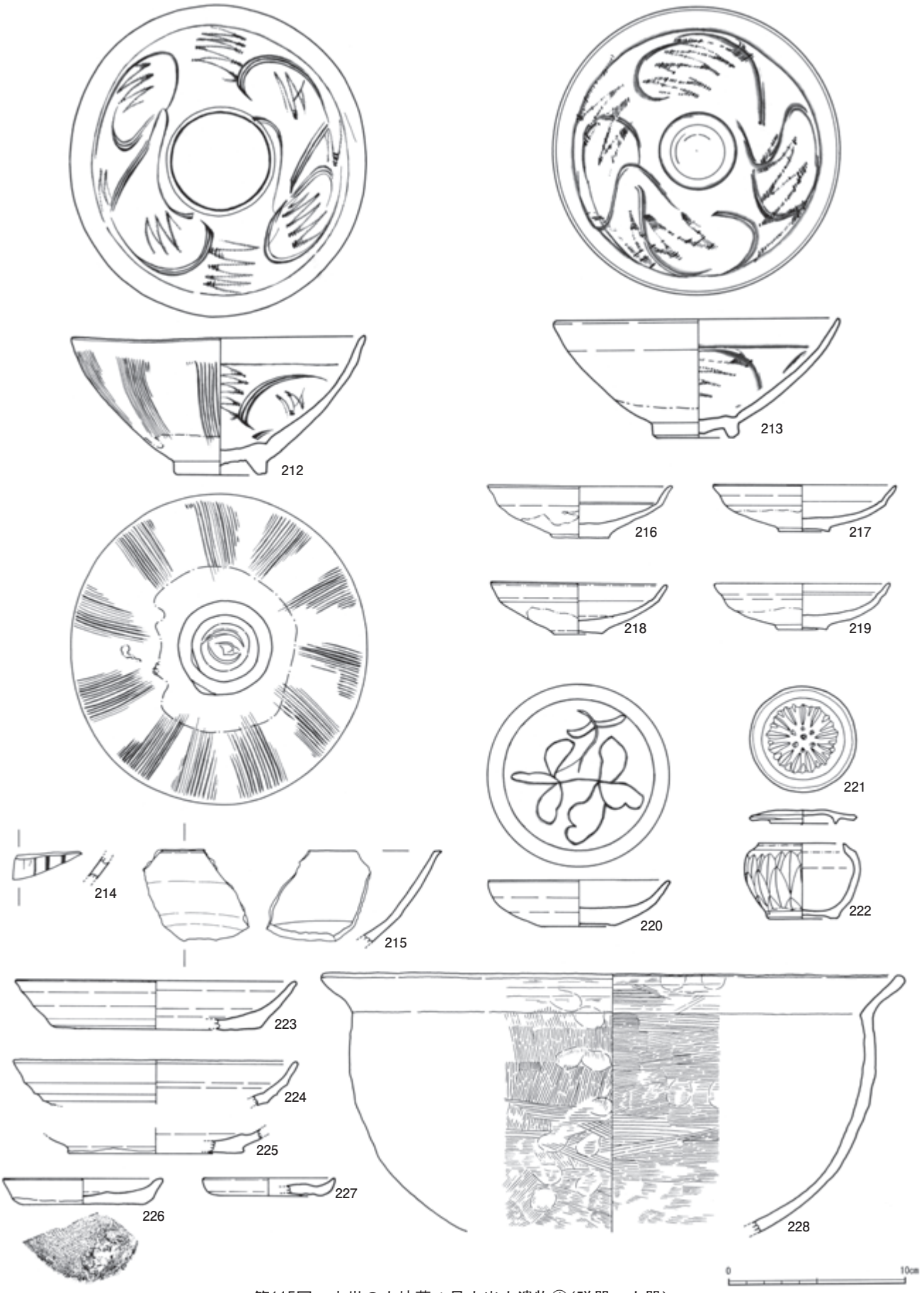
228は，膨らみをもつ胴部が内湾しながら立ち上がり，口縁部で「く」の字状に大きく外反する鍋である。口径32.4cm，底面は意図的に打ち欠いたと思われ形状は不明だが，残存部の器高が14.5cmと大型のもので，内面の屈曲部に明瞭な稜をもつ。両面とも丁寧なハケ目調整が施され，一部に指頭圧痕が残る。煮炊き具として実際に使用されていたと思われ，外面に大量のススが付着しており，C^{14}年代測定の結果は，860±30yrBPである。呪術目的に入れられたと推測されるため，部分的な土器片のみの出土である。

229，230は滑石製石鍋であり，入れ子状に出土した。墓に滑石製石鍋を供える例はあまりなく，大小いずれもほぼ完全な形での出土で，全国的にも珍しく貴重な資料である。いずれも平底で，やや内湾しながら直口し，断面形状が三角形に近いやや尖り気味の鍔が，体部上位に巡る形状は同じである。

229は口径17.4cm，底径12.6cm，器高7.9cm，器壁1.2cmを計る。内外面ともノミ状工具による工具痕が規則的に残り，傾向として，外面に縦位の，内面に横位の細かい工具痕が多数残る。平底の底面は若干水平でなく，座りが良くない。外面鍔以下の全面に大量のススが付着しており，直前まで煮炊き具として使用されていたと思われる。C^{14}年代測定の結果は，800±30yrBPである。



第114図　中世の土坑墓１号②（出土状況・断面図）



第115図　中世の土坑墓１号内出土遺物①（磁器・土器）

230は口径8.1cm，底径7.2cm，器高4.4cm，器壁0.9cmを測る小型の石鍋で，底面の内面中央は器壁が0.5cmとやや凹んでいる。器形は229とほぼ同じで，内外面にノミ状工具による工具痕が多く残るが，ミガキやナデによる調整を施し，丁寧な仕上がりである。外面に大きな黒斑が見られるが，ススの付着はほとんどなく，実用品としての可能性は低く，儀礼的な目的のため製作された可能性がある。

231は，最大長4.0cmの磨石である。小型のもので，両面に磨面が残る。流れ込みの可能性がある。

232 ～ 235は，副葬品の鉄製品である。

232, 233は, 鉄製の和鋏である。232はほぼ完全な形で，233は部分的な出土である。

232は，頭部が「U」字状に折り返されており，握り部分から直線的に延びるものである。ほぼ完全な出土で，全長14.8cm，全幅2.6cmである。刃部の全長は6.6cm，幅1.0cmで，断面三角形を呈した片刃である。わずかに開き気味の刃部は「ハ」の字状に広がる。233は，「U」の字状に折り返された握り部で，和鋏として取り扱った。断面形状は四角形を呈する。

234は鉄製紡錘車である。直径4.7cmの紡輪の中心に，長さ18.5cmの紡茎が差し込まれた状態で出土した。紡茎の最大径は0.6cmで，先端に向かって傾きながら先細りとなり，先端には糸を掛けるための鈎が見られる。紡輪は最大径4.7cmの円盤状を呈し，わずかに中央が盛り上がっている。

235は毛抜きである。片側のみの出土で全体形状は不明であるが，長さ6.6cm，厚さ0.3cmの薄い鉄板を折り曲げて，挟めるように加工してある。

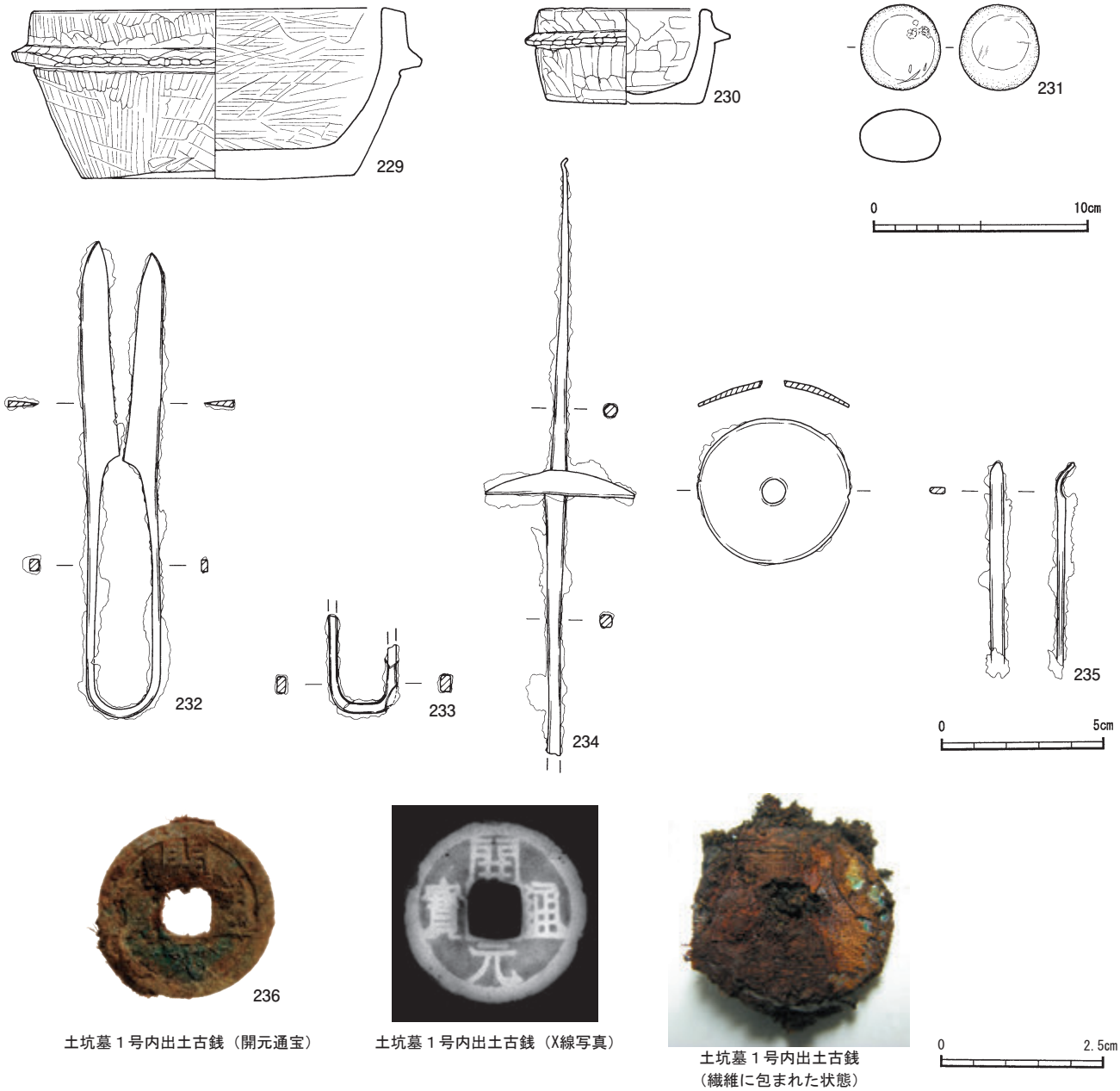


土坑墓１号内出土青磁碗

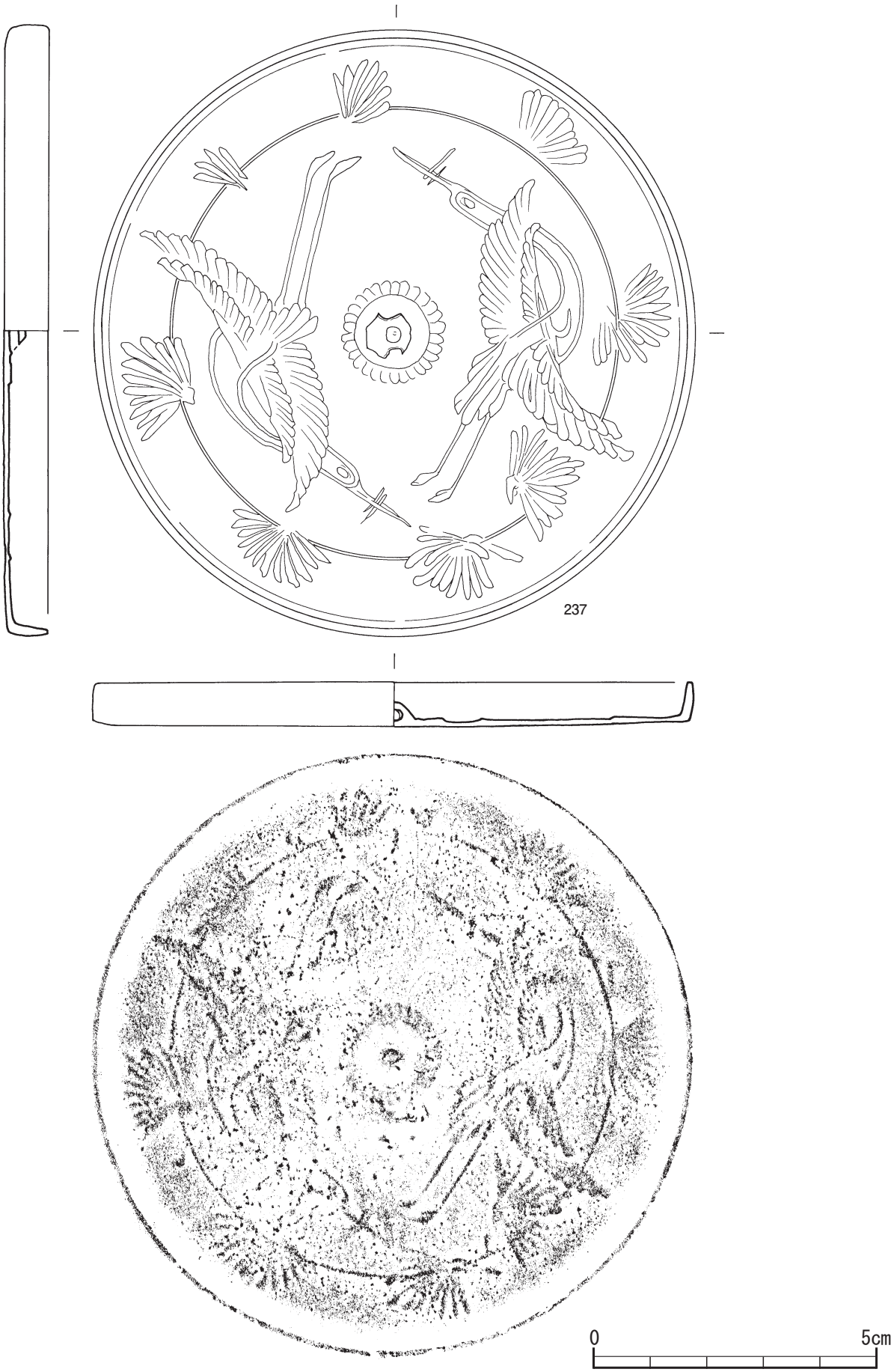
236は古銭である。和鏡の納められた黒漆塗りの木箱の木片に貼り付き，赤橙色の錆に覆われた状態で出土した。表裏両面に繊維質が付着しており，布状のものに包まれていたと思われる。銭貨名は「開元通寶」であり，初鋳は背面に鋳造地名がないことから南唐銭の可能性が高く，960年と思われる。「開元通寶」は，宋銭とともに中世に広く流通しており，何世代にも渡り受け継がれてきた伝世品の可能性が高い。

237は，黒漆塗りの木箱に納められていたと思われる和鏡である。出土時は，表裏ともに錆が付着しており，文様の判別が困難であったが，丁寧に除去作業を行った結果，鏡背面の縁に沿って配された２羽の鶴が，羽を広げ松の枝を喰（は）んでいる「松喰鶴鏡」であることが判明した。２羽の鶴は，ほぼ同じ体勢で反時計回りの回旋構図を取っている。界圏状に配された８つの松葉には枝は付いておらず，枝をくわえた嘴は進行方向を向き首を伸ばしている。

和鏡の面径は，10.8cm，縁高は0.8cm，鏡胎は２㎜，紐帯の高さは４㎜である。縁は先端にごく狭い平坦面をもつ平縁で，ほぼ直角に立ち上がる。重量99gと軽く，界圏も細く，鏡胎も薄い。紐帯は縁の半分程度しかなく，文様の表出も少ないことから，非常に薄作りで，もち運びしやすい作りである。法量や文様などの特徴から，12ｃ後半～13ｃ初頭に京都で製作されたものと推測される。平安時代後期になると爆発的に鏡の生産が増加し，支配層の間では鏡は化粧道具として普及していたことから，本遺跡まで運ばれてきたと推測される。



第116図　中世の土坑墓１号内出土遺物②（石器・金属器）



第117図　中世の土坑墓１号内出土遺物③（和鏡）

土坑墓２号（第118図）

Ｊ－12区，土坑墓１号から西側約1.6m離れて検出された。規模は長辺1.81m，短辺0.74mの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは約20cmである。１号墓よりもやや小さめであるが，この時期は膝を曲げ軽く立てて安置するのが普通であり，適当な大きさである。木棺をすえた形跡が見あたらないことから土坑墓と判断した。北側の床面近くに，副葬品と思われる白磁碗が２点並ぶように供えてあったが，土坑中央を貫くように，略南北方向に延びる幅65cm，深さ20cm程度の現代の撹乱の影響で，白磁碗は破壊され，底面の一部も消失している。

遺物（第118図）

土坑墓２号の遺物は，白磁，土師器，須恵器，石器などである。遺物総数10点中7点について図化した。

238，239は，並んで出土した白磁碗である。238は，幅広の玉縁状の口縁をもつもので，大宰府分類のⅣ－１a類に比定される。直線的に開く体部は口縁部付近でわずかに内湾し，外面下半は露胎である。239は，やや丸みをもつ体部が，口縁部で外反するもので，大宰府分類のⅤ－４a類に比定される。外反する口縁部は上面に平坦面をもち嘴状に尖る。体部外面下位は無釉で，見込み付近に沈線状の段を有する。

240は浅めの土師器の皿で，底面にヘラ状工具による切り離し痕が残る。241は，玉縁状の口縁をもつ東播系須恵器である。灰褐色の胎土で全体的に黒色系を呈する。

242～244は，表面が火熱により赤化した台石の一部である。242は，凝灰岩で作られた平坦面をもつもので，赤化が激しく，表面が摩滅している。全体像は不明である。243，244は軽石製の台石である。244は，表面に黒化も見られ，直接火熱を受けていたと思われる。

土坑墓３号（第119図）

Ｋ－12区，土坑墓１号から東側約12m離れ，土坑墓４号と並ぶようにして検出された。規模は長辺1.67m，短辺0.79mの方形を呈し，検出面からの深さは約17cmと浅く，上位は削平されたと思われる。現代の耕作による撹乱が激しく，床面の約半分は消失しているため，土坑墓の正確な規模や，副葬品など全体的な様相は不明の部分が多い。残存している床面付近に，副葬品の一部と思われる鉄製品の集まりが２ヶ所確認された。鉄鏃や腰刀などの武具が多数を占め，それらを研ぐための携帯用砥石も一緒に出土している。土坑墓内からの武具の出土はこの時代では珍しく，貴重な資料である。

遺物（第119図）

245は，体部下位に張りをもちながら直線的に立ち上がり，口縁部が少し反る白磁碗で，大宰府分類Ⅴ－1類に比定される。全面施釉の内面には，体部と見込みの間に段をもち，上位に沈線が巡る。外面は高台付近は露胎であり，口縁部付近に段をもつ。工具ナデ調整痕が稜となり残り，高台形は欠損のため不明である。

246，247は，土師器の小皿である。246は，底面に糸切り離し痕が明瞭に残り，工具によるナデ調整後，さらに指ナデ調整により表面を丁寧に仕上げている。焼成が良く，やや硬質である。247は，黒灰色の胎土に黒斑が残るもので，糸切り底である。部分的な出土で摩耗しているが，灯明皿の可能性がある。

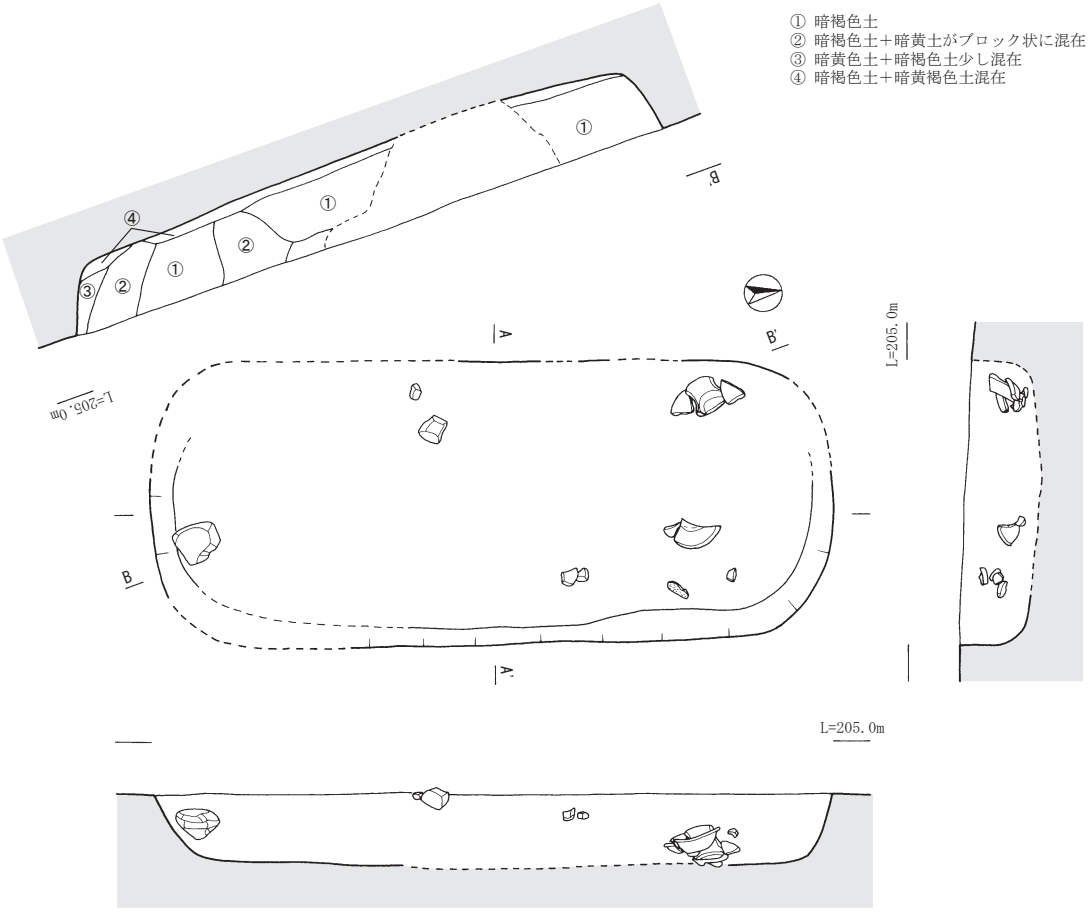
248は，薄い板状の粘板岩に穿孔が施された砥石である。穿孔には紐が通されていたと思われ，一部欠損しているが，全長10.4cm，幅4.2cm，厚さ0.9cmと大きさも手もちサイズであることから，常に携帯して利用されていた提げ砥石と思われる。表裏両面に平坦な研磨面をもち，片側平坦面中央に溝状の凹み研磨面を有する。両面とも研磨使用による磨り減り痕が顕著であり，中央部が両端より薄くなっている。側面には携帯しやすいように成型した跡が見られる。鉄鏃の上に置かれていた出土状況から，金属製品の研磨用に使われていたと推定される。

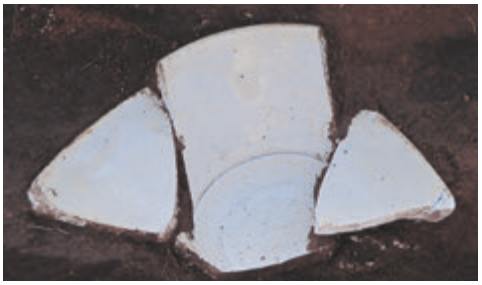
249～254は，鉄鏃またはその一部と思われるものである。249，250は古墳時代に多い「圭頭鏃」に類似するもので，身部が細長い菱形を呈している。先端部の両縁に刃部が形成され，断面は薄いレンズ形である。どちらも腐食が激しく，茎部との間に欠損が見られる。茎部は先細りしながら尖っており，断面形状は四角形を呈する。249の茎部の先端には矢柄と思われる木質が付着している。251は雁又鏃である。ほぼ完形で出土しており，幅広の身部内側に刃部があり，断面は薄い楔形を呈する。先細りしながら長く延びた茎部の断面は四角形を呈する。252～254は，先細りしながら延びる棒状の鉄製品で，鉄鏃の茎の一部と思われるものである。254は薄い板状を呈し，途中から大きくＳ字状に湾曲している。屈曲の形状は錆に覆われ詳細は不明であるが，先端に矢柄と思われる木質が付着している。

255は薄い板状の鉄製品で，残存状況が極めて悪く全体形は不明であるが，片刃で並んでいた出土状況から，刀子または腰刀の一部と思われる。金属部分の両面に木質の付着が見られ，鞘に納められていたと思われる。

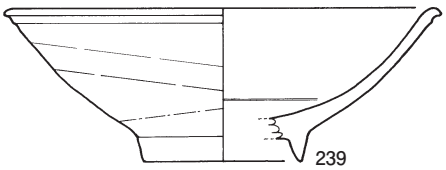
256，257は和鋏である。256は刃部の片方と，握り部の一部が欠損しているが，残存部から全長約13cmのものと推定される。握り部は「Ｕ」の字に折り曲げられており，断面は四角形である。刃部は片刃で，峰部分は直線的に延びているが，内側の刃はわずかに内湾している。257は握り部の折り返し部分で，毛抜きの可能性もあるが，「Ｕ」の字の大きさから，和鋏と判断した。刃部は欠損している。

258は腰刀である。錆化が激しく，先端部，刃部，茎部先端と部分的な出土である。全長は不明であるが，約30cm程度のものではないかと推測される。刃部は片刃で，刀身はわずかに反っている。両面には鞘と思われる木質

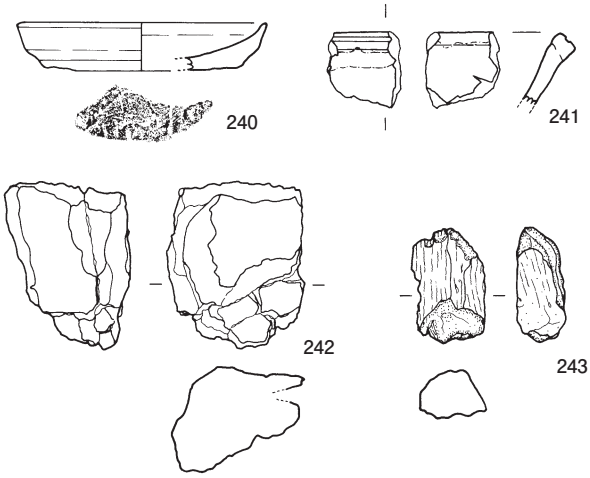




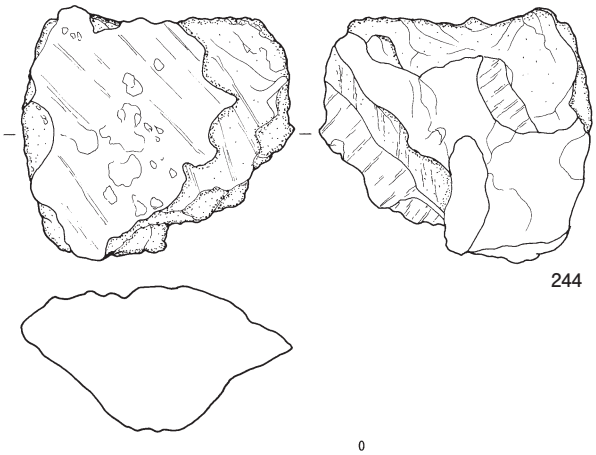
238



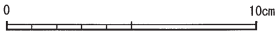
239



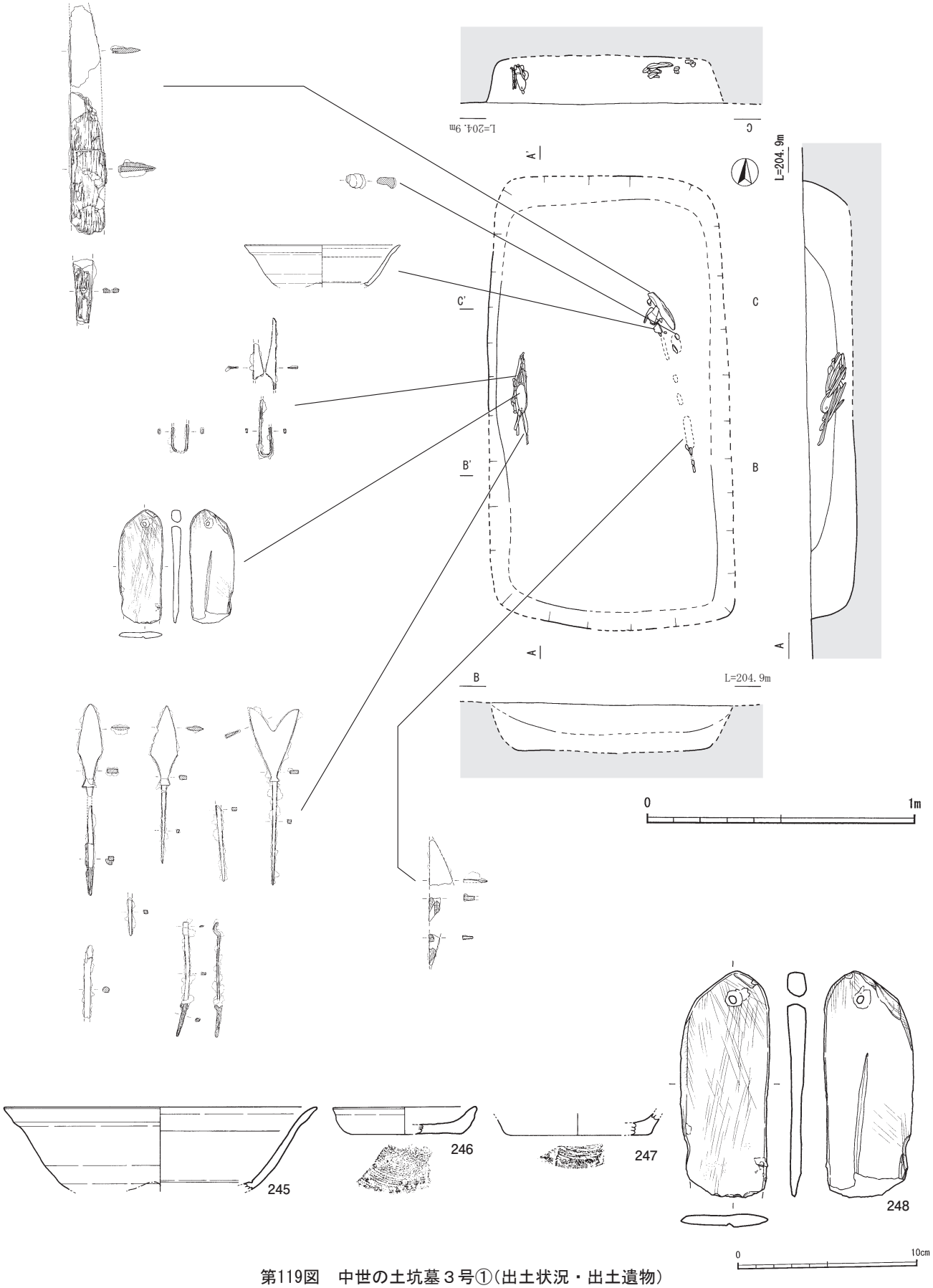
240 241 242 243



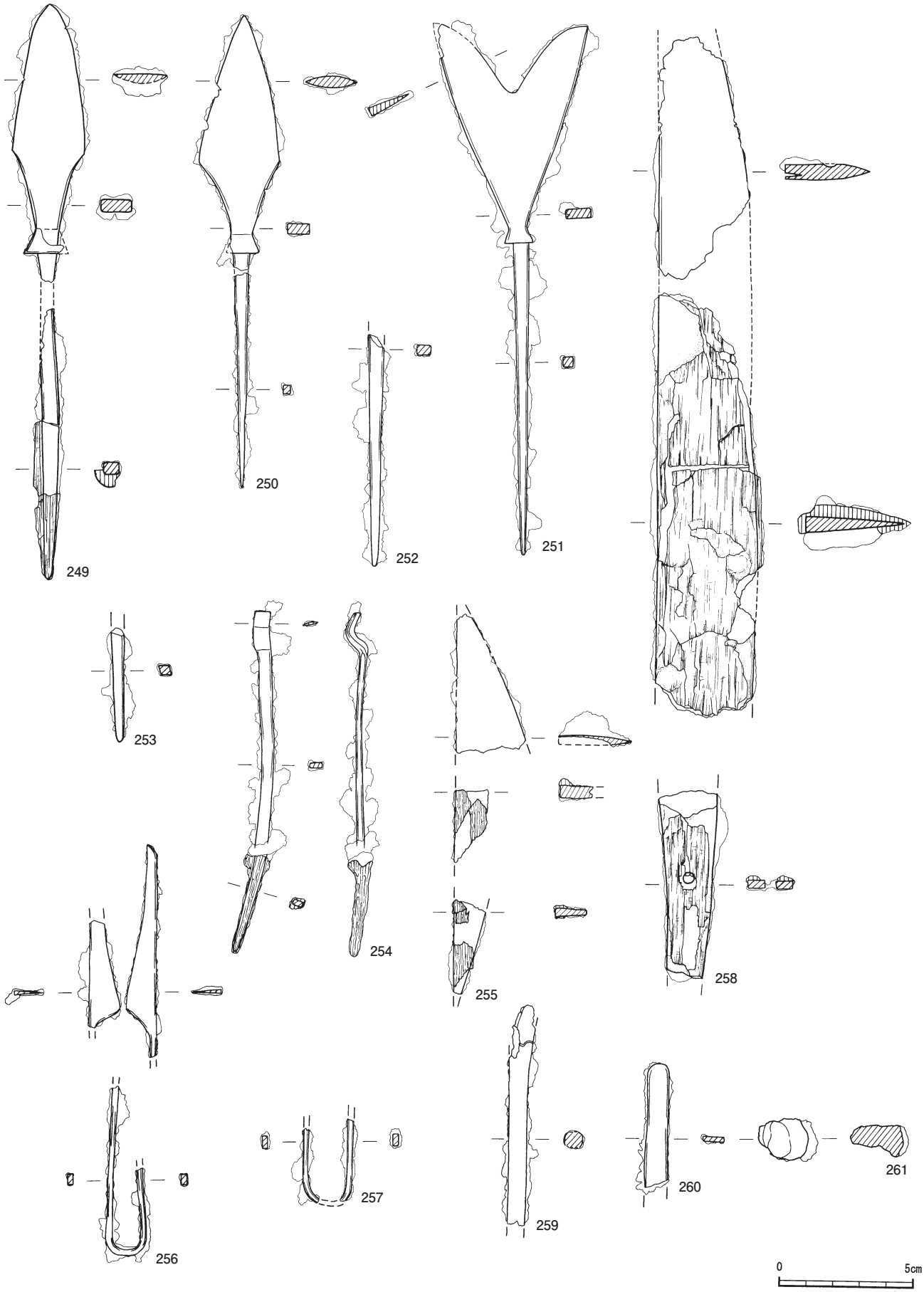
244



第118図　中世の土坑墓２号（出土状況・出土遺物）



第119図　中世の土坑墓３号①（出土状況・出土遺物）



第120図　中世の土坑墓３号②（出土遺物・鉄器）

が，ほぼ全体を覆いように残存している。茎部は茎尻へ向かって直線的に細くなる作りで，柄の一部と思われる木質が両面に貼り付いている。中央部には目釘穴が認められる。

259は棒状を呈したもので，鉄鏃の茎の可能性もある。260は平板状を呈したもので，先端は丸みをもち刃はもたず断面四角形である。261は，詳細不明の鉄製品である。複数の鉄塊が重なったようにも見える。

土坑墓４号（第121図）

Ｋ－12区，土坑墓３号から北西側約２ｍ離れ，土坑墓３号と並ぶようにして検出された。規模は長辺1.54m，短辺0.64mの方形を呈し，検出面からの深さは約20cmであり，上位は削平されたと思われる。現代の耕作による撹乱が西側に大きく見られる。副葬品と思われる遺物の出土はなく，埋土中より262の鉄片が１点出土した。

土坑墓５号（第122図）

Ｊ－15・16区，土坑墓１号から北東方向へ約37m離れて検出された。規模は長辺1.75m，短辺0.9mの方形を呈し，検出面からの深さは約10cmである。鉄釘の出土や木棺の特徴もなく，床面がわずかに凹んでいることから，土坑墓と思われる。中央部を切るように樹痕があり，壁の西側や床面の一部に凸凹が認められる。検出面からの深さは浅いが，耕作による撹乱もなく良好な検出状態である。北側の床面近くに，副葬品と思われる青磁碗が２点南北方向に並ぶように供えてあった。釉薬に傷や摩滅が見られないことから，常用されたものではなく，葬送儀礼のため用意されたものと思われる。他の土坑墓と離れているが，周辺には掘立柱建物跡が数棟集中している。

遺物（第122図）

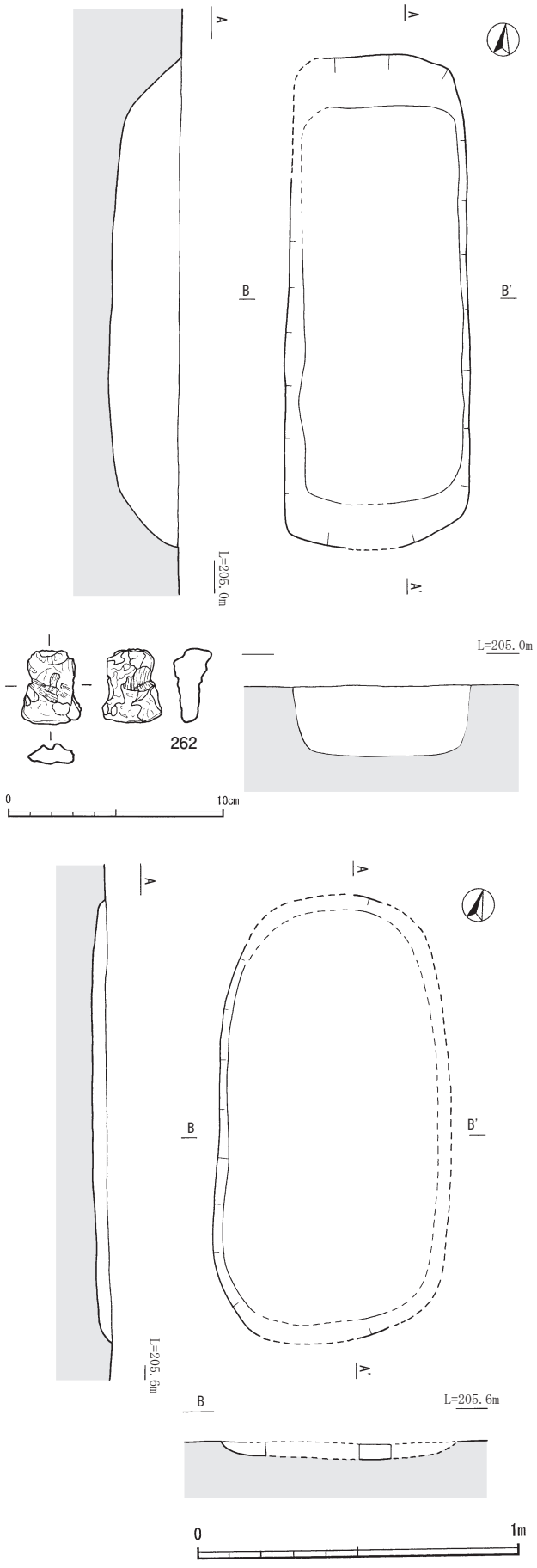
土坑墓５号の遺物は，青磁碗２点，土師器片である。

263，264は，並んで出土した青磁碗である。どちらも胴部下位に強い張りをもち，直線的に直口するもので口縁端部は丸く仕上げている。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２a類に比定される。底面は肉厚な作りであり，高台内面のみ露胎でほぼ全面施釉を施す。263は，外面にヘラ調整痕が稜となって残り，施釉全体に貫入が見られる。外面は無文，内面に浅めの片彫りで草花文を施す。264は，ヘラ調整後丁寧なナデ調整を施す。高台は丸みを帯び，外面は無文で，内面全体に片彫蓮花文を施す。

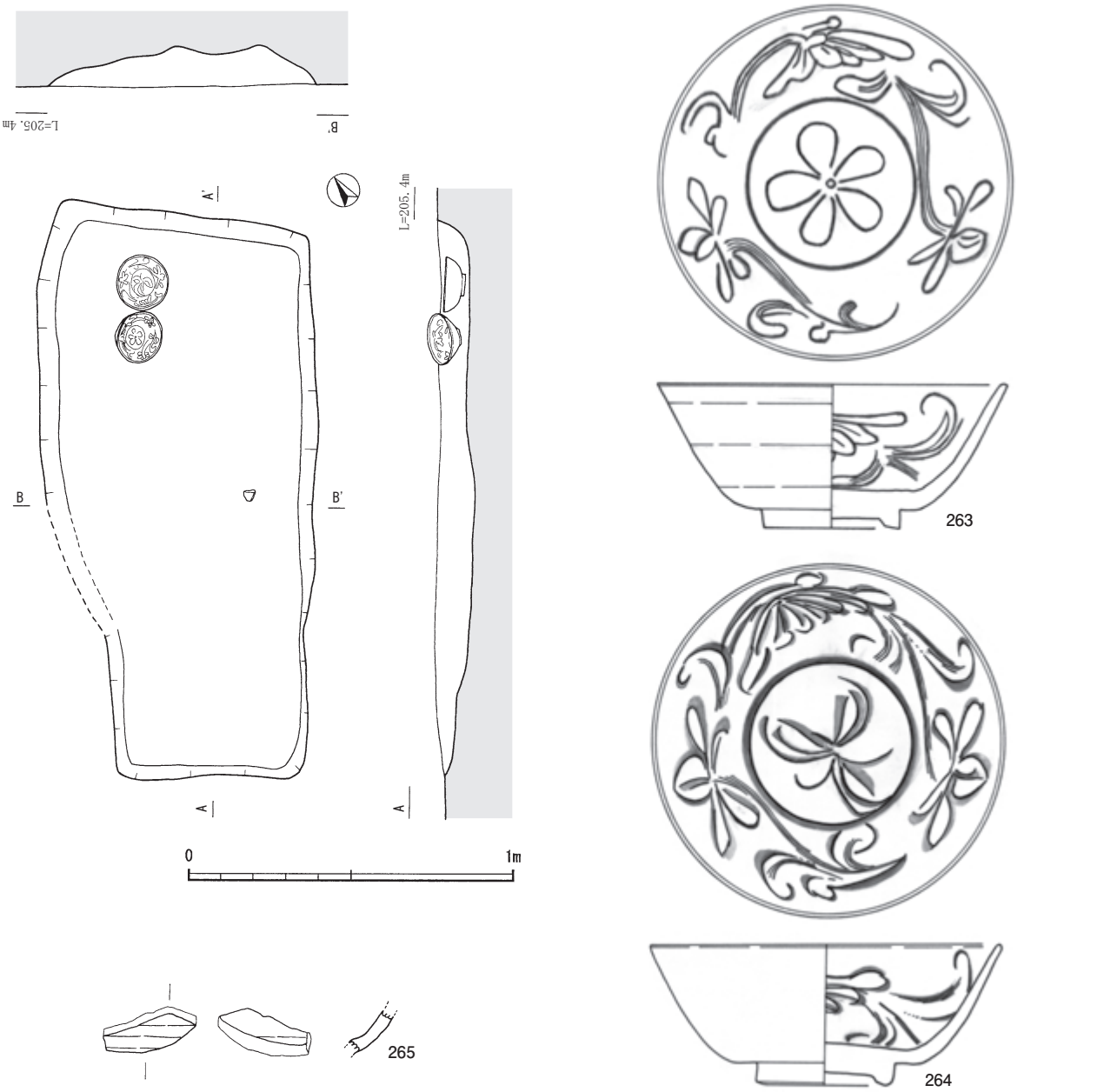
265は土師器の皿である。部分的な出土のため全体形は不明であるが，外面にナデ調整痕が明瞭に残る。

土坑墓６号（第121図）

Ｇ－16区，土坑墓１号から北へ約48m，土坑墓５号から北西へ約26m離れて検出された。規模は長辺1.4m，短辺0.7mの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは約10cmと非常に浅い。北へ行くほど削平が大きく，掘り込み面は上位と思われる。遺物の出土はないが，形状，埋土，方位など総合的に見て，土坑墓と判断した。



第121図　中世の土坑墓４号（出土遺物）・６号



第122図　中世の土坑墓５号（出土状況・出土遺物）　0　10cm

土坑墓７号（第123図）

Ｍ－14区，土坑墓３号から東方向へ約33.5m離れて検出された。規模は長辺2.3m，短辺1.3mの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは約25㎝である。鉄釘の出土や木棺の特徴もなく，床面に凹みが認められることから，土坑墓と思われる。

北側中央に土師器の鍋片，その東側には近接して湖州鏡が出土した。湖州鏡の下面には板状の木質があり，その裏に古銭が貼り付いてた。同じく鏡下からは，布状の繊維質が付着した鉄製の和鋏も出土している。これらの副葬品と共に土器片の下から頭骨の骨粉，和鋏の周辺からは，一列に並んだ下顎の大臼歯や犬歯，緑色に変色した上顎の歯が認められたことから，頭位は北側で東側を向いており，土器片は祭祀的な意味で置かれた可能性が高い。また，湖州鏡や和鋏など身近なものは，頭位近くに供えられたと思われる。臼歯の咬耗から壮年と推定されるが，性別は不明である。中央付近からは，白磁碗が１個置かれた状態で出土し，周りに３個の土師器皿が配置されていた。いずれも使用した形跡があまり見られず，埋葬のために準備されたものと思われる。

これらの副葬品は，床面から浮いておりやや中央へ向かって傾いた状態での出土のため，遺体の上に板状もので蓋がされ，その上に配置された後，埋葬されたと考えられる。



土坑墓５号内出土青磁碗

遺物（第124～126図）

土坑墓７号の遺物は，白磁，土師器，鉄製品，古銭，湖州鏡などである。副葬品と，埋土中より出土した遺物総数19点中13点について図化した。

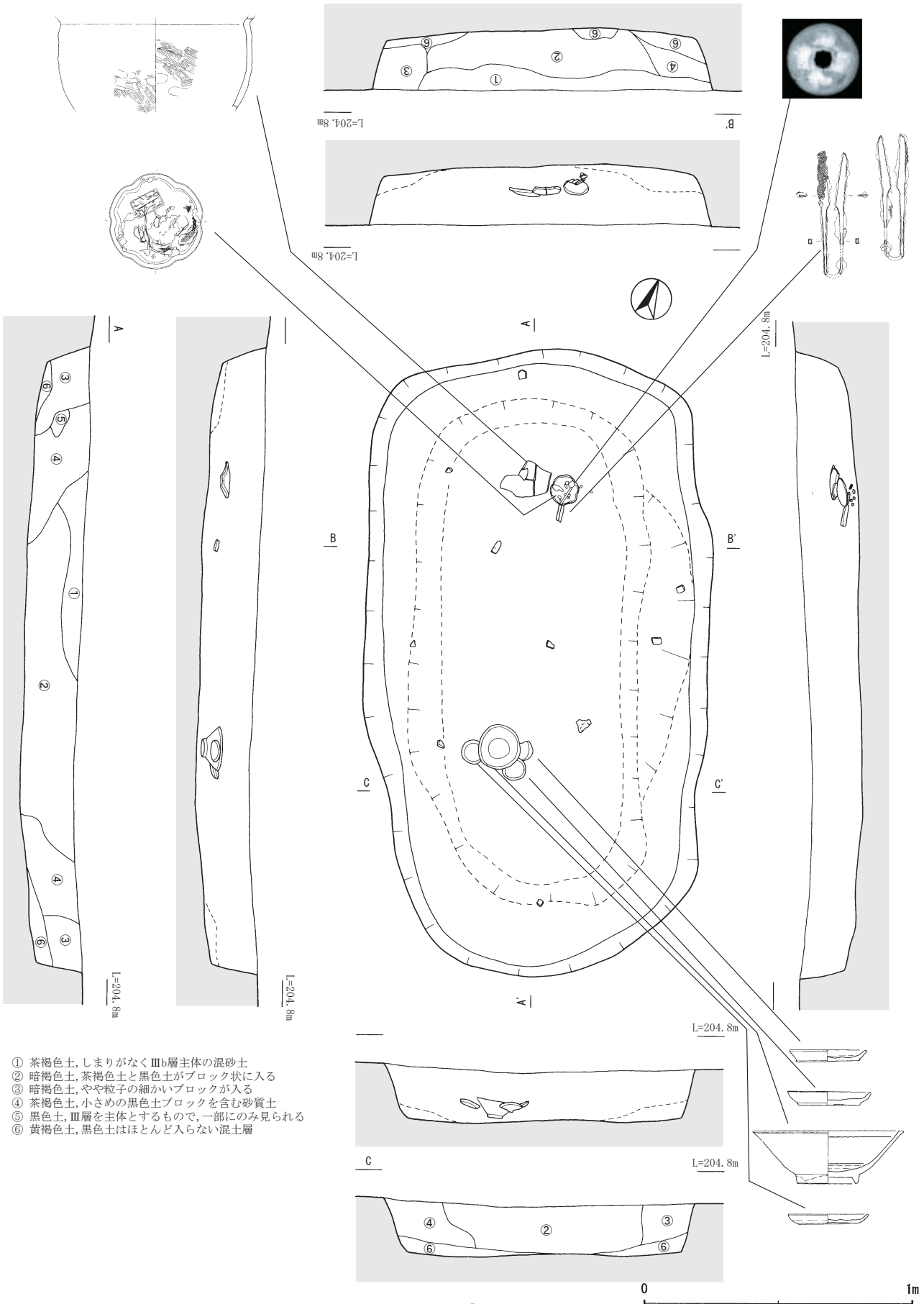
266は，直線的に立ち上がる体部が，口縁部で外反する白磁碗であり，大宰府分類のⅧ-3類に比定される。外反する口縁部は上面に平坦面をもち，嘴状に尖る。内外面施釉で，高台付近のみ無釉である。焼成が弱く全体に細かい気泡が見られる。見込み付近に沈線状の段を有する。

267 ～ 275は，土師器である。267 ～ 269は，土師器の皿である。３点ともほぼ完形で，口径が９㎝前後，器高が１～ 1.5㎝とほぼ同じであり，土坑墓中央付近に並べるように置かれていた。直上に土師器碗が位置することから，副葬品の一部と推定される。内外面ともナデ調整が施され，丸みをもって短く立ち上がる。底面の切り離しはヘラ切りで，切り離し痕が残る。270 ～ 272は坏の口縁部であり，いずれも内外面ともナデ調整で仕上げている。270は直口，271，272はわずかに外反している。271，272については，断面形状や焼成が似ていることから同一個体の可能性がある。273, 274は, 坏の底部である。273は工具ナデ調整が施され，ヘラ切りの底面に段をもつ。底面の中央は凹んでいるため器壁が薄く，腰は肉厚である。274は底面に切り離し痕が粗く残る。275は甕である。全体の四分の一程度の出土であり，口縁部，底部の形状は欠損のため不明である。内外面ともヘラ状工具によるナデ調整が施され，ハケ目が残る。その後，粗いナデ調整が施され, 指ナデ痕や指頭圧痕が多数見られる。全体的に凸凹しており，胎土には小石や砂粒が多数含まれ空洞も認められる。外面は, 火熱により黒ずんでいる。

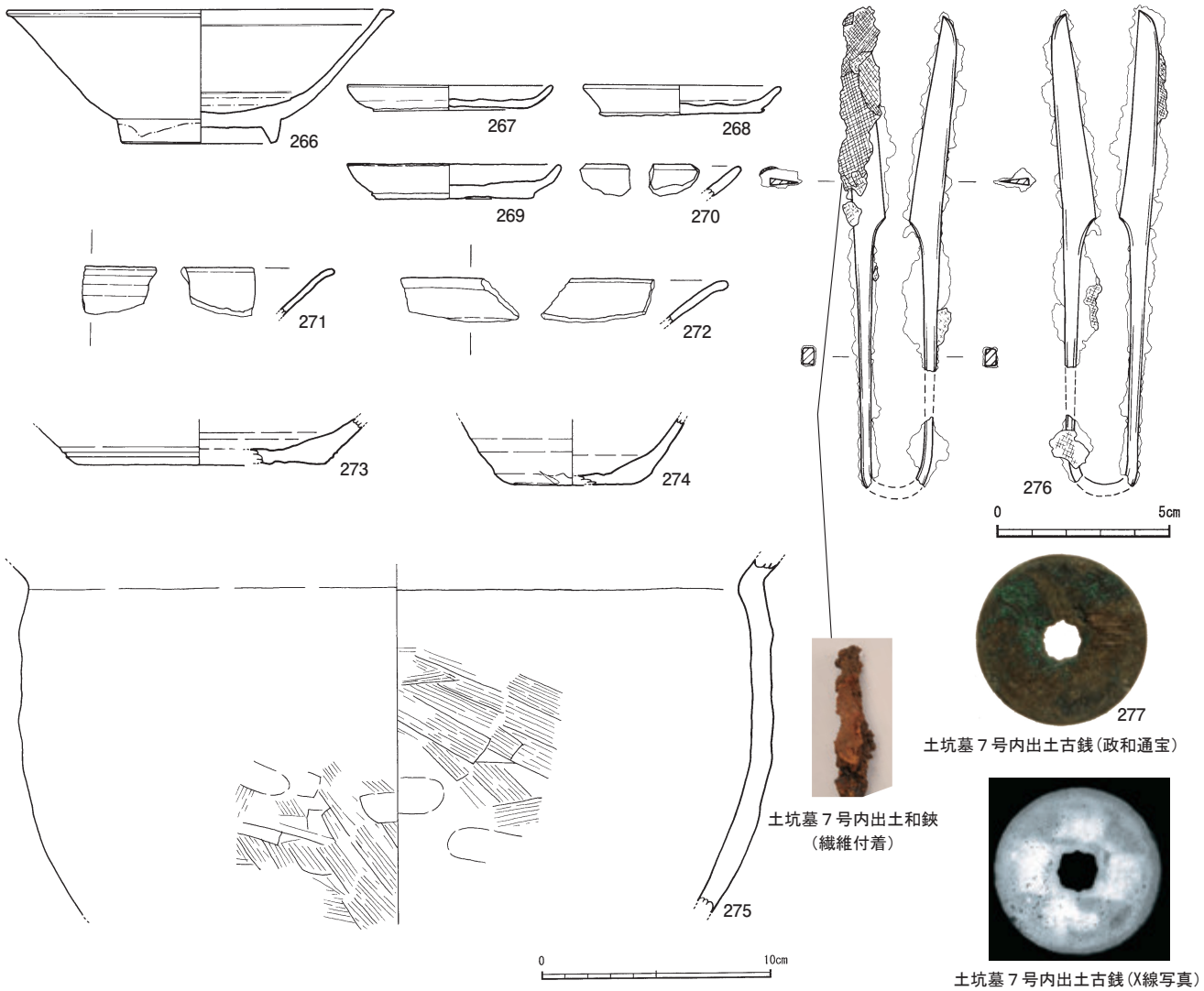
276は，鉄製の和鋏である。握り部から刃部先端へ向かって直線的に延び，刃部との境目に僅かな反りが認められる。長さ6.0㎝の刃部は，内側に刃をもつ片刃で，峰部に平坦面を有している。直線的な握り部は，折り返しが欠損しているが約7.8㎝と推定され，断面は四角形である。厚く覆われた錆と共に，布目痕が表裏とも多く付着しており, 布状のものに包まれていたと推測される。

277は古銭である。湖州鏡下面に木質が付着しており，木質の裏に貼り付くように出土した。表面を厚く錆が覆っているが，政和通寶（初鋳1111年）と判断した。

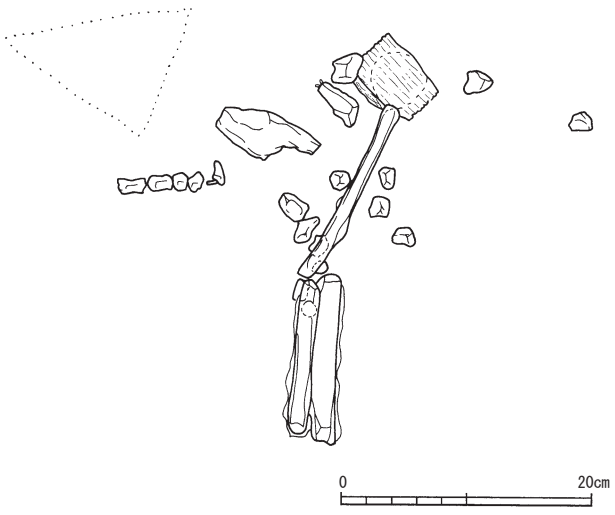
278は，湖州鏡である。木質が付着していたことから，木箱に納められていたと推察される。九州地方で一般的な六花鏡で，蒲鉾型の縁を呈する。鏡面はほぼ平坦で，縁周辺はやや反っている。紐帯が縁よりわずかに高く，鏡背は無文で, 太めの界圏が巡る。銘帯は縦に二分され，「州」の字は判読できるが，摩滅が激しく判断できない。



第123図　中世の土坑墓７号①(出土状況・断面図)



第124図　中世の土坑墓７号内出土遺物①（磁器・土器・鉄器・古銭）



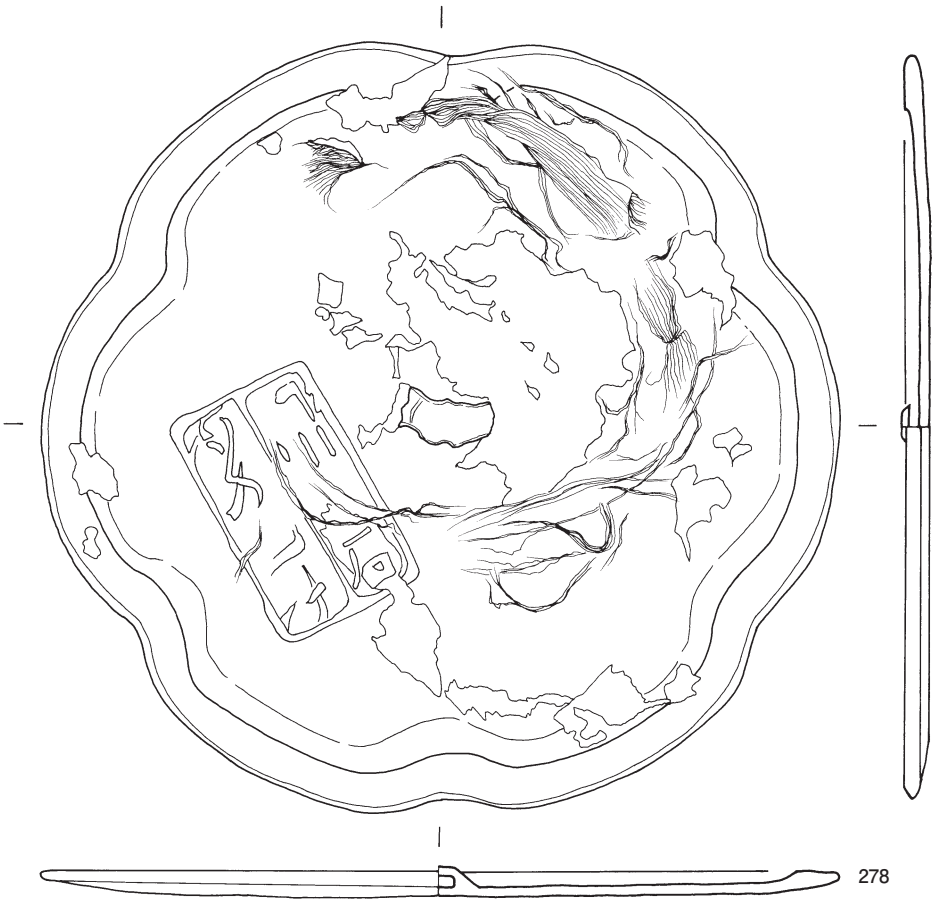
第125図　中世の土坑墓７号内出土遺物②（歯出土状況）

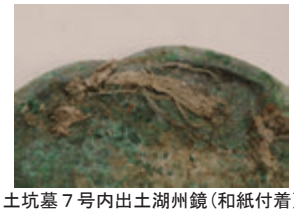
土坑墓８号（第127図）

Ｎ－13区，土坑墓７号から南方向へ約14m離れて検出された。規模は長辺1.6m，短辺1.1ｍの楕円形を呈し，検出面からの深さは約18㎝である。南西部分の多くは，現代の耕作による撹乱を受け，上位が消失している。検出面からの深さは浅いが，包含層と埋土が同色のため検出が難しく，掘り込み面はこれよりもまだ上位である。床面中央に凹みが認められ，鉄釘の出土や木棺の特徴もないことから，土坑墓と思われる。

北西側から土師器の皿が４枚重なるようにして出土した。土師器は，全体的に中央へ向かって傾斜しており，床面の直上からやや上位にあるため，故人を埋葬後，頭に当たる部分の傍らに板状のものを被せ，その上に供えられたものではないかと推察される。その後，中央部にできた空洞が埋まる過程で傾いたと思われる。

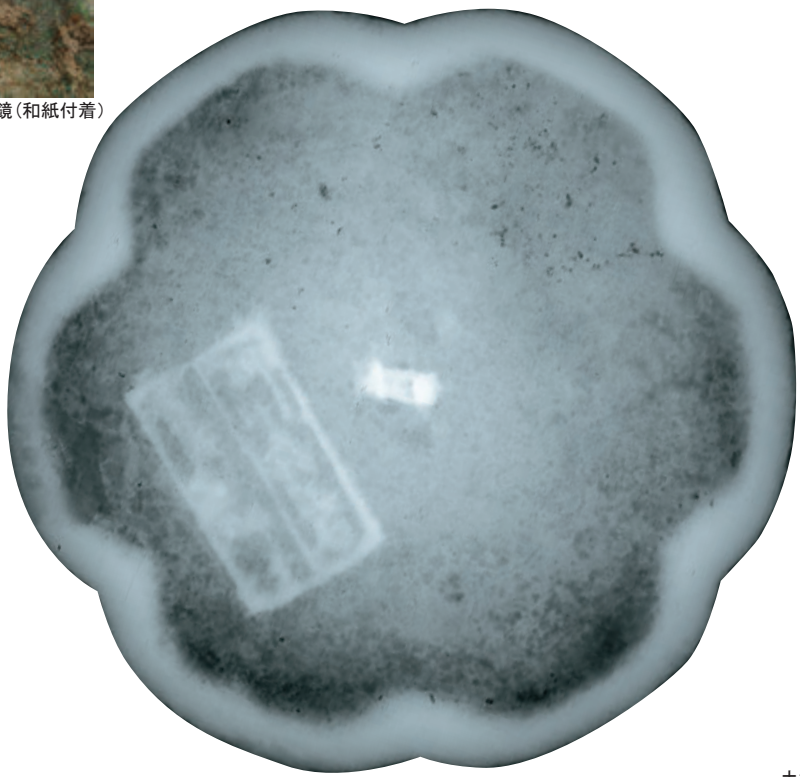
土坑墓７号に近い位置であるが，副葬品の様相からやや時間差があると思われ，７号墓よりも新しいと思われる。





土坑墓７号内出土湖州鏡(和紙付着)

0　5cm



土坑墓７号内出土湖州鏡(Ｘ線写真)



土坑墓７号内出土湖州鏡(紐状繊維付着)

第126図　中世の土坑墓７号内出土遺物③(湖州鏡)

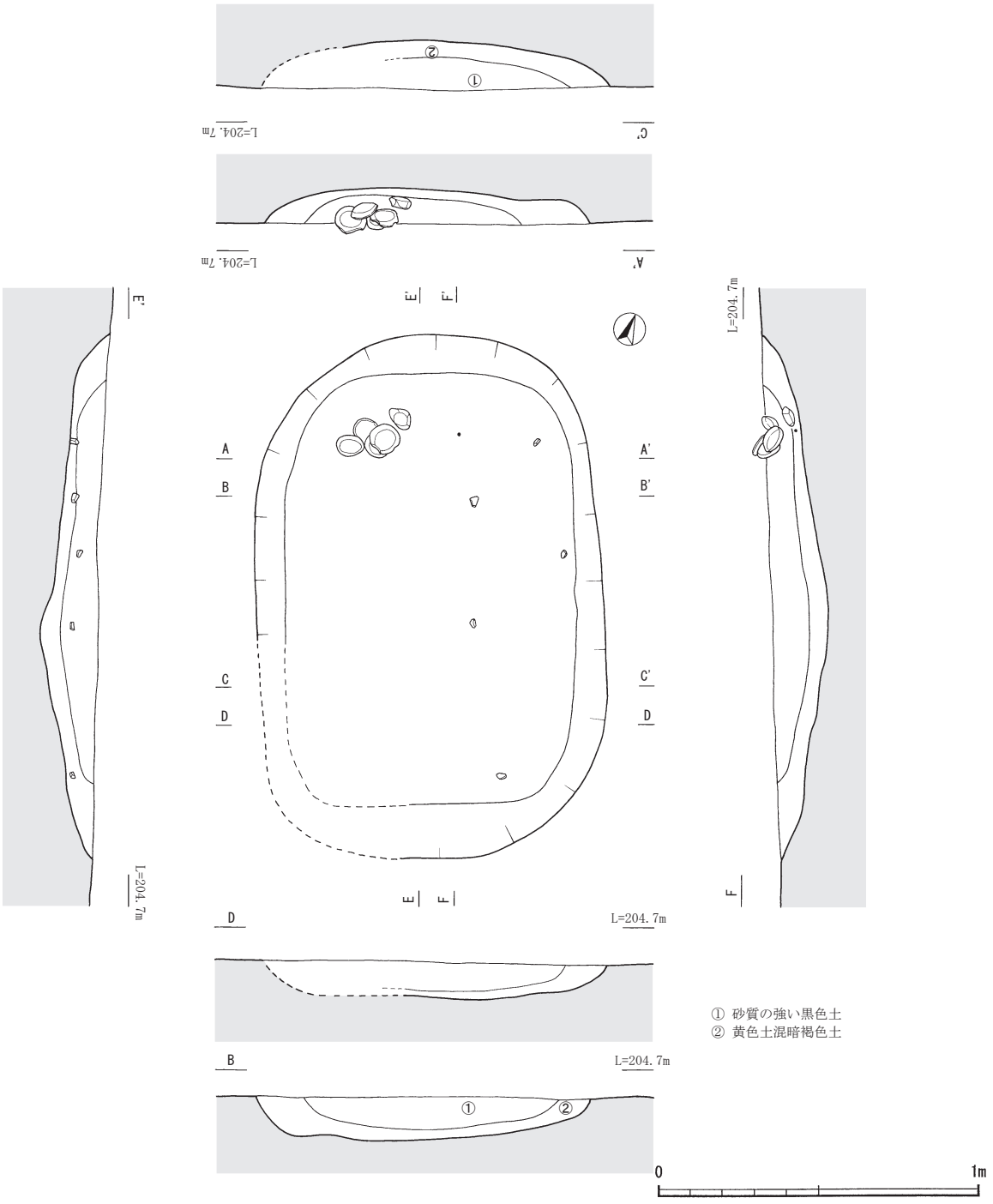
埋土中から採取した炭化物のＣ14年代測定の結果は，1250±30yrBPである。

遺物（第128図）

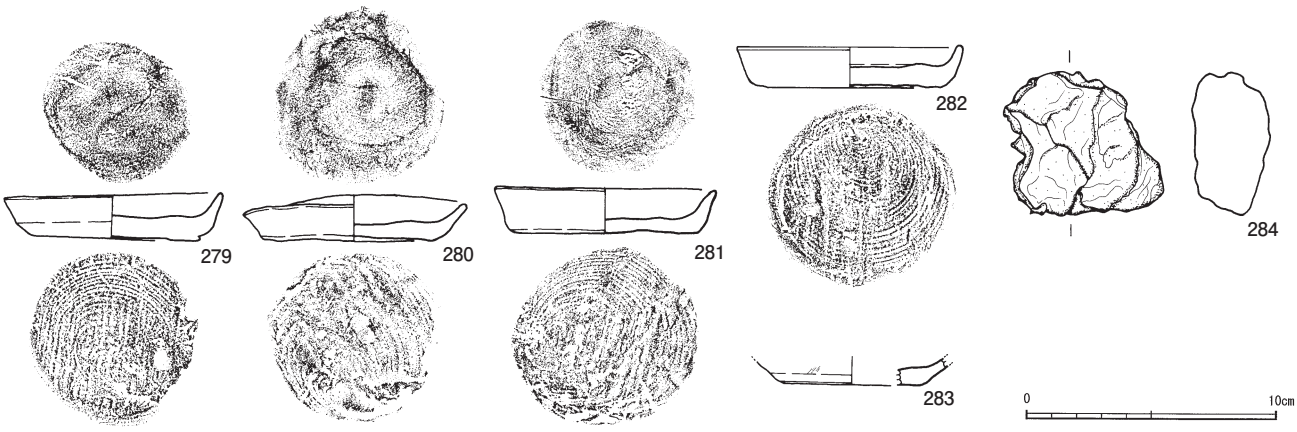
土坑墓８号の遺物は，土師器，粘土塊などである。流れ込みと思われるものも多く，埋土中より出土した遺物総数29点中６点について図化した。

279 ～ 282は，土師器の皿である。いずれも精製した胎土で底面は糸切り離しで，底面から短く直線的に立ち上がるものである。279は，胴部が張り稜をもつ。内面にナデ調整による凹みが巡る。280は，糸切り離し痕が粗く残り，小石の跡と思われる空洞が見られる。全体に歪んでおり，器高が一定でない。281は口縁部がわずかに反り気味で，先端を丸く仕上げている。282は，切り離し痕を丁寧なナデ調整で仕上げ，内面に調整による凹みが段となって巡る。283は土師器の坏であるが，部分的な出土のため，全体形は不明である。

284は，土師器の皿の下，床面近くから出土した粘土塊である。砂や小石などが胎土中に多く含まれ，表面が，焼成により赤化している。



第127図　中世の土坑墓８号①



第128図　中世の土坑墓８号②（出土遺物）

第37表　土坑墓内出土遺物観察表１（磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	種類	器種	部位	残存率	分類	胎土	釉（薬）	露胎	焼成	貫入	発色	法量（cm）			備考	取上番号
														口径	底径	器高		
115	212	土坑墓１号	青磁	碗	口～底	完形	Ⅰ-1b	灰白（細粒砂混）	浅緑	胴部下位以下	やや良	無	弱	16.7	5.0	7.8	同安窯系 外：櫛目文 内：点描文	１号2
	213		青磁	碗	口～底	完形	Ⅰ-1a	灰白（細粒混）	浅緑	胴部下位以下	良	無	有	15.9	4.2	6.7	同安窯系 内：点描文 見込み砂粒熔質	１号1
	214		青磁	碗	胴部	1/10	－	灰白	浅緑	－	良	無	有	－	－	－	櫛状文	13
	215		白磁	碗	口～胴	1/6	Ⅴ	浅灰白	透明	－	良	有	有	－	－	－		3
	216		白磁	Ⅲ	口～底	完形	Ⅵ-1a	灰	緑黄	胴部下位	やや良	一部有	有	10.4	3.2	2.9	一部釉剥離	１号6
	217		白磁	Ⅲ	口～底	完形	Ⅵ-1a	明灰黄	浅黄	胴部下位	良	無	有	10.1	2.8	2.7		１号7
	218		白磁	Ⅲ	口～底	完形	Ⅵ-1a	灰白	緑黄	胴部下位	良	無	弱	9.7	2.8	3.0	口禿げ 釉剥離痕	１号8
	219		白磁	Ⅲ	口～底	完形	Ⅵ-1b	浅灰白	浅黄	胴部下位	良	無	弱	10.2	2.8	2.6	口禿げ	１号9
	220		白磁	Ⅲ	口～底	完形	Ⅷ-1b	灰白（黒砂粒混）	灰白	底面	良	有	有	10.2	3.9	2.6	見込み草花文 釉垂れ痕	１号5
	221		青白磁	小壺	蓋	完形	－	白	明青灰	裏面	良	無	有	－	－	0.8	削出花文	１号3
	222		青白磁	小壺	口～底	完形	－	白	明青灰	外面高台部	良	無	有	4.7	3.9	4.3	鎬連弁文	
118	238	土坑墓２号	白磁	碗	口～底	1/2	Ⅳ-1a	白	浅灰白	胴部下位	良	無	有	－	－	－	玉縁口縁	２号10
	239		白磁	碗	口～底	1/2	Ⅴ-4a	灰白	浅灰白	胴部下位	良	無	有	17.0	6.4	6.1	端反口縁	２号9
119	245	土坑墓３号	白磁	碗	口～胴	1/3	Ⅴ-1	白	灰白	残存部内面全施釉	良	無	有	16.6	－	－	端反口縁	３号11
122	263	土坑墓５号	青磁	碗	口～底	完形	Ⅰ-2a	灰黄	浅黄緑	高台内	良	有	有	16.1	6.2	6.6	龍泉窯系 内：草花文	５号2
	264		青磁	碗	口～底	完形	Ⅰ-2a	灰白	明緑灰	高台内	良	無	有	16.0	6.2	6.5	龍泉窯系 内：蓮花文	５号1
124	266	土坑墓７号	白磁	碗	口～底	完形	Ⅷ-3	灰黄	浅緑白	高台内	良	有	有	16.8	6.8	5.9	端反口縁 蛇の目釉剥ぎ	土坑748-17

第 38 表　土坑墓内出土遺物観察表２（石器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	石材	残存率	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考	取上番号
116	229	土坑墓１号	鍋	滑石	完形	（口径）17.4	（底径）12.6	（器高）7.9	1628.5	鍔付き スス付着	１号-10
	230		鍋	滑石	完形	（口径）8.1	（底径）7.2	（器高）4.4	290.0	鍔付き 黒斑有り	１号-11
	231		磨石	安山岩	完形	4.0	3.7	2.5	57.4		3
118	242	土坑墓２号	台石	凝灰岩	小破片	6.6	5.5	4.2	150.0	赤化有り	２号-5
	243		台石	軽石	破片	4.6	2.9	1.9	6.0	赤化有り	２号-6
	244		台石	軽石	破片	10.1	10.9	6.2	181.0	赤化有り，スス付着	２号-8
119	248	土坑墓３号	砥石	粘板岩	一部欠損	10.4	4.2	0.9	51.9	穿孔有り	－

第39表　土坑墓内出土遺物観察表３　（土器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	種　類	器　種	部　位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備　考	取上番号
115	223	土坑墓１号	土師器	坏	口～底	1/8	15.6	11.8	2.8	工具ナデ	工具ナデ		１号-18
	224		土師器	坏	口～胴	1/4	16.0	－	－	工具ナデ	ナデ		１号-土3
	225		土師器	坏	底部	1/3	－	9.8	－	ナデ	ナデ	底面ヘラ切り	１号-20
	226		土師器	皿	口～胴	1/3	8.8	7.9	1.5	ナデ	ナデ	底面ヘラ切り	１号-22
	227		土師器	皿	口～胴	1/3	7.4	5.8	1.0	摩耗	ナデ	底面ヘラ切り	１号－１
	228		土師器	鍋	口～胴	1/3	32.4	－	14.5	ハケ目後ナデ　スス付着	ハケ目後ナデ	指頭圧痕	1号-土1，2，土4～6
118	240	土坑墓２号	土師器	皿	口～底	1/3	10.0	7.8	1.9	ナデ	ナデ	底面ヘラ切り	２号－１，４
	241		須恵器	鉢	口縁部	1/8	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	東播系	２号埋土一括
119	246	土坑墓３号	土師器	小皿	口～底	1/3	8.0	6.0	1.5	工具ナデ	工具ナデ→ナデ	底面糸切り	３号-13
	247		土師器	小皿	胴～底	1/4	－	8.2	－	ナデ	ナデ	底面糸切り	３号-12
122	265	土坑墓５号	土師器	皿	胴部	1/8	－	－	－	ナデ	ナデ		５号埋土一括
124	267	土坑墓７号	土師器	皿	口～底	ほぼ完形	8.9	6.7	1.1	ナデ	ナデ	底面ヘラ切り	土坑748-14
	268		土師器	皿	口～底	ほぼ完形	8.6	7.1	1.3	ナデ	ナデ	底面ヘラ切り	土坑748-16
	269		土師器	皿	口～底	ほぼ完形	9.3	7.0	1.5	ナデ	ナデ	底面ヘラ切り	土坑748-15
	270		土師器	坏	口縁部	1/8	－	－	－	摩耗	ナデ		土坑748-6
	271		土師器	坏	口～胴	1/6	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ		土坑748-3
	272		土師器	坏	口～胴	1/6	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ		土坑748-2
	273		土師器	坏	胴～底	1/4	－	10.8	－	工具ナデ	ナデ	回転ヘラ切り	土坑748-4
	274		土師器	坏	胴～底	1/3	－	5.0	－	工具ナデ	ナデ	回転ヘラ切り	土坑748-1
	275		土師器	甕	胴部	1/6	－	－	－	工具ナデ　ナデ	ハケ目　ナデ	指頭圧痕	土坑748-17
128	279	土坑墓８号	土師器	皿	口～底	ほぼ完形	8.8	6.7	2.0	ナデ	ナデ	底面糸切り	７号-11
	280		土師器	皿	口～底	完形	8.8	6.8	1.9	ナデ	ナデ	底面糸切り	７号-12
	281		土師器	皿	口～底	完形	9.0	7.4	1.6	ナデ	ナデ	底面糸切り	７号-13
	282		土師器	皿	口～底	完形	8.8	7.2	1.8	ナデ	ナデ	底面糸切り	７号-14
	283		土師器	坏	底部	1/8	－	6.0	0.8	ナデ	ナデ		７号埋土一括
	284		粘土塊	カマド？	－	－	5.7	6.2	3.1	－	－	赤化有り，植物圧痕	７号－１５

第40表　土坑墓内出土遺物観察表４（金属器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	器　種	部　位	全　長(cm)	刃部長(cm)	茎　長(cm)	幅(cm)	厚　さ(cm)	重　量(g)	備考	取上番号
116	232	土坑墓１号	和　鋏	完形	14.8	6.6	(持ち手) 8.2	(刃部) 1.0 (持手) 0.3	(刃部) 0.2 (持手) 0.3	23.8		１号－13
	233		和　鋏	持手屈曲部	3.0	－	－	0.3	0.6	3.3	刃部欠損	１号－20－2
	234		紡錘車	ほぼ完形	18.5	－	－	(紡輪径) 4.7	(紡輪) 0.7 (紡茎) 0.6	31.1	紡茎下部欠損	１号－14
	235		毛抜き	片方のみ	6.6	－	－	0.5	0.3	3.7	先端有り	１号埋土中
	236		古　銭	完形	(直径) 2.5	－	－	－	－	2.0	開元通寶　繊維類付着	１号－4
117	237		鏡	完形	10.8	(紐帯径) 0.3	(紐帯厚) 0.4	(縁高) 0.8	0.2	99.0	松喰鶴鏡 木質付着	
120	249	土坑墓３号	鉄　鏃	ほぼ完形	20.6	10.4	10.2	2.8	0.5	54.6	圭頭鏃　木質付着	３号－23
	250		鉄　鏃	ほぼ完形	17.4	9.5	7.9	3.3	0.6	36.2	圭頭鏃	３号－26
	251		鉄　鏃	ほぼ完形	19.9	－	－	5.6	0.4	48.5	雁又鏃	３号－25
	252		鉄　鏃	矢柄	8.6	－	－	0.6	0.5	7.1		３号－36－1
	253		鉄　鏃	矢柄	4.3	－	－	0.5	0.4	3.3		３号－36－3
	254		鉄　鏃	矢柄	12.9	－	－	0.7	0.3	9.5	木質付着	３号－34
	255		刀　子		－	－	－	－	－	22.3	木質付着	３号－32，35
	256		和　鋏	刃部 持手一部	－	7.1	(持ち手) 6.3	(刃部) 1.1 (持手) 0.2	(刃部) 0.2 (持手) 0.4	10.9		３号－31
	257		和　鋏	持手屈曲部	3.0	－	－	0.3	0.5	4.9	刃部欠損	３号－36
	258		腰　刀	一部欠損	－	－	－	－	－	－	木質付着	3号－24，28，31，33，35
	259		鉄製品	部分	8.2	－	－	0.8	0.6	10.3	棒状鉄製品の一部	３号－36－2
	260		鉄製品	部分	4.5	－	－	0.9	0.3	4.8	薄板状鉄製品の一部	３号－43－ア
	261		鉄製品	部分	1.4	－	－	1.7	1.1	5.6	鉄塊	３号－43－イ
121	262	土坑墓４号	鉄　滓	完形	－	－	－	－	－	－	小礫砂多く含む	４号－1
124	276	土坑墓７号	和　鋏	ほぼ完形	13.8	6.0	(持ち手) 7.8	(刃部) 0.9 (持手) 0.3	(刃部) 0.2 (持手) 0.5	22.5	一部欠損 繊維質付着	－
	277		古　銭	完形	2.4	－	－	－	－	3.5	政和通寶　木質付着	－
126	278		鏡	完形	10.6	(紐帯径) 0.4	(紐帯厚) 0.4	(縁高) 0.3	0.1	87.0	湖州鏡 紐状繊維質付着　和紙付着	－

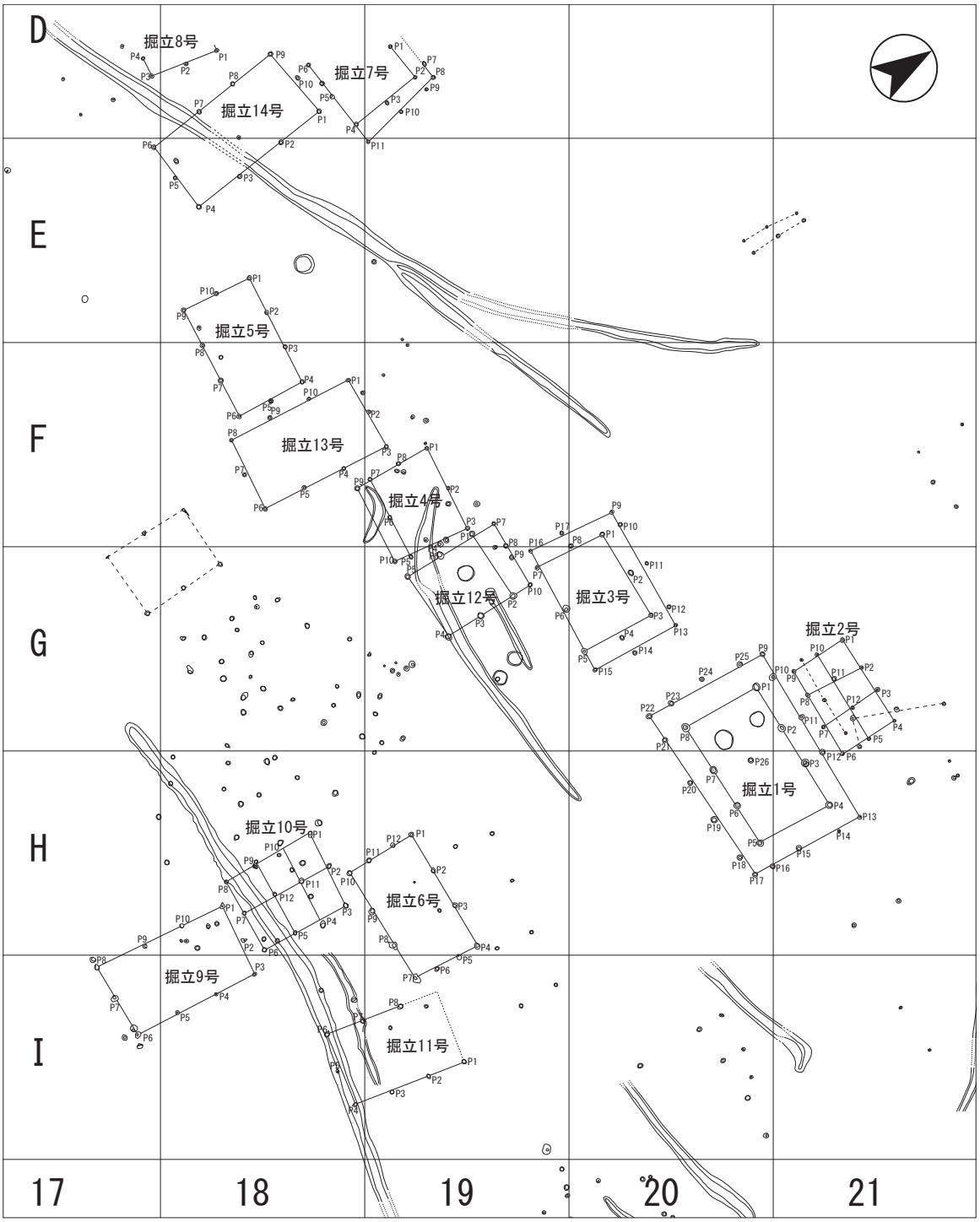
(2) 掘立柱建物跡

中世の掘立柱建物跡は49棟検出された。この49棟を主軸方位や建物跡のまとまりなどからＡ～Ｅの５郡に分けた。また，どの郡にも属さない掘立建物群を「その他」として報告する

柱穴の埋土は，すべて黒色土系の土が堆積していた。

Ａ群

Ｄ～Ｉ－17～21区で検出され，長軸が東西あるいは南北に沿う建物跡群である。さらに，長軸が東西に沿う建物跡群（Ａ－１群）と南北に沿う建物跡群（Ａ－２群）に分けた。柱穴の埋土状況等から時期差はほとんどない



第129図　中世の掘立柱建物跡配置図１（Ａ群）

と考える。

Ａ－１群（１～８号）

掘立柱建物跡１号（第130図）

Ｇ・Ｈ－20・21区で検出された桁行３間，梁行２間の四面庇建物跡である。母屋の梁行２間の間の柱穴は検出されていない。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が678cm×397cmで，庇を含めると931cm×631cmである。柱穴の深さは10 ～ 68cmである。

掘立柱建物跡２号（第131図）

Ｇ・Ｈ－21区で検出された桁行３間，梁行２間の総柱の掘立柱建物跡である。１号掘立柱建物跡に付属する厨や倉庫などの役割が想定される。検出面はⅣa層である。平面の規模は471cm×300cmで，柱穴の深さは５～ 23cmである。

掘立柱建物跡３号（第132図）

Ｆ・Ｇ－19・20区で検出された桁行２間，梁行２間の三面庇建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が470cm×372cmで，庇を含めると660cm×451cmである。柱穴の深さは７～ 39cmである。

掘立柱建物跡４号（第133図）

Ｆ・Ｇ－18・19区で検出された桁行２間，梁行２間の母屋に庇が１面付く掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が440cm×318cmで，庇を含めると440cm×317cmである。柱穴の深さは10 ～ 58cmである。

掘立柱建物跡５号（第133図）

Ｅ・Ｆ－18区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は588cm×359cmで，柱穴の深さは18 ～ 58cmである。

掘立柱建物跡６号（第134図）

Ｈ・Ｉ－18・19区で検出された桁行３間，梁行３間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は639cm×358cmで，柱穴の深さは７～ 52cmである。

掘立柱建物跡７号（第134図）

Ｄ・Ｅ－18・19区で検出された桁行２間，梁行２間の母屋の２面に庇がつく掘立柱建物跡である。調査区境に位置しており，本来の間数や庇の数は多い可能性が考えられる。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が374cm×370cmで，庇を含めると476cm×449cmである。柱穴の深さは10 ～ 46cmである。

掘立柱建物跡８号（第135図）

Ｄ－17・18区で検出された。桁行は２間あり，梁間の間隔が狭いことから庇部分と考えられる。調査区境に位置しており，本来は調査区外に延びている部分の間数は多い可能性がある。検出面はⅣa層である。平面の規模は340cm×98cmで，柱穴の深さは11 ～ 20cmである。

Ａ－２群（９～14号）

掘立柱建物跡9号（第135図）

Ｈ・Ｉ－17・18区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は680cm×370cmで，柱穴の深さは７～ 93cmである。

掘立柱建物跡10号（第136図）

Ｈ－18区で検出された桁行３間，梁行２間の総柱の掘立柱建物跡である。ただし，桁行よりも梁行の方が柱穴間距離が長く，２棟の掘立柱建物跡が重なっている可能性も考えられる。検出面はⅣa層である。平面の規模は390cm×473cmで，柱穴の深さは９～ 41cmである。

掘立柱建物跡11号（第136図）

Ｉ－18・19区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は574cm×372cmで，柱穴の深さは11 ～ 47cmである。

掘立柱建物跡12号（第137図）

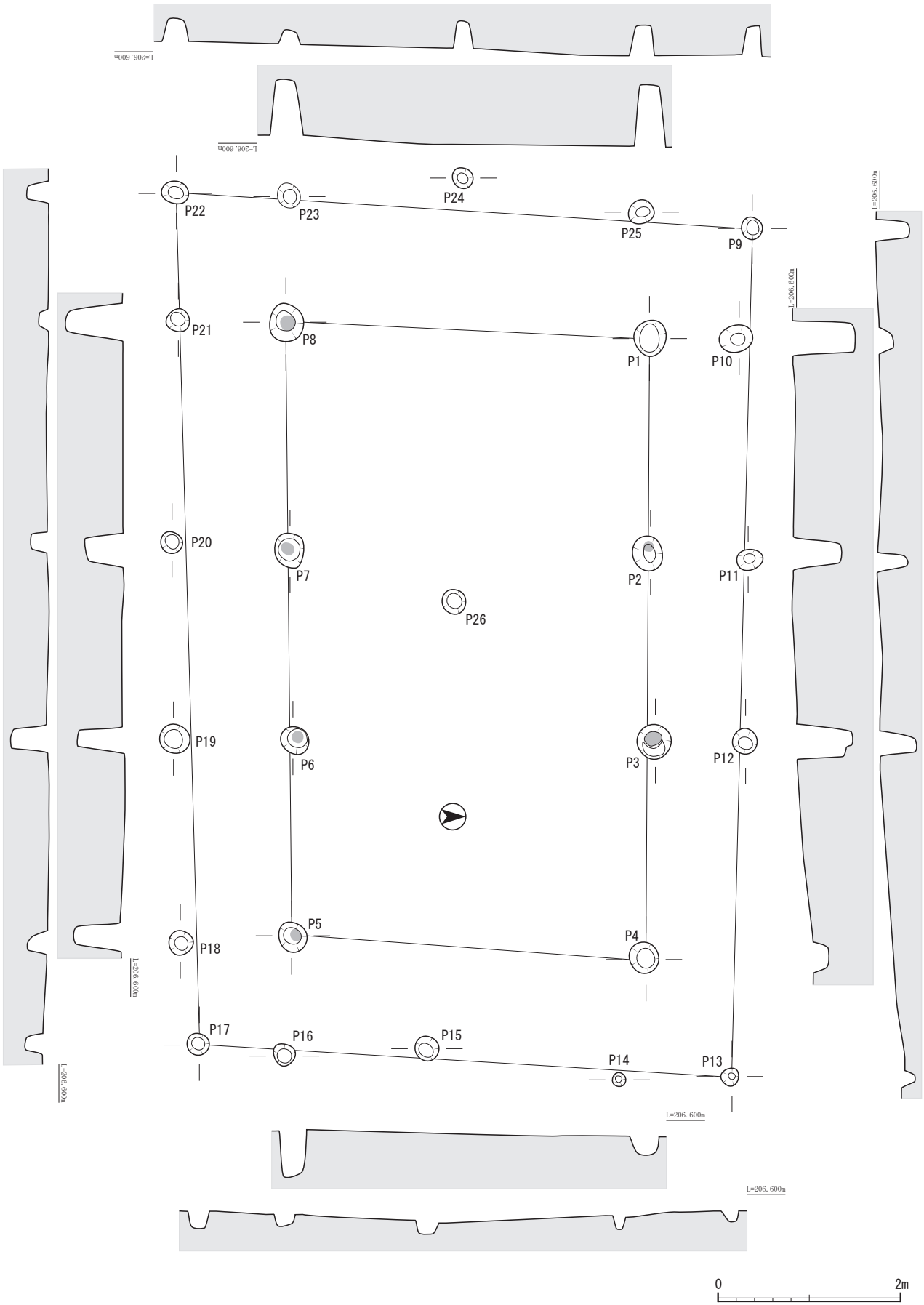
Ｆ・Ｇ－19区で検出された桁行２間，梁行１間の母屋の一面に庇が付く掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が378cm×367cmで，庇を含めると494cm×367cmである。柱穴の深さは８～ 42cmである。

掘立柱建物跡13号（第137図）

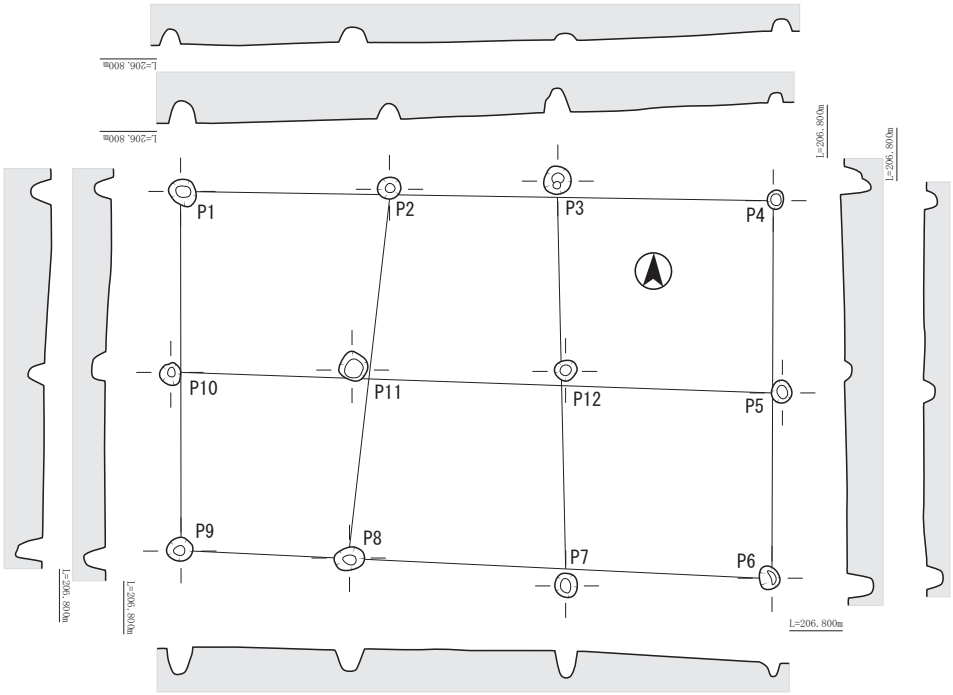
Ｆ－18・19区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は667cm×376cmで，柱穴の深さは21 ～ 43cmである。

掘立柱建物跡14号（第138図）

Ｄ・Ｅ－17・18区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は748cm×368cmで，柱穴の深さは９～ 48cmである。



第130図　中世の掘立柱建物跡１号



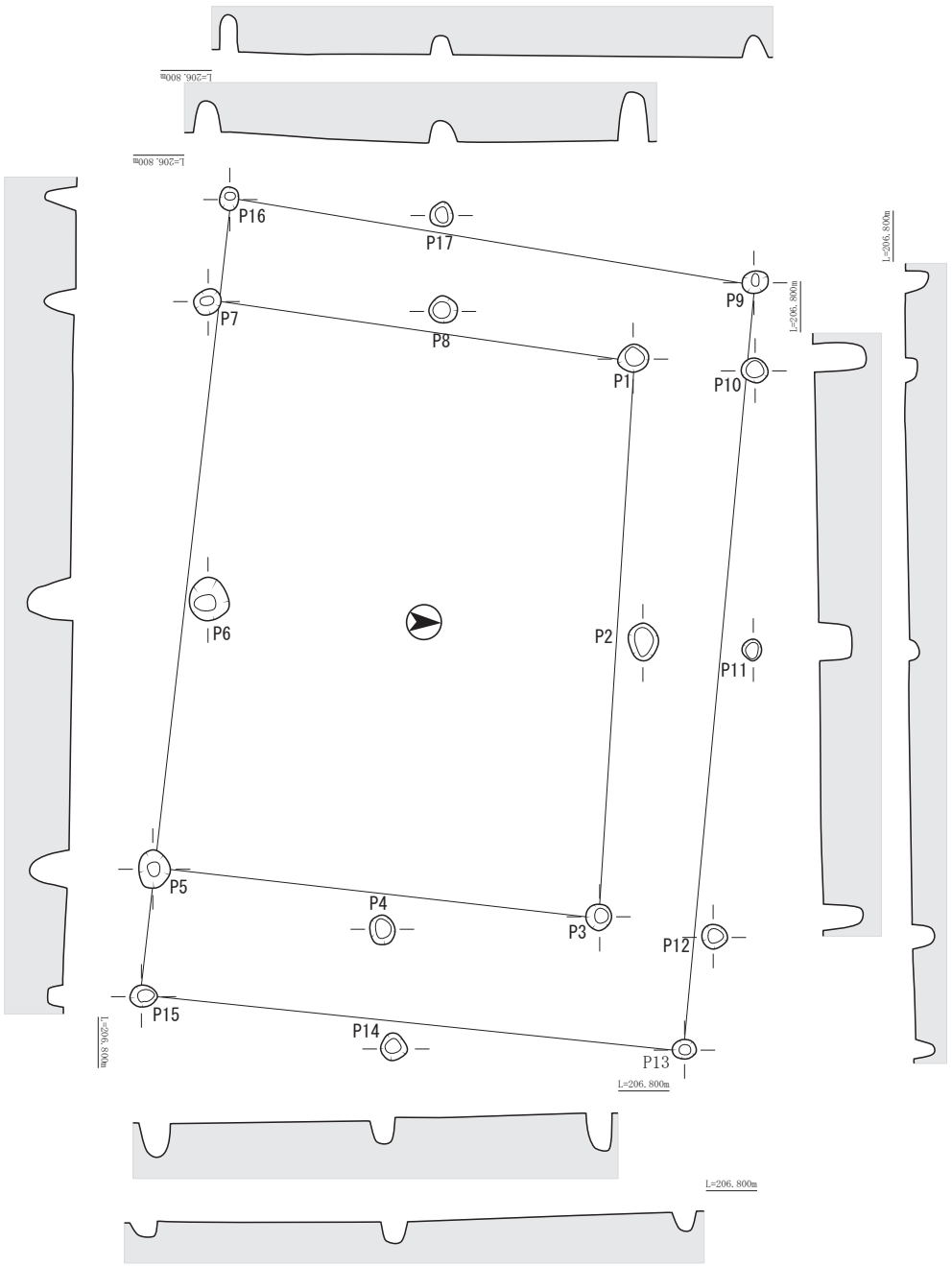
第131図　中世の掘立柱建物跡２号

第41表　掘立柱建物跡１号計測表

柱穴（cm）				主軸		N88° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	40	35	68	桁行（cm）	P1 ～ P4	678
P2	38	34	54		P1 ～ P2	238
P3	40	37	60		P2 ～ P3	205
P4	37	31	19		P3 ～ P4	237
P5	33	31	51		P8 ～ P5	673
P6	32	29	50		P8 ～ P7	251
P7	39	30	42		P7 ～ P6	207
P8	40	40	63		P6 ～ P5	215
P9	27	23	37		P9 ～ P13	927
P10	37	30	17		P9 ～ P10	122
P11	28	22	34		P10 ～ P11	243
P12	28	26	43		P11 ～ P12	198
P13	21	18	13		P12 ～ P13	366
P14	15	15	15		P22 ～ P17	931
P15	27	27	15		P22 ～ P21	139
P16	26	24	13		P21 ～ P20	243
P17	24	24	20		P20 ～ P19	216
P18	29	25	22		P19 ～ P18	224
P19	34	32	40		P18 ～ P17	112
P20	25	22	17	梁行（cm）	P1 ～ P8	397
P21	24	24	10		P4 ～ P5	385
P22	28	25	24		P9 ～ P22	631
P23	26	26	14		P9 ～ P25	124
P24	25	22	29		P25 ～ P24	199
P25	30	27	38		P24 ～ P23	190
P26	27	26	21		P23 ～ P22	123
					P13 ～ P17	584
					P13 ～ P14	121
					P14 ～ P15	213
					P15 ～ P16	156
					P16 ～ P17	97

第42表　掘立柱建物跡２号計測表

柱穴（cm）				主軸		N89° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	40	35	68	桁行（cm）	P1 ～ P4	471
P2	38	34	54		P1 ～ P2	163
P3	40	37	60		P2 ～ P3	135
P4	37	31	19		P3 ～ P4	174
P5	33	31	51		P10 ～ P5	488
P6	32	29	50		P10 ～ P11	146
P7	39	30	42		P11 ～ P12	170
P8	40	40	63		P12 ～ P5	174
P9	27	23	37		P9 ～ P6	469
P10	37	30	17		P9 ～ P8	135
P11	28	22	34		P8 ～ P7	174
P12	28	26	43		P7 ～ P6	161
				梁行（cm）	P1 ～ P9	283
					P1 ～ P10	144
					P10 ～ P9	139
					P2 ～ P8	296
					P2 ～ P11	145
					P11 ～ P8	152
					P3 ～ P7	322
					P3 ～ P12	152
					P12 ～ P7	171
					P4 ～ P6	300
					P4 ～ P5	152
					P5 ～ P6	148

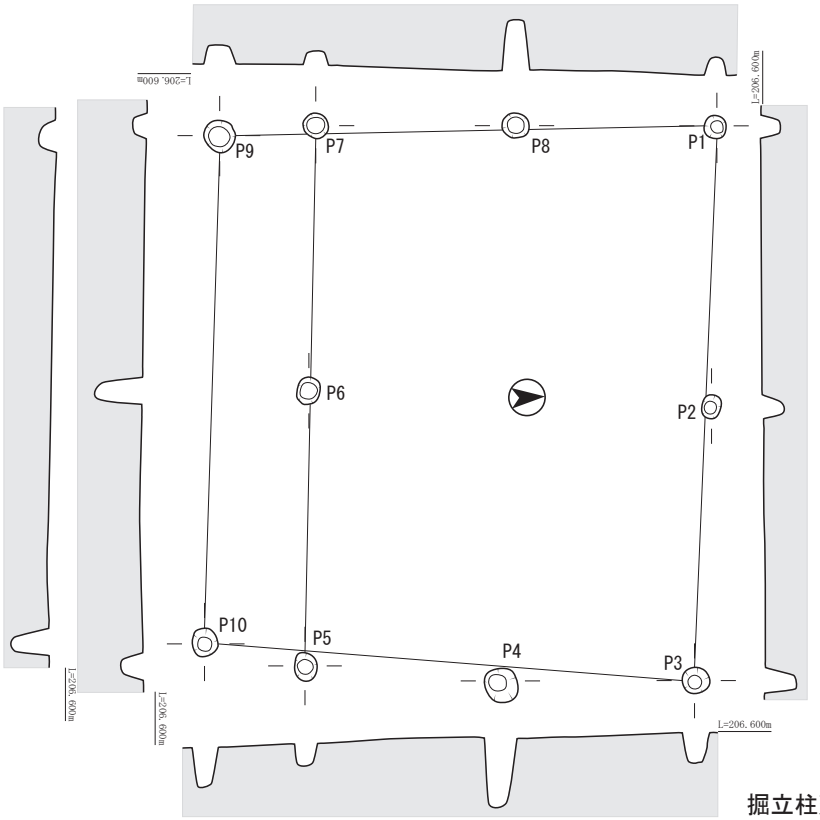


第43表　掘立柱建物跡３号計測表

柱穴（cm）				主　　軸						N87° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離		方向	柱穴間距離		
P1	26	24	39		P1 ～ P2	234		P1 ～ P7	356	
P2	31	25	28		P1 ～ P2	234		P1 ～ P8	163	
P3	23	21	31		P2 ～ P3	230		P8 ～ P7	195	
P4	25	21	19		P7 ～ P5	470		P3 ～ P5	372	
P5	31	26	29		P7 ～ P6	245		P3 ～ P4	181	
P6	36	32	33		P6 ～ P5	227	梁行	P4 ～ P5	195	
P7	24	21	25	桁行	P16 ～ P15	660	（cm）	P9 ～ P16	442	
P8	24	23	15	（cm）	P16 ～ P7	86		P9 ～ P17	266	
P9	22	19	18		P5 ～ P15	105		P17 ～ P16	127	
P10	22	21	10		P9 ～ P13	635		P13 ～ P15	451	
P11	18	18	7		P9 ～ P10	73		P13 ～ P14	241	
P12	22	20	16		P10 ～ P11	231		P14 ～ P15	212	
P13	20	16	16		P11 ～ P12	238				
P14	23	23	15		P12 ～ P13	97				
P15	23	18	13							
P16	20	16	27							
P17	20	19	15							



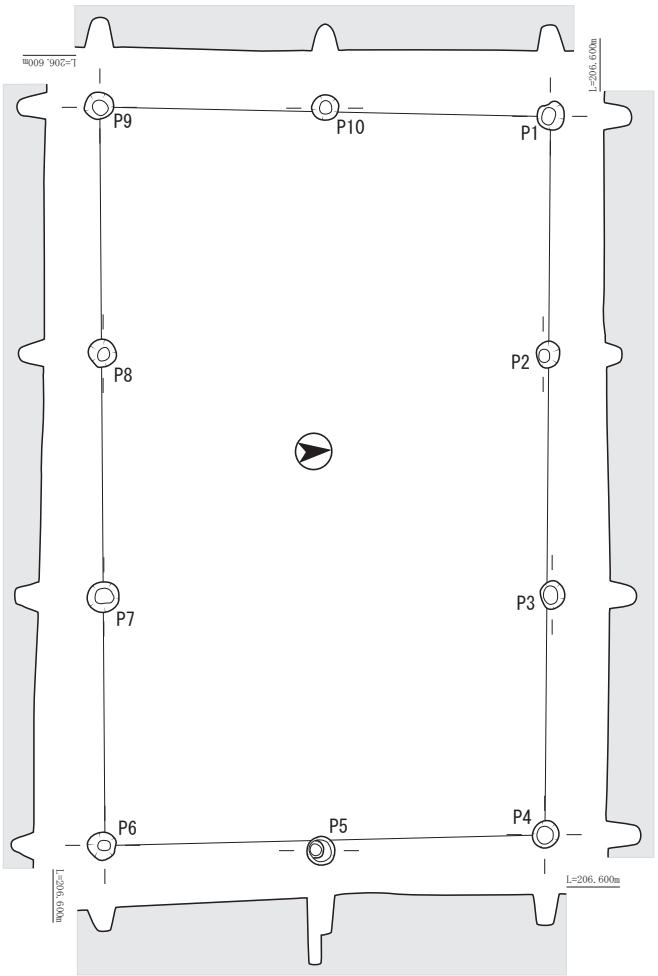
第132図　中世の掘立柱建物跡３号



掘立柱建物跡４号

第44表　掘立柱建物跡４号計測表

柱穴（cm）				主軸		N85° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	19	18	16	桁行（cm）	P1 ～ P3	440
P2	19	15	18		P1 ～ P2	222
P3	22	20	26		P2 ～ P3	217
P4	30	26	58		P7 ～ P5	430
P5	27	19	15		P7 ～ P6	211
P6	21	21	38		P6 ～ P5	219
P7	20	19	10		P9 ～ P10	404
P8	22	21	39	梁行（cm）	P1 ～ P7	317
P9	23	20	31		P1 ～ P8	159
P10	25	25	14		P8 ～ P7	158
					P1 ～ P9	392
					P3 ～ P5	311
					P3 ～ P4	155
					P4 ～ P5	157
					P3 ～ P10	391
					P7 ～ P9	80
					P5 ～ P10	81



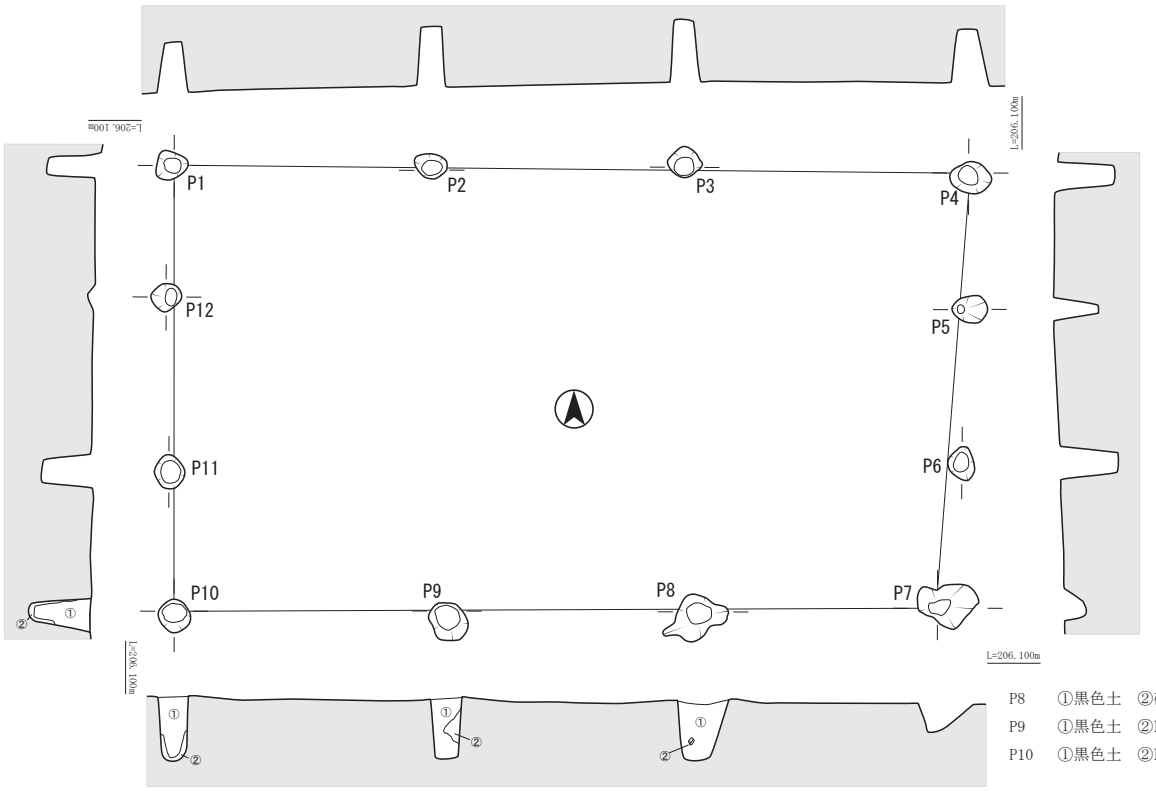
掘立柱建物跡５号

第45表　掘立柱建物跡５号計測表

柱穴（cm）				主軸		N86° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	23	22	21	桁行（cm）	P1 ～ P4	571
P2	21	19	19		P1 ～ P2	190
P3	23	20	23		P2 ～ P3	190
P4	23	21	27		P3 ～ P4	191
P5	23	23	58		P9 ～ P6	588
P6	23	22	19		P9 ～ P8	194
P7	25	25	18		P8 ～ P7	194
P8	23	23	21		P7 ～ P6	198
P9	24	21	23	梁行（cm）	P1 ～ P9	359
P10	21	20	25		P1 ～ P10	180
					P10 ～ P9	179
					P4 ～ P6	353
					P4 ～ P5	179
					P5 ～ P6	174

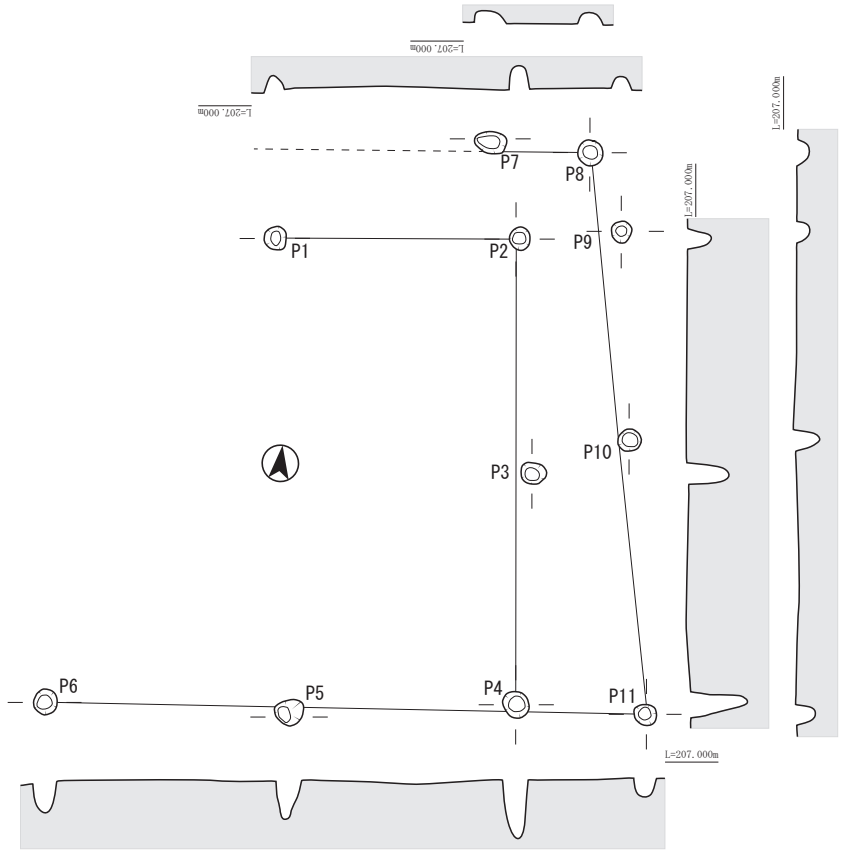


第133図　中世の掘立柱建物跡４・５号



P8　①黒色土　②砥石
P9　①黒色土　②Ⅳa 混ざり
P10　①黒色土　②Ⅳa とⅢ層の黒色

掘立柱建物跡６号



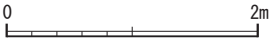
掘立柱建物跡７号

第46表　掘立柱建物跡６号計測表

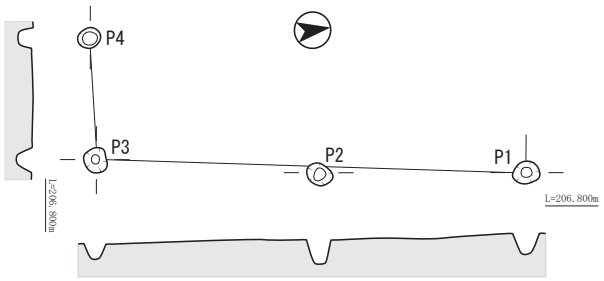
柱穴（cm）				主軸		N89° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	27	23	41	桁行（cm）	P1 ～ P4	639
P2	27	19	49		P1 ～ P2	209
P3	27	25	47		P2 ～ P3	202
P4	34	26	47		P3 ～ P4	228
P5	28	22	37		P10 ～ P7	619
P6	26	20	47		P10 ～ P9	220
P7	48	36	22		P9 ～ P8	199
P8	52	34	47		P8 ～ P7	200
P9	34	28	49	梁行（cm）	P1 ～ P10	358
P10	27	26	52		P1 ～ P12	104
P11	27	24	39		P12 ～ P11	140
P12	24	22	7		P11 ～ P10	114
					P4 ～ P7	338
					P4 ～ P5	105
					P5 ～ P6	122
					P6 ～ P7	111

第47表　掘立柱建物跡７号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	19	15	桁行（cm）	P1 ～ P2	193
P2	19	18	20		P6 ～ P4	374
P3	20	18	34		P6 ～ P5	194
P4	24	20	46		P5 ～ P4	181
P5	22	20	30		P6 ～ P11	476
P6	10	10	25		P4 ～ P11	101
P7	25	17	11		P7 ～ P8	79
P8	20	20	10	梁行（cm）	P2 ～ P4	370
P9	17	16	10		P2 ～ P3	176
P10	19	17	22		P3 ～ P4	184
P11	20	17	15		P8 ～ P11	449
					P8 ～ P9	68
					P9 ～ P10	165
					P10 ～ P11	219



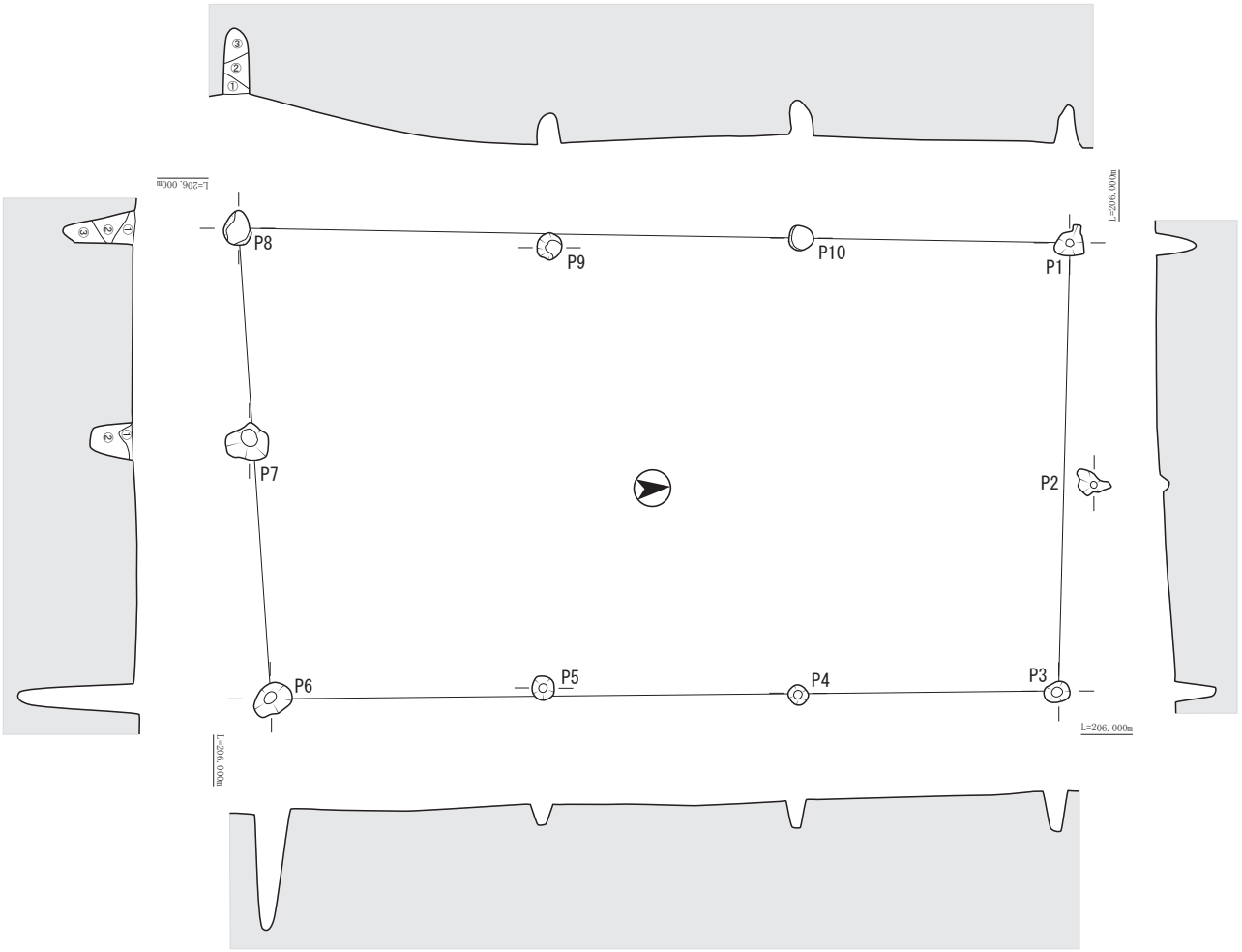
第134図　中世の掘立柱建物跡６・７号



第48表　掘立柱建物跡８号計測表

柱穴（cm）				主軸		N85° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	21	18	16	桁行（cm）	P1 ～ P3	340
P2	21	18	20		P1 ～ P2	163
P3	22	20	12		P2 ～ P3	177
P4	19	17	11	梁行（cm）	P3 ～ P4	98

掘立柱建物跡８号



第49表　掘立柱建物跡９号計測表

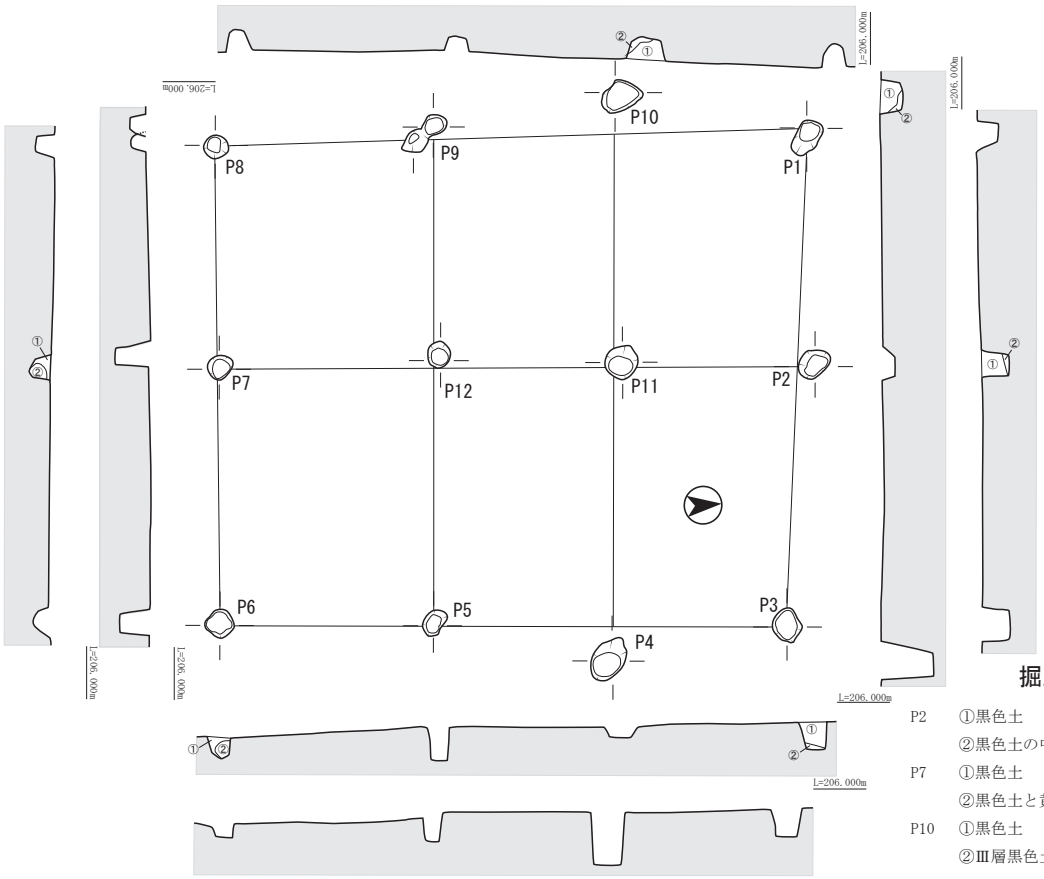
柱穴（cm）				主軸		N4° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	27	23	34	桁行（cm）	P1 ～ P8	680
P2	26	19	7		P1 ～ P10	220
P3	20	17	30		P10 ～ P9	207
P4	16	16	22		P9 ～ P8	256
P5	20	18	16		P3 ～ P6	650
P6	38	30	93		P3 ～ P4	212
P7	35	29	35		P4 ～ P5	209
P8	27	20	59		P5 ～ P6	228
P9	22	20	24	梁行（cm）	P1 ～ P3	370
P10	20	19	30		P1 ～ P2	195
					P2 ～ P3	175
					P8 ～ P6	369
					P8 ～ P7	176
					P7 ～ P6	192

掘立柱建物跡９号

P7　①黒色土　②暗茶褐色土
P8　①褐色　②うすい黒色
　　③褐色

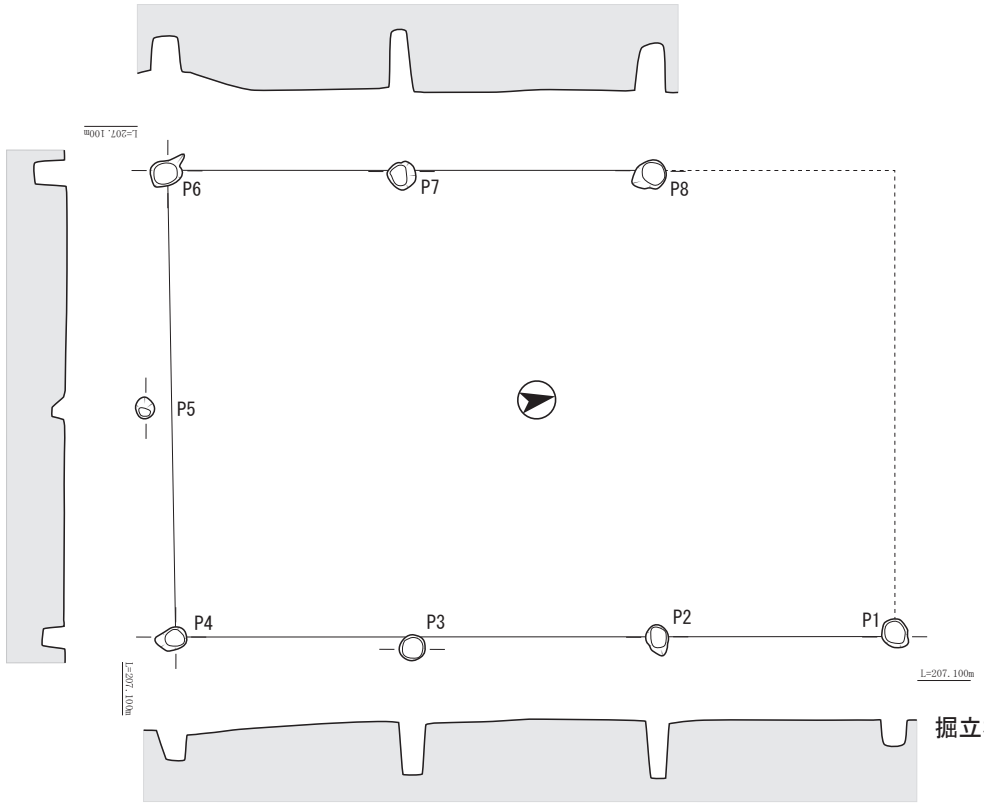
0　2m

第135図　中世の掘立柱建物跡８・９号



掘立柱建物跡10号

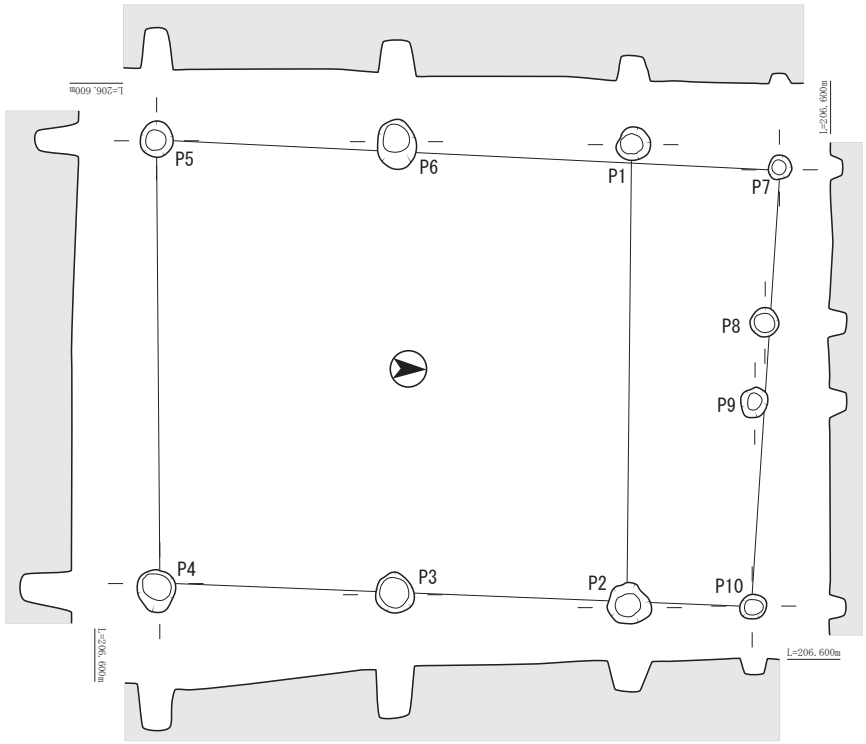
P2　①黒色土
　　②黒色土の中に若干Ⅳa 層のパミス混
P7　①黒色土
　　②黒色土と黄色パミス点在，少し黄色っぽい
P10　①黒色土
　　②Ⅲ層黒色土とⅣa 層の混じり



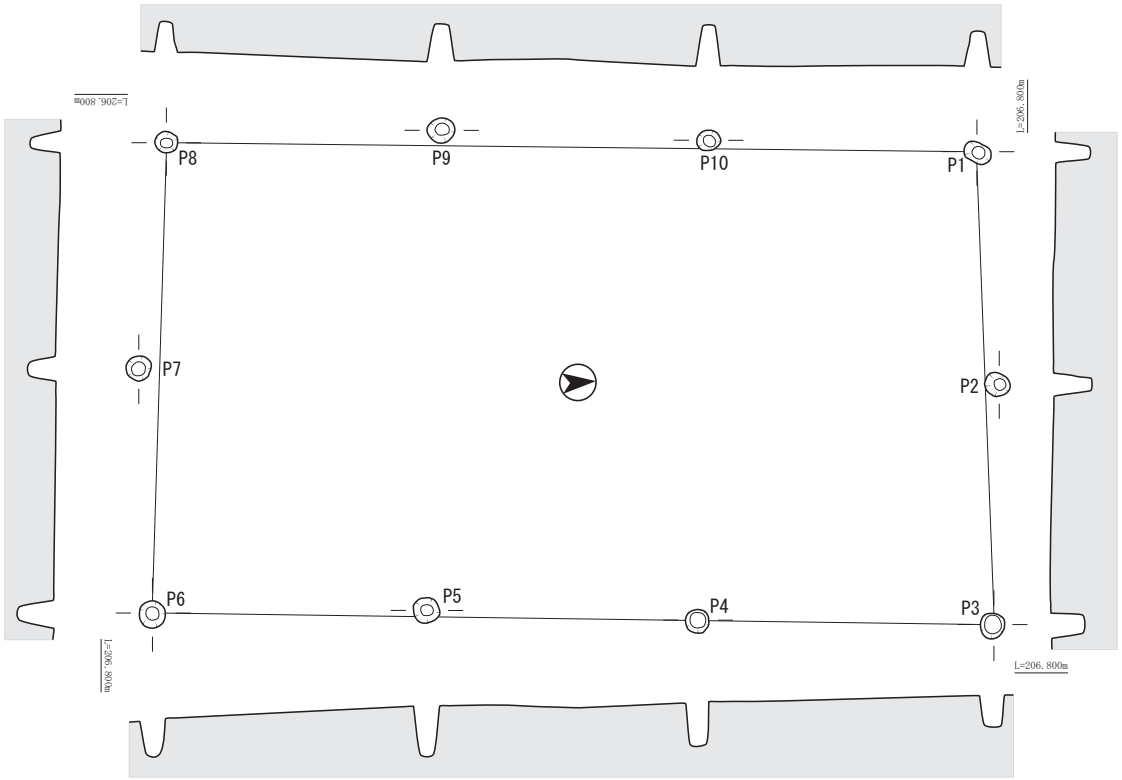
掘立柱建物跡11号

0　2m

第136図　中世の掘立柱建物跡10・11号



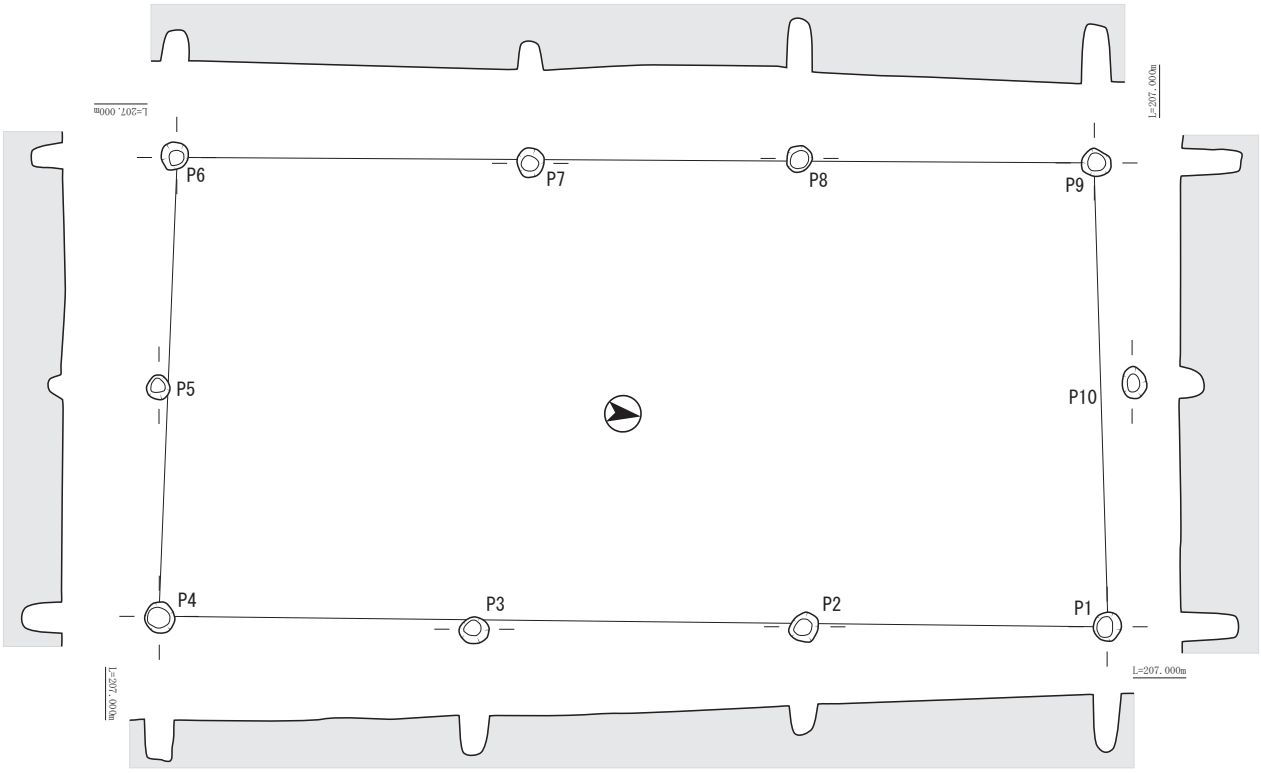
掘立柱建物跡12号



掘立柱建物跡13号

0 2m

第137図　中世の掘立柱建物跡12・13号



第138図　中世の掘立柱建物跡14号

第50表　掘立柱建物跡10号計測表

柱穴（cm）				主軸		N2° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	31	21	18	桁行（cm）	P1 ～ P8	473
P2	28	20	22		P1 ～ P10	153
P3	27	23	22		P10 ～ P9	169
P4	39	24	41		P9 ～ P8	159
P5	23	15	23		P2 ～ P7	478
P6	24	23	14		P2 ～ P11	155
P7	20	18	16		P11 ～ P12	148
P8	21	18	16		P12 ～ P7	175
P9	44	17	12		P3 ～ P6	454
P10	33	26	19		P3 ～ P4	146
P12	21	20	25	梁行（cm）	P4 ～ P5	142
P11	29	25	9		P5 ～ P6	172
					P1 ～ P3	390
					P1 ～ P2	181
					P2 ～ P3	210
					P10 ～ P4	452
					P10 ～ P11	214
					P11 ～ P4	238
					P9 ～ P5	387
					P9 ～ P12	173
					P12 ～ P5	214
					P8 ～ P6	381
					P8 ～ P7	176
					P7 ～ P6	205

第51表　掘立柱建物跡11号計測表

柱穴（cm）				主軸		N9° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	25	21	20	桁行（cm）	P1 ～ P4	574
P2	26	17	45		P1 ～ P2	188
P3	21	20	42		P2 ～ P3	195
P4	25	18	24		P3 ～ P4	190
P5	17	15	11		P8 ～ P6	380
P6	35	21	26		P8 ～ P7	197
P7	23	22	47		P7 ～ P6	184
P8	29	23	36	梁行（cm）	P6 ～ P4	372
					P6 ～ P5	189
					P5 ～ P4	185

第52表　掘立柱建物跡12号計測表

柱穴（cm）				主軸		N1° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	28	27	19	桁行（cm）	P1 ～ P5	378
P2	36	33	24		P1 ～ P6	188
P3	33	31	42		P6 ～ P5	190
P4	35	31	37		P7 ～ P5	494
P5	29	27	34		P7 ～ P1	118
P6	40	31	28		P2 ～ P4	374
P7	20	19	8		P2 ～ P3	186
P8	24	23	15		P3 ～ P4	188
P9	24	22	13		P10 ～ P4	473
P10	22	20	13		P10 ～ P2	99
				梁行（cm）	P1 ～ P2	367
					P5 ～ P4	358
					P7 ～ P10	350
					P7 ～ P8	125
					P8 ～ P9	62
					P9 ～ P10	162

第53表　掘立柱建物跡13号計測表

柱穴（cm）				主軸		N4° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	23	15	27	桁行（cm）	P1 ～ P8	646
P2	20	19	33		P1 ～ P10	214
P3	22	20	26		P10 ～ P9	213
P4	20	18	35		P9 ～ P8	219
P5	21	20	43		P3 ～ P6	667
P6	22	21	30		P3 ～ P4	233
P7	20	20	21		P4 ～ P5	216
P8	18	18	24		P5 ～ P6	218
P9	21	21	30	梁行（cm）	P1 ～ P3	376
P10	18	17	33		P1 ～ P2	184
					P2 ～ P3	192
					P8 ～ P6	375
					P8 ～ P7	182
					P7 ～ P6	195

第54表　掘立柱建物跡14号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	24	23	46	桁行（cm）	P1 ～ P4	751
P2	24	22	24		P1 ～ P2	240
P3	24	22	33		P2 ～ P3	262
P4	24	23	31		P3 ～ P4	250
P5	20	19	9		P9 ～ P6	732
P6	24	22	25		P9 ～ P8	236
P7	24	22	22		P8 ～ P7	213
P8	23	20	43		P7 ～ P6	283
P9	25	22	48	梁行（cm）	P1 ～ P9	368
P10	26	20	22		P1 ～ P10	195
					P10 ～ P9	177
					P4 ～ P6	366
					P4 ～ P5	183
					P5 ～ P6	184

Ｂ群（15～23号）

Ｍ・Ｎ－13 ～ 18区で検出された９棟の掘立柱建物跡群をＢ群とした。Ｍ・Ｎ－14区では土坑墓７号が検出されている。

掘立柱建物跡15号（第140図）

Ｍ－13区で検出された桁行２間，梁行２間の総柱の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は375cm×366cmで，柱穴の深さは10 ～ 31cmである。

掘立柱建物跡16号（第140図）

Ｍ－14・15区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は388cm×386cm，柱穴の深さは19 ～ 46cmである。

掘立柱建物跡17号（第141図）

Ｍ・Ｎ－14区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は392cm×390cm，柱穴の深さは４～ 56cmである。

掘立柱建物跡18号（第141図）

Ｍ・Ｎ－14区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は410cm×353cmで，柱穴の深さは31 ～ 74cmである。

掘立柱建物跡19号（第142図）

Ｍ・Ｎ－14・15区で検出された桁行２間，梁行２間の総柱の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は450cm×371cm，柱穴の深さは10 ～ 37cmである。

掘立柱建物跡20号（第142図）

Ｍ・Ｎ－17・18区で検出された桁行２間，梁行２間の母屋の１面に庇がつく掘立柱建物跡である。一部調査区外に伸びている。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が470cm×368cm，庇を含めると475cm×489cmである。柱穴の深さは４～ 50cmである。

掘立柱建物跡21号（第143図）

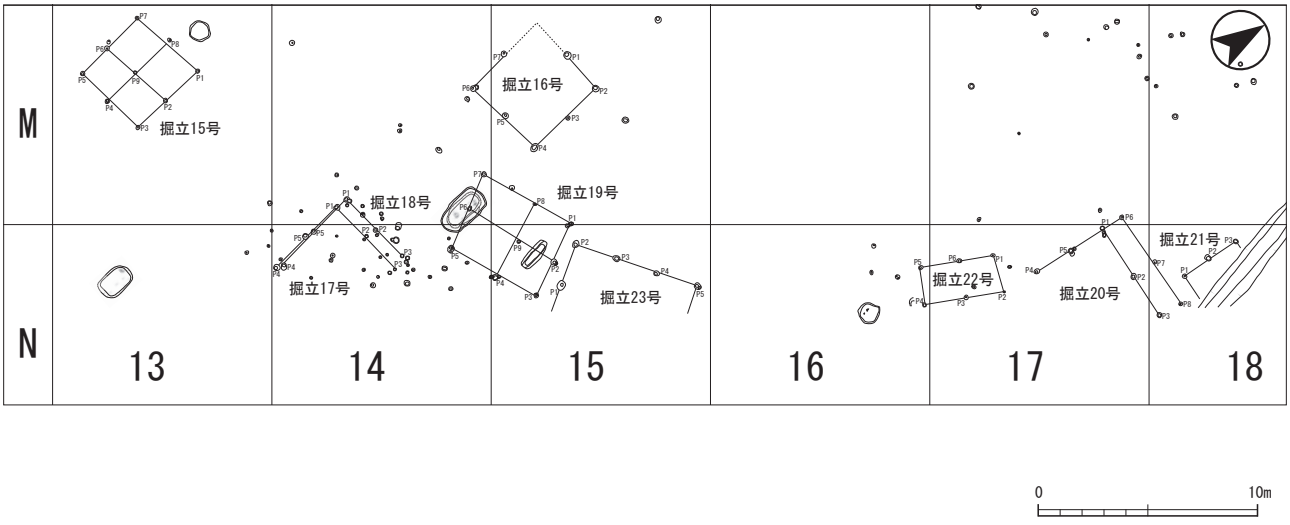
Ｎ－18区で検出された桁行２間，梁行は調査区外へ延びているため不明な掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。柱穴の深さは19 ～ 38cmである。

掘立柱建物跡22号（第143図）

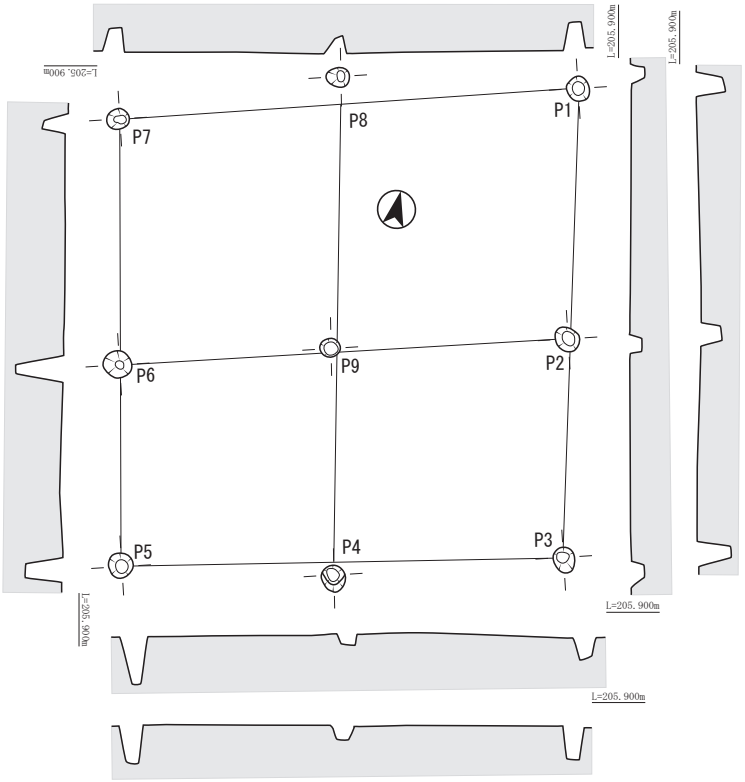
Ｎ－16・17区で検出された桁行２間，梁行１間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は367cm×175cmで，柱穴の深さは13 ～ 37cmである。

掘立柱建物跡23号（第143図）

Ｎ－15区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は590cm×200cmで，柱穴の深さは54 ～ 64cmである。



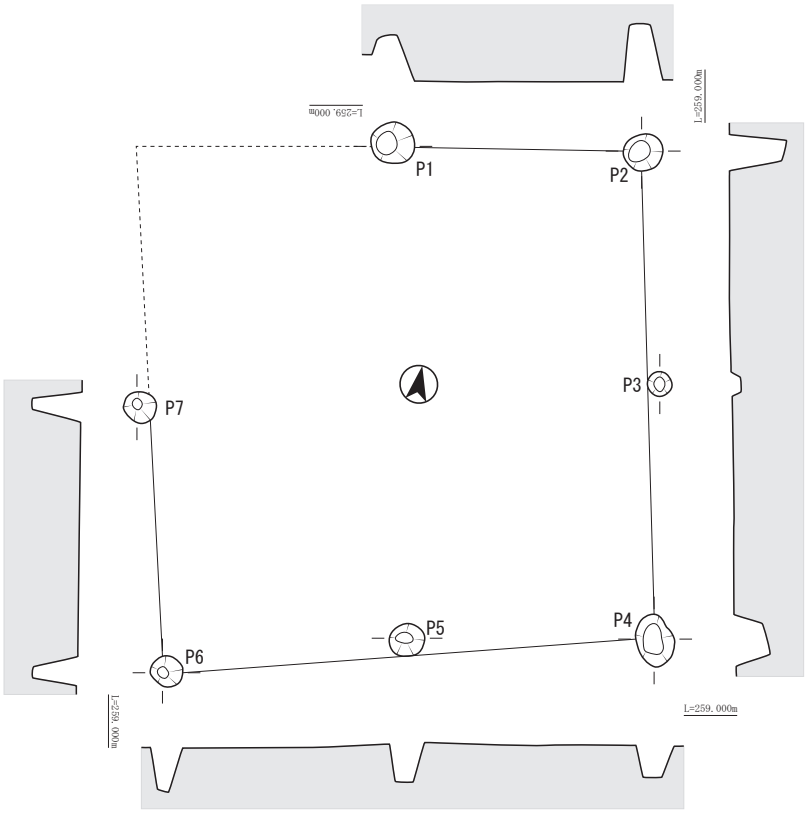
第139図　中世の掘立柱建物跡配置図２（Ｂ群）



掘立柱建物跡15号

第55表　掘立柱建物跡15号計測表

柱穴（cm）				主軸		N14° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	18	24	桁行（cm）	P1 ～ P3	375
P2	20	18	18		P1 ～ P2	200
P3	20	17	28		P2 ～ P3	175
P4	21	18	14		P7 ～ P5	352
P5	20	19	31		P7 ～ P6	194
P6	22	21	29		P6 ～ P5	157
P7	19	16	23		P8 ～ P4	395
P8	18	15	15		P8 ～ P9	214
P9	17	15	10		P9 ～ P4	182
				梁行（cm）	P1 ～ P7	366
					P1 ～ P8	190
					P8 ～ P7	178
					P3 ～ P5	350
					P3 ～ P4	181
					P4 ～ P5	168
					P2 ～ P6	355
					P2 ～ P9	188
					P9 ～ P6	170



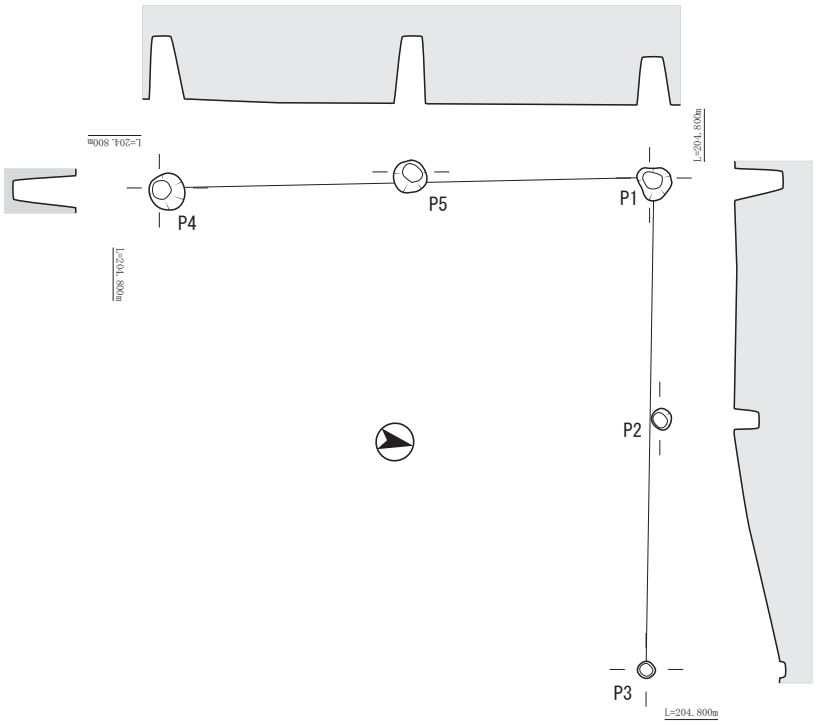
掘立柱建物跡16号

第56表　掘立柱建物跡16号計測表

柱穴（cm）				主軸		N13° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	36	34	36	桁行（cm）	P2 ～ P4	388
P2	33	28	46		P2 ～ P3	184
P3	20	19	19		P3 ～ P4	204
P4	42	30	30		P7 ～ P6	208
P5	28	26	31	梁行（cm）	P4 ～ P6	386
P6	26	24	34		P4 ～ P5	195
P7	26	24	39		P5 ～ P6	191
					P1 ～ P2	199



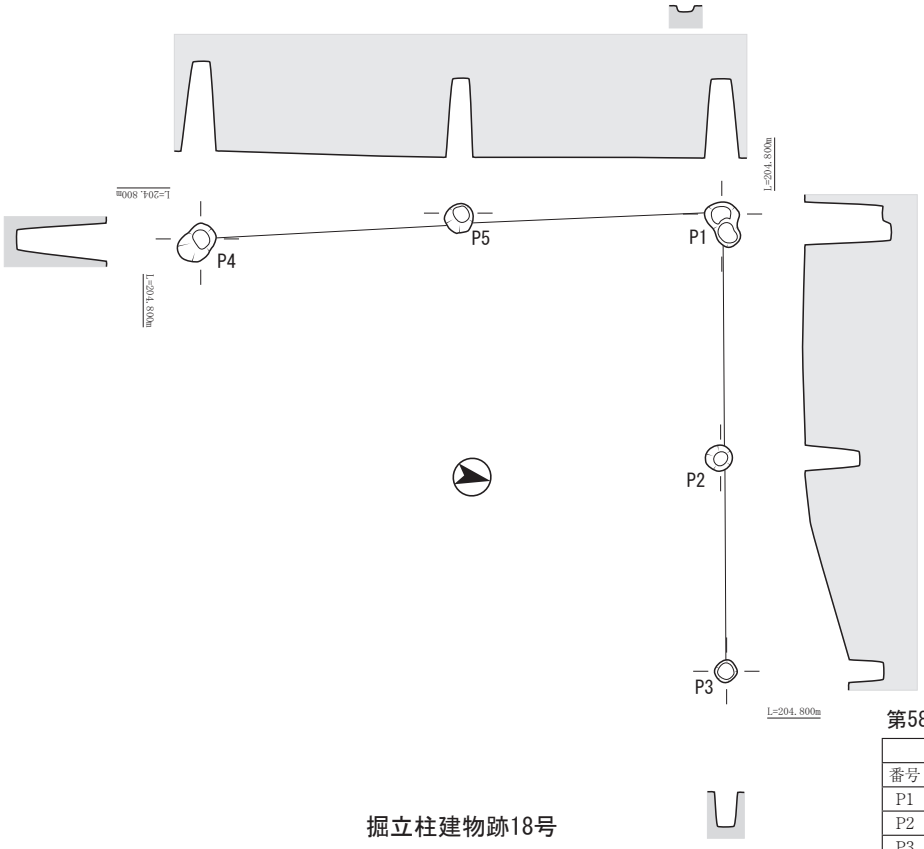
第140図　中世の掘立柱建物跡15・16号



掘立柱建物跡17号

第57表　掘立柱建物跡17号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	28	25	40	桁行（cm）	P1 ～ P4	392
P2	16	16	20		P1 ～ P5	196
P3	16	14	4		P5 ～ P4	196
P4	30	28	50	梁行（cm）	P1 ～ P3	390
P5	27	25	56		P1 ～ P2	188
					P2 ～ P3	200



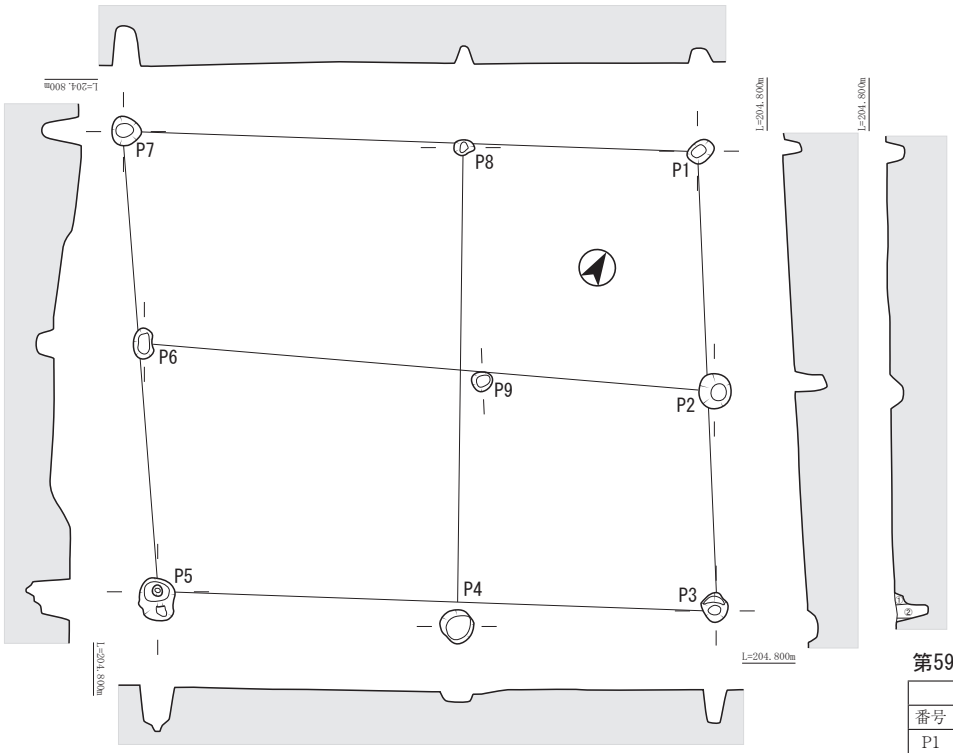
掘立柱建物跡18号

第58表　掘立柱建物跡18号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	38	25	66	桁行（cm）	P1 ～ P4	410
P2	20	20	46		P1 ～ P5	218
P3	18	18	31		P5 ～ P4	203
P4	33	22	74	梁行（cm）	P1 ～ P3	353
P5	24	22	67		P1 ～ P2	185
					P2 ～ P3	168

0　2m

第141図　中世の掘立柱建物跡17・18号

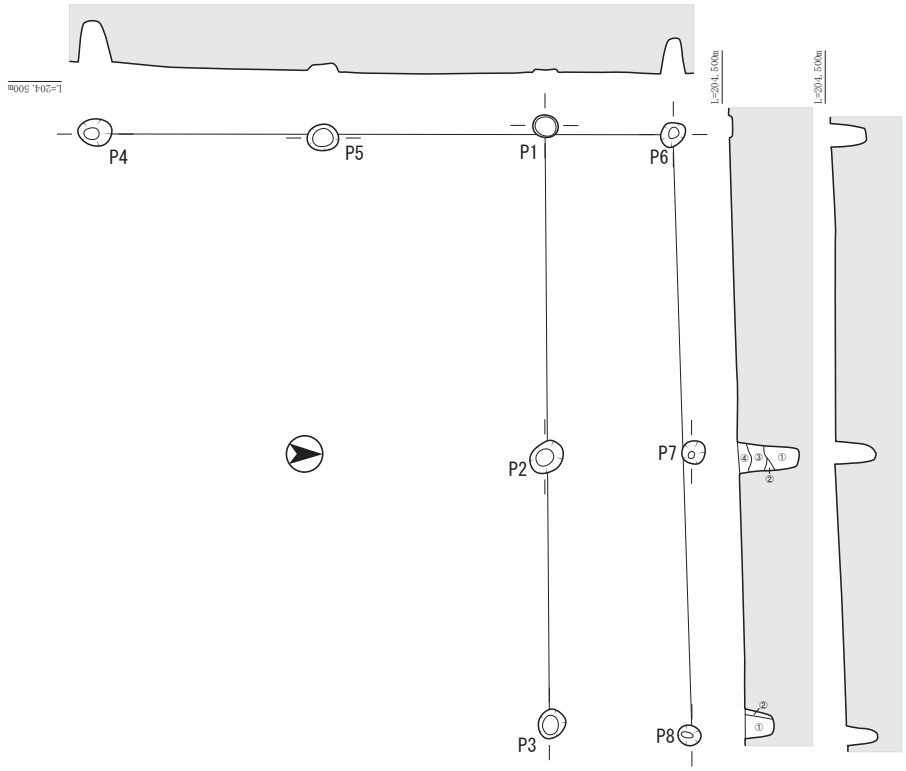


掘立柱建物跡19号

P3　①黒色土　②黒色土

第59表　掘立柱建物跡19号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	21	20	17	桁行（cm）	P1 ～ P7	450
P2	27	25	25		P1 ～ P8	180
P3	5	22	27		P8 ～ P7	270
P4	27	26	10		P2 ～ P6	458
P5	35	27	37		P2 ～ P9	186
P6	25	15	15		P9 ～ P6	272
P7	25	24	34		P3 ～ P5	445
P8	17	12	15		P3 ～ P4	207
P9	17	16	26		P4 ～ P5	240
				梁行（cm）	P1 ～ P3	345
					P1 ～ P2	174
					P2 ～ P3	171
					P8 ～ P4	378
					P8 ～ P9	185
					P9 ～ P4	194
					P7 ～ P5	371
					P7 ～ P6	168
					P6 ～ P5	203



掘立柱建物跡20号

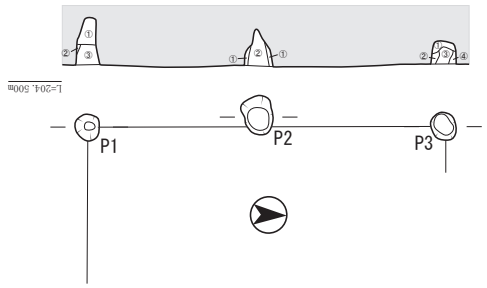
P2　①黒褐色土　②黒褐色土
③黒色土　④黒褐色
P3　①黒褐色土　②暗褐色土

第60表　掘立柱建物跡20号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	18	4	桁行（cm）	P1 ～ P3	470
P2	28	23	50		P1 ～ P2	257
P3	23	20	24		P2 ～ P3	214
P4	26	20	36		P6 ～ P8	475
P5	28	24	5		P6 ～ P7	251
P6	21	19	29		P7 ～ P8	225
P7	20	10	44	梁行（cm）	P1 ～ P4	368
P8	19	18	24		P1 ～ P5	186
					P5 ～ P4	180
					P6 ～ P4	489
					P6 ～ P1	91

0　2m

第142図　中世の掘立柱建物跡19・20号

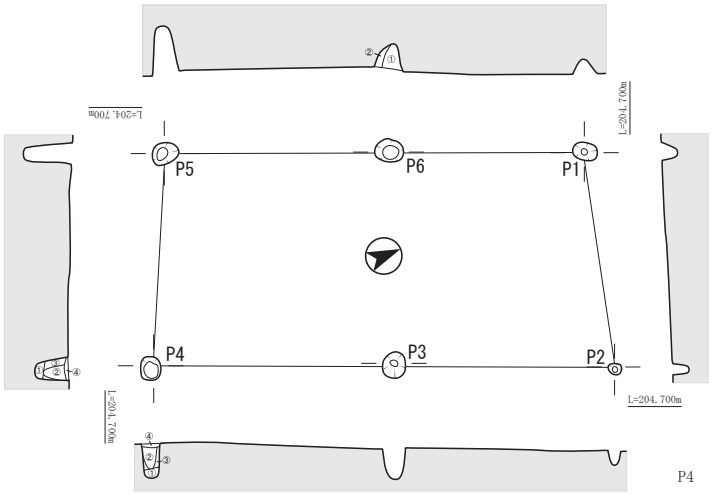


P1　①暗褐色土　②褐色土　③黒色土
P2　①暗褐色土　②黒褐色土
P3　①暗褐色土　②暗褐色土　③黒褐色土

掘立柱建物跡21号

第61表　掘立柱建物跡21号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	22	20	19	桁行（cm）	P1 ～ P3	283
P2	30	24	29		P1 ～ P2	150
P3	20	19	38		P2 ～ P3	134

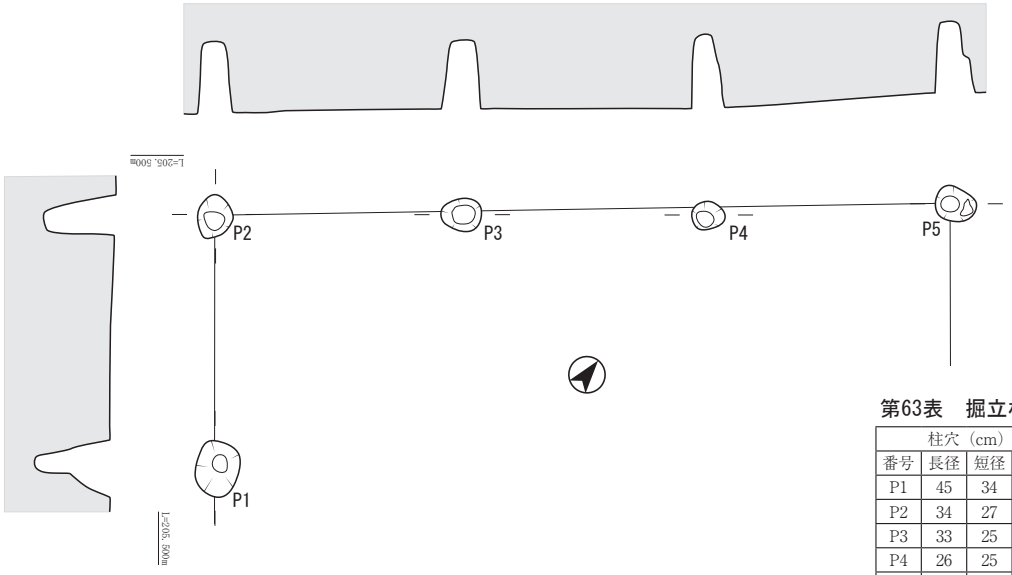


掘立柱建物跡22号

第62表　掘立柱建物跡22号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	15	13	桁行（cm）	P1 ～ P5	333
P2	11	9	14		P1 ～ P6	154
P3	22	19	25		P6 ～ P5	178
P4	20	15	26		P2 ～ P4	367
P5	22	18	37		P2 ～ P3	174
P6	24	18	22		P3 ～ P4	193
				梁行（cm）	P1 ～ P2	175
					P5 ～ P4	172

P4　①暗褐色土　②黒褐色土
　　③にぶい黄褐色土　④黒色土
P6　①黒褐色土　②暗褐色土



掘立柱建物跡23号

第63表　掘立柱建物跡23号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	45	34	62	桁行（cm）	P5 ～ P2	590
P2	34	27	57		P5 ～ P4	198
P3	33	25	54		P4 ～ P3	196
P4	26	25	58		P3 ～ P2	196
P5	30	27	64	梁行（cm）	P2 ～ P1	200

0　2m

第143図　中世の掘立柱建物跡21～23号

C 群（24～36号）

G～K－８～13区で検出された13棟の掘立柱建物跡群である。復元された建物以外にも柱穴が多数あり，短期間に何度も建て替えが行われたことが想定される。

掘立柱建物跡24号（第145図）

J・K－９区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は624cm×400cmで，柱穴の深さは32～55cmである。

掘立柱建物跡25号（第146図）

I－10区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は425cm×365cm，柱穴の深さは６～40cmである。

掘立柱建物跡26号（第146図）

I・J－12・13区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が589cm×388cmで，庇を含めると719cm×388cmである。柱穴の深さは８～57cmである。

掘立柱建物跡27号（第147図）

H－12・13区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は486cm×333cm，柱穴の深さは14～42cmである。

掘立柱建物跡28号（第147図）

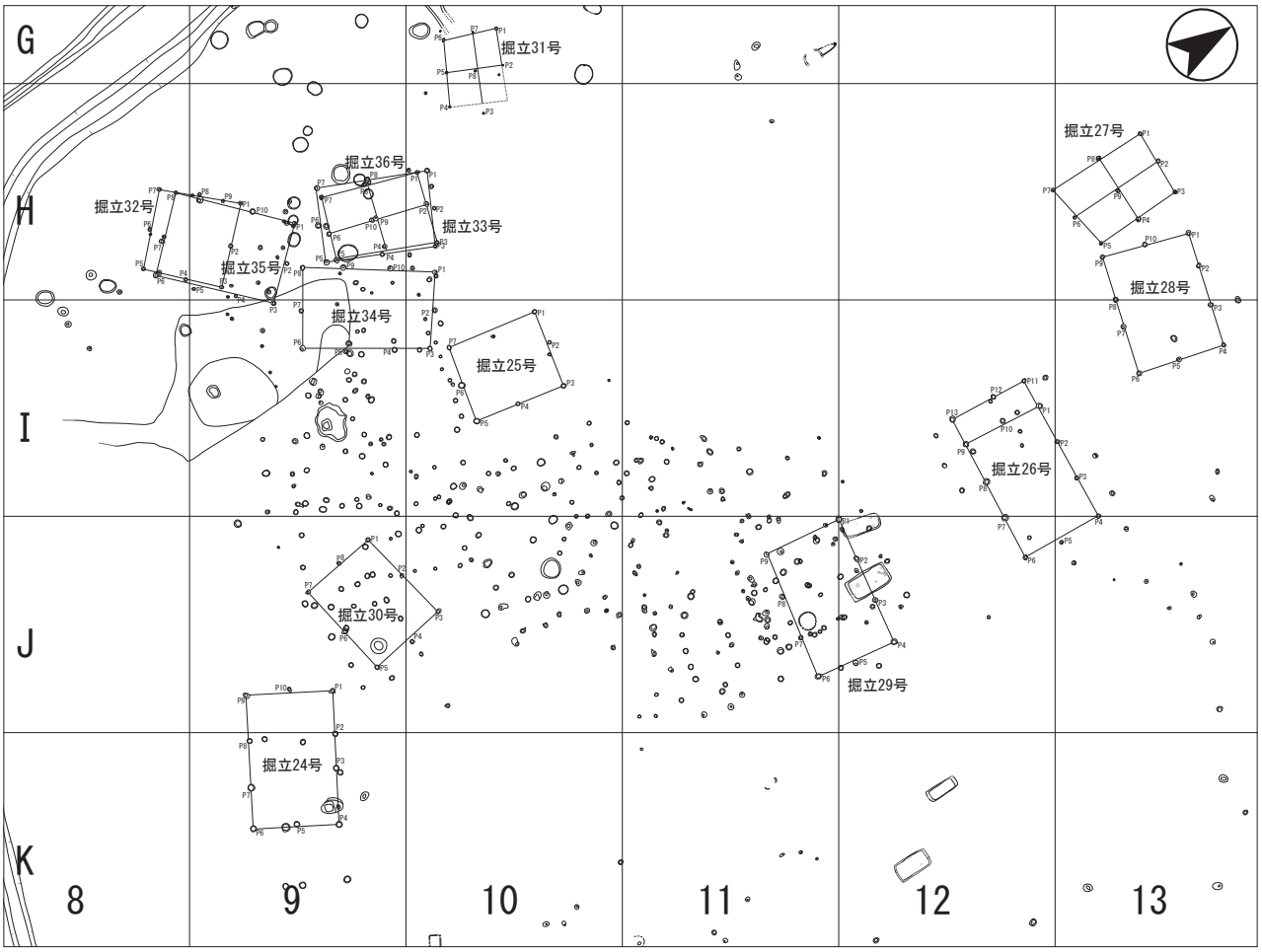
H・I－13区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は561cm×413cm，柱穴の深さは19～54cmである。

掘立柱建物跡29号（第148図）

I・J－11・12区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は622cm×388cm，柱穴の深さは15～41cmである。

掘立柱建物跡30号（第148図）

J－９・10区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は466cm×385cm，柱穴の深さは28～44cmである。



第144図　中世の掘立柱建物跡配置図３（C群）

掘立柱建物跡31号（第149図）

G・H－10区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は309cm×250cm，柱穴の深さは７～21cmである。

掘立柱建物跡32号（第149図）

H－８・９区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は397cm×383cm，柱穴の深さは19～34cmである。

掘立柱建物跡33号（第150図）

H－９・10区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は470cm×339cm，柱穴の深さは21～40cmである。

掘立柱建物跡34号（第150図）

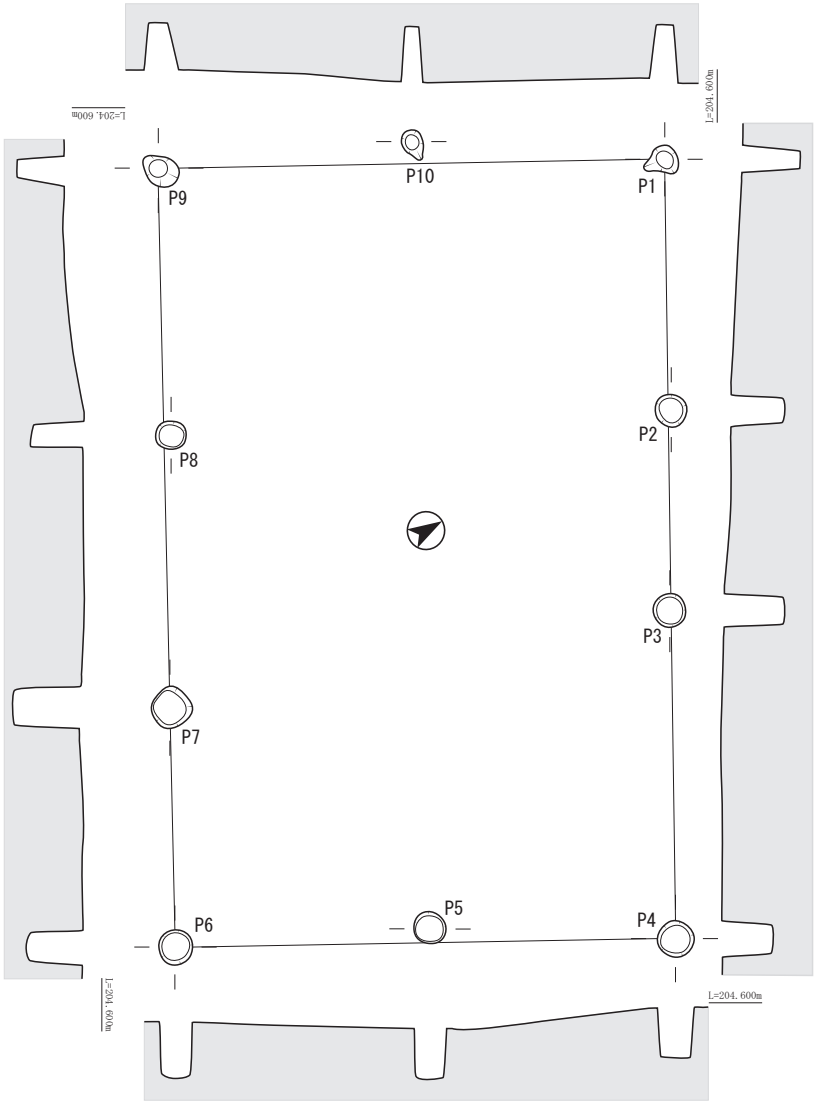
H・Ⅰ－９・10区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は620cm×373cm，柱穴の深さは30～82cmである。

掘立柱建物跡35号（第151図）

H・Ⅰ－８・9区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は564cm×393cm，柱穴の深さは10～49cmである。

掘立柱建物跡36号（第151図）

H－９・10区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は517cm×353cm，柱穴の深さは14～32cmである。

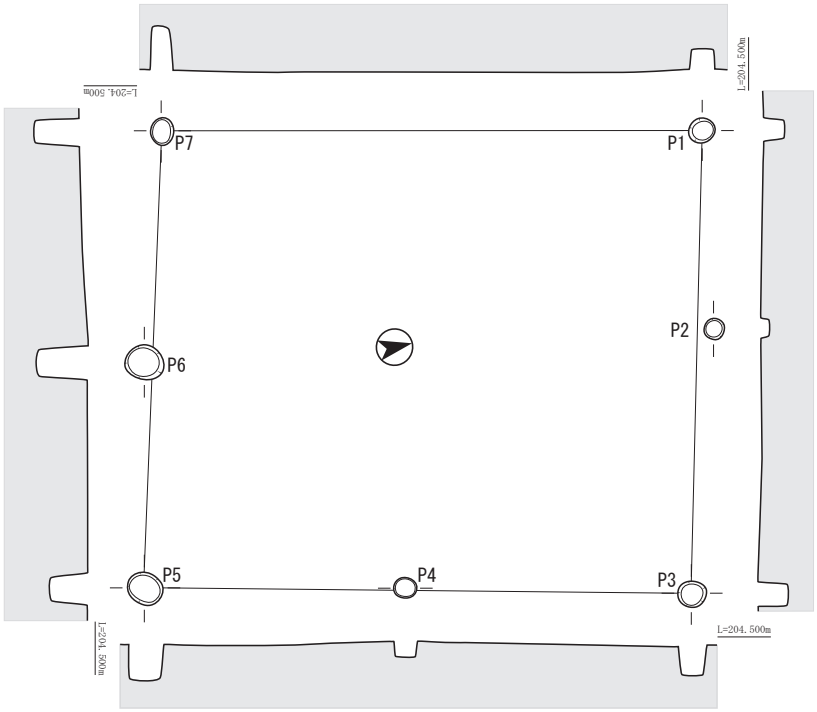


第64表　掘立柱建物跡24号計測表

柱穴（cm）				主軸		N8° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	24	18	43	桁行（cm）	P1～P4	617
P2	26	25	42		P1～P2	201
P3	26	25	48		P2～P3	160
P4	28	28	40		P3～P4	255
P5	26	25	41		P9～P6	624
P6	27	27	45		P9～P8	218
P7	33	32	55		P8～P7	215
P8	24	23	42		P7～P6	192
P9	32	23	32	梁行（cm）	P1～P9	400
P10	24	16	42		P1～P10	200
					P10～P9	201
					P4～P6	395
					P4～P5	192
					P5～P6	201



第145図　中世の掘立柱建物跡24号



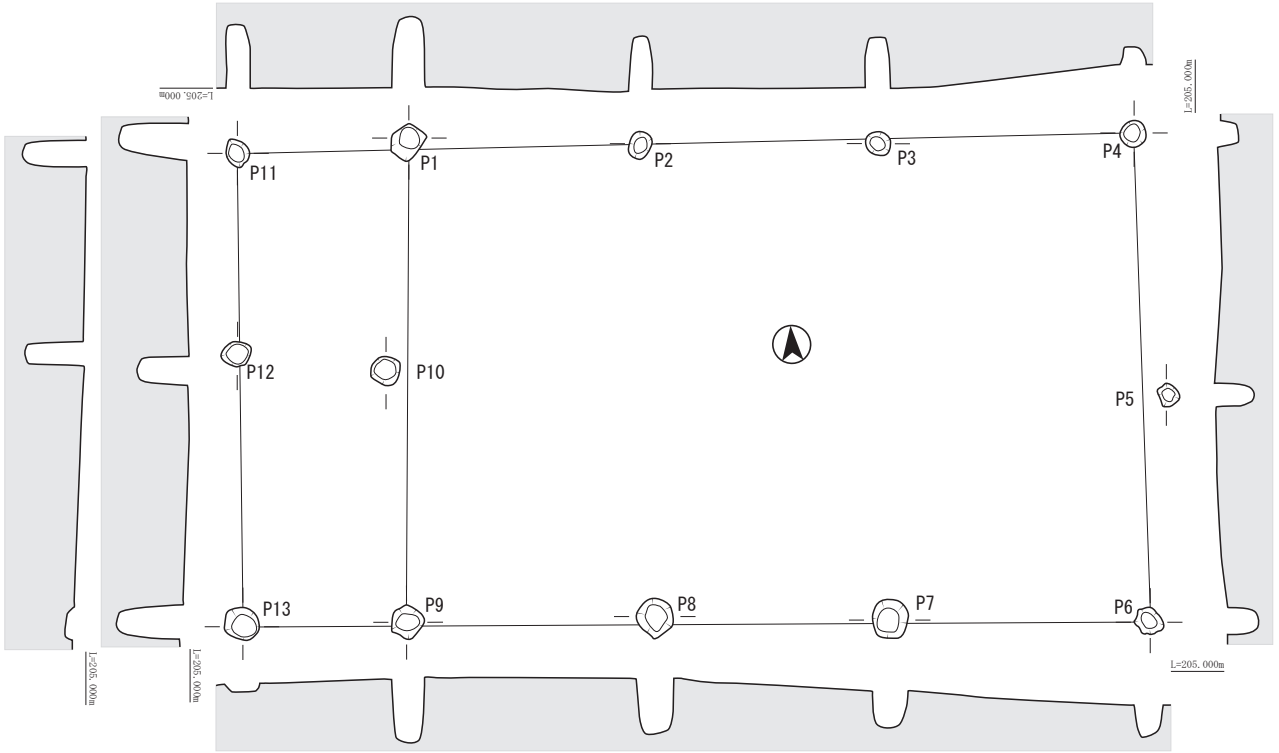
掘立柱建物跡25号

第65表　掘立柱建物跡25号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	20	17		P1 ～ P7	425
P2	16	16	6	桁行	P3 ～ P5	425
P3	22	21	24	（cm）	P3 ～ P4	218
P4	18	16	13		P4 ～ P5	208
P5	28	25	29		P1 ～ P3	365
P6	31	26	40		P1 ～ P2	150
P7	21	18	36	梁行	P2 ～ P3	215
				（cm）	P7 ～ P5	357
					P7 ～ P6	185
					P6 ～ P5	175

第66表　掘立柱建物跡26号計測表

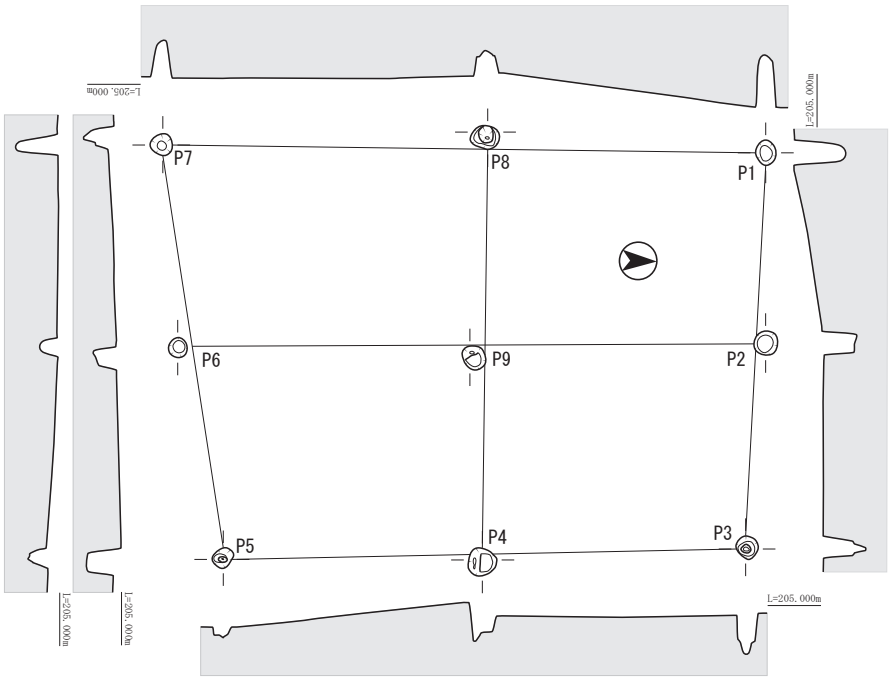
柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	31	25	57		P1 ～ P4	578
P2	22	18	44		P1 ～ P2	185
P3	23	19	41		P2 ～ P3	189
P4	23	20	16		P3 ～ P4	204
P5	18	18	31		P11 ～ P4	714
P6	23	21	26	桁行	P11 ～ P1	136
P7	32	30	30	（cm）	P9 ～ P6	589
P8	32	29	45		P9 ～ P8	196
P9	28	26	53		P8 ～ P7	187
P10	25	24	42		P7 ～ P6	205
P11	24	18	51		P13 ～ P6	719
P12	25	20	47		P13 ～ P9	131
P13	29	26	8		P1 ～ P9	382
					P1 ～ P10	182
					P10 ～ P9	201
					P4 ～ P6	388
				梁行	P4 ～ P5	210
				（cm）	P5 ～ P6	180
					P11 ～ P13	373
					P11 ～ P12	158
					P12 ～ P13	214



掘立柱建物跡26号



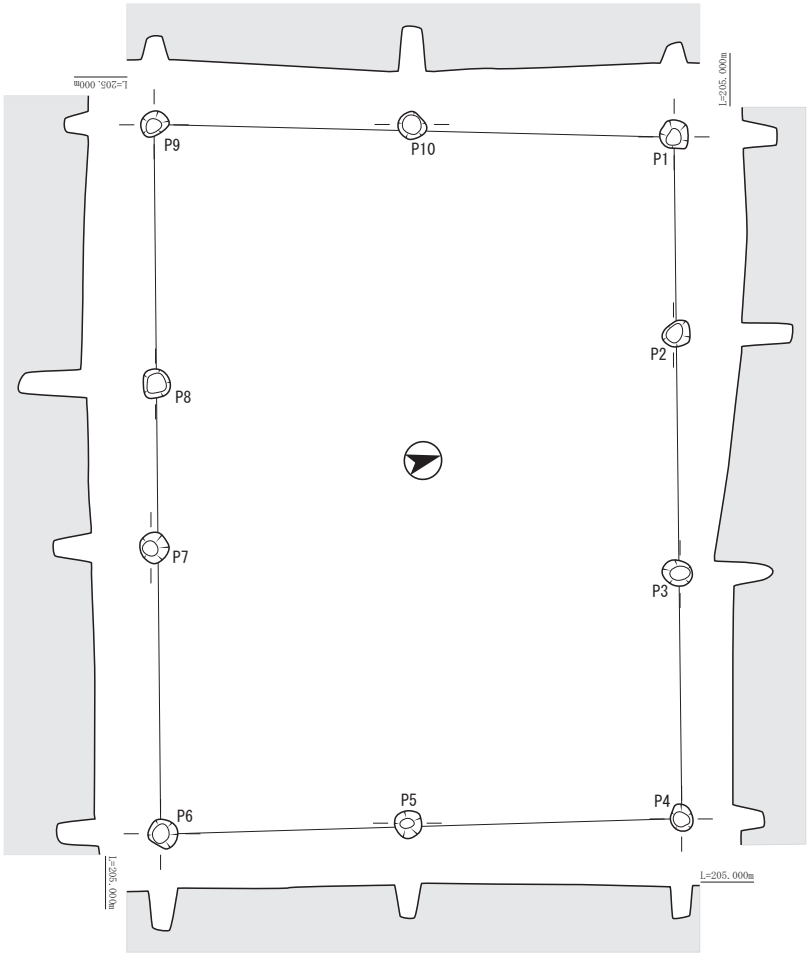
第146図　中世の掘立柱建物跡25・26号



掘立柱建物跡27号

第67表　掘立柱建物跡27号計測表

柱穴（cm）				主軸		N4° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	16	42	桁行（cm）	P1 ～ P7	486
P2	20	19	29		P1 ～ P8	230
P3	19	16	34		P8 ～ P7	258
P4	23	23	30		P3 ～ P5	419
P5	18	14	15		P3 ～ P4	213
P6	15	14	14		P4 ～ P5	205
P7	17	17	30		P2 ～ P6	470
P8	23	19	20		P2 ～ P9	235
P9	20	17	18		P9 ～ P6	234
				梁行（cm）	P1 ～ P3	316
					P1 ～ P2	153
					P2 ～ P3	164
					P7 ～ P5	333
					P7 ～ P6	161
					P6 ～ P5	173
					P8 ～ P4	338
					P8 ～ P9	177
					P9 ～ P4	162



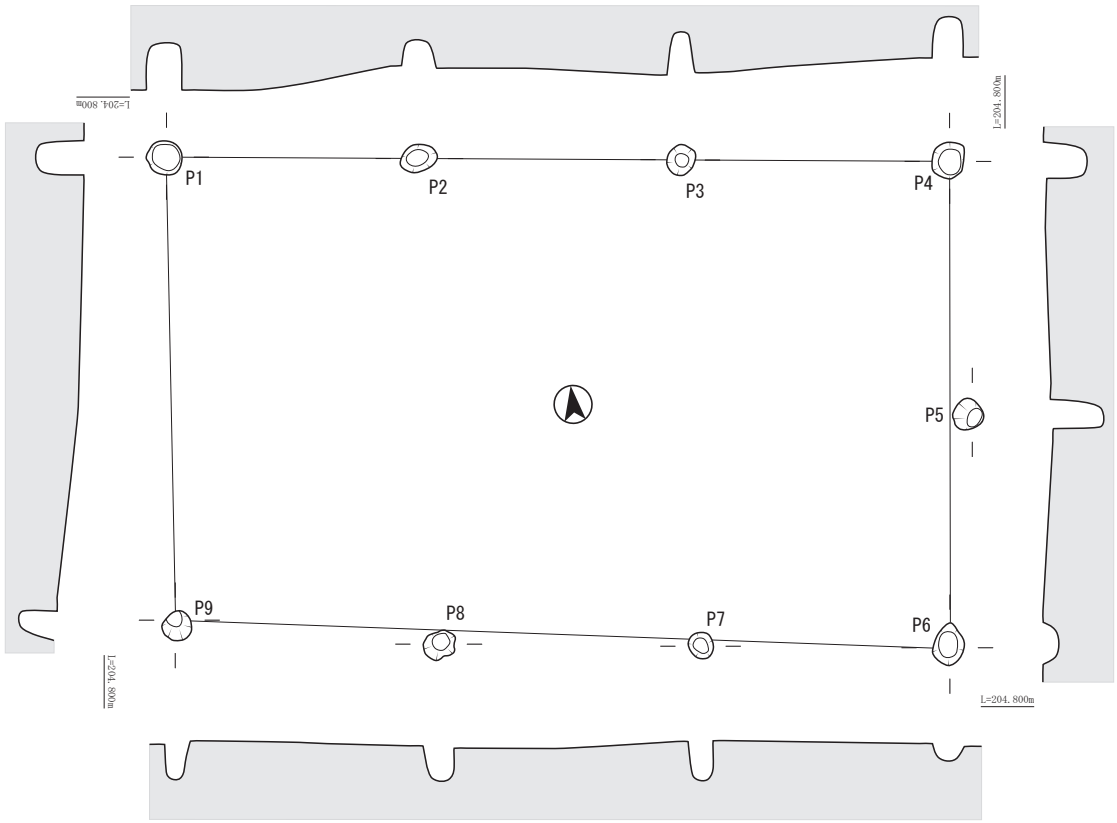
掘立柱建物跡28号

第68表　掘立柱建物跡28号計測表

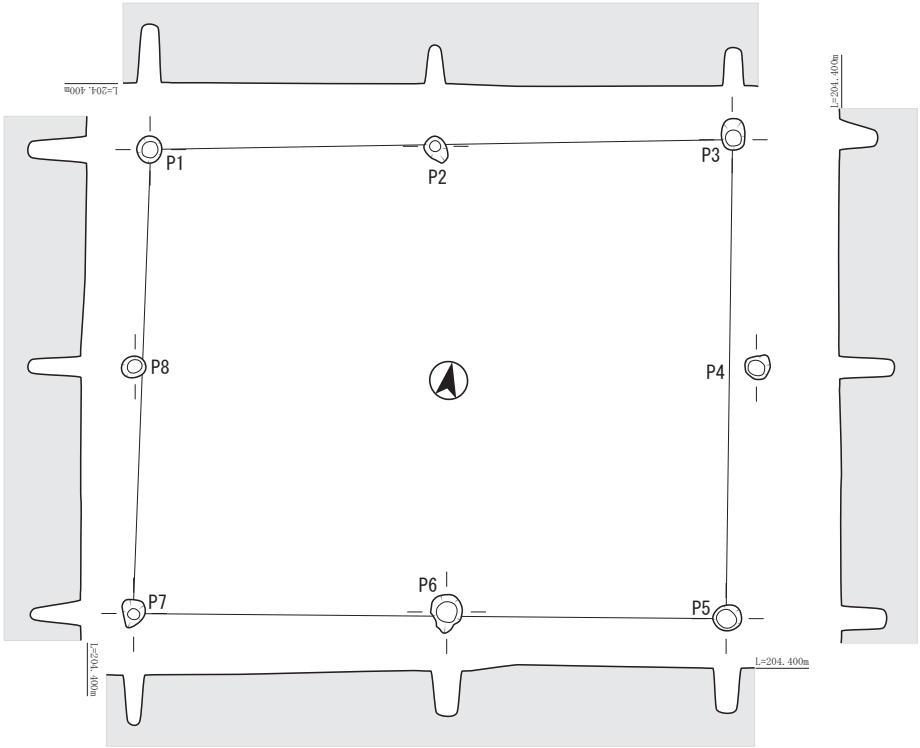
柱穴（cm）				主軸		N76° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	26	24	28	桁行（cm）	P1 ～ P4	543
P2	24	21	40		P1 ～ P2	157
P3	25	20	47		P2 ～ P3	190
P4	22	18	25		P3 ～ P4	195
P5	23	22	28		P9 ～ P6	561
P6	25	24	33		P9 ～ P8	204
P7	25	24	29		P8 ～ P7	130
P8	25	24	54		P7 ～ P6	226
P9	24	20	19	梁行（cm）	P1 ～ P9	413
P10	24	23	36		P1 ～ P10	207
					P10 ～ P9	205
					P4 ～ P6	410
					P4 ～ P5	215
					P5 ～ P6	195



第147図　中世の掘立柱建物跡27・28号



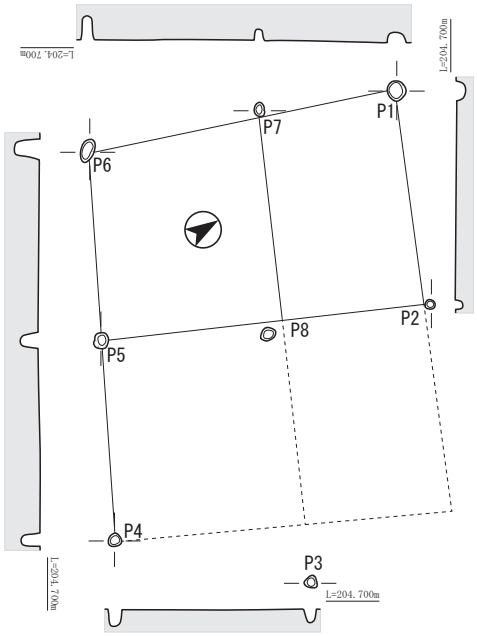
掘立柱建物跡29号



掘立柱建物跡30号

0 2m

第148図　中世の掘立柱建物跡29・30号



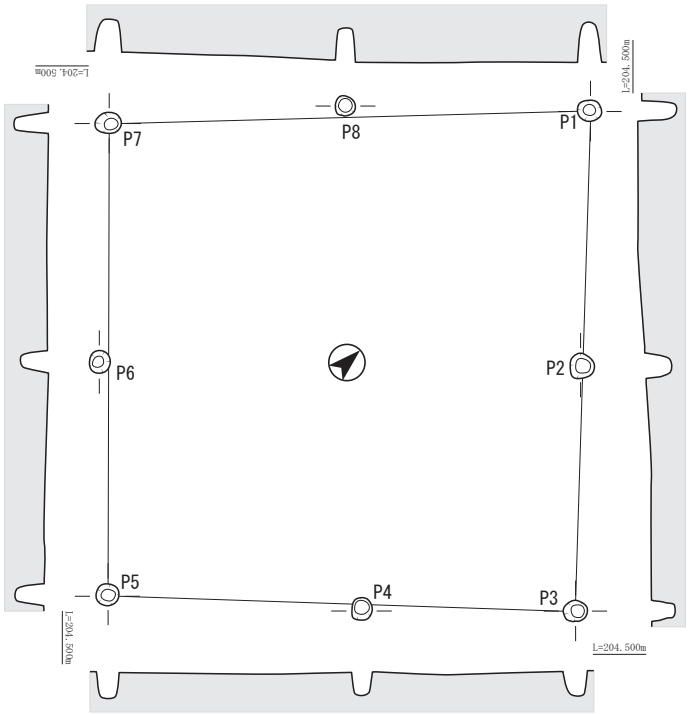
掘立柱建物跡31号

第69表　掘立柱建物跡29号計測表

柱穴（cm）				主軸		N83° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	30	27	38	桁行（cm）	P1 ～ P4	622
P2	30	23	22		P1 ～ P2	202
P3	26	23	35		P2 ～ P3	208
P4	31	27	32		P3 ～ P4	211
P5	26	24	41		P9 ～ P6	611
P6	33	25	15		P9 ～ P8	212
P7	23	19	32		P8 ～ P7	204
P8	27	22	30		P7 ～ P6	195
P9	24	23	30	梁行（cm）	P1 ～ P9	352
					P4 ～ P6	388
					P4 ～ P5	208
					P5 ～ P6	184

第70表　掘立柱建物跡30号計測表

柱穴（cm）				主軸		N80° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	22	20	44	桁行（cm）	P1 ～ P3	463
P2	23	16	29		P1 ～ P2	225
P3	25	19	28		P2 ～ P3	237
P4	21	20	40		P7 ～ P5	466
P5	23	20	34		P7 ～ P6	248
P6	30	24	34		P6 ～ P5	220
P7	24	18	37	梁行（cm）	P1 ～ P7	368
P8	20	16	40		P1 ～ P8	172
					P8 ～ P7	197
					P3 ～ P5	385
					P3 ～ P4	186
					P4 ～ P5	200



掘立柱建物跡32号

第71表　掘立柱建物跡31号計測表

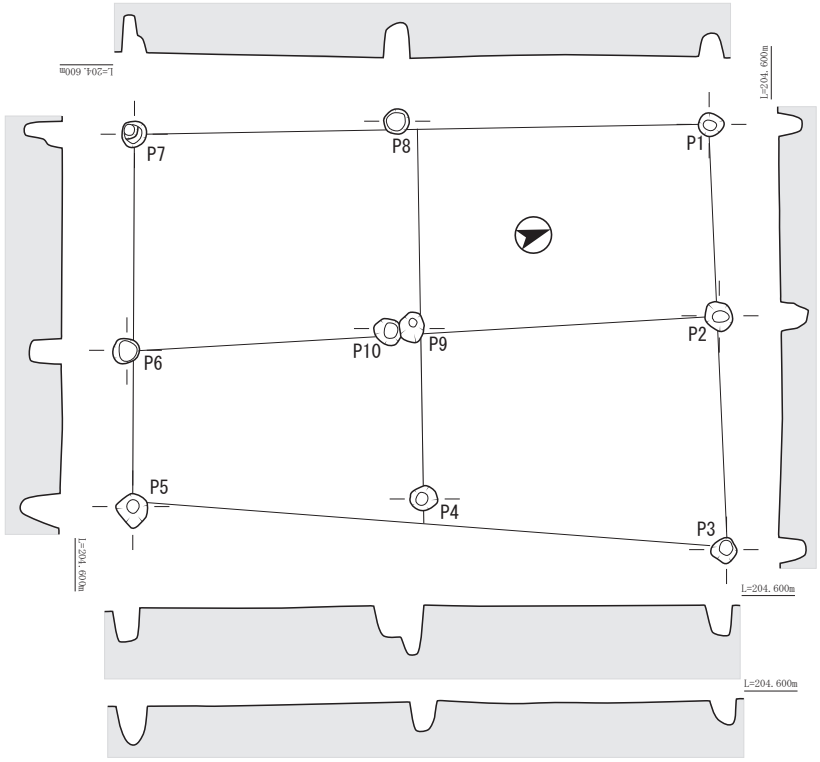
柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	15	15	9	桁行（cm）	P1 ～ P2	173
P2	9	9	7		P6 ～ P4	309
P3	11	11	11		P6 ～ P5	152
P4	11	11	15		P5 ～ P4	158
P5	13	13	14		P7 ～ P3	376
P6	19	11	21		P7 ～ P8	178
P7	11	8	9		P8 ～ P3	199
P8	13	10	－	梁行（cm）	P1 ～ P6	250
					P1 ～ P7	110
					P7 ～ P6	140
					P2 ～ P5	263
					P2 ～ P8	131
					P8 ～ P5	133
					P3 ～ P4	159

第72表　掘立柱建物跡32号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	18	34	桁行（cm）	P1 ～ P3	397
P2	21	21	21		P1 ～ P2	204
P3	20	17	19		P2 ～ P3	193
P4	19	16	23		P7 ～ P5	373
P5	19	19	21		P7 ～ P6	189
P6	19	17	21		P6 ～ P5	185
P7	22	18	27	梁行（cm）	P1 ～ P7	383
P8	16	15	26		P1 ～ P8	195
					P8 ～ P7	189
					P3 ～ P5	372
					P3 ～ P4	170
					P4 ～ P5	202



第149図　中世の掘立柱建物跡31・32号



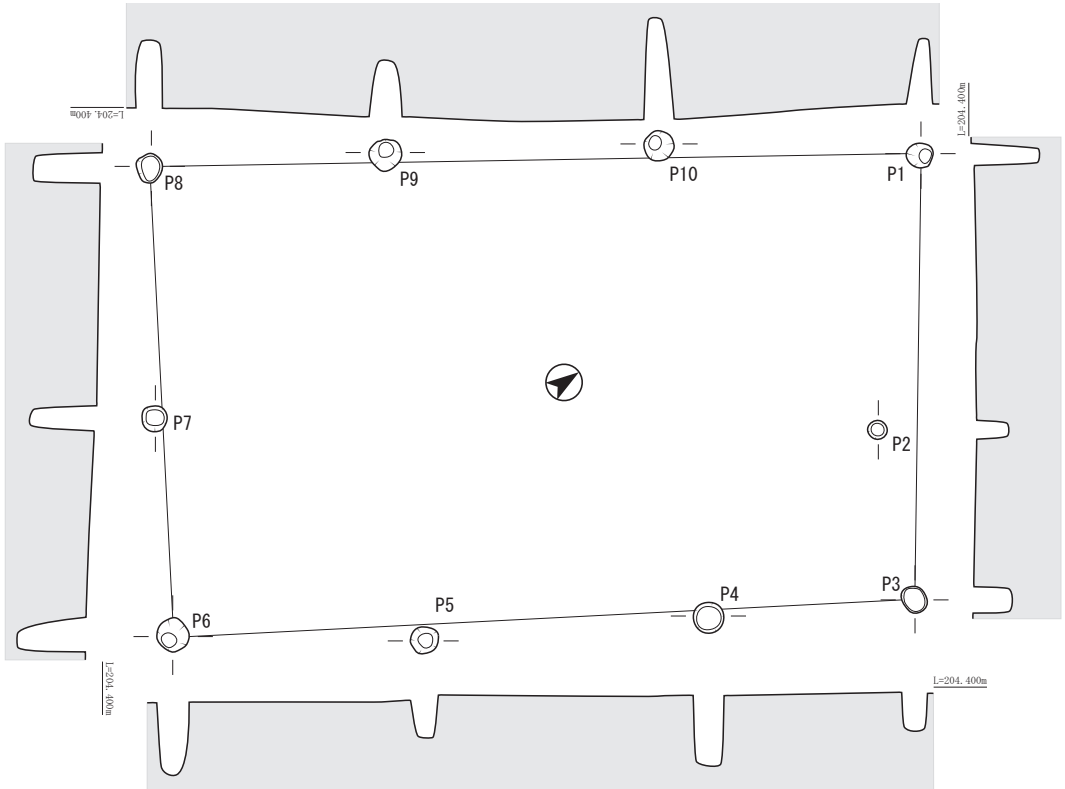
掘立柱建物跡33号

第73表　掘立柱建物跡33号計測表

柱穴（cm）				主軸		N19° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	20	20	21	桁行（cm）	P1 ～ P7	456
P2	25	21	24		P1 ～ P8	250
P3	22	22	21		P8 ～ P7	212
P4	22	21	24		P2 ～ P6	472
P5	27	25	33		P2 ～ P9	243
P6	21	21	27		P2 ～ P10	262
P7	22	19	28		P9 ～ P6	230
P8	21	20	26		P10 ～ P6	219
P9	24	20	40		P3 ～ P5	470
P10	22	20	26		P3 ～ P4	241
					P4 ～ P5	232
				梁行（cm）	P1 ～ P3	339
					P1 ～ P2	152
					P2 ～ P3	186
					P7 ～ P5	299
					P7 ～ P6	222
					P6 ～ P5	127
					P8 ～ P4	320
					P8 ～ P9	182
					P9 ～ P4	140

第74表　掘立柱建物跡34号計測表

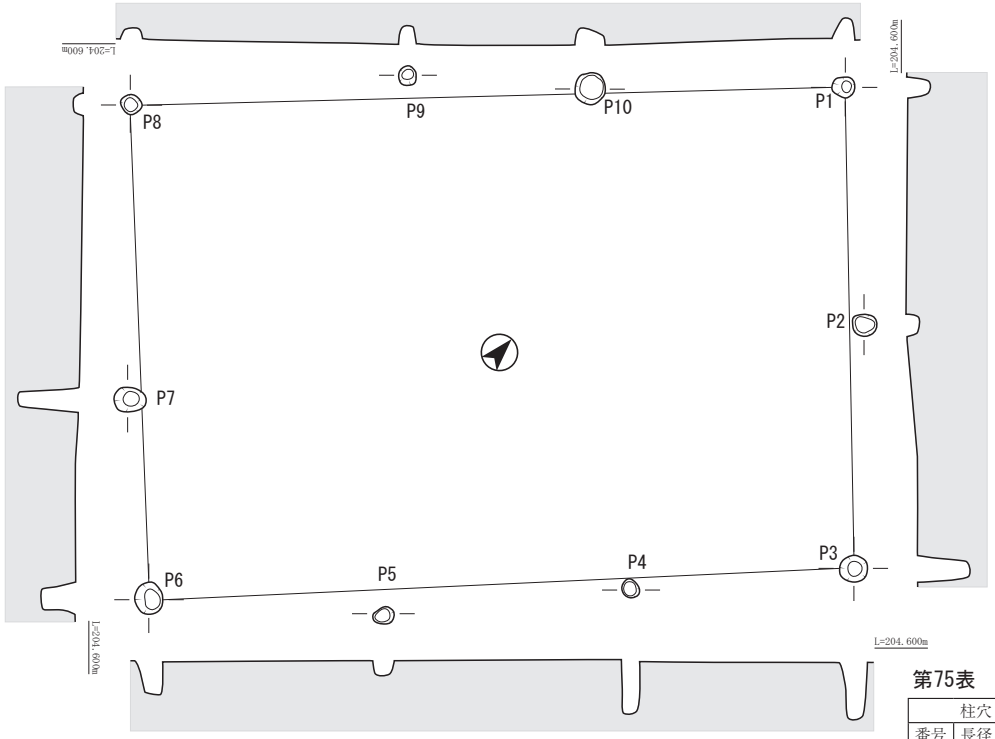
柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	22	20	55	桁行（cm）	P1 ～ P8	620
P2	16	14	30		P1 ～ P10	207
P3	22	18	32		P10 ～ P9	217
P4	26	24	59		P9 ～ P8	189
P5	25	22	35		P3 ～ P6	592
P6	28	26	58		P3 ～ P4	165
P7	20	20	56		P4 ～ P5	225
P8	24	22	54		P5 ～ P6	204
P9	26	25	45	梁行（cm）	P1 ～ P3	352
P10	24	24	82		P1 ～ P2	195
					P2 ～ P3	210
					P8 ～ P6	373
					P8 ～ P7	200
					P7 ～ P6	174



掘立柱建物跡34号

0　2m

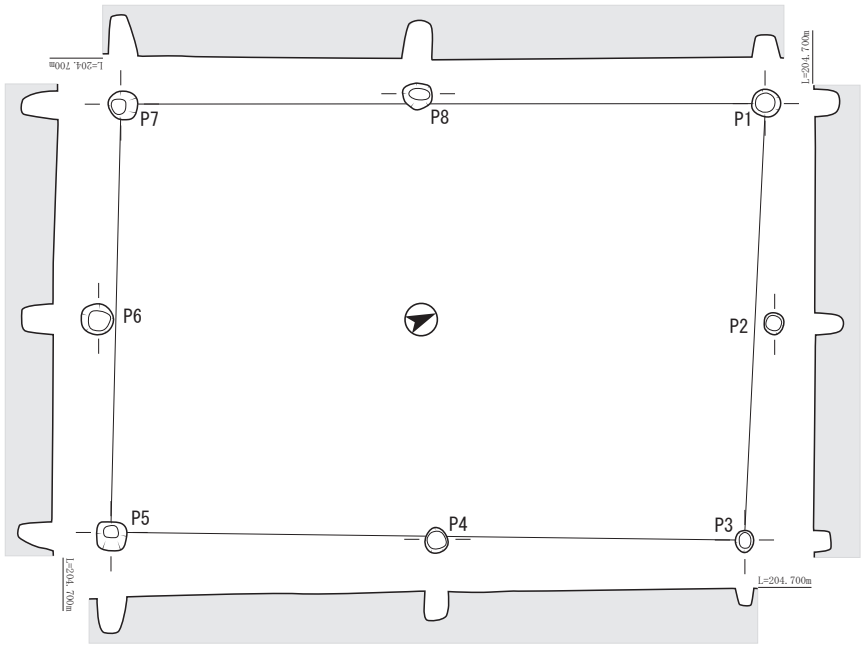
第150図　中世の掘立柱建物跡33・34号



掘立柱建物跡35号

第75表　掘立柱建物跡35号計測表

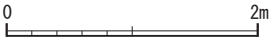
柱穴（cm）				主軸		N46° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	18	18	18		P1 ～ P8	564
P2	21	20	11		P1 ～ P10	201
P3	22	22	44		P10 ～ P9	145
P4	17	13	44	桁行	P9 ～ P8	220
P5	18	15	13	（cm）	P3 ～ P6	560
P6	25	22	27		P3 ～ P4	180
P7	25	20	49		P4 ～ P5	196
P8	16	16	10		P5 ～ P6	185
P9	16	15	15		P1 ～ P3	382
P10	26	26	14		P1 ～ P2	189
				梁行	P2 ～ P3	195
				（cm）	P8 ～ P6	393
					P8 ～ P7	235
					P7 ～ P6	159



掘立柱建物跡36号

第76表　掘立柱建物跡36号計測表

柱穴（cm）				主軸		N23° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	23	22	19		P1 ～ P7	517
P2	18	16	22		P1 ～ P8	265
P3	18	15	14	桁行	P8 ～ P7	238
P4	21	19	24	（cm）	P3 ～ P5	509
P5	27	26	29		P3 ～ P4	248
P6	27	26	25		P4 ～ P5	261
P7	25	23	32		P1 ～ P3	353
P8	24	23	31		P1 ～ P2	179
				梁行	P2 ～ P3	176
				（cm）	P7 ～ P5	347
					P7 ～ P6	173
					P6 ～ P5	174



第151図　中世の掘立柱建物跡35・36号

Ｄ群（37～39号）

Ｅ・Ｆ－11・12区で検出された３棟の掘立柱建物跡群である。主殿と考えられる37号掘立柱建物跡に，厨もしくは倉庫と考えられる38･39号掘立柱建物跡が付属する。

掘立柱建物跡37号（第153図）

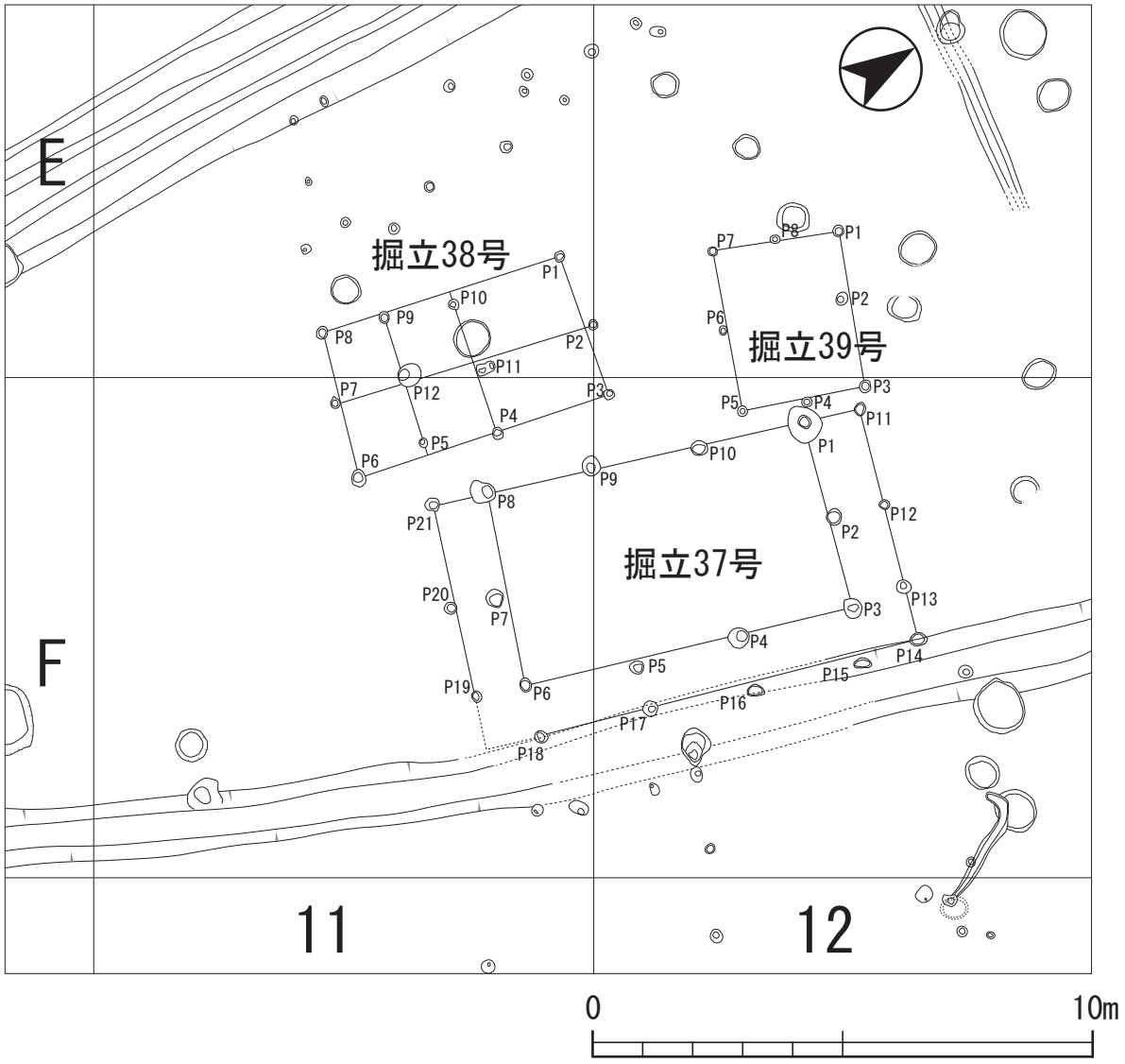
Ｆ－11・12区で検出された桁行３間，梁行２間の母屋の３面に庇がつく掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が678cm×394cmで，庇を含めると884cm×474cmである。柱穴の深さは15 ～ 84cmである。

掘立柱建物跡38号（第154図）

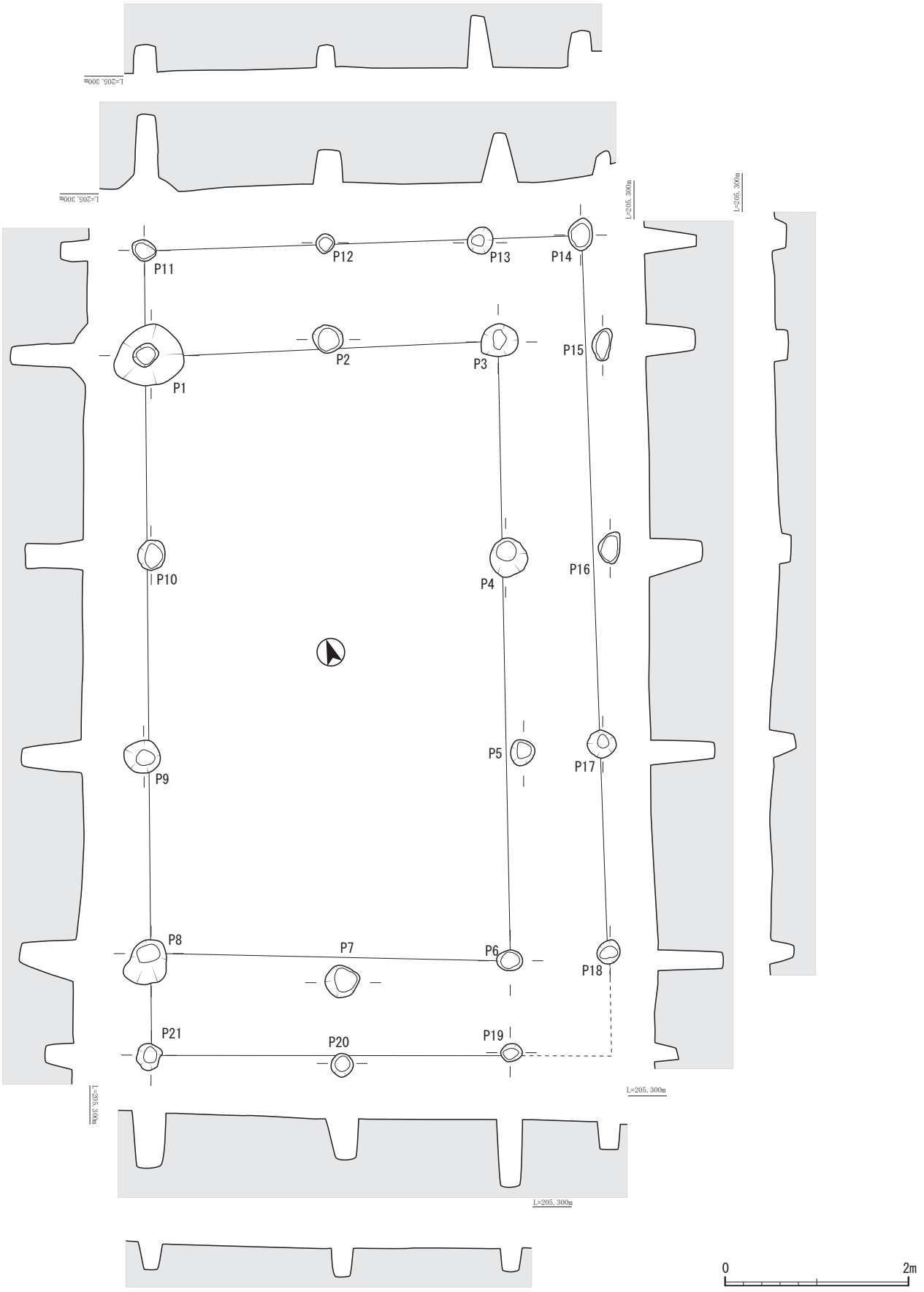
Ｅ・Ｆ－11・12区で検出された桁行３間，梁行２間の総柱の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は590cm×300cm，柱穴の深さは13 ～ 85cmである。

掘立柱建物跡39号（第154図）

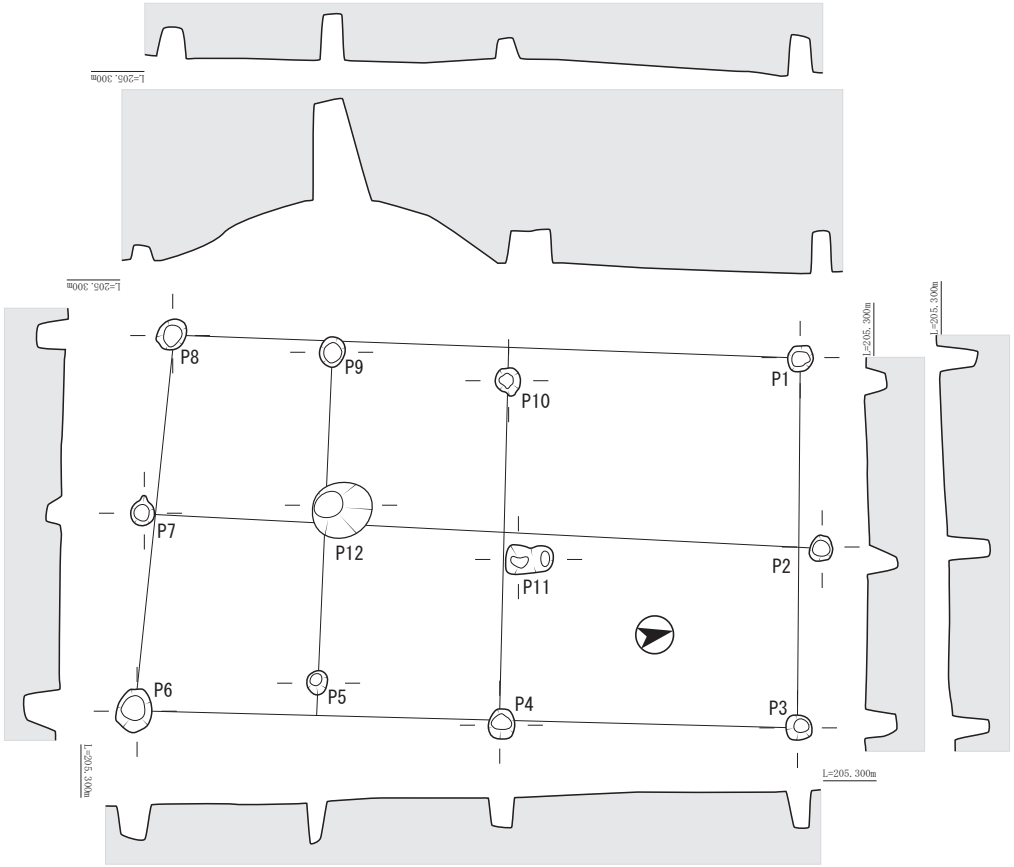
Ｅ・Ｆ－12区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は324cm×252cmで，柱穴の深さは14 ～ 42cmである。



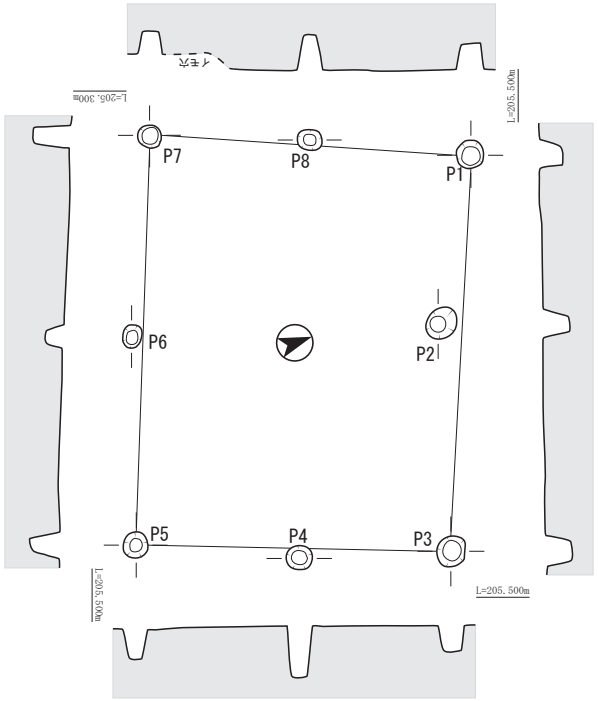
第152図　中世の掘立柱建物跡配置図４（Ｄ群）



第153図　中世の掘立柱建物跡37号



掘立柱建物跡38号



掘立柱建物跡39号

0 2m

第154図　中世の掘立柱建物跡38・39号

第77表　掘立柱建物跡37号計測表

柱穴（cm）				主　軸						N19° E
No	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離		方向	柱穴間距離	
P1	75	67	84		P1 ～ P8	663		P1 ～ P3	384
P2	34	32	39		P1 ～ P10	215		P1 ～ P2	198
P3	45	36	52		P10 ～ P9	222		P2 ～ P3	186
P4	45	42	60		P9 ～ P8	226		P8 ～ P6	394
P5	30	29	69		P11 ～ P21	884		P8 ～ P7	212
P6	30	23	75		P11 ～ P1	118	梁行	P7 ～ P6	184
P7	39	38	44		P8 ～ P21	104	（cm）	P11 ～ P14	474
P8	48	38	60	桁行	P3 ～ P6	678		P11 ～ P12	198
P9	41	38	54	（cm）	P3 ～ P4	238		P12 ～ P13	167
P10	33	30	65		P4 ～ P5	216		P13 ～ P14	109
P11	26	23	30		P5 ～ P6	226		P19 ～ P21	394
P12	23	21	26		P14 ～ P18	770		P19 ～ P20	185
P13	30	27	56		P14 ～ P15	124		P20 ～ P21	210
P14	38	27	15		P15 ～ P16	222			
P15	36	21	15		P16 ～ P17	216			
P16	33	24	15		P17 ～ P18	228			
P17	33	30	29						
P18	27	26	26						
P19	23	21	26						
P20	27	26	33						
P21	30	26	30						

第78表　掘立柱建物跡38号計測表

柱穴（cm）				主　軸					
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離		方向	柱穴間距離	
P1	24	20	33		P1 ～ P8	590		P1 ～ P3	293
P2	22	18	32		P1 ～ P10	232		P1 ～ P2	150
P3	23	21	29		P10 ～ P9	140		P2 ～ P3	144
P4	24	20	23		P9 ～ P8	128		P8 ～ P6	300
P5	20	17	34		P3 ～ P6	526		P8 ～ P7	145
P6	36	28	26	桁行	P3 ～ P4	235	梁行	P7 ～ P6	157
P7	26	18	13	（cm）	P4 ～ P5	147	（cm）	P10 ～ P4	272
P8	24	24	26		P5 ～ P6	148		P10 ～ P11	142
P9	27	20	25		P2 ～ P7	538		P11 ～ P4	131
P10	23	19	16		P2 ～ P11	240		P9 ～ P5	262
P11	38	20	26		P11 ～ P12	150		P9 ～ P12	122
P12	50	45	85		P12 ～ P7	160		P12 ～ P5	138

第79表　掘立柱建物跡39号計測表

柱穴（cm）				主軸		N69° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	23	23	19		P1 ～ P3	316
P2	27	23	22		P1 ～ P2	136
P3	27	24	21	桁行	P2 ～ P3	181
P4	21	19	42	（cm）	P7 ～ P5	324
P5	21	19	24		P7 ～ P6	159
P6	20	15	14		P6 ～ P5	165
P7	21	17	30		P1 ～ P7	251
P8	21	17	29		P1 ～ P8	129
				梁行	P8 ～ P7	127
				（cm）	P3 ～ P5	252
					P3 ～ P4	121
					P4 ～ P5	131

E群（40・41号）

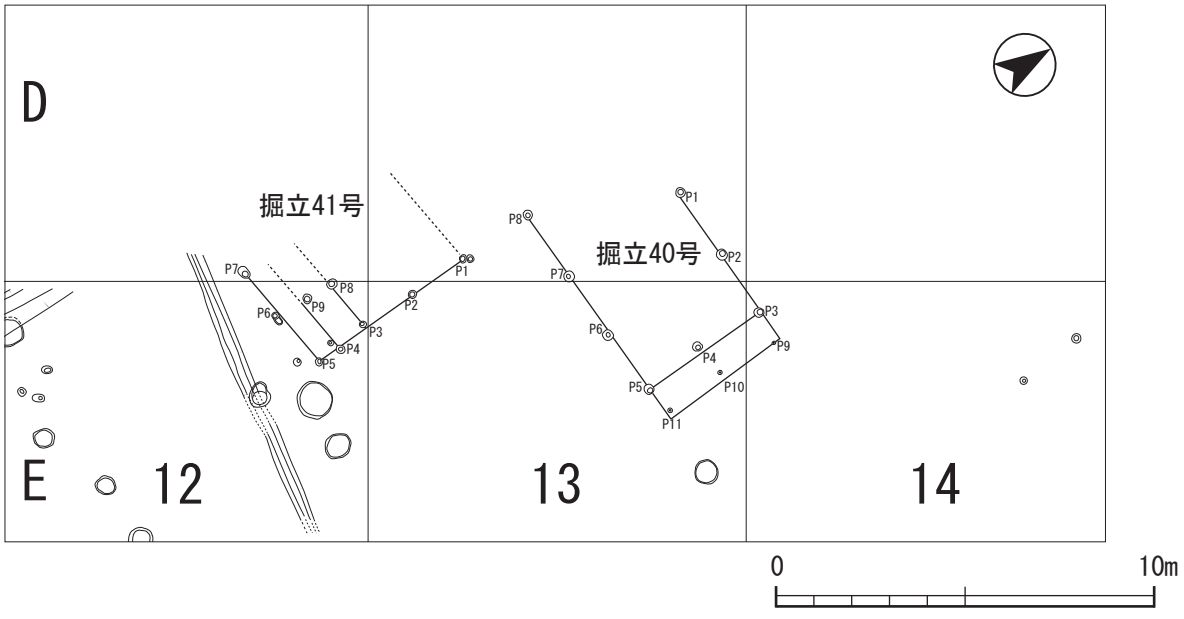
D・E－12 ～ 14区で検出された２棟の掘立柱建物跡で構成される。西側の調査区境で検出されており，調査区外にさらに建物群が広がる可能性がある。

掘立柱建物跡40号（第156図）

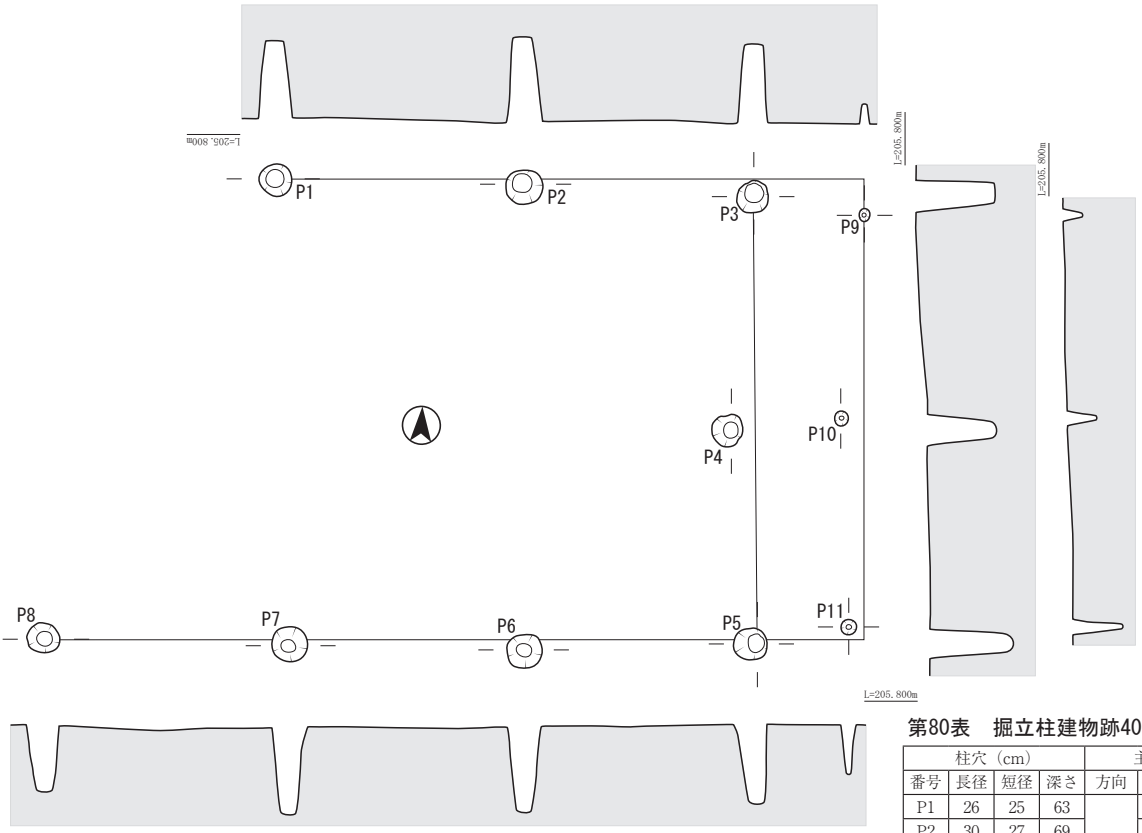
D・E－13・14区で検出された桁行３間，梁行２間の母屋の１面に庇がつく掘立柱建物跡である。一部調査区外に伸びている。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が565cm×355cmで，庇を含めると644cm×355cmである。柱穴の深さは16 ～ 69cmである。

掘立柱建物跡41号（第156図）

D・E－12・13区で検出された桁行４間，梁行２間の掘立柱建物跡である。一部調査区外に伸びている。検出面はⅣa層である。平面の規模は467cm×305cmで，柱穴の深さは14 ～ 38cmである。



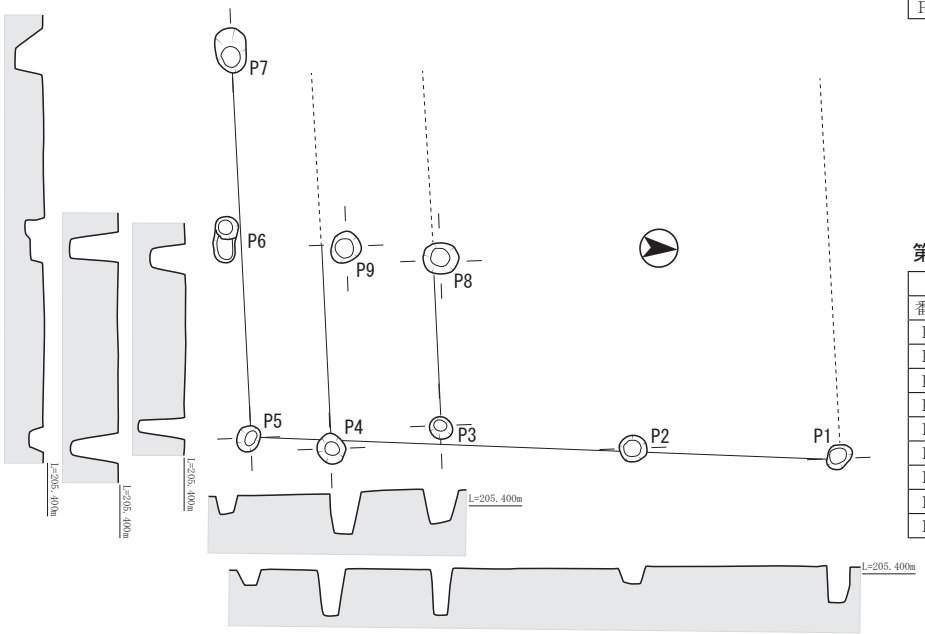
第155図　中世の掘立柱建物跡配置図５（E群）



掘立柱建物跡40号

第80表　掘立柱建物跡40号計測表

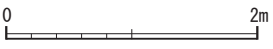
柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	26	25	63	桁行（cm）	P3 ～ P1	382
P2	30	27	69		P3 ～ P2	181
P3	26	23	65		P2 ～ P1	200
P4	28	24	55		P9 ～ P1	466
P5	27	26	64		P9 ～ P3	91
P6	29	27	69		P5 ～ P8	565
P7	31	29	69		P5 ～ P6	180
P8	27	24	53		P6 ～ P7	187
P9	12	8	16		P7 ～ P8	199
P10	13	11	25		P11 ～ P8	644
P11	13	13	39		P11 ～ P5	80
				梁行（cm）	P9 ～ P11	322
					P9 ～ P10	162
					P10 ～ P11	165
					P3 ～ P5	355
					P3 ～ P4	187
					P4 ～ P5	170



掘立柱建物跡41号

第81表　掘立柱建物跡41号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	38	25	30	桁行（cm）	P1 ～ P5	467
P2	23	22	15		P1 ～ P2	163
P3	20	17	37		P2 ～ P3	153
P4	25	23	38		P3 ～ P4	88
P5	22	19	14		P4 ～ P5	65
P6	37	18	16		P8 ～ P9	76
P7	36	25	22		P9 ～ P6	95
P8	28	26	30	梁行（cm）	P5 ～ P7	305
P9	26	22	35		P5 ～ P6	164
					P6 ～ P7	141
					P4 ～ P9	160
					P3 ～ P8	135



第156図　中世の掘立柱建物跡40・41号

その他（42～49号）

Ａ～Ｅ群には該当しない８棟の掘立柱建物跡である。

掘立柱建物跡42号（第158図）

Ｉ・Ｊ－15・16区で検出された桁行２間，梁行２間の母屋に庇が１面付く掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が559cm×423cmで，庇を含めると727cm×427cmである。柱穴の深さは14～42cmである。

掘立柱建物跡43号（第159図）

Ｋ－14・15区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は415cm×317cm，柱穴の深さは22～39cmである。

掘立柱建物跡44号（第159図）

Ｌ－17区で検出された桁行２間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は412cm×380cm，柱穴の深さは６～37cmである。

掘立柱建物跡45号（第160図）

Ｆ・Ｇ－６区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡の一辺に庇がつく掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が651cm×383cmで，庇を含めると814cm×383cmである。柱穴の深さは21～60cmである。

掘立柱建物跡46号（第161図）

Ｄ－22区で検出された桁行２間，梁行２間の総柱の掘立柱建物跡である。調査区境で検出されており，本来の間数は多い可能性がある。検出面はⅣa層である。平面の規模は403cm×332cm，柱穴の深さは25～67cmである。

掘立柱建物跡47号（第161図）

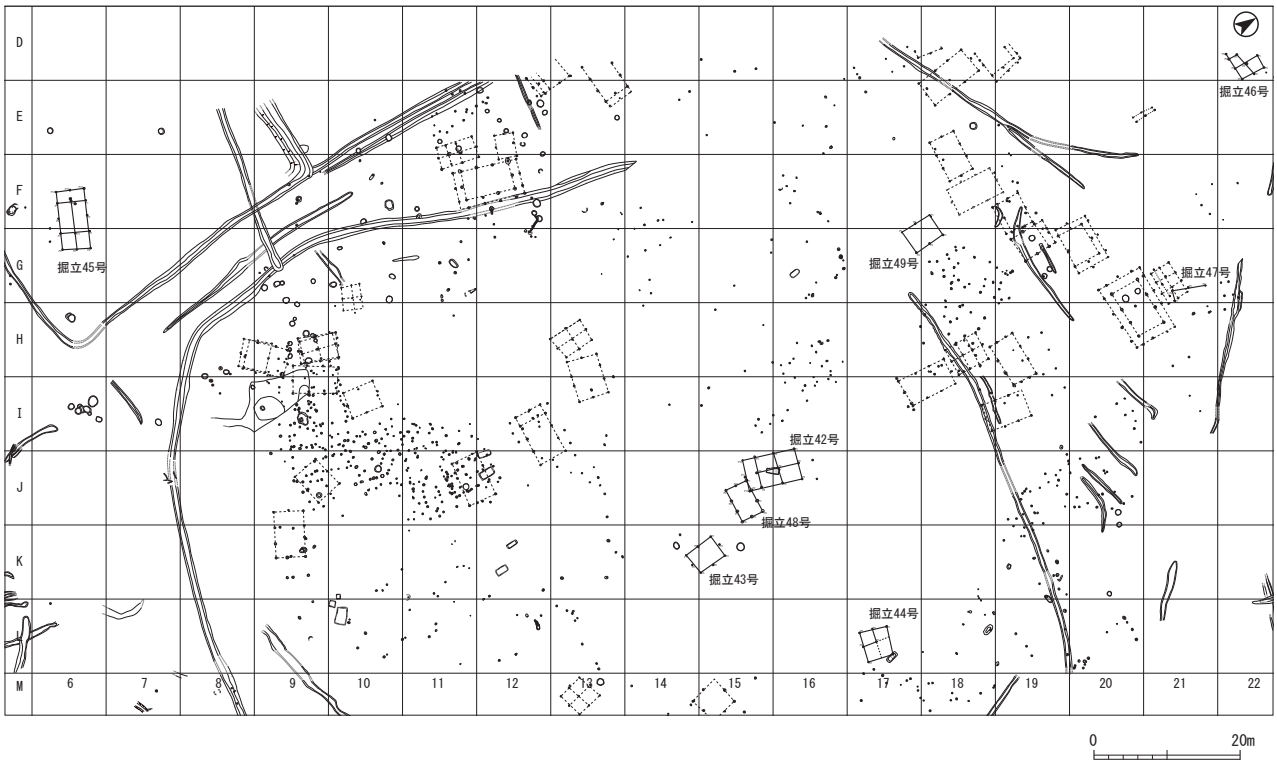
Ｇ－21区で検出された桁行２間，梁行１間の掘立柱建物跡である。梁行の幅が狭いため庇部分の可能性もある。検出面はⅣa層である。平面の規模は449cm×142cm，柱穴の深さは８～34cmである。

掘立柱建物跡48号（第162図）

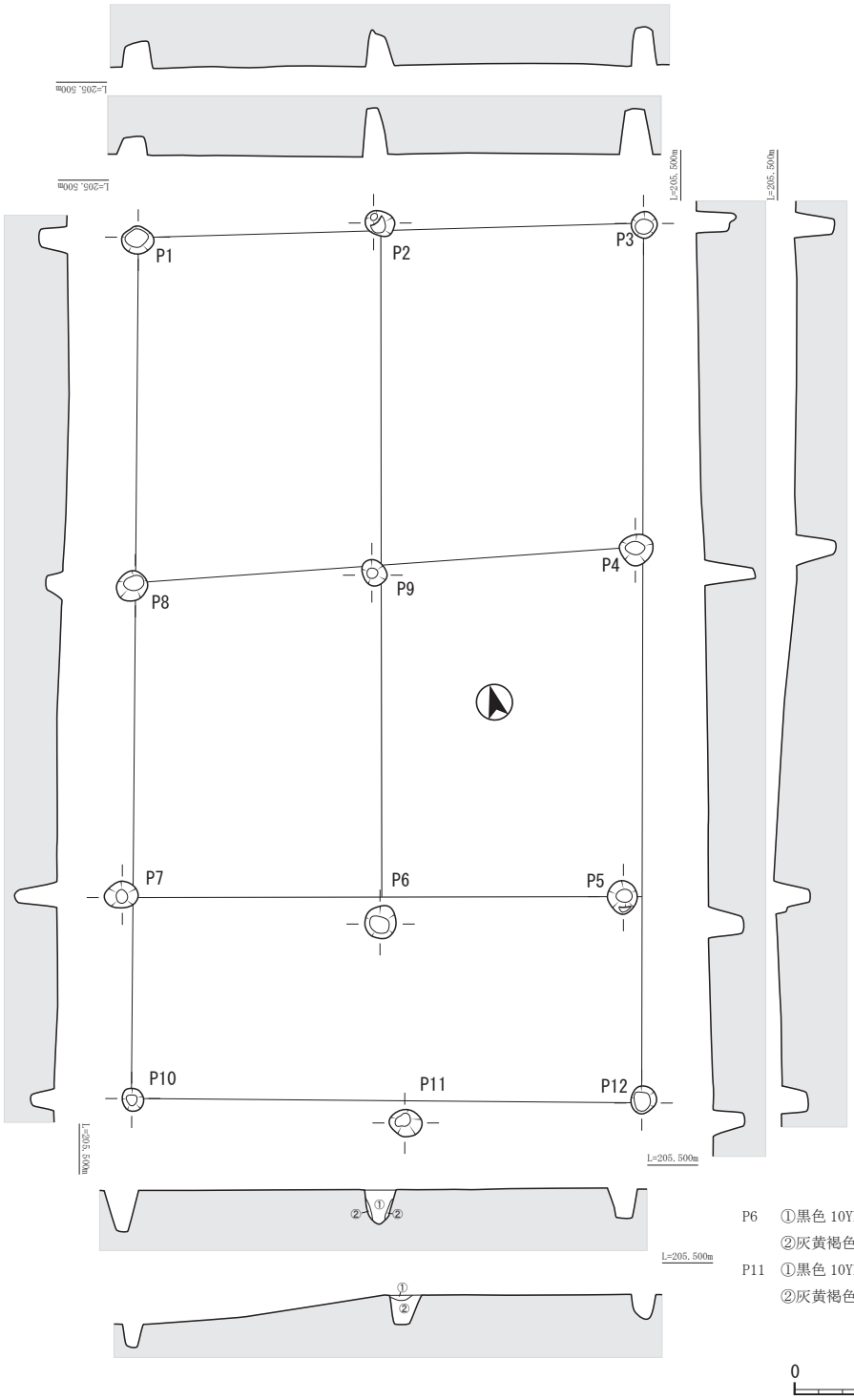
Ｊ－15区で検出された桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は477cm×304cmで，柱穴の深さは30～62cmである。

掘立柱建物跡49号（第162図）

Ｆ・Ｇ－17・18区で検出された桁行２間，梁行１間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は440cm×335cmで，柱穴の深さは10～39cmである。



第157図　中世の掘立柱建物跡配置図６（その他）



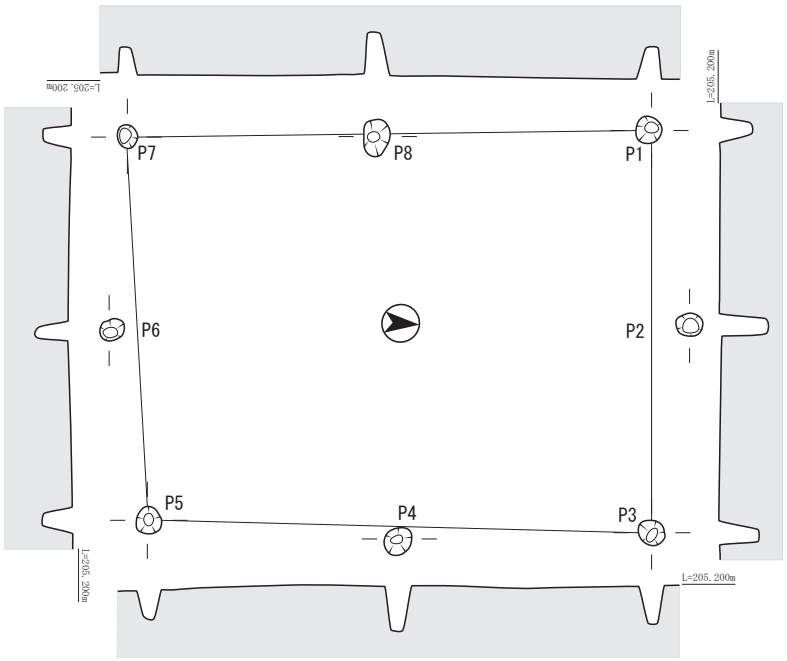
P6　①黒色 10YR2/1 粘質土
　　②灰黄褐色 10YR4/2 粘質土
P11　①黒色 10YR3/1 粘質土
　　②灰黄褐色土 10YR4/2 粘質土

0　2m

第82表　掘立柱建物跡42号計測表

柱穴（cm）				主軸		N17° E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	27	22	21	桁行（cm）	P1 ～ P7	545
P2	25	21	29		P1 ～ P8	286
P3	22	21	31		P8 ～ P7	258
P4	28	26	31		P1 ～ P10	715
P5	27	25	27		P7 ～ P10	171
P6	28	26	30		P3 ～ P5	559
P7	29	22	35		P3 ～ P4	268
P8	26	24	14		P4 ～ P5	291
P9	22	21	42		P3 ～ P12	727
P10	19	18	19		P5 ～ P12	170
P11	27	22	24		P2 ～ P6	588
P12	24	21	20		P2 ～ P9	294
					P9 ～ P6	292
				梁行（cm）	P1 ～ P3	423
					P1 ～ P2	203
					P2 ～ P3	220
					P7 ～ P5	418
					P7 ～ P6	217
					P6 ～ P5	203
					P8 ～ P4	421
					P8 ～ P9	202
					P9 ～ P4	219
					P10 ～ P12	427
					P10 ～ P11	228
					P11 ～ P12	200

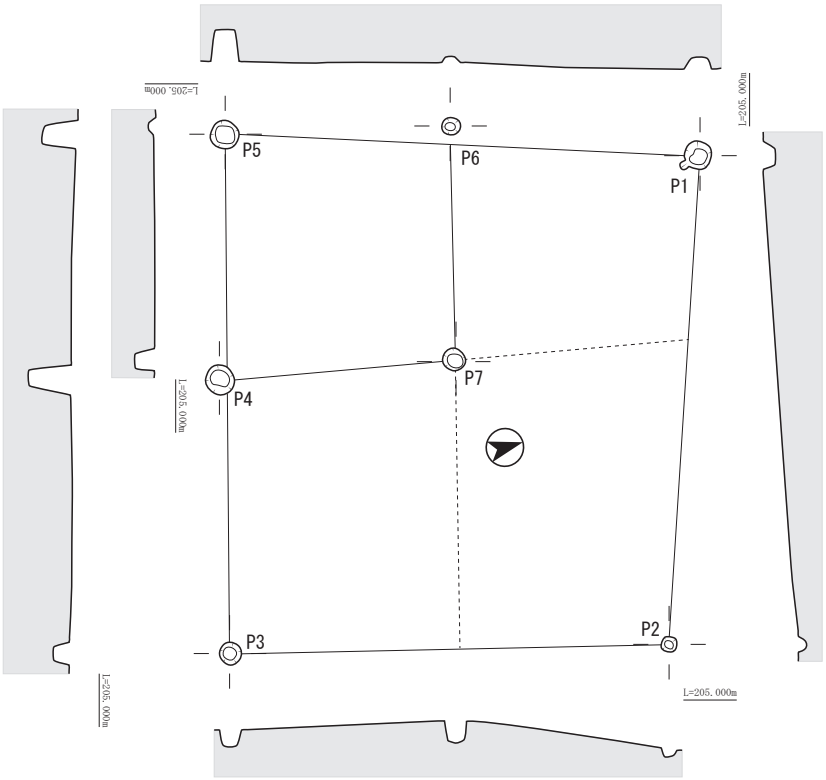
第158図　　中世の掘立柱建物跡42号



掘立柱建物跡43号

第83表　掘立柱建物跡43号計測表

柱穴（cm）				主軸		N6° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	22	21	26	桁行（cm）	P1 ～ P7	415
P2	20	19	39		P1 ～ P8	216
P3	22	19	31		P8 ～ P7	199
P4	24	20	36		P3 ～ P5	403
P5	23	20	24		P3 ～ P4	200
P6	22	17	27		P4 ～ P5	203
P7	19	17	22	梁行（cm）	P1 ～ P3	317
P8	30	22	37		P1 ～ P2	156
					P2 ～ P3	167
					P7 ～ P5	306
					P7 ～ P6	154
					P6 ～ P5	154



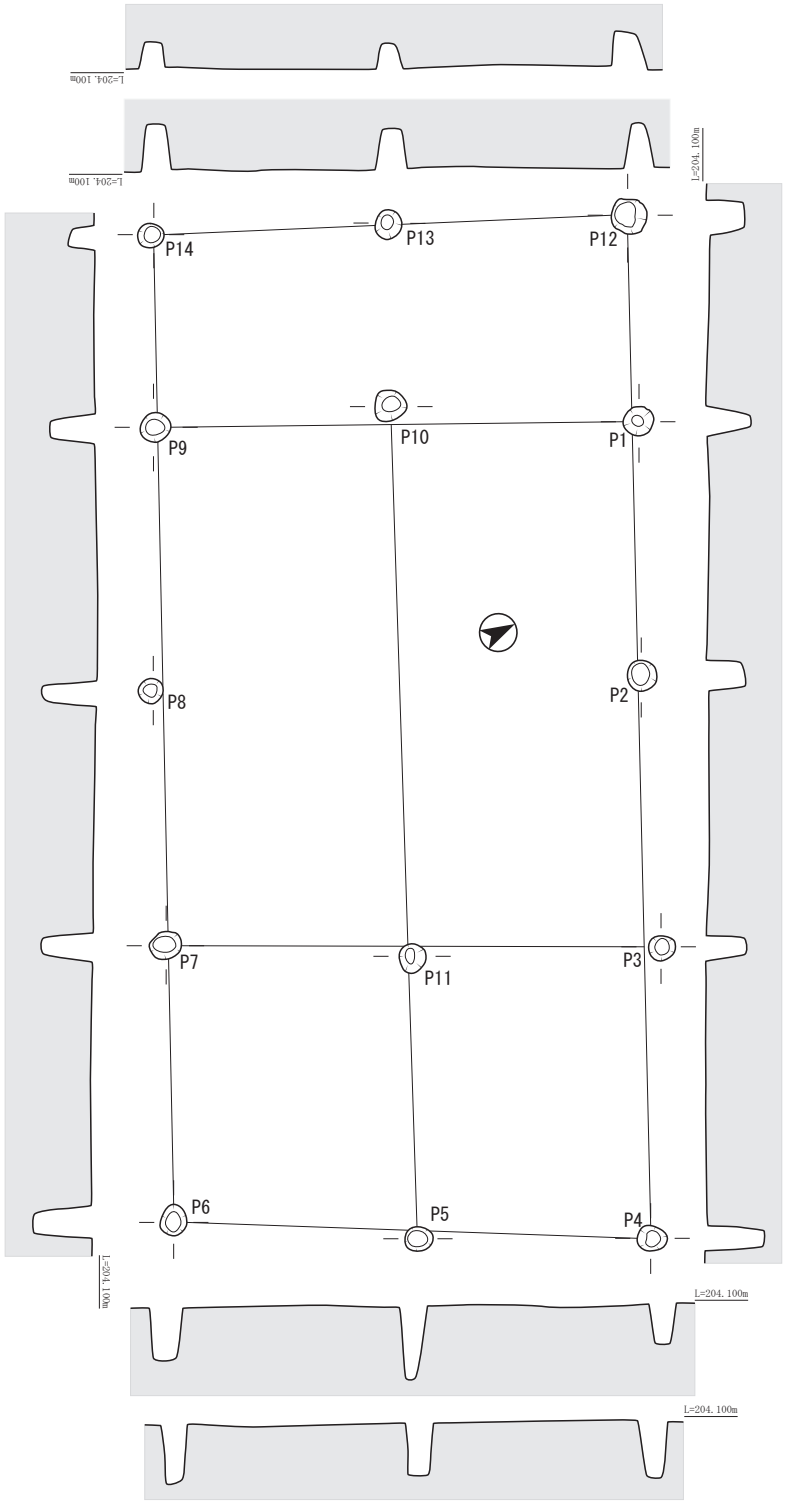
掘立柱建物跡44号

第84表　掘立柱建物跡44号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	23	22	10	桁行（cm）	P1 ～ P2	388
P2	14	12	9		P5 ～ P3	412
P3	18	17	14		P5 ～ P4	192
P4	25	23	37		P4 ～ P3	220
P5	24	22	29		P6 ～ P7	185
P6	15	14	6	梁行（cm）	P1 ～ P5	380
P7	19	17	17		P1 ～ P6	202
					P6 ～ P5	180
					P2 ～ P3	345
					P4 ～ P4	188



第159図　中世の掘立柱建物跡43・44号

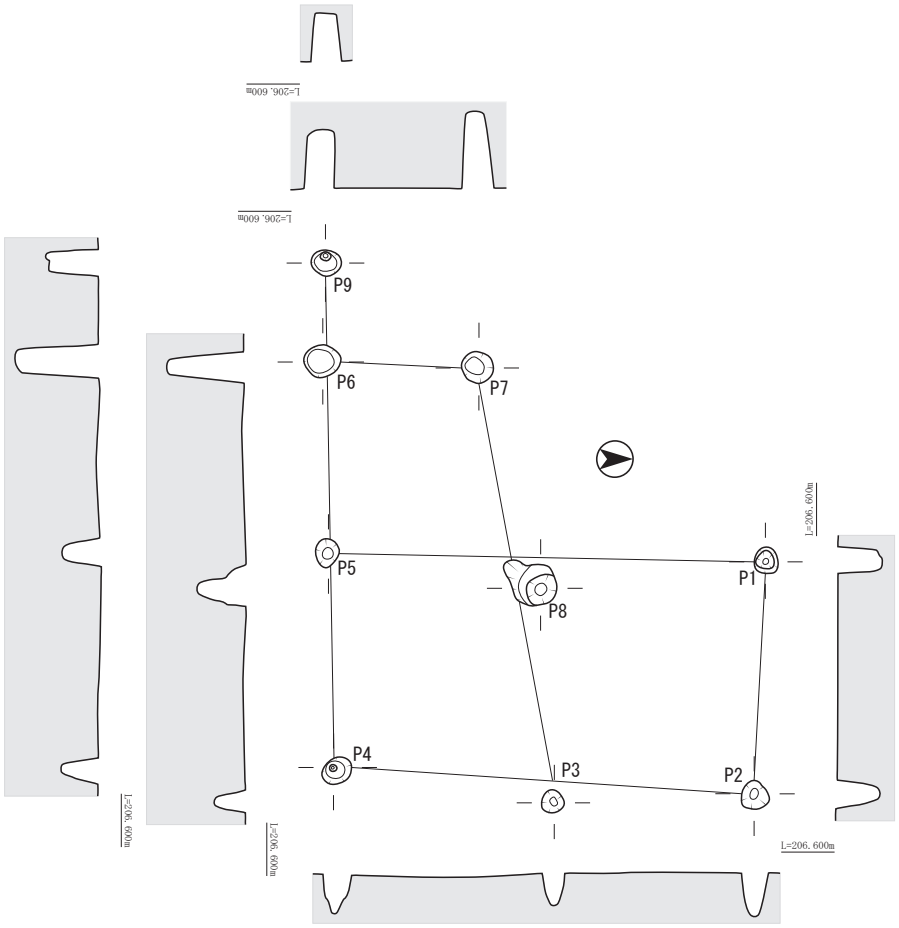


第85表　掘立柱建物跡45号計測表

柱穴（cm）				主軸		N64° W
No	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	25	24	36	桁行（cm）	P1 ～ P4	651
P2	26	25	30		P1 ～ P2	204
P3	22	20	33		P2 ～ P3	218
P4	25	22	49		P3 ～ P4	230
P5	24	21	44		P12 ～ P4	814
P6	27	22	47		P12 ～ P1	163
P7	26	22	42		P9 ～ P6	631
P8	20	20	45		P9 ～ P8	210
P9	26	25	37		P8 ～ P7	203
P10	27	26	33		P7 ～ P6	218
P11	24	22	60		P14 ～ P6	783
P12	30	29	30		P14 ～ P9	153
P13	24	22	21		P10 ～ P5	663
P14	22	20	22		P10 ～ P11	438
					P11 ～ P5	225
				梁行（cm）	P1 ～ P9	383
					P1 ～ P10	198
					P10 ～ P9	187
					P4 ～ P6	380
					P4 ～ P5	186
					P5 ～ P6	195
					P12 ～ P14	379
					P12 ～ P13	191
					P13 ～ P14	188
					P3 ～ P7	393
					P3 ～ P11	198
					P11 ～ P7	195

0　2m

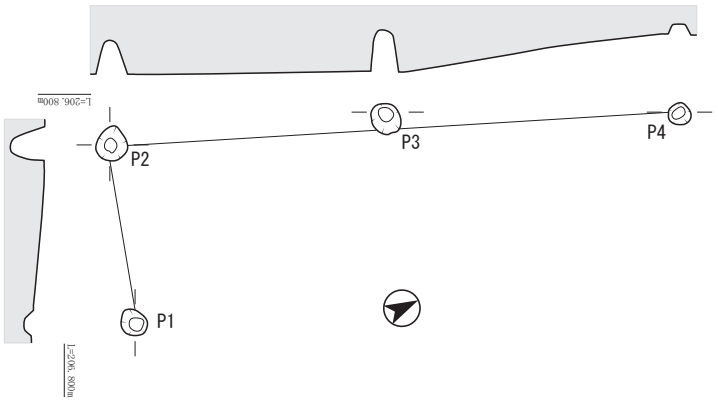
第160図　中世の掘立柱建物跡45号



掘立柱建物跡46号

第86表　掘立柱建物跡46号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	22	20	35	桁行（cm）	P9 ～ P4	403
P2	23	23	34		P9 ～ P6	78
P3	19	17	25		P6 ～ P5	150
P4	25	19	32		P5 ～ P4	174
P5	23	19	30		P1 ～ P2	188
P6	29	25	67		P7 ～ P3	352
P7	26	25	59		P7 ～ P8	185
P8	35	30	40		P8 ～ P3	170
P9	25	20	41	梁行（cm）	P2 ～ P4	332
					P2 ～ P3	159
					P3 ～ P4	173
					P1 ～ P5	349
					P1 ～ P8	182
					P8 ～ P5	170
					P7 ～ P6	123



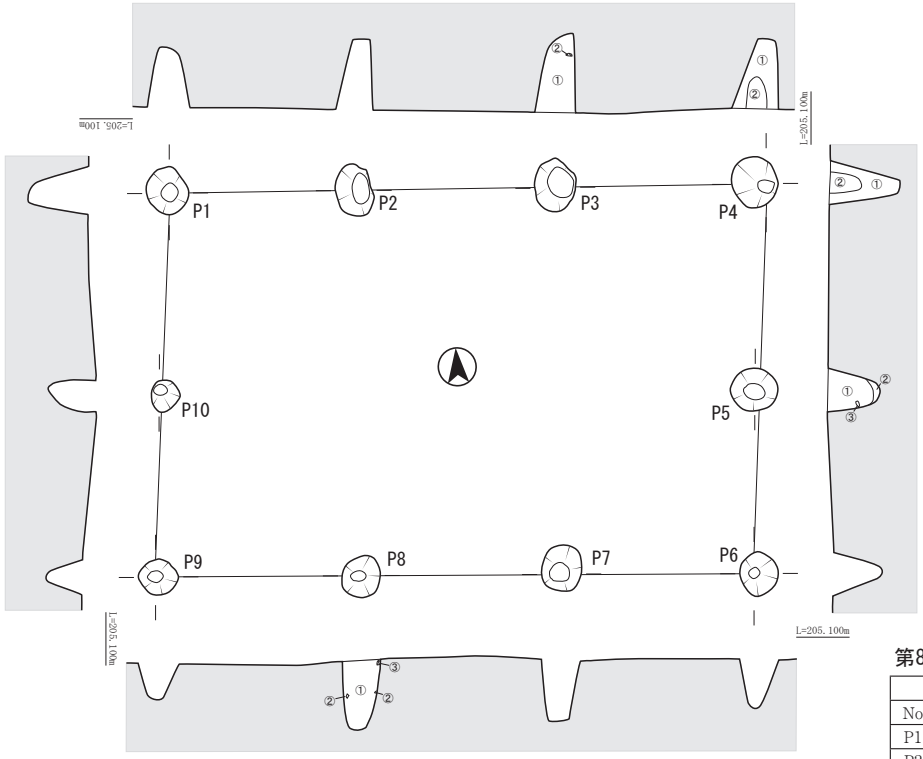
掘立柱建物跡47号

第87表　掘立柱建物跡47号計測表

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	23	20	8	桁行（cm）	P2 ～ P4	449
P2	26	24	28		P2 ～ P3	217
P3	26	24	34		P3 ～ P4	233
P4	18	17	9	梁行（cm）	P2 ～ P1	142

0　2m

第161図　中世の掘立柱建物跡46・47号

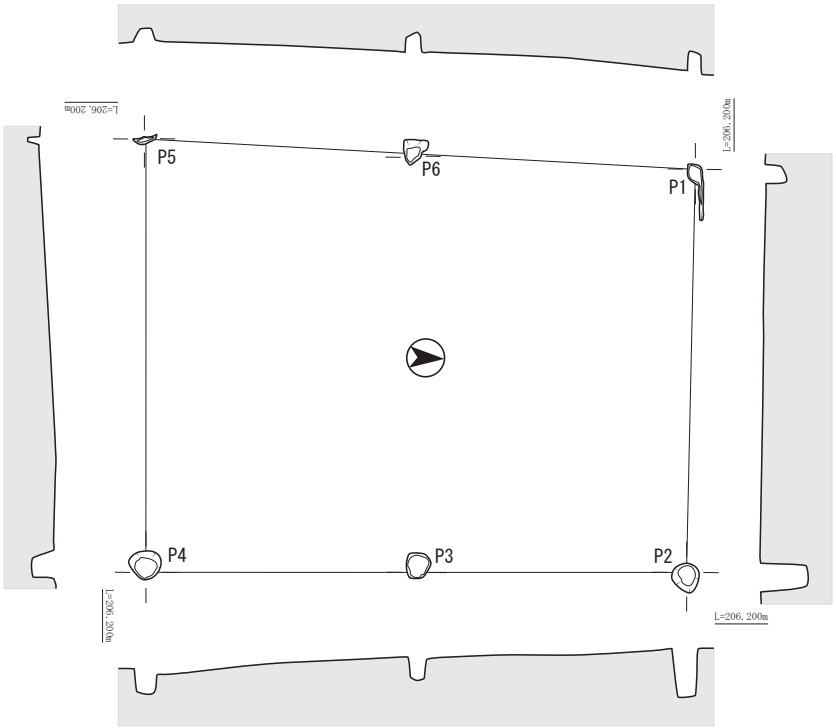


掘立柱建物跡48号

P3　①黒褐色土　②土器
P4　①黒褐色土
　　②粘性のある黒褐色土
P5　①黒褐色土　②黒褐色土　③土師器
P8　①黒褐色土　②炭　③土器

第88表　掘立柱建物跡48号計測表

柱穴（cm）				主軸		
No	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	37	32	47		P1 ～ P4	466
P2	42	28	55		P1 ～ P2	147
P3	42	32	62		P2 ～ P3	160
P4	40	36	55	桁行	P3 ～ P4	159
P5	37	33	42	（cm）	P9 ～ P6	477
P6	35	29	45		P9 ～ P8	160
P7	37	35	48		P8 ～ P7	158
P8	34	29	55		P7 ～ P6	157
P9	30	28	30		P1 ～ P9	300
P10	26	32	38		P1 ～ P10	160
				梁行	P10 ～ P9	149
				（cm）	P4 ～ P6	304
					P4 ～ P5	158
					P5 ～ P6	145



掘立柱建物跡49号

第89表　掘立柱建物跡49号計測表

柱穴（cm）				主軸		N88° E
No	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	43	12	18		P1 ～ P5	440
P2	24	21	39		P1 ～ P6	225
P3	21	18	17	桁行	P6 ～ P5	215
P4	25	23	20	（cm）	P2 ～ P4	430
P5	17	6	10		P2 ～ P3	214
P6	21	15	17		P3 ～ P4	215
				梁行	P1 ～ P2	319
				（cm）	P4 ～ P5	335

0　2m

第162図　中世の掘立柱建物跡48・49号

(3)　杭列（第163図）

杭列は３基確認されたが，作られた目的等詳細については不明である。

杭列１

Ｇ－21区，Ⅳａ層で，掘立柱建物跡２号と共に検出された。杭の間隔はほぼ一定で２ｍ程であった。掘立柱建物跡２号の検出面，柱穴の埋土（黒褐色土）が同様で，中世のものと判断した。また柱穴に平行していることから，この建物に付随する可能性が高い。しかし，杭痕の長径は20㎝弱，深さは10～30㎝で，掘立柱建物跡２号の柱穴間に並ぶことと埋土が同様であることを考えると柱穴とは用途が違うものと考える。

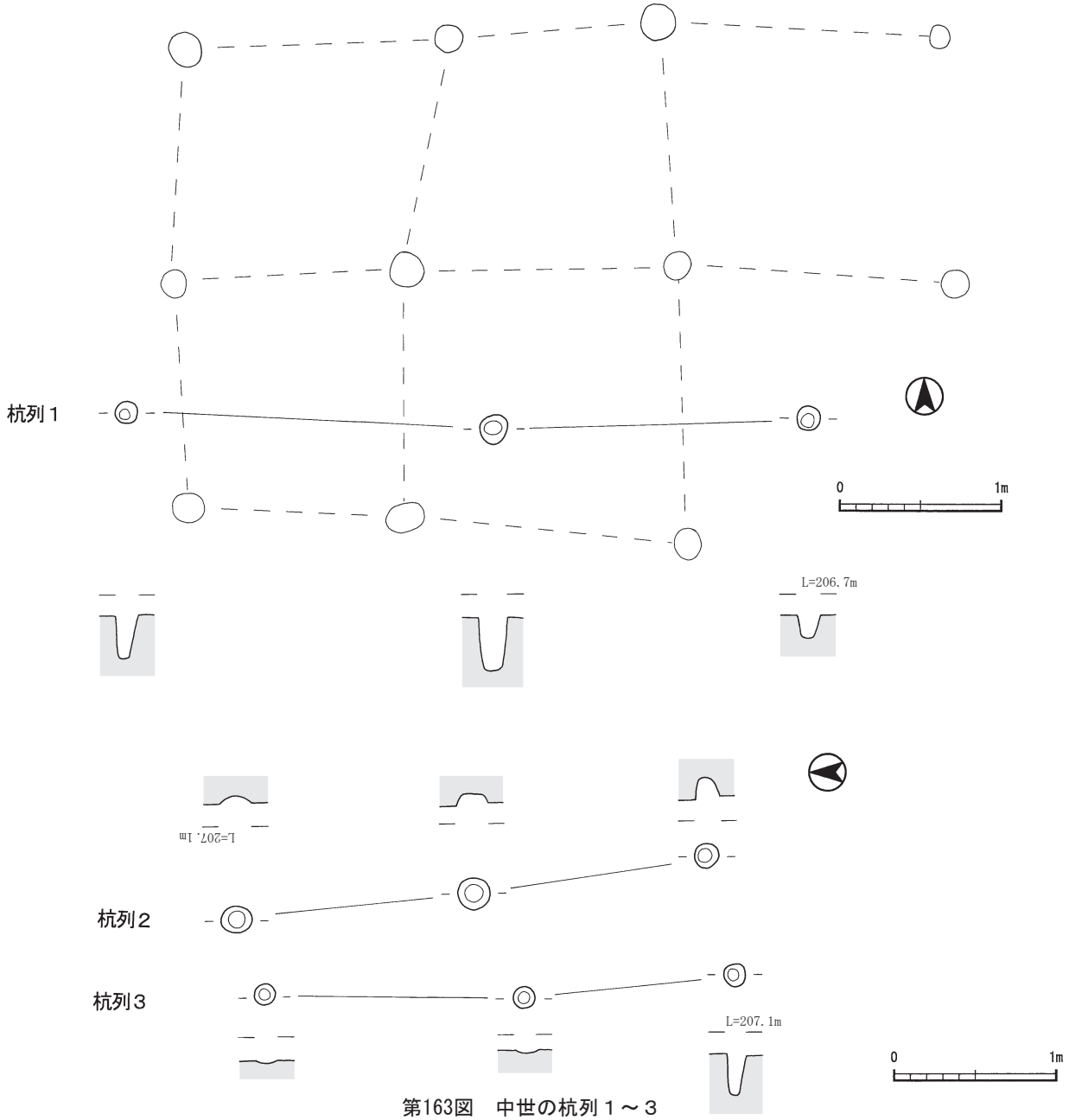
杭列２

Ｅ－21・22区，Ⅳａ層で検出された。埋土は黒褐色土であることから，中世のものと判断した。

杭痕の長径は15㎝程，深さは５～12㎝を測る。杭の間隔はほぼ一定で1.3ｍ程で，杭列３と50㎝程離れて平行，かつ南北に沿って並ぶ。周辺に同時期の掘立柱建物跡が検出されているが，関連性は低いと考える。

杭列３

Ｅ－21・22区，Ⅳａ層で検出された。杭列２と酷似しており，杭痕の長径は15㎝程，深さは２～13㎝を測る。杭の間隔はほぼ一定で1.3ｍ程であった。杭列の並びや埋土の色調（暗褐色土）から杭列２との関連性が高いと考える。



第163図　中世の杭列１～３

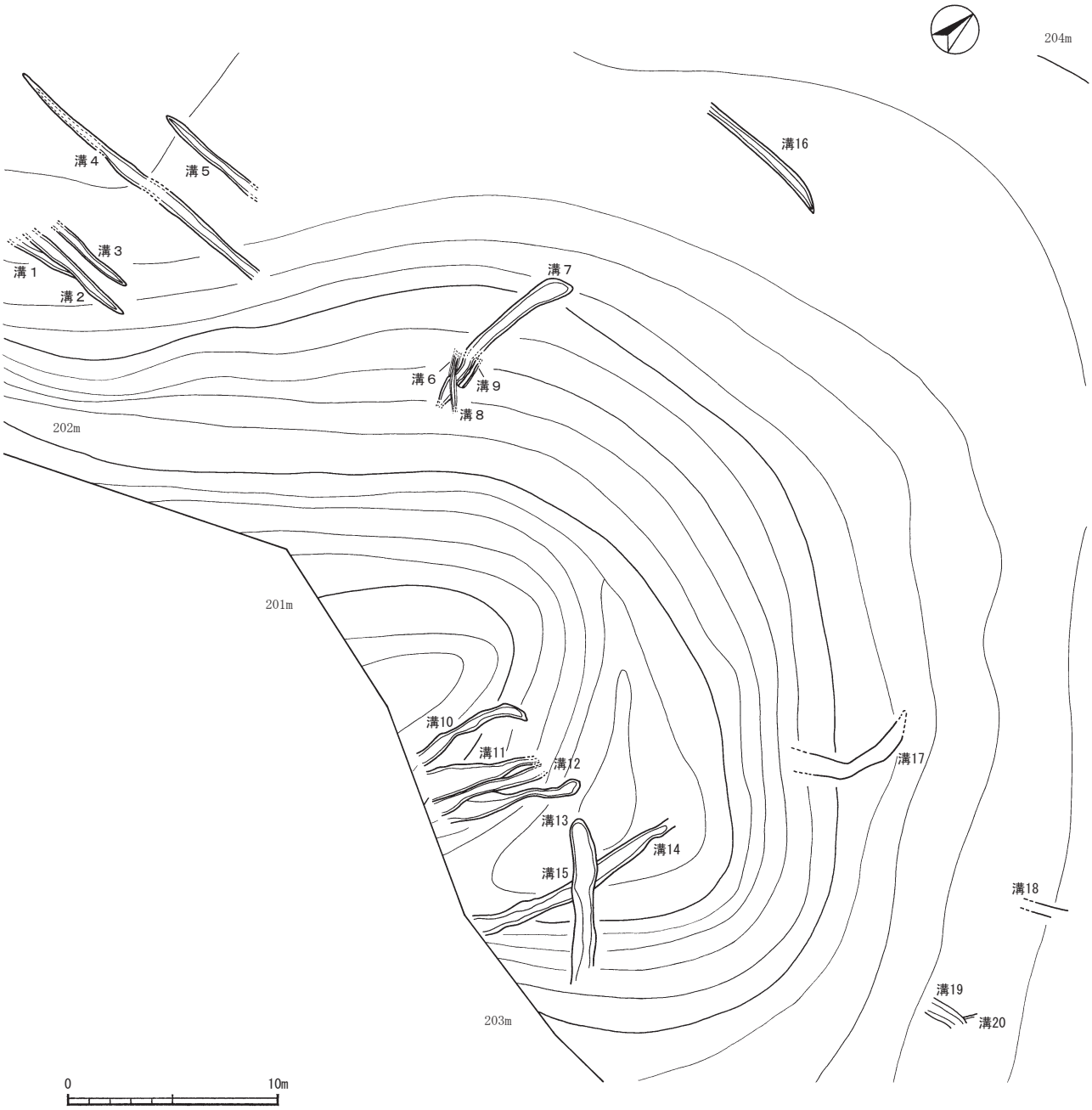
（４） 溝状遺構・古道跡

本遺跡の調査区内で検出された溝状遺構・古道跡66条を掲載した。時期的な判断は難しかったが，埋土からほぼ中世のものと考えられたため，ここに掲載した。

溝状遺構１（第165図）

調査区の最も西に位置している。西側は標高が高く，東側の地形に合わせて下っている。

Ⅰ－３区Ⅳ層を掘り下げたところで検出された。幅55cm，深さ12cmの溝である。埋土はⅢ層土とⅣａ層土が混ざった黒色土である。



第164図　中世の溝状遺構配置図１（溝１～20）

溝状遺構２（第165図）

Ⅰ－３区から４区で溝１を切って検出された。東へ延びながら先細りになっている。埋土はⅢａ層土の黒色土で，その下にⅢｂ層土の暗茶褐色土がみられた。

溝状遺構３（第165図）

溝２と隣あって平行に延びている。Ⅰ－４区で削平されていたⅣａ層上面で検出された。溝２と比較するとやや短いが，ゆるやかに東方向へ延びている。東端は削平により消失している。

幅は25～44cm，深さ４～９cmを測り，長さ4.5mで断面形状は浅皿型を呈している。埋土はⅢａ層土の黒色土の下にⅣａ層土と思われる茶褐色土がみられた。

溝状遺構４（第166図）

Ｈ・Ⅰ－４区Ⅳａ層で検出された。長さは約12mを測り，東方向へ延びている。埋土はⅢｃ層土の黒褐色土の下にⅣａ層土の茶褐色土がみられた。

溝状遺構５（第166図）

東側に下り始める平坦面で，略東方向へ直線的に延びる溝である。Ｈ・Ⅰ－４区Ⅲｂ層上面で検出された。東側へ向かって下っている。幅は20～40cm前後で深さは11～26cmである。断面の形状はボウル状または深皿状を呈しており，埋土は黄色土混じりの黒褐色土が主体である。

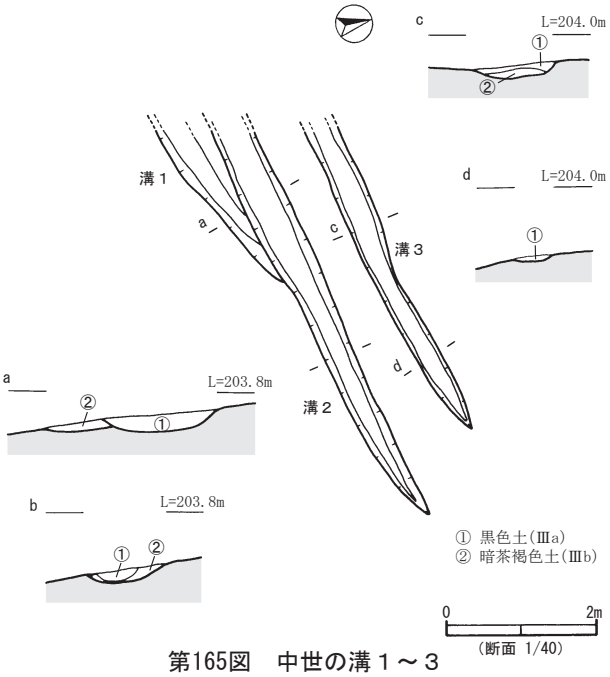
またその上位を黒色土が覆っており，黒色土に掘り込まれた部分は埋土と判断が難しいため，掘込み面は検出面よりやや上方にあると思われる。埋土中では，遺物が出土しているが，炭化物は出土していない。

溝状遺構６～９（第167図）

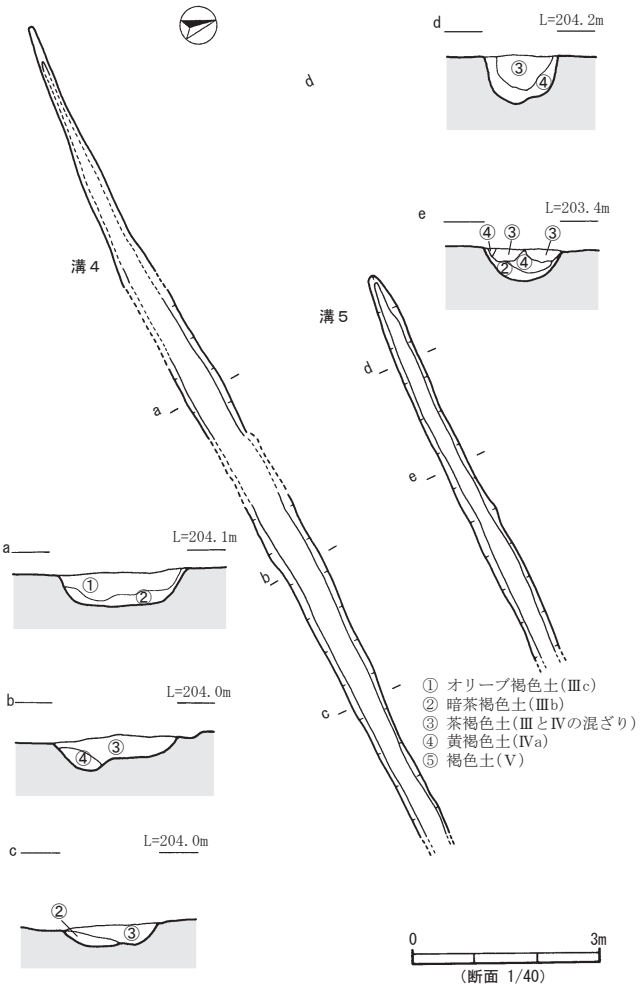
溝６はⅠ－５区Ⅳａ層上面で検出された。台地から東西方向へ東側に向かって下りながら直線上に延びている。溝の底面には硬化面がみられたため，溝よりは古道としての役割が大きいと思われる。

溝７はⅠ－５・６区Ⅲｂ層上面で検出された。北側方向へ延びており，立地する台地の南端からⅠ－５区からⅠ－６区方向へゆるやかに下っている。Ⅰ－６区側に位置する溝の北端は近現代の削平により消失し，Ⅰ－５区側に位置する溝の南端は未調査区方向へ延びている。幅は40～100cm程度である。埋土は検出面が浅いが実際の掘り込み面は最深部から20cm程度上方にあったと思われる。埋土中からは遺物が３点出土している。

溝８は溝６・７を斜めに切っているが，幅も長さも小さいものである。



第165図　中世の溝１～３



第166図　中世の溝４・５

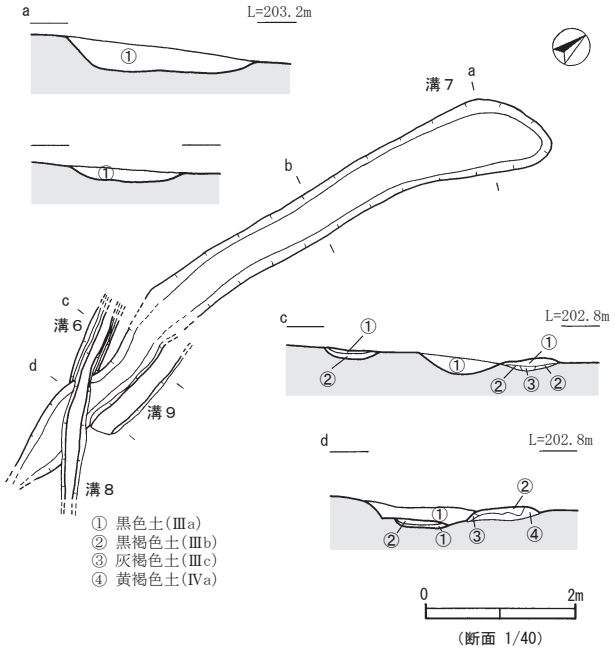
溝９は黒褐色の硬化面が北側へ行くにつれて薄くなっている。北側は黄褐色の踏み固まった硬化面が残存している。溝６を溝７が切っており，溝８と溝９がその後にできたものである。

溝状遺構10～15（第168図）

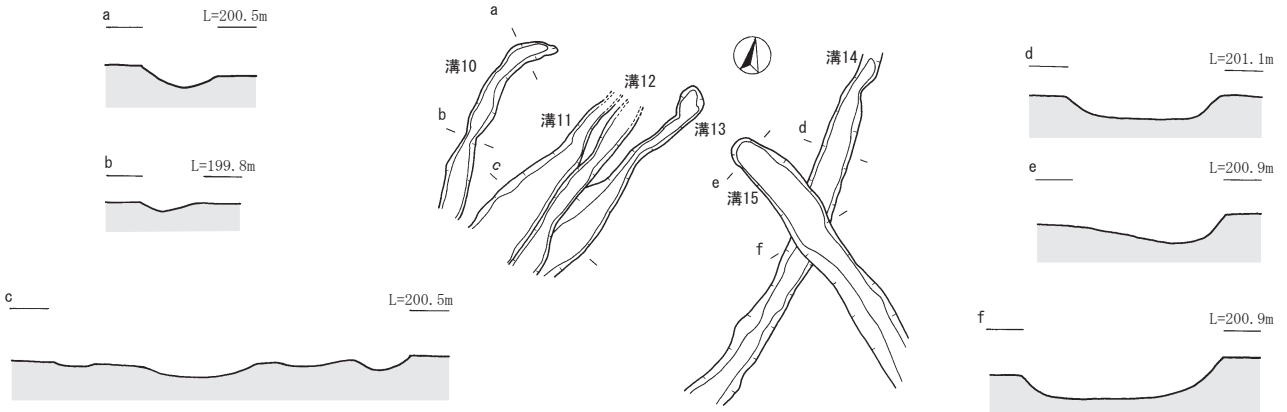
Ｋ－５区・Ｌ－５・６区Ⅳａ層で検出された。調査区から北側へ延びている溝である。11・12・13は溝の幅が大きい状態から，先端は細くなっている。14・15も同様に幅が大きく，溝の長さも長い印象をうける。13は12に切られており，14も15に切られていることから前後関係は確認できるが，これらの溝の詳細な時期は判断できなかった。

溝状遺構16（第169図）

Ｉ－７区Ⅳａ層で検出された。近くには溝24が位置している。溝の幅や深さからつながる可能性も考えられたが，確定できなかった。埋土は黒褐色土でⅢａ層土よりは少し茶褐色を帯びている。黒色土に近いがⅢａ層土とは異なり，中世のなかでも少し古い時期のものかと思われる。



第167図　中世の溝６～９



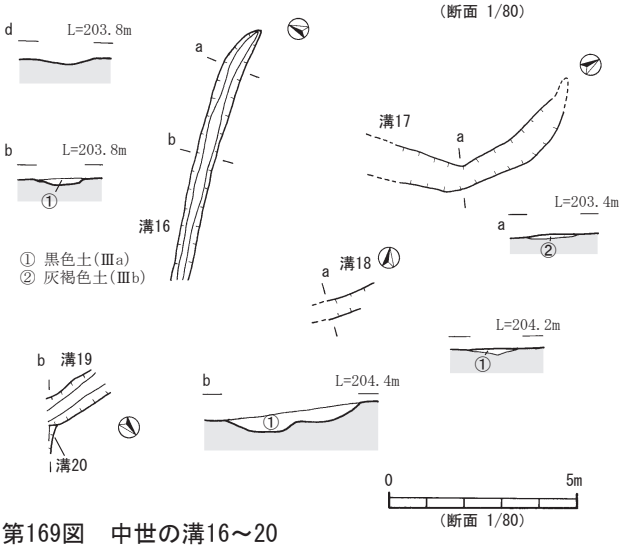
第168図　中世の溝10～15

溝状遺構17・18（第169図）

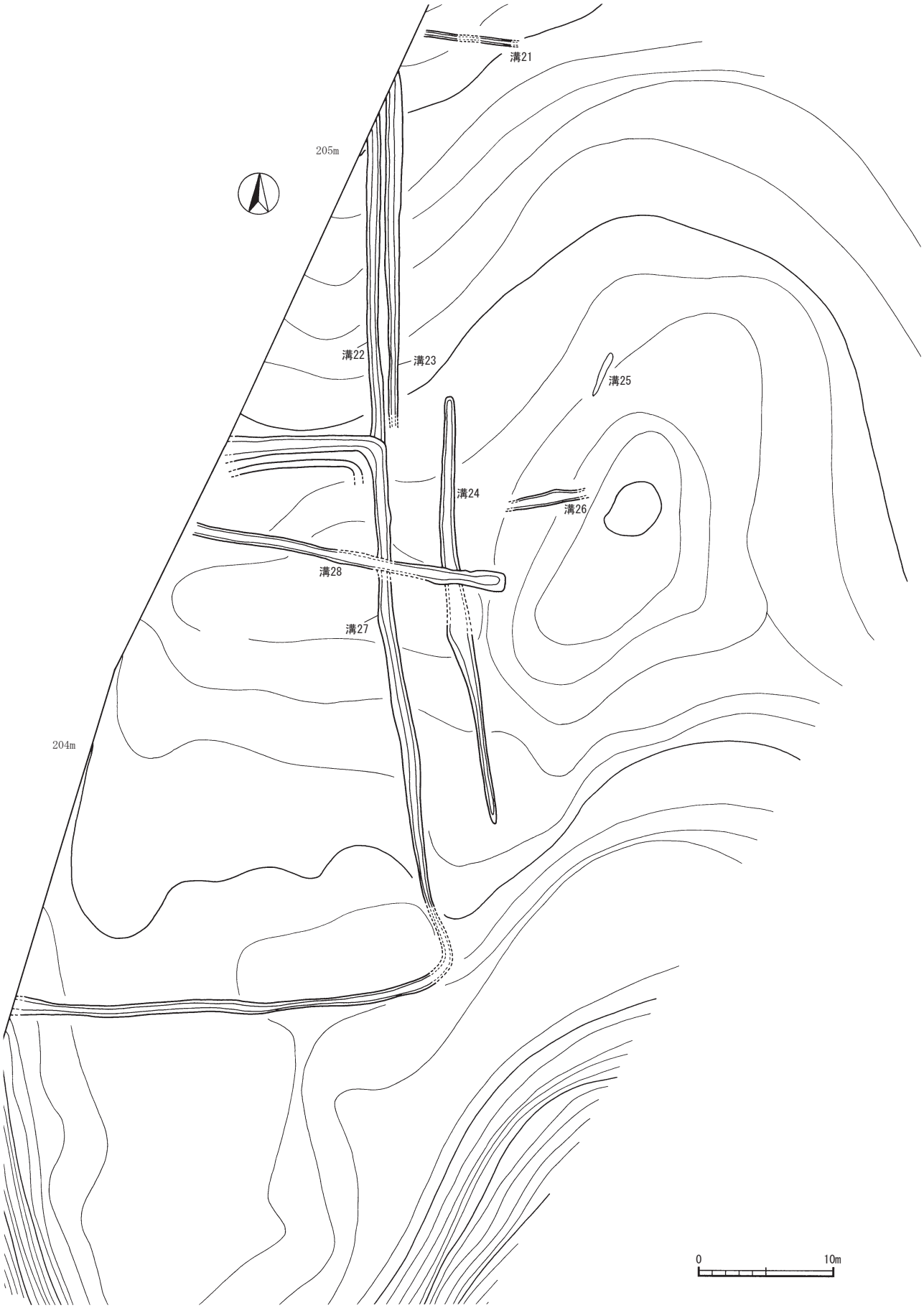
溝17はＫ・Ｌ－６・７区Ⅳａ層で検出された。溝の南側は削平によってなくなり，北側に向かうほど形状がとらえられなかった。埋土は硬化面を含む黒褐色土と灰褐色土がⅣａ層上面で帯状に検出されている。溝18も同様にＬ・Ｍ－７・８区Ⅳａ層で検出された。

溝状遺構19・20（第169図）

Ｍ－７区Ⅲａ層で検出された。溝19は東側の調査区より西側に向かって下り，溝20は北東方向から溝19に合流している。埋土は黒色土を主体としているが，両方の切り合いがみられないことから，ほぼ同時期のものと思われる。黒色土の埋土中からの出土遺物はみられないが，周辺から白磁碗の底部小片が出土している。



第169図　中世の溝16～20



第170図　中世の溝状遺構配置図２（溝21～28）

溝状遺構21～23（第171図）

溝21はＥ－12区で検出された。幅は37～48㎝と小さく，深さも６㎝程である。周りの溝よりも細く，他とは違う印象である。埋土は黒色土の下にⅣａ層土やⅢｂ層土の柔らかな暗茶褐色土である。

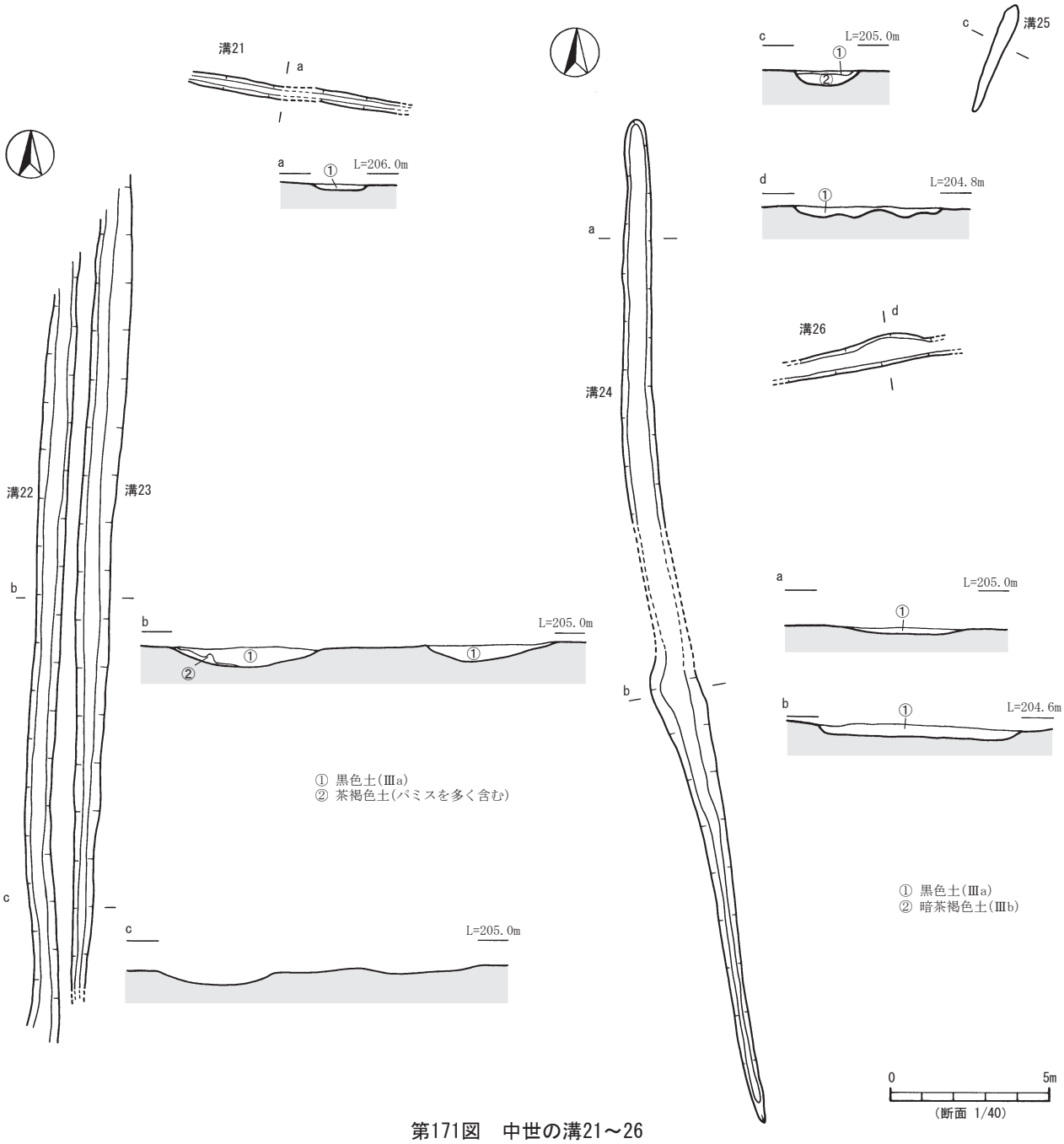
溝22・23はＥ－10・11区で検出された。溝22は溝27の区画から直線状に延びており，それに平行して溝23が位置している。どちらも幅と長さがほぼ同様で，埋土はⅢａ層土に近い黒色土である。

溝状遺構24（第171図）

Ｆ～Ｈ－７～10区Ⅳａ層で検出された。溝27と間隔をあけて平行に位置し，両端は先細りになっている。溝27と同様に溝28に切られているため，溝27と同時期のものかと考えられる。深さは２～10㎝を測る。埋土はⅢａ層土とⅣａ層土の黒褐色土である。

溝状遺構26（第171図）

Ｇ－９・10区Ⅳａ層で検出された短い溝である。幅は付近の溝24と同じ程度で，溝28と同様に東方向へ伸びている。両端は途切れており，隣接する溝との方向も異なるため，溝どうしのつながりは確認できなかった。



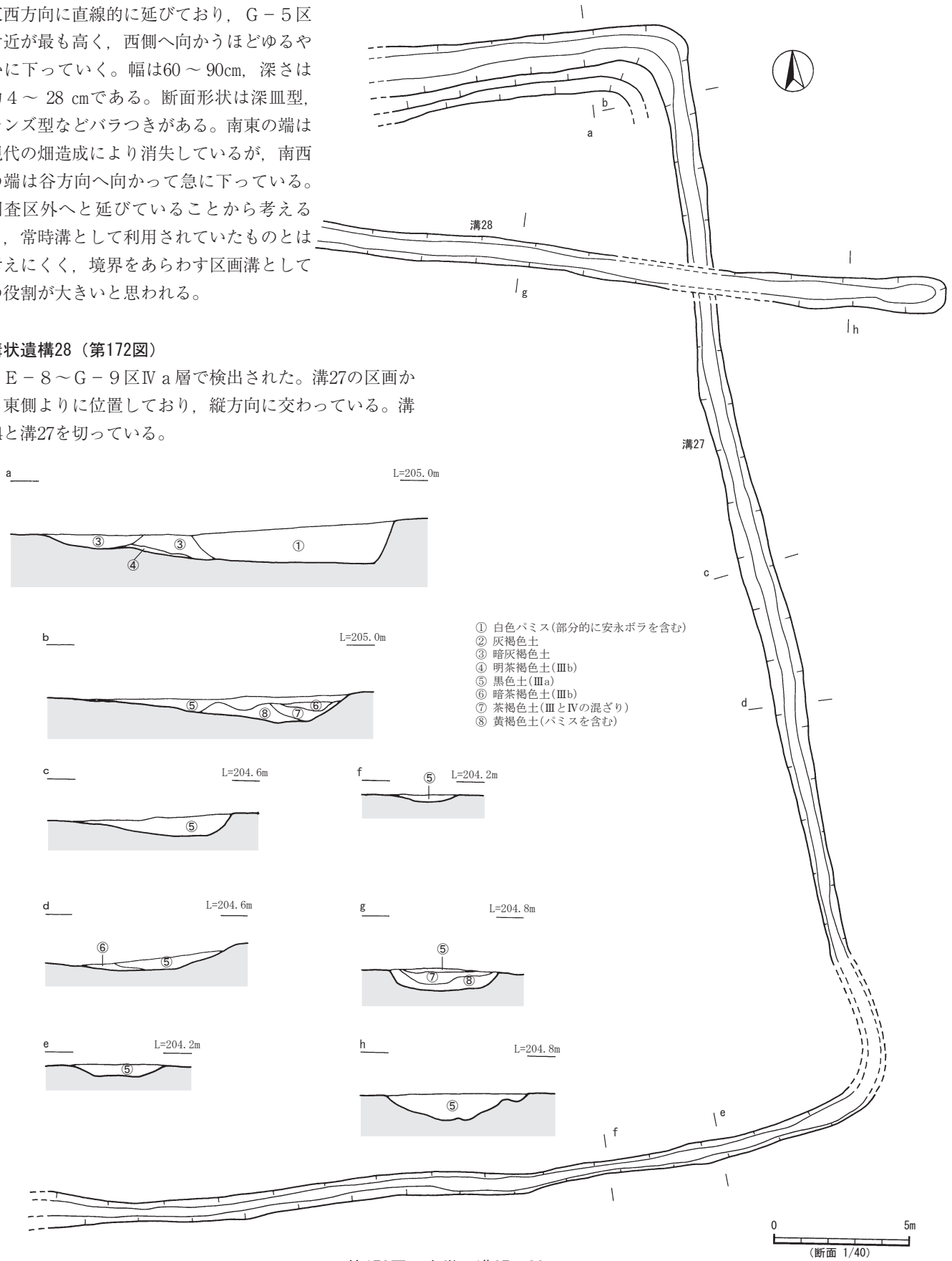
第171図　中世の溝21～26

溝状遺構27（第172図）

Ｆ～Ｈ－４～６区Ⅳａ層で検出された。東西方向に直線的に延びており，Ｇ－５区付近が最も高く，西側へ向かうほどゆるやかに下っていく。幅は60～90cm，深さは約４～28 cmである。断面形状は深皿型，レンズ型などバラつきがある。南東の端は現代の畑造成により消失しているが，南西の端は谷方向へ向かって急に下っている。調査区外へと延びていることから考えると，常時溝として利用されていたものとは考えにくく，境界をあらわす区画溝としての役割が大きいと思われる。

溝状遺構28（第172図）

Ｅ－８～Ｇ－９区Ⅳａ層で検出された。溝27の区画から東側よりに位置しており，縦方向に交わっている。溝24と溝27を切っている。



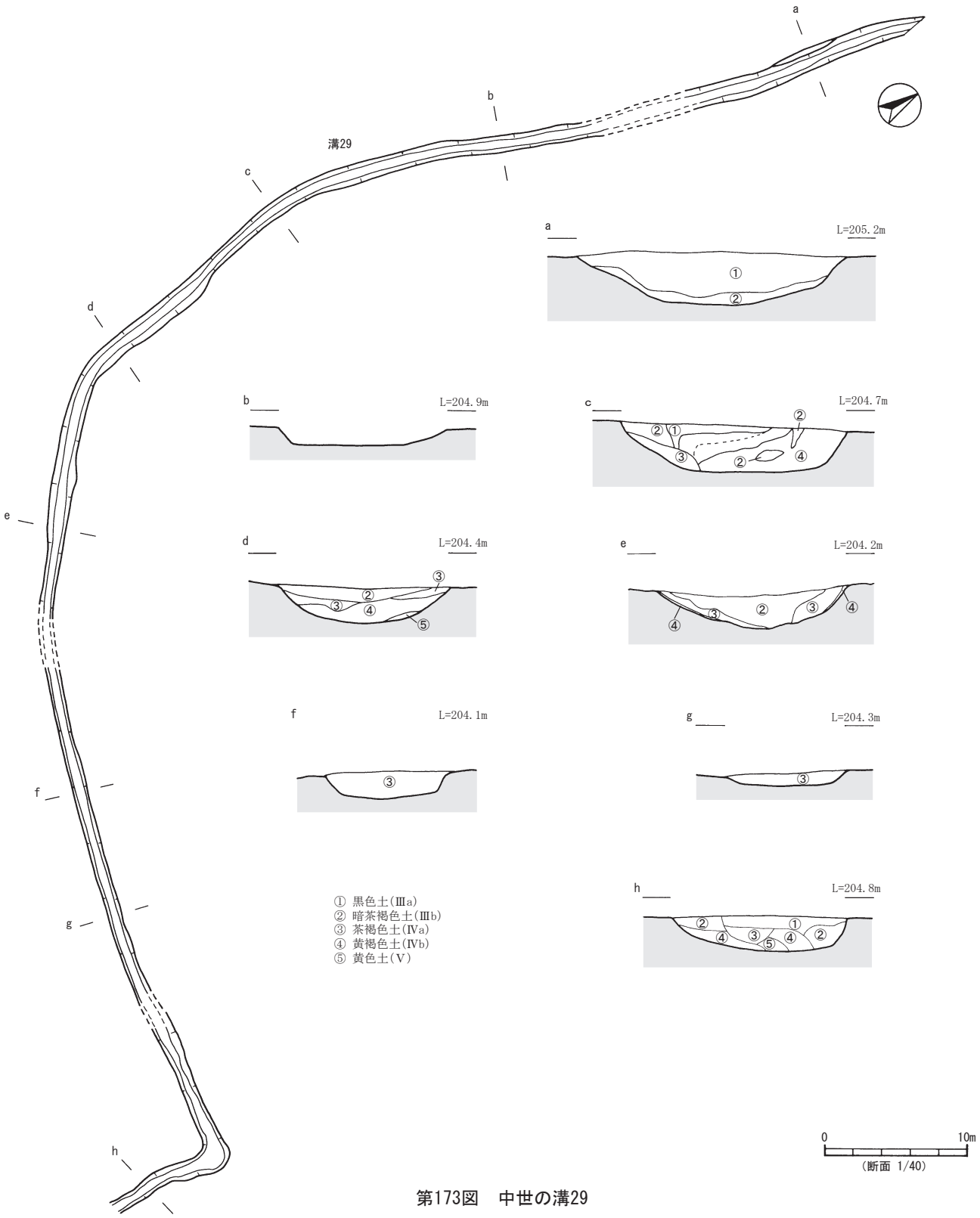
第172図　中世の溝27・28

溝状遺構29（第173図）

調査区内の土坑墓や掘立柱建物跡などを囲むようにⅣａ層で検出された溝である。

Ｆ－14区からＮ－８区にかけ，台地縁編部に向けて窪みに沿うよう北側から南側，さらに東側へと流れ，途中３か所分断されて検出されたが，１つの溝としてつなげると長さ129m，標高差約1.7mになる。埋土は黒色土が主で，下っていくと浸食の影響と思われる分層が確認できた。

また溝29を掘り下げ，完掘した段階で掘立柱建物跡の37号の柱穴を検出した。

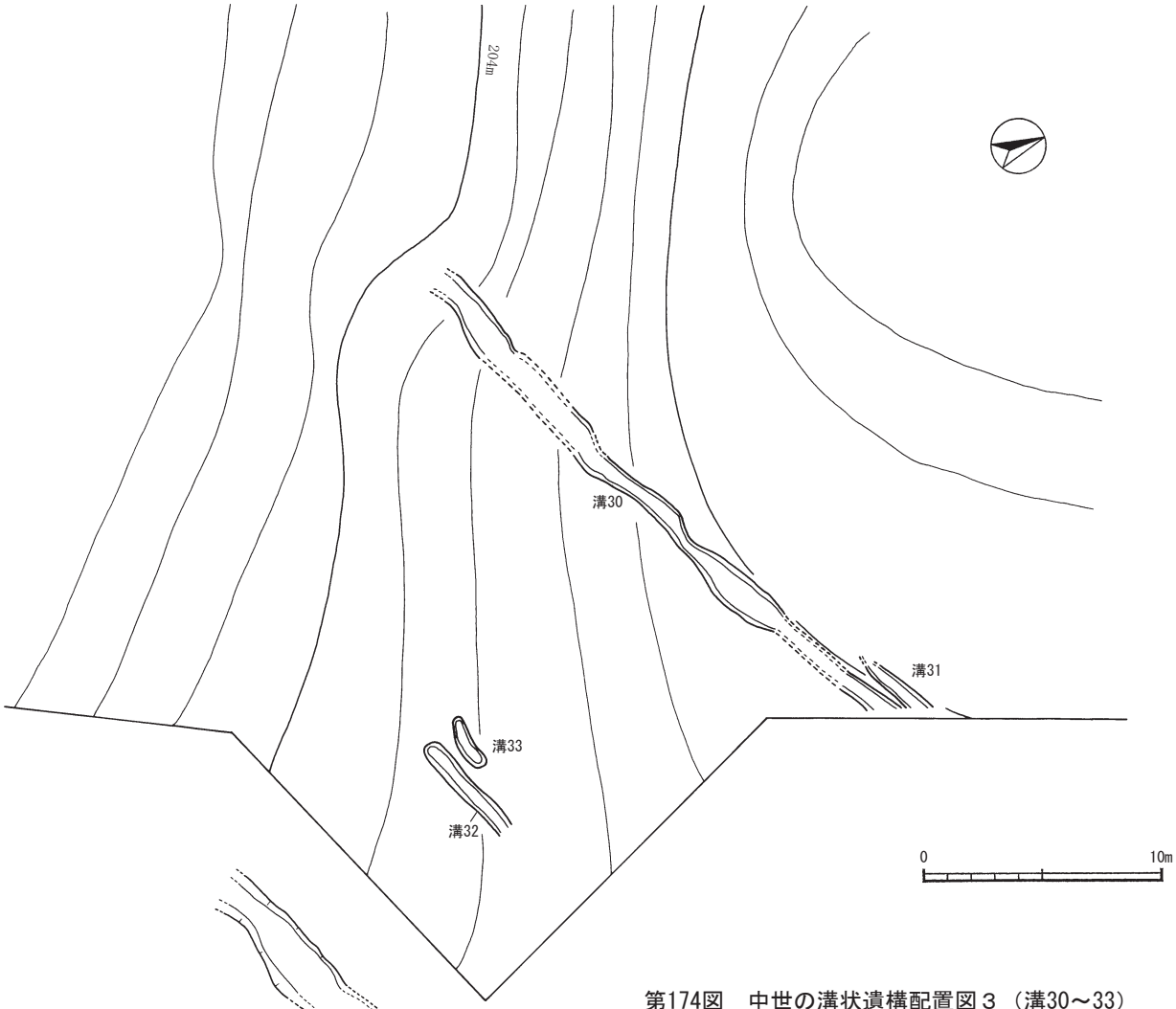


第173図　中世の溝29

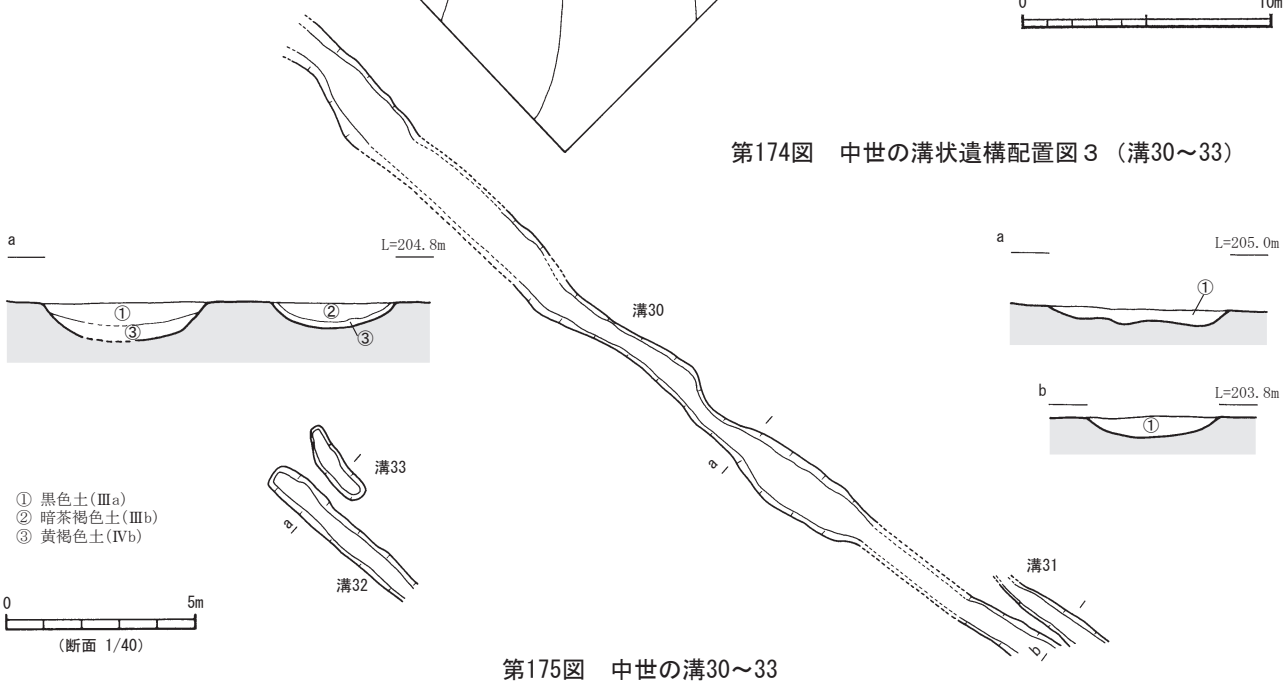
溝状遺構30～33（第175図）

溝30はＬ－9区で検出された溝とＭ－9・10区，Ｎ－10区で検出された溝がつながるものである。調査区の南側に位置しており，西方向へ延びている。上部は削平を受けており，畑の耕作により撹乱されていた。

埋土は黒色土であるが，底面には黄色土の小ブロックが混在している。隣接しているのが溝31である。溝の幅は40～80cmの間で，溝30と同じ程度であったため，同時期の可能性がある。溝32・33はＮ－８・９区Ⅳａ層で検出された。溝30の南側に位置している。溝の長さは短く，断面形状は深皿型を呈している。



第174図　中世の溝状遺構配置図３（溝30～33）



第175図　中世の溝30～33

溝状遺構34～37（第177図）

調査区の北に位置しているものである。溝34はＤ～Ｆ－17 ～ 20区Ⅳａ層で検出された。途中から二つに分かれて延びている。一部削平を受けているが，レベルの数値や溝の埋土からひとつの溝としてつながると考えられる。

溝35・36・37はＦ～Ｈ－18 ～ 20区で検出された。溝35と36は先端が曲がり，三日月のような形状をしている。埋土はⅢａ層土の黒色土で一部Ⅳｂ層土の黄褐色が混ざっている。

溝状遺構38・39（第179図）

調査区の中心からやや東に位置している。Ｇ～Ｌ－17 ～ 19区にかけて検出された。一部途切れているがつながる可能性が考えられた。長さは55mと東西に延びている。小さく隣接するのが溝39である。どちらも黒色土を主体とする埋土で，一部に暗茶褐色土が混ざっている。

溝状遺構40（第179図）

Ｈ・Ｌ－22区，Ｉ－21・22区Ⅳ層で検出された。斜面に沿うように北から南に下っている。溝38と類似しており，先端は先細りになっている。

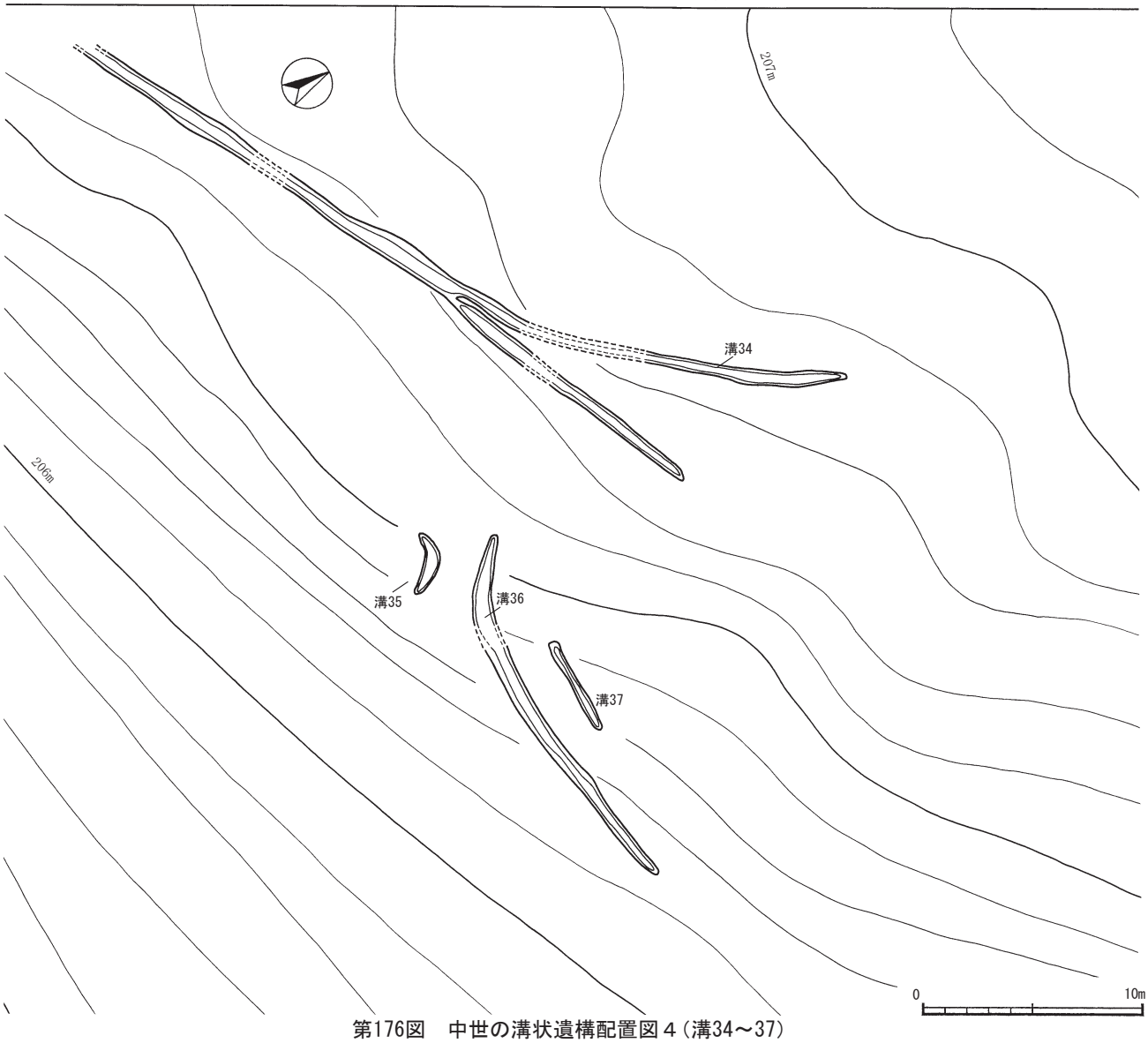
溝状遺構41（第179図）

溝40の南東・低位に位置している。付近の溝よりも幅が大きいが，長さは短い。

溝状遺構42（第179図）

Ｍ－18・19区Ⅳ層で検出された。溝40や溝41のように高位の斜面から南東方向になめらかに下っている。近くの溝38と比較すると，溝の幅や深さが類似しており，どちらも比較的安定して延びていることから同時期のものの可能性がある。

埋土は黒色土の下に暗茶褐色土がみられた。また，遺物は白磁の小片や陶器など流れ込みと思われるものが出土している。



第176図　中世の溝状遺構配置図４（溝34～37）

溝状遺構43～46（第179図）

Ⅰ－21区，Ⅰ・Ｊ－20区Ⅳａ層で検出された。比較的短めの溝が北側から南側へ斜面に沿って４つ並列している。向きはすべて西側から東側へ延びており，深さは６cm程である。溝43・44は上方へ続くと思われるが，溝45・46は両端が途切れていた。埋土は黒色土の下に暗茶褐色土が堆積していた。

溝状遺構47（第181図）

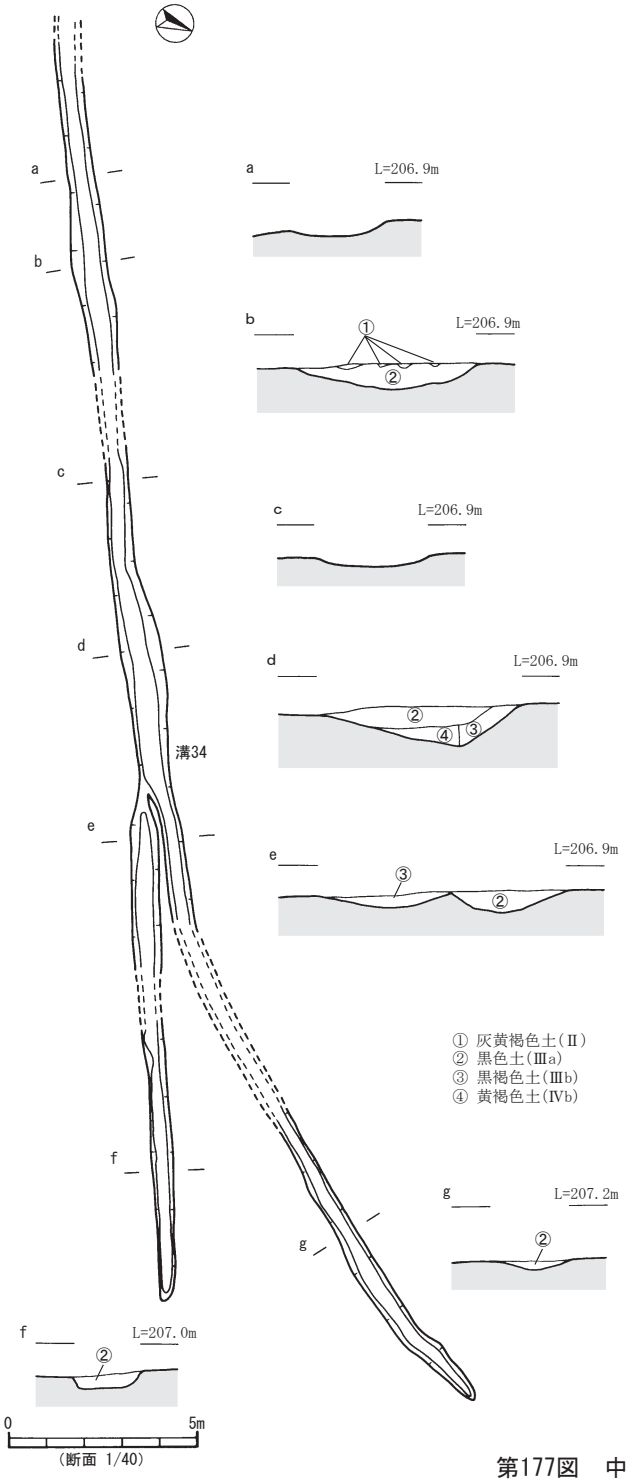
調査区の北側に位置し，傾斜に沿ってゆるやかに下る溝である。幅の最大値は174cmと広く，先端は消失している。埋土は単一の黒褐色土である。

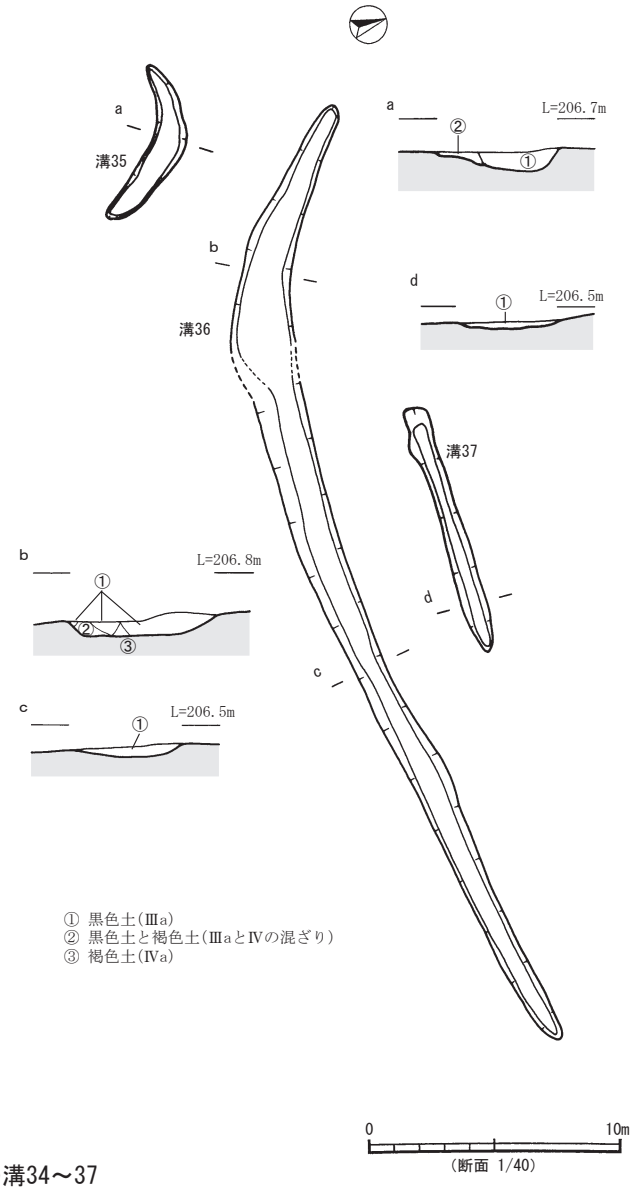
溝状遺構48・49（第181図）

溝48はＤ・Ｅ－23区Ⅳａ層，溝49はＤ－23・24区Ⅳａ層で検出された。溝48は北側から南側へ延び，溝49は西側から東側へ延びている。溝49は溝48に切られているため，溝48が新しい。埋土は，黒褐色土が主体でその下にⅣａ層土と思われる褐色土がみられた。

溝状遺構50・51（第181図）

Ｄ－24区Ⅳａ層で検出された短い溝である。先端は丸みを帯び消失し，北側は調査区外に途切れている。溝50





第177図　中世の溝34～37

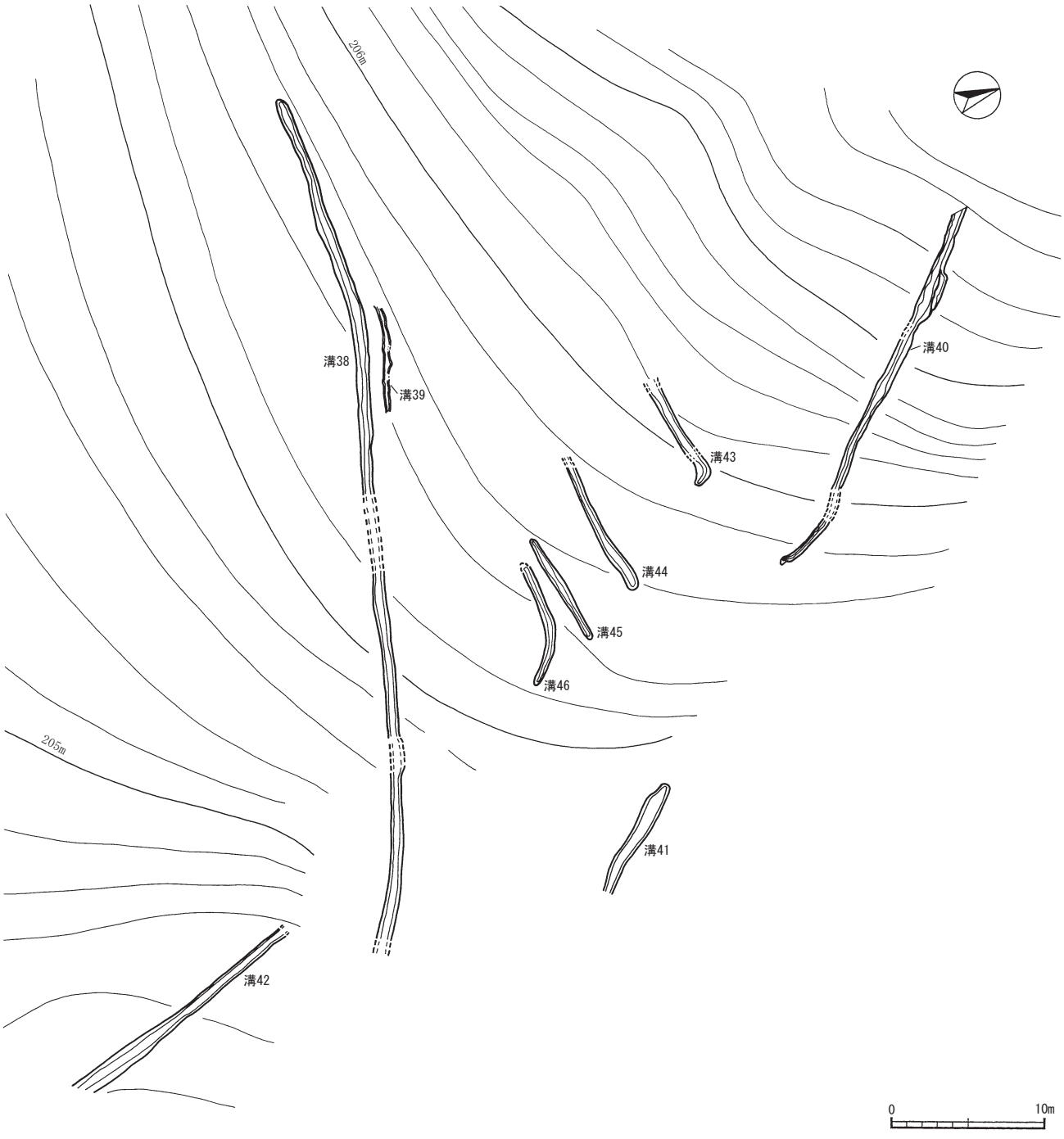
は溝51に切られている。埋土は単一の黒褐色土である。

溝・古道52（第182図）

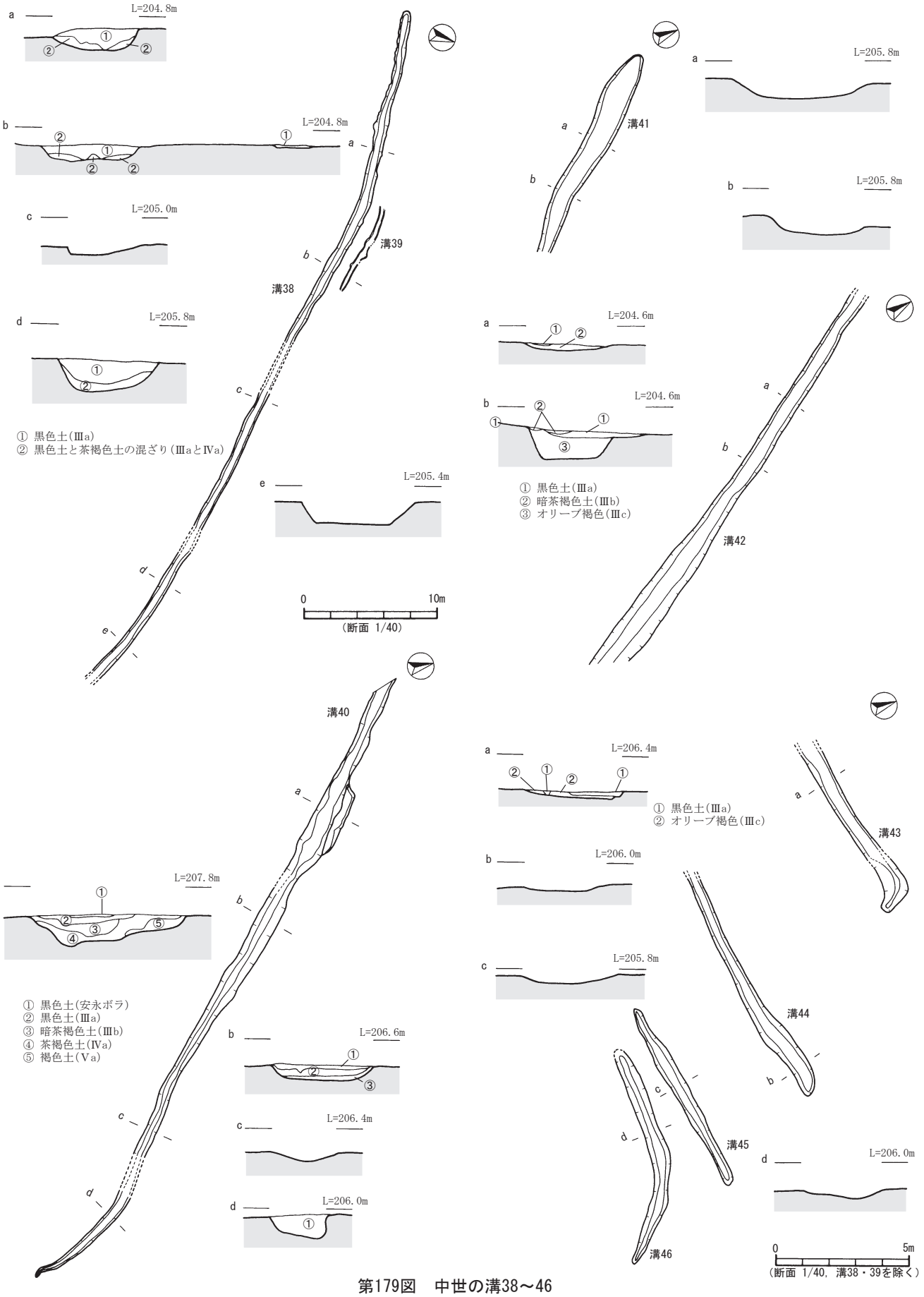
Ｅ・Ｆ－24区Ⅳｂ層で検出された。北西から南東方向へ延びる溝で，溝53と同様に現在の林道の方向へ延びている。南東部で良好な硬化面が確認できたため，古道として利用されたものと考えられる。溝57を切っており，溝54に切られている状況である。

溝・古道53（第182図）

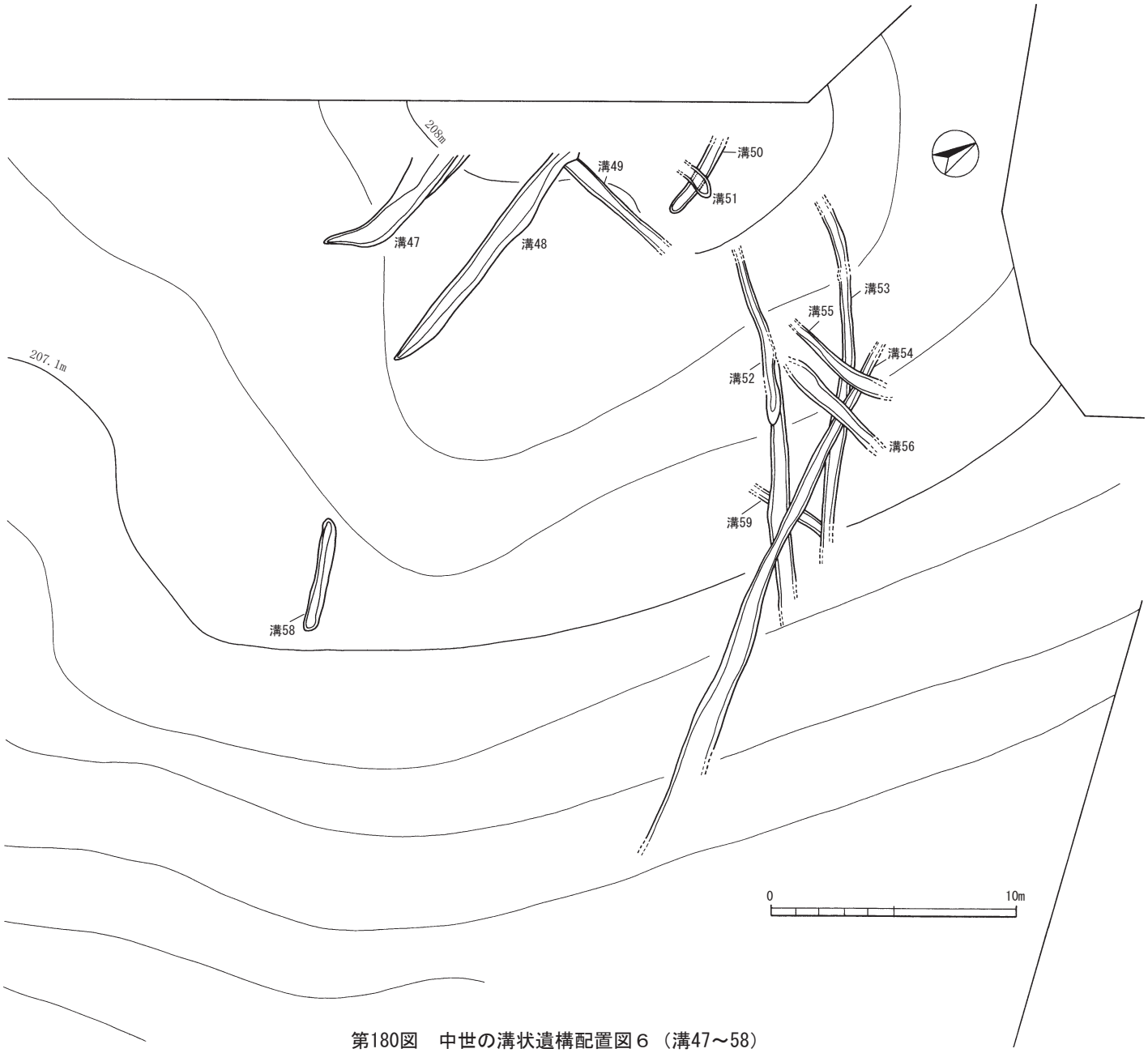
溝52と同様の検出状況である。北側の林道方向に沿うように，溝52と間隔を開けて平行に延びている。溝54と溝55と溝56に切られており，東端では溝57を切っている。こちらも硬化面が良好に残存しており，溝としての利用は不明である。現在の林道方向に沿っていたため，畑の造成前の旧地形の古道と思われる。



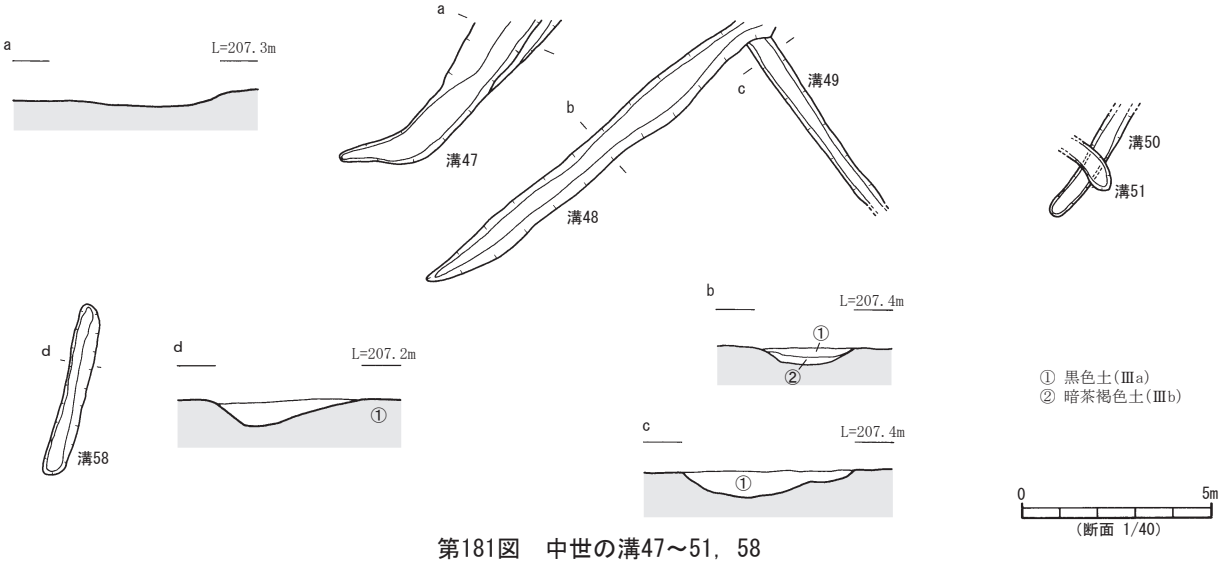
第178図　中世の溝状遺構配置図５（溝38～46）



第179図　中世の溝38～46



第180図　中世の溝状遺構配置図６（溝47～58）



第181図　中世の溝47～51，58

溝・古道54（第182図）

Ｅ～Ｇ－24区Ⅳａから Ⅳｂ層で検出された。北西から南東方向へ延びる長い溝である。下るほど幅が広くなるのが特徴的である。南東側の下流側は黒色土が厚く堆積しており，溝として利用されていたものと思われる。底面には硬化面が良好に残っており，古道としても利用されていた可能性がある。

溝状遺構55（第182図）

Ｅ－24区Ⅳｂ層で検出された。削平されたⅣｂ層に掘り込まれている。東西方向に伸び，北側の林道方向へ下る短い溝である。埋土は黒色土が主体で，溝53と溝54を切っている。

溝状遺構56（第182図）

溝55と同じ検出状況である。溝55に平行に位置している。黒色土を主体とする埋土で，底面近くには硬化面が残存している。溝55との前後関係は不明であるが，ほぼ同時期のものと思われる。

溝状遺構57（第182図）

Ｅ・Ｆ－24区Ⅳｂ層で検出された。南側は削平され，北側は消失している。溝52と溝53と溝54に切られており溝52から溝56の中では最も古いものと考えられる。

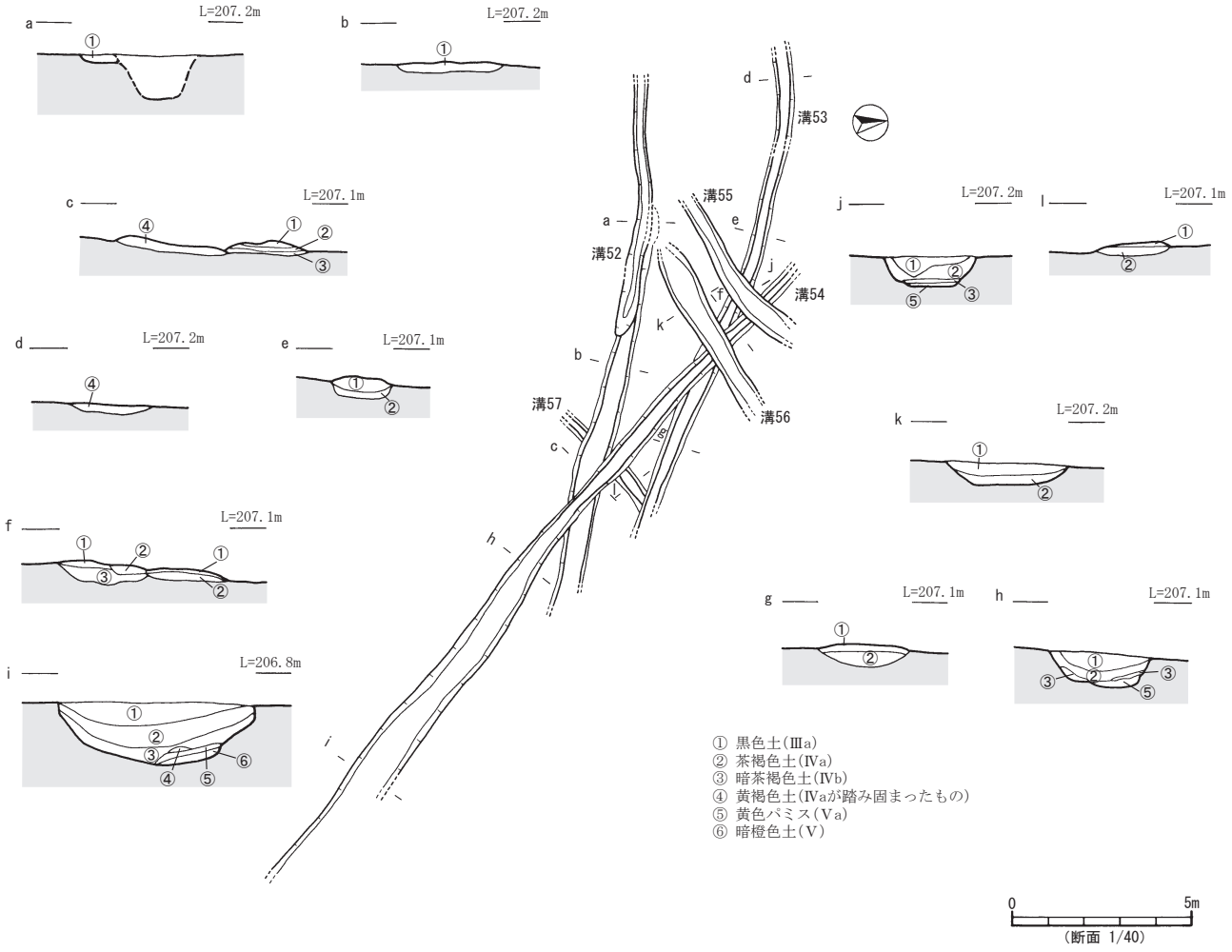
溝状遺構58（第181図）

Ｆ－22区で検出された。端部に丸みを帯びる短い溝である。北側には溝48が位置しており，レベルの数値などからつながる可能性が考えられた。

溝状遺構59（第184図）

Ｈ～Ｊ－24区Ⅳ層で検出された。台地から谷へ向かって北西から南東方向へ延びる溝である。谷を斜めに下るように位置している。台地からⅣ層の崖を掘り込んで作られているが，明確な硬化面は残存していなかった。

溝の下面には凹凸が不規則に残っており，溝としての役割が主体であると思われる。古代から縄文時代までの遺物が含まれていたが，混在していたため台地や包含層からの流れ込みと考えられる。隣あっている古道60も同



第182図　中世の溝52～57

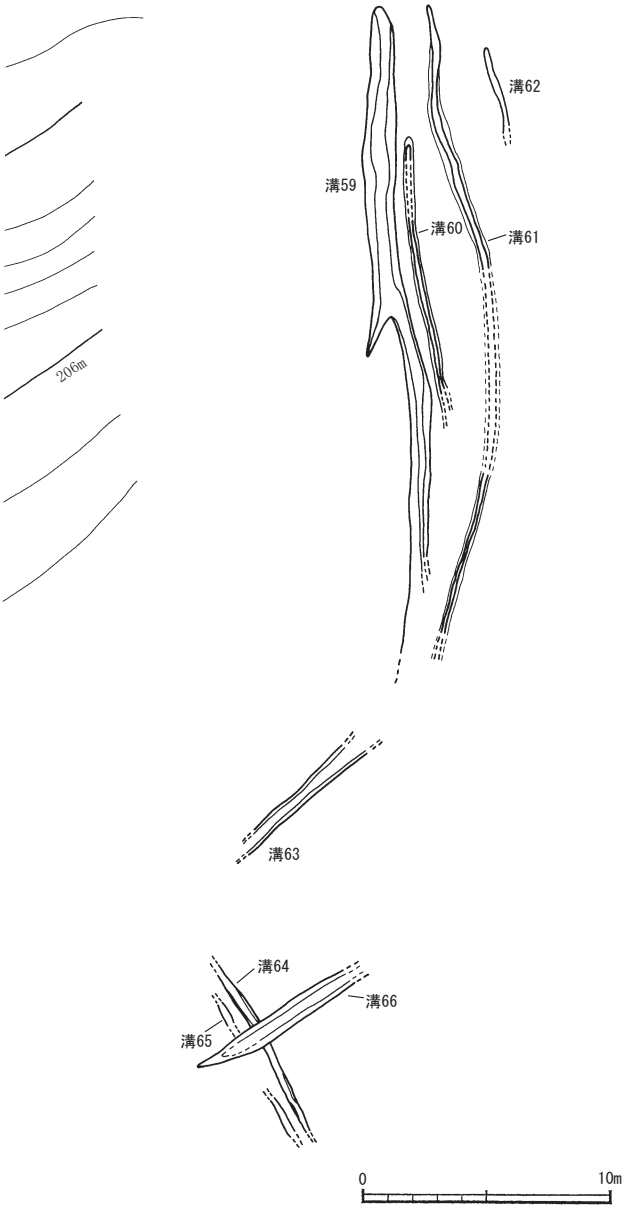
じ方向に延びていることから何らかの関係があると思われる。

溝・古道60（第184図）

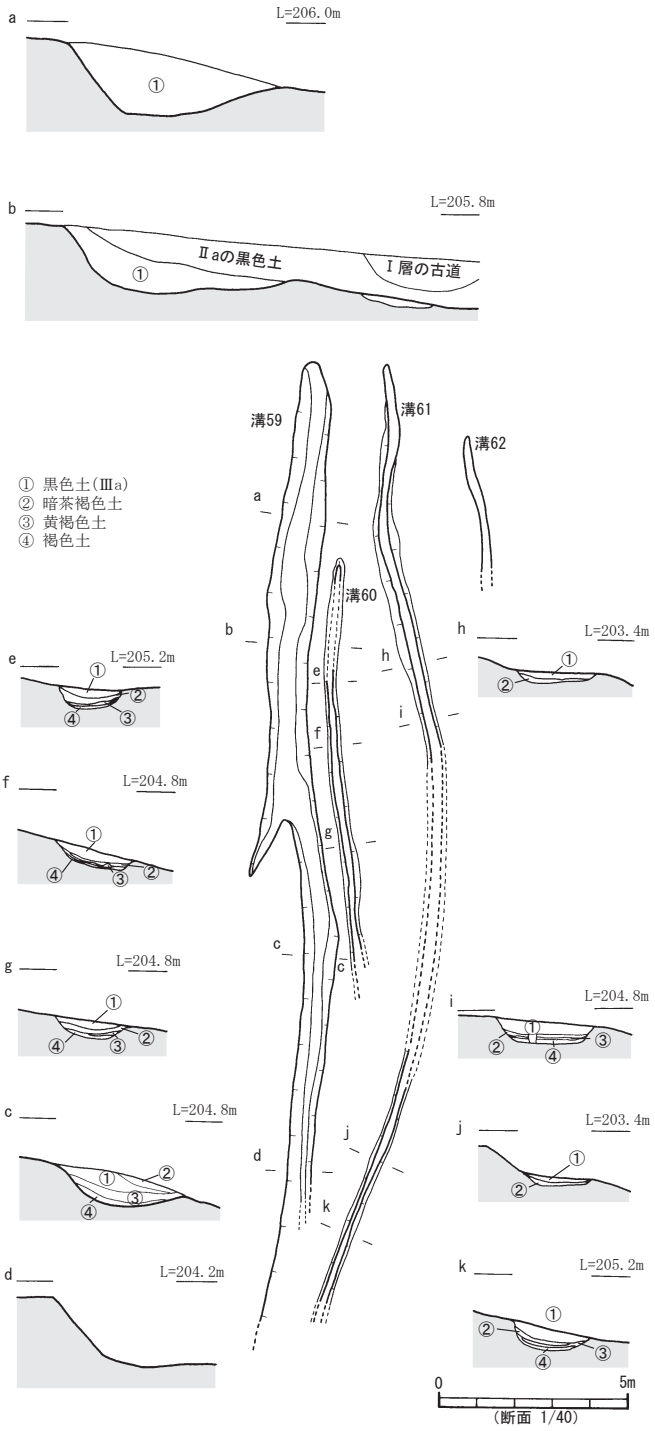
溝59と隣り合うように位置している。南東側は消失している。溝59とはほぼ同時期の可能性が考えられる。Ⅳ層上面には凹凸がみられ硬化面が残存していたことから古道として利用されたものと考えられる。

溝・古道61（第184図）

H～J－23・24区で検出された。現在の林道に沿うように延びている古道である。古道の両端は土砂の崩落などで消失していたが，わずかな凹みに硬化面が残っていた。古道61は溝59や古道60と並行して検出され，溝59や古道60よりも新しいと考えられる。



第183図　中世の溝状遺構配置図７（溝59～66）



第184図　中世の溝59～62

溝状遺構63（第185図）

Ｋ－23区Ⅳ層上面で検出された。北側の谷へ向かって下っている。斜面上を南北方向へ向かって延びる溝である。南側から北側へゆるやかに下っている。南側は未調査区へと延びており，北側は林道沿いの崖により消失している。現在の耕作土の下のⅣ層に，Ⅲ層が入り込むような状況で検出されている。埋土下面には硬化面が残っている。

溝状遺構64（第185図）

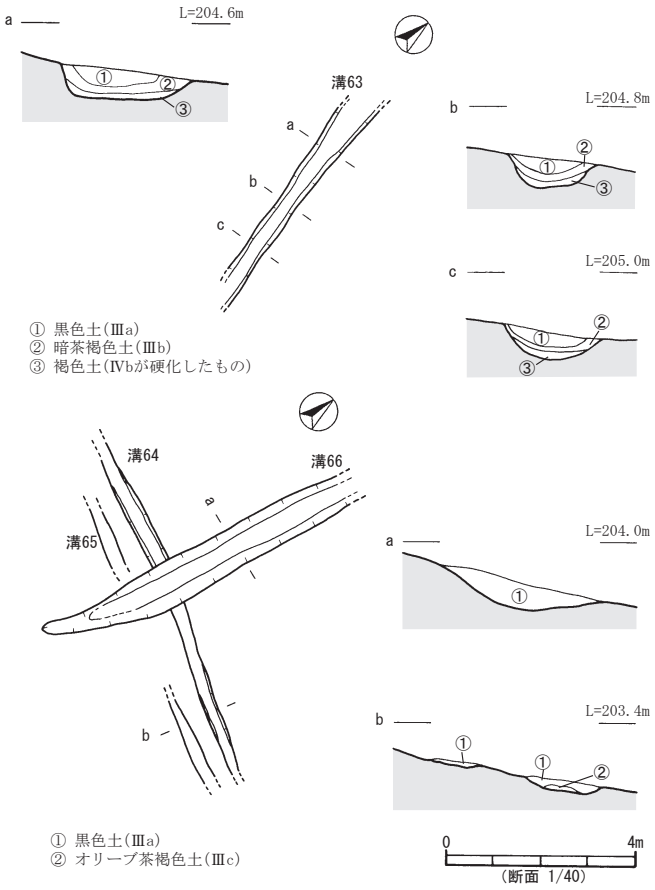
Ｋ・Ｌ－22・23区Ⅳ層で検出された。検出面は斜めに傾斜しており，両端は旧耕作により削平されている。南西方向へ延びると先端は消失している。

溝状遺構65（第185図）

Ｋ・Ｌ－22区で検出された。埋土が残存しているが，一部硬化面がみられる。硬化面の幅は30cm程度である。表土直下での検出のため，大きく削平をうけた状態で検出された。隣あった溝64と平行に延びている。埋土状況もほぼ同じであるため，同時期である可能性が高い。

溝状遺構66（第185図）

斜面部に南方向へ斜めに構築された溝である。北側は旧耕作面により削平され，東側先端は消失している。東側埋土はパミスを含まない黒色土である。溝64･65を切っている。



第185図　中世の溝63～66

（５）鍛冶関連遺構

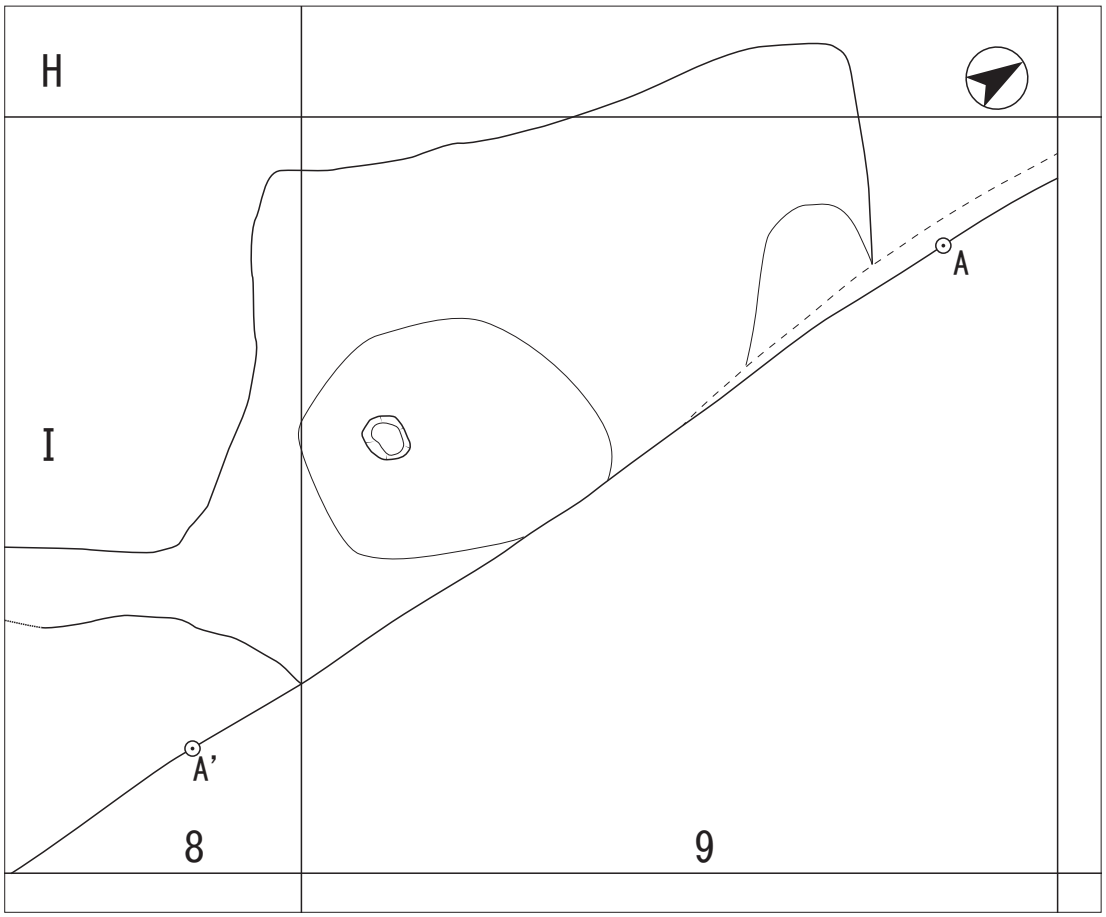
Ｈ・Ｉ－８・９区で鉄滓・鍛造剥片が分布する部分が見られたため，10m×7.5mの範囲に縦横25cmの区画を設定しサンプリングを行った。鉄滓と鍛造剥片はI－９区の土坑を中心とする範囲から多く採取された。これらが多く分布する範囲はⅣa層上面で土がやや白く変色している部分と重なる。

サンプリングを行っている途中で土坑が検出された。規模は長径165cm，短径55cm，深さ８cmを測る。埋土内からは多量の鉄滓・鍛造剥片が出土した。特に，平面図及び断面図に示した一点破線の範囲から集中して出土した。他にも黒色土器Ａ類，土師器，手づくね土師器，白磁碗Ⅳ，中国産褐釉陶器，滑石製品片等の遺物が出土した。

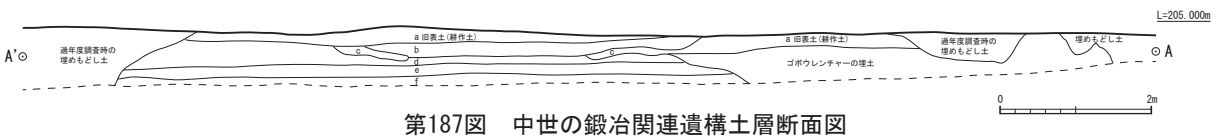
出土した遺物のうち７点を図化した。285は黒色土器Ａ類埦の体部片である。内外面ともミガキが施されている。286・287は土師器小皿の破片で，287の底部切り離しは糸切りでりである。288は手づくね成形の土師器で



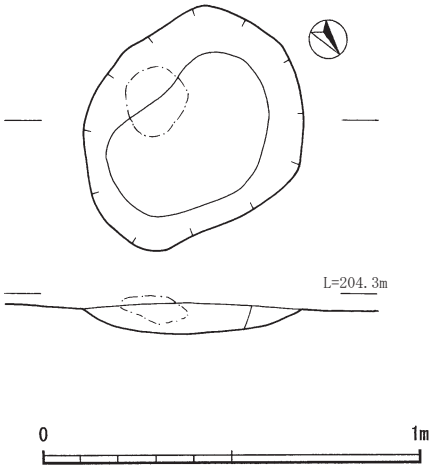
ある。口縁部外面は１cmほどの幅でヨコナデしている。体部中位に段が，底部はユビオサエの痕が残る。289は白磁碗Ⅳ類の口縁部で玉縁状を呈する。290は東播系須恵器の口縁部で口唇部と体部の角度はほぼ90度となる。291は中国産褐釉陶器の壺の胴部片と考えられる。



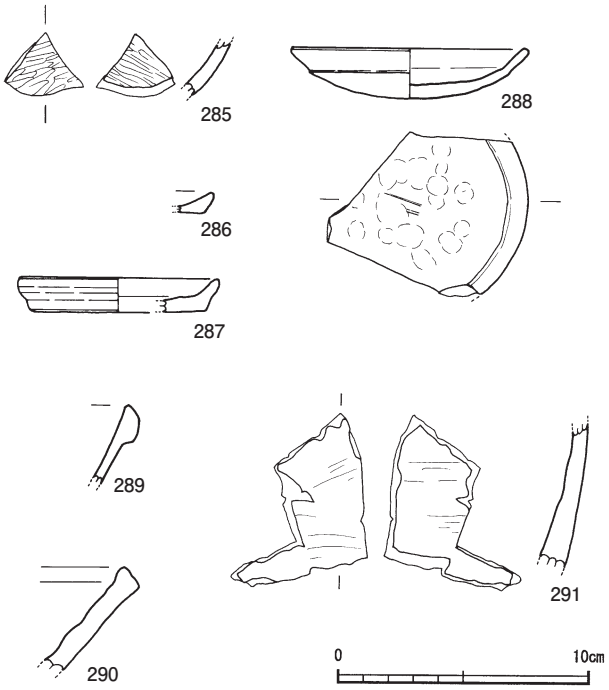
第186図　中世の鍛冶関連遺構配置図



第187図　中世の鍛冶関連遺構土層断面図



第188図　鍛冶関連遺構内検出土坑



第189図　鍛冶関連遺構内出土遺物

第90表　鍛冶関連遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種類	器種	胎土	釉薬・色調	分類	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様・調整		備考
											外面	内面	
189	285	黒色土器A	埦	灰	浅黄		体部	－	－	－	ミガキ	ミガキ	
	286	土師器	小皿	浅黄橙	浅黄		口縁～底部	－	－	－	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	287	土師器	小皿	浅黄橙	浅黄橙		口縁～底部	8	7	1.4	ナデ・糸切り	ナデ	
	288	土師器	小皿	橙	明褐灰		口縁～底部	9.4	－	2	ナデ･ユビオサエ	ナデ	手づくね
	289	白磁	碗	灰白	白濁した透明釉薬	Ⅳ	口縁	－	－	－			
	290	東播系須恵器	捏鉢	灰	灰		口縁	－	－	－			土坑内出土
	291	中国陶器	壺	灰	暗オリーブ	Ⅳ	胴部	－	－	－			

（６） 土坑

中世該当の土坑は，113基検出された。古代の土坑と同様，平面形をもとに以下の５タイプに分類した。

Type １・・・ほぼ円形を呈する円形タイプ
Type ２・・・楕円形状を呈する楕円形タイプ
Type ３・・・隅丸方形状を呈する隅丸方形タイプ
Type ４・・・隅丸長方形状を呈する隅丸長方形タイプ
Type ５・・・その他（不定形や形状が不明なもの）

Type １（円形タイプ：第191～193図）

土坑１号

Ｆ－４区，Ⅳa層で検出された。平面形は，42cm×41cmの円形を呈する。断面形は，深さ３cmの薄い皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土に茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑２号

Ｈ・Ｉ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，60cm×54cmの円形を呈する。断面形は，深さ10cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒褐色土（埋土①）と褐色土（埋土②）が堆積していた。

土坑３号

Ｅ－12区，Ⅳa層で検出された。平面形は，54cm×49cmの円形を呈する。断面形は，深さ12cmの擂鉢状を呈する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑４号

Ｅ－12区，Ⅳa層で検出された。平面形は，59cm×53cmの円形を呈する。断面形は，深さ４cmの浅い皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑５号

Ｉ－８区，Ⅳa層で検出された。平面形は，60cm×50cmの円形を呈する。断面形は，深さ８cmの擂鉢状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒褐色土と褐色土が堆積していた。

土坑６号

Ｆ－12区，Ⅳa層で検出された。東側をイモ穴に切られているものの平面形は，規模が推定で平面形は57cm×50cmを測り，円形状を呈する。断面形は，深さ14cmの舟形状を呈し，床面は，平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑７号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，60cm×56cmの円形を呈する。断面形は，深さ８cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑８号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，50cm×45cmの円形を呈する。断面形は，深さ６cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑９号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，67cm×55cmの円形を呈する。断面形は，深さ９cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑10号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，59cm×53cmの円形を呈する。断面形は，深さ７cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑11号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，47cm×45cmの円形を呈する。断面形は，深さ８cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑12号

Ｆ－４・５区，Ⅳa層で検出された。平面形は，63cm×54cmの円形を呈する。断面形は，深さ３cm薄い皿状を呈する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑13号

Ｋ－19区，Ⅳb層で検出された。平面形は，68cm×51cmの円形を呈する。断面形は，深さ18cmの舟形状を呈する。床面は，平坦面を形成する。埋土は，黒色土，黄色と白色の小粒のパミスを含む茶褐色土が堆積していた。埋土内から，土器片５点が出土した。

土坑14号

Ｅ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，66cm×57cmの円形を呈する。断面形は，深さ10cmの台形状を呈する。床面は，平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑15号

Ｆ－４区，Ⅳ層で検出された。平面形は，65cm×63cmの円形を呈する。断面形は，深さ４cmの皿状を呈する。埋土は，黒色土に茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

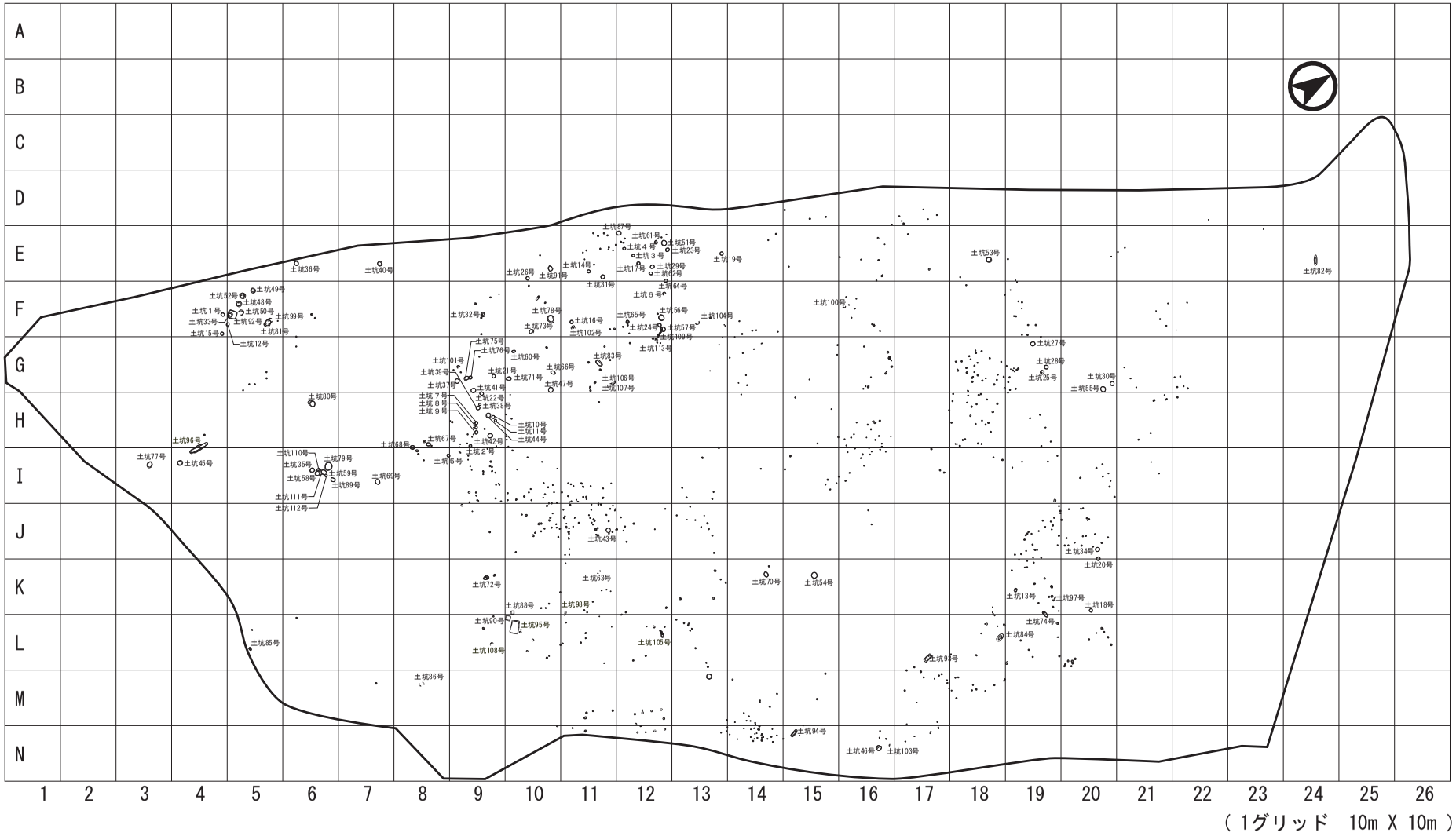
土坑16号

Ｆ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，67cm×63cmの円形を呈する。断面形は，深さ８cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑17号

Ｅ－12区，Ⅳa層で検出された。平面形は68cm×60cmの円形を呈する。断面形は，深さ15cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑18号



第190図　中世の土坑・ピット配置図

Ｋ－20区，Ⅲb層で検出された。平面形は，63cm×61cmの円形を呈する。断面形は，深さ10cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑19号

Ｅ－13区，Ⅳa層で検出された。平面形は，66cm×63cmの円形を呈する。断面形は，深さ10cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑20号

Ｊ・Ｋ－20区，Ⅲb層で検出された。平面形は，70cm×66cmの円形を呈する。断面形は，深さ12cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑21号

Ｇ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，66cm×60cmの円形を呈する。断面形は，深さ４cmの浅い皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土に黄褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑22号

Ｇ・Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，71cm×57cmの円形を呈する。断面形は，深さ６cmの浅い皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。埋土内から，土師器甕片１点が出土した。

土坑23号

Ｅ－12区，Ⅳb層で検出された。平面形は，75cm×66cmの円形を呈し，断面形は，深さ11cmの台形状を呈している。床面は，検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑24号

Ｆ－12区，Ⅳa層で検出された。平面形は，72cm×64cmの円形を呈する。断面形は，深さ７cmの浅い皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑25号

Ｇ－19区，Ⅳa層で検出された。中世の溝36で一部切られるものの平面形は，規模が推定で74cm×70cmを測り，円形を呈する。断面形は，深さ13cmの擂鉢状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，１㎜以下の黄褐色のパミスの入る黒褐色土と黒色土と茶褐色土が混ざる黒褐色土が堆積していた。

土坑26号

Ｅ－10区，Ⅳa層で検出された。中世の溝23に切られるものの平面形は，規模が推定で71cm×61cmを測り，円形状を呈する。断面形は，深さ13cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑27号

Ｇ－19区，Ⅳa層で検出された。平面形は，80cm×80cmの円形を呈する。断面形は，深さ12cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，１～２cm大のブロックを含む茶褐色土に近い黒褐色土が堆積していた。埋土内から，土師器片20点が出土した。

土坑28号

Ｇ－19区，Ⅳa層で検出された。中世の溝37に一部切られるものの平面形は，規模が推定で76cm×73cmを測り，円形状を呈する。断面形は，深さ12cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑29号

Ｅ－12区，Ⅳa層で検出された。東側をイモ穴に切られるものの平面形は，規模が推定で78cm×64 cmを測り，円形を呈する。断面形は，深さ11cmの台形状を呈する。床面は，検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑30号

Ｇ－20区，Ⅳa層で検出された。平面形は，74cm×72cmの円形を呈する。断面形は，深さ９cmの台形状を呈する。床面は検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄褐色の小ブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

土坑31号

Ｅ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，78cm×72cmの円形を呈する。断面形は，深さ13cmの台形状を呈する。床面は，平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑32号

Ｆ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，79cm×78cmの円形を呈する。断面形は，深さ９cmの舟形状を呈する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。埋土内に白磁片（口縁～胴部）１点を含有する。口縁部は小さくて丸く，器肉は薄いことから碗Ⅴ類４に属するものと判断する。中央部をピットに切られており，ピット内の埋土が黒色土であることから，この土坑内に埋設されていたものと判断する。

土坑33号

Ｆ－５区，Ⅳa層で検出された。平面形は，84cm×78cmの円形を呈する。断面形は，深さ11cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土に茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑34号

Ｊ－20区，Ⅲb層で検出された。平面形は，82cm×76cmの円形を呈する。断面形は，深さ13cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑35号

Ⅰ－６区，Ⅲb層で検出された。平面形は，91cm×85cmの円形を呈する。断面形は，深さ14cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄褐色土ブロックが混ざった黒色土が堆積していた。

土坑36号

Ｅ－６区，Ⅳa層で検出された。平面形は，一部西側が検出外となるものの，規模が推定で80cm×78cmの円形を呈する。断面形は，深さ10cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土に茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑37号

Ｇ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，83cm×80cmの円形を呈する。断面形は，深さ７cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑38号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，45cm×42cmの円形を呈する。断面形は，深さ４cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑39号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，71cm×70cmの円形を呈する。断面形は，深さ６cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑40号

Ｅ－７区，Ⅳa層で検出された。平面形は，87cm×86cmの円形を呈する。断面形は，深さ17cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土を中心に包含され，下部に黄色パミスを含む暗黄褐色土が堆積していた。埋土内から土師器甕をはじめとする土器片が50点，軽石が２点出土した。土師器甕は，多く出土しているが，小片が多く接合できたのは２点のみであった。

土坑41号

Ｇ・Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，88cm×78cmの円形を呈する。断面形は，深さ４cmの浅い皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑42号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，92cm×77cmの円形を呈する。断面形は，深さ２cmの浅い皿状を呈する。床面は，検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑43号

Ｊ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，撹乱の影響を受けるものの，規模が推定で84cm×80cmの円形を呈する。断面形は，深さ７cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，白パミスを含む黒褐色土が堆積していた。埋土内から，土師器片３点が出土し，そのうちの２点を接合し図化した。

土坑44号

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，93cm×87cmの円形を呈する。断面形は，深さ16cmの舟形状を呈する。床面は，検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑45号

Ⅰ－４区，Ⅳa層で検出された。平面形は，97cm×88cmの円形を呈する。断面形は，深さ６cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄褐色土がブロック状に混在する黒色土が堆積していた。

土坑46号

Ｎ－16区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，110cm×96 cmの円形を呈する。断面形は，深さ９cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，Ⅳa層土ブロックを含む暗褐色土，Ⅳa層土ブロックを含む黒褐色土，黄色パミスを少量含む黒褐色土が堆積していた。埋土内から土師器片が４点出土した。

土坑47号

Ｇ－10区，Ⅳa層で検出された。平面形は，92cm×84cmの円形を呈する。断面形は，深さ７cmの浅い皿状を呈する。床面は，検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成する。埋土は，Ⅲa層土とⅣa層土が混ざったような茶褐色土が堆積していた。埋土内から白磁片（玉縁状口縁）が１点出土した。

土坑48号

Ｆ－５区，Ⅳa層で，古代の竪穴住居状遺構１号を切る形で検出された。平面形は，120cm×98cmの円形を呈する。断面形は，深さ17cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄白色パミスを少量含む黒色土，黄白色パミス，黒色土ブロックを少量含む茶褐色土が堆積していた。埋土内から土師器片１点，土師器甕片３点が出土した。

土坑49号

Ｆ－５区，Ⅳa層で，古代の竪穴住居状遺構１号を切る形で検出された。平面形は，90cm×84cmの円形を呈する。断面形は，深さ９cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄白色パミスを少量含む黒褐色土が堆積していた。埋土内から土師器片１点，土師器甕片１点が出土した。

土坑50号

Ｆ－５区，Ⅳa層において検出された。平面形は，98cm×91cmの円形を呈する。断面形は，深さ８cmの皿状を呈する。床面は，一部樹根の撹乱の影響を受けるものの

平坦面を形成していると判断できる。埋土は，黄白色パミスを少量含む黒色土（埋土①），黄白色パミス，黒色土ブロックを少量含む茶褐色（埋土②）が堆積していた。

土坑51号

Ｅ－12区，Ⅳb層で，古代の土坑16号を切る形で検出された。平面形は，98cm×95cmの円形を呈する。断面形は，深さ22cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑52号

Ｆ－５区，Ⅳa層で，古代の竪穴住居状遺構１号を切る形で検出された。平面形は，110cm×100cmの円形を呈する。断面形は，深さ13cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄白色パミスを少量含む黒色土，黄白色パミス，黄褐色土ブロックが堆積していた。埋土内から土師器片２点，土師器甕片10点が出土した。

土坑53号

Ｅ－18区，Ⅳa層で検出された。平面形は，規模が100cm×100cmの円形を呈する。断面形は，深さ14cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土に近い黒褐色土，黄色褐色土のブロックの混ざる黒褐色土，茶褐色土に近いにぶい黄褐色土が堆積していた。

土坑54号

Ｋ－15区，Ⅳa層において検出された。平面形は，105cm×103cmの円形を呈する。断面形は，深さ９cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑55号

Ｇ－20区，Ⅳa層で検出された。平面形は，97cm×88cmの円形を呈する。断面形は，深さ８cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄褐色の小ブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

土坑56号

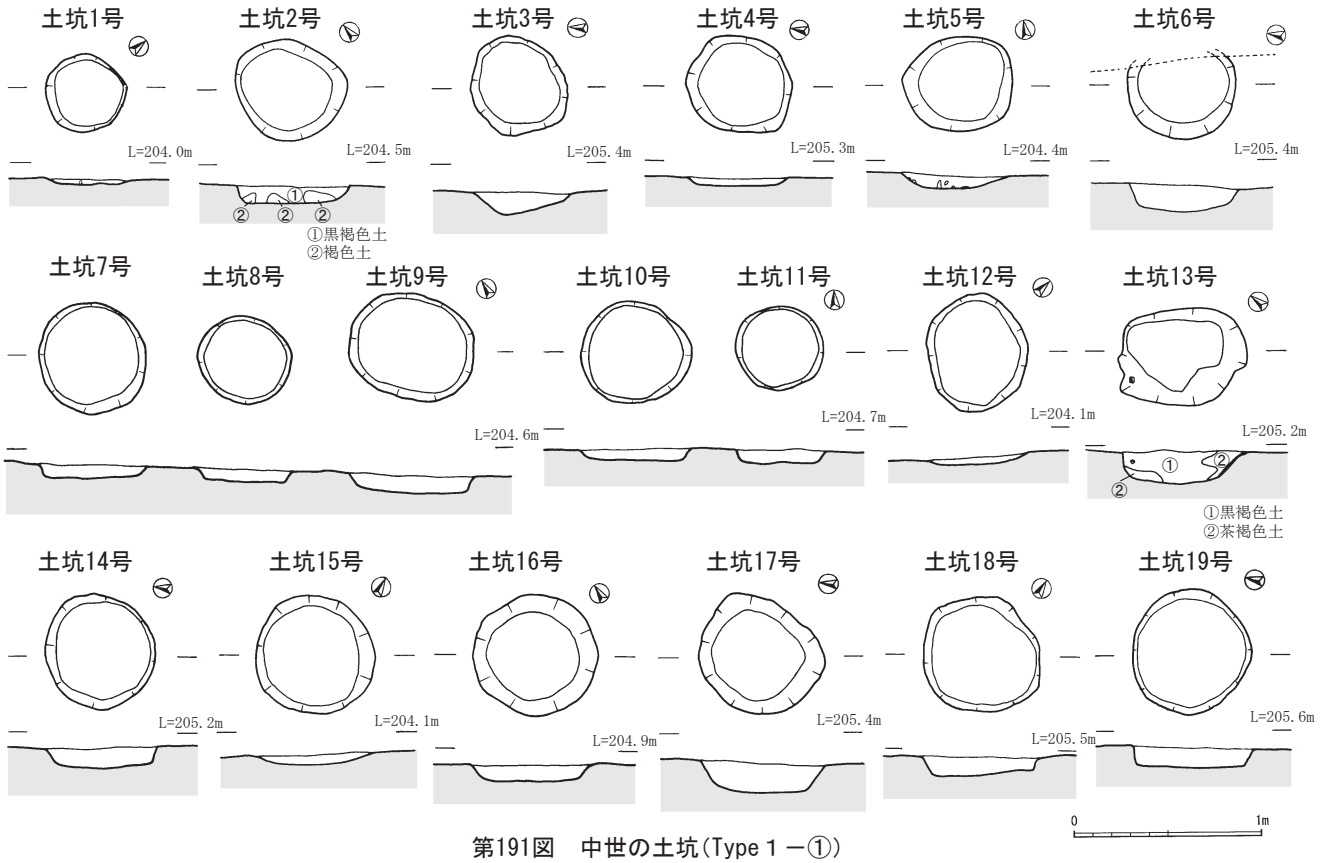
Ｆ－12区，Ⅳa層で検出された。中世の溝29に一部切られるものの平面形は，規模が推定で106cm×100cmのほぼ円形を呈する。断面形は，深さ29cmの台形状を呈し，床面は検出面と同形状の平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑57号

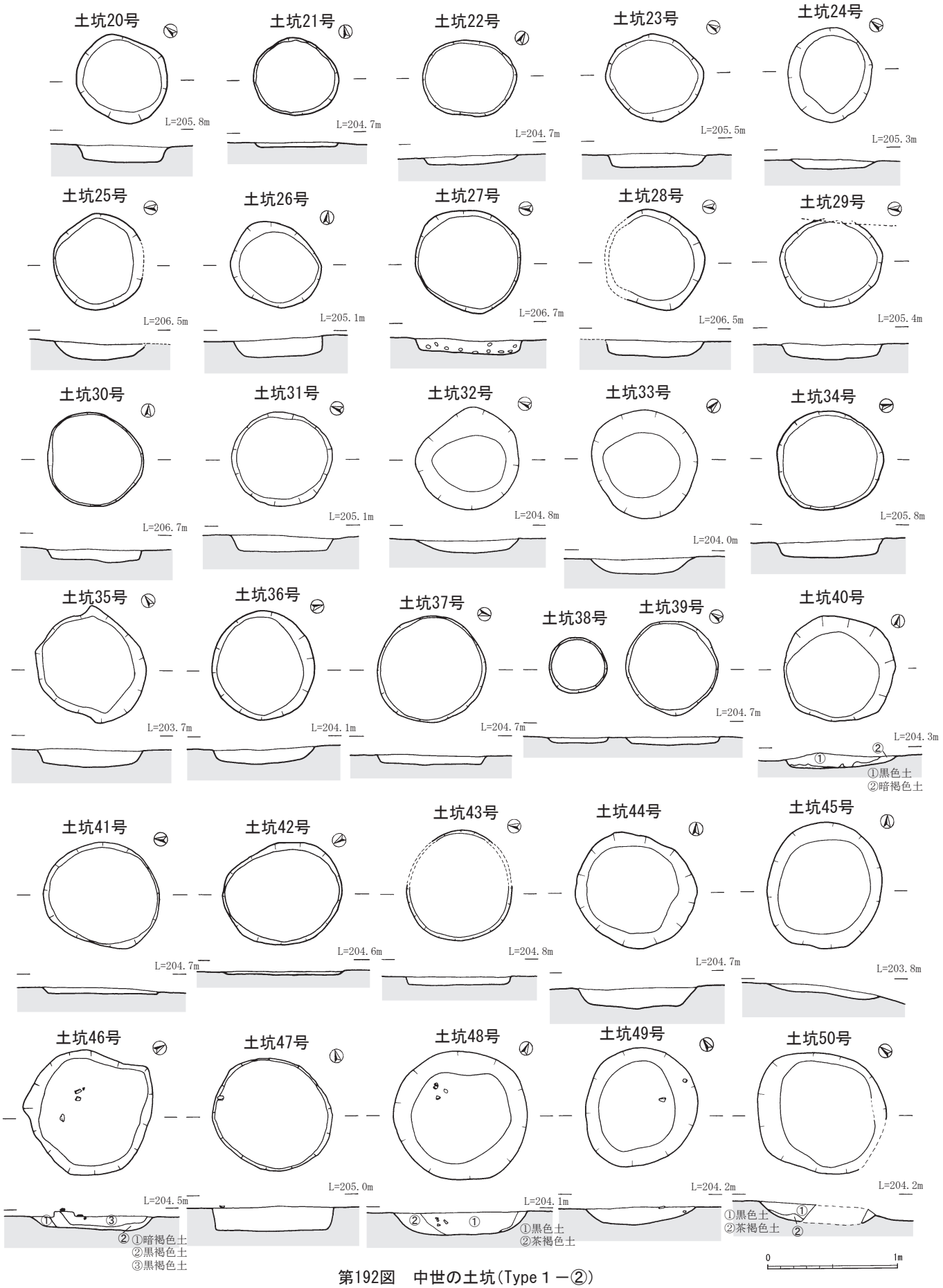
Ｆ－12区，Ⅳa層で検出された。平面形は，中世の土坑109号に切られるものの，規模が推定で88cm×80cmの円形を呈する。断面形は，深さ12cmの台形状を呈し，床面は明瞭な平坦面を形成する。埋土は，灰黒褐色土が堆積していた。

土坑58号

Ｉ－６区，Ⅳa層で，中世の土坑110・111号を切る形で検出された。平面形は，92cm×89cmの円形を呈する。断面形は，深さ14cmの皿状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，茶褐色土が全体的に混ざる黒色土が堆積していた。



第191図　中世の土坑（Type１－①）



第192図　中世の土坑(Type１－②)

Type ２（楕円形タイプ：第194図）

土坑59号

Ｉ－６区，Ⅳa層で，中世の土坑111・112号を切る形で検出された。平面形は，105cm×95cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ15cmの舟形状を呈し，床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑60号

Ｇ－10区，Ⅳa層で検出された。平面形は，70cm×44cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ９cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒褐色土，茶褐色土に近い黄褐色土が堆積していた。

土坑61号

Ｅ－12区，Ⅳb層で検出された。平面形は，68cm×57cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ13cmの匙状を呈し東側がやや深い。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑62号

Ｅ－12区，Ⅳa層で西側をイモ穴に切られる形で検出された。平面形は，規模が推定で68cm×50cmを測り，楕円形を呈する。断面形は，深さ14cmの舟形状を呈し，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑63号

Ｋ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，撹乱の影響を受けてはいるものの，規模が68cm×44cmの楕円形状を呈する。断面形は，深さ９cmの舟形状を呈し，床面は起伏がある。埋土は，黒色土と，暗茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑64号

Ｅ・Ｆ－12区，Ⅳa層で検出された。平面形は，72cm×57cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ７cmの浅い匙状を呈する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑65号

Ｆ－12区，Ⅳa層で，中世の溝29に切られる形で検出された。平面形は，規模が推定で76cm×58cmを測り，楕円形状を呈する。断面形は，二段に掘り込まれた形状で，一段目は深さ15cm程の台形状，二段目が深さ65cmまでコップ状に掘り込まれている。埋土は，黒色土（埋土①），茶褐色土（埋土②）中世の溝29の埋土と同様の黒色土（埋土③）が堆積していた。

土坑66号

Ｇ－10区，Ⅳa層で検出された。イモ穴の影響を受けるものの平面形は，規模が推定で90cm×60cmの楕円形状を呈する。断面形は，深さ６cmの浅い皿状を呈する。床面は検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒褐色土（埋土①），埋め戻したかのようにブロック状に褐色土（埋土②）が堆積していた。

土坑67号

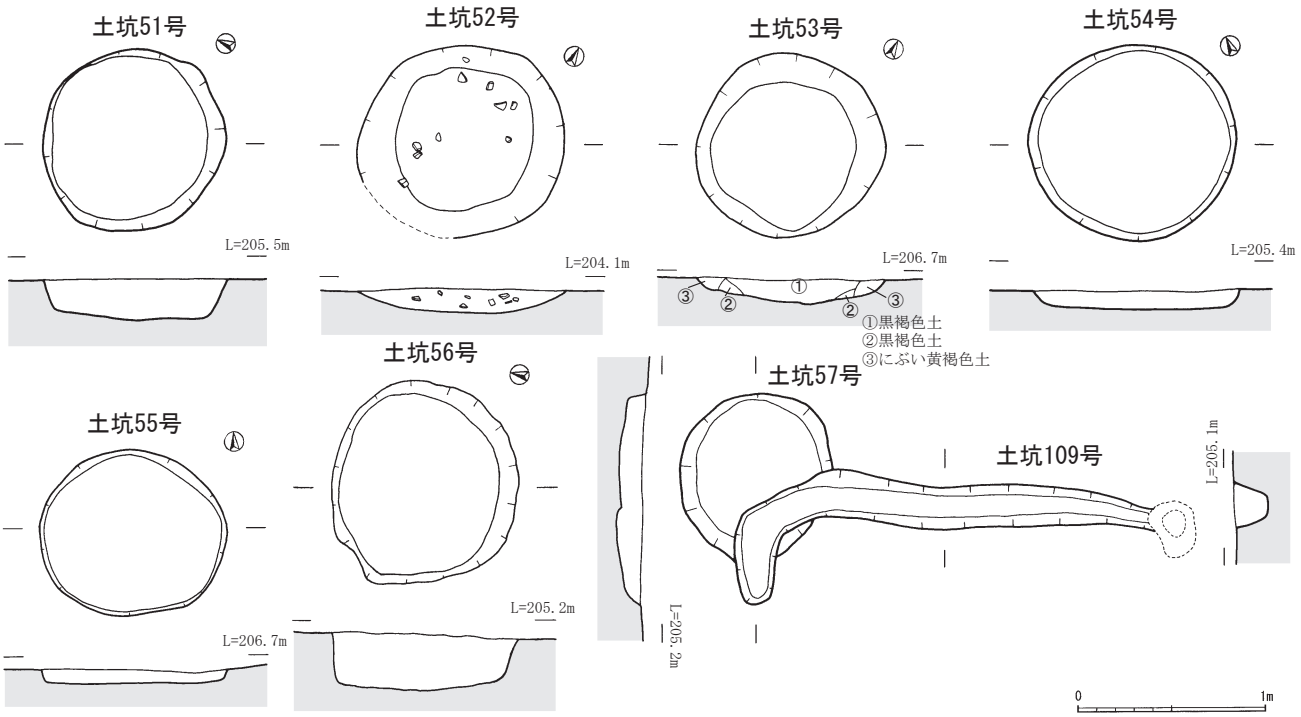
Ｈ－８区，Ⅳa層で検出された。平面形は80cm×60cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ６cmのレンズ状を呈する。埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑68号

Ｈ・Ｉ－８区，Ⅳa層で検出された。平面形は，90cm×70cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ８cmのレンズ状を呈する。埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑69号

Ｉ－７区，Ⅳa層で検出された。平面形は，95cm×78cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ８cmの浅い舟形状



第193図　中世の土坑（Type１－③，Type５－①）

を呈する。床面は，検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成している。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑70号

Ｋ－14区，Ⅳa層で検出された。平面形は，102cm×76cmの楕円形を呈する。断面形は深さ９cmの皿状を呈し，床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑71号

Ｇ－10区，Ⅳa層で検出された。平面形は，96cm×74cmの楕円形を呈し，断面形は，深さ14cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成している。埋土は，黒色土に黄褐色土が混在する土が堆積していた。

土坑72号

Ｋ－９区，Ⅳa層途中で検出された。平面形は，140cm×102cmの楕円形を呈する。断面形は，南側が大きく袋状に掘り込まれているが，ほぼ台形状を呈し，深さは，約41cmを測る。南側に44cm×40cmの隅丸方形の平坦面を形成する。埋土は，１㎜大の白パミスと２㎜大の黄色パミスが混ざる黒色土，下部は１㎜程の白パミスと２㎜の大黄色パミスが混ざるオリーブ黒色土が堆積していた。底部には多くの炭化物も含まれていた。

土坑73号

Ｆ－10区，Ⅳa層で検出された。中世の溝29で一部切られるものの平面形は，規模が推定で93cm×75cmの楕円形状を呈する。断面形は，深さ14cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑74号

Ｋ・Ｌ－19区，Ⅲb層で検出された。平面形は，123cm×53cmの長楕円形を呈する。断面形は，深さ15cmの台形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。西側はピットに切られている。埋土は，黄色ブロックを含む黒色土が堆積していた。埋土内から，土器片１点が出土した。

土坑75号

Ｇ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，90cm×66cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ６cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑76号

Ｇ－９区，Ⅳa層で，中世の土坑75号と切り合う形で，検出された。平面形は69cm×57cmの楕円形を呈し，断面形は，深さ９cmの浅い皿状を呈している。床面は明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑77号

Ｉ－３区，上位層が削平されていたためⅤ層で検出された。平面形は，117cm×95cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ25cmの舟形状を呈し，床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄褐色土･褐色土のブロックを少量含む黒色土（埋土①），黄色パミス・黄色土小ブロックが混ざる褐色土（埋土②）が堆積していた。

土坑78号

Ｆ－10区，Ⅳa層で検出された。平面形は，規模が143cm×115cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ19cmの舟形状を呈している。床面は，検出面と同形状の平坦面を形成する。埋土は，黒色土が堆積していた

土坑79号

Ｉ－６区，Ⅳa層で検出された。平面形は，規模が152cm×130cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ14cmの皿状を呈し，床面は，検出面と同形状の明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黄褐色土ブロックの混ざる黒色土が堆積していた。埋土内から土師器片２点が出土した。

土坑80号

Ｈ－６区，Ⅳa層で検出された。平面形は，規模が136cm×92cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ14cmの皿状を呈し，床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，１～２㎜大の黄橙土の粒を含む黒褐色土が堆積していた。

土坑81号

Ｆ－５区，Ⅳa層で検出された。平面形は，規模が130cm×118cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ35cmの舟形状を呈する。埋土は，２～５㎜大の黄色パミスを含む黒褐色土が堆積していた。埋土内から土師器片３点，土師器甕片19点，土器片14点，剝片１点が出土した。

土坑82号

Ｅ－24区，Ⅳa層で検出された。平面形は，規模が183cm×51cmの長楕円形を呈する。断面形は，深さ34cmの擂鉢状を呈する。埋土は，少量の黄色パミスと下部に褐色土の小ブロックを含む黒色土が堆積していた。

土坑83号

Ｇ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，140cm×75cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ19cmの舟形状を呈する。床面は明瞭な平坦面を形成している。埋土は，黒褐色土（埋土①），黒色土（埋土②），褐色土（埋土③），黒がやや強い褐色土（埋土④），黄褐色土（埋土⑤），暗褐色土（埋土⑥）が堆積していた。

土坑84号

Ｌ－18区，Ⅲb層で検出された。平面形は，155cm×83cmの長楕円形を呈し，断面形は，深さ34cmの舟形状を呈している。床面は検出面とほぼ同形状の平坦面を形成していた。埋土は，黄褐色土のブロックを含む暗茶褐色土（埋土①），黒色土（埋土②），暗茶褐色土（埋土③）が堆積していた。

土坑85号

Ｌ－５区，Ⅳa層で検出された。平面形は，60cm×38cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ約10cmの台形状を

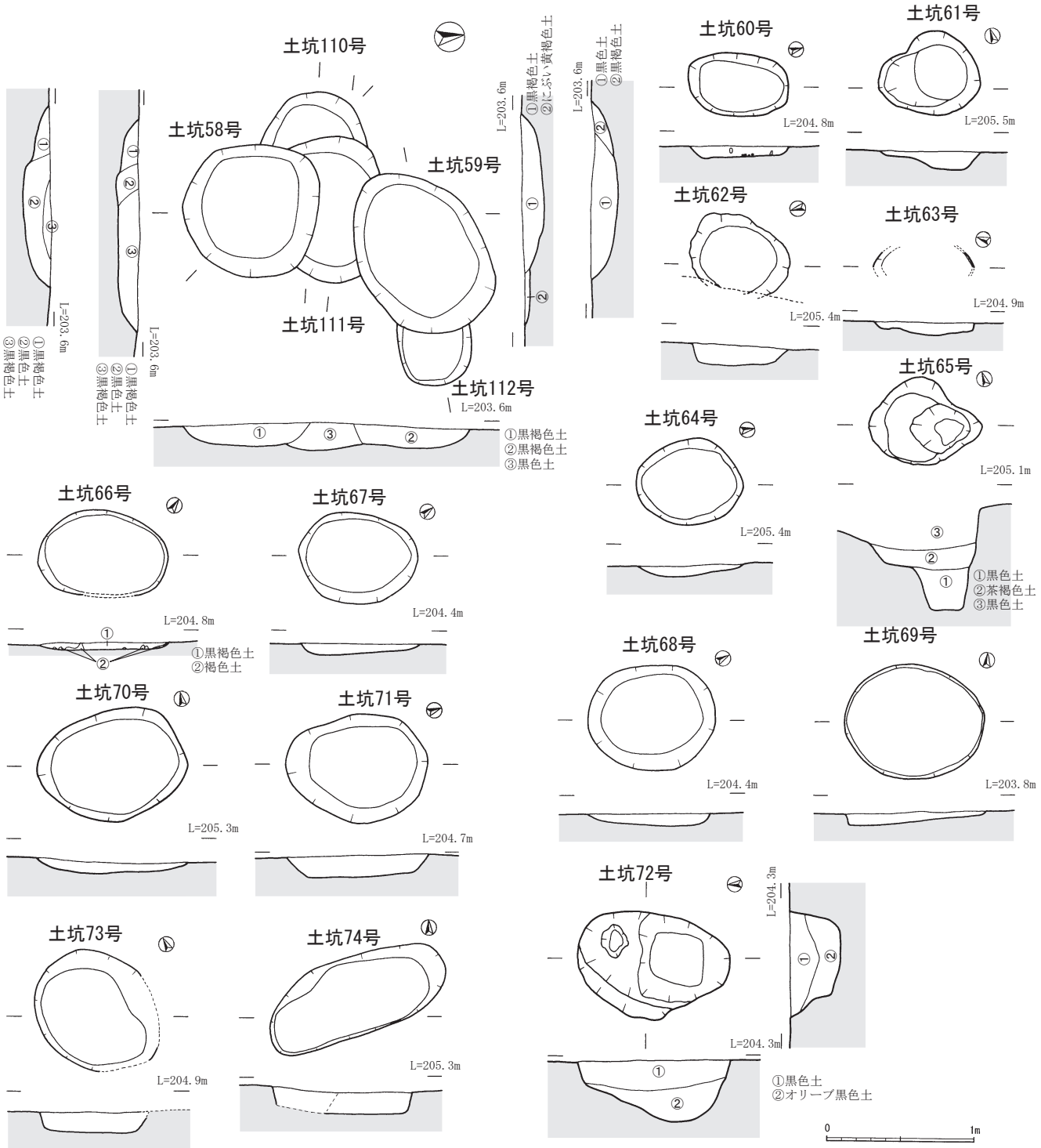
呈する。また，床面から深さ約29cmのピットが検出された。埋土は，Ⅲａ層土に類似した粘性土（埋土①），下部にはⅢb層土に類似したオリーブ褐色土（埋土②）が堆積していた。

土坑86号

Ｍ－８区，Ⅳa層で検出された。中央と両端をトレンチャーにより切られているものの平面形は，規模が推定で86cm×45cmを測り，楕円形状を呈する。断面形は，深さ12cmの浅い台形状を呈し，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，黒色土（埋土①），下部には暗茶褐色土（埋土②）がレンズ状に堆積していた。

土坑87号

Ｅ－12区，Ⅳa層で検出された。平面形は，中世の溝23の影響を受けているものの93cm×78cmの楕円形を呈していると判断できる。断面形は，台形状に掘り込まれ（深さ14cm），床面は起伏が大きい。埋土は，炭化物を含む黒色土が堆積していた。



第194図　中世の土坑（Type１－④，Type２－①，Type５－②）

Type ３（隅丸方形タイプ：第196図）

土坑88号

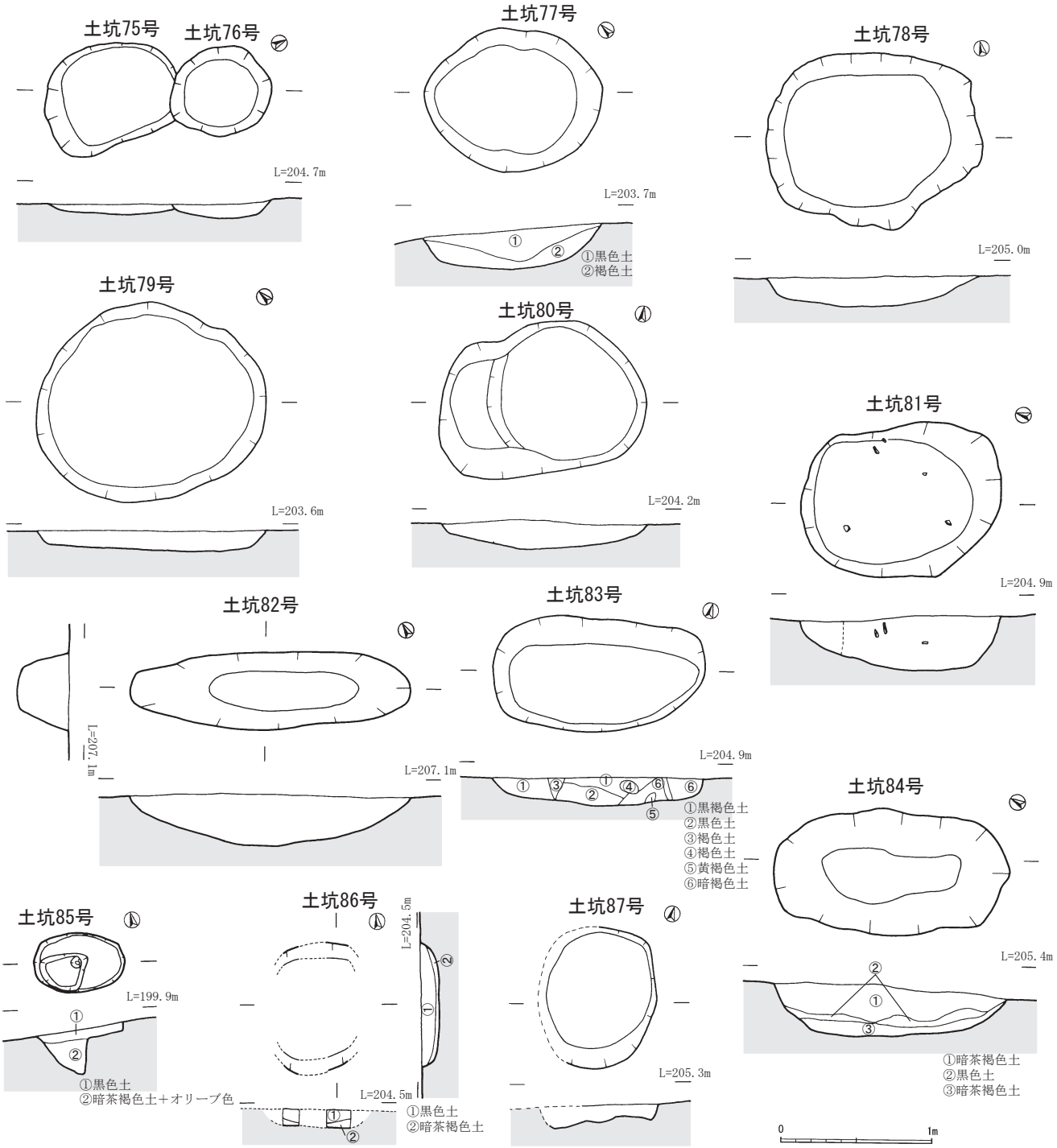
K･L－10区，Ⅳa層上面で検出された。トレンチャーにより切られているものの平面形は，規模が推定で64cm×53cmを測り，隅丸方形状を呈する。断面形は，深さ７cmの擂鉢状を呈する。残存する箇所の埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑89号

Ⅰ－６区，Ⅲa層において検出された。平面形は，規模が83cm×68cmの隅丸方形を呈し，断面形は，深さ３cmの皿状を呈する。床面は，平坦面を形成する。埋土は，１～５mm大の黄橙パミスを含む黒色土が堆積していた。最深部で深さ３cmであること，埋土が検出面の黒色土であることから，実際の検出面はもっと上部にあり，今よりも深い土坑であったとも考えられる。

土坑90号

Ｌ－10区，Ⅳa層上面で検出された。トレンチャーにより切られているものの平面形は，規模が推定で92cm×



第195図　中世の土坑（Type２－②）

91cmを測り，隅丸方形状を呈する。断面形は，深さ10cmの擂鉢状を呈する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑91号

Ｅ－10区，Ⅳa層で検出された。平面形は，規模が100cm×74cmの隅丸方形を呈し，断面形は，深さ24cmの舟形状を呈する。埋土は，明褐色土（埋土①），１㎜のパミスを少量含む黒褐色土（埋土②），１～５㎜大のパミスがまばらに入る褐色土（埋土③）が堆積していた。

土坑92号

Ｆ－５区，Ⅳa層において検出された。平面形は，規模が164cm×147cmの隅丸方形を呈し，断面形は，深さ24cmの皿状を呈する。床面に硬化面があることや，形状から住居の可能性も考えられるが，隣接する竪穴住居状遺構２号同様，住居とする明確な根拠がないため土坑として取り扱った。埋土は，暗褐色土，炭化物を多く含む黒褐色土，炭化物を多く含む暗褐色土，やや硬質の褐色土が堆積していた。埋土内から，土師器甕片３点が出土した。

Type ４（隅丸長方形タイプ：第197図）

土坑93号

Ｌ－17区，Ⅳ層上面で検出された。平面形は，規模が168cm×72cmの隅丸長方形を呈し，断面形は，深さ25cmの舟形状を呈する。床面は明瞭な平坦面を形成する。埋土は，茶褐色土と黒色土との混合土，３～４㎜大の白パミスを少量含む明茶褐色土が堆積していた。埋土内から，土師器片，土師器甕片，須恵器片，土器片，石器，礫が各１点ずつ出土した。

土坑94号

Ｎ－15区，Ⅳa層で検出された。平面形は，規模が302cm×118cmの隅丸長方形を呈し，断面形は深さ12cmの台形状を呈する。床面は明瞭な平坦面を形成する。埋土は，３～10cm程度の茶褐色土・黄褐色土のブロックを含む黒色土（埋土①），３～15cm程度の茶褐色土・黄褐色土のブロックを少量含む黒色土（埋土②），１～25cm程度の茶褐色土のブロックを多量に含む黒色土（埋土③），１～５cm程度の茶褐色土のブロックを多量に含む黒色土（埋土④）が堆積していた。埋土内から，土師器甕片や土師器片など土器片26点が出土した。

土坑95号

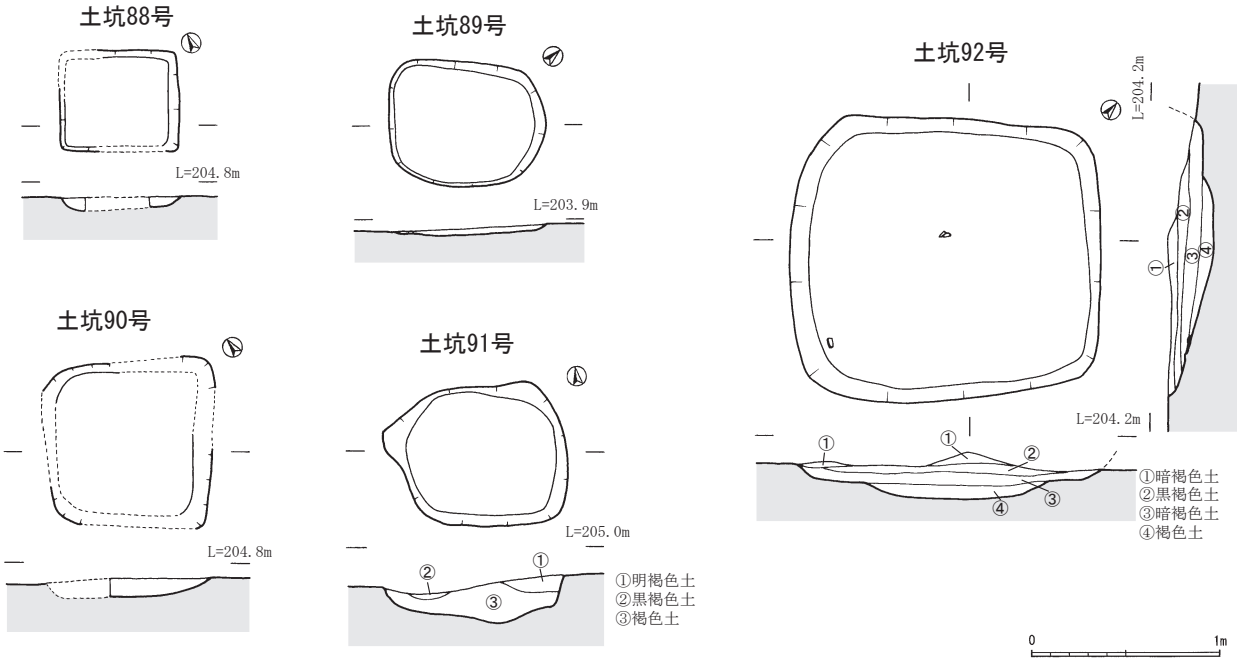
Ｌ－10区，Ⅳa層上面において検出された。トレンチャーによる撹乱の影響を大部分受けるものの平面形は，規模が推定で242cm×153cmを測り，隅丸長方形を呈する。断面形は，深さ17cmの台形状を呈し，西側へやや傾斜した平坦面を形成する。埋土は，黒色土が主に堆積し，埋土内から東播系須恵器片が出土し図化した。

土坑96号

Ｈ・Ｉ－４区，Ⅳa層において中世の溝４を切る形で検出された。平面形は，362cm×95cmの隅丸長方形を呈し，断面形は，深さ38cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。埋土は，茶褐色土のブロックや粒を含む黒色土が堆積していた。埋土内から土師器甕片３点が出土した。

土坑97号

Ｋ－19区，Ⅲb層で検出された。イモ穴の影響を受けてはいるものの平面形は，規模が推定で86cm×45cmを測り，隅丸長方形状を呈する。断面形は，南側が深い（深さ14cm）匙状を呈する。埋土は，黒色土が堆積していた。



第196図　中世の土坑（Type３）

Type ５（不定形や形状が不明なもの：第198図）

土坑98号

Ｋ・Ｌ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，ベルトと撹乱の影響で不定形であるが，規模は推定で61cm×58cmを測る。断面形は，北側が大きく掘り込まれた深さ21cmの臼状を呈している。埋土は，黒色土が堆積していた。埋土内から，軽石１点が出土した。

土坑99号

Ｆ－５区，Ⅳa層で検出された。平面形は，中世の土坑81号に切られ不定形であるが，規模は推定で84cm×70cmを測る。断面形は，深さ７cmの舟形状を呈する。埋土は，２～３㎜大の黄色パミスを含む黒褐色土が堆積していた。

土坑100号

Ｆ－16区，Ⅳa層で検出された。平面形は，西側が撹乱の影響を受けているため不定形であるが，規模は推定で51cm×17cmを測る。断面形は，深さ15cmの瓢箪を断ち割ったような形状を呈する。埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑101号

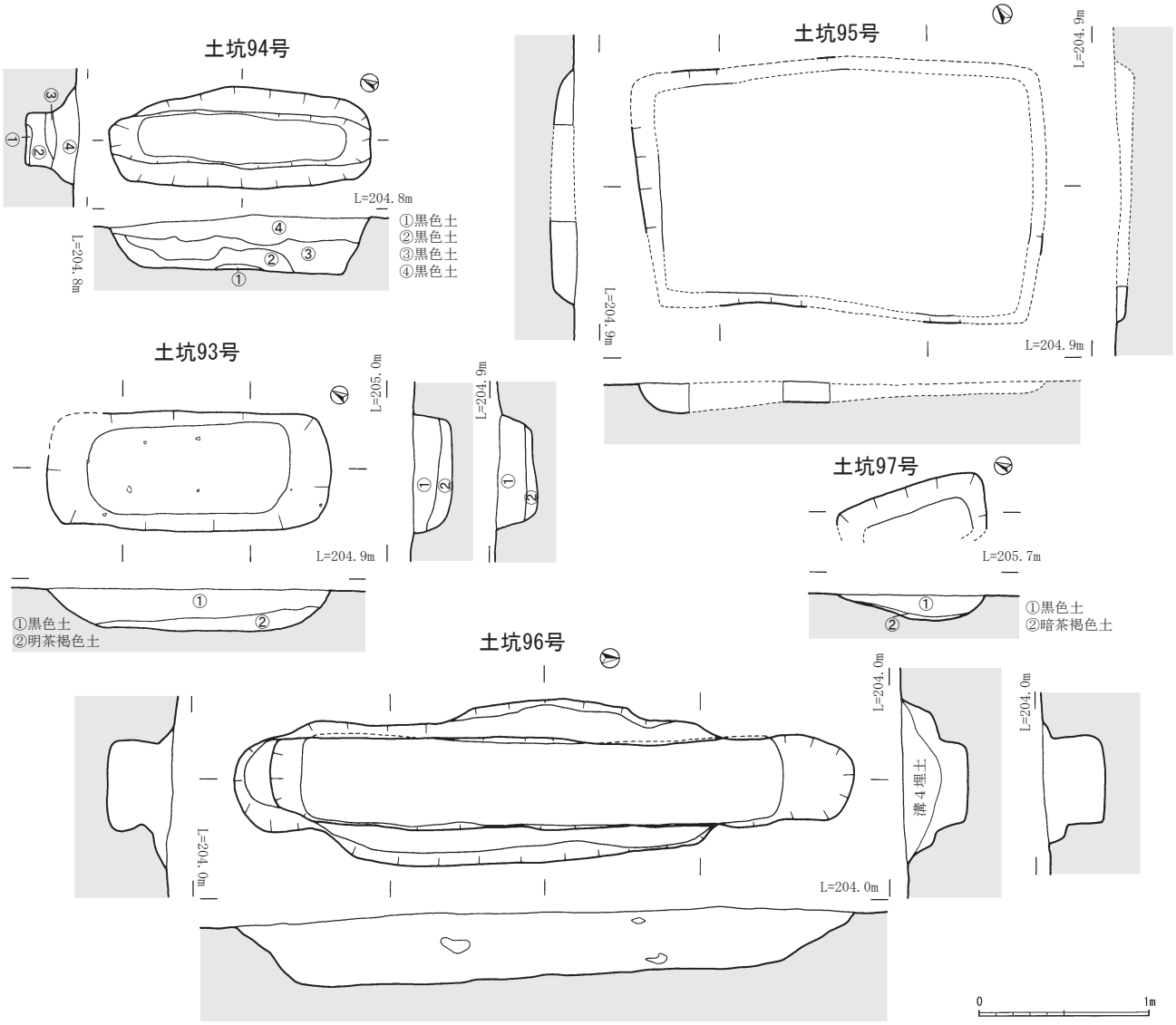
Ｇ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，一部を中世の溝29に切られ不定形であるが，規模は推定で70cm×55cmを測る。断面形は，擂鉢状を呈するものと予想され残存部の深さは20cmを測る。埋土は，黒褐色土，黒褐色土と褐色土が混ざった土が堆積していた。

土坑102号

Ｆ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，中世の溝29に切られ不定形であるが，規模は推定で75cm×40cmを測る。断面形は，深さ11cmの舟形状を呈する。埋土は，黒色土と茶褐色土が混ざった土が堆積していた。埋土内から須恵器片（胴部）１点が出土した。埋土は，黒褐色土が堆積していた。

土坑103号

Ｎ－16区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，撹乱の影響を受け不定形である。断面形は，深さ９cmの台形状を呈するものと考える。埋土は，茶褐色土ブロックを



第197図　中世の土坑（Type４）

少量含む黒色土が堆積していた。

土坑104号

Ｆ－13区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，撹乱の影響で不定形であるが，規模は推定で76cm×33cmを測る。断面形は，深さ７cmの皿形状を呈する。埋土は，黄褐色土のブロックを含む黒色土が堆積していた。

土坑105号

Ｌ－12区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，ピットに切られているため不定形であるが，規模は推定で123cm×45cmを測る。断面形は，北側が大きく掘り込まれた深さ８cmの臼状を呈する。

土坑106号

Ｇ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，中世の土坑107号とトレンチャーに切られ不定形であるが，規模は推定で80cm×35cmを測る。断面形は，深さ10cmの浅い皿状を呈する。残存する箇所の埋土は，茶褐色土が少量混ざるやや軟質な暗茶褐色土が堆積していた。

土坑107号

Ｇ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，トレンチャーに大部分を切られ不定形であるが，規模は推定89cm×44cmを測る。断面形は，深さ19cmの舟形状を呈する。床面は，明瞭な平坦面を形成する。残存する箇所の埋土は，茶褐色土が少量混ざる暗茶褐色土が堆積していた。

土坑108号

Ｌ－９区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，トレンチャーに大部分を切られ不定形であるが，規模は推定で58cm×19cmを測る。断面形は，深さ７cmの台形状を呈し，平坦面を形成する。埋土は，黒色土（埋土①），下部には暗茶褐色土（埋土②）がレンズ状に堆積していた。

土坑109号

Ｆ・Ｇ－12区，Ⅳa層でピットに切られる形で検出された。平面形は不定形で，規模は推定で222cm×70cmを測る。建物の掘り方とも考えられる土坑で，断面形は，深さ９cmの擂鉢状を呈する。埋土は，灰黒褐色土が堆積していた。

土坑110号

Ｉ－６区，Ⅳa層において検出された。平面形は，中世の土坑58・111号に切られ不定形であるが，規模は推定で72cm×33cmを測る。断面形は，深さ12cmの舟形状を呈する。埋土は，黒色土が堆積していた。

土坑111号

Ｉ－６区，Ⅳa層で，中世の土坑110号を切る形で検出された。平面形は，中世の土坑58・59号に切られ不定形であるが，規模は推定で99cm×64cmを測る。断面形は，深さ19cmの皿状を呈する。埋土は，黒色土が堆積していた。

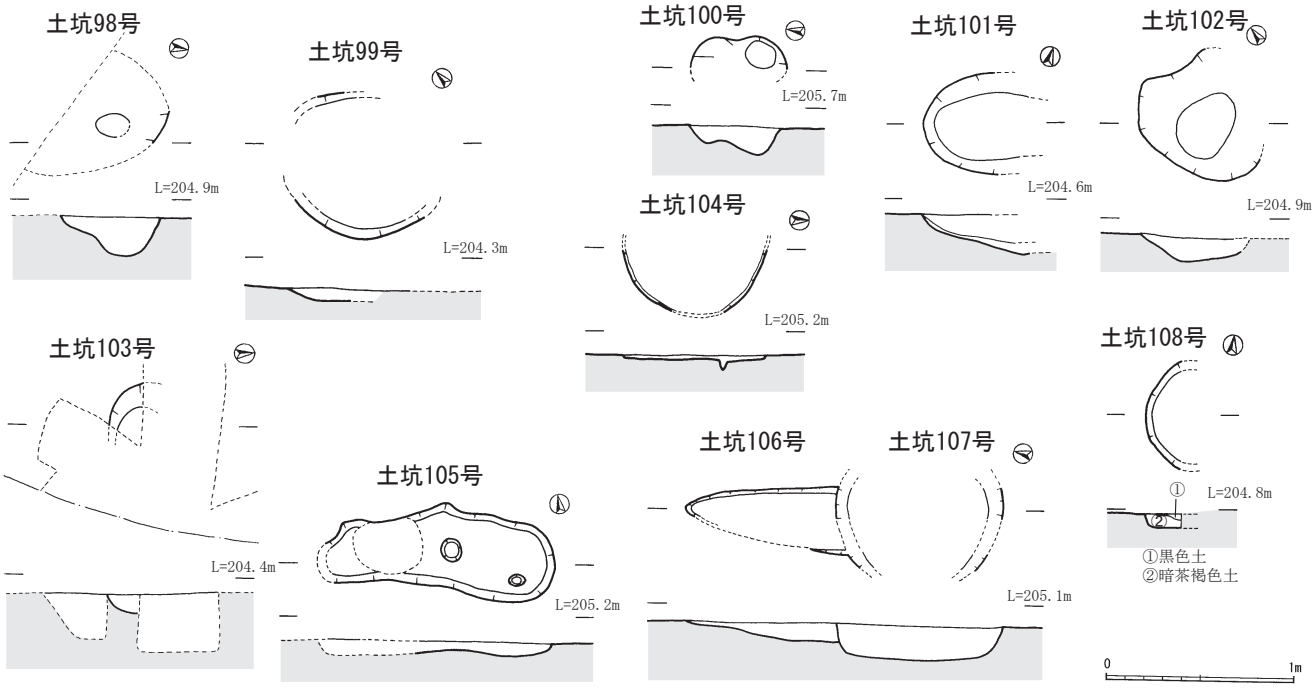
土坑112号

Ｉ－６区，Ⅳa層において検出された。平面形は，中世の土坑59号に切られ不定形であるが，規模は推定で49cm×36cmを測る。断面形は，深さ３cmの皿状を呈している。埋土は，にぶい黄褐色土が堆積していた。

その他の土坑

土坑113号

Ｇ－12区，Ⅳａ層で検出された。配置図と出土遺物しか土坑の情報がないため，規模や埋土状況は不明である。土坑内から白磁の碗・皿，中国陶器の壺等が出土しているため中世の土坑として報告することとした。



第198図　中世の土坑（Type５－③）

第91表　中世の土坑計測表

（　）内は欠損部分までの測定値

挿図番号	形状Type	掲載番号	検出区	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	調査時番　号	備考
191	1	1号	F－4	42	41	3	1039	
		2号	H・I－9	60	54	10	1280	
		3号	E－12	54	49	12	936	
		4号	E－12	59	53	4	937	
		5号	I－8	60	50	8	1279	
		6号	F－12	57	(50)	14	933	
		7号	H－9	60	56	8	1033	
		8号	H－9	50	45	6	1034	
		9号	H－9	67	55	9	1035	
		10号	H－9	59	53	7	1030	
		11号	H－9	47	45	8	1031	
		12号	F－4・5	63	54	3	1037	
		13号	K－19	68	51	18	874	
		14号	E－11	66	57	10	940	
		15号	F－4	65	63	4	1036	
		16号	F－11	67	63	8	1011	
		17号	E－12	68	60	15	935	
		18号	K－20	63	61	10	790	
		19号	E－13	66	63	10	929	
192		20号	J・K－20	70	66	12	792	
		21号	G－9	66	60	4	1264	
		22号	G・H－9	71	57	6	1016	
		23号	E－12	75	66	11	926	
		24号	F－12	72	64	7	944	
		25号	G－19	74	70	13	1114	
		26号	E－10	71	61	13	947	
		27号	G－19	80	80	12	1121	
		28号	G－19	76	(73)	12	1113	
		29号	E－12	78	(64)	11	930	
		30号	G－20	74	72	9	1116	
		31号	E－11	78	72	13	939	
		32号	F－9	79	78	9	1024－1	
		33号	F－5	84	78	11	1038	
		34号	J－20	82	76	13	791	
		35号	I－6	91	85	14	1341	
		36号	E－6	80	78	10	1040	
		37号	G－9	83	80	7	1018	
		38号	H－9	45	42	4	1029	
		39号	H－9	71	70	6	1019	
		40号	E－7	87	86	17	1044	
		41号	G・H－9	88	78	4	1017	
		42号	H－9	92	77	2	1032	
		43号	J－11	84	80	7	216	
		44号	H－9	93	87	16	1020	
		45号	I－4	97	88	6	1352	
		46号	N－16	110	96	9	777	
		47号	G－10	92	84	7	1015	
		48号	F－5	120	98	17	1313	
		49号	F－5	90	84	9	1314	
		50号	F－5	98	91	8	1312	
193		51号	E－12	98	95	22	925	
		52号	F－5	110	100	13	1315	
		53号	E－18	100	100	14	1100	
		54号	K－15	105	103	9	P2016	
		55号	G－20	97	88	8	1115	
		56号	F－12	106	100	29	943	
		57号	F－12	88	80	12	945－1	

挿図番号	形状Type	掲載番号	検出区	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	調査時番　号	備考
194	1	58号	I－6	92	89	14	1345	
	2	59号	I－6	105	95	15	1346	
		60号	G－10	70	44	9	1273	
		61号	E－12	68	57	13	941	
		62号	E－12	68	(50)	14	931	
		63号	K－11	(68)	(44)	9	348	
		64号	E・F－12	72	57	7	932	
		65号	F－12	76	58	15	950	
		66号	G－10	90	60	6	1272	
		67号	H－8	80	60	6	1277	
		68号	H・I－8	90	70	8	1278	
		69号	I－7	95	78	8	1266	
		70号	K－14	102	76	9	P2015	
		71号	G－10	96	74	14	1265	
		72号	K－9	140	102	41	169	
		73号	F－10	93	(75)	14	1025	
		74号	K・L－19	123	53	15	849	
195		75号	G－9	90	66	6	1027	
		76号	G－9	69	57	9	1026	
		77号	I－3	117	95	25	1350	
		78号	F－10	143	115	19	1010	
		79号	I－6	152	130	14	1339	
		80号	H－6	136	92	14	1317	
		81号	F－5	130	118	35	1304	
		82号	E－24	183	51	34	957	
		83号	G－11	140	75	19	1269	
		84号	L－18	155	83	34	799	
		85号	L－5	60	38	10	7	
		86号	M－8	86	(45)	12	26	
		87号	E－12	93	(78)	14	938	
196	3	88号	K・L－10	64	53	7	57-2	
		89号	I－6	83	68	3	1340	
		90号	L－10	92	91	10	51	
		91号	E－10	100	74	24	1109	
		92号	F－5	164	147	24	1316	
197	4	93号	L－17	168	72	25	720	
		94号	N－15	302	118	12	778	
		95号	L－10	242	153	17	49	
		96号	H・I－4	362	95	38	1342	
		97号	K－19	86	(45)	14	789	
198	5	98号	K・L－11	(61)	(58)	21	347	
		99号	F－5	(84)	(70)	7	1303－2	
		100号	F－16	51	(17)	15	560	
		101号	G－9	(70)	55	20	1287	
		102号	F－11	(75)	(40)	11	1012	
		103号	N－16	測定不能	測定不能	9	776	
		104号	F－13	(76)	(33)	7	454－1	
		105号	L－12	(123)	45	8	346	
		106号	G－11	(80)	(35)	10	141	
		107号	G－11	(89)	(44)	19	140	
		108号	L－9	(58)	(19)	7	31	
193		109号	F・G－12	222	70	9	945－2	
194		110号	I－6	(72)	(33)	12	1347	
		111号	I－6	99	(64)	19	1348	
		112号	I－6	(49)	36	3	1349	
－	その他	113号	G－12	－	－	－	893	

（７） 中世のピット（第199図）

中世該当のピットは765基検出された。このうち遺物が出土したピット27基について掲載・報告することとした。

ピット１（Ｐ１）

Ｌ－12区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，18cm×17cmの円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット２（Ｐ２）

Ｍ－12区，Ⅳ層上面で検出された。平面形は，19cm×18cmの円形を呈する。検出面からの深さは16cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット３（Ｐ３）

Ｉ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，推定21cm×18cmの円形を呈する。検出面からの深さは15cmを測る。埋土内から，紡錘車１点が出土した。

ピット４（Ｐ４）

Ｉ－16区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，21cm×18cmの円形を呈する。検出面からの深さは15cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット５（Ｐ５）

Ｋ－10・11区，Ⅳb層で検出された。トレンチャーに切られているものの平面形は，推定で22cm×20cmの円形を呈する。検出面からの深さは66cmを測る。埋土内から，軽石１点が出土した。

ピット６（Ｐ６）

Ｊ－16区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，22cm×21cmの円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット７（Ｐ７）

Ｉ－９区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，24cm×22cmの円形を呈する。検出面からの深さは13cmを測る。埋土内から，土師器の小皿１点が出土した。

ピット８（Ｐ８）

Ｆ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，23cm×21cmの円形を呈する。検出面からの深さは38cmを測る。埋土内から，土師器片１点が出土した。

ピット９（Ｐ９）

Ｊ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，22cm×17cmの円形を呈する。検出面からの深さは17cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット10（Ｐ10）

Ｊ－20区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，27cm×23cmの円形を呈する。検出面からの深さは39cmを測る。埋土内から，土器片３点が出土した。

ピット11（Ｐ11）

Ｉ－20区，Ⅳb層で検出された。平面形は，27cm×23cmの円形を呈する。検出面からの深さは23cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット12（Ｐ12）

Ｉ－20区，Ⅳb層で検出された。平面形は，28cm×22cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは39cmを測る。埋土内から，土器片２点が出土した。

ピット13（Ｐ13）

Ｎ－14区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，29cm×26cmの円形を呈する。検出面からの深さは43cmを測る。埋土内から，土師器の小皿２点が出土した。

ピット14（Ｐ14）

Ｉ－９区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，31cm×29cmの円形を呈する。検出面からの深さは59cmを測る。埋土内から，東播系須恵器の捏鉢１点が出土した。

ピット15（Ｐ15）

Ｈ－９区，Ⅳa層で検出された。平面形は，30cm×25cmの円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。埋土内から，軽石１点が出土した。

ピット16（Ｐ16）

Ｊ－11区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，推定32cm×31cmの円形を呈する。検出面からの深さは34cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット17（Ｐ17）

Ｅ－17区，Ⅳa層で検出された。平面形は，35cm×30cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは49cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット18（Ｐ18）

Ｇ－12区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，36cm×32cmの円形を呈する。検出面からの深さは52cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット19（Ｐ19）

Ｆ－16区，Ⅳ層で検出された。平面形は，36cm×28cmの円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット20（Ｐ20）

Ｌ－20区，Ⅲb層で検出された。平面形は，38cm×29cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは48cmを測る。埋土内から，土器片１点が出土した。

ピット21（Ｐ21）

Ｊ－10区，Ⅳa層で検出された。平面形は，33cm×28cmの円形を呈する。検出面からの深さは29cmを測る。埋土内から，土師器の小皿１点が出土した。

ピット22（Ｐ22）

Ｊ－12区，Ⅳa層で検出された。平面形は，27cm×25cmの円形を呈する。検出面からの深さは49cmを測る。埋土内から，土師器の小皿１点が出土した。

ピット23（Ｐ23）

Ｊ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，30cm×30

cmの円形を呈する。検出面からの深さは39cmを測る。埋土内から，土師器の坏１点が出土した。

ピット24（Ｐ24）

Ｉ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，19cm×19cmの円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。埋土内から，土師器の小皿１点が出土した。

ピット25（Ｐ25）

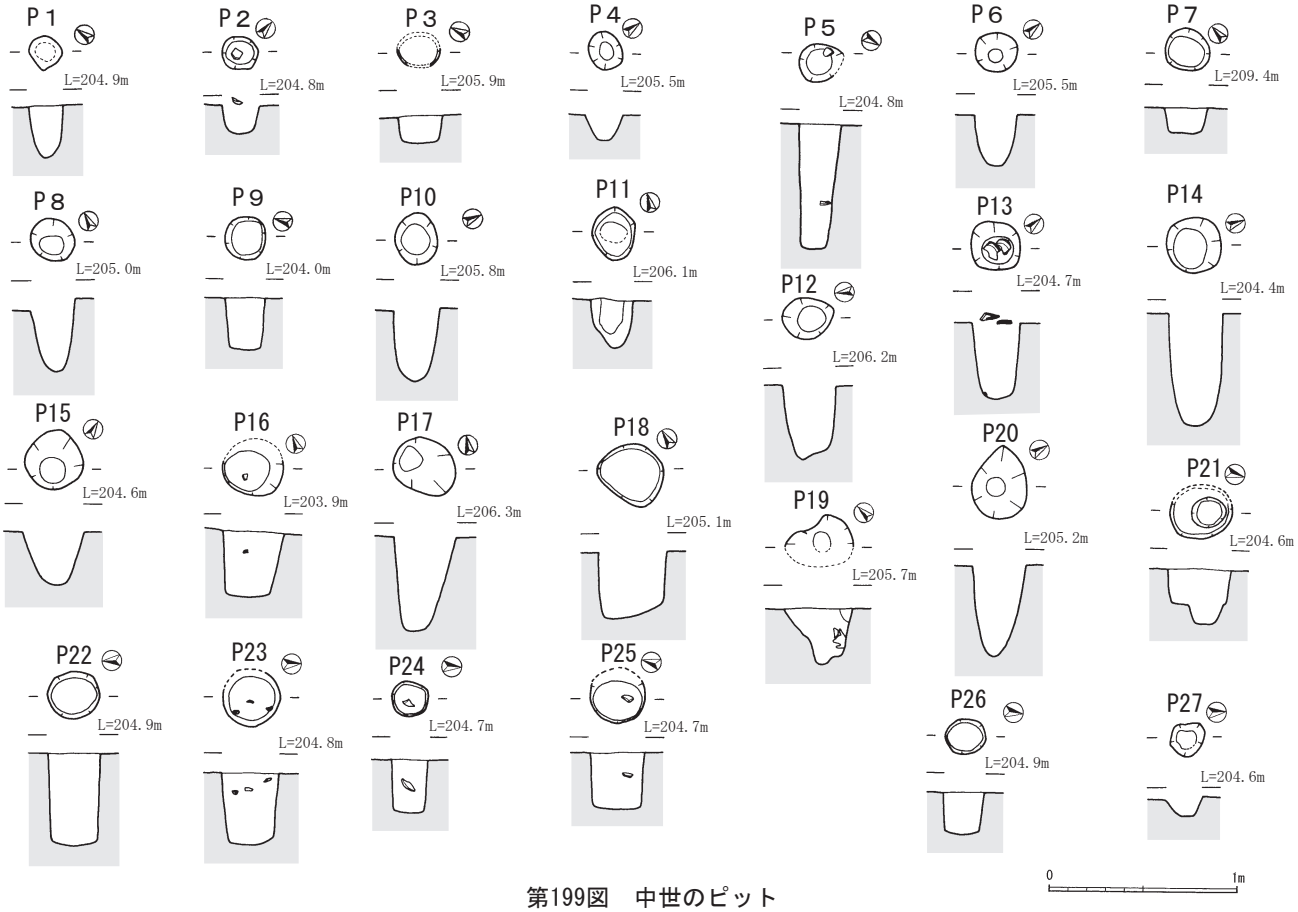
Ｉ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，推定29cm×29cmの円形を呈する。検出面からの深さは31cmを測る。埋土内から，土師器の小皿１点が出土した。

ピット26（Ｐ26）

Ｊ－11区，Ⅳa層で検出された。平面形は，21cm×18cmの円形を呈する。検出面からの深さは22cmを測る。埋土内から，土師器の小皿１点が出土した。

ピット27（Ｐ27）

Ｎ－14区，Ⅳ層で検出された。平面形は，21cm×16cmの円形を呈する。検出面からの深さは27cmを測る。埋土内から，土師器の坏１点が出土した。

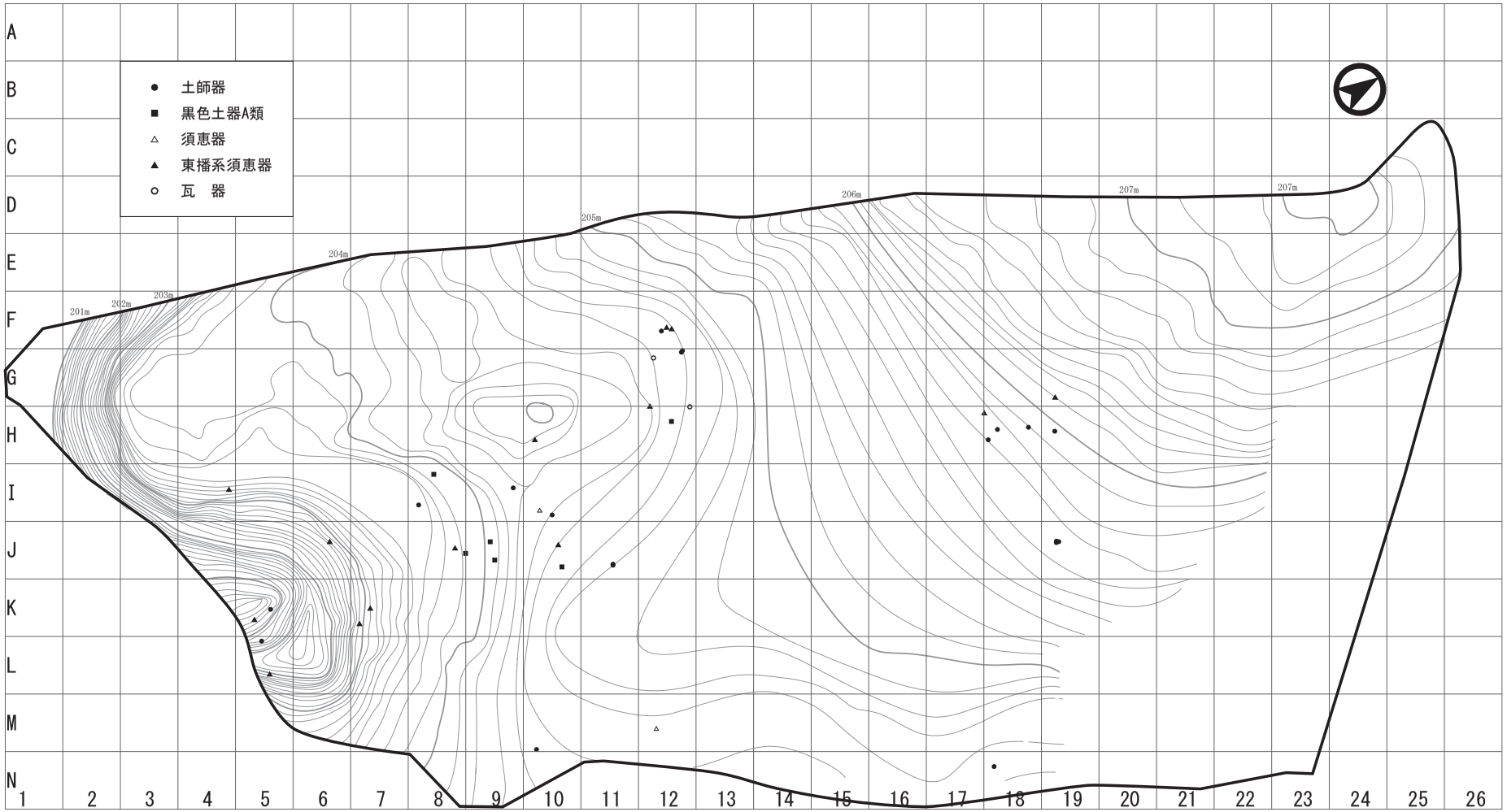


第199図　中世のピット

第92表　中世のピット計測表

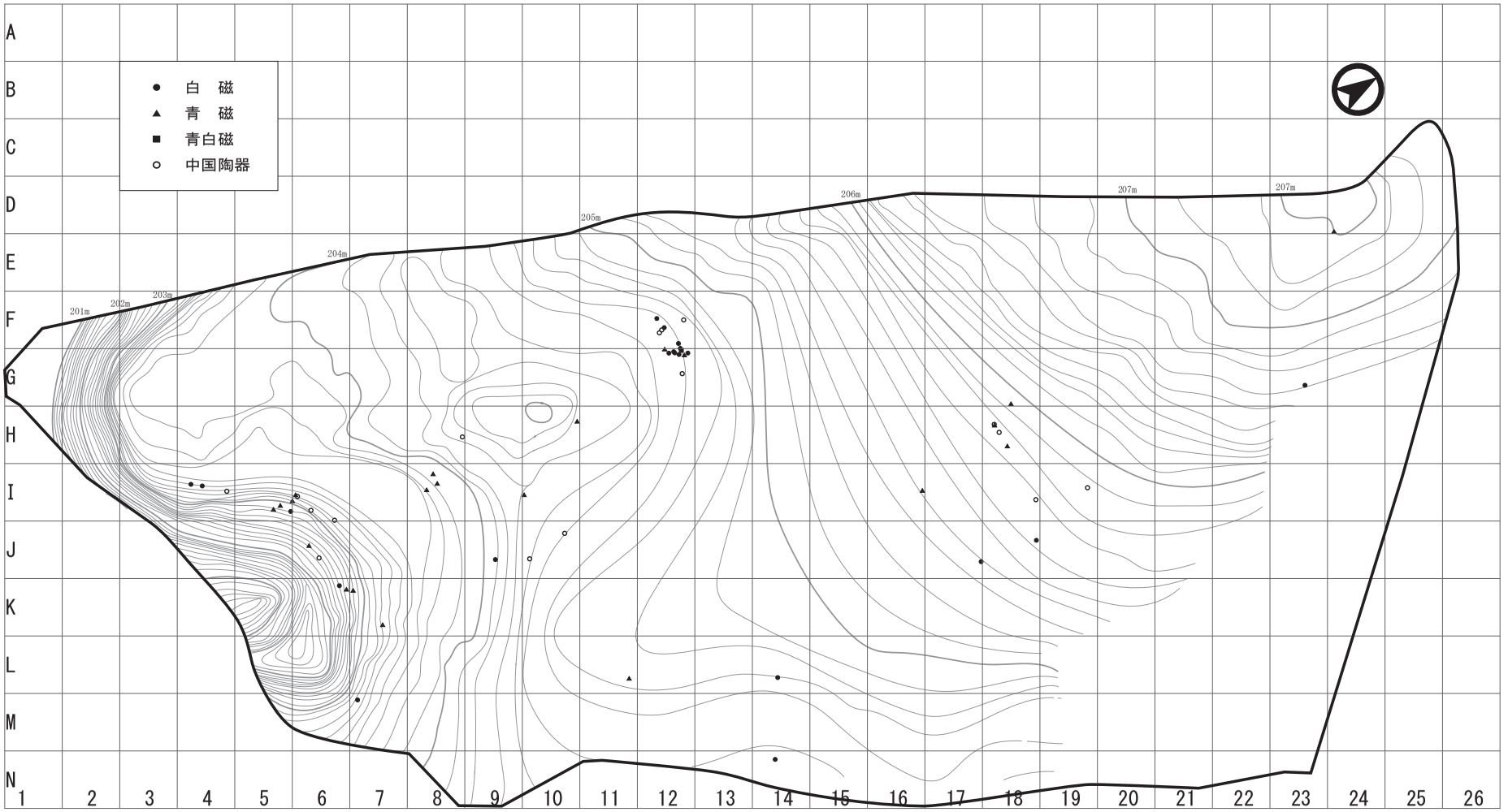
挿図番号	掲載番号	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	調査時番　号	備考
199	1	L－12	18	17	28	P417	
	2	M－12	19	18	16	P1092	
	3	Ｉ－11	22	19	15	P228	
	4	Ｉ－16	21	18	15	P2005	
	5	K－10・11	22	20	66	P415	
	6	Ｊ－16	22	21	28	P2013	
	7	Ｉ－９	24	22	13	P190	
	8	Ｆ－11	23	21	38	P484	
	9	Ｊ－11	22	17	17	掘立13Ｐ７	
	10	Ｊ－20	27	23	39	P84	
	11	Ｉ－20	27	23	23	P308	
	12	Ｉ－20	28	22	39	P456	
	13	Ｎ－14	29	26	43	P1034	
	14	Ｉ－９	31	29	59	柱穴Ｂ	

挿図番号	掲載番号	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	調査時番　号	備考
199	15	Ｈ－９	30	25	28	P257	
	16	Ｊ－11	32	31	34	掘立13Ｐ３	
	17	Ｅ－17	35	30	49	P110	
	18	Ｇ－12	36	32	52	P483	
	19	Ｆ－16	36	28	30	P565	
	20	Ｌ－20	38	29	48	P126	
	21	Ｊ－10	33	28	29	掘立３Ｐ11	
	22	Ｊ－12	27	25	49	掘立15Ｐ７	
	23	Ｊ－11	30	30	39	掘立15Ｐ３	
	24	Ｉ－11	19	19	28	掘立11Ｐ８	
	25	Ｉ－11	29	29	31	掘立14Ｐ９	
	26	Ｊ－11	21	18	22	掘立16Ｐ４	
	27	Ｎ－14	21	16	27	ピット1049	



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第200図　中世の遺物出土状況図１



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第201図　中世の遺物出土状況図２

3　遺物

(1)　遺構内遺物

ア　掘立柱建物跡内出土遺物（第202図　292～307）

292 ～ 295は掘立柱建物跡13号の柱穴10から出土した土師器の小皿である。回転糸切りで残存はよくないが，復元で口径８～ 10cm，器高1.3 ～ 1.5cm，底形5.8 ～ 8.1cmを測る。

296は掘立柱建物跡36号の柱穴から出土した土師器の皿である。底部切り離し痕は不明瞭で，ややいびつである。

297・298は掘立柱建物跡37号の柱穴から出土した。297は土師器の坏の底部で，切り離しは糸切りである。復元底径は9.6cmを測る。298は土師器の小皿の底部で，切り離しはヘラ切りである。復元底径は8.4cmを測る。

299は掘立柱建物跡39号の柱穴から出土した白磁碗Ⅳ類の口縁～体部である。

300 ～ 303は掘立柱建物跡18号の柱穴２から出土した。300は土師器の小皿の口縁～体部で，復元口径は10.4cmである。301は土師器の坏で，体部に稜線が観察できる。復元口径は12.2cm，器高は2.9cm，底径は9.2cmを測る。302は土師器の坏の底部である。切り離し痕は不明瞭である。303は土師器の小皿で，復元口径は9.8cm，器高は1.8cm，底径８cmを測る。色調は，300 ～ 302が茶褐色，303が灰褐色である。

304 ～ 307は掘立柱建物跡24号の柱穴から出土した。304は柱穴２，305・306は柱穴９，307は柱穴１から出土した。304・305は白磁の碗Ⅴ類の口縁部で，口縁端部で外反し，口縁内側に沈線を巡らす。306は白磁の皿の口縁部で内部に１条の沈線を巡らし，外面は底部近くまで釉薬がかかっている。307は土師器の坏の底部で，切り離しは糸切りである。復元底径は10cmを測る。色調は乳褐色を呈する。

イ　ピット内出土遺物（第203図　308～315）

308 ～ 315は中世のピットから出土した土師器である。

308はピット21から出土した小皿で，底部切り離しは不明瞭である。

309はピット22から出土した小皿で，底部切り離しは糸切りである。復元口径は7.8cm，器高は1.5cm，底径は６cmを測る。

310はピット23から出土した坏の口縁～体部で，復元口径は13.8cmを測る。

311はピット24から出土した小皿である。底部切り離しは糸切りである。口径は9.7cm，器高は1.5cm，底径は8.3cmを測る。見込み中央部分が盛り上がっている。

312はピット25から出土した小皿である。口縁端部が一部欠損している。底部切り離しは不明瞭であるが，ヘラ切りであると思われる。復元底径は8.4cmである。

313はピット26から出土した小皿である。底部切り離しはヘラ切りである。復元口径は9.2cm，器高は1.2cm，底径7.4cmを測る。

314はピット27から出土した坏の底部で，切り離しはヘラ切りである。色調は茶褐色を呈する。古代の土師器の可能性もある。

315はピット７から出土した小皿である。復元口径は8.8cm，器高は1.1cm，底径は７cmを測る。

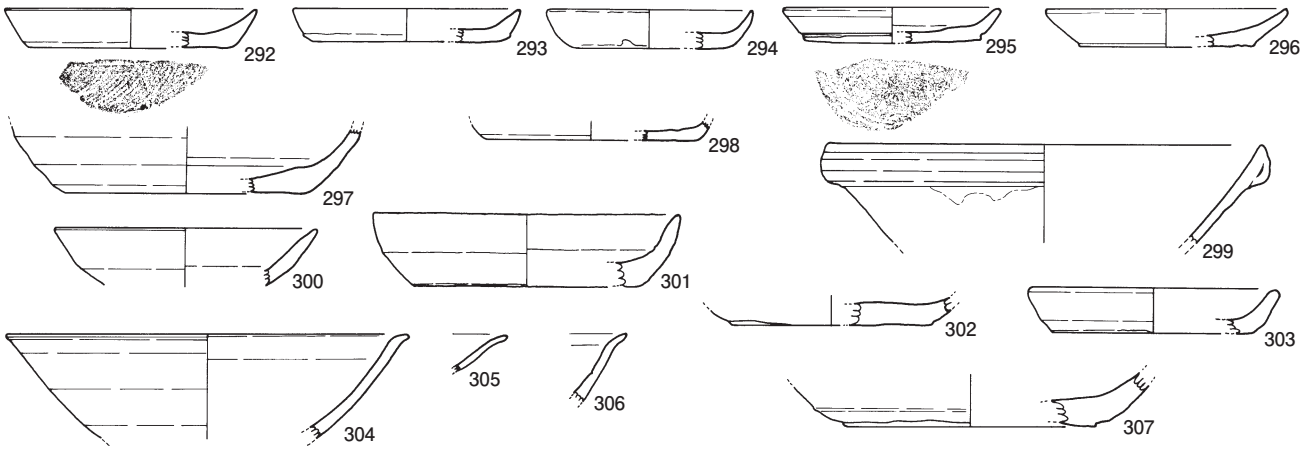
ウ　土坑内出土遺物（第203図　316～333）

316は古代の土坑65号から出土した白磁碗Ⅳ類の底部である。

317は中世の土坑95号から出土した東播系須恵器の捏鉢の底部近くのものである。

318は中世の土坑43号から出土した土師器の坏の底部で，切り離しは回転糸切りである。復元底径は8.2cmを測る。

319・320・322は縄文時代晩期の土坑から出土したが，何らかの理由で流れ込んだものである。319は白磁碗Ⅷ類の底部で，見込みに内底輪状釉剥ぎが見られるが，外面は釉が見られない。320は青白磁の合子の蓋である。322は土師器の小皿である。底部切り離しは，ヘラ切りである。復元口径は8.9cm，器高は1.1cm，底径は7.7cmを



第202図　中世の遺物１

測る。

321は中世の土坑46号から出土した土師器の小皿である。底部切り離しは，回転糸切りである。復元口径は9.5cm，器高は２cm，底径は6.5cmを測る。

323は中世の土坑47号から出土した白磁碗Ⅳ類の口縁部である。

324は中世の土坑32号から出土した白磁碗Ⅴ類の口縁～体部である。

325 ～ 333は中世の土坑113号から出土したものである。

325・326は白磁碗Ⅴ類で，327も同類の白磁碗Ⅴ類と思われる。328は白磁皿Ⅷ類である。329は龍泉窯系青磁Ⅱ類の口縁である。330は青白磁合子の身である。331は中国陶器壺の胴部である。332・333は土師質鍋で口縁は「くの字」状に外反し，器高は低い。内外面とも，ハケ目調整が施され，一部に指圧痕が残る。

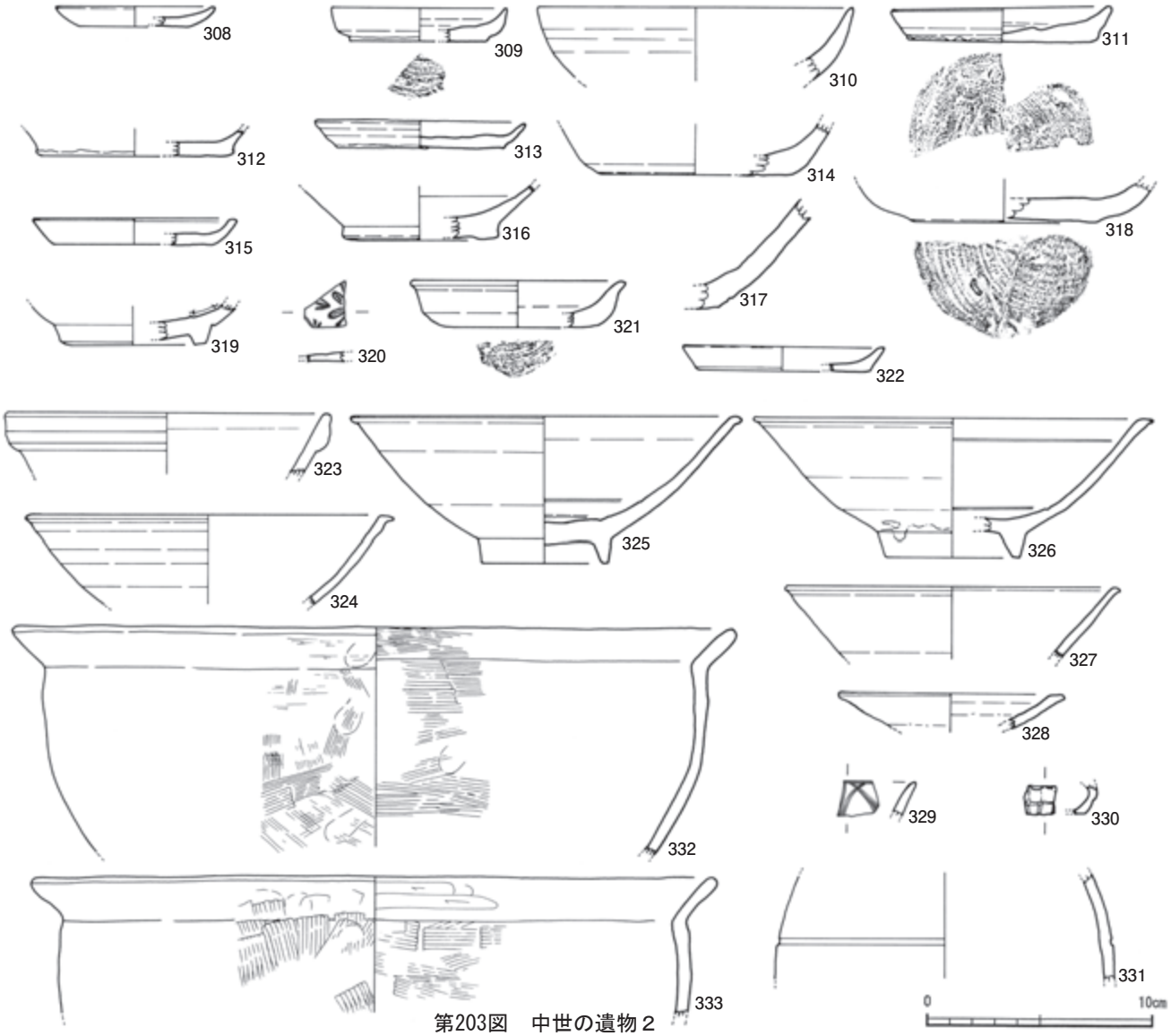
334は溝29から出土した龍泉窯系青磁皿で，底部のみ露胎である。

335 ～ 342は溝38から出土した。335は土師器の坏の底部で，切り離しはヘラ切りである。復元底径は9.2cmを測る。336も土師器の坏の底部で，切り離しは回転糸切りである。復元底径は10cmを測る。337は東播系須恵器の捏鉢の底部である。338は同安窯系青磁碗で，色調は灰白色を呈している。339も同安窯系青磁碗である。340・341は中国陶器で，340は頸部，341は底部である。342は中国陶器の甕の胴～底部である。

343は溝23から出土した龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。

344 ～ 358は溝29から出土した。344は黒色土器Ａ類の埦の口縁部である。345は土師器の坏の体～底部で，切り離しは回転糸切りである。復元底径は８cmを測る。346は土師器の坏の底部で，復元底径は9.6cmを測る。347は土師器の小皿で，復元口径は9.1cm，器高は1.2cm，底径は7.4cmを測る。348は瓦器の小皿で，表面が剥落している。復元口径は9.5cmである。349・350は手づくね

エ　溝状遺構内出土遺物（第204図　334～365）



第203図　中世の遺物２

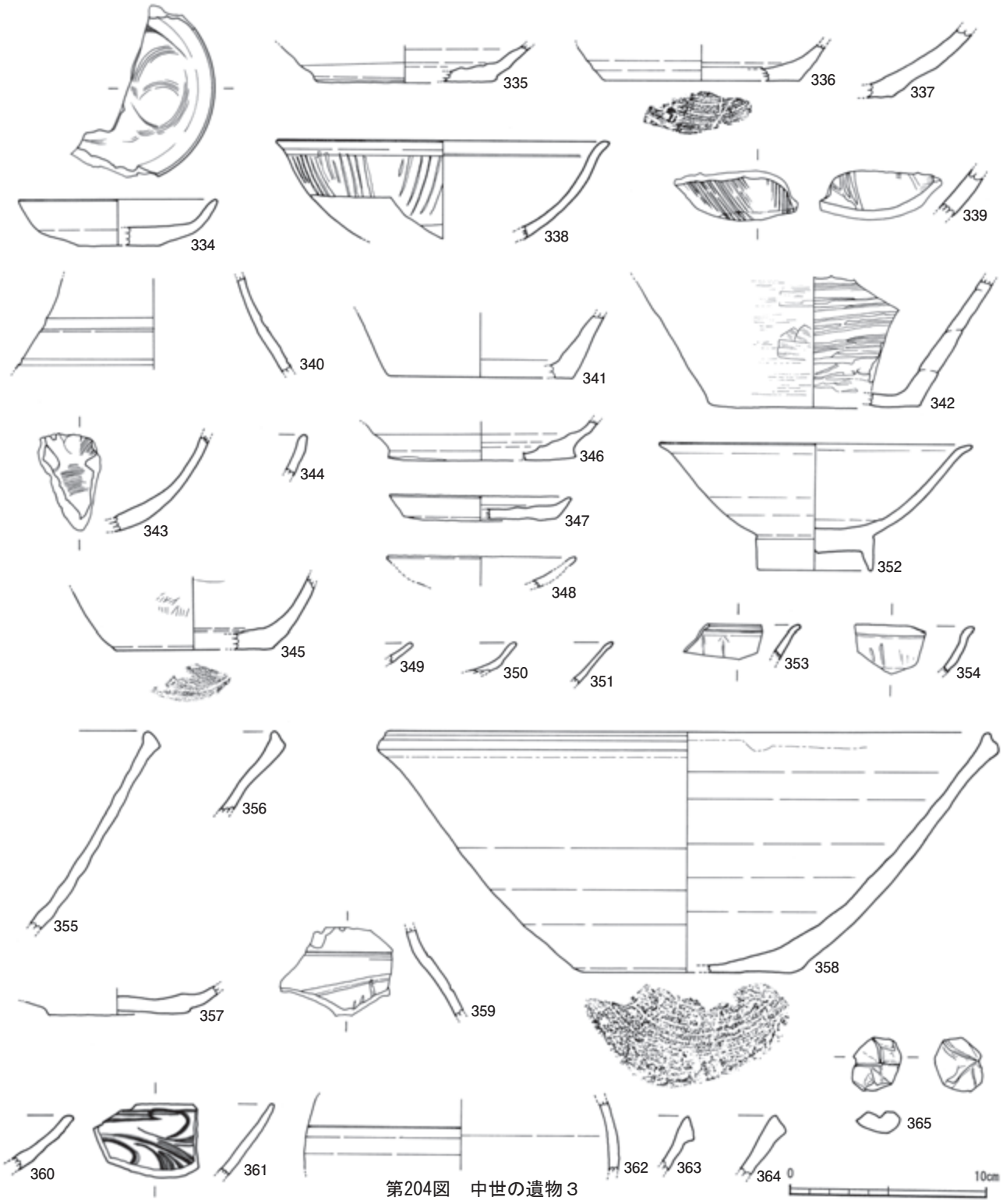
土師器の小皿である。二次焼成を受けていると思われる。351は白磁の皿の口縁部である。352は白磁碗Ⅴ類である。釉が体部の半分ほど掛かっている。353・354は同安窯系青磁の碗の口縁部である。355 ～ 358は東播系須恵器の捏鉢である。

359は溝28から出土した中国陶器の壺の肩部である。

360 ～ 362は溝38から出土した。360は土師器の坏の口縁部である。361は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の口縁部である。362は水注の胴部片と思われる。

363・364は溝７から出土した東播系須恵器の捏鉢の口縁部である。

365は溝４から出土した滑石加工品である。紐を巻いたような筋が残っており，錘として使用されていたことがうかがえる。



第204図　中世の遺物３

(2)　包含層出土及び一括遺物

ア　中世前半の遺物

中世前半に属する遺物は，在地系の黒色土器Ａ類，土師器，東播系の須恵器，中国産の青磁・白磁・青白磁・陶器が多く出土した。また，本県での出土例が少ない畿内産のものと思われる瓦器・手づくね土師器も出土している。

遺物は小破片のものが多く，詳細な分類は困難であったが，多くは大宰府の時期区分Ｃ・Ｄ期に該当すると思われる。

黒色土器Ａ類（第205図　366～370）

366 ～ 370は埦の破片である。高台は短く低い。

土師器（第205図　371～388）

371 ～ 376は坏である。371の口径は15.4cmで，口縁部は直行し，体部はやや内湾する。377 ～ 388は小皿である。口径が8.8 ～ 10.0cmで，底部切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りの両方があり，両者の形態差はない。ヘラ切りは切り離し後に調整を行っておらず，切り離し痕が渦状または同心円状に残る。器形は扁平で，厚い底部から体部を短く引き伸ばしている。色調は白色，肌色，褐色のいずれかを呈している。胎土には赤色の粒が目立つ。

手づくね土師器（第205図　389～391）

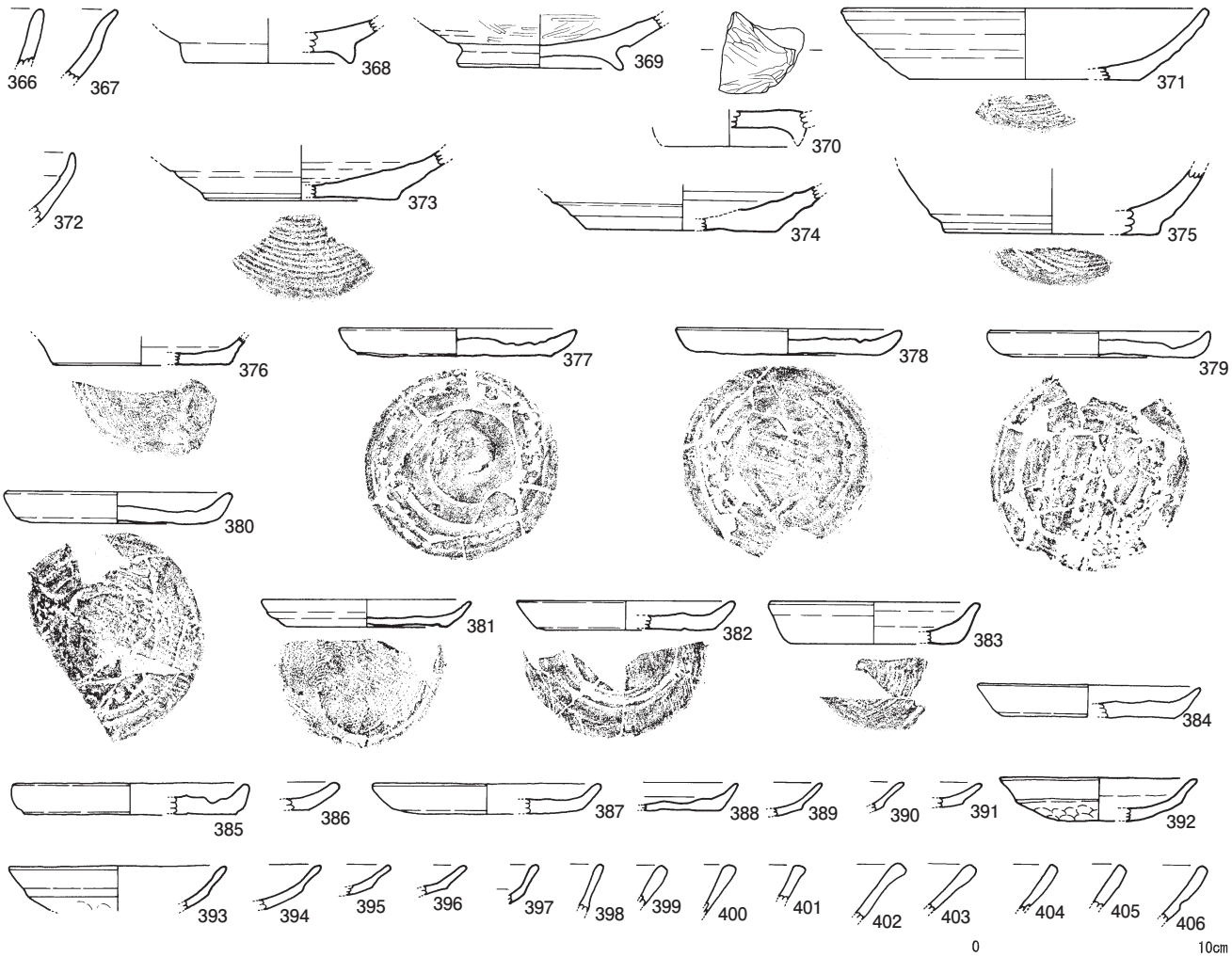
389 ～ 391は手づくね技法を用いた小皿の破片である。口縁部外面の１cmほどの部分を強くナデており，体部に段がつく。底部外面には指圧痕が残る。色調は表面が肌色を呈するが，中は赤色である。胎土は細かな白色の粒が入る。

瓦器（第205図　392～398）

埦と小皿が出土しているが，小片のため全体形の分かるものは少ない。392 ～ 397は小皿である。口縁部外面の１cm程の部分を強くナデており，体部に段がつく。表面が摩耗していないものは内面にミガキによる暗文が残る。色調は黒色の強いものから灰色のものまである。胎土は手づくね土師器同様に小さな白色の石粒が入る。398は埦である。表面は内外面ともに炭素を吸着させて黒色化している。内面にはミガキが施されている。

須恵器（第205図　399～406）

399 ～ 406は碗や坏など小型の供膳具と考えられる口縁部片である。胎土には東播系須恵器の捏鉢と同様に白色の粒が入り，口縁部に自然釉がかかる。直線的もしくはやや内湾する体部から口縁部が直行する。



第205図　中世の遺物４

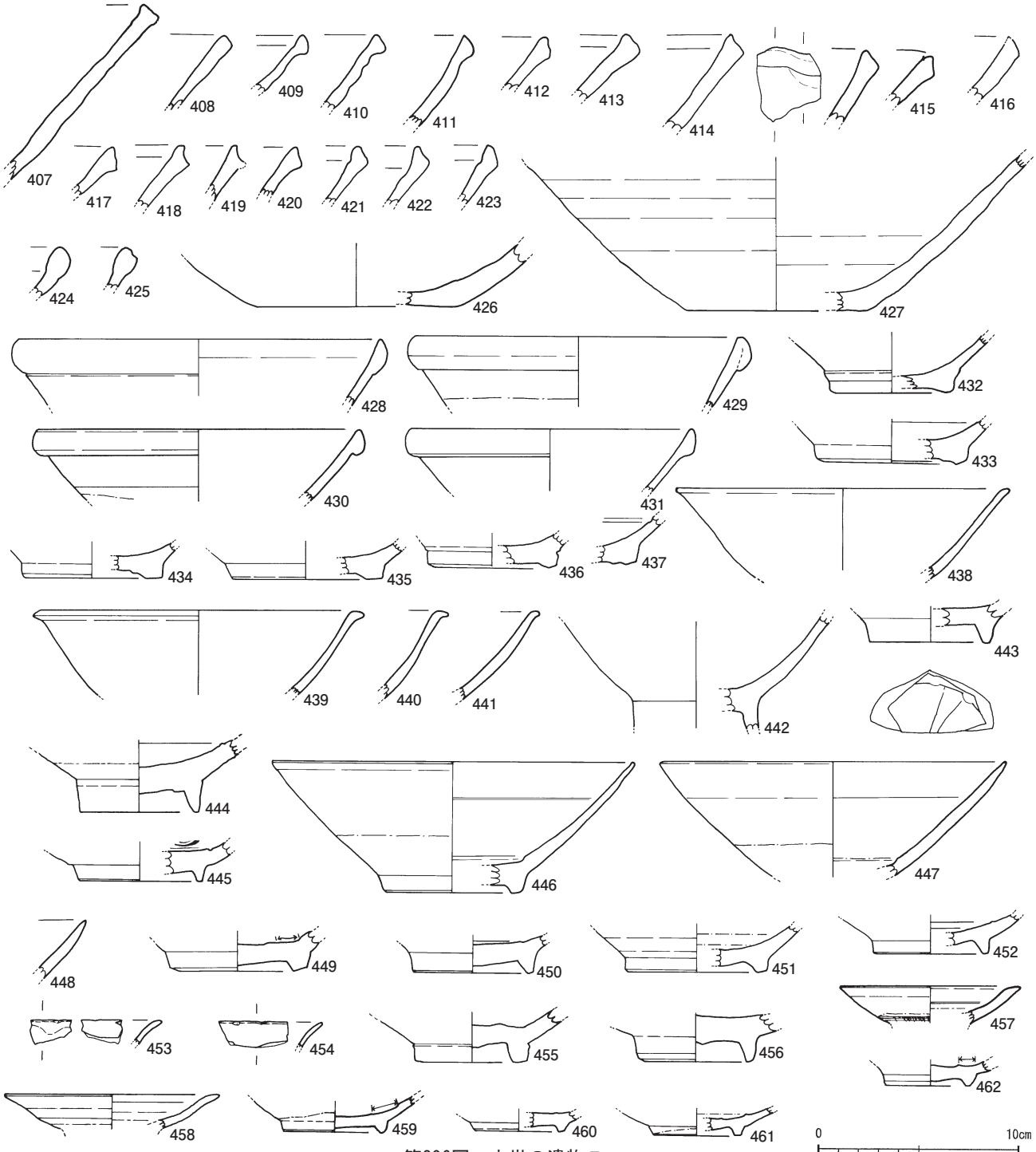
東播系須恵器（第206図　407～427）

407 ～ 427は東播系須恵器の捏鉢である。

407 ～ 425は口縁部の特徴で分類した。407・408は口縁部が直行するものである。409 ～ 411は口縁部外面の端部が突出し，段をなすものである。これらは接合できなかったが，同一個体の可能性がある。412 ～ 420は口縁部が肥厚し，口唇部が外傾する。さらに，418 ～ 420は口唇部がやや凹む。421 ～ 423は口縁部内側が凹むものである。424・425は口縁部が丸みを帯びている。426・427は底部片である。

白磁（第206図　428～462）

428 ～ 456は碗で，428 ～ 454は大宰府分類のⅣ～Ⅵ・Ⅷ類に該当するものが出土している。428 ～ 437は碗のⅣ類に該当する。428 ～ 431は口縁部片で玉縁状を呈する。432 ～ 437は底部片である。畳付けは広く，高台内は浅く削り出されている。438 ～ 441は端反りの口縁部をもつ。442 ～ 444はⅤ類の底部片で，高くシャープな高台を有する。445はⅥ類の底部片である。446 ～ 452はⅧ類で，448以外は，見込が輪状に釉剥ぎされている。また，446は口縁部から底部まで残存しており，口縁部



第206図　中世の遺物５

は直口する。453・454は口縁部片で輪花となる。釉調はⅤ・Ⅵ・Ⅷ類と同じである。455・456は碗の底部片である。455は幅の広い高台を有し，C群（ビロースクタイプ）に近い特徴をもつ。456は青味のある白磁釉がかかり，高台は高い。

457 ～ 462は皿で，大宰府分類のⅢ類に該当するものである。内面見込を蛇の目釉剥ぎする。口縁部はやや外反し，内面体部中位に1条の沈線がめぐる。釉薬は外面体部中位が無釉となる。

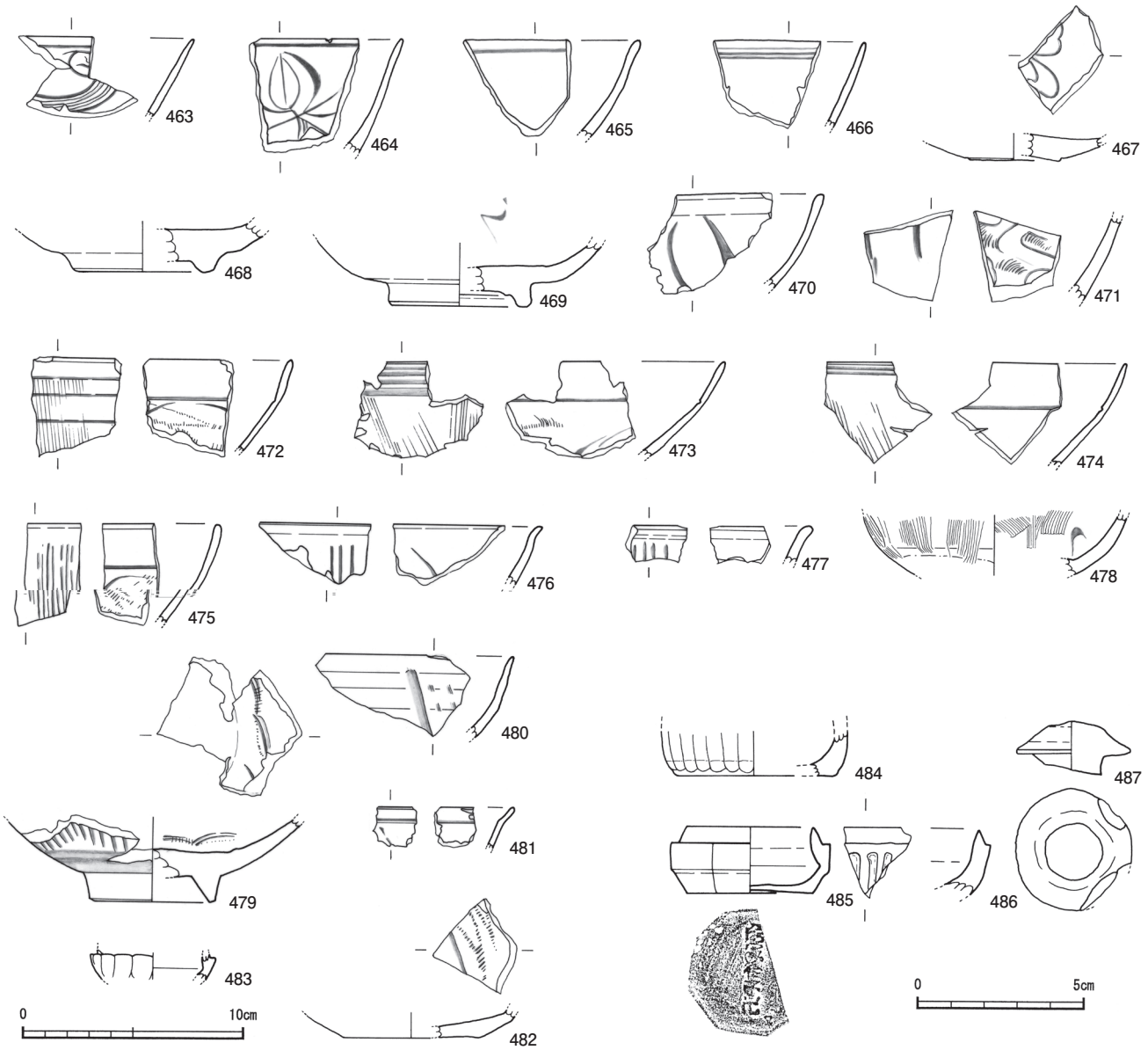
青磁（第207図　463～482）

463 ～ 471は龍泉窯系青磁である。463 ～ 469は碗Ⅰ類で，463 ～ 466の口縁部は直口する。外面は無文で，内面は劃花文を描くか，口縁部直下に1条の沈線を施す以外無文となる。468・469は高台内を低く削り出されている。470・471は碗Ⅱ類で外面に蓮弁文が描かれる。蓮弁文は鎬のないⅡa類と鎬のあるⅡb類がある。

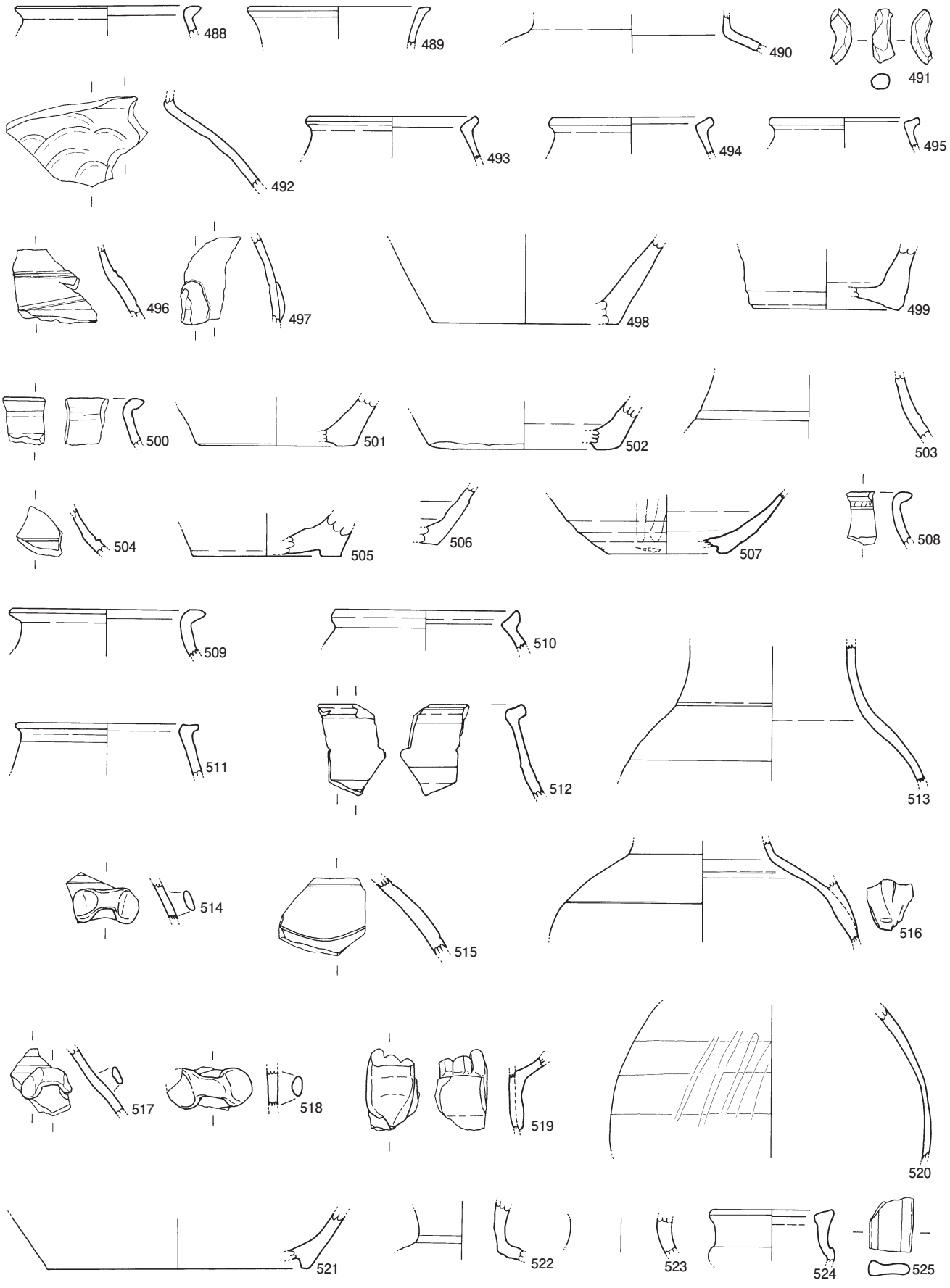
472 ～ 482は同安窯系青磁である。472 ～ 481は碗で外面に櫛目文が，内面にも櫛描文が描かれる。479の高台は高くシャープな作りである。482は皿で,底部は平底である。内面には櫛描文が描かれる。体部は屈曲し，口縁部に移行する。

青白磁（第207図　483～487）

483は合子の身の破片である。484は合子の身の底部で485は合子の身である。半分ほどが残存するが，上面観は八角形をなす。底面に「李家合子記」とみえるスタンプがある。体部は底面から開きながら立ち上がり，屈曲後真っ直ぐ立ち上がる。受け部分と底面が無釉である。径3.6cm，高さ2.0cmを測る。486は合子の蓋の破片と考えられる。釉調は白味が強く優品である。487は小壺または梅瓶の蓋である。上面と下面の半分程度に釉がかかる。下面は斜方向にヘラ切りされ不安定である。径3.5cm，高さ1.6cmを測る。



第207図　中世の遺物６



第208図　中世の遺物７

中国陶器（第208図　488～525）

釉薬や胎土により５群に分けた。

１群（488 ～ 492）は，光沢のある黄白色の釉薬がかかり，胎土に黒色粒を含む短頸の壺もしくは水注である。口唇部は平坦で，口縁部は外に突出する。頸部から肩部へは屈曲し，肩部は緩やかに下がりながら広がる。釉薬は外面全体にはかかるが，内面は口縁部付近にかかり，頸部から下はかからない。491 は断面が隅丸方形を呈する細い耳か把手部分の破片と考えられる。

２群（493 ～ 499）は，光沢のある青灰色の釉薬がかかる壺もしくは水注である。493 ～ 495 の口縁部は短く外傾し，頸部で屈曲し，肩部は急である。肩部には１～２条の沈線がみられる。498・499 は釉薬は内外面ともにかかり，外底畳付部分は無釉である。

３・４群（500～515）は，黄褐色や黒の強い緑色を呈する釉薬がかかる無頸の壺もしくは水注である。口縁部は短く外傾し，頸部で屈曲し，肩部は急である。胎土は灰色で黒色粒を含む。釉薬は内外面ともかかり，外底畳付部分は無釉である。514は横耳部分の破片で，その直上には２条の沈線がめぐる。515は水注の頸部から肩部の破片と考えられる。

５群（516～525）は，釉薬が黄褐色または茶褐色で胎土が赤褐色を呈する壺もしくは水注である。。516は頸～肩部の破片で胴部へと移行する部分に把手が貼り付けられている。また，519も把手部分の破片である。522・523は壺の頸部片で強く屈曲して肩部に移行する。内外面とも無釉で，胎土は赤色を呈する。524は短く直立する頸部をもつ壺である。525は水注の把手部分の破片である。中心が凹んでいる。

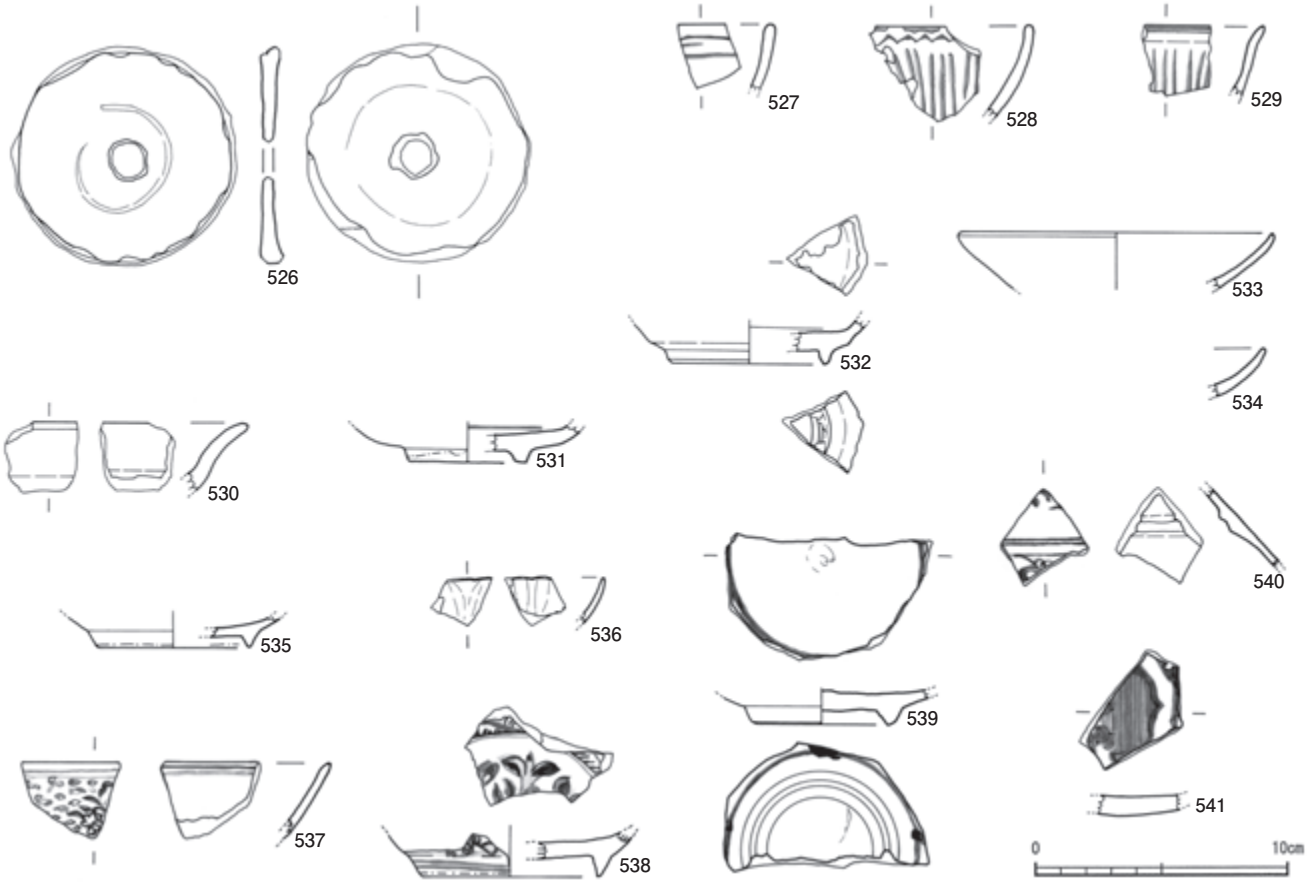
紡錘車（第209図　526）

526は，土師器小皿を転用した紡錘車と思われる。元の土師器はヘラ切りで，底部が磨かれているものと思われる。最大径8.8cm，高さ約１cmである。

イ　中世後半の遺物（第209図　527～541）

527 ～ 532は青磁である。527 ～ 530は口縁部片で，527は直口し，口縁部外面に雷文帯が描かれている。528・529は口縁部外面に細線蓮弁文が描かれ，直口するものと外反するものがある。531・532は青磁の底部片である。

533 ～ 536は白磁である。533・534は白磁坏の口縁部片で森田分類のＤ群に該当する。535は森田分類Ｅ群の皿の底部片，536は森田分類Ｅ群の菊皿の口縁部片である。537 ～ 541は青花の破片である。537・538は景徳鎮窯系，539 ～ 541漳州窯系の青花である。



第209図　中世の遺物８

第93表　中世の遺物観察表１
掘立柱建物跡内出土遺物　観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	種類	器種	分類	胎土の色調	釉薬	部位	法量（cm）			文様・調整		備考
									口径	底径	器高	外面	内面	
202	292	掘立13号	土師器	小皿		浅黄	－	口縁～底部	10.0	8.1	1.5	ナデ・糸切り	ナデ	
	293	掘立13号	土師器	小皿		浅黄橙	－	口縁～底部	9.0	8.2	1.3	ナデ・糸切り	ナデ	
	294	掘立13号	土師器	小皿		橙	－	口縁～底部	8.2	5.8	1.5	ナデ・糸切り	ナデ	
	295	掘立13号	土師器	小皿		浅黄橙	－	口縁～底部	8.6	7.0	1.4	ナデ・糸切り	ナデ	
	296	掘立36号	土師器	Ⅲ		にぶい黄橙	－	口縁～底部	9.6	7.0	1.5	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	297	掘立37号	土師器	坏		にぶい黄橙	－	底部	－	9.6	－	ナデ・糸切り	ナデ	
	298	掘立37号	土師器	小皿		灰黄	－	底部	－	8.4	－	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	299	掘立39号	白磁	碗	Ⅳ	灰黄	白濁した透明釉	口縁～体部	17.8	－	－			
	300	掘立18号	土師器	小皿		茶褐色	－	口縁～体部	10.4	－	－	ナデ	ナデ	
	301	掘立18号	土師器	坏		茶褐色	－	口縁～底部	12.2	9.2	2.9	ナデ	ナデ	
	302	掘立18号	土師器	坏		茶褐色	－	底部	－	8.0	－	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	303	掘立18号	土師器	小皿		灰褐色	－	口縁～底部	9.8	8.0	1.8	ナデ・糸切り	ナデ	
	304	掘立24号	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	口縁～体部	16.0	－	－			
	305	掘立24号	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－			
	306	掘立24号	白磁	Ⅲ	Ⅴ・Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－			
	307	掘立24号	土師器	坏		乳褐色	－	底部	10.0	－	－	ナデ・糸切り	ナデ	

ピット･土坑内出土遺物　観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	種類	器種	分類	胎土の色調	釉薬	部位	法量（cm）			文様・調整		備考
									口径	底径	器高	外面	内面	
203	308	ピット21号	土師器	小皿		灰白		口縁～底部	7.0	4.8	0.9			
	309	ピット22号	土師器	小皿		浅黄橙	－	口縁～底部	7.8	6.0	1.5	ナデ・糸切り	ナデ	
	310	ピット23号	土師器	坏		橙	－	口縁～体部	13.8	－	－	ナデ	ナデ	
	311	ピット24号	土師器	小皿		橙	－	口縁～底部	9.7	8.3	1.5	ナデ・糸切り	ナデ	
	312	ピット25号	土師器	小皿		灰黄	－	口縁～底部	－	8.4	－	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	313	ピット26号	土師器	小皿		橙	－	口縁～底部	9.2	7.4	1.2	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	314	ピット27号	土師器	坏		茶褐色	－	底部	－	8.2	－	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	315	ピット7号	土師器	小皿		にぶい黄橙	－	口縁～底部	8.8	7.0	1.1	ナデ･ヘラ切り	ナデ	
	316	古代土坑65号	白磁	碗	Ⅳ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	7.0	－			
	317	中世土坑95号	東播系須恵器	捏鉢		灰	－	底部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	318	中世土坑43号	土師器	坏		灰白	－	底部	－	8.2	－	ナデ･糸切り	ナデ	
	319	縄文晩期土坑	白磁	碗	Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	6.4	－		内底輪状釉剥ぎ	
	320	縄文晩期土坑	青白磁	合子蓋		白	青みがかった透明釉	蓋部	－	－	－	印花		
	321	中世土坑46号	土師器	小皿		にぶい黄	－	口縁～底部	9.5	6.5	2.0	ナデ・糸切り	ナデ	
	322	縄文晩期土坑	土師器	小皿		橙	－	口縁～底部	8.9	7.7	1.1			
	323	中世土坑47号	白磁	碗	Ⅳ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	14.4	－	－			
	324	中世土坑32号	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	口縁～体部	16.2	－	－			
	325	中世土坑113号	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	口縁～底部	17.4	5.7	6.5	外底無釉		
	326	中世土坑113号	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	口縁～底部	17.6	6.0	6.1			
	327	中世土坑113号	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	14.8	－	－			
	328	中世土坑113号	白磁	Ⅲ	Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	10.0	－	－	体部下半無釉	内底輪状釉剥ぎ	
	329	中世土坑113号	龍泉窯系青磁	碗	Ⅱ	灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	蓮弁文		
	330	中世土坑113号	青白磁	合子身		灰	－	体部	－	－	－			
	331	中世土坑113号	中国陶器	壺	Ⅴ	黄褐橙	－	胴部	－	－	－			
	332	中世土坑113号	土師器	鍋		灰黄褐	－	口縁～胴部	31.6	－	－	ハケ目･ユビオサエ	ハケ目･ユビオサエ	
	333	中世土坑113号	土師器	鍋		にぶい黄	－	口縁部	29.8	－	－	ハケ目	ハケ目	

溝状遺構内出土遺物　観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	種類	器種	分類	胎土の色調	釉薬	部位	法量（cm）			文様・調整		備考
									口径	底径	器高	外面	内面	
204	334	溝29	龍泉窯系青磁	Ⅲ	Ⅰ	灰	青磁釉	口縁～底部	10.0	4.0	2.4		劃花文	
	335	溝38	土師器	坏		灰黄	－	底部	－	9.2	－		ナデ	
	336	溝38	土師器	坏		浅黄橙	－	底部	－	10.0	－	回転糸切り		
	337	溝38	東播系須恵器	捏鉢		灰黄	－	底部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	338	溝38	同安窯系青磁	碗		灰白	青磁釉	口縁～体部	17.0	－	－			
	339	溝38	同安窯系青磁	碗		灰白	青磁釉	体部	－	－	－			

第94表　中世の遺物観察表２
溝状遺構内出土遺物　観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	種類	器種	分類	胎土の色調	釉薬	部位	法量（cm）			文様・調整		備考
									口径	底径	器高	外面	内面	
204	340	溝38	中国陶器	壺	Ⅵ	灰黄褐	－	頸部	－	－	－			
	341	溝38	中国陶器	壺	Ⅲ	褐	－	底部	－	9.6	－			
	342	溝38	中国陶器	甕		褐	－	胴～底部		10.6				
	343	溝23	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ	灰黄	青磁釉	体部	－	－	－		劃花文	
	344	溝29	黒色土器A	埦		にぶい黄橙	－	口縁部	－	－	－	ミガキ	ミガキ	
	345	溝29	土師器	坏		黄灰	－	体～底部	－	8.0	－	ナデ・糸切り	ナデ	
	346	溝29	土師器	坏		浅黄橙	－	体～底部	－	9.6	－	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	347	溝29上	土師器	小皿		にぶい橙	－	口縁～底部	9.1	7.4	1.2	ナデ・糸切り	ナデ	
	348	溝29	瓦器	小皿	和泉型	黄灰	－	口縁部	9.5	－	－			
	349	溝29	土師器	小皿		橙	－	口縁部	－	－	－	ヨコナデ	ナデ	手づくね
	350	溝29	土師器	小皿		明赤褐	－	口縁～体部	－	－	－	ヨコナデ	ナデ	手づくね
	351	溝29	白磁	Ⅲ	Ⅴ・Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－		圏線	
	352	溝29	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	口縁～底部	16.0	5.9	6.9			
	353	溝29	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－			
	354	溝29	同安窯系青磁	碗		黄灰	青磁釉	口縁部	－	－	－			
	355	溝29下	東播系須恵器	捏鉢		褐	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	356	溝29	東播系須恵器	捏鉢		黄灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	357	溝29	東播系須恵器	捏鉢		黄灰	－	底部	－	7.2	－	糸切り	ナデ	
	358	溝29	東播系須恵器	捏鉢		灰黄	－	口縁～底部	31.6	10.4	12.2	ナデ	ナデ・自然釉	
	359	溝28	中国陶器	壺	Ⅱ	灰	－	肩部	－	－	－			
	360	溝38	土師器	坏		灰黄	－	口縁部	18.0	－	－	ナデ	ナデ	
	361	溝38	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ	灰白	青磁釉	口縁部	－	－	－		劃花文	
	362	溝38	中国陶器	水注		にぶい黄	－	胴部	－	－	－			
	363	溝7	東播系須恵器	捏鉢		黄灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	364	溝7	東播系須恵器	捏鉢		黄灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	365	溝4	滑石加工品			－	－	－	－	－	－			

中世出土遺物　観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種類	器種	分類	胎土の色調	釉薬	部位	法量（cm）			文様・調整		備考
										口径	底径	器高	外面	内面	
205	366	J －8	Ⅲa	黒色土器A	埦		浅黄	－	口縁部	－	－	－	ミガキ	ミガキ	
	367	J －10	Ⅲb	黒色土器A	埦		にぶい黄橙	－	口縁部	－	－	－	ナデ・ミガキ	ミガキ	口縁部外面に段
	368	J －10･11	－	黒色土器A	埦		にぶい黄橙	－	底部	－	7.0	－	ミガキ	ミガキ	低い高台
	369	H －12・J －9	Ⅳb	黒色土器A	埦		にぶい黄橙	－	底部	－	7.0	－	ミガキ・高台内ナデ	ミガキ	低い高台
	370	I －8	Ⅲa	黒色土器A	埦		浅黄橙	－	底部	－	5.8	－	ミガキ	ミガキ	
	371	H －18	Ⅳa	土師器	坏		にぶい黄橙	－	口縁～底部	15.4	9.8	3.0	ナデ・糸切り	ナデ	
	372	F －12	Ⅲa	土師器	坏		灰黄	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	373	H －19	Ⅳ	土師器	坏		浅黄橙	－	底部	－	8.0	－	ナデ・糸切り	ナデ	
	374	L －5	Ⅲa	土師器	坏		褐灰	－	底部	－	8.0	－	ナデ・糸切り	ナデ	
	375	H －18	Ⅳa	土師器	坏		浅黄橙	－	底部	－	8.8	－	ナデ・糸切り	ナデ	内赤色
	376	J －12	－	土師器	坏		褐灰	－	底部	－	7.4	－	ナデ・糸切り	ナデ	
	377	J －19	Ⅳa	土師器	小皿		橙	－	完形	10.0	8.2	1.2	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	378	J －19	Ⅳa	土師器	小皿		橙	－	完形	9.5	8.0	1.1	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	379	J －19	Ⅳa	土師器	小皿		にぶい黄橙	－	完形	9.3	7.7	1.1	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	380	J －19	Ⅳa	土師器	小皿		にぶい橙	－	口縁～底部	9.6	7.0	1.3	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	381	N －18	Ⅲb	土師器	小皿		浅黄	－	口縁～底部	8.8	6.8	1.2	ナデ・糸切り	ナデ	
	382	I －9	Ⅲa	土師器	小皿		黄灰	－	口縁～底部	9.2	6.6	1.25	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	383	I －8	Ⅲa	土師器	小皿		にぶい黄橙	－	口縁～底部	8.8	6.8	1.8	ナデ・糸切り	ナデ	
	384	I －9	Ⅲa	土師器	小皿		褐灰	－	口縁～底部	9.4	7.4	1.35	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	385	J －15･16	表土	土師器	小皿		にぶい橙	－	口縁～底部	10.0	9.0	1.3	ナデ・糸切り	ナデ	
	386	I･J －10･11	－	土師器	小皿		にぶい橙	－	口縁～底部	－	－	－	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
	387	I －10	Ⅲa	土師器	小皿		にぶい黄橙	－	口縁～底部	9.6	8.0	1.3	ナデ・ヘラ切り	ナデ	面取り
	388	K －5	Ⅲa	土師器	小皿		にぶい橙	－	口縁～底部	－	－	－	ナデ・糸切り	ナデ	
	389	I －9	Ⅲa	土師器	小皿		にぶい橙	－	口縁部	－	－	－	ナデ・ユビオサエ	ナデ	手づくね
	390	F･G －11	表土	土師器	小皿		にぶい褐	－	口縁部	－	－	－	ナデ・ユビオサエ	ナデ	手づくね

第95表　中世の遺物観察表３
中世出土遺物　観察表

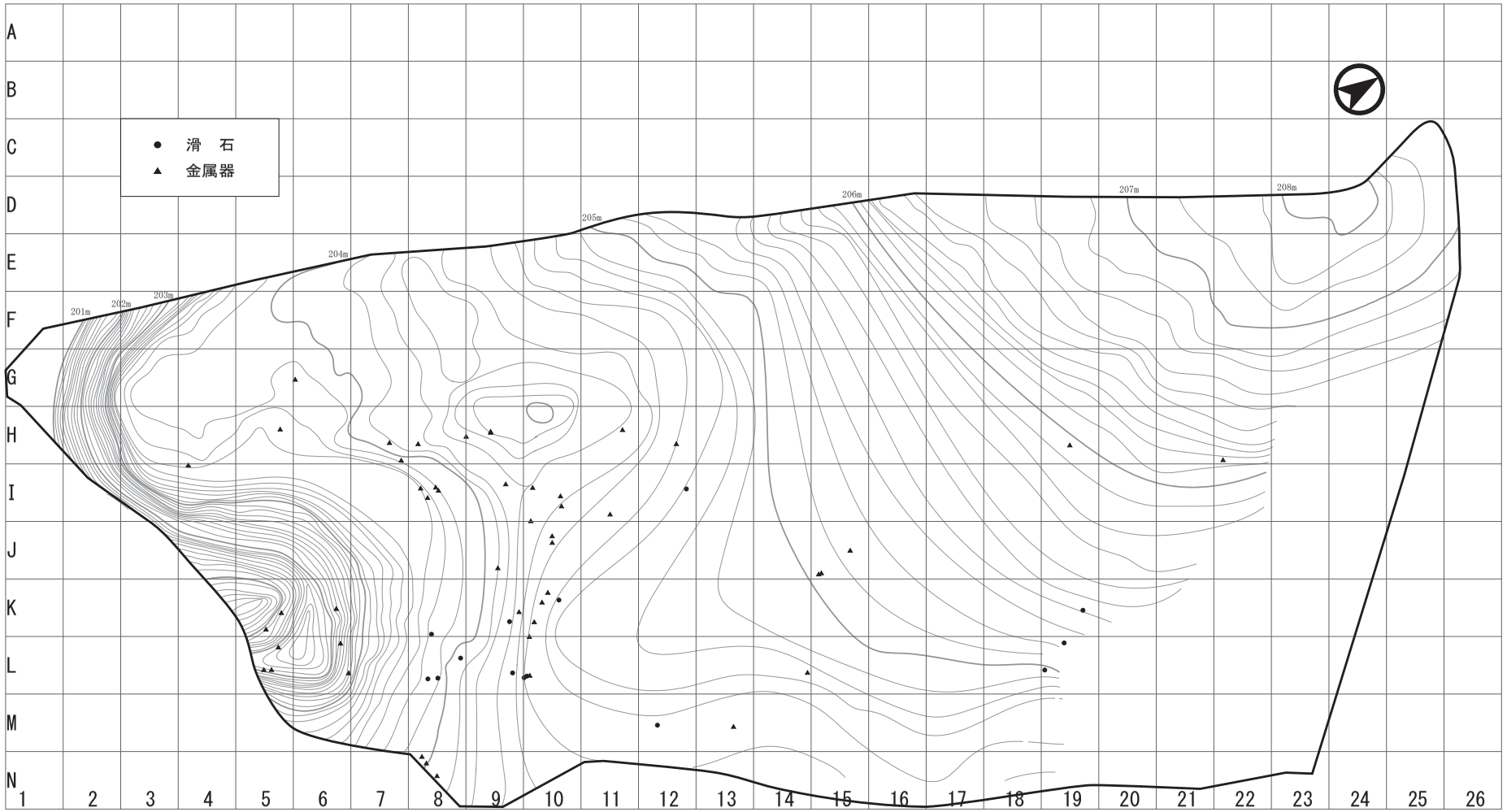
挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種類	器種	分類	胎土の色調	釉薬	部位	法量（cm）			文様・調整		備考
										口径	底径	器高	外面	内面	
205	391	H·I－9	Ⅲa	土師器	小皿		にぶい橙	－	口縁部	－	－	－	ナデ·ユビオサエ	ナデ	手づくね
	392	G－12	Ⅳa	瓦器	小皿		黒褐	－	口縁～底部	8.2	－	1.8	ナデ·ユビオサエ	ミガキ	手づくね
	393	G－11·12	Ⅲa	瓦器	小皿		黄灰	－	口縁部	9.2	－	－	ナデ·ユビオサエ	ナデ	和泉型
	394	G－11·12	Ⅲa	瓦器	小皿		浅黄橙	－	口縁部	10.0	－	－	ナデ·ユビオサエ	ナデ	和泉型
	395	H－12	Ⅲb	瓦器	小皿		黒褐	－	口縁部	－	－	－	ナデ·ユビオサエ	ナデ	和泉型
	396	I·J－15·16	表土	瓦器	小皿		灰白	－	口縁部	－	－	－	ナデ·ユビオサエ	ナデ	和泉型
	397	I·J－13·14	表土	瓦器	小皿		黒褐	－	口縁部	－	－	－			
	398	M－13·14	表土	瓦器	埦		黒褐	－	口縁部	－	－	－	ナデ·ユビオサエ	ナデ	和泉型
	399	G·H－15·16	表土	須恵器	－		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	400	N－9	－	須恵器	－		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	401	I－10	Ⅲa	須恵器	－		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	402	H·I－8·9	Ⅲa	須恵器	－		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	403	N－8·9	－	須恵器	－		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	404	E－20	表土	須恵器	－		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	405	I－16	Ⅳa	須恵器	－		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	406	I·J－13·14	表土	須恵器	－		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
206	407	F－15·16　J－13·15	Ⅳa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁～胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	408	J－10	－	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	－	ナデ	
	409	J－6	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	410	I－8	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	411	L－5	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	412	I－18	Ⅳ	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	413	H－12	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	414	H－10	表土	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ・自然釉	
	415	H－8	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ・自然釉	
	416	K－5	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	417	F·G－9	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	418	K·L－15·16	－	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	419	M－15·16	表土	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	420	J－8	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	421	G·H－13·14	－	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	422	K·L－15·16	－	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	423	I－4	－	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	424	K－7	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	425	K－7	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	
	426	H－19	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	底部	－	－	－	ナデ·糸切り	ナデ	
	427	F－12	Ⅲa	東播系須恵器	捏鉢		褐灰	－	胴～底部	－	9.0	－	ナデ·糸切り	ナデ	
	428	J－11　K·L－9	－	白磁	碗	Ⅳ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	18.7	－	－	玉縁口縁		
	429	I－20	Ⅳb	白磁	碗	Ⅳ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	17.0	－	－	玉縁口縁		
	430	J－11	－	白磁	碗	Ⅳ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	16.4	－	－	玉縁口縁		
	431	E·F－14	－	白磁	碗	Ⅳ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	14.4	－	－	玉縁口縁		
	432	M－7	Ⅲa	白磁	碗	Ⅳ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	6.0	－	体部下半以下無釉		
	433	I－4	－	白磁	碗	Ⅳ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	7.6	－	外底無釉		
	434	－	－	白磁	碗	Ⅳ	浅黄	白濁した透明釉	底部	－	7.0	－	外底無釉		
	435	J－18	－	白磁	碗	Ⅳ	浅黄	白濁した透明釉	底部	－	7.4	－	外底無釉		
	436	J－12	－	白磁	碗	Ⅳ	浅黄	白濁した透明釉	底部	－	6.4	－	外底無釉		
	437	K－12	－	白磁	碗	Ⅳ	浅黄	白濁した透明釉	底部	－	－	－	外底無釉		
	438	－	－	白磁	碗	Ⅴ·Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	16.5	－	－	端反り		
	439	K·L－15·16　N－8·9	Ⅳa	白磁	碗	Ⅴ·Ⅷ	黄灰	白濁した透明釉	口縁部	16.3	－	－	端反り		
	440	J－9	Ⅲa	白磁	碗	Ⅴ·Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－	端反り		
	441	E·F－13·14　H－11·12	－	白磁	碗	Ⅴ·Ⅷ	黄灰	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－	端反り		
	442	G－8　K·L·N－15·16	表土	白磁	碗	Ⅴ	黄灰	白濁した透明釉	体～底部	－	－	－	外底無釉		
	443	J－17	Ⅵa	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	6.0	－	外底無釉		
	444	K·L－11·12	－	白磁	碗	Ⅴ	灰白	白濁した透明釉	体～底部	18.0	7.0	6.5	体部下半無釉	内底輪状釉剥ぎ	

第96表　中世の遺物観察表４
中世出土遺物　観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種類	器種	分類	胎土の色調	釉薬	部位	法量（cm）			文様・調整		備考
										口径	底径	器高	外面	内面	
206	445	I･J－13･14	Ⅳ	白磁	碗	Ⅵ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	6.2	－	外底無釉		
	446	E･F－11	表土	白磁	碗	Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁～底部	－	5.9	－	体部下半以下無釉		
	447	J～L－11･12	Ⅳa	白磁	碗	Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁～体部	17.2	－	－			
	448	I－5	Ⅲb	白磁	碗	Ⅴ・Ⅷ	黄灰	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－			
	449	E･F－11･12	Ⅲa	白磁	碗	Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	6.8	－	体部下半無釉	内底輪状釉剥ぎ	
	450	H－7	Ⅲc	白磁	碗	Ⅷ	灰黄	白濁した透明釉	底部	－	6.0	－	外底無釉	内底輪状釉剥ぎ	
	451	K－7	－	白磁	碗	Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	7.0	－	外底無釉	内底輪状釉剥ぎ	
	452	15T	－	白磁	碗	Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	5.8	－	外底無釉	内底釉剥ぎ	
	453	H－8	Ⅲa	白磁	碗	Ⅴ・Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－	輪花		
	454	I－7･8	Ⅳa	白磁	碗	Ⅴ・Ⅷ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－	輪花		
	455	G－12	Ⅲa	白磁	碗		灰白	白濁した透明釉	底部	－	5.6	－	外底無釉		
	456	K－6	Ⅲc	白磁	碗		灰白	白濁した透明釉	底部	－	5.7	－	高台内無釉		
	457	E･F－6･7　J－20	Ⅲa	白磁	Ⅲ	Ⅲ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	9.0	－	－	体部下半無釉	蛇の目釉剥ぎ	
	458	E･H～J－15･16　L－14	表土	白磁	Ⅲ	Ⅲ	灰白	白濁した透明釉	口縁部	10.6	－	－	砂付着	蛇の目釉剥ぎ砂付着	
	459	E～H－13･14	表土	白磁	Ⅲ	Ⅲ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	5.0	－	体部下半無釉	蛇の目釉剥ぎ	
	460	G－16		白磁	Ⅲ	Ⅲ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	4.4	－	外底無釉	蛇の目釉剥ぎ	
	461	G－12	Ⅲa	白磁	Ⅲ	Ⅲ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	4.4	－	外底無釉	蛇の目釉剥ぎ	
	462	E－22	表土	白磁	Ⅲ	Ⅲ	灰白	白濁した透明釉	底部	－	4.2	－		蛇の目釉剥ぎ	
207	463	H－13･14　L･M－11･13	Ⅳa	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ	灰	青磁釉	口縁部	－	－	－		劃花文	
	464	E･F－11･12	Ⅲa	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ	灰	青磁釉	口縁部	－	－	－		劃花文	
	465	I･J－13･14　L－9･10	表土	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ	灰	青磁釉	口縁部	－	－	－		圏線	
	466	E・F－11・12	Ⅲa	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ	灰	青磁釉	口縁部	－	－	－		圏線	
	467	I－9	Ⅲa	龍泉窯系青磁	Ⅲ	Ⅰ	灰白	青磁釉	底部	－	4.0	－		劃花文	
	468	I･J－13･14	表土	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ	灰	青磁釉	底部	－	5.6	－			
	469	I－16　K･L－13･14	Ⅳa	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ	灰	青磁釉	底部	－	6.0	－		劃花文	
	470	K－7	Ⅲa	龍泉窯系青磁	碗	Ⅱ	褐灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	蓮弁文		
	471	F－12	Ⅲa	龍泉窯系青磁	碗	Ⅱ	灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	蓮弁文	劃花文	
	472	I－10		同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	473	I－5･8　H－4･7	Ⅲb	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	474	I･J－5･6	Ⅲb	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	475	G－18	Ⅲa	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	476	I－8	Ⅲa	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	477	I－15･16	表土	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	478	E～G－13･14　H－10	表土	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	体部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	479	I－8	Ⅲa	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	底部	－	5.7	－	櫛目文	櫛描文	
	480	F－5　M－9･10	表土	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	481	I･J－13･14	表土	同安窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	櫛目文	櫛描文	
	482	H･I－8･9	Ⅲa	同安窯系青磁	Ⅲ		灰	青磁釉	底部	－	6.0	－		櫛描文	
	483	F－7	Ⅲ	青白磁	合子身		灰白	－	体部	5.6	－	－			
	484	－	－	青白磁	合子身		灰白	－	底部	－	4.8	－			
	485	－	表土	青白磁	合子身		灰白	－	口縁～底部	－	3.6	2.0			
	486	J－15･16	表土	青白磁	合子蓋		灰白	－	蓋	－	－	－			「李家合子記」とみえるスタンプ
	487	H～L－9～12		白磁	小壺or梅瓶		灰白	白濁した透明釉	蓋	3.5	1.7	1.6			
208	488	K･L－15･16	表土	中国陶器	壺or水注	1	灰白	黄白色の釉	口縁部	10.1	－	－			
	489	F－10･11	表土	中国陶器	壺or水注	1	灰白	黄白色の釉	口縁部	10.0	－	－			
	490	L･M－14	表土	中国陶器	壺or水注	1	灰黄	黄白色の釉	頸～肩部	－	－	－			
	491	－	－	中国陶器	壺or水注	1	灰白	黄白色の釉	耳or把手	－	－	－			
	492	G－19	－	中国陶器	壺or水注	1	灰	黄白色の釉	頸～肩部	－	－	－			
	493	I－8	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	2	灰	青灰色の釉	口縁部	9.4	－	－			
	494	I－6	Ⅲb	中国陶器	壺or水注	2	灰	青灰色の釉	口縁部	9.0	－	－			
	495	I･J－10･11	－	中国陶器	壺or水注	2	灰	青灰色の釉	口縁部	8.2	－	－			
	496	H･I－8	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	2	灰	青灰色の釉	肩部	－	－	－			
	497	I･J－13･14	表土	中国陶器	壺or水注	2	灰白	青灰色の釉	肩～胴部	－	－	－			
	498	I･J－11･12	－	中国陶器	壺or水注	2	灰白	青灰色の釉	底部	－	10.0	－			

第97表　中世の遺物観察表５
中世出土遺物　観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種類	器種	分類	胎土の色調	釉薬	部位	法量（cm）			文様・調整		備考
										口径	底径	器高	外面	内面	
208	499	I－6	Ⅲb	中国陶器	壺	2	にぶい黄橙	青灰色の釉	底部	－	8.0	－			
	500	J－10	Ⅲb	中国陶器	壺	3･4	灰白	黄褐色や黒の強い緑色の釉	口縁部	－	－	－			
	501	－	－	中国陶器	壺	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	底部	－	8.8	－			
	502	G－8	Ⅲ	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	底部	－	10.5	－			
	503	I･J－6	Ⅲb	中国陶器	壺or水注	3･4	灰白	黄褐色や黒の強い緑色の釉	肩部	－	－	－			
	504	K･L－15･16	表土	中国陶器	壺or水注	3･4	灰白	黄褐色や黒の強い緑色の釉	肩部	－	－	－			
	505	E･F－11･12	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	底部		8.0				
	506	M－9・10	表土	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	底部	－	－	－			
	507	I－19	Ⅲb	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	底部	－	6.4	－			
	508	I－8	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	口縁部	－	－	－			
	509	I･J－9・10	表土	中国陶器	壺or水注	3･4	灰白	黄褐色や黒の強い緑色の釉	口縁部	10.6	－	－			
	510	I･J－10・11	－	中国陶器	壺or水注	3･4	灰白	黄褐色や黒の強い緑色の釉	口縁部	10.2	－	－			
	511	E･F－11･12	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	口縁部	10.0	－	－			
	512	I･J－12･13	表土	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	口縁～肩部	－	－	－			
	513	F－12	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	頸～肩部	－	－	－			
	514	M－15･16	表土	中国陶器	壺or水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	耳or把手	－	－	－			
	515	I－8	表土	中国陶器	水注	3･4	灰	黄褐色や黒の強い緑色の釉	肩部	－	－	－			
	516	G－12　H－9	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	5	橙	－	頸～肩部	－	－	－			
	517	G－12　H－9	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	5	灰	－	肩部	－	－	－			
	518	K－20	Ⅳa	中国陶器	壺or水注	5	橙	－	把手	－	－	－			
	519	F･G－9～11	表土	中国陶器	壺or水注	5	にぶい橙	－	把手	－	－	－			
	520	G－12	Ⅲa	中国陶器	壺or水注	5	にぶい橙	－	胴部	－	－	－			
	521	I～L－9･10	－	中国陶器	壺or水注	5	にぶい橙	－	底部	－	14.4	－			
	522	12T	－	中国陶器	壺	5	褐	－	頸部	－	－	－			
	523	I－4	Ⅲb	中国陶器	壺	5	褐	－	頸部	－	－	－			
	524	J－13	表土	中国陶器	壺	5	褐	－	口縁～頚部	6.8	－	－			
	525	K･L－15･16	表土	中国陶器	水注	5	灰	－	把手	－	－	－			
209	526	J－11	－	土師器	紡錘車		褐灰	－	－	（最大径）8.8	－	（最大厚）1.0	ナデ・ヘラ切り	ナデ	小皿底部の転用
	527	G－9	Ⅲ	龍泉窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	雷文帯		
	528	K－6･7	Ⅲa	龍泉窯系青磁	碗		灰白	青磁釉	口縁部	－	－	－	細線蓮弁文		
	529	G－9	Ⅳa	龍泉窯系青磁	碗		灰	青磁釉	口縁部	－	－	－	細線蓮弁文		
	530	E－15･16	表土	龍泉窯系青磁	Ⅲ		灰白	青磁釉	口縁部	－	－	－	稜花		
	531	K－21	表土	龍泉窯系青磁	碗		灰白	青磁釉	底部	－	4.6	－	外底無釉		
	532	J－16	－	龍泉窯系青磁	碗		灰	青磁釉	底部	－	6.4	－	高台内無釉		
	533	F･G－9	Ⅱa	白磁	坏	D	灰白	白濁した透明釉	口縁部	12.4	－	－			
	534	H－15	表土	白磁	坏	D	灰白	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－			
	535	M－11･12	表土	白磁	Ⅲ	E	灰白	白濁した透明釉	底部	－	6.0	－			
	536	D～F－18～20	－	白磁	Ⅲ	E	灰白	白濁した透明釉	口縁部	－	－	－			
	537	H－7	Ⅲa	景徳鎮窯系青花	碗		灰白	透明釉	口縁部	－	－	－	牡丹文		
	538	I･H－13･14	表土	景徳鎮窯系青花	Ⅲ		灰白	白濁した透明釉	底部	－	7.0	－	草花文		
	539	E－9	Ⅲa	漳州窯系青花	Ⅲ		灰白	白濁した透明釉	底部	－	5.7	－	圏線	圏線・無釉	
	540	I･J－13･14	表土	漳州窯系青花	瓶		灰白	透明釉	頸部	－	－	－	草花文		
	541		表土	漳州窯系青花	盤		灰	透明釉	底部	－	－	－			



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第210図　中世の遺物出土状況図（滑石・金属器）

ウ　滑石製品（第211図　542～548・第212図　549～566）

滑石製品は44点確認され，そのうち25点を実測した。542 ～ 566は，滑石製石鍋の破片であり表面にススが付着しているものが多く，日常的に使われていたことがうかがえる。

542 ～ 546は滑石製石鍋の口縁部である。542は穿孔痕が見られ，何らかの理由で使用しなくなった石鍋を加工するために開けたものと思われる。543は表面・裏面にケズリによる調整が見られる。ススの上からの調整もあり，繰り返して調整が行われていたと考えられる。544も全体にケズリによる調整が残るとともに裏面に端的な加工の痕が見られ，再加工を試みた形跡と考えられる。545は542 ～ 544同様にケズリによる調整が見られる。また表面にススの付着が見られ，日常的な被熱をうかがわせる。546は，かろうじて口縁部が残った状態で，所々に鋭角な加工のあとが見られる

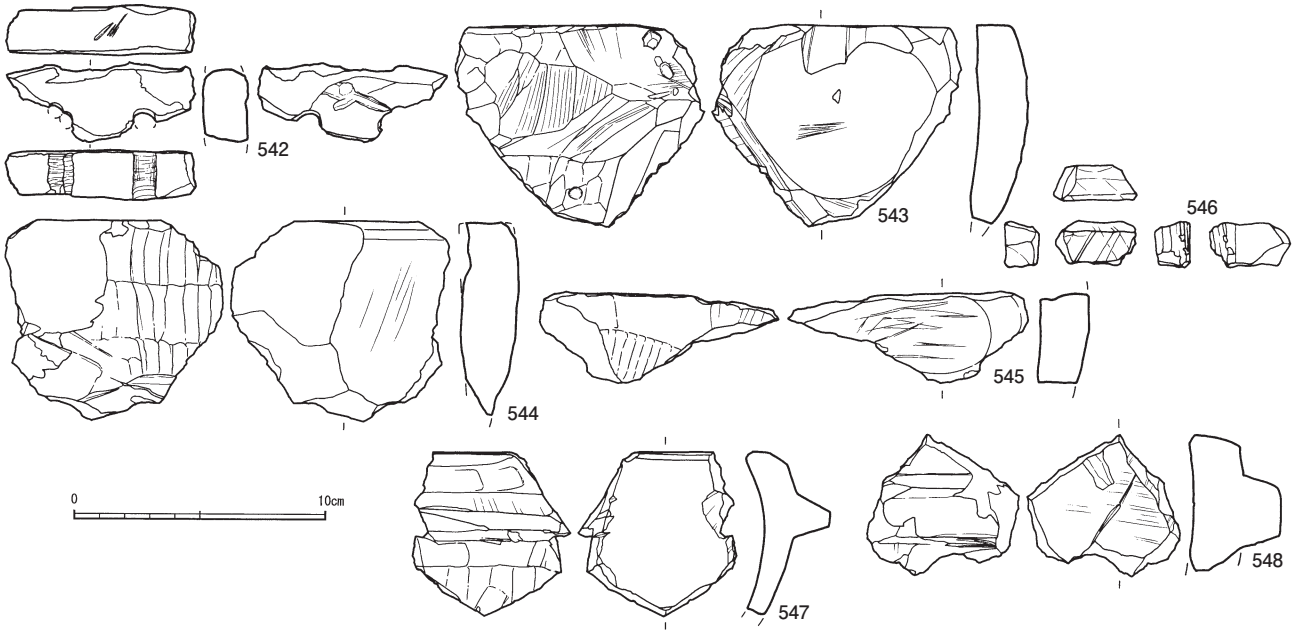
547 ～ 551は鍔である。547は鍛冶関連遺構から出土した。表面全体にススが付着し日常的な利用が伺える。鍔部上下に連続した凹みがみられ鍔部を作成した際にできた削り痕と思われる。548と同様に表面全体にススが付着している。547と違い鍔部上下に連続した凹みはなく，細かいナデ・ケズリで整えられている。551も同様に石鍋の鍔部であるが欠損部が多いため細かなケズリなどの調整を確認することはできない。549は上記３点と違い，鍔部が太く張り出している。外側に向かうほど細くなるのではなくほぼ同じ太さで張り出している。550は明確な鍔部を確認することはできないが側面部のススの付着状況や裏面のケズリから縦型に張り出したと考えられる。中央部に横へ刻みが入っている。

552 ～ 554は胴部である。552は同じ厚さの個体であるが，553は若干の厚みの変化があり，表面にはケズリによる調整の痕も見られる。554は接合による資料であるが前述の二つに比べ，ススが厚く付着している。それぞれに裏面の調整を確認することは出来なかった。

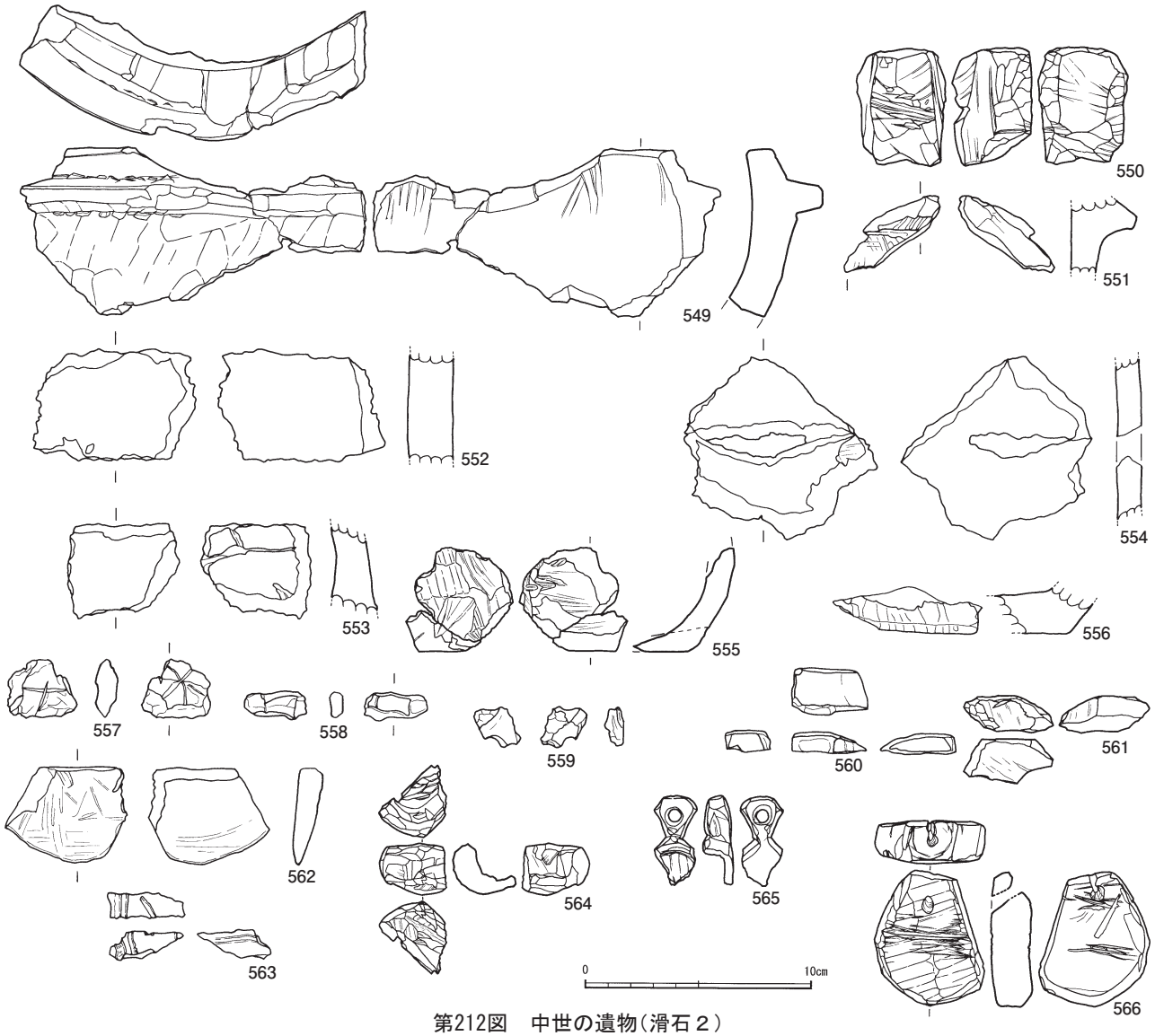
555・556は石鍋の底部である。555はススの付着とケズリによる調整が見られるだけでなく，底部立ち上がりから下にかけて赤い被熱の痕が見られる。

556は表面にススの付着とケズリによる調整が見られる。底に向けて厚みがうすくなっており，底は平坦に整えられているというよりもケズリによって荒く調整されており，丸くなっている。

557 ～ 566は滑石の加工品もしくは再加工品である。557は表面と裏面にかけて十字が刻まれており，さらにその上を磨いたように光沢がある。558 ～ 563は石鍋や滑石の再加工品と思われるが欠損が大きく本来の形状や用途を推測することはできない。刻みやケズリによって加工の痕が見られる。564は加工品の一部分であるが欠損部が多いために全容は不明である。口縁から底部にかけて浅く，全体にケズリによる調整が施されている。一部にススの付着がみられることから石鍋を再加工したものと思われる。565は上部が取手のように逆三角形状に張り出し，その部分に穿孔がみられる。下部は欠損が多いため全容は不明だが，平たく皿状に広がっており，ケズリによる調整が見られることから意図的に厚みを減らしたと考えられる。566は石鍋の再加工品である。穿孔が表面から裏面に斜めにかけて貫通し，ほぼ中心部に横方向の刻みが入る。穿孔裏面の上部にかけて孔は広がっており，使用によってつけられたものと思われる。



第211図　中世の遺物（滑石１）



第212図　中世の遺物（滑石２）

第98表　中世の遺物観察表（滑石）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整 内	調整 外	色調	出土区	層	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
211	542	滑石製石鍋	口縁部	－	－	灰褐色	G－18	Ⅳ	3.2	7.5	1.9	55.9	穿孔あり
	543	滑石製石鍋	口縁部	ケズリ	ケズリ	灰褐色	－	Ⅲa	8.0	9.8	1.9	236.5	スス付着
	544	滑石製石鍋	口縁部	ケズリ	－	灰褐色	－	Ⅲa	7.9	8.6	2.2	177.3	鍛冶遺構
	545	滑石製石鍋	口縁部	ケズリ	－	黒褐色	F－12	Ⅲa	9.4	3.6	2.3	89.2	スス付着
	546	滑石製石鍋	口縁部	－	－	黒褐色	I－18	Ⅲa	1.8	3.2	1.3	12.0	溝38内
	547	滑石製石鍋	鍔部	－	－	灰褐色	－	Ⅲa	6.4	6.3	2.7	104.8	鍛冶遺構・外面スス付着
	548	滑石製石鍋	鍔部	－	－	灰褐色	J－12	撹乱	5.5	6.0	3.5	137.6	スス付着
212	549	滑石製石鍋	鍔部	ナデ・ケズリ	－	黒褐色	J－12	Ⅲb	7.3	15.2	3.1	341.0	内外面にスス付着
	550	滑石製石鍋	鍔部	ケズリ	－	灰褐色	H－9	Ⅲa	5.1	3.9	3.5	104.5	スス付着
	551	滑石製石鍋	鍔部	－	－	黒褐色	J－11	Ⅳ	2.5	2.9	2.9	27.3	スス付着
	552	滑石製石鍋	胴部	－	－	灰褐色	H－19	Ⅳ	4.4	6.5	2.0	132.0	外面全体にスス付着
	553	滑石製石鍋	胴部	－	ケズリ	黒褐色	H－8	Ⅲa	4.1	4.7	2.0	57.0	外面全体にスス付着
	554	滑石製石鍋	胴部	－	－	黒褐色	I－9	Ⅲb	7.9	8.5	1.2	90.6	外面全体にスス付着
	555	滑石製石鍋	底部	ケズリ	－	黒褐色	I－8	Ⅲa	4.6	4.7	1.2	45.7	赤い被熱痕有り・スス付着
	556	滑石製石鍋	底部	ケズリ	－	灰褐色	L－9・10	一括	4.1	6.3	1.9	69.0	スス付着
	557	滑石加工品	－	－	－	灰褐色	I－14	－	2.5	3.0	1.0	9.0	
	558	滑石加工品	－	－	－	灰褐色	IJ－13・14	撹乱	1.2	2.7	0.6	3.0	
	559	滑石加工品	－	－	－	灰褐色	H－10	Ⅲa	1.2	1.6	0.8	3.0	穿孔あり
	560	滑石加工品	－	－	－	灰褐色	15T	一括	0.9	3.3	2.0	9.0	
	561	滑石加工品	－	－	－	灰褐色	I－8	Ⅲa	1.6	3.9	1.9	13.9	
	562	滑石加工品	－	－	－	黒褐色	K－13	撹乱	4.0	4.9	1.1	35.0	
	563	滑石加工品	－	－	－	灰褐色	EF－12	一括	1.1	3.2	1.1	7.0	
	564	滑石加工品	－	ケズリ	－	黒褐色	K－10	Ⅳa	2.2	2.9	1.1	13.9	スス付着
	565	滑石加工品	－	ケズリ	－	灰褐色	－	－	3.9	1.9	1.3	8.4	穿孔あり
	566	滑石加工品	－	－	－	黒褐色	J－10	撹乱	5.9	4.8	1.9	83.1	穿孔あり・スス付着

エ　金属器（第213図　567～583・第214図　584～588）

天神段遺跡の金属器は，現代のものと思われる製品を除き，取り上げた総数は243点で，遺跡南部の比較的包含層の残存状況が良い地域から出土している。大部分をⅢ層の鉄製品が占めるが，時代の特定が難しいものも多く，流れ込みや撹乱のものも含まれることから，中世の遺物として一括して取り扱った。

567 ～ 579は鉄製品，580 ～ 582は古銭，583は青銅製品，584 ～ 588は鉄滓である。

567 ～ 571は鉄鏃の一部と思われるものである。567は圭頭鏃に類似するもので，先端両端に刃部を形成し，断面形状は薄いレンズ状を呈する。568は三角形を呈する薄い板状のもので片側に刃部を持つ。先端のみの出土のため全体形は不明であるが，刀の先端部の可能性もある。569 ～ 571は茎の一部と思われるもの先細りをする形状である。569，570は棒状もので，断面形状は569が四角形，570が円形である。571は断面長方形を呈する薄板状である。

572は紡錘車の紡輪である。腐食が激しく円盤の破損が著しい。穿孔は錆に覆われ肉眼での判別が困難である。

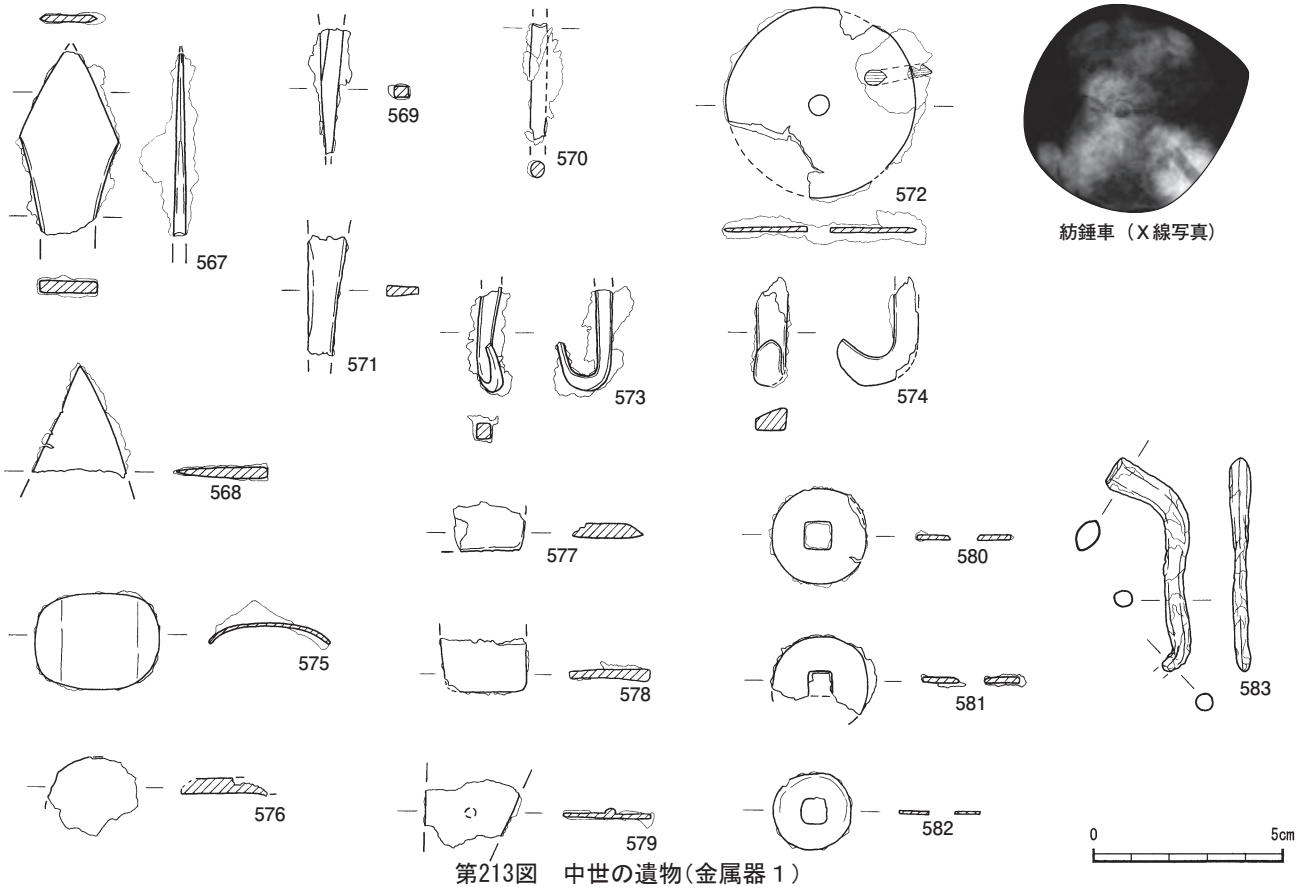
573，574は鉄釘である。両方とも厚い錆に覆われ全体形は不明であるが，断面形状は四角形を呈し釣り針状に大きく屈曲している。

575 ～ 579は薄い板状のものである。575は楕円形の両端がわずかに丸く屈曲している。上面に別固体が付着し，裏には小さな突起が見られることから，装飾品の一部の可能性がある。576はやや肉厚で欠損が大きいが，端が丸味を帯びている。577，578は平板状のもので，鋼を鍛錬して作られている。欠損の様子から板状製品の一部と思われる。579は薄い作りで両端が欠損しており，中央部に小さな突起が認められる。

580 ～ 582は古銭である。580，581は鉄製，582は青銅製であり，いずれも腐食が著しく背文は不明である。580，582は完形品，581は欠損品である。

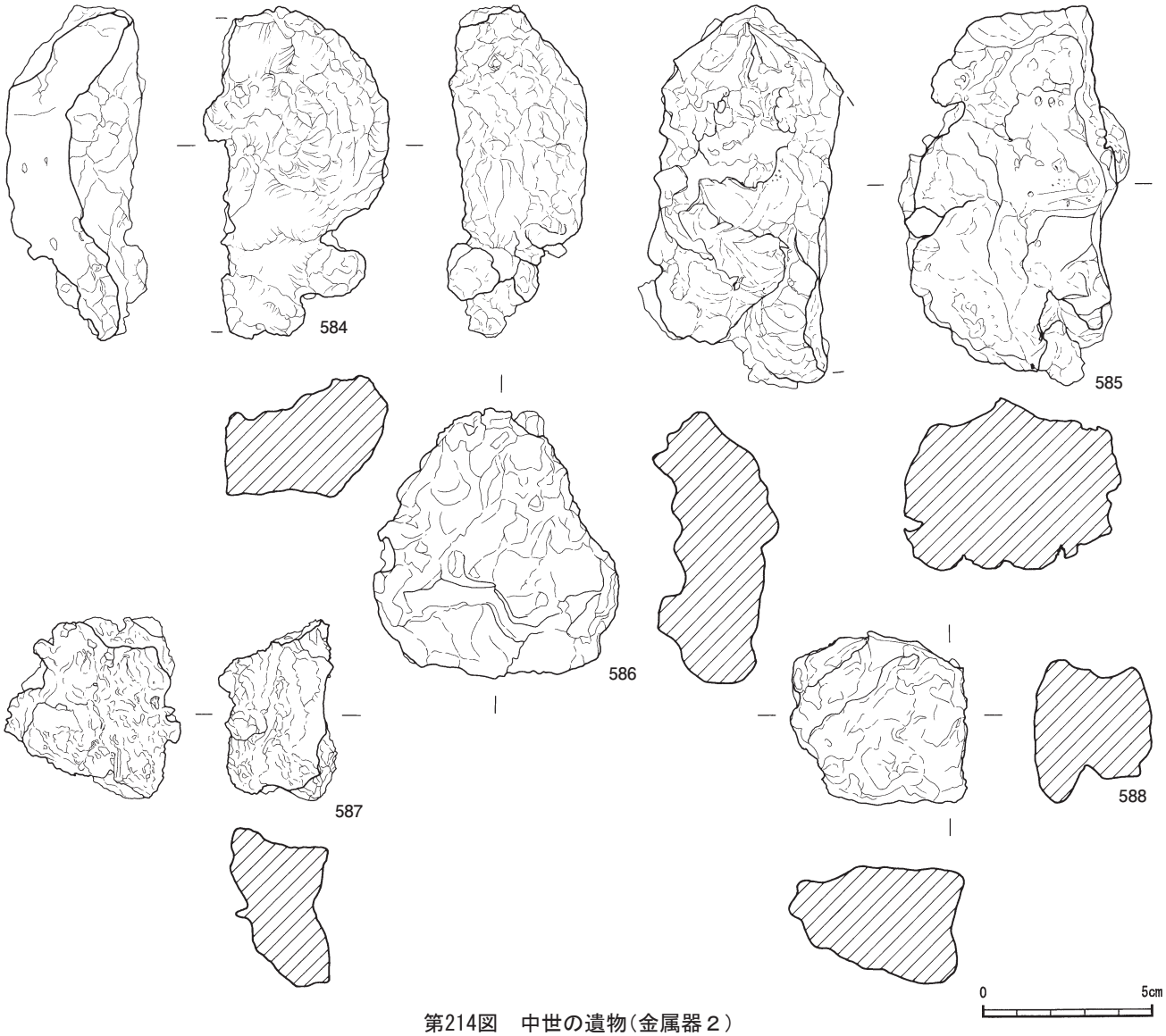
583は器種不明の青銅製品である。棒状のものが大きく湾曲しながら蛇行するように先細るもので，断面は楕円形を呈する。両端は欠損しているように思われるが，部分的な出土のため全体形が不明である。胴部に陵が残ることから，鋳型に流し込んで作ったものと推測される。

584 ～ 588は鉄滓である。いずれも碗型の鉄滓である。鉄滓は遺跡南側の比較的Ⅲ層の残りが良い地域から多く出土しており，小型の鍛冶炉や焼土跡，堀立柱建物跡が存在することから，鍛冶工房の存在が考えられる。鉄滓は遺跡南部を中心に70点出土しているが，その中から５点図化した。584は炉床の形状が良く分かる底面に，細かい不純物が接着している。現代の耕作機械によりほぼ中心部で切断され，断面が露出している。585は精錬が良く鉄分を多く含んでいる。外面に炉壁による圧迫痕が残る。586は下部に砂が付着している。587，588はやや小型のもので，587は切断面が残る。588は不純物を多く含み，破砕している。



紡錘車（X線写真）

第213図　中世の遺物（金属器１）



第214図　中世の遺物（金属器２）

第99表　中世の遺物観察表（金属器）

挿図番号	掲載番号	遺物名	器　種	部　位	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備考
213	567	鉄製品	鉄鏃	刃部	4.8	2.7	0.3	12.3	
	568	鉄製品	鉄鏃	刃部	3.0	2.5	0.3	3.5	
	569	鉄製品	鉄鏃	矢柄	3.3	0.5	0.3	2.6	
	570	鉄製品	鉄鏃	矢柄	3.1	0.6	0.4	2.0	
	571	鉄製品	鉄鏃	矢柄	3.1	1.0	0.3	2.5	
	572	鉄製品	紡錘車	紡輪	5.0	5.0	0.1	18.6	穿孔判別不明
	573	鉄製品	釘	先端部	2.6	0.5	0.4	3.4	屈曲有り
	574	鉄製品	釘	先端部	3.0	0.8	0.6	5.8	屈曲有り
	575	鉄製品	−	−	2.5	3.3	0.1	8.2	薄板状
	576	鉄製品	−	−	2.1	2.3	0.4	3.9	薄板状
	577	鉄製品	−	−	1.3	1.9	0.4	2.2	薄板状
	578	鉄製品	−	−	1.4	2.3	0.3	3.3	薄板状
	579	鉄製品	−	−	1.8	2.5	0.2	1.6	薄板状
	580	鉄製品	古銭	−	2.4	2.5	0.1	4.0	銭貨名不明
	581	鉄製品	古銭	−	2.1	2.6	0.2	2.2	銭貨名不明
	582	青銅製品	古銭	−	2.1	2.1	0.1	1.0	銭貨名不明
	583	青銅製品	不明	−	5.6	0.9	0.6	12.3	
214	584	鉄　滓	−	−	9.9	5.5	3.6	268.0	切断面有り
	585	鉄　滓	−	−	11.2	6.9	5.1	489.0	切断面有り
	586	鉄　滓	−	−	8.0	7.3	3.8	172.0	
	587	鉄　滓	−	−	5.3	3.5	4.6	111.0	
	588	鉄　滓	−	−	5.0	5.2	3.5	178.0	

第４節　近世の調査成果

１　調査の概要

近世の遺構は，畝状遺構１か所と土坑７基，ピット１基が検出された。遺物は，陶磁器，キセルなどが出土した。

２　遺構

(1)　土坑（第216図）

近世の土坑は７基検出された。

土坑１号

Ｉ－12区，Ⅳa層上面で検出された。撹乱の影響と北側が調査区外へ延びているものの平面形は，規模が推定で36cm×30cmを測り，ほぼ円形状を呈する。断面形は，台形状を呈し，深さ18cmを測る。埋土は，白パミスを含む黒褐色土が堆積していた。

土坑２号

Ｉ－12区，Ⅳa層上面で検出された。撹乱の影響を大きく受けるものの平面形は，規模が推定で76cm×66cmを測り，ほぼ円形状を呈する。断面形は，台形状を呈し，深さ10cmを測る。床面は明瞭な平坦面を形成する。埋土は，白パミスを含む黒褐色土が堆積していた。

土坑３号

Ｊ－12区，Ⅳa層上面で検出された。撹乱の影響を大きく受けるものの平面形は，規模が推定で104cm×100cmを測り，ほぼ円形状を呈する。断面形は，台形状を呈し，深さ22cmを測る。埋土は，白パミスを含む黒褐色土が堆積していた。

土坑４号

Ｉ・Ｊ－10区，Ⅳa層上面で検出された。撹乱の影響を多く受けるものの平面形は，規模が推定で111cm×107cmを測り，ほぼ円形状を呈する。断面形は，皿状を呈し深さ７cmを測る。埋土は，白パミスを含む黒褐色土が堆積していた。

土坑５号

Ｅ－13区，Ⅳa層上面で検出された。平面形は，規模が166cm×89cmを測り，隅丸長方形を呈する。断面形は，台形状を呈し，深さ19cmを測る。床面は，検出面と同形状の明瞭な床面を形成する。埋土は，灰白色パミスを含む灰褐色土が堆積していた。埋土内から，土師器片１点，土器片５点，礫１点，軽石3点が出土した。

土坑６号

Ｊ－10区，Ⅳa層上面で検出された。撹乱の影響を多く受けるものの平面形は，規模が267cm×60cmを測り，隅丸長方形を呈する。断面形は，皿状を呈し，深さ10cmを測る。埋土は，白パミスを含む黒褐色土が堆積していた。

土坑７号

Ｍ－９区，Ⅳa層上面で検出された。撹乱の影響を多く受けているため不定形である。残存部の断面形は，皿状を呈し，深さ６cmを測る。埋土は，Ｐ２の混ざる灰白色土が堆積していた。

(2)　ピット（第216図）

近世のピットは，Ｍ－16区，Ⅳb層で１基のみ検出された。平面形は，規模が35cm×30cmで，ほぼ円形状を呈する。深さは約13cmである。埋土は，明黄色白パミスを含む。

(3)　畝状遺構（第217図）

Ｋ・Ｌ－５・６区，Ⅲ～Ⅳ層上面で21条の畝状遺構を検出した。上部の畝部分は削平されていて残存しないが，当時は平坦な地形に畝を作っていたと考えられる。従って，掲載図は畝間の実測である。

畝間の平面形は長楕円形を呈し，長さは最短約50cm，最長約７ｍで，平均４～６ｍの長さのものが多い。畝間幅は，約12～40cm，深さは約３～10cmである。畝間の方向は東西方向に規則的に並んでいる。埋土は，砂質の黒褐色土である。埋土中にＰ２のパミスを含む。

３　遺物

近世の遺物は，陶磁器とキセルが出土した。

陶磁器（第218図　589～613）

589～593は碗である。589は，初期伊万里の碗である。畳付に砂が熔着している。17世紀前半のものと思われる。590は肥前系の白磁碗の口縁部から胴部である。見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。591は，陶器の碗の口縁部である。内面は，打ち刷毛目，外面は波状の刷毛目が施される。592・593は薩摩焼で龍門司焼の碗である。592は高台脇から内面にかけて黒褐色の釉が施される。見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。畳付から高台内底面は露胎する。593は陶器の碗の底部である。白化粧土に透明釉がかかる。外面腰部から高台内底面は露胎する。見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。

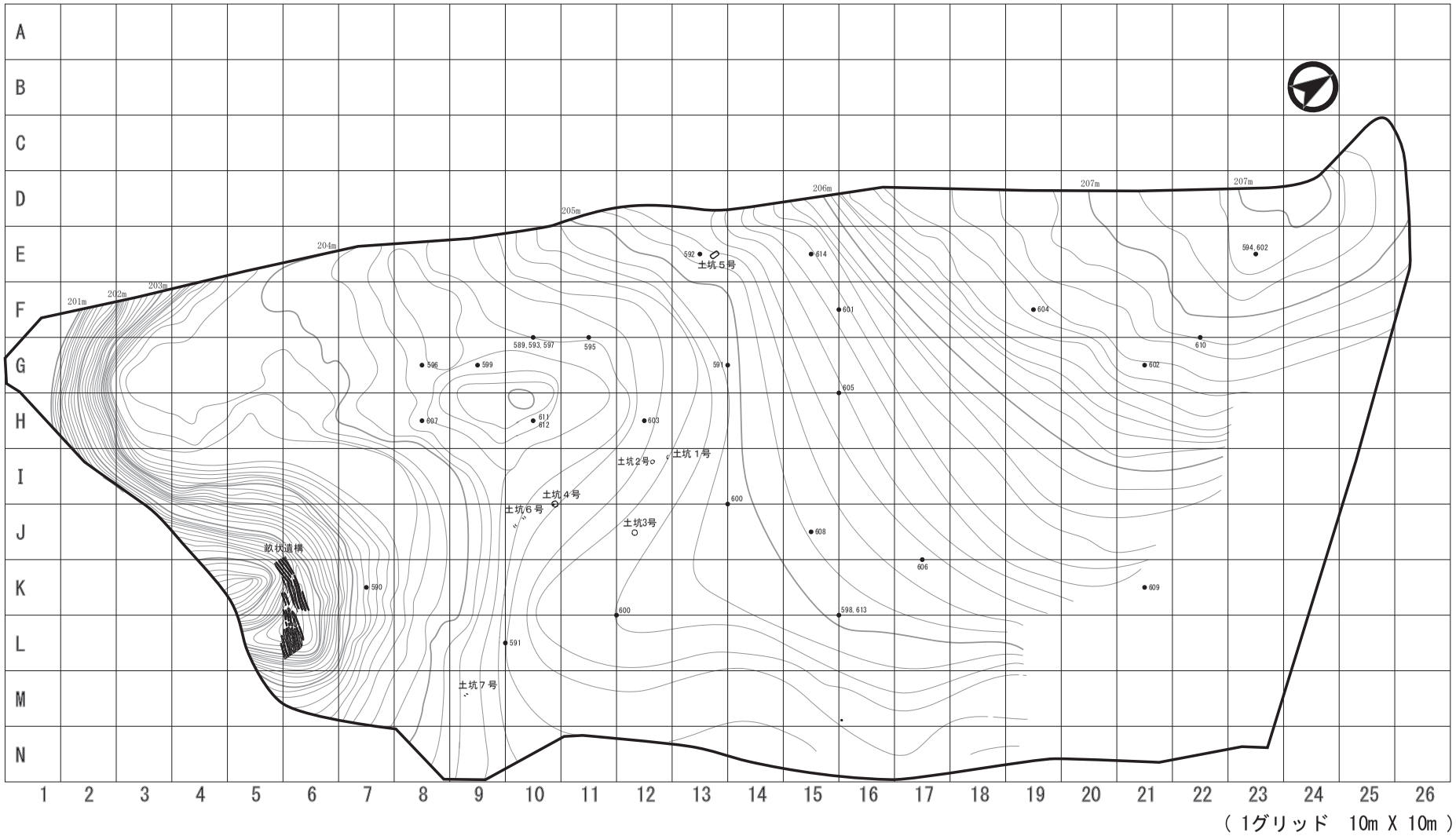
594・595は肥前陶器の皿である。594は底部である。内面に白土による波状の刷毛目が施され見込みに砂目が残る。595は折れ縁皿の口縁部である。上面に白土による波状の刷毛目が施される。

596は陶器の小皿の口縁部である。灰白色の化粧土の上から飛び鉋を施し，透明釉をかける。薩摩焼の龍門司焼である。

597～600は陶器の土瓶蓋である。597・598は薩摩焼の苗代川焼である。597はほぼ完形品である。外面のつまみと天井部と庇の部分に鉄釉が施される。内面は露胎する。598は天井部から庇部である。上面庇部付近に白化粧土をかけ，その後，上面全体に褐釉をかける。

599・600は龍門司焼の土瓶蓋である。599は天井部から庇部分である。上面は，天井部を除き，白化粧土をかけ，その後，全面に透明釉をかける。

600は上面庇部付近に白化粧土をかけ，その後，上面



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第215図　近世の遺構配置図・出土状況図

全体に褐釉をかける。

601は白磁の菊花状のつまみを有する蓋である。釉は，白濁した釉がかかる。

602は陶器の土瓶の口縁部から肩部である。肩部にヘラ状工具による筋状の痕跡が見られる。耳部の形状が三角形でなく半楕円形をしている。

603・604は薩摩焼の龍門司焼の急須である。603は外面腰部までに褐釉がかかり，内面と外面腰部以下底面は露胎する。604は鮫肌である。内面と外面腰部から底面は露胎する。

605・606は肥前磁器の徳利である。605は白磁の徳利の口縁部である。606は染付の徳利の頸部である。

607は薩摩焼の龍門司焼の灯明皿である。外底面の切り離しは糸切りである。見込みにゴマ目が残る。内面から外面腰部までに褐釉がかかり，以下外底面までは露胎する。

608は香炉の口縁部である。内面は施釉されない。

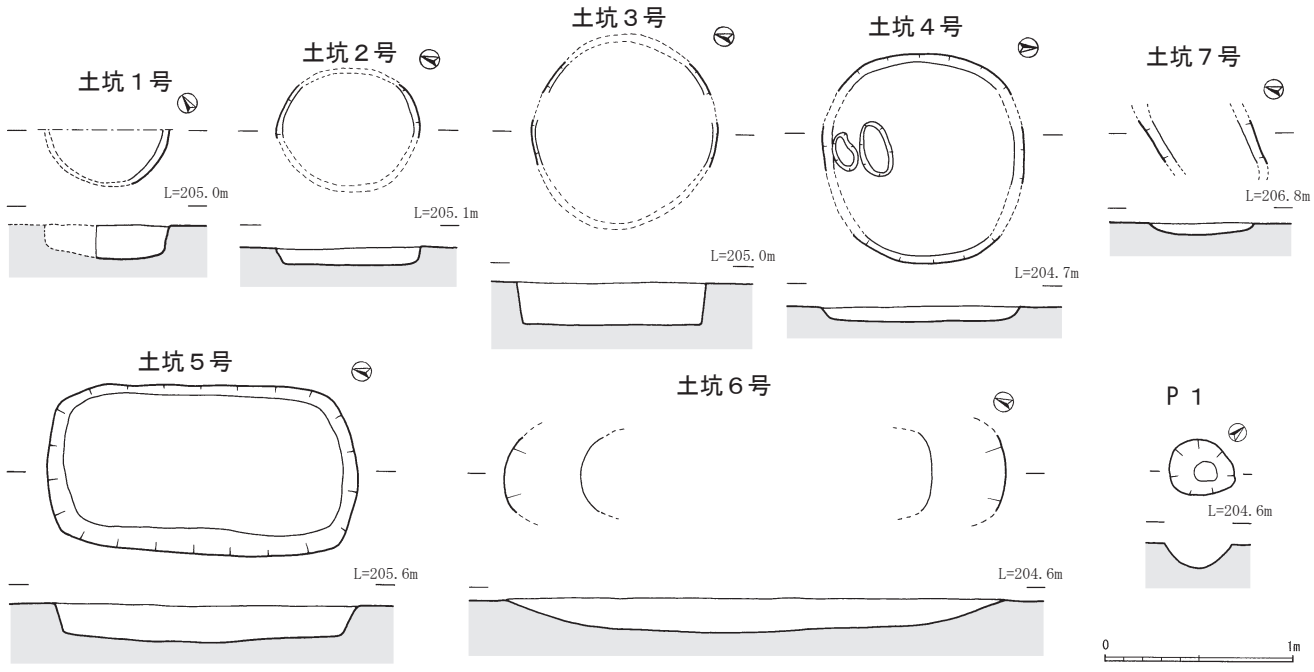
609・610はたんころ形の秉燭（ひょうそく）である。脚台の中心には軸孔を有する。

611は薩摩焼の苗代川系堂平窯の製品で，擂鉢の口縁部である。口唇部は粘土紐を貼り付け肥圧させ，断面三角形を作る。口縁部は，粘土紐を貼り付け三角突帯を貼り付けてある。内外面は褐釉がかかり，口唇部は，釉剥ぎされる。

612・613は薩摩焼の苗代川焼の甕である。612は口縁部は，外側に折り返して，肥厚させ，断面三角形に作る。内外面は，黒褐色の鉄釉がかかり，口唇部は釉剥ぎされ貝目が残る。613は口縁部が断面Ｔ字状を呈する。口唇部は，釉剥ぎされる。内外面には，黒褐色の鉄釉をかける。

キセル（第218図　614）

614はキセルである。雁首部分の長さは約5.2cm，吸口の径約1.0cm，吸口測端の厚さは約0.1cm，質量は10.1gである。金属板を筒状に丸めてつなぎ合わせて作ってある。雁首部分の先の部分には緑青が付着している。材質は銅と思われる。雁首部分から胴部にわずかなへこみが確認できた。これは，使用している間に煙草の火を消すときについた痕であると考える。雁首部分の湾曲がなく，火皿が付いていないタイプで，19世紀に製造されたものと考える。



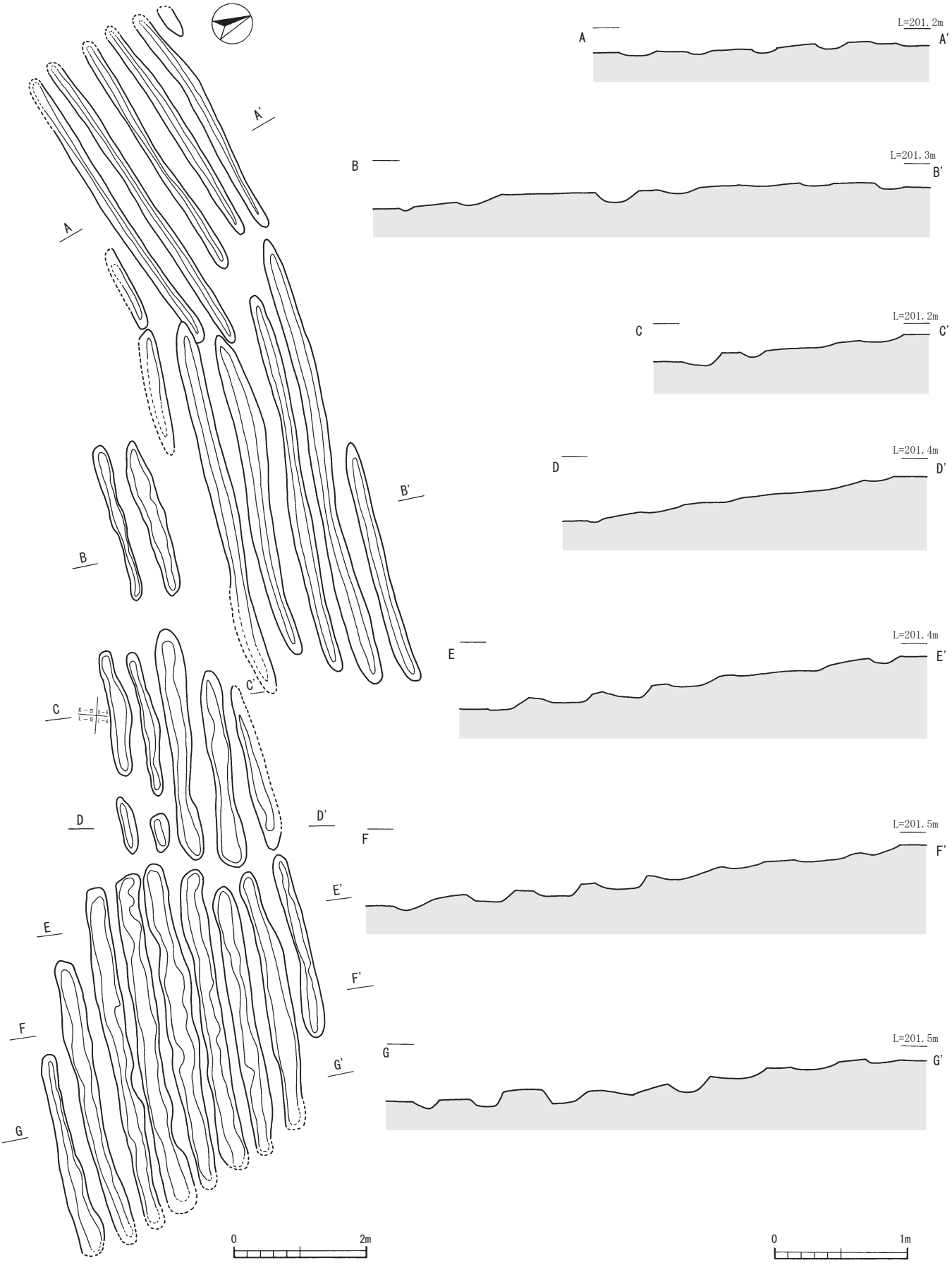
第216図　近世の土坑・ピット

第100表　近世の土坑計測表

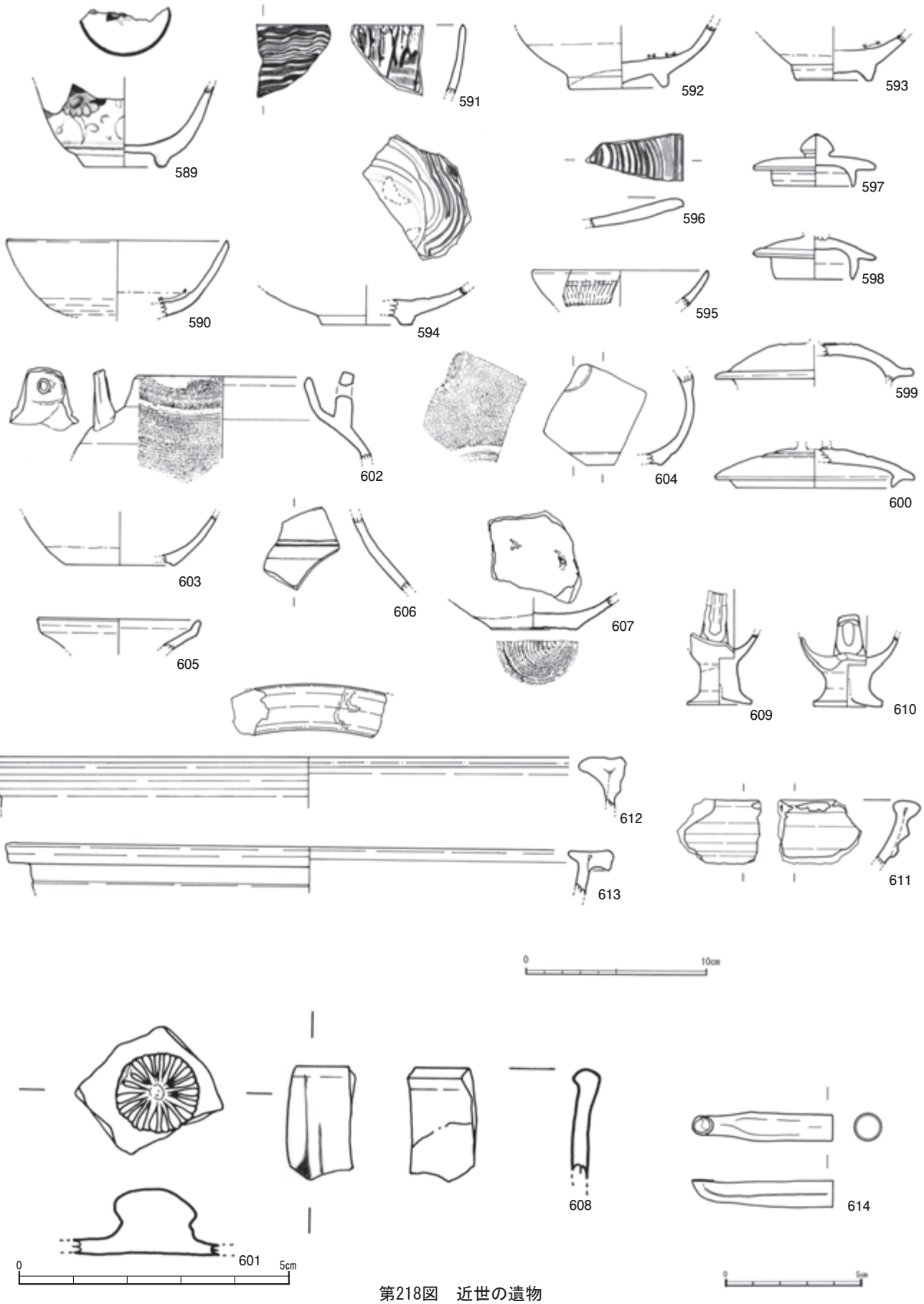
挿図	掲載番号	形状	検出区	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	調査時	備考
216	1号	円形	Ⅰ－12	36	30	18	231	
	2号	円形	Ⅰ－12	76	66	10	230	
	3号	円形	Ｊ－12	104	100	22	220	
	4号	円形	Ⅰ･Ｊ－10	111	107	7	204	
	5号	隅丸長方形	Ｅ－13	166	89	19	928	
	6号	隅丸長方形	Ｊ－10	267	60	10	196	
	7号	不確定	Ｍ－９	59	23	6	100	

第101表　近世のピット計測表

挿図	掲載番号	形状	検出区	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	調査時	備考
216	Ｐ1	－	Ｍ－16	35	30	13	384	



第217図　近世の畝状遺構


589
591
592
593
597
596
590
598
594
595
599
602
604
600
603
606
607
605
609
610
612
611
613
0
10cm
608
614
601
0
5cm
0
5cm

第218図　近世の遺物

第102表　近世の遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	産地	取上番号	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色調	施釉	時期	備考
								口径	底径	器高					
218	589	磁器	碗	肥前系	一括	F・G－9～11	表土	－	4.4	－	灰白色	透明釉	畳付以外釉薬	17世紀前半	畳付に砂熔着 初期伊万里
	590	白磁	碗	肥前系	一括	K－7	－	12.0	－	－	灰白色	透明釉	見込み以外全面	18世紀後半	蛇の目釉剥ぎ
	591	陶器	碗	龍門司	－	G－13・14 L－9・10	撹乱	－	－	－	灰オリーブ	透明釉	残存部分全面施釉	18世紀後半	打ち刷毛目 波状刷毛目
	592	陶器	碗	龍門司	－	E－13	－	－	5.3	－	赤褐色	鉄釉	畳付，高台内， 高台脇以外全面	19世紀後半	蛇の目釉剥ぎ
	593	陶器	碗	龍門司	一括	F・G－9～11	Ⅲa	－	4.2	－	にぶい褐色	白化粧土＋ 透明釉	内面，外面口縁部 ～体部	18世紀後半	蛇の目釉剥ぎ
	594	陶器	皿	肥前	－	E－23	表土	－	5.0	－	橙	白化粧土＋ 透明釉	全面	18世紀後半	波状刷毛目 砂目
	595	陶器	皿	肥前	一括	F・G－11	表土	－	－	－	褐灰色	白釉，緑釉， 透明釉	全面	18世紀後半	波状刷毛目
	596	陶器	小皿	龍門司	一括	G－8	Ⅲa	5.6	－	－	黄灰	透明釉	全面	19世紀後半	飛び鉋
	597	陶器	土瓶蓋	苗代川	一括	F・G－9～11	表土	6.8	4.4	2.5	暗赤褐	鉄釉	外面のつまみと庇	18世紀後半	
	598	陶器	土瓶蓋	苗代川	－	K・L－15・16	表土	6.8	4.4	－	赤褐	白化粧土＋ 褐釉	上面のみ施釉	18世紀後半	
	599	陶器	土瓶蓋	龍門司	一括	G－9	Ⅳa	11.0	－	－	灰白	白化粧土＋ 透明釉	上面のみ施釉	18世紀後半	
	600	陶器	土瓶蓋	龍門司	一括	K・L－11・12 I・J－13・14	撹乱	11.0	－	－	灰	白化粧土＋ 褐釉	上面のみ施釉	18世紀後半	
	601	白磁	蓋	－	－	F－15・16	表土	－	－	－	灰褐	白濁した釉	外面施釉	－	
	602	陶器	土瓶	－	－	G－21 E－23	表土	9.2	－	－	黒褐	透明釉	全面	19世紀	
	603	陶器	急須	龍門司	－	H－12	撹乱	－	－	－	明赤褐	褐釉	外面，胴～腰部	19世紀	
	604	陶器	急須	龍門司	－	F－19	横転	－	－	－	にぶい赤褐	鮫肌	胴部	19世紀	
	605	白磁	徳利	肥前	－	G～M－15・16	－	8.8	－	－	灰白	透明釉	全面	－	
	606	染付	徳利	肥前	－	I～L－17	－	－	－	－	灰白	透明釉	外面，内面頸部 中位	－	
	607	陶器	灯明皿	龍門司	一括	H－8	Ⅲa	－	4.4	4.4	にぶい赤褐	褐釉	内面，底部を除く 外面	18世紀後半	糸切り底
	608	陶器	香炉	－	6465	J－15	表土	－	－	－	灰褐	透明釉	外面	－	
	609	陶器	灯明台	－	一括	K－21	I	－	3.5	6.2	褐	透明釉	腰と底部以外施釉	18世紀後半	
	610	陶器	灯明台	－	－	F・G－ベルト	－	－	3.8	5.0	褐灰＋ にぶい橙	鉄釉	腰と底部以外施釉	18世紀後半	
	611	陶器	擂鉢	堂平窯		H－10	表土	－	－	－		褐釉	全面		
	612	陶器	甕	苗代川	一括	H－10	表土	34.6	－	－	にぶい赤褐	鉄釉	全面	18世紀	釉剥ぎ，砂目
	613	陶器	甕	苗代川	－	K・L－15・16	表土	33.2	－	－	赤	鉄釉	口唇部以外 施釉	18世紀	
	614	鉄製品	キセル	－	一括	E－15	撹乱	（長さ） 5.2	（幅） 1.0	－	－	－	－	19世紀	－

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の概要

自然科学分析は，平成19年度から平成25年度にかけて16回に分けて依頼した。平成26年度以降も継続して依頼を計画している。なお，今回は遺跡環境復元関連と弥生時代から近世に関する科学分析を対象とした。縄文時代晩期以前については，今後刊行の報告書において報告する予定である。このため，納品された報告書を基に時代，分野などの領域別に再編を行い掲載している。

第２節　放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定１

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

１　はじめに

鹿児島県曽於郡大崎町野方に位置する天神段遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。

試料は炭化材２点で，いずれも部位不明である。試料採取位置は，試料No.1（PLD-12243）がI・J-12・13区の掘立26号-P6の埋土，No.2（PLD-12244）がI・J-10・11区の掘立14号-P9（調査時No.）の埋土である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

３　結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値，誤差を丸めて表示した^{14}C年代，^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を，図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値，誤差を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお，暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

４　考察

試料について，同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。以下，2σ暦年代範囲に着目して結果を整理する。

試料No.1（PLD-12243）の2σ暦年代範囲は，1030-1170calAD（95.4%）で，平安時代に相当する。試料No.2（PLD-12244）は，1118-1213calAD（56.5%）および1043-1105calAD（38.9%）で，平安時代～鎌倉時代に相当する。

参考文献

キーリ C.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．縄文文化の研究1，246-275，雄山閣.

Bronk Ramsey, C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．縄文時代の考古学２ 歴史のものさし，257-269，同成社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代. 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E.（2004）IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

表１　放射線炭素年代測定１（測定試料及び処理）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-12243	調査区：I･J-12･13区 遺構：掘立26号-P6 層位：埋土 試料No.：1	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N） サルフィックス
PLD-12244	調査区：I･J-10･11区 遺構：掘立14号-P9（調査時No.） 層位：埋土 試料No.：2	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N） サルフィックス

表２　放射線炭素年代測定１（放射性炭素年代測定及び暦年較正結果）

測定番号	$\delta^{13}C$（‰）	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-12243 試料 No.：1	−27.91 ± 0.19	922 ± 25	920 ± 25	1045AD(42.9%)1095AD 1120AD(18.3%)1141AD 1148AD(7.0%)1156AD	1030AD(95.4%)1170AD
PLD-12244 試料 No.：2	−25.68 ± 0.28	895 ± 23	895 ± 25	1049AD(30.6%)1084AD 1124AD(9.0%)1137AD 1151AD(28.6%)1185AD	1043AD(38.9%)1105AD 1118AD(56.5%)1213AD

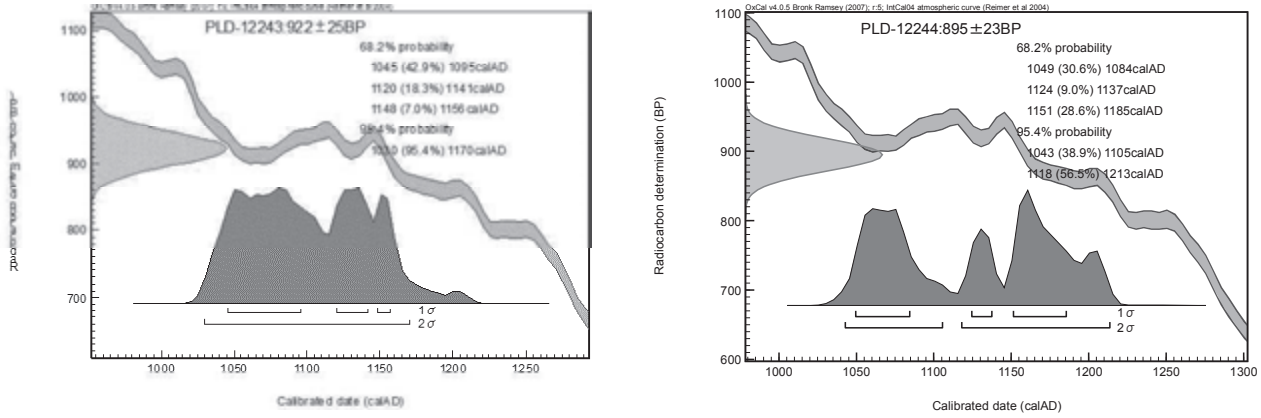


図１　放射線炭素年代測定１（暦年較正結果）

放射性炭素年代測定結果報告書（AMS測定）２

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

測定対象試料は，天神段遺跡のI- ９区から出土した石器付着炭化物（No.1：IAAA-72465）である。

２　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１gと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

３　測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバッ

クグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により$^{13}C/^{12}C$の測定も同時に行う。

4　算出方法

1）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，$\delta^{13}C$によって補正された値である。

3）付記した誤差は，複数回の測定値についてχ２検定が行われ，測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値，みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。

4）$\delta^{13}C$の値は，通常は質量分析計を用いて測定されるが，AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもある。$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：

$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：

$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$は，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に（加速器）と注記する。

5）$\Delta^{14}C$は，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C濃度を，$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}AS \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$$

（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$$

（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \ (‰)$$

6）pMC（percent Modern Carbon）は，現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合を示す表記であり，$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000 \ (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100 \ (\%)$$

国際的な取り決めにより，この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより，^{14}C年代が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$$

7）^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

8）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（$1\sigma = 68.2\%$）あるいは２標準偏差（$2\sigma = 95.4\%$）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。

5　測定結果

I−９区から出土した石器付着炭化物（No.1：IAAA-72465）の^{14}C年代は960±30yrBPである。暦年較正年代（$1\sigma = 68.2\%$）は，1020 ～ 1050AD（25.5％）・1080 ～ 1150AD（42.7％）である。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37（2）, 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43（2A）, 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43（2A）, 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

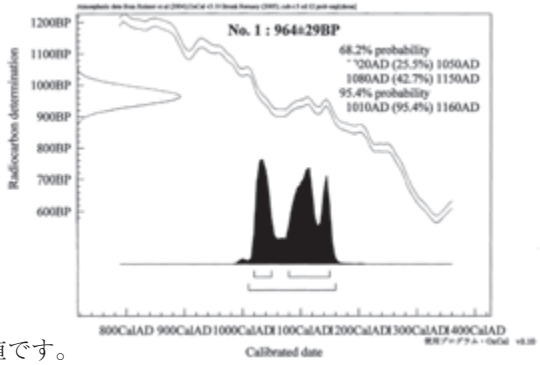
表１　放射線炭素年代測定２（測定試料及び年代測定結果）

IAAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-72465 #2099	試料採取場所：天神段遺跡　I-9区 試 料 形 態：炭化物 試 料 名 番 号：No. 1	Libby Age（yrBP）：960 ± 30 $\delta^{13}C$（‰），（加速器）= -21.9 ± 0.73 $\Delta^{14}C$（‰）= -113.1 ± 3.3 pMC（%）= 88.69 ± 0.33
	（参考）$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$（‰）= -107.5 ± 3 pMC（%）= 89.25 ± 0.3 Age（yrBP）：910 ± 30

表２　放射線炭素年代測定２（暦年較正結果）

IAA Code No.	試料番号	Libby Age（yrBP）
IAAA-72465	No. 1	964 ± 29

図１　放射線炭素年代測定２（暦年較正結果）



ここに記載するLibby　Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

天神段遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）３

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

天神段遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町野方に所在する。測定対象試料は，土坑墓１号底面から出土した石鍋の底に付着した炭化物（試料1：IAAA-81705）と，土師鍋の底に付着した炭化物（試料２：IAAA-81706）である。

２　測定の意義

石鍋や土師鍋の年代と，土坑墓１号の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１mmのカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

４　測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

１）年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，$\delta^{13}C$によって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

３）$\delta^{13}C$ は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。

測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により$^{13}C/^{12}C$を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

４）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

５）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

６　測定結果

土坑墓１号出土試料の^{14}C年代は，石鍋の底に付着した炭化物が800±30yrBP，土師鍋の底に付着した炭化物が860±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，試料１が1221 ～ 1261AD，試料２が1164 ～ 1215ADであり，両者には年代差が認められる。試料の炭素含有率はともに60%以上であり，十分な値であった。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と判断される。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37（2）, 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43（2A）, 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43（2A）, 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

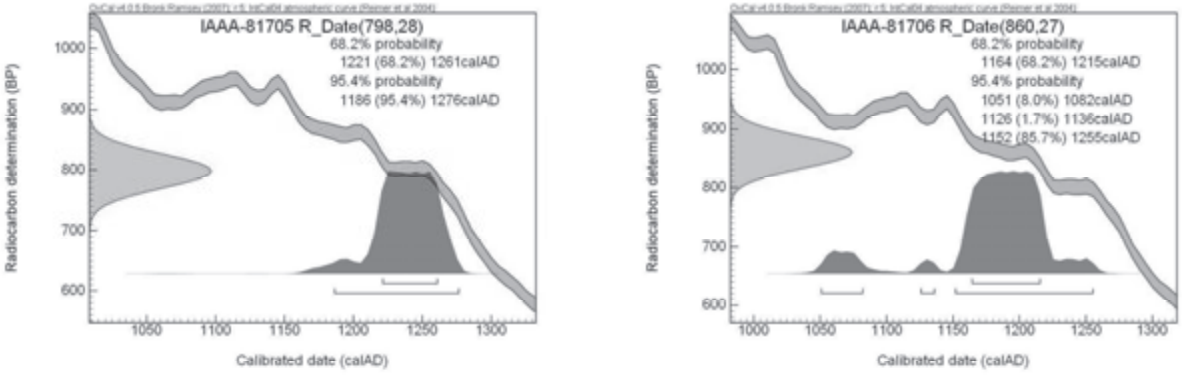
表１　放射線炭素年代測定３（測定試料及び処理方法，年代測定結果）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）			δ ^{13}C 補正あり					
								Libby Age（yrBP）			pMC（%）		
IAAA-81705	試料１	遺構：土坑墓１号 石鍋（大）	炭化物	AaA	-24.33	±	0.21	800	±	30	90.53	±	0.32
IAAA-81706	試料２	遺構：土坑墓１号 土師鍋	炭化物	AaA	-14.65	±	0.21	860	±	30	89.84	±	0.31

表２　放射線炭素年代測定３（暦年較正結果）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC （%）			
IAAA-81705	790 ± 30	90.66 ± 0.32	798 ± 28	1221AD - 1261AD（68.2%）	1186AD - 1276AD（95.4%）
IAAA-81706	690 ± 30	91.75 ± 0.31	860 ± 27	1164AD - 1215AD（68.2%）	1051AD - 1082AD（ 8.0%） 1126AD - 1136AD（ 1.7%） 1152AD - 1255AD（85.7%）

図１　放射線炭素年代測定３（暦年較正結果）



天神段遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）４

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

天神段遺跡の測定対象試料は，土坑，掘立柱建物跡ピットから出土した炭化物11点（1：IAAA-103534 ～ 11：IAAA-103544）である（表１）。

２　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

3MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。

４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

５　測定結果

J-12区土坑出土炭化物の^{14}C年代は，試料１が1000±20yrBP，試料２が1070±30yrBP，試料３が940±30yrBP，試料４が920±30yrBP，試料５が960±30yrBP，試料６が900±20yrBP，試料７が890±30yrBP，試料８が780±20yrBP，試料９が1230±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，試料１が997 ～ 1117cal ADの間に3つの範囲，試料２が905 ～ 1015cal ADの間に2つの範囲，試料３が1035 ～ 1152cal ADの間に３つの範囲，試料４が1045 ～ 1158cal ADの間に３つの範囲，試料５が1026 ～ 1151cal ADの間に３つの範囲，試料６が1048 ～ 1176cal ADの間に3つの範囲，試料７が1052 ～ 1208cal ADの間に3つの範囲，試料８が1225 ～ 1270cal ADの範囲，試料９が718 ～ 864cal ADの間

に３つの範囲で示される。

掘立柱建物跡出土炭化物の^{14}C年代は，掘立柱建物跡14号-P9（調査時No.）が2520±30yrBP，掘立柱建物跡26号-P6が2440±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，試料10が780 ～ 567cal BCの間に４つの範囲，試料11が727 ～ 416cal BCの間に４つの範囲で示され，おおむね縄文時代晩期から弥生時代への移行期頃に相当する。

試料の炭素含有率はすべて50％を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19（3）, 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51（4）, 1111-1150

表１ 放射線炭素年代測定４（測定試料及び処理方法，年代測定結果）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-103534	1	土坑墓１号　北側埋土内　3/10	炭化物	AAA	-27.70 ± 0.50	1,000 ± 20	88.34 ± 0.27
IAAA-103535	2	土坑墓１号　北側埋土内　3/12	炭化物	AAA	-26.70 ± 0.48	1,070 ± 30	87.53 ± 0.27
IAAA-103536	3	土坑墓１号　北側埋土内　3/19	炭化物	AAA	-28.90 ± 0.51	940 ± 30	88.95 ± 0.28
IAAA-103537	4	土坑墓１号　南側埋土内　3/7	炭化物	AAA	-27.60 ± 0.64	920 ± 30	89.18 ± 0.29
IAAA-103538	5	土坑墓１号　南側埋土内　3/17	炭化物	AAA	-29.52 ± 0.60	960 ± 30	88.76 ± 0.29
IAAA-103539	6	土坑墓１号　滑石製石鍋付着炭化物	炭化物	AaA	-22.86 ± 0.56	900 ± 20	89.4 ± 0.26
IAAA-103540	7	土坑墓２号　埋土内　3/7	炭化物	AaA	-26.74 ± 0.60	890 ± 30	89.51 ± 0.28
IAAA-103541	8	土坑墓２号　埋土内　3/12	炭化物	AAA	-27.00 ± 0.50	780 ± 20	90.77 ± 0.26
IAAA-103542	9	土坑墓３号　埋土内	炭化物	AAA	-27.91 ± 0.59	1,230 ± 30	85.82 ± 0.28
IAAA-103543	10	掘立柱建物跡 14 号 -P9 内出土（調査時 No.）	炭化物	AAA	-27.91 ± 0.39	2,520 ± 30	73.04 ± 0.25
IAAA-103544	11	掘立柱建物跡 26 号 -P6 内出土	炭化物	AAA	-28.94 ± 0.41	2,440 ± 30	73.8 ± 0.25

表２　放射線炭素年代測定４（暦年較正結果）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-103534	1,040 ± 20	87.85 ± 0.25	995 ± 24	997calAD - 1006calAD(6.4%) 1012calAD - 1041calAD(55.5%) 1109calAD - 1117calAD(6.3%)	989calAD - 1049calAD(72.7%) 1087calAD - 1123calAD(17.8%) 1138calAD - 1150calAD(4.9%)
IAAA-103535	1,100 ± 20	87.23 ± 0.26	1,069 ± 25	905calAD - 913calAD(8.4%) 970calAD - 1015calAD(59.8%)	896calAD - 923calAD(19.4%) 940calAD - 1020calAD(76.0%)
IAAA-103536	1,010 ± 20	88.24 ± 0.26	940 ± 25	1035calAD - 1051calAD(13.6%) 1081calAD - 1127calAD(40.2%) 1135calAD - 1152calAD(14.4%)	1030calAD - 1156calAD(95.4%)
IAAA-103537	960 ± 20	88.71 ± 0.26	919 ± 25	1045calAD - 1095calAD(42.2%) 1120calAD - 1141calAD(18.0%) 1148calAD - 1158calAD(8.0%)	1030calAD - 1176calAD(95.4%)
IAAA-103538	1,030 ± 20	87.94 ± 0.26	957 ± 26	1026calAD - 1049calAD(22.1%) 1086calAD - 1123calAD(34.8%) 1138calAD - 1151calAD(11.3%)	1022calAD - 1155calAD(95.4%)
IAAA-103539	870 ± 20	89.79 ± 0.24	900 ± 23	1048calAD - 1087calAD(35.4%) 1122calAD - 1139calAD(12.2%) 1150calAD - 1176calAD(20.6%)	1042calAD - 1107calAD(44.0%) 1117calAD - 1210calAD(51.4%)
IAAA-103540	920 ± 20	89.19 ± 0.26	890 ± 25	1052calAD - 1081calAD(22.9%) 1128calAD - 1134calAD(4.0%) 1152calAD - 1208calAD(41.3%)	1044calAD - 1102calAD(33.4%) 1118calAD - 1215calAD(62.0%)
IAAA-103541	810 ± 20	90.39 ± 0.25	778 ± 23	1225calAD - 1270calAD(68.2%)	1220calAD - 1275calAD(95.4%)
IAAA-103542	1,280 ± 20	85.31 ± 0.26	1,228 ± 26	718calAD - 743calAD(16.7%) 769calAD - 827calAD(37.7%) 840calAD - 864calAD(13.8%)	691calAD - 750calAD(27.9%) 762calAD - 882calAD(67.5%)
IAAA-103543	2,570 ± 30	72.61 ± 0.24	2,523 ± 27	780calBC - 749calBC(19.7%) 688calBC - 666calBC(14.9%) 643calBC - 591calBC(28.9%) 578calBC - 567calBC(4.7%)	792calBC - 731calBC(28.2%) 692calBC - 660calBC(17.8%) 651calBC - 544calBC(49.4%)
IAAA-103544	2,510 ± 30	73.2 ± 0.24	2,440 ± 26	727calBC - 694calBC(15.6%) 658calBC - 655calBC(1.3%) 542calBC - 483calBC(28.1%) 466calBC - 416calBC(23.1%)	751calBC - 687calBC(22.5%) 667calBC - 640calBC(7.0%) 594calBC - 407calBC(66.0%)

図１ 放射線炭素年代測定４（暦年較正結果１）

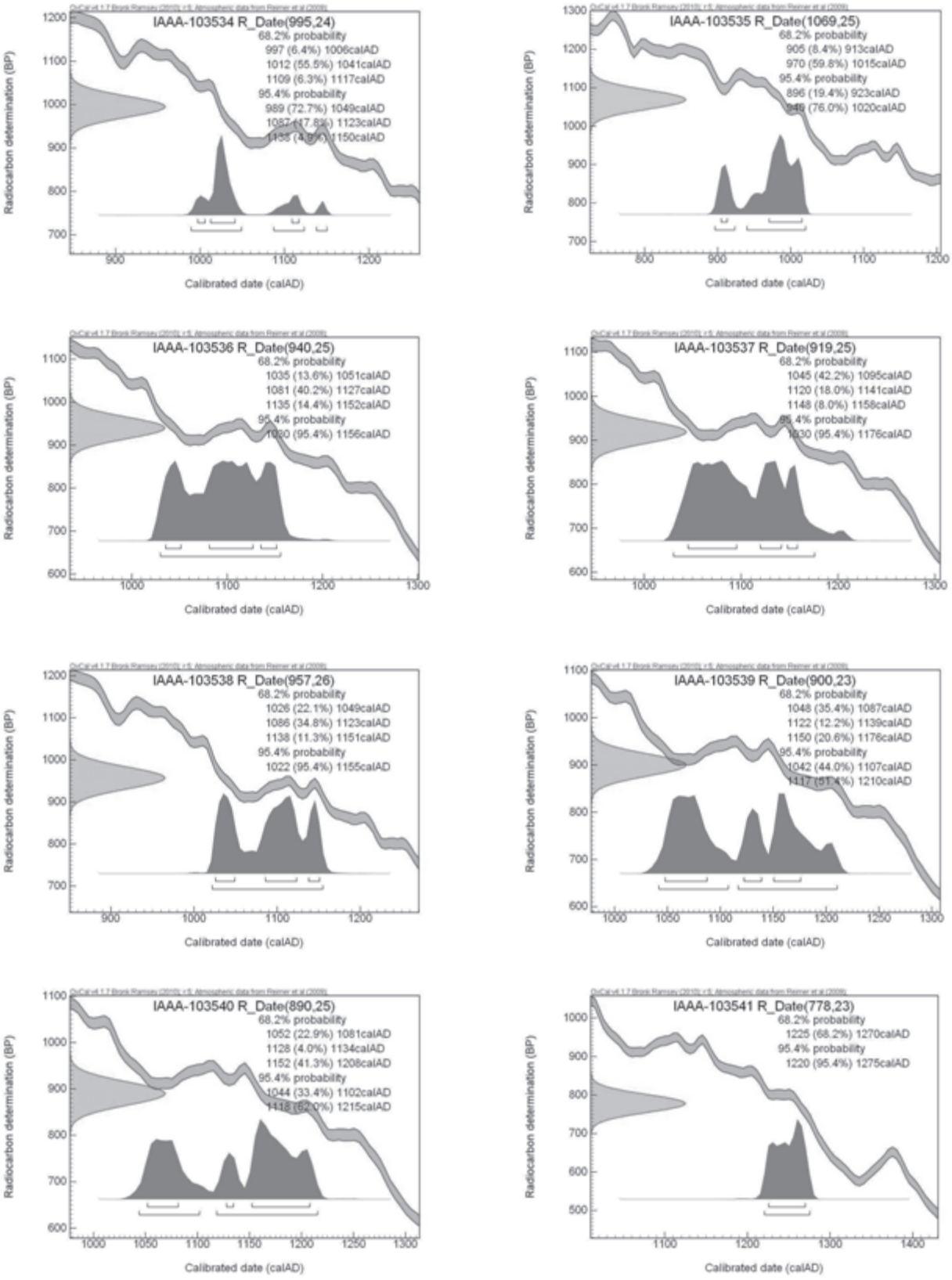
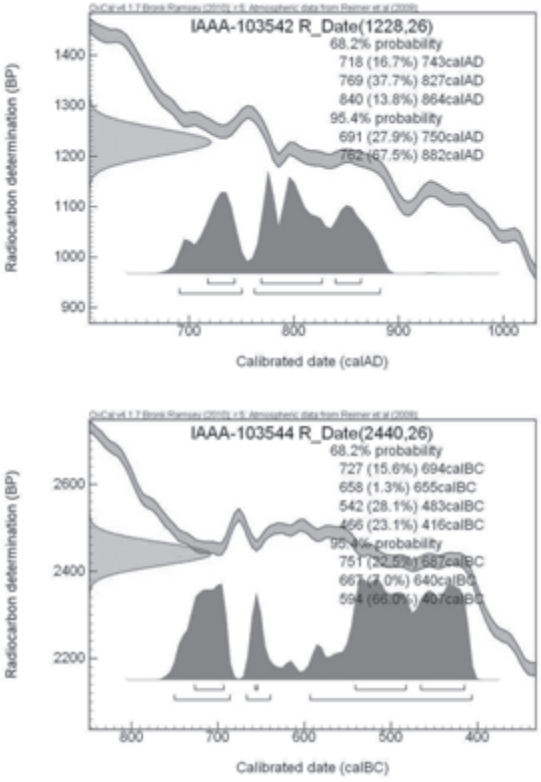


図２　放射線炭素年代測定４（暦年較正結果２）



天神段遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）５

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

鹿児島県天神段遺跡の測定対象試料は，土坑及び土坑墓から出土した炭化物（試料３：IAAA-111568 ～試料10：IAAA-111575），掘立柱建物跡のピットから出土した炭化物（試料11：IAAA-111576 ～試料13：IAAA-111578），住居及び竪穴住居跡の可能性が高い遺構（弥生竪穴住居２号）から出土した炭化物（試料19：IAAA-111584）の合計6点である（表１）。

２　測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する

(Stuiver and Polach 1977)。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

3）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。

4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

土坑及び土坑墓から出土した炭化物の^{14}C年代は，中世土坑46号の３が860±30yrBP，土坑墓８号の10が1250±30yrBPである。最も古い9170±40yrBP（1）から最も新しい860±30yrBP（3）までの変異があり，その中では１と６の値が誤差（±1σ）の範囲で重なり，近い年代を示す。暦年較正年代（1σ）は，中世土坑46号が1165 ～ 1215cal ADの範囲，土坑墓８号が690 ～ 801cal ADの間に３つの範囲で示される。古い順に見ると，土坑墓８号が古代，土坑46号が古代から中世頃に相当する。

掘立柱建物跡のピットから出土した炭化物の^{14}C年代は，掘立23号-P1の11が880±20yrBP，掘立４号-P7の12が1270±20yrBP，掘立59号-P1（調査時No.）の13が2920±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，11が1155 ～ 1215cal ADの範囲，12が687 ～ 770cal ADの間に２つの範囲，13が1192 ～ 1055cal BCの間に３つの範囲で示され，11は古代から中世頃，12は古代頃，13は縄文時代晩期前葉頃に相当する年代値である。

住居及び竪穴住居跡の可能性が高い遺構から出土した炭化物の^{14}C年代は，竪穴住居跡の可能性が高い弥生竪穴住居２号の19が2960±30yrBPである。19が1256 ～ 1128cal BCの間に２つの範囲で示される。19は縄文時代晩期前葉頃に相当する。

試料の炭素含有率はすべて60％以上の十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19（3）, 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51（4）, 1111-1150

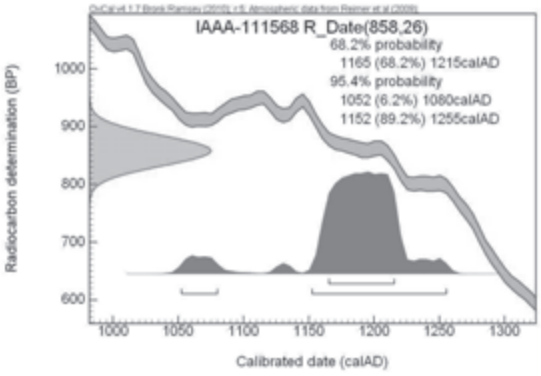
表１　放射線炭素年代測定５（測定試料及び処理方法，年代測定結果）

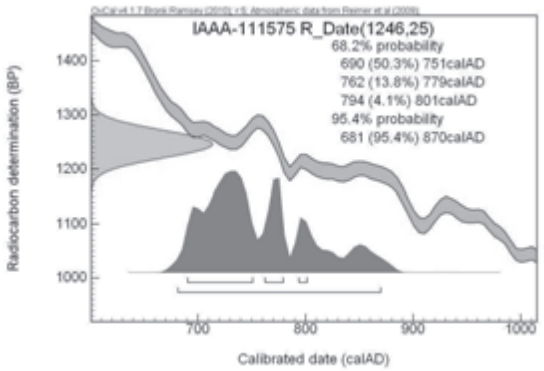
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-111568	3	中世土坑46号	炭化物	AaA	-29.81 ± 0.57	860 ± 30	89.86 ± 0.29
IAAA-111575	10	土坑墓８号	炭化物	AAA	-30.52 ± 0.5	1,250 ± 30	85.63 ± 0.27
IAAA-111576	11	掘立23号-P1	炭化物	AAA	-29.49 ± 0.46	880 ± 20	89.68 ± 0.27
IAAA-111577	12	掘立４号-P7	炭化物	AaA	-31.24 ± 0.58	1,270 ± 20	85.34 ± 0.26
IAAA-111578	13	掘立59号-P1（調査時N0.）	炭化物	AaA	-27.69 ± 0.55	2,920 ± 30	69.48 ± 0.23
IAAA-111584	19	弥生竪穴住居２号	炭化物	AAA	-26.95 ± 0.58	2,960 ± 30	69.21 ± 0.24

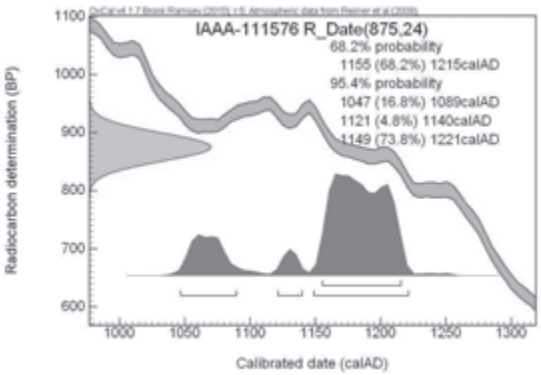
表２　放射線炭素年代測定５（暦年較正結果）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-111568	940 ± 20	88.98 ± 0.27	858 ± 26	1165calAD - 1215calAD(68.2%)	1052calAD - 1080calAD(6.2%) 1152calAD - 1255calAD(89.2%)
IAAA-111575	1,340 ± 20	84.66 ± 0.25	1,246 ± 25	690calAD - 751calAD(50.3%) 762calAD - 779calAD(13.8%) 794calAD - 801calAD(4.1%)	681calAD - 870calAD(95.4%)
IAAA-111576	950 ± 20	88.86 ± 0.25	875 ± 24	1155calAD - 1215calAD(68.2%)	1047calAD - 1089calAD(16.8%) 1121calAD - 1140calAD(4.8%) 1149calAD - 1221calAD(73.8%)
IAAA-111577	1,380 ± 20	84.25 ± 0.23	1,273 ± 24	687calAD - 723calAD(37.4%)	671calAD - 778calAD (95.4%) 740calAD - 770calAD (30.8%)
IAAA-111578	2,970 ± 30	69.1 ± 0.22	2,924 ± 26	1192calBC - 1177calBC(9.3%) 1162calBC - 1143calBC(11.9%) 1132calBC - 1055calBC(47.0%)	1255calBC - 1238calBC(3.5%) 1215calBC - 1022calBC(91.9%)
IAAA-111584	2,990 ± 30	68.93 ± 0.23	2,956 ± 28	1256calBC - 1237calBC(11.4%) 1215calBC - 1128calBC(56.8%)	1268calBC - 1055calBC(95.4%)

図１　放射線炭素年代測定５（暦年較正結果１）







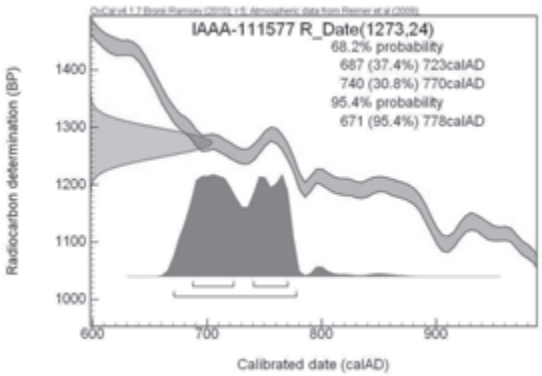
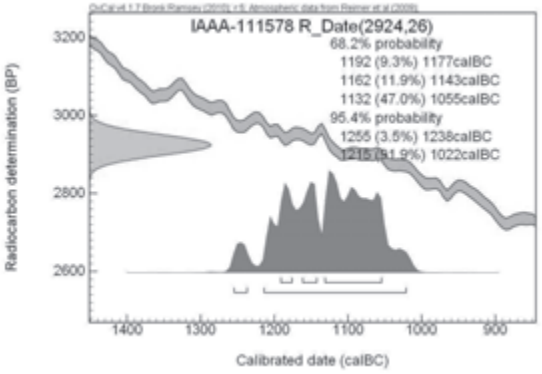
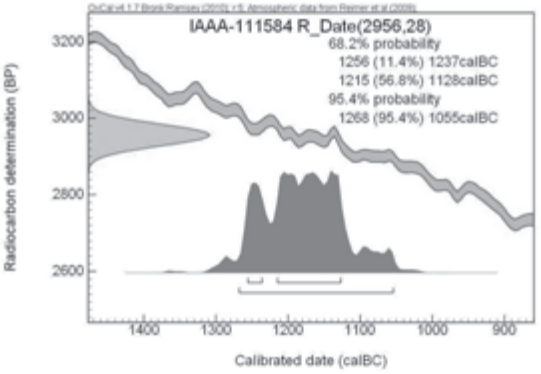


図２　放射線炭素年代測定５（暦年較正結果２）





天神段遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）６

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

鹿児島県天神段遺跡の測定対象試料は，鍛冶炉から出土した炭化物（試料18：IAAA-111681 ～ 試料20：IAAA-111683）の合計3点である（表１）。

２　測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。
２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。
６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。
２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。
３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。
４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの

蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

鍛冶炉から出土した炭化物の^{14}C年代は，鍛冶炉１の試料18が960±30yrBP，鍛冶炉２の試料19が950±30yrBP，鍛冶炉３の試料20が960±20yrBPである。３点の値は誤差（±1σ）の範囲でよく一致し，ほぼ同年代を示す。暦年較正年代（1σ）は，18が1027 ～ 1151cal AD，19が1028 ～ 1151cal AD，20が1027 ～ 1150cal ADの間に各々３つの範囲で示される。試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19（3）, 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51（4）, 1111-1150

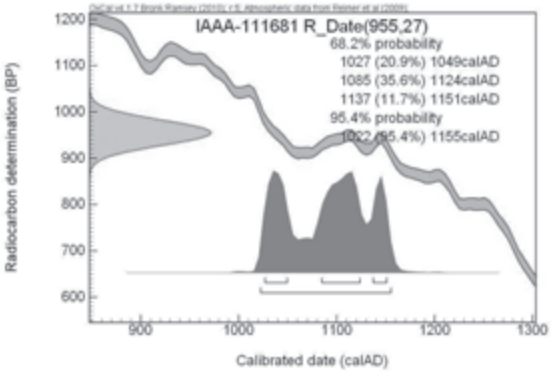
表１　放射線炭素年代測定６（測定試料及び処理方法，年代測定結果）

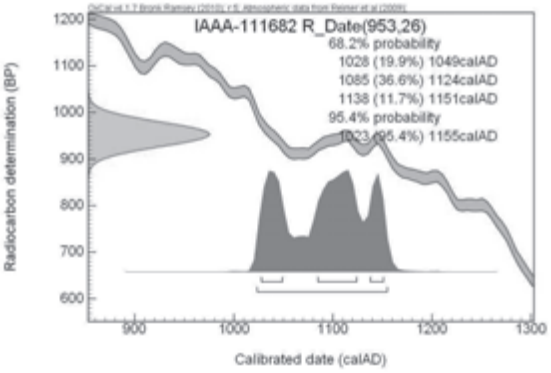
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-111681	18	鍛冶炉1	炭化物	AAA	-25.67 ± 0.56	960 ± 30	88.79 ± 0.31
IAAA-111682	19	鍛冶炉2	炭化物	AAA	-28.87 ± 0.53	950 ± 30	88.8 ± 0.29
IAAA-111683	20	鍛冶炉3	炭化物	AaA	-28.03 ± 0.52	960 ± 20	88.77 ± 0.27

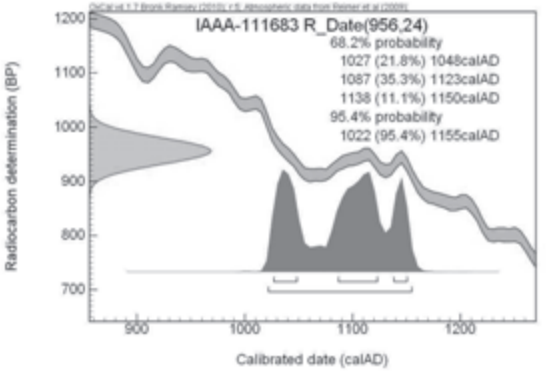
表２　放射線炭素年代測定６（暦年較正結果）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age （yrBP）	pMC （%）			
IAAA-111681	970 ± 30	88.67 ± 0.29	955 ± 27	1027calAD - 1049calAD（20.9%） 1085calAD - 1124calAD（35.6%） 1137calAD - 1151calAD（11.7%）	1022calAD - 1155calAD（95.4%）
IAAA-111682	1,020 ± 20	88.1 ± 0.27	953 ± 26	1028calAD - 1049calAD（19.9%） 1085calAD - 1124calAD（36.6%） 1138calAD - 1151calAD（11.7%）	1023calAD - 1155calAD（95.4%）
IAAA-111683	1,010 ± 20	88.22 ± 0.25	956 ± 24	1027calAD - 1048calAD（21.8%） 1087calAD - 1123calAD（35.3%） 1138calAD - 1150calAD（11.1%）	1022calAD - 1155calAD（95.4%）

図１　放射線炭素年代測定６（暦年較正結果）







天神段遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）７

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

鹿児島県天神段遺跡の測定対象試料は，掘立柱建物跡から出土した炭化物（試料1：IAAA-112897，試料２：IAAA-112898）の合計２点である（表１）。

２　測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を

表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

3）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表に，補正していない値を参考値として表２に示した。

4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

掘立柱建物跡から出土した炭化物の^{14}C年代は，掘立38号の試料1が920±20yrBP，掘立５号-P8の試料２が1220±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，１が1045 ～ 1158cal ADの間に3つの範囲，2が772 ～ 870cal ADの範囲で示される。試料の炭素含有率はすべて60％以上の十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19（3）, 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51（4）, 1111-1150

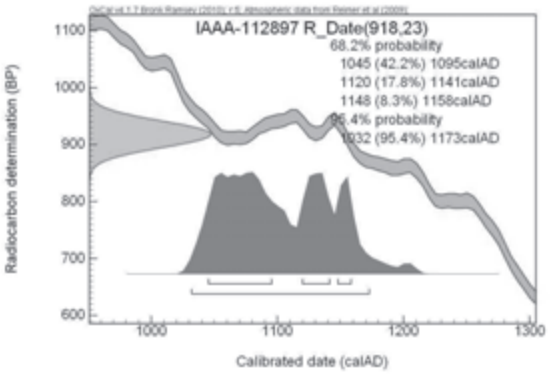
表１　放射線炭素年代測定７（測定試料及び処理方法，年代測定結果）

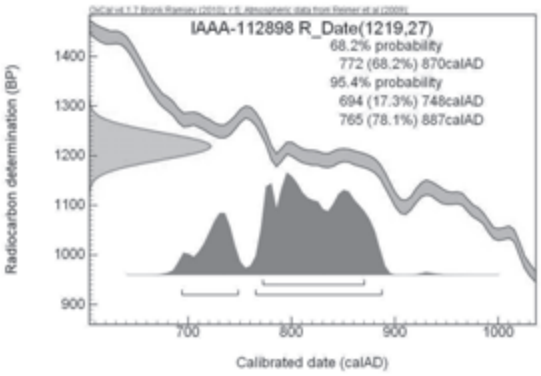
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-112897	1	掘立38号	炭化物	AaA	-18.72 ± 0.39	920 ± 20	89.19 ± 0.26
IAAA-112898	2	掘立5号-P8	炭化物	AAA	-24.22 ± 0.74	1,220 ± 30	85.91 ± 0.3

表２　放射線炭素年代測定７（暦年較正結果）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age （yrBP）	pMC （%）			
IAAA-112897	820 ± 20	90.35 ± 0.26	918 ± 23	1045calAD - 1095calAD（42.2%） 1120calAD - 1141calAD（17.8%） 1148calAD - 1158calAD（ 8.3%）	1032calAD - 1173calAD（95.4%）
IAAA-112898	1,210 ± 30	86.05 ± 0.27	1,219 ± 27	772calAD - 870calAD（68.2%）	694calAD - 748calAD（17.3%） 765calAD - 887calAD（78.1%）

図１　放射線炭素年代測定７（暦年較正結果）





天神段遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）８

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

天神段遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町野方7233番地ほかに所在する。標高200mのシラス台地を菱田川支流の大鳥川が浸食し，小台地群に分断された起伏の多い地形であり，遺跡はこの縁辺部に位置する。測定対象試料は，掘立柱建物跡6号（調査時NO.）出土炭化物（試料1：IAAA-120900），掘立柱建物48号出土炭化物（試料4：IAAA-120901），土坑墓4号出土炭化物（試料6：IAAA-120902），土坑墓5号出土炭化物（試料7:IAAA-120903），土坑墓7号出土炭化物（試料8：IAAA-120904），土坑墓8号出土炭化物（試料10：IAAA-120905）の合計6点である（表１）。

２　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。

４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2％あるい

は２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C 補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Broは，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に 示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

５　測定結果

炭化物の^{14}C年代は，掘立柱建物跡6号（調査時No.）出土の試料１が940±20yrBP，掘立柱建物跡48号出土の試料４が1250±20yrBP，土坑墓４号出土の試料６が870±20yrBP，土坑墓５号出土の試料７が890±20yrBP，土坑墓７号出土の試料８が1220±20yrBP，土坑墓８号出土の試料10が900±20yrBPである。

暦年較正年代（1σ）は，試料１が1039 ～ 1152cal ADの間に３つの範囲，試料４が694 ～ 776cal ADの間に２つの範囲，試料６が1160 ～ 1210cal ADの範囲，試料７が1052 ～ 1185cal ADの間に３つの範囲，試料８が773 ～ 868cal ADの間に２つの範囲，試料10が1049 ～ 1175cal ADの間に３つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて60％以上の十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51（4）, 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19（3）, 355-363

nk Ramsey 2009）

表１　放射線炭素年代測定８（測定試料及び処理方法，年代測定結果）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-120900	1	掘立柱建物跡６号（調査時No.）	炭化物	AaA	-27.59 ± 0.36	940 ± 20	88.99 ± 0.23
IAAA-120901	4	掘立柱建物跡48号	炭化物	AAA	-24.23 ± 0.25	1,250 ± 20	85.55 ± 0.21
IAAA-120902	6	土坑墓４号	炭化物	AAA	-26.43 ± 0.24	870 ± 20	89.7 ± 0.23
IAAA-120903	7	土坑墓５号	炭化物	AAA	-25.85 ± 0.27	890 ± 20	89.48 ± 0.22
IAAA-120904	8	土坑墓７号	炭化物	AAA	-28.92 ± 0.34	1,220 ± 20	85.94 ± 0.22
IAAA-120905	10	土坑墓８号	炭化物	AAA	-25.51 ± 0.32	900 ± 20	89.42 ± 0.22

表２　放射線炭素年代測定８（暦年較正結果）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-120900	980 ± 20	88.51 ± 0.22	937 ± 20	1039calAD - 1051calAD(11.2%) 1081calAD - 1127calAD(41.8%) 1135calAD - 1152calAD(15.2%)	1032calAD - 1155calAD(95.4%)
IAAA-120901	1,240 ± 20	85.69 ± 0.21	1,253 ± 20	694calAD - 748calAD(56.9%) 765calAD - 776calAD(11.3%)	678calAD - 783calAD(89.0%) 789calAD - 812calAD(5.3%) 845calAD - 855calAD(1.1%)
IAAA-120902	900 ± 20	89.44 ± 0.23	872 ± 21	1160calAD - 1210calAD(68.2%)	1050calAD - 1082calAD(10.8%) 1125calAD - 1136calAD(2.2%) 1151calAD - 1220calAD(82.5%)
IAAA-120903	910 ± 20	89.33 ± 0.21	892 ± 19	1052calAD - 1081calAD(28.8%) 1128calAD - 1134calAD(4.0%) 1152calAD - 1185calAD(35.5%)	1045calAD - 1095calAD(34.5%) 1120calAD - 1142calAD(10.6%) 1147calAD - 1214calAD(50.3%)
IAAA-120904	1,280 ± 20	85.25 ± 0.21	1,217 ± 20	773calAD - 829calAD(45.6%) 837calAD - 868calAD(22.6%)	716calAD - 744calAD(9.5%) 767calAD - 885calAD(85.9%)
IAAA-120905	910 ± 20	89.33 ± 0.21	898 ± 19	1049calAD - 1084calAD(35.4%) 1124calAD - 1137calAD(10.4%) 1151calAD - 1175calAD(22.4%)	1044calAD - 1101calAD(43.0%) 1119calAD - 1210calAD(52.4%)

図１　放射線炭素年代測定８（暦年較正結果１）

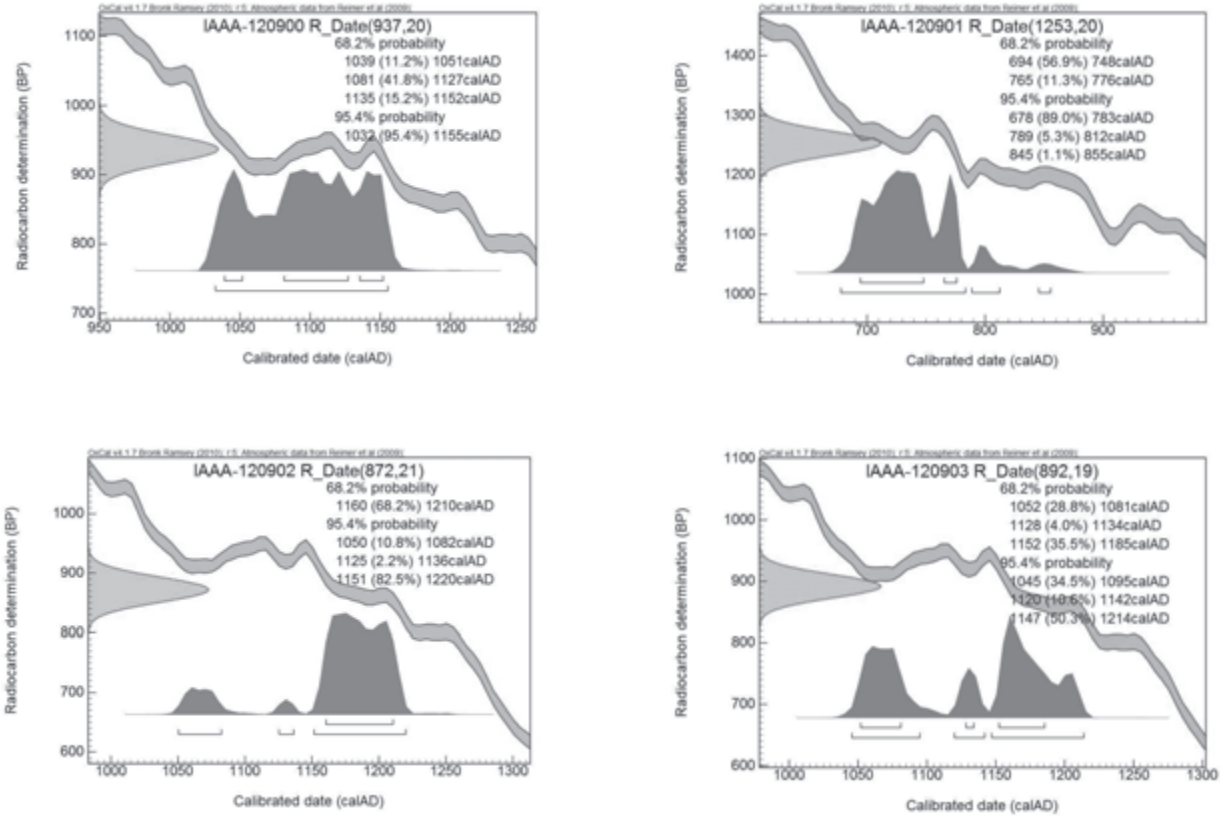
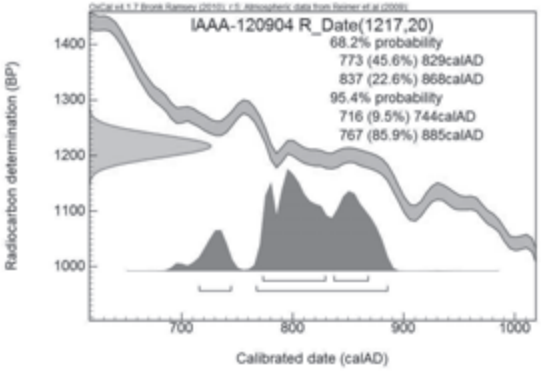
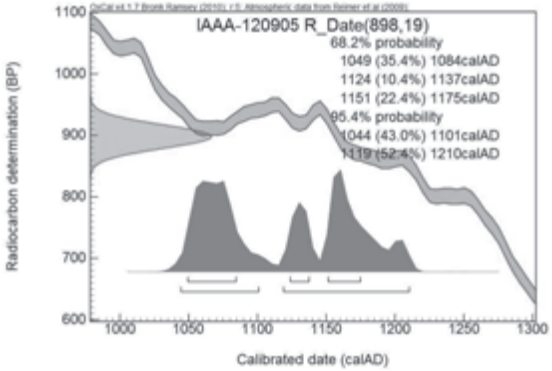


図２　放射線炭素年代測定８（暦年較正結果2）





天神段遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）９

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

天神段遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町野方7233番地ほかに所在する。標高200mのシラス台地が菱田川支流の大鳥川によって侵食され，小台地群に分断された起伏の多い地形で，遺跡はその縁辺部に位置する。測定対象試料は，住居状遺構と土坑墓から出土した木炭合計4点である（表１）。

２　測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/?（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。

４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。

暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

試料の測定結果を表１，2に示す。

試料の^{14}C年代は，試料１が1290±30yrBP，試料２が1790±20yrBP，試料３が2880±30yrBP，試料４が860±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，試料１が古墳時代終末期から古代頃，試料２が弥生時代後期から古墳時代前期頃，試料３が縄文時代晩期前葉頃，試料４が古代から中世頃に相当する（藤尾2009，小林編2008，佐原2005）。

なお，試料２が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては，北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜2009，坂本2010など）。その日本版較正曲線を用いて試料2の測定結果を暦年較正した場合，ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337-360

藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり　第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎,松木武彦編弥生時代の考古学1　弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55（4）, 1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学　上　ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, （株）加速器分析研究所, 85-90

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19（3）, 355-363

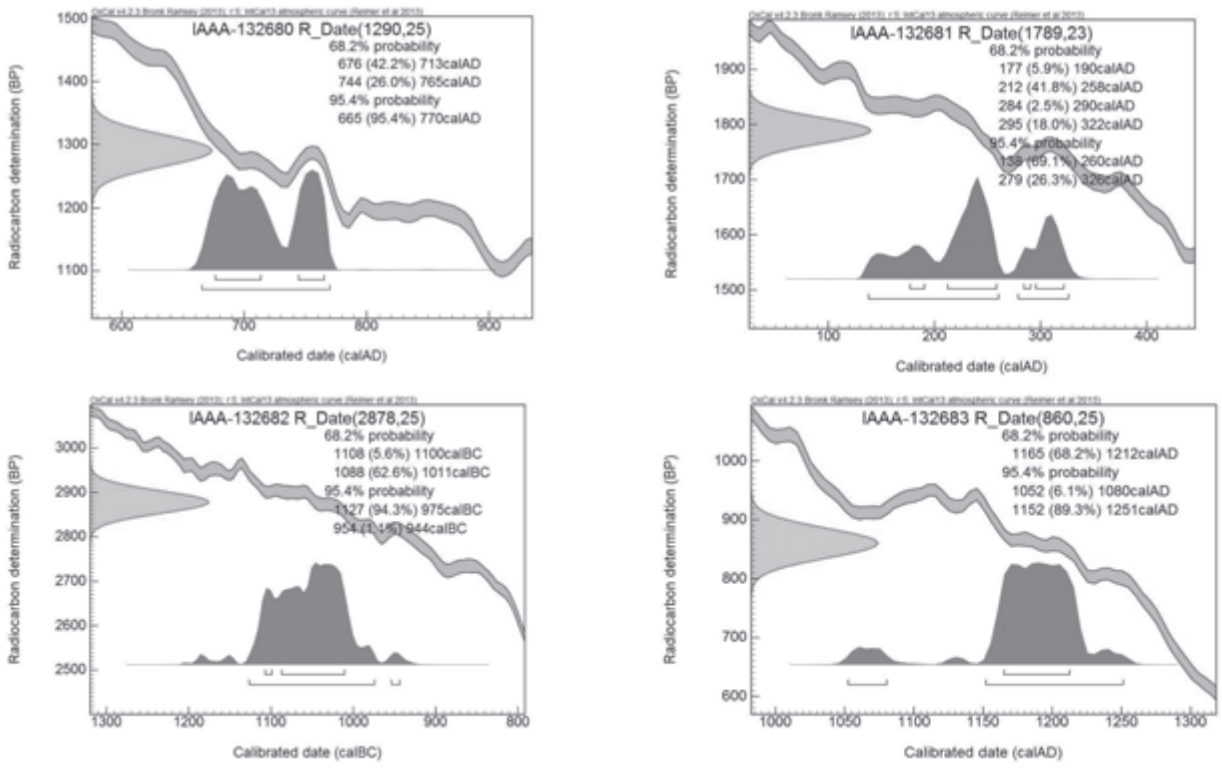
表１　放射線炭素年代測定９（測定試料及び処理方法，年代測定結果）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-132680	1	竪穴住居状遺構２号(古代)	木炭	AAA	-26.16 ± 0.79	1,290 ± 30	85.16 ± 0.27
IAAA-132681	2	竪穴住居状遺構１号(古代)	木炭	AAA	-26.70 ± 0.52	1,790 ± 20	80.03 ± 0.24
IAAA-132682	3	土坑墓７号	木炭	AaA	-27.79 ± 0.55	2,880 ± 30	69.88 ± 0.23
IAAA-132683	4	土坑墓８号	木炭	AAA	-28.85 ± 0.77	860 ± 30	89.85 ± 0.28

表２　放射線炭素年代測定９（暦年較正結果）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132680	1,310 ± 20	84.95 ± 0.23	1,290 ± 25	676calAD - 713calAD(42.2%)	665calAD - 770calAD(95.4%)
IAAA-132681	1,820 ± 20	79.75 ± 0.22	1,789 ± 23	744calAD - 765calAD(26.0%) 177calAD - 190calAD(5.9%) 212calAD - 258calAD(41.8%) 284calAD - 290calAD(2.5%)	138calAD - 260calAD(69.1%) 279calAD - 326calAD(26.3%)
IAAA-132682	2,920 ± 20	69.48 ± 0.21	2,878 ± 25	1108calBC - 1100calBC(5.6%) 1088calBC - 1011calBC(62.6%)	1127calBC - 975calBC(94.3%) 954calBC - 944calBC(1.1%)
IAAA-132683	920 ± 20	89.14 ± 0.24	860 ± 25	1165calAD - 1212calAD(68.2%)	1052calAD - 1080calAD(6.1%) 1152calAD - 1251calAD(89.3%)

図１　放射線炭素年代測定９（暦年較正結果）



第３節　種実同定

天神段遺跡の種実同定１

（株）加速器分析研究所

はじめに

本分析調査では，天神段遺跡（鹿児島県曽於郡大崎町所在）より出土した種実遺体の同定を実施し，当時の植物利用に関する資料を得る。

１　試料

試料は，土坑墓より出土した種実遺体17点約200粒（試料No.1 ～ 17）である。

２　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は，現生標本および石川(1994)，中山ほか(2000)，吉崎(1992)等を参考に実施し，個数を数えて一覧表で示す。分析後は，種実遺体を分類群毎に容器に入れて保管する。

３　結果および考察

結果を表１に示す。被子植物５分類群（栽培種で穀類のイネ，オオムギ，コムギ?，アズキ類，マメ類）195個の炭化した種実が抽出・同定された。種実以外では，炭化材が４個と不明の炭化物が２個確認された。

土坑墓の種実遺体群は，全体の96%をオオムギが占め，イネ，コムギ?，アズキ類，マメ類がわずかに混じる種類構成であった。これらの穀類は，当時の本遺跡周辺域における主要な植物質食糧であったことが示唆される。また，イネやオオムギには，胚乳表面に穎の付着が確認されたことから，穎(籾)のついた生米・生麦の状態で火を受け炭化したことが推定される。

各分類群の写真を図１に示し，形態的特徴を以下に記す。

・イネ（Oryza sativa L.）　イネ科イネ属

胚乳と胚乳を包む穎(果)は，炭化しており黒色。胚乳は，長さ4.4mm，幅2.6mm，厚さ2.0mmのやや偏平な長楕円体。基部一端には，胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で，２～３本の縦隆条がある。また，胚乳表面に穎の破片(籾殻)が付着した状態が確認される。

穎は，完形ならば，長さ６～ 7.5mm，幅３～４mm，厚さ２～３mm程度。基部に大きさ１mm程度の斜切状円柱形の果実序柄と１対の護穎を有し，その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は５脈，内穎は３脈をもち，ともに舟形を呈し，縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く，表面には顆粒状突起が縦列する（図１-1）。

・オオムギ（Hordeum valgare L.）　イネ科オオムギ属

胚乳と胚乳を包む穎(果)は，炭化しており黒色，やや偏平な紡錘状長楕円体で両端は尖る。完形174個のうち，状態が良好な129個の大きさは，長さ3.7 ～ 7.1（平均5.52±標準偏差0.80）mm，幅2.1 ～ 4.1（平均2.97±標準偏差0.36）mm，厚さ1.7 ～ 3.4（平均2.35±標準偏差0.29）mm。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり，背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面はやや平滑で，微細な縦筋がある。胚乳表面に穎（果）が付着する個体が多く確認される。果皮は薄く，表面には微細な縦筋がある（図１-2 ～ 5）。

・コムギ（Triticum aestivum L.）？　イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色，長さ3.9 ～ 4.3mm，幅2.9 ～ 3.3mm，厚さ2.0 ～ 2.6mmの楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり，背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面には微細な粒状模様があるが，焼き崩れ，発泡している（図１-6 ～ 8）。出土胚乳は状態が不良のため，上記のオオムギである可能性も否めず，「?」を付している。

・アズキ類（Vigna subgen. Ceratotropics（Piper）Verdc.）マメ科ササゲ属

種子は炭化しており黒色，やや偏平な楕円体。試料No.10は，子葉の合わせ目から半分以下に割れた破片で，長さ4.5mm，幅3.4mm，半分の厚さ1.6mm。子葉内面に北大基準（吉崎,1992）の「アズキグループ（幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり，胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する初生葉（図１-9）とその痕跡（図１-10）が確認される。種皮は薄く，表面は粗面。

なお，初生葉や痕跡を確認できない種子をマメ類としている。また，試料No.12の完形種子（残存長4.8mm，厚さ3.7mm，厚さ2.0mm）は，腹面の子葉合わせ目上に泥が付着し，長楕円形の臍の状態を確認できないため，マメ類としている（図１-11）。

引用文献

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

吉崎昌一,1992,古代雑穀の検出.月刊考古学ジャーナル,No.355,2-14.

鹿児島県天神段遺跡出土の種実同定２

（株）加速器分析研究所

はじめに

天神段遺跡（鹿児島県曽於郡大崎町野方7233番地ほか所在）より出土した種実遺体の同定を実施し，当時の植生や植物利用に関する資料を得る。

１　試料

試料は種1,2の２試料で，各試料１粒である。種１が掘立柱建物跡37号，種２が中世土坑51号から出土している。

2　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は，現生標本および石川(1994)，中山ほか(2000)，岡本(1979)を参考に実施し，個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は，種実遺体を容器に入れて保管する。

3　結果

結果を表２に示す。掘立柱建物跡37号より出土した種１は種実ではなく，風化したスコリアであった。中世土坑51号より出土した種２は，木本のイチイガシの炭化した子葉に同定された。種実遺体の写真を図２に示し，形態的特徴を以下に記す。

・イチイガシ(Quercus gilva Blume)ブナ科コナラ属

子葉は炭化しており黒色，長さ10.7mm，径7.4mm(種２)の楕円体。２枚からなる子葉は不揃いで，合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端からずれた位置にある。表面には，１本の深い溝が基部から頂部に向かい2/3程度まで発達している。子葉は硬く緻密で，表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。

4　考察

イチイガシは，高木になる常緑広葉樹で，湿潤，肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達し，現在の遺跡周辺地域にも分布している。

また，イチイガシは，子葉がアク抜きせずに生食可能で収量も多い有用植物であることから，果実や子葉の遺跡出土例も多く報告されている(渡辺,1975;岡本,1979など)。

中世土坑51号より出土したイチイガシの炭化子葉は，当時の本遺跡周辺の照葉樹林で採取された植物質食料であることが示唆され，何らかの理由により火熱を受け炭化したことが推定される。

引用文献

石川　茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

岡本　素治,1979,遺跡から出土するイチイガシ.大阪市立自然史博物館業績,第230号,31-39.

渡辺　誠,1975,縄文時代の植物食.雄山閣出版,187p.

※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

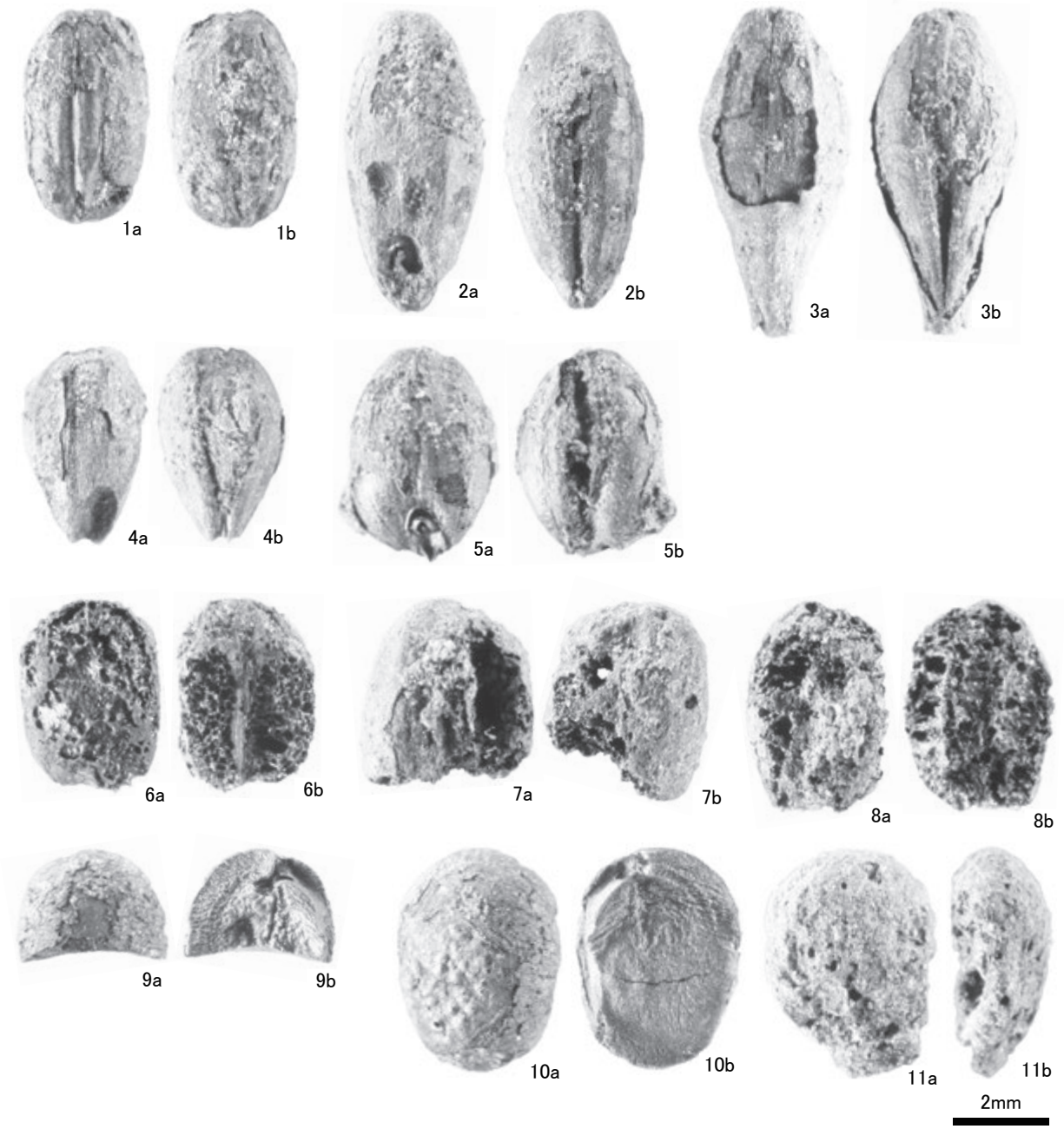
表１　種実同定１の炭化種実同定結果

試料No.	出土遺構	出土箇所	イネ	オオムギ		オオムギ?	コムギ?	アズキ類	マメ類		不明	炭化材	合計
			穎・胚乳	穎・胚乳		穎・胚乳	胚乳	種子	種子				
			完形	完形	破片	完形	完形	破片	完形	破片			
1	1号土坑墓A	北側埋土		30	1								31
2	1号土坑墓AA	北側埋土		2	2								4
3	1号土坑墓F	北側埋土		21	1								22
4	1号土坑墓I	北側埋土		2									2
5	1号土坑墓O	北側埋土		26									26
6	1号土坑墓V	北側埋土		1									1
7	1号土坑墓B	南側埋土	1	5									6
8	1号土坑墓C	南側埋土		5									5
9	1号土坑墓DD	南側埋土		11									11
10	1号土坑墓K	南側埋土		4	1			2					7
11	1号土坑墓N	南側埋土		25	3		1					1	30
12	1号土坑墓R	南側埋土		21	3		2		1	1		1	29
13	1号土坑墓U	南側埋土		2							2	1	5
14	1号土坑墓W	南側埋土		3		1						1	5
15	2号土坑墓H			4									4
16	2号土坑墓L			5		1							6
17	2号土坑墓Q			7									7
合計			1	174	11	2	3	2	1	1	2	4	201

表２　種実同定２の炭化種実同定結果

試料番号	試料の詳細	種名	部位	状態	個数	備考	重量(g)
種1	掘立柱建物跡37号	風化したスコリア	−	−	1	径6mm	0.03
種2	中世土坑51号	イチイガシ	子葉	炭化	1	長さ10.7mm，径7.4mm	0.15

図１　種実同定１の種実遺体



1．イネ 穎・胚乳(試料No.7;1号土坑墓B 南側埋土)
2．オオムギ 穎・胚乳(試料No.1;1号土坑墓A 北側埋土)
3．オオムギ 穎・胚乳(試料No.9;1号土坑墓DD 南側埋土)
4．オオムギ 穎・胚乳(試料No.1;1号土坑墓A 北側埋土)
5．オオムギ 穎・胚乳(試料No.9;1号土坑墓DD 南側埋土)
6．コムギ?(試料No.11;1号土坑墓N 南側埋土)
7．コムギ?(試料No.12;1号土坑墓R 南側埋土)
8．コムギ?(試料No.12;1号土坑墓R 南側埋土)
9．アズキ類 種子(試料No.10;1号土坑墓K 南側埋土)
10．アズキ類 種子(試料No.10;1号土坑墓K 南側埋土)
11．マメ類 種子(試料No.12;1号土坑墓R 南側埋土)

※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図２　種実同定２の種実遺体



※）本分析は，パリノ・サーヴェイ 株式会社の協力を得て行った。

天神段遺跡の種実同定３

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

天神段遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町野方に所在し，標高約200mの台地の北端部に位置する。遺跡の北側は，大隅湖へ流れ込む大鳥川の支流より深い谷を形成しており，谷の底部と遺跡との標高差は約50mである。周辺には野方前段遺跡，内ヶ迫，加治木堀遺跡等があり，縄文時代～中世にかけての遺跡が存在していることが知られている。

本分析調査では，土坑墓や住居より出土した炭化種実の放射性炭素年代測定と同定を実施し，年代および当時の植物利用に関する資料を作成する。

１　試料

試料は，土坑墓１号G（試料番号1;59個），土坑墓５号（試料番号2;11個），土坑墓７号（試料番号3～6;1～4個，計10個），土坑墓８号（試料番号7;12個），竪穴住居２号（試料番号8;2個）から出土した炭化種実計94個である。試料は全て乾燥した状態で，アルミホイルに包まれ，プラケースに入っている。なお，試料番号1,2には，アルミホイル包装物が各２点存在するため，枝番を付して取り扱っている（表１）。

種実同定は，全試料を対象に実施する。放射性炭素年代測定は，土坑墓１号G（試料番号１）より同定されたオオムギの炭化穎･胚乳10個，土坑墓５号（試料番号２）より同定されたオオムギの炭化胚乳4個，土坑墓７号の試料番号３より同定されたオオムギの炭化胚乳２個，試料番号４より同定されたカキノキ属の炭化種子１個，試料番号５より同定されたイネの炭化胚乳１個，試料番号６より同定されたオオムギの炭化胚乳１個，土坑墓８号（試料番号７）より同定されたオオムギの炭化胚乳４個，竪穴住居２号（試料番号８）より同定されたコナラ属の炭化子葉１個の，計８試料を対象に実施する。

２　分析方法

1）放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HCｌにより炭酸塩等酸可溶成分を除去，NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，HCｌによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ，１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し，グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，３MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC　Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に13C/12Cの測定も行うため，この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは，大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動，及び半減期の違い（14Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は，CALIB REV7.0のマニュアルにしたがい，1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また，北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い，測定誤差σ，2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲，2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは，σ，2σの範囲をそれぞれ1とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は，将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，１年単位で表された値を記す。

2）種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて同定が可能な種実を抽出する。種実の同定は，現生標本および石川(1994)，中山ほか(2000)等を参考に実施し，個数を数えて結果を一覧表で示す。また，主な分類群を対象に，デジタルノギスを用いて，種実の大きさを計測した結果を一覧表に併記する。分析後は，年代測定対象試料以外の炭化種実等を分類群別に容器に入れて返却する。

3　結果

1）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表１に示す。８点の試料のうち，土坑墓１号G（試料番号１）と土坑墓５号（試料番号２）のオオムギは，840±20yrBPと同じ年代を示す。土坑墓７号では，試料番号３のオオムギと試料番号５のイネが940±20yrBPと同じ年代を示し，試料番号４のカキノキ属は910±20yrBP，試料番号6のオオムギは880±20yrBPで，互いに近接した年代を示す。土坑墓８号（試料番号７）のオオムギは1,060±20yrBPで，わずかに古い年代を示す。一方，竪穴住居２号（試料番号８）のコナラ属は，2,210±20yrBPで，前述の７点とは大きく異なる年代を示す。各試料の較正暦年代を表２に示す。測定誤差をσの年代でみると，土坑墓1号GはcalAD1,183-1,243，土坑墓５号はcalAD1,184-1,242とほぼ同じ年代となり，土坑墓７号の試料番号３はcalAD1,037-1,151，試料番号４はcalAD1,048-1,162，試料番号５はcalAD1,037-1,151，試料番号６はcalAD1,058-1,208，土坑墓８号はcalAD984-1,014，竪穴住居2号はcalBC358 ～ calBC208となる。

2）　種実同定

結果を表３に示す。被子植物５分類群（コナラ属，カキノキ属，イネ，オオムギ，コムギ）82個の炭化した種実が抽出･同定された。６個は状態が不良で同定ができなかった。炭化種実以外では，炭化材が６個，軽石が１個確認された。栽培種は，オオムギが69個（土坑墓１号G，５号，７号，８号），イネが９個（土坑墓５号，７号，８号），コムギが１個（土坑墓１号G）の，計79個と，栽培種の可能性が高いカキノキ属が２個（土坑墓１号G，７号）の，合計81個が確認され，炭化種実群全体の98.8%を占める。栽培種(可能性含む)以外の分類群は，高木になる常緑または落葉広葉樹のコナラ属が１個（竪穴住居２号）確認されるのみであった。以下に，炭化種実の遺構別出土状況を述べる。

・土坑墓１号G（南側埋土；試料番号１）

カキノキ属の種子が１個，オオムギの穎･胚乳が40個，胚乳が17個，コムギの胚乳が１個の，計59個が確認された。

・土坑墓５号（エリア３埋土；試料番号２）

イネの胚乳が５個，オオムギの胚乳が４個の，計９個が確認された。

・土坑墓７号（試料番号３～６）

埋土2aDO10(試料番号３)からは，イネの胚乳が１個，オオムギの胚乳が２個の，計３個が確認された。NS方向中央部埋土2aDO47（試料番号４）からは，カキノキ属の種子，イネの胚乳，オオムギの胚乳が各１個の，計３個が確認された。NS方向ベルト北側埋土2aDO40（試料番号５）からは，イネの胚乳が１個確認された。EW南側ベルト東側埋土2aDO38（試料番号６）からは，オオムギの胚乳が１個確認された。

・土坑墓８号（ベルト埋土；試料番号７）

イネの胚乳が１個，オオムギの穎･胚乳が１個，胚乳が３個の，計５個が確認された。

・竪穴住居２号（ベルト９；試料番号８）

コナラ属の子葉が１個確認された。

本分析で同定された炭化種実各分類群の写真を図１に示し，主な分類群の大きさをデジタルノギスで計測した結果を表３に示す。以下に，各分類群の形態的特徴等を述べる。

・コナラ属（Quercus）　ブナ科

子葉は炭化しており黒色，完形ならば長さ1.0 ～ 1.2㎝，径0.7 ～ 0.9cm程度の楕円体を呈す。出土子葉は，２枚からなる子葉の合わせ目に沿って割れた半分未満（1/4個体未満）の破片で，残存長は7.6mm，残存幅は6.7mm，残存（おそらく半分）厚は4.4mmを測る。破片から復元される形状は楕円体で，コナラ亜属のクヌギやアベマキなどの球状を呈す分類群とは区別され，コナラやアカガシ亜属に由来すると推定される。子葉は硬く緻密で，表面には維管束の圧痕の浅い縦溝がある（図１-1）。

・カキノキ属（Diospyros）　カキノキ科

種子は炭化しており黒色，残存長8.5mm，幅5.7mm，厚さ4.2mm（土坑墓7号；図１-2）と，長さ11.4mm，幅8.5mm，厚さ3.7mm（土坑墓1号G；図１-3）の偏平な非対称倒皮針体。縦に一周する稜があり，背面は丸みを帯びる。腹面はほぼ直線状で，基部に１～ 3.5mmの楕円形の孔がある。種皮は薄く，表面は粗面で微細な流理状の模様がある。現在の本地域に分布するカキノキ属は，中国より渡来したとされる栽培種で常緑高木のカキノキ（D. kaki Thunb.），マメガキ（D. Lotus L.）と，野生種で山地の日当たりのよい谷間や斜面に生育する落葉高木のリュウキュウマメガキ（D. japonica Sieb. et Zucc.），暖地の山地に生える常緑小高木のトキワガキ（D. morrisiana Hance）の４種がある。供伴する分類群に栽培種が多いことから，出土種子も栽培種である可能性が高い。

・オオムギ（Hordeum valgare L.）　イネ科オオムギ属

穎･胚乳は炭化しており黒色，やや偏平な紡錘状長楕円体で両端は尖る。土坑墓１号Gより出土した状態が良

好な43個の計測値は，長さは最小4.1 ～最大6.5（平均5.40 ±0.56）mm，幅は2.2 ～ 3.5（平均2.84 ± 0.32）mm，厚さは1.6 ～ 2.7（平均2.22 ± 0.24）mmであった。胚乳は，腹面正中線上にやや太く深い縦溝があり，背面は基部正中線上に胚の痕跡があり長楕円状に窪む。表面は粗面で微細な縦筋があり，薄い膜質の穎果皮や種皮片が付着する個体が多くみられる。穎果皮表面は粗面で微細な縦筋が配列する（図１-4 ～ 6）。

・コムギ（Triticum aestivum L.） イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色，長さ3.8mm，幅2.4mm，厚さ2.0mmの，オオムギよりも丸みを帯びた楕円体で，基部を欠損する。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり，背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で，微細な粒状模様がある（図１-7）。

・イネ（Oryza sativa L.） イネ科イネ属

胚乳（炭化米）は炭化しており黒色，やや偏平な長楕円体を呈す。炭化米の最小個体は，長さは3.7mm，幅は2.1mm，厚さは1.3mmを測り，佐藤（1988）の定義による粒大（長さ×幅）は極々小型（7.8），粒形（長さ/幅）は短粒（1.8）であった（土坑墓8号；図１-11）。最大個体は，長さ4.4mm，幅2.6mm，厚さ1.9mmを測り，極小型（11.6）で短粒（1.7）であった（土坑墓7号；図版1-10）。胚乳の基部一端には，胚が脱落した斜切形の凹部がある。胚乳表面はやや平滑で，２～３本の縦隆条が確認される（図１-8 ～ 11）。

４　考察

土坑墓１号G，土坑墓５号，土坑墓７号，土坑墓８号から出土した炭化種実は，栽培種のオオムギ，コムギ，イネと，栽培種の可能性が高いカキノキ属に同定された。また，これらの炭化種実の暦年代較正値は，土坑墓１号Gと土坑墓5号のオオムギは，12世紀後半～ 13世紀半ばで，ほぼ同じ年代を示した。土坑墓7号では，オオムギ（埋土2aDO10）とイネ（NS方向ベルト北側埋土2aDO40）が11世紀前半～ 12世紀半ばで，ほぼ同じ年代を示し，カキノキ属（NS方向中央部埋土2aDO47）が11世紀半ば～ 12世紀後半，オオムギ（EW南側ベルト東側埋土2aDO38）が11世紀後半～ 13世紀初頭を示した。土坑墓８号のオオムギは，10世紀後半～ 11世紀前半を示した。

穀類のオオムギ，コムギ，イネは，当時の本遺跡周辺域で利用された植物質食糧と示唆され，食利用されずに火を受け炭化したとみなされる。各土坑墓より最も多く出土したオオムギには，胚乳表面に穎が残る個体が多く確認されたことから，穎（籾）のついた生麦の状態で火を受けたと考えられる。次いで多く出土したイネ（炭化米）の粒大・粒形（佐藤,1988）は，ほぼ短粒で，土坑墓８号出土炭化米は極々小型，土坑墓７号出土炭化米は極小型であった。これらの炭化した穀粒が副葬品であるかは不明で，土坑墓内で火を受けたのか，別の場所で火を受け炭化した食糧残滓が廃棄されたのかについても，分析段階で判断することはできないため，発掘調査所見と併せて検討することが望まれる。

一方，竪穴住居２号から出土した炭化種実は，広葉樹のコナラ属の子葉に同定された。また，コナラ属の暦年代較正値はcalBC358 ～ calBC208を示し，弥生時代中期前半に相当する（西本編,2009）。出土炭化子葉は，破片で保存状態が不良のため，コナラ属までの同定にとどめているが，本遺跡および周辺遺跡で出土事例が多いイチイガシに由来する可能性がある。イチイガシは，湿潤，肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達し，現在の本地域にも分布する常緑高木である。また，イチイガシは，子葉があく抜きせずに生食可能で収量も多い有用植物であるため，果実や子葉の遺跡出土例も多く（渡辺,1975;岡本,1979など），九州の縄文時代前期以降古墳時代に出土するドングリの集成でも，イチイガシが圧倒的に多い結果が得られている（小畑2006;2011）。今回出土したイチイガシの可能性を含むコナラ属の炭化子葉も，当時の本遺跡周辺域の照葉樹林から持ち込まれ，利用された植物質食料と示唆され，食利用されずに火を受け炭化したとみなされる。ただし，住居内で貯蔵保管した状態で火を受けたのか，別の場所で火を受け炭化した食糧残滓が廃棄されたのかについては，分析段階で判断することはできないため，発掘調査所見と併せて検討することが望まれる。

引用文献

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

西本豊弘編,2009,弥生農耕のはじまりとその年代.新弥生時代のはじまり　第4巻,雄山閣,162p.

小畑弘己,2006,九州縄文時代の堅果類とその利用－東北アジアの古民族植物学的視点より－.九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物,第16回九州縄文研究会大分大会発表主旨・資料集成,31-40.

小畑弘己,2011,東北アジア古民族植物学と縄文農耕.同成社,309p.

岡本素治,1979,遺跡から出土するイチイガシ.大阪市立自然史博物館研究報告,32号,31-39.

佐藤敏也,1988,弥生のイネ.弥生文化の研究2生業,金関怨・佐原　真編,雄山閣,97-111.

渡辺　誠,1975,縄文時代の植物食.雄山閣出版,187p.

表１　放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料名	試料の質	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
1	土坑墓１号G	炭化種実(オオムギ 穎･胚乳)	840± 20	−24.64 ± 0.25	830± 20	IAAA-132465
2	土坑墓５号	炭化種実(オオムギ 胚乳)	840± 20	−24.35 ± 0.31	830± 20	IAAA-132466
3	土坑墓７号	炭化種実(オオムギ 胚乳)	940± 20	−22.43 ± 0.30	900± 20	IAAA-132467
4	土坑墓７号	炭化種実(カキノキ属 種子)	910± 20	−24.28 ± 0.29	900± 20	IAAA-132468
5	土坑墓７号	炭化種実(イネ 胚乳)	940± 20	−21.96 ± 0.28	890± 20	IAAA-132469
6	土坑墓７号	炭化種実(オオムギ 胚乳)	880± 20	−27.41 ± 0.30	920± 20	IAAA-132470
7	土坑墓８号	炭化種実(オオムギ 胚乳)	1,060± 20	−25.27 ± 0.30	1,060± 20	IAAA-132471
8	竪穴住居２号	炭化種実(コナラ属 子葉)	2,210± 20	−23.85 ± 0.35	2,190± 20	IAAA-132472

1) 年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用。
2) BP年代値は，1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２　暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)		暦年較正年代												相対比	Code No.
1	835± 20	σ	cal	AD	1,183	−	cal	AD	1,225	cal	BP	767	−	725	0.860	IAAA-132465
			cal	AD	1,233	−	cal	AD	1,243	cal	BP	717	−	707	0.140	
		2σ	cal	AD	1,166	−	cal	AD	1,253	cal	BP	784	−	697	1.000	
2	835± 19	σ	cal	AD	1,184	−	cal	AD	1,225	cal	BP	766	−	725	0.874	IAAA-132466
			cal	AD	1,234	−	cal	AD	1,242	cal	BP	716	−	708	0.126	
		2σ	cal	AD	1,167	−	cal	AD	1,252	cal	BP	783	−	698	1.000	
3	940± 19	σ	cal	AD	1,037	−	cal	AD	1,050	cal	BP	913	−	900	0.176	IAAA-132467
			cal	AD	1,083	−	cal	AD	1,126	cal	BP	867	−	824	0.613	
			cal	AD	1,135	−	cal	AD	1,151	cal	BP	815	−	799	0.211	
		2σ	cal	AD	1,031	−	cal	AD	1,059	cal	BP	919	−	891	0.218	
			cal	AD	1,064	−	cal	AD	1,154	cal	BP	886	−	796	0.782	
4	908± 19	σ	cal	AD	1,048	−	cal	AD	1,086	cal	BP	902	−	864	0.629	IAAA-132468
			cal	AD	1,123	−	cal	AD	1,138	cal	BP	827	−	812	0.188	
			cal	AD	1,149	−	cal	AD	1,162	cal	BP	801	−	788	0.184	
		2σ	cal	AD	1,039	−	cal	AD	1,110	cal	BP	911	−	840	0.585	
			cal	AD	1,115	−	cal	AD	1,169	cal	BP	835	−	781	0.400	
			cal	AD	1,175	−	cal	AD	1,183	cal	BP	775	−	767	0.015	
5	941± 22	σ	cal	AD	1,035	−	cal	AD	1,050	cal	BP	915	−	900	0.195	IAAA-132469
			cal	AD	1,082	−	cal	AD	1,127	cal	BP	868	−	823	0.603	
			cal	AD	1,135	−	cal	AD	1,151	cal	BP	815	−	799	0.202	
		2σ	cal	AD	1,030	−	cal	AD	1,154	cal	BP	920	−	796	1.000	
6	882± 21	σ	cal	AD	1,058	−	cal	AD	1,064	cal	BP	892	−	886	0.065	IAAA-132470
			cal	AD	1,069	−	cal	AD	1,071	cal	BP	881	−	879	0.011	
			cal	AD	1,154	−	cal	AD	1,208	cal	BP	796	−	742	0.924	
		2σ	cal	AD	1,047	−	cal	AD	1,088	cal	BP	903	−	862	0.230	
			cal	AD	1,122	−	cal	AD	1,138	cal	BP	828	−	812	0.050	
			cal	AD	1,149	−	cal	AD	1,217	cal	BP	801	−	733	0.719	
7	1,058± 19	σ	cal	AD	984	−	cal	AD	1,014	cal	BP	966	−	936	1.000	IAAA-132471
		2σ	cal	AD	904	−	cal	AD	917	cal	BP	1,046	−	1,033	0.045	
			cal	AD	967	−	cal	AD	1,021	cal	BP	983	−	929	0.955	
8	2,213± 22	σ	cal	BC	358	−	cal	BC	349	cal	BP	2,308	−	2,299	0.097	IAAA-132472
			cal	BC	314	−	cal	BC	277	cal	BP	2,264	−	2,227	0.384	
			cal	BC	258	−	cal	BC	208	cal	BP	2,208	−	2,158	0.519	
		2σ	cal	BC	363	−	cal	BC	334	cal	BP	2,313	−	2,284	0.154	
			cal	BC	330	−	cal	BC	204	cal	BP	2,280	−	2,154	0.846	

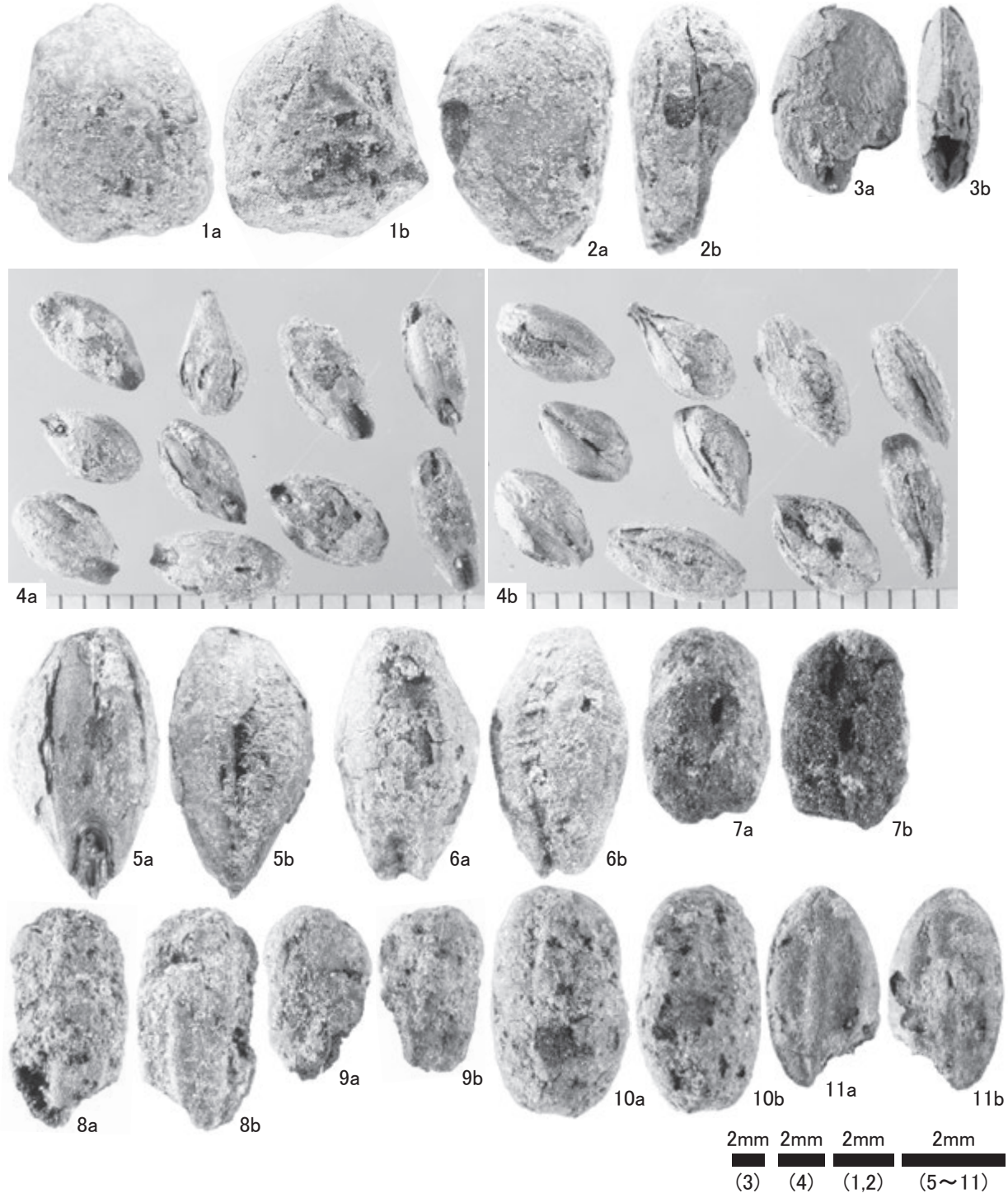
1) 計算には，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) 1桁目を丸めるのが慣例だが，暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，1桁目を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%，2σは95%である
5) 相対比は，σ，2σのそれぞれを1とした場合，確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表３　炭化種実同定結果

試料番号	資料名	地点	点数	枝番	分類群	部位	状態	個数	乾重(g)	枝番	長さ(mm)		幅(mm)		厚さ(mm)		図版	備考
1	土坑墓1号G	南側埋土	59	1	カキノキ属	種子	完形	1	0.14	-	11.4		8.5		3.7		1-3	基部3.5+S3:S59mm:臍
				2	オオムギ	穎・胚乳	完形	40	0.39	1	5.3		2.8		2.2		1-4,5	10個(0.1g)を年代測定
										2	5.9		2.4		2.2		1-4	
										3	6.2		2.5		2.2			
										4	4.5		2.7		2.2			
										5	6.1		3.1		2.6			
										6	5.1		3.1		2.7			
										7	5.5		2.9		2.1			
										8	5.8		3.4		2.4			
										9	6.1		3.0		2.6			
										10	5.4		2.9		2.3			
										11	6.0		2.9		2.5		-	
										12	5.9		2.7		2.2		-	
										13	6.2		2.9		2.2		-	
										14	5.3		3.1		2.7		-	
										15	5.9		2.7		2.5		-	
										16	6.0		2.6		2.2		-	
										17	5.7		2.9		2.2		-	
										18	5.4		3.0		2.6		-	
										19	5.3		3.1		2.2		-	
										20	5.7		2.9		2.3		-	
										21	5.5		3.0		2.0		-	
										22	5.7		3.1		2.1		-	
										23	4.8		2.8		2.1		-	
										24	5.0		2.4		2.0		-	
										25	5.0		2.4		2.1		-	
										26	5.0		2.2		2.0		-	
										27	6.1		3.5		2.6		-	
										28	6.2		3.3		2.3		-	
										29	6.5		2.5		2.0		-	
										30	5.7		3.0		2.4		-	
										31	4.7		2.8		2.1		-	
										32	4.8		2.9		2.1		-	
										33	4.6		2.7		2.0		-	
										34	5.0		2.9		2.2		-	
										35	5.1		2.9		2.2		-	
										36	4.1		2.6		1.9		-	
					オオムギ	胚乳	完形	17	0.15	1	5.8		2.8		2.6		-	
										2	5.2		3.2		2.2		-	
										3	5.4		3.5		2.1		-	
										4	4.7		3.1		2.4		-	
										5	4.8		2.5		2.0		-	
										6	5.2		2.3		1.6		-	
										7	4.7		2.2		1.8		-	
					コムギ	胚乳	完形	1	0.00	-	3.8		2.4		2.0		1-7	基部欠損
2	土坑墓5号	エリア3埋土	11	1	オオムギ	胚乳	破片	2	0.01	-	-		-		-		-	接合し完形1個体となる
						胚乳	完形	3	0.03	1	5.1	+	3.0		2.5		-	4個(0.03g)を年代測定
										2	5.0	+	2.7		2.1		-	
										3	4.9		2.6		2.5		1-6	
				2	オオムギ	胚乳	完形	1		-	5.2	+	3.2		3.0		-	
					イネ		完形	1	0.00	-	3.3	+	2.0	+	1.8		1-9	基部欠損
							破片	2		-	-		-		-		-	
					不明	-	破片	2	0.01	-	-		-		-		-	状態不良
					種実ではない(軽石)	-	-	1	0.01	-	-		-		-		-	
3	土坑墓7号	埋土2aDO10	4	-	イネ	胚乳	完形	1	0.01	-	4.4		2.6		1.9		1-10	短粒(1.7),極小型(11.6)
					オオムギ	胚乳	完形	2	0.01	1	4.8	+	2.4		1.9	+	-	2個(0.01g)を年代測定
										2	4.7	+	2.6		1.7	+	-	
					不明	-	完形	1	0.00		2.0		2.3		1.7		-	偏平な楕円体,表面粗面
4	土坑墓7号	NS方向中央部埋土2aDO47	3	-	カキノキ属	種子	完形	1	0.05	-	8.5	+	5.7		4.2		-	年代測定
					イネ	胚乳	完形	1	0.00	-	2.5	+	2.2		1.7		-	基部欠損
					オオムギ	胚乳	完形	1	0.00	-	4.8		2.5		2.2		-	
5	土坑墓7号	NS方向ベルト北側埋土2aDO40	1	-	イネ	胚乳	完形	1	0.01	-	4.2		2.2	+	1.8		1-8	年代測定 短粒(1.9)以上,極小型(9.4)以上
6	土坑墓7号	EW南側ベルト東側埋土2aDO38	2	-	オオムギ	胚乳	完形	1	0.01	-	4.7	+	2.9		2.3	+	-	両端欠損
					種実ではない(炭化材)	-	-	1	0.00	-	-		-		-		-	
7	土坑墓8号	ベルト埋土	12	-	イネ	胚乳	完形	1	0.00	-	3.7		2.1		1.3		1-11	短粒(1.8),極々小型(7.8)
					オオムギ	穎・胚乳	完形	1	0.03	-	4.2	+	2.6		2.3		-	4個(0.03g)を年代測定
						胚乳	完形	3		1	5.2		2.8		2.2		-	
										2	4.3		2.9		2.4		-	
										3	4.7	+	2.3	+	1.8		-	
					不明	-	完形	1	0.01	-	-		-		-		-	状態不良
							破片	2		-	-		-		-		-	状態不良
					種実ではない(炭化材)	-	-	4	0.01	-	-		-		-		-	
8	竪穴住居2号	ベルト9	2	-	コナラ属	子葉	破片	1	0.04	-	7.6	+	6.7	+	4.4	+	1-1	1/4個体未満,年代測定
					種実ではない(炭化材)	-	-	1	0.00	-	-		-		-		-	

注）計測はデジタルノギスを使用。欠損部は残存値に「+」で示す。炭化米の粒大（長さ×幅）、粒形（長さ/幅）は、佐藤（1988）の定義に従う。

図１　炭化種実



1．コナラ属 子葉(年代測定対象)(試料番号8;竪穴住居2号 ベルト9)
2．カキノキ属 種子(年代測定対象)(試料番号4;土坑墓7号 NS方向中央部埋土2aDO47)
3．カキノキ属 種子(試料番号1;土坑墓1号G 南側埋土)
4．オオムギ 穎･胚乳(年代測定対象)(試料番号1;土坑墓1号G 南側埋土)
5．オオムギ 穎･胚乳(年代測定対象)(試料番号1;土坑墓1号G 南側埋土)
6．オオムギ 胚乳(年代測定対象)(試料番号2;土坑墓5号 エリア3埋土)
7．コムギ 胚乳(試料番号1;土坑墓1号G 南側埋土)
8．イネ 胚乳(年代測定対象)(試料番号5;土坑墓7号 NS方向ベルト北側埋土2aDO40)
9．イネ 胚乳(試料番号2;土坑墓5号 エリア3埋土)
10．イネ 胚乳(試料番号3;土坑墓7号 埋土2aDO10)
11．イネ 胚乳(試料番号7;土坑墓8号 ベルト埋土)

第４節　植物珪酸体分析

植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

１　はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO ２）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

天神段遺跡の発掘調査では，現表土層から姶良入戸火砕流堆積物の上位までの良好な基本土層断面が作成された。ここでは，各層準における周辺の植生や環境を把握する目的で植物珪酸体分析を行った。なお，テフラ（火山灰）の年代は町田・新井（2003）および奥野（2002）を参照し，放射性炭素年代測定結果については暦年較正された年代値で示した。

２　試料

分析試料は，基本土層断面について表土層下位のⅢa層から姶良入戸火砕流堆積物上位のⅩⅦ層までの層準から採取された計27点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

３　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４　分析結果

１）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，イネ（穎の表皮細胞由来），キビ族型，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節　など），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），茎部起源，未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），ブナ科（アカガシ亜属），クスノキ科，アワブキ科，はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など），その他

２）植物珪酸体の検出状況

下位のⅩⅦ層（試料33）では，植物珪酸体がほとんど検出されなかった。ⅩⅥ層（試料32）からⅩⅤ層（試料30）にかけては，ススキ属型，ウシクサ族Ａなどが検出されたが，いずれも少量である。ⅩⅣ層（試料28）ではミヤコザサ節型が出現している。ⅩⅢ層（試料25 ～ 27）では，ミヤコザサ節型が多く検出され，キビ族型，ウシクサ族Ａ，チマキザサ節型なども認められた。ⅩⅡ層（試料23，24）ではミヤコザサ節型が減少しているが，ⅩⅠ層（試料22）からⅨ層（試料18，19）にかけては大幅に増加し，Ⅸ層ではチマキザサ節型も増加している。Ⅸ層におけるミヤコザサ節型の密度は，85,100個/gとかなり高い値である。

Ⅷ層（試料17）ではミヤコザサ節型が大幅に減少し，チマキザサ節型は見られなくなっている。Ⅶ層（試料13 ～ 16）では，ススキ属型，ウシクサ族Ａが比較的多く検出され，キビ族型，ネザサ節型，ミヤコザサ節型なども認められた。また，同層上部では樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属），クスノキ科などが出現している。Ⅵ層（試

料11，12）ではクスノキ科が大幅に増加し，ススキ属型やミヤコザサ節型は減少している。

Ⅴc層（試料10）では，各分類群とも大幅に減少しているが，Ⅴb層（試料９）からⅤa層（試料７，８）にかけてはクスノキ科などの樹木（照葉樹）が増加し，ブナ科（アカガシ亜属），アワブキ科も出現している。Ⅳb層（試料５）からⅢb層（試料２）にかけても，おおむね同様の結果であるが，Ⅲb層ではイネが出現している。イネの密度は2,100個/gと比較的低い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。Ⅲa層（試料１）では，イネ，ススキ属型，ネザサ節型が増加し，クスノキ科などの樹木は減少している。イネの密度は5,300個/gと比較的高い値である。

おもな分類群の推定生産量によると，ⅩⅢ層からⅨ層にかけてはミヤコザサ節型が優勢であり，Ⅸ層ではチマキザサ節型も比較的多くなっている。また，Ⅶ層からⅥ層にかけてはススキ属型，Ⅲa層ではイネ，ススキ属型が優勢となっている。

５　植物珪酸体分析から推定される植生と環境

始良入戸火砕流堆積物（A-Ito，約2.9万年前）上位のⅩⅦ層では，植物珪酸体がほとんど検出されなかったが，ⅩⅥ層からⅩⅤ層にかけてはススキ属，ウシクサ族，キビ族などのイネ科草本類が見られるようになり，桜島17テフラ（P17，約2.6万年前）混のⅩⅣ層ではササ属（ミヤコザサ節）も見られるようになったと推定される。桜島15テフラ（P15，約2.4万年前）混のⅩⅢ層から桜島薩摩テフラ（P14，約1.28万年前）直下のⅨ層にかけては，ササ属（おもにミヤコザサ節）を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科草本類の植生が継続されていたと考えられ，とくにⅨ層ではササ属が繁茂するような状況であったと推定される。

タケ亜科のうち，メダケ属は温暖，ササ属は寒冷の指標とされており，メダケ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は，地球規模の氷期－間氷期サイクルの変動と一致することが知られている（杉山，2001,2010）。また，ササ属のうちチマキザサ節やチシマザサ節は日本海側の寒冷地などに広く分布しており積雪に対する適応性が高いが，ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している（室井，1960，鈴木，1996）。これらのことから，当時は冷涼～寒冷で積雪（降水量）の少ない比較的乾燥した環境であったと推定される。なお，Ⅸ層ではチマキザサ節型が増加していることから，この時期には積雪量（降水量）が増加した可能性が考えられる。

ササ属などの笹類は常緑であることから，大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカ類などの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。遺跡周辺にこれらの笹類が豊富に存在したことは，当時の動物相を考える上でも重要と考えられる。

桜島12テフラ（P12，約9,000年前）混のⅦ層では，ススキ属を主体としてウシクサ族，キビ族，ササ属（おもにミヤコザサ節）なども生育する草原的な環境であったと考えられ，同層上部の時期には周辺でクスノキ科，シイ属などの照葉樹林が成立していたと推定される。花粉分析の結果によると南九州では約9,500年前（C14年代は約8,500年前）にはシイ林を中心とする照葉樹林が成立していたと考えられており（松下，1992），植物珪酸体分析でも同様の結果が得られている（杉山，1999）。本遺跡周辺でも，おおむね同様の時期に照葉樹林が成立していたと推定される。今後，周辺地域で同様の検討を行うことにより，照葉樹林の存在や分布拡大の様相が具体的に解明されると期待される。

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約7,300年前）直下のⅥ層では，クスノキ科を主体としてシイ属なども生育する照葉樹林が分布していたと考えられ，ススキ属やササ属などのイネ科草本類は減少したと推定される。その後，K-Ahの堆積によって当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが，K-Ah直上層（Ⅴa層，Ⅴb層）では比較的早い時期に照葉樹林が再生したと推定される。このような植生の回復には，年平均気温が現在よりも約２℃前後高かったとされる当時の温暖な気候環境が大きく影響したと考えられる。桜島７テフラ（P7，約5,000年前）混のⅤb層からⅢb層にかけては，クスノキ科を主体としてシイ属，カシ類なども生育する照葉樹林が継続的に分布していたと考えられ，イネ科の草本類はあまり見られなかったと推定される。

Ⅲa層の時期には，調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられ，周辺にはススキ属やメダケ属（おもにネザサ節）などが分布していたと推定される。遺跡の立地や周辺の植生から，ここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）であった可能性が考えられる。

参考文献

奥野 充（2002）南九州に分布する最近約３万年間のテフラの年代学的研究．第四紀研究．41（4）,p.225-236.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38（2），p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

杉山真二（2001）テフラと植物珪酸体分析．月刊地球，23，p.645-650.

杉山真二（2010）更新世の植生と環境．旧石器時代．講座日本の考古学第１巻．青木書店，p.156-177.
鈴木貞雄（1996）タケ科植物の概説．日本タケ科植物図鑑．聚海書林，p.8-27.
高槻成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ，ササそして雪をめぐる生態学－．どうぶつ社.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.
町田洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－．東京大学出版会，336p.
室井綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，5，p.103-121.

表１　天神段遺跡基本土層断面における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

#NAME?	学名	地点・試料 1	2	3	5	7	8	9	10	11	12	13	15	16	17	18	19	20	22	23	24	25	26	27	28	30	32	33
イネ科	Gramineae																											
イネ	*Oryza sativa*	53	21																									
イネ籾殻（穎の表皮細胞）	*Oryza sativa* (husk Phytolith)	7																										
キビ族型	Paniceae type	7				7			7	7		6	12	6	7	7							7	7		14		
ススキ属型	*Miscanthus* type	99	35	14	7	14	7	14	7	42	75	80	93	26	14	14	15		6					7		7	7	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	46	42	50	14	47	28	21	28	106	116	105	142	103	21	35	29	18	33	7	22	22	14	28	35	84	15	
タケ亜科	Bambusoideae																											
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	13					7																					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	112	7	7	7	7	7	14		7	7	6				21	7				7	7						
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	13						14	7		14	6	31			183	73	18	11	7	29	66	14	7				
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	13	7			14	21	7	7	14	68	55	81	116	69	851	851	572	531	201	280	696	381	487	64			
未分類等	Others	99	14	14	7	7	21	27	7	28	116	105	111	129	90	422	211	249	194	122	172	183	205	268	57	14		
その他のイネ科	Others																											
表皮毛起源	Husk hair origin	20					7	7				25	6	6	7	21	36	30	17	14	14	15	7	28	14	14	22	
棒状珪酸体	Rod-shaped	205	21	21	28	7	14	21	7	28	27	62	56	64	28	84	44	55	28	14	22	59	63	120	156	224	30	15
茎部起源	Stem origin																								7	7		
未分類等	Others	218	70	57	83	34	62	48	48	64	88	197	161	213	145	77	109	128	77	57	86	51	56	148	163	294	74	22
樹木起源	Arboreal																											
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*	26	28	36	21	7	7			7		6																
ブナ科（アカガシ亜属）	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	7	14	14	7	7	28																					
クスノキ科	Lauraceae	152	355	322	221	251	138	116	21	311	313	49	43															
アワブキ科	Sabiaceae	13	7				7																					
はめ絵パズル状（ブナ属など）	Jigsaw puzzle shaped (*Fagus* etc.)	7																										
その他	Others	119	237	229	138	224	131	96	14	149	109	49	74									7						
植物珪酸体総数	Total	1229	856	766	532	624	484	383	152	764	931	751	811	664	379	1715	1375	1070	897	423	632	1106	748	1100	495	659	148	37
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出																												
イネ	*Oryza sativa*	1.55	0.61																									
ススキ属型	*Miscanthus* type	1.23	0.43	0.18	0.09	0.17	0.09	0.17	0.09	0.53	0.93	0.99	1.15	0.32	0.17	0.17	0.18		0.07					0.09		0.09	0.09	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.15					0.08																					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.54	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.07		0.03	0.03	0.03				0.10	0.03				0.03	0.04						
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.10						0.10	0.05		0.10	0.05	0.23			1.37	0.55	0.14	0.08	0.05	0.22	0.49	0.11	0.05				
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.04	0.02			0.04	0.06	0.02	0.02	0.04	0.20	0.17	0.24	0.35	0.21	2.55	2.55	1.72	1.59	0.60	0.84	2.09	1.14	1.46	0.19			
タケ亜科の比率（%）																												
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	18				46										3	1				3	1						
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	65	62	100	100	44	19	35		44	10	12				34	17	7	5	8	20	19	8	3				
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	12						54	71		30	19	49															
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	5	38			56	35	11	29	56	60	69	51	100	100	63	81	93	95	92	77	80	92	97	100			
メダケ率	Medake ratio	83	62	100	100	44	65	35	0	44	10	12	0	0	0	3	1	0	0	0	3	1	0	0	0			

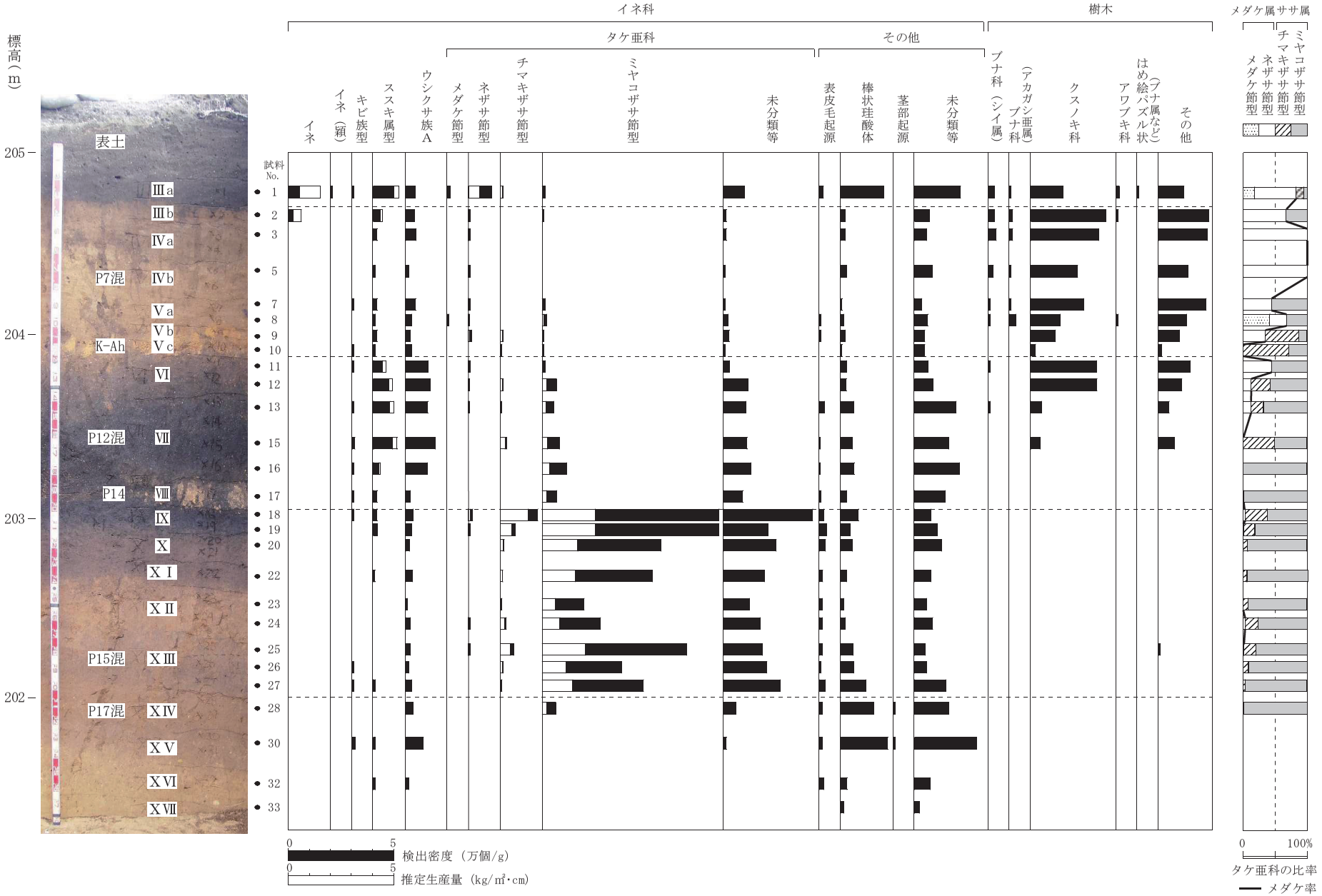


図１　天神段遺跡：基本土層断面における植物珪酸体分析結果

図２　天神段遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



第Ⅵ章　総括

第１節　弥生時代

本遺跡の竪穴住居跡やその周辺からは弥生時代前期，前期末から中期初頭，中期前半の遺物が主に出土している。全体的に遺物量は少ないが，器種は甕を中心として壺や蓋が出土している。第Ⅳ章で述べたように，大隅半島ではまだ出土例が少ない弥生時代前期末から中期初頭，中期前半における高橋式や入来Ⅰ式・入来Ⅱ式などが多く，中期前半期の土器型式における時間的変遷を確認するための資料として良好なものが出土している。

発掘調査初年度に，Ⅲｂ～Ⅳｂ層出土遺物及び一括遺物について，「弥生時代中期前半段階に位置付けられる入来Ⅱ式土器が多く，弥生時代中期後半から古墳時代の遺物は見られない。このことは，南九州では，弥生時代後期から古墳時代（笹貫式期まで）の遺跡が平野部に集中し，古代に入ると山間部に立地する遺跡が増加する傾向があり，本遺跡もそれに相当する。また，掲載№56の壺は，弥生時代中期初頭の高橋式の壺よりも古い形態とされ，弥生時代開始期の夜臼式土器の壺ではないかと推定される。」と，鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授の中村直子氏より御教示をいただいた。

その後の調査でも，Ⅲｂ～Ⅳｂ層の出土遺物は中期前半期のものが多く，中期後半の山ノ口式や古墳時代の遺物は出土しなかった。

また，多く出土した入来Ⅱ式土器の中には，口縁部上面に横位の浅い沈線を施すもの（掲載№41）や口縁部と胴部突帯の間に縦位の沈線を施しているもの（同43），壺の口縁部上面に間隔を開けて４か所に突帯を貼り付けているもの（同60）等特徴的なものもある。

このように口縁部や胴部上面に装飾を施す類例は多数確認されている。鹿屋市の西ノ丸遺跡では弥生時代中期前半から後半にかけての遺物が多く出土しており，本遺跡のように口縁部上面に突帯を貼り付ける土器や口縁部に沈線を施す土器が多くみられる。いずれも口縁部の破片での出土が多く，全体の器形は不明である。また，肝属郡南大隅町（旧根占町）の谷添遺跡でも入来Ⅱ式の甕口縁部上面に沈線を施すものが出土しており，隣接する出口遺跡でも，同様の壺が完形で出土している。このような類例は大隅半島に限らず，南さつま市金峰町の上水流遺跡でも口縁部上面に浅い沈線を施すものが出土している。ただし，遺跡内での出土数は少ないため，入来Ⅱ式のバリエーションとして捉えるかは，今後の検討課題である。

これまで南九州の弥生時代においては、他地域との交流が盛んになる中期後半期の山ノ口式や，それに共伴する土器の地域性などに着目されてきたが，本遺跡はその前段階である弥生時代中期前半期の入来式の様相を知るうえで重要な資料となった。（江神めぐみ）

第２節　古代

１　遺構

古代の遺構は掘立柱建物跡，竪穴住居状遺構，炉跡，焼土跡，土抗，ピット，土器集中箇所などが検出された。

掘立柱建物跡は，検出された660基のピットから７棟が復元できた。いずれも平地建物であり，総柱建物は検出されなかった。ただし，検出したピット数から復元された建物数を考えるとまだ検討の余地があったのではないかと考える。

主軸方向については南北方向のものが３棟（１・４・６号），東西方向のものが４棟（２・３・５・７号）である。規格については２間×２間の７号以外は，２間×３間である。

鹿児島県内の当該期の遺跡において，２間×３間の掘立柱建物跡は普遍的に検出されており（上床2009），本遺跡も例外なく当てはまるものである。

１号と２号以外は切り合っておらず，柱穴内からの出土遺物が極端に少ないため，建物跡個々の詳細な時期判断ができなかった。しかし，５号Ｐ８内から出土した炭化物は，放射性炭素年代測定の結果，補正年代で1,220±30yrBPを示し，これは後述する出土遺物の年代観と一致する。他の６棟については詳細な時期の検討が難しいため，古代という大枠で捉えるにとどめておく。

竪穴住居状遺構は，２基検出された。１号は立ち上がりがあり，貼り床のような硬化面がみられた。２号はプランが不明瞭で，床面がやや硬化していた。どちらも検出面から床面までの深さが浅く，層位も不安定であるなど，プランを確定する上で十分な条件下であったとは言えない。

遺構の性格については，住居として使用した明確な確証は得られず，また，「竪穴建物は，９世紀前半頃までは住居として存続するが，それ以降は小型化し，住居以外の使用目的へと変化していく。」（上床2009）との意見もあるため，住居以外の用途の可能性もある。しかしながら，遺構の規模から住居として使用した可能性も含んでいるため「竪穴住居状遺構」とした。

土坑は，形状が円形や楕円形のものが多数を占める。古代の土坑ついては，曽於市高篠遺跡をはじめとし，出水市外畠遺跡，霧島市中尾立遺跡，北麓原Ｄ遺跡等で報告されている。中でも，外畠遺跡で検出された土坑は，

平面形や規模，出土遺物や炭化物，他の土坑との関係，リン・カルシウム分析の結果等から火葬土坑墓の可能性が示されている（森編2012）。本遺跡の古代の土坑43号は，リン・カルシウム分析を行っていないという点を除けば，この外畠遺跡の土坑に類似しているため火葬土坑墓の可能性を秘めていると考える。

また，土坑64号は埋土状況や支脚と思われる軽石製品の出土等から，炉状遺構の可能性が示されている。同様の土坑は，霧島市中尾立遺跡で検出例があり，「掘立柱建物跡に伴って焼土跡がみられ，焼土周囲に礫が積まれていたことから，平地住居とそれに伴うかまど」として報告されている（福山町1994）。土坑64号に伴う掘立柱建物跡は確認できなかったものの，検出状況からは炉として使用されたのではないかと考える。

さて，これらの遺構や包含層から出土した遺物は，土師器の出土数が最も多い。中でも甕は完形に近い資料も含まれる。県内における古代の土師器については，中村和美氏の編年や，曽於市財部町高篠遺跡の報告書において編年が行われている（中村1994，松田・山崎編2004）。

本報告書では主にこの高篠遺跡の編年（以下，「高篠編年」とする。）を参考にし，本遺跡出土の土師器甕の特徴を抽出し，分類した。

器形では，甕Ⅳ類とした掲載№161 ～ 163は鉢形を呈するが，それ以外のものは長胴で胴部がやや張り出すものが多く，直線のものもみられる。口縁部は長いものと，短いものの両方がみられる。調整方法は内面のケズリとナデを基本としており，外面の胴部下にタタキ痕を有するものが１点みられた。

これらの特徴から，本遺跡出土の土師器甕は，概ね高篠編年Ⅱ期（９世紀前半～９世紀後半）及びⅢ期（９世紀後半～ 10世紀前半）の特徴に該当すると言えよう。

また，当該期の県内において「胴部下伴にタタキがあるもの」は出土例が少ないとされており（上床編2012），同様の甕は都城市中尾下遺跡に類例がみられ，「９世紀第2四半期以降に相当する。」（近沢編2010）とされている。このことから，北麓原Ｄ遺跡の考察でも述べられているとおり，今後は，日向や肥後などと比較する必要があろう。

甕に次いで出土数が多いのは，坏と埦である。坏・埦も概ね高篠編年Ⅱ期及びⅢ期に相当する。特に，埦は充実高台をもつものがみられないことからも，９世紀前半～９世紀後半と想定される。

最後に，墨書土器について述べたい。

本遺跡において出土した墨書土器の総数は11点である。この数は，県内の１遺跡における墨書土器の出土数からすれば多いとは言えない。しかし，その中に特殊な１点があるため特筆しておく。

118頁第103図164は，Ｌ－12区，Ⅳａ層において出土した土師器坏の内面に墨書が施されたものである。ほぼ完形で，器形からは９世紀後半のものと考えられる。墨書は内面の三方に，十字を太くした記号のようなもの（✚）の中に，「鬼」「正」のような文字がそれぞれ判読される。「鬼」の字は呪術の際，文章の書き出しに書かれることもあり，全国的には珍しくない文字であるが，鹿児島県内では初めての出土である。「鬼」の他にも，何らかの文字と思われるものが書かれているが，現段階では判読に至らなかった。

鹿児島県下における墨書土器は合計2136点出土しており，その記載部位は体部外面が60.7％であり，体部内面は3.0％となっている（永山2014）。つまり，県内出土の墨書土器は，その半数以上が体部外面に記載されていることになる。それに対し，164は複数の墨書が坏の内面に記載されており通常とは少し異なる。

永山修一氏からは，「このように，「鬼」の文字，書かれた部位，内容，伏せて出土した状況等から，何らかの祭祀に使用されたものと推測される。」との見解をいただいた。

本遺跡の古代の全盛期と考えられる９世紀後半は，在地有力者の積極的な土地開発に伴い，交通路や河川に沿った要衝の地に数多くの集落が営まれたことが推測されている（深野2014）。

当該期の本遺跡は，日向国の救仁郷に属し，大隅国との境界に位置しており，日向国と大隅国の両方の影響が考えられる場所である。今回報告した遺構や出土遺物からは，集落として存在した可能性が示され，日向国との関係も想定される。今後は，古代駅路等，日向を含めた広域で捉えていく必要があると言えよう。（深川祐子）

引用・参考文献

○上床真 2009「鹿児島県の古代に関する覚書－ここ数年の成果を中心として－」『南九州縄文通信No.20 南の縄文・地域文化論考 中巻』南九州縄文研究会

○柴田博子 2006「鹿児島県の墨書土器」『先史古代の鹿児島（通史編）』鹿児島県教育委員会

○近沢恒典編 2010『中尾下遺跡』都城市文化財調査報告書第98集

○永山修一 2014「鹿児島県の墨書土器について」『古代文化第66巻第２号』公益財団法人古代学協会

○深野信之 2014「考古学からみた古代大隅国」『古代文化第66巻第２号』公益財団法人古代学協会

○福山町教育委員会 1994『中尾立遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告（２）

○鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書関係
№71 「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」 2004
№168「北麓原Ｄ遺跡」 2012
№175「外畠遺跡」 2012

第３節　Ⅲ・Ⅳ層の石器

Ⅲ・Ⅳ層検出の遺構や包含層から，石鏃・石斧・磨敲石・砥石・石皿・剥片・チップ等が出土した。本文でも述べたとおり，遺構内埋土からの出土であったり，共伴土器が少なかったりしたため詳細な時期判断が困難であった。

出土した石鏃のうち磨製石鏃については，黒色の頁岩製で尖頭部が欠損しているものの，擦痕の特徴や基部の形状が鹿屋市の王子遺跡や薩摩川内市の山口遺跡で出土したものと酷似しており，弥生時代から古代のものと思われる。

石斧類については，磨製石斧の剥片を再利用したと思われるものが１点みられる。使用された石材はいずれもホルンフェルスを中心とした頁岩である。磨製石斧には基部から着柄部にかけて擦痕が残り，刃部を打ち欠いて制作したものと，刃部に擦痕が残るものとの２種類が見られる。

磨敲石は，安山岩と砂岩が使われており，形状は円形のもの，３㎝未満の小型のもの，角が丸い石けん状の四角のものという３種類が見られ，それぞれ側面部に擦痕，中心部に敲打痕が見られた。特に，石けん状の四角の磨石は側面部に使用によるとおもわれる摩耗の痕が見られた。

砥石は１点を除いて砂岩が使用されている。砂岩の中でも粒子が細かい細砂岩製が多く，形状では有孔状のものが二点あるほか，土坑墓からも有孔状の砥石が見つかっており，携帯用として日常的に使われていたのではないかと考えられる。また，共通して一面のみの使用だけではなく，表裏・側面部などの多面にかけて使用されている。

石皿は安山岩を使用しており，表面部分に活発な敲打や擦痕などが見られた。また，大きく抉りが見られた石皿は被熱を帯びて変色しており，金床石に酷似しているが抉り部分に擦痕が見られる。

砂岩製の砥石や掲載遺物の石皿の中に金床石に酷似した遺物などが見られることから，砥石は磨製石鏃の制作のみならず金属製品の研磨に使われた可能性も考えられる。

全体的には，礫石器の出土が中心のため黒曜石やチャートなどの使用は見られず，頁岩や安山岩が主な使用石材となっており，地域性や特徴は本章では見られなかった。（花薗友美）

第４節　中世

１　遺構

本遺跡の中世該当の遺構は，土坑墓，掘立柱建物跡，鍛冶関連遺構，土坑，ピット，杭列などが検出された。

(1)　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は49棟あり，Ａ～Ｅの５群とその他という６つのグループに分けた。時期は２時期ほどに分かれる可能性があるが，遺構内遺物および周辺に分布する遺物からは建物群の時期を分けることは難しかった。

Ａ群は調査区北側の四面庇掘立柱建物跡１棟，三面庇掘立柱建物跡１棟を含む建物群である。各掘立柱建物跡は東西または南北を主軸とし，近接するが切り合っているものはない。四面庇掘立柱建物跡は群の最も東に位置し，その北側には桁行三間・梁行二間の総柱の掘立柱建物跡が隣接している（p151－第129図）。

Ｂ群は調査区東側に位置し，庇付の掘立柱建物跡を含む建物群である。一部のみ検出されている建物が他の群よりも多い。（p162－第139図）。

Ｃ群は調査区南側に位置し，掘立柱建物跡が一部，切り合って検出された。この他にも掘立柱建物跡に復元できなかったが多数のピットが検出されている。

また，この群には鉄滓や鍛造剥片が集中して出土した鍛冶関連遺構が検出されていることから簡易な建物を何度も建て替えて鉄製品などの生産を行った工房群が想定される。（p167－第144図）

Ｄ群は三面庇掘立柱建物跡１棟とそれに付属する２棟の小型の掘立柱建物跡の群である。（p175－第152図）

Ｅ群は調査区西側に位置し，Ｄ群と近接する。調査区境のため一部のみ検出であるが，庇付の掘立柱建物跡であることと，調査区外に建物群がさらに広がることが想定される。

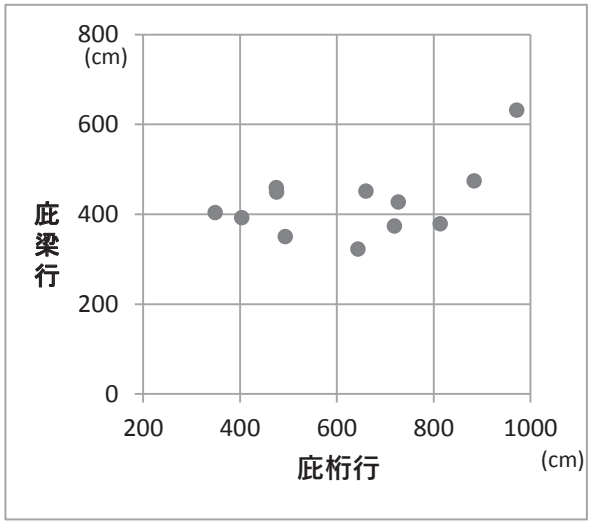
本遺跡で検出された掘立柱建物跡の規格は四面庇建物跡が１棟（母屋は桁行３間・梁行２間），３面の庇付建物跡が２棟（母屋は桁行３間・梁行２間），２面の庇付建物跡（母屋は桁行３間・梁行２間，検出が一部のものを含む）が１棟，１面の庇付建物が８棟（母屋は桁行３間・梁行２間），桁行３間・梁行２間の建物跡が15棟，桁行２間・梁行２間の建物跡が15棟である。

その他はＡ～Ｅ群に属さない掘立柱建物跡であり，８棟が該当する。

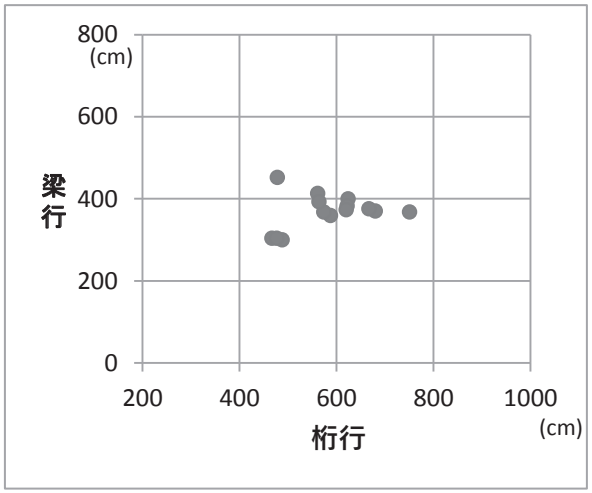
(2)　土坑墓

土坑墓の遺跡内での立地は庇付の掘立柱建物跡がある建物群の周辺に立地せず，工房や倉庫と想定される建物群の近くに立地している。

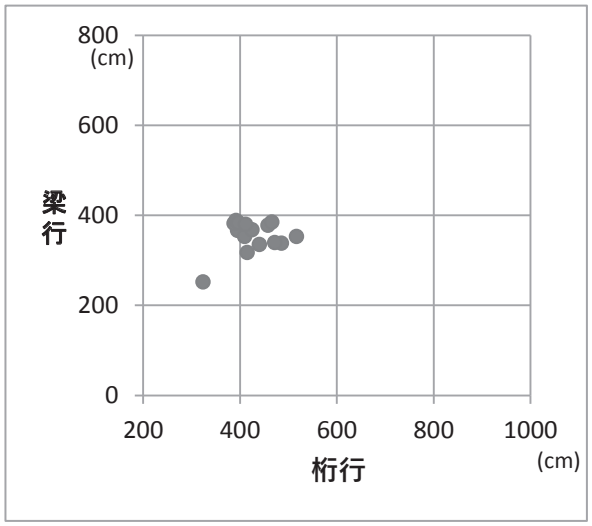
土坑墓の時期は，８基とも副葬品の時期等から概ね12世紀末～13世紀初頭であると考えられる。さらに，土坑墓の新旧については，詳細な時期差は不明であるが，



庇付の掘立柱建物跡の規格



３間×２間の掘立柱建物跡の規格



２間×２間の掘立柱建物跡の規格

掘立柱建物跡の規格一覧

番号	群	桁行間数	梁行間数	桁行長(cm)	梁行長(cm)	廂(cm)	廂桁行長(cm)	廂梁行長(cm)	方位
1	A	3	2	678	397	4	972	631	N88° W
2		3	2	488	300				N89° W
3		2	2	470	372	3	660	451	N87° W
4		2	2	440	317	1	404	392	N85° W
5		3	2	588	359				N86° W
6		3	3	643	358				N89° W
7		2	2	374	370	2	476	449	
8		2	0	340	96				
9		3	2	680	370				N14° E
10		3	2	478	452				N2° E
11		3	2	574	368				N9° E
12		2	2	378	367	1	494	350	N1° W
13		3	2	667	376				N4° E
14		3	2	751	368				N7° W
15	B	2	2	395	366				N14° W
16		2	2	388	382				N13° W
17		2	2	392	388				
18		2	2	410	353				
19		2	2	458	378				
20		2	2	470	368	1	475	459	
21		2	0	283					
22		2	1	367	175				
23		3	1	590	200				
24	C	3	2	624	400				N62° W
25		2	2	425	368				N8° E
26		3	2	589	388	1	719	373	
27		2	2	486	338				N14° W
28		3	2	561	413				N76° W
29		3	2	622	383				N83° W
30		2	2	466	385				N80° E
31		2	1	263	199				
32		2	2	397	383				
33		2	2	472	339				N19° E
34		3	2	620	373				
35		3	2	564	393				N46° E
36		2	2	517	353				N23° E
37	D	3	2	678	394	3	884	474	N19° E
38		3or2	2	590	300				
39		2	2	324	252				N69° W
40	E	3	2	595	355	1	644	322	N86° W
41		3	2	467	304				
42	その他	2	2	559	423	1	727	427	N17° E
43		2	2	415	317				N6° W
44		2	2	412	380				
45		3	2	651	393	1	814	378	N64° W
46		2	2	349	325	1	349	403	
47		2	1	449	144				
48		3	2	477	304				N87° W
49		2	2	440	335				N88° E

概ね土坑墓２号と土坑墓６号が古く，その次が土坑墓１号と土坑墓５号で，土坑墓７号が最も新しいと考えている。また，土坑墓３号は副葬品に陶磁器や土師器がなく，土坑墓４号・６号は副葬品が出土していないため他の土坑墓との関係や新旧については不明である。

ここで副葬品の種類・数とも他の土坑墓より多かった土坑墓１号について触れておきたい。

土坑墓１号から同安窯系青磁碗，白磁皿，青白磁合子，滑石製石鍋，和鏡（松喰鶴鏡），鉄製紡錘車，和鋏，毛抜き，古銭（開元通宝），土師器鍋が出土した。土師器鍋は南北の隅に割られて立った状態で，青磁碗・白磁の小皿は北側の中央に傾いた状態で出土した。この出土状況について，元興寺文化財研究所の狭川真一氏から「この出土状況から，遺体は木棺墓に埋葬されたと想定している。つまり，立てた土師器鍋を支えに棺の側板を立て，側板を支えに天板を被せ，天板の上に副葬品を並べる。その後，遺体と木棺が腐食・消滅し，副葬品が中央に傾いたのではないかと考える。このような構造は通常の木棺墓ではなく，全国的にも類例はほとんどない。」との御教示をいただいた。

鹿児島県内での類例を強いて挙げるならば，本遺跡の土坑墓１号とは構造が若干異なるが，志布志市の長田遺跡で検出された土坑墓がある。この土坑墓の土師器鍋は，割られて長辺の両側に置かれ，１つは白磁碗を覆う形で出土している。

また，出土した和鏡（松喰鶴鏡）について，橋口尚武氏が付論（p291 ～ p296）の中でも「文様・大きさ・重さなどから平安時代末期の鏡である。」と述べている。

なお，「松喰鶴鏡」は「松喰鏡」や「松鶴鏡」とも呼ばれることもあり，橋口氏の付論では「松喰鏡」で論を進めている。

さて，土坑墓１号以外の土坑墓の主な副葬品について第Ⅳ章第３節(1)の土坑墓の項で報告しているが，再度触れておく。

土坑墓２号　土坑墓２号からは白磁碗Ⅳ類１点・Ⅴ類１点，土坑墓３号からは鉄鏃・腰刀・和鋏・砥石が，土坑墓５号からは龍泉窯系青磁碗Ⅰ類２点，土坑墓７号からは白磁碗Ⅷ類・土師器小皿・湖州六花鏡・古銭（政和通宝），土坑墓８号からは土師器小皿が出土した。

土坑墓３号の副葬品のうち腰刀の出土例は各地で見られる。鉄鏃の出土例は大分県中津市の佐知遺跡の例があるが，類例は多くはない。また，土坑墓８号のように副葬品が土師器のみという例は，鹿児島県内では比較的多い。

各土坑墓の被葬者の性別については，人骨の出土がなく，極楽往生への願いや魔除け，葬送儀礼等により納められた副葬品や当時の世相からは被葬者の性別を判断する根拠が弱く不明である。

全国的には，天神段遺跡でみられる内容の副葬品をもつ土坑墓は屋敷墓と呼ばれるものが多い。屋敷墓は，溝で区画された屋敷地の中で検出され，一族，屋敷地を守るために屋敷内に造墓されたものと評価されている（橘田1991）。しかし，天神段遺跡の土坑墓は屋敷と考えられる掘立柱建物跡群から離れ，屋敷を区画する溝や堀もなく他地域の屋敷墓とは様相が異なる。ただし，「天神段遺跡の立地する台地上の狭い範囲に遺構群は分布しており，この台地が建物群を構成した一族が所有する屋敷地と考えると土坑墓は屋敷墓と呼ぶことは可能である。」と狭川真一氏から御教示をいただいた。

鹿児島県内の12世紀から13世紀前半の土坑墓としては伊佐市の淵辺古墓，薩摩川内市の上野城跡・成岡遺跡，いちき串木野市の栫城跡，日置市の原口遺跡，南さつま市の持躰松遺跡・芝原遺跡，霧島市の小田松木薗遺跡・宗円坊屋敷跡・舞鶴城跡，志布志市の長田遺跡・仕明遺跡などで検出例がある。これらの土坑墓の副葬品としては，白磁碗の出土例が多いが，淵辺古墓・小田松木薗遺跡・宗円坊屋敷跡などでは青白磁小壺・合子，鏡も出土している。

(3)　鍛冶関連遺構

鍛冶関連遺構は，Ｈ・Ｉ－８・９区，掘立柱建物跡Ｃ群（p167－第144図参照）の南西端で検出され，鉄滓・鍛造剥片が多く出土した。また，この遺構内で検出された土坑内周辺のⅣa層の土が白くなっていたためその部分の土を採取し，メタルチェックを行った結果，鉄滓片・鍛造剥片が多く採取できた。したがって，土坑周辺の土の変色は鍛冶により高熱を受けたものである。

このことからこの鍛冶関連遺構周辺で検出されている掘立柱建物跡の中には，鍛冶関連の工房があったことが想定される。

２　遺物

(1)　構成と時期

中世の遺物は土師器，黒色土器，瓦器，白磁，青磁，青白磁，青花，中国陶器，東播系須恵器，滑石製石鍋など中国産陶磁器が多量に出土し，国内産の広域流通品も出土している。陶磁器は大宰府の陶磁器分類の時期区分に照らし合わせるとその多くは白磁がＣ期，龍泉窯系青磁Ⅰ類・同安窯系青磁がＤ期に属し，中世前半の短期間のものが中心となる。その中でもＣ期の遺物が大部分を占め，次のＤ期はやや減少し，Ｅ期になると数点となる。

貿易陶磁器の構成，特徴としては碗・皿の量が多く，中国産陶器の甕・壺も比較的多くみられる。

土器は在地の底部切り離しがヘラ切り，糸切りの土師器坏・小皿や黒色土器A類埦がみられる。一方で在地では生産されない瓦器埦・皿や手づくね成形の土師器・土

師器鍋がみられる。

国内産陶器・須恵器などは東播系須恵器片口鉢が多量に出土している。また滑石製石鍋も出土している。広域に流通する商品が出土していが，常滑焼はみられない。

遺物の使用方法からみると供膳具である碗・皿では青磁・白磁が多く，黒色土器A類埦・土師器坏・小皿はその半分程度である。貯蔵具である壺・甕は中国産がほとんどで国内産のものは少ない。調理具は国内産のものが多く使用されている。以上の点は県内の同時期の遺跡と比較して量の寡多はあるが一般的な構成である。

(2)　搬入品

天神段遺跡からは手づくね土師器や瓦器，土師器鍋など高級品ではないが他地域で生産され，南九州で一般的に流通しないものが出土している。

ア　手づくね土師器

手づくね土師器は鹿児島県内では中世後半の志布志市志布志城跡（志布志市2008・橋口2008）と南九州市川辺町川辺郷地頭仮屋（南九州市2010），近世初頭の霧島市隼人町富隈城跡（隼人町1997）から出土しているが，中世前半の遺跡からの出土例はこれまでなかった。天神段遺跡自体では，13世紀後半の遺物はごく少なく，遺構内から出土している手づくね土師器の共伴遺物も13世紀前半以前のものとなる。天神段遺跡の手づくね成形の土師器は12世紀～ 13世紀前半の京都産の土師器と比べ口縁部外面のナデの幅が広いようである（中井淳史氏の御教示）。ただし，現状では京都以外の畿内もしくは四国地方で生産された可能性を想定しておきたい。

イ　瓦器

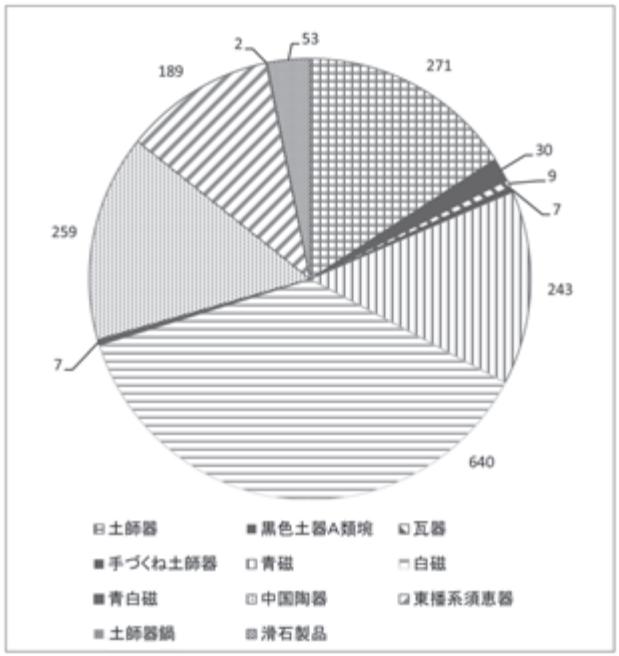
瓦器の出土は，全国的に畿内以外では港湾や国府・一宮の周辺から出土する傾向にある。鹿児島県でもこれまでに万之瀬川下流の持躰松遺跡・芝原遺跡と大隅正八幡宮（現鹿児島神宮）周辺の桑幡氏館跡などの社家跡から出土例があり，この傾向に当てはまる。

一方，天神段遺跡では和泉もしくは四国地方で生産された可能性がある瓦器が出土しているが，周辺に港湾や国府・一宮はなく，これまでの出土傾向には当てはまらない。

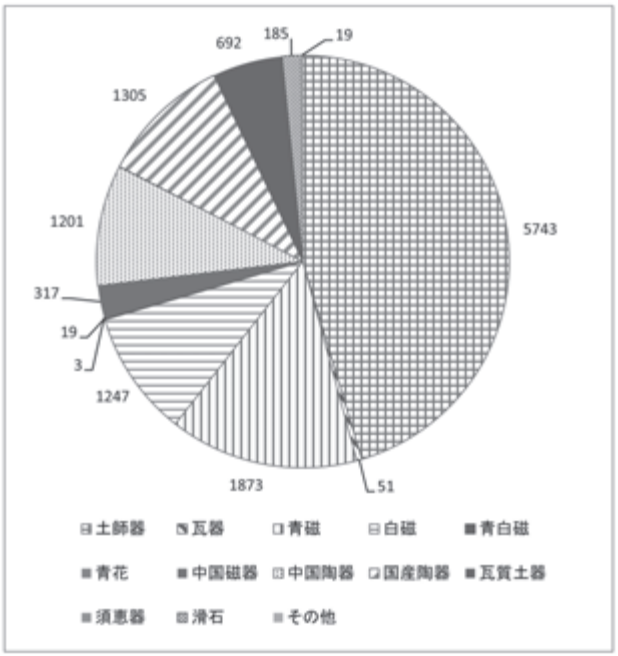
ただし，瓦器の出土は報告されていないが，天神段遺跡から北西方向約5.5kmに位置する鹿屋市輝北町百引の新田遺跡は，この一帯を支配していた図師氏の「中世の居館跡」の可能性があるとされている遺跡である。今後，新田遺跡やその他の天神段遺跡周辺の遺跡との関係性について検討していく必要がある。

ウ　土師器鍋

土師器鍋は１号土坑墓を含め３点出土している。器壁は薄く，器面調整はハケ目が残る。鹿児島県内では中世になると土製煮炊具はほとんど出土せず，類例は先述した志布志市長田遺跡のものだけである。中世では畿内で土製煮炊具が残るが，南九州では土製煮炊具は見られない。天神段遺跡，長田遺跡ともに畿内産の土師器鍋の可能性について検討する必要がある。



天神段遺跡の遺物組成



持躰松遺跡の遺物組成

エ　搬入品の評価

年代，生産地については課題があるがこれらの遺物は一般的な遺跡から出土することはなく，持躰松遺跡・芝原遺跡のような流通拠点と想定される遺跡，桑幡氏館跡のように文献資料などから中央の権門との関係が想定される遺跡から出土している。

天神段遺跡は内陸部にあり，持躰松遺跡・芝原遺跡とは立地が大きく異なる。陸の交通の要衝である可能性はあるが，船舶などで大量の物資が輸送される河川沿いの遺跡ではない。他の商品とともに偶然少量の瓦器・手づくね土師器が運ばれ，使用廃棄された可能性は考えられる。

一方，これらの遺物を商品として欲した可能性も低い。瓦器・手づくね土師器は基本的に畿内の生産地周辺で消費され，他地域に商品流通することはない。

手づくね土師器は京都系土師器とも呼ばれ，平泉では京都での酒宴における儀礼・文化とともに導入された。酒宴や儀礼で使用されたと考えられる大量の土師器が出土し，遺物組成では土師器の出土量が９割を占める。これに対して天神段遺跡では手づくね土師器の出土量は数点であり，在地産土師器を含めても中国陶磁器の出土量にも及ばない。

このことから京都の酒宴の文化や土器の大量消費は天神段遺跡では取り入れられていなかったと考えられる。

３　中世全体の評価

遺構では規模の大きい四面庇掘立柱建物跡を含む建物群，豊富な副葬品を伴う土坑墓，鍛冶関連遺構による鉄製品の生産がみられた。なお，溝状遺構も検出されているが，これは，「最近までの畑境や農道などに沿う点や掘立柱建物跡と重複する点から，集落が形成されていた中世前半よりも新しい時期のものと考えられる。」と大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事の小野正敏氏から御教示をいただいた。

遺物は中世前半が多く，中世後半の白磁・青磁・青花などは少ない。遺物全体の組成については，鹿児島県における中世の先例遺跡と大差はないが，土坑墓内の湖州鏡，和鏡といった鹿児島県内の中世前半の遺跡の中でも突出した遺物と瓦器，手づくね土師器，土師器鍋などの南九州では類例の少ない搬入品の出土があった。

屋敷跡と想定される掘立柱建物跡群に土坑墓が伴う事例としては薩摩川内市の上野城跡・成岡遺跡，いちき串木野市の栫城跡，日置市の原口遺跡，南さつま市の持躰松遺跡・芝原遺跡，霧島市の宗円坊屋敷跡などがある。いずれも屋敷墓とされる土坑墓の構成と同様であり，当該期の南九州の有力者層・荘園領主層に屋敷地内に祖先を祀る墓を造る思想が共有されていたと想定される。そして屋敷墓の葬送儀礼・思想が天神段遺跡にも伝わり，土坑墓が造られたと考えられる。

天神段遺跡は中世前半の有力者の屋敷跡と考えられるが，この遺跡に居を構えた勢力がどのような理由でこの地を選び，どのような生業を営んでいたかという点が問題となる。

遺跡が所在する大崎町野方は現在も，鹿屋，輝北，都城，志布志を結ぶ交通の要衝に立地している。当時も遺跡周辺に各地を結ぶ道が通り，人や物資の往来があったことが想定でき，この地を選んだことは考えられる。

一方，どのような生業を営んでいたかについては，遺跡はシラス台地上に立地しており，稲などの農作物の生産には適さない土地であるため他の生産物による生業を想定してみたが，確認された遺構や遺物の数量では，十分な根拠にはならず想定できなかった。

中世における天神段遺跡の繁栄時期を比較的多く出土した陶磁器から考えていくこととする。

天神段遺跡で出土した中世該当の陶磁器を大宰府における陶磁器の時期区分に当てはめるとＣ・Ｄ期の遺物が多く，Ｅ期に入ると出土量は大きく減少する。土坑墓から出土した陶磁器はＣ・Ｄ期に属する。

実年代では12世紀から13世紀前半に最も活動が活発で，13世紀に入って衰退することがうかがえる。

したがって，中世における天神段遺跡の繁栄時期は，源平の争乱～鎌倉の武家政権成立という政治体制が変化した古代末～中世初頭であると言える。

つまり，中世における天神段遺跡の繁栄期に中央の権門を後ろ楯に権力を握っていた統治者は，この政治体制の変化の中で，権力及び支配地を剥奪された，もしくは新天地を求め自らこの地を離れたのではないかと考える。そして，中央で新政権が樹立した後の天神段遺跡は新たな統治者もなく衰退していったのではないかと考える。（岩元康成）

引用参考文献・報告書

上田秀夫　1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会

上村俊雄　1994 「南九州出土の湖州鏡について」『人文科学論集』第39号　鹿児島大学法文学部

橘田正徳　1991 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ　日本中世土器研究会

木下尚子編　2009 『13～14世紀の琉球・福建』 熊本大学

狭川真一　2011 『中世墓の考古学』高志書院

中井淳史　2011 『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版

橋口亘　2008 「志布志城跡出土の手づくね成形の土師器皿について」『南日本文化財研究』№6『南日本文化財研究』刊行会

橋本久和　2009 『中世考古学と地域・流通』 真陽社

隼人町立歴史民俗資料館　1992 『隼人町立歴史民俗資料館年報』第２号

森田勉　1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会pp.47-54

山本信夫　2000 『大宰府条坊ＸＶ　陶磁器分類編』大宰府の文化財第29集　太宰府市教育委員会

有明町教育委員会　2003 『長田遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）

2005 『仕明遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

鹿児島県教育委員会　1985 『成岡遺跡』 鹿児島県教育委員会発掘調査報告書第35集

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書

（12） 1994 『本御内遺跡（舞鶴城跡）』

（34） 2002 『小倉畑遺跡』

（68） 2004 『上野城跡』

（120） 2007 『持躰松遺跡』

（129） 2008 『向椿城跡』

（155） 2011 『椿城跡』

（170） 2012 『芝原遺跡』

志布志市教育委員会　2008『志布志城跡Ⅱ』

日吉町教育委員会　2003 『原口遺跡』 日吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

隼人町教育委員会　1997 『富隈城跡』

2003 『桑幡氏館跡』

南九州市教育委員会　2010 『川辺地頭仮屋跡』 南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

第５節　近世

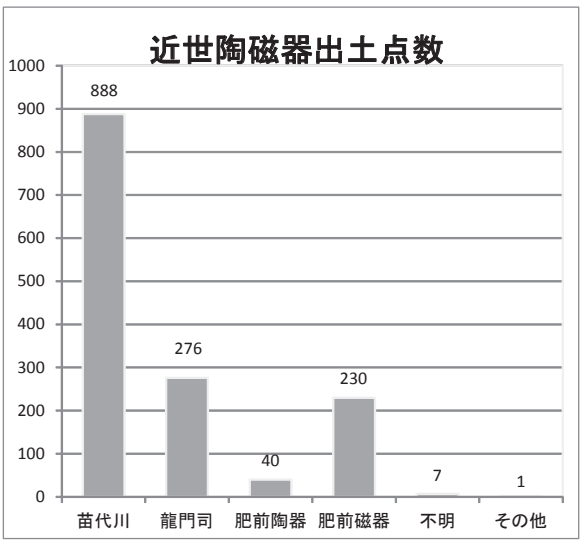
１　遺物について

本遺跡における近世該当の遺物は，陶磁器とキセルのみである。出土状況を見てみると（ｐ242－第215図），数は多くはないが，平坦地かつ土坑が検出されている周辺で多く出土している。出土した遺物は，薩摩焼の陶器である苗代川焼と龍門司焼，薩摩焼の磁器，肥前系陶磁器，沖縄県の壺屋焼と考えられる陶器等に分類することができた。その割合を見てみると（下のグラフ参照），最も多いのが苗代川焼で，888点出土し，全体の約６割を占める。器種は，甕・壺・擂り鉢・土瓶などがある。次に多いのが龍門司焼と肥前系磁器で，双方の出土数は大差がなく，龍門司焼が276点，肥前系磁器が230点でいずれも全体の約２割近くを占める。龍門司焼の器種は，碗･皿･土瓶･急須･灯明皿などがあり，土瓶が237点と最も多い。肥前系磁器の器種は，碗，皿，小坏，筒型のもの等様々な形のものがある。時期は，18世紀後半～ 19世紀にかけてのものと思われる。その他，薩摩焼の磁器が２点，肥前系陶器が約40点，不明の磁器が７点，キセルが１点出土している。肥前系陶器には，17世紀後半～ 18世紀初頭のものと思われる内側が緑釉，外側が透明釉薬の内野系の陶器が約５～ 10点含まれる。また，18世紀代の武雄方面産と思われる緑釉陶器も１～３点含まれる。

２　近世の様相

遺構配置，遺物の出土状況，先述した遺物の種類等から本遺跡の近世の様相は，人々は遺跡の南西部で畑作を行いながら平坦地で生活していたことがうかがえる。

また，生活道具の一つとして，主に在地の陶磁器を使用しながらも，肥前系の陶磁器も使用していたことから，在地だけでなく他地域と物を介した人の交流，あるいは，陶磁器の流通がはじまり，消費地としての役割を担うようになったのではないかと考える。（田畑哲治）



付　　論

付論　松喰鏡と和鏡の中の鶴・亀の展開

天神段遺跡において，松喰鏡は１号墓の北側，埋葬された人の頭近くから出土し，その下には開元通寶（玄宗皇帝の初鋳年621年）があったという。この通貨は，おそらく六道銭のつもりであったであろう。出土状況の詳細については本文に譲るとして，ここではまず松喰鏡について述べることとする。

１号墓の松喰鏡の計測値は，径は10.8cm，縁の厚さは0.765㎝，重さが99.8ｇである。重さから検討してもまさに平安末期の鏡であることが分かる（図１－１）。いわゆる平安末から鎌倉初期の藤原鏡もしかりで，いずれも重さが100ｇ前後であることと共通する。ただし，松喰鏡には鎌倉時代後期に属するものもあるので注意する必要がある。

ところで，鏡の模様は鏡背に鋳出すもので，表はぴかぴかに磨いて化粧用として用いるのが一般的で，時には錫を張って利用することもある。ただ，相応な技術者がいないと錫を張ることができないので，その点ではぴかぴかに磨くしかなかったであろう。

最近になって，霧島市隼人町神宮３丁目の『宗円坊屋敷跡』（旧弥勒院跡境内にあたる。）からも松喰鏡が出土した（重久2012）。出土状況は土坑13号の北側の頭部近くからで，天神段遺跡の１号墓と似ている。宗円坊屋敷跡の土坑の時期が室町時代で，松喰鏡は室町時代まで伝世したことになる。この松喰鏡の計測値は径は11㎝，重さは87ｇである（図１－２）。

鹿児島県内で松喰鏡を所蔵している神社は，薩摩川内市の新田神社，姶良市蒲生町の蒲生八幡神社，湧水町栗野の勝栗神社などで，これらの鏡は，國學院大學による調査によって資料化されたものである（椙山ほか1998）。

新田神社の松喰鏡の時期は鎌倉初期で，その径は18.2㎝，縁の高さは0.3cmである。蒲生八幡神社の松喰鏡の時期は鎌倉時代前期と言われ，径は18.4㎝，重さ330ｇである。また，勝栗神社の松喰鏡は鎌倉時代後期のもので，径が23cmもあり相当に大きいことが分かる（図２）。

なお，蒲生八幡神社の鏡類はすべてが懸け鏡であった。しかもこの鏡類は，蒲生氏の存続年代（1123年ごろから島津氏に滅ぼされる1557年まで）に限られていることから年代が明確で，大正７年（1918年）に「秋草双雀鏡」１点だけが指定された。

さて，鶴が松を喰える構図は，一般的には考えられないものである。したがって，どこかにその淵源があるものと考える。もともと鏡の模様は，その時代に近い時代の美術・工芸品や時に和歌をも題材にして鏡背の模様が鋳込まれるものである。

その松喰鏡の模様の淵源は，法隆寺の蓬莱山蒔絵袈裟箱（縦50.5㎝，横41.7㎝，高さ5.3㎝）である。すなわち，袈裟箱の一辺に大亀が蓬莱山を乗せた絵がある。しかも，中国では亀は仙人を支える役目をもつものと明確に位置付けられているので，蓬莱山を乗せるのは当然の姿であったろう。なお，蓬莱山は中国の神仙思想の三神山の一つで，東方の海上にあって仙人が住み，そこに不老不死の霊薬があり，宮殿が建っていると言われている。

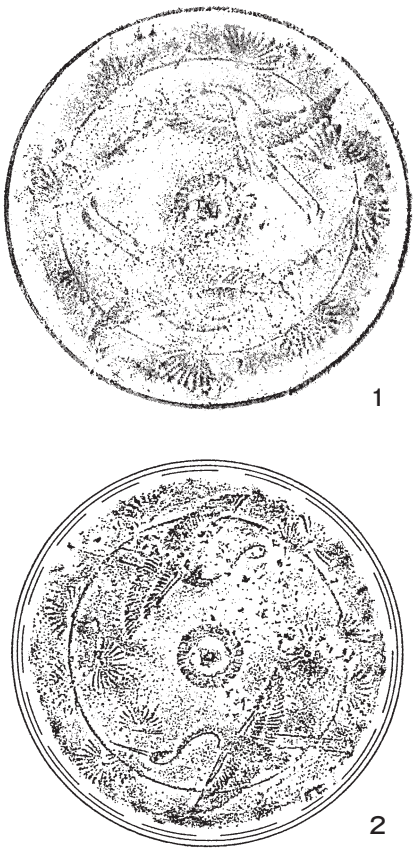


図１　県内出土の松喰鏡

そこで，法隆寺の袈裟箱をみると，その製作年代がおおよそ1121年ごろと推定され（保坂1973），この時期から数十年すると松喰鏡が出現することになる。よく観察してみると，大亀はもちろんのこと，高い崖状の山に松が６本見え，宮殿らしき２階建ての建物が１軒，その他仙家が５軒ほど観察され，階段まで表現されている。正直言ってこの蓬莱山に宮殿があるとは解釈していなかったこともあり，神仙思想がこれほど具体化されていることに少々驚いている（図３）。

この蓬莱山は，間違いなく徐福伝説を具現化したものであると考える。徐福とは，秦（BC221－BC206）の始皇帝（BC259－BC220）の28年（BC219）に不老不死の霊薬を求めて童男女数千人を率いて入海求仙し，海中で見つけた島の王となったという。その行き先が日本と考えられ，この伝説を具現化したのが袈裟箱の蓬莱山ということになる。袈裟箱の製作者は，この徐福伝説を相当に意識していたに違いない。

さて，この袈裟箱の蓋に松喰の絵が描かれており，この美術品がのちの松喰鏡となり，やがて今日でも時折見られる美術品へと繋がっている。しかも，蓬莱山はその後の鏡の中で生き続け，鎌倉・室町時代を通じて松喰鏡を観察することができ，やがて江戸時代の蓬莱鏡にまで引き継がれていった。

なお，これらの鏡の生産遺跡は長い間京都市内ではないかと推定されていた。12世紀から13世紀にかけては，



図２　県内神社所蔵の大型松喰鏡

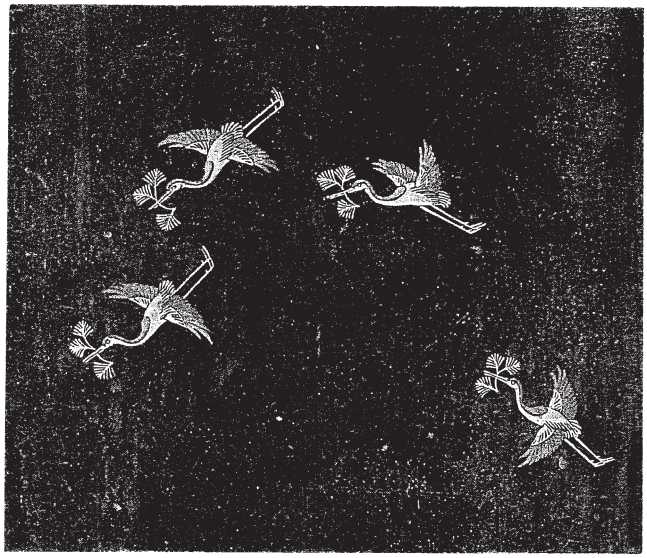




図３　蓬莱山がある法隆寺の袈裟箱

京都市郊外の白川地区でも鏡の鋳造遺跡が発見され，現在の京都大学構内遺跡であることが判明した。その後は，京都市の七条町・八条町の現在の京都駅の北側の西開発に伴って調査され，夥しい鋳型が検出され，白川地区以降の鏡などの鋳造遺跡が検出された。鏡の鋳型はもちろんのこと刀剣の鋳型まで発見され，青銅製の鏡のみならず鉄製品も扱っていたことまで判明した（久保1999）。

また，江戸時代に入ると大阪の発展に伴っていわゆる藤原某の柄鏡の鋳造が大阪でもできるようになった。

次に，蓬莱山を支える亀や鶴に関する文献について触れる。

古代中国の文献のBC140年成立の『淮南寺』の巻17の説林訓に「鶴は寿千歳にして以て其楽を極め・・・」，同じく巻14の詮言訓に「亀は三千歳，浮游は三日に過ぎず・・・」とあってこの文献には亀は万年とは記されていない。

また，成立年代は不明だが，奈良時代に霊亀（715）や神亀（724）という年号からそれ以前の成立と思われる『述異記』に，「亀千年に毛を生ず。寿五千歳を神亀といい，寿万年を霊亀という」とあるので，亀は万年というのがある意味普遍化していくことになったと思われる。

次に，和歌のなかで鶴がどう謡われているかをみることにする。ただし，万葉集には鶴の和歌が多いため抜粋した。

1 「万葉集」（770年ごろ成立）

(1) 足柄の 箱根飛び越え 行く鶴の
ともしき君は 明日さえもかも（1175）

(2) 難波潟 潮干に立ちて 見わたせば
淡路の島に 鶴渡る見ゆ（1160）

2 「貫之集」（紀貫之の歌を集めた歌集）

延喜15年（915年）の五十賀の屏風の歌

(1) わかやどの 松のこずゑに住むつるは
千世のゆかり とおもふべらなり

(2) 千年まで 命たへたる 鶴なれば
君がゆきゝを したふなりけり

3 「伊勢集」（平安中期の女流歌人の伊勢の歌集）

露かかる 菊の中なる あし[注1]たづは
いま幾度か 千世がそふらむ（注1 田鶴のこと）

4 「紫式部日記」（平安中期の日記文学）

藤原道長（966－1027）の返歌を抜粋

あしたづの よはひしあれば 君がよの
千歳ののかずも かぞへとりてん

など，様々の機会に鶴の千歳はうたわれている。したがって，これから述べる鏡背の模様には，まず鶴の立ち姿の鶴の番や，飛翔する鶴に関して種々の表現が用いられてくる。さらに，蓬莱鏡の鏡背に亀が表現されるのはやや遅れて，鎌倉時代後期から末期近くになってからである。

まず，鎌倉時代前半の蓬莱鏡（図４－１）は，計測値が径19.4cm，縁の厚さは0.5cm，重さは330ｇである。蓬莱山はやや崩れたとはいえその根元には州浜が描かれ，模様はゆったりし，まるで空間美を楽しむように鋳込まれている。素紐である。

鎌倉時代中期の蓬莱鏡（図４－２）は，計測値は径19.8cm，縁の厚さは0.4cm，重さは408ｇである。蓬莱山は鎌倉時代前半の蓬莱鏡よりも締まってきているが鶴の後ろに葦を表現し，さらに，上の方の空間に飛鳥まで鋳込まれ，しかも内圏の外まで飛び出している。少しだけ窮屈になったように思われる。

鎌倉時代末期近くの蓬莱鏡（図４－３）は，計測値は径が19.7cm，縁の厚さが0.2cmで，重さは量ることができなかったが，やや薄くなっている。蓬莱山の根元に州浜が展開し，番の鶏はまるで嘴が接し，餌でももらっているかのようである。鎌倉時代前半～中期の蓬莱鏡に比べてやや蓬莱山が大きくなり，紐に亀が進出して亀紐と呼ばれるようになる。鶴の後ろには葦が生え内圏を飛び出してやや大きく成長した葦である。

ここで，蓬莱鏡の鏡背模様の変遷に触れてみる。

鎌倉時代後期に鏡背に亀が鋳込まれるようになる。鎌倉時代末期から室町時代初期に亀が鏡の紐に移り，やがて亀紐となる。また，鶴の嘴だけは同じ方向をして亀紐は南の方角をさしている。

室町時代中期になると鶴と亀の嘴が同じ方向を向き，これを三嘴という。すなわち，蓬莱鏡に三嘴が現れてくるようになる。

次に，室町時代の蓬莱鏡の変遷をみる。いずれも三宅島の鏡で，神社の所有であったり，個人の所有であったりする。

室町時代前半の蓬莱鏡（図５－１）は，計測値は径が11.71cm，縁の厚さが1.5cm，重さが295ｇである。鶴の根元には州浜が展開し，立っている鶴の足元に小さな亀が鋳込まれている。紐は大きな亀紐で州浜に立っている鶴と飛翔している鶴とが表現されている。先述の亀紐である。

室町時代中期の蓬莱鏡（図５－２）は，計測値は径が11.1cm，縁の厚さが0.8cm，重さは228ｇである。蓬莱山が大きく曲がり，亀の嘴と鶴の嘴が接している。これも三嘴という。この傾向が確実に増える時期である。

室町時代後半の蓬莱鏡（図５－３）は，愛染明王蓬莱鏡といい，その計測値は径が11.2cm，縁の厚さが1.12cm，重さが328ｇである。今までのように州浜が表現され，蓬莱山の横に仏像が鋳込まれている。番の鶴と亀紐とで三嘴をなし，鏡の模様も大変窮屈になっている。

ところで，伊豆諸島は全国的に鏡の多い島々で，三宅島だけに85面の和鏡がある。その他に鏡の多い所は山形

県の出羽山の鏡池，伊勢湾の入り口にある神島，宮崎県の西の正倉院を建立した神門神社などである。（橋口2001）。

次に，安土・桃山時代の鏡に移る。

都城市の中世・近世の墓壙のある尾崎第１遺跡（貴船寺跡）の表土から発見されたものが，この時代に相当する。（図６）

蓬莱山は消えて松と秋草（又は羊歯＜裏白＞）の模様が鋳込まれており，飛んでいる番の鶴と亀紐とが三嘴となっている。よくもこんな狭いところに室町時代の鏡の模様を採用したものである。なお，柄の部分は唐国からの影響のもと成立したと考えられている。なお，この柄鏡の計測値は，径が7.44cm，縁の厚さが0.6㎝，柄の長さが9.69cm，重さが235ｇである（柒畑2006）。

また，この種の柄鏡に「天下一」と鋳込まれた鏡が織



図４　蓬莱鏡の変遷

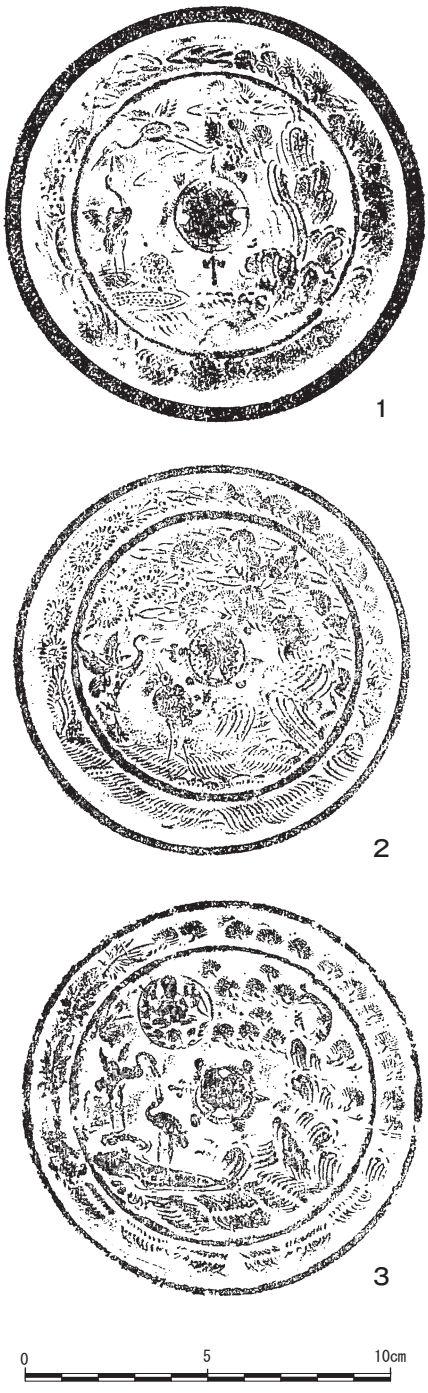


図５　室町時代の和鏡の変遷



図６　都城市尾崎第１遺跡出土柄鏡

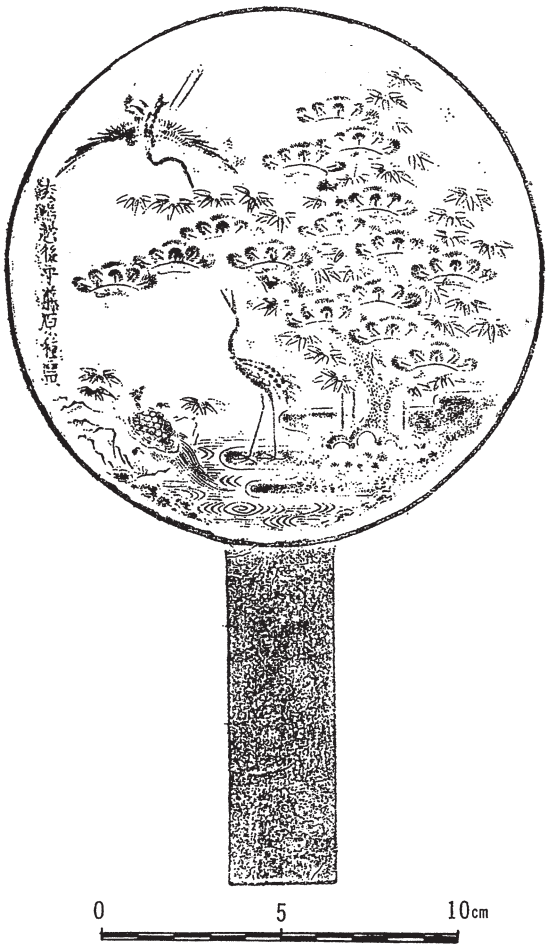


図７　松竹柄鏡

田信長（1511－1562）のもとに献上され，初めて贈られた時には，ここにも天下一がいるのかという程度であったが，二度目の柄鏡にも「天下一」と鋳込まれており，何人天下一がいるのかと少し不機嫌であったという。のちに，「天下一」の次に鏡の製作者の名前があるのは桃山時代になってからである。なお，ここに示した柄鏡は桃山時代のもので，この時期の特徴として柄の付け根に「受け部」が付く（久保1999）。

さらに，このような柄鏡の柄の長い17世紀を通じて用いられたが，柄があるので紐の部分は不要なのに付けられたままになっている。当然のように円鏡も普及したが紐は付いている。

次に，蓬莱山の名残と言えそうな鏡を紹介しよう（図７）。松竹の根元の右側に僅かに石が確認できる。その石が蓬莱山の名残である。したがって，厳密に言えば蓬莱柄鏡としてもよいが，ここでは松竹柄鏡としておく。足元に僅かに州浜が残り飛ぶ鶴と立姿勢の鶴がおり，立鶴の右に霊亀がいる構図で，全体の右側のある文字は「□□越後守藤原種廣」とある。計測値を示せば，重さだけで505ｇである。

次に，珍しい江戸時代の蓬莱鏡を紹介しよう。

この柄鏡は，薩摩川内市入来町の入来郷土館所蔵である（図８）。久しぶりに再来したような蓬莱柄鏡である。亀は長寿の霊亀となり，その上に蓬莱山が乗り，そこに松竹梅と菊花が咲き，まさに18世紀の日本的な蓬莱柄鏡である。作者は，藤原英政とあり，「天下一〇〇〇〇」となっている。この鏡をはじめて見たときに，万年を迎えた亀（霊亀）でも蓬莱山を乗せ，しかも江戸時代の特徴でもある松竹梅が生える蓬莱山とはいかにも不思議であった。計測値は径が20.75cm，柄の長さが9.5cm，重さが541ｇである（図８）。

次に，鏡に鋳込まれている「天下一〇〇」について述べる。先述したように，信長は不機嫌であったが，豊臣秀吉（1536－1598）が許可して以来，鏡師の間で鋳込まれてきた。しかし，徳川綱吉（1646－1700）が「天下一とは何事ぞ」と禁止させ，しばらくの間は「天下一」だけが消える時期もあったが，時が経つに連れて再び「天下一〇〇〇」と柄鏡に表現されるようになった。

最後に，取り上げる鏡が松竹梅柄鏡の典型的な例である。第26代当主島津斉宣（在位1797－1841）の次女於隣（おちか）（松寿院）は，生後３か月で種子島家に輿入れし，1811年，種子島家の久通と結婚した。18歳を皮切りに生涯で一男四女をもうけるが，一男二女は早死にした。32歳の時，久通が死亡し，その後世継ぎができるまで13



図８　18世紀の蓬莱鏡（入来郷士館所蔵）

年に渡って種子島の島政を担当することになった。この間に，薩摩藩の莫大な援助のもと万延元年（1860）から赤尾木湊の改修に取り掛かり，岸岐を湊の入り口の両方に造って海難事故が起こるのを防いだ。この岸岐は，現在でも使われている。すなわち，現在の西之表港の基礎を作ったことになる（鮫島2011，2014）。

於隣の縁組にあたり，２面の鏡を調達している。一つは，丸の十の字の鏡で，もう一つは松竹梅柄鏡である。すでに蓬莱山はなく，典型的な松竹梅柄鏡で，下の方に州浜があり，鶴は子供まで鋳込まれている。さらに番の霊亀まで表現され，明らかに子孫繁栄を願った柄鏡である。その製作時期は19世紀初めということになろう。

しかも，特注品の白銅製柄鏡で，計測値を示せば，径が21.2cm，縁の厚さが0.4cm，重さが878ｇをなす（図９）。しかも柄には籐を巻いているが，柄の籐がしっかり残っているのもまた珍しい。

以上で袈裟箱の鶴と亀，蓬莱山の鏡の上での変遷の概説を終わることにする。

なお，本編をまとめるにあたり，淮南子については永山修一氏の助言を受けた。さらに，次の方々のお世話になった。まず第一に，蒲生八幡神社と交渉にあたってくださった（公財）埋蔵文化財調査センターの方々，そして口添えをしていただいた姶良市教育委員会文化課の方々である。個人では都城市教育委員会の桒畑光博氏である。心から御礼申し上げる。また，保坂氏の文献に大いに助けられたことを明記し，謝意を表する。（橋口尚武）

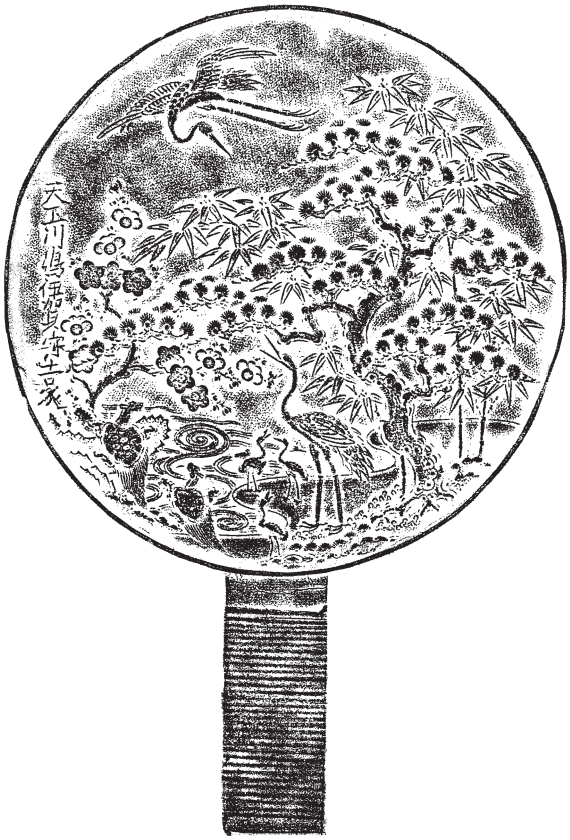


図９　松竹梅柄鏡（西之表市史料館所蔵）

参考文献等

久保智康　1999『日本の美術　394　中世・近世の和鏡』至文堂

桒畑光博　2006『尾崎第１遺跡（貴船寺跡）都城市史　資料編　考古』都城市市史編纂委員会

鮫島　穣　2014『種子島物語』和田書店

鮫島安豊　2011『種子島歴史』たましだ舎

重久淳一　2012『宗円寺坊屋敷遺跡－弥勒院発掘調査－』霧島市教育委員会

椙山林継他　1999『薩摩の神社奉納鏡－大型和鏡を中心として－』國學院大學　考古学資料紀要第14　國學院大學考古学資料館

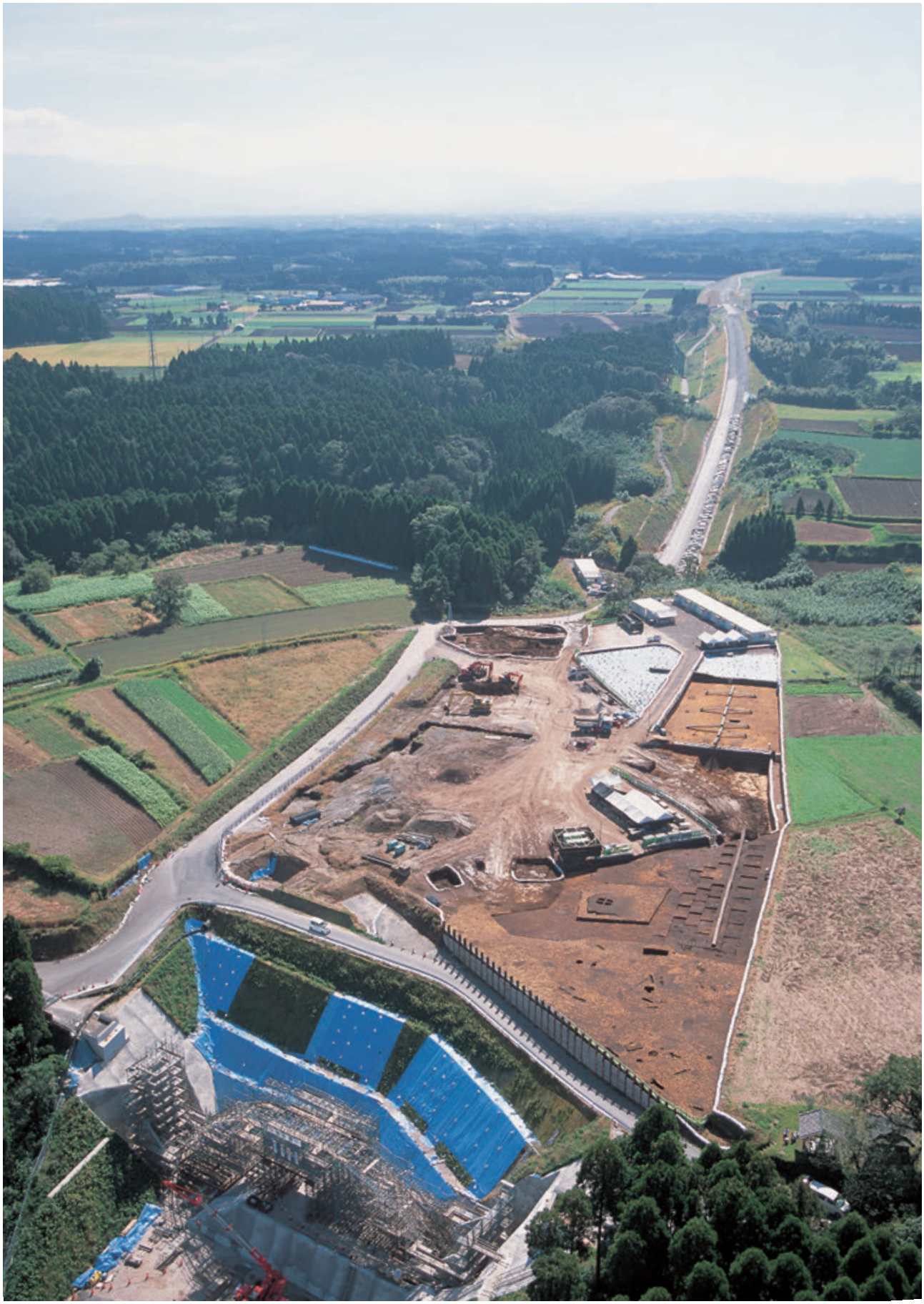
橋口尚武編　1975『三宅島の埋蔵文化財』伊豆諸島考古学研究会・三宅村教育委員会

橋口尚武　2001『黒潮の考古学』同成社

保坂三郎　1973『和鏡』人文書院

写真図版

図版 1



遺跡遠景

図版 2



土層断面・発掘作業風景











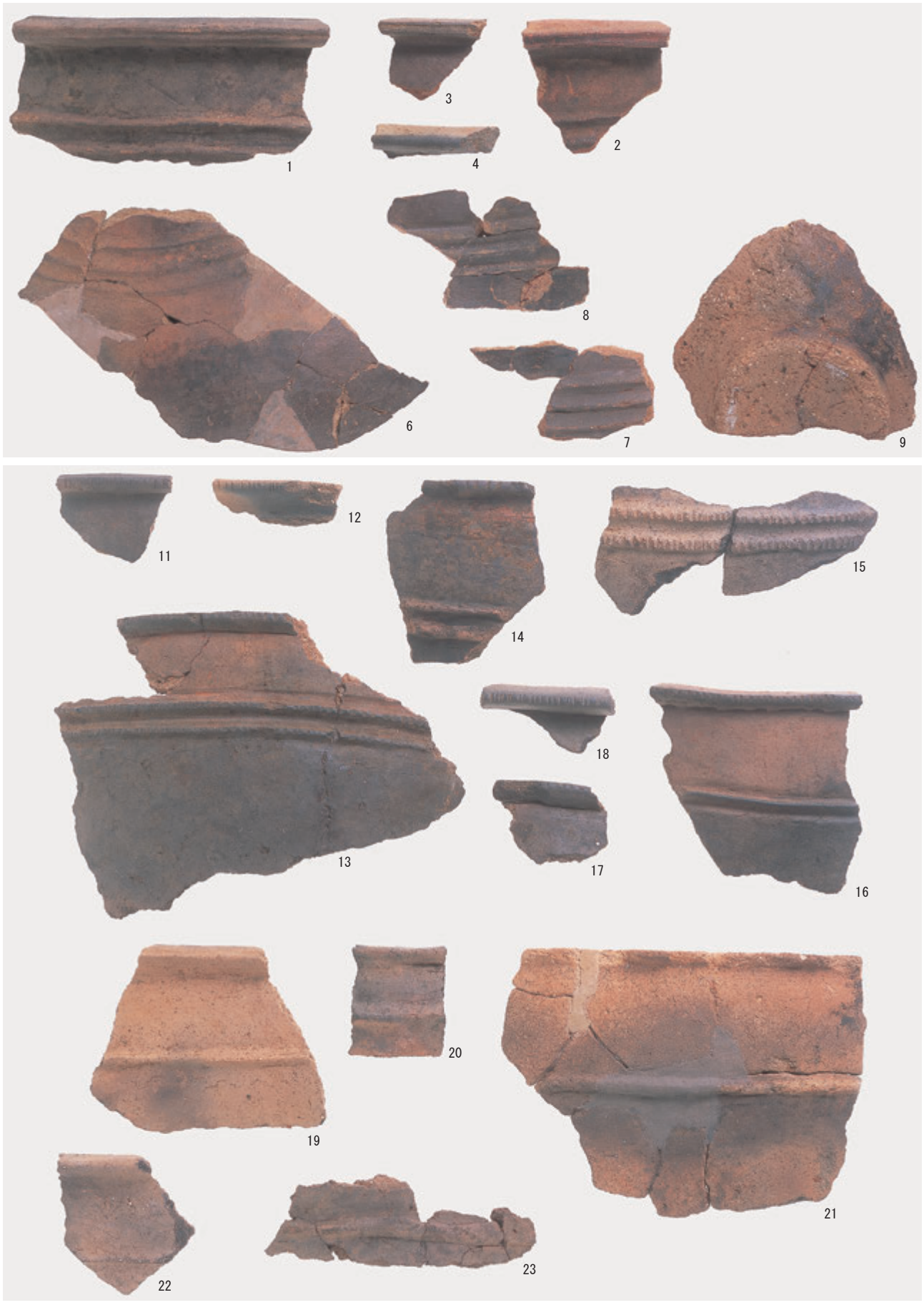






①～④弥生竪穴住居跡１号　　⑤・⑥・⑧弥生竪穴住居跡２号　　⑦弥生竪穴住居跡２号内焼土跡

図版４



弥生時代の土器１





弥生時代の土器２

図版６









弥生時代の土器３



弥生時代の土器４

図版８



弥生時代の土器５　　遺構内石器　　Ⅲ・Ⅳ層の石器１



Ⅲ・Ⅳ層の石器２

図版 10

















①～④古代竪穴住居状遺構１号

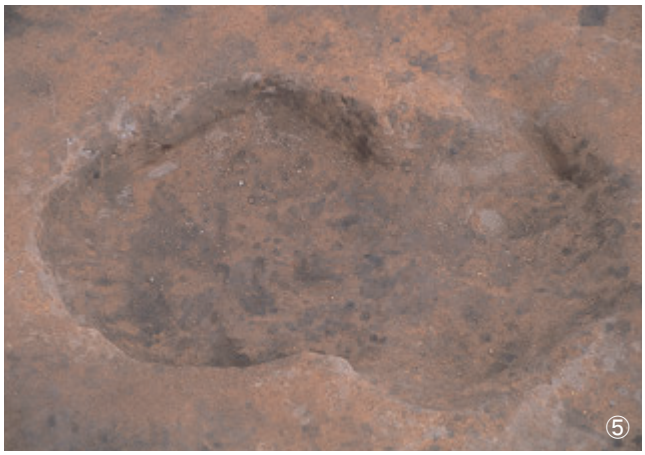
⑤～⑧古代竪穴住居状遺構２号

















①～③古代土坑６号　　④・⑤古代土坑３号・８号
⑥・⑦古代土坑10号　　⑧古代土坑11号

図版 12

















①古代土坑11号　②・③古代土坑14号
④・⑤古代土坑15号　⑥～⑧古代土坑20号





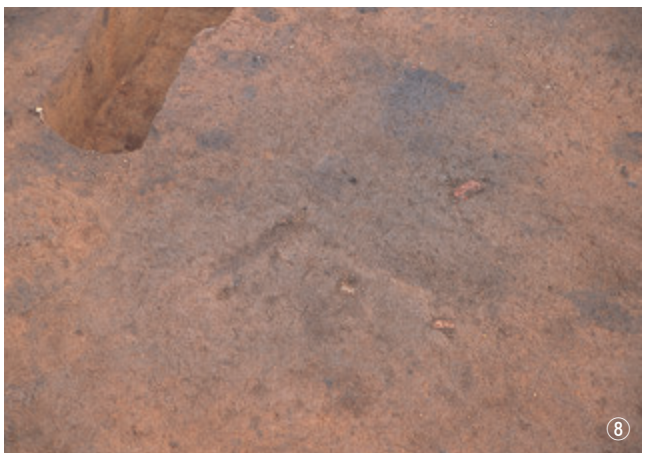












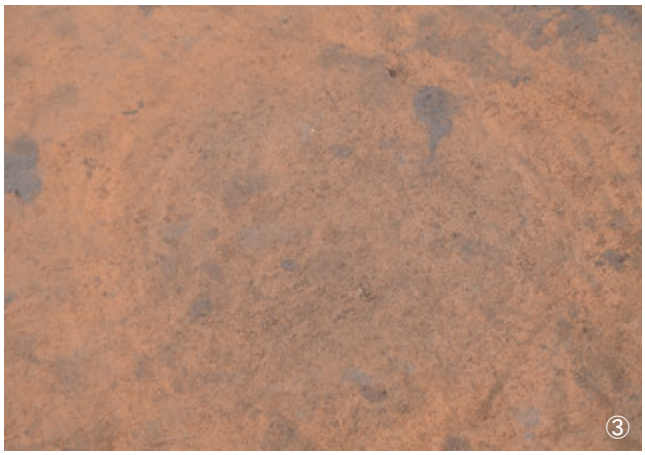
①・②古代土坑22号　　③・④古代土坑24号

⑤古代土坑４・25・40・46・84号　　⑥・⑦古代土坑25号　　⑧古代土坑26号

図版 14

















①・②古代土坑26号　　③～⑤古代土坑28号
⑥・⑦古代土坑40号　　⑧古代土坑41号

















①・②古代土坑41号　　③・④古代土坑43号
⑤・⑥古代土坑50号　　⑦・⑧古代土坑51号

図版 16

















①古代土坑52～59号　②・③古代土坑50号
④～⑥古代土坑64号　⑦・⑧古代土坑84号











①古代の炉跡　　②～⑤古代の焼土跡

図版 18

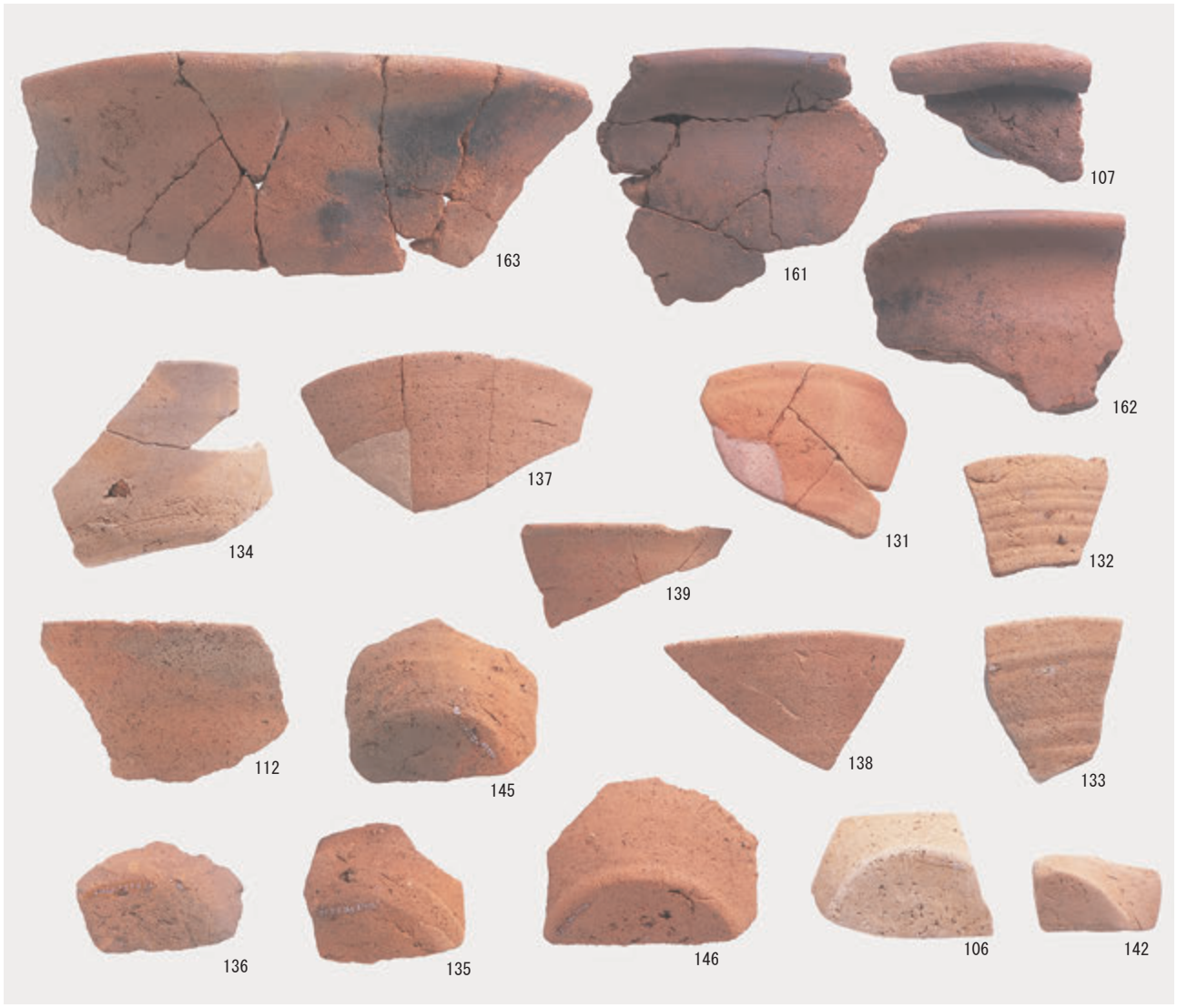


古代の土器 1



古代の土器２

図版 20


163
161
107
162
134
137
131
132
139
112
145
138
133
136
135
146
106
142


140

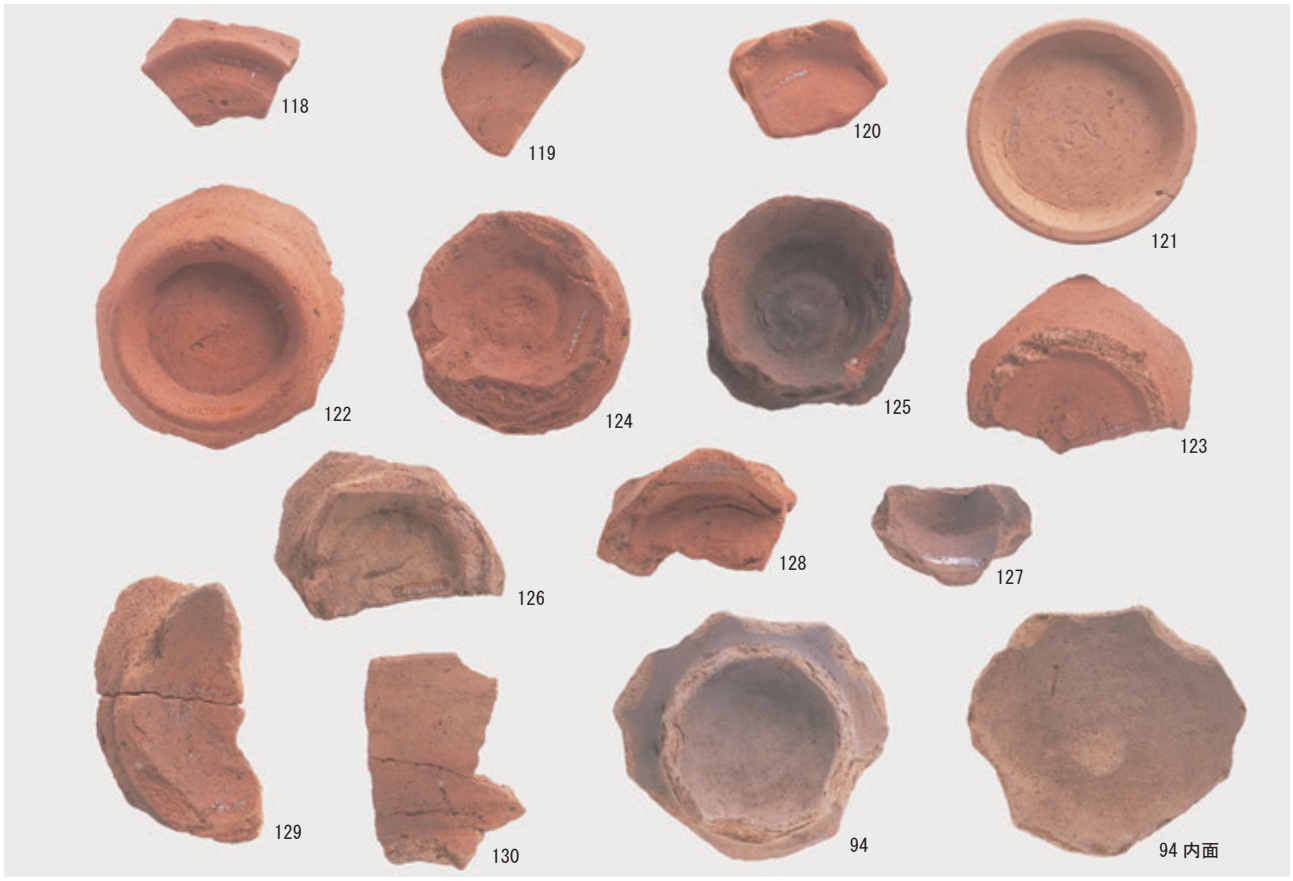

105


144


141

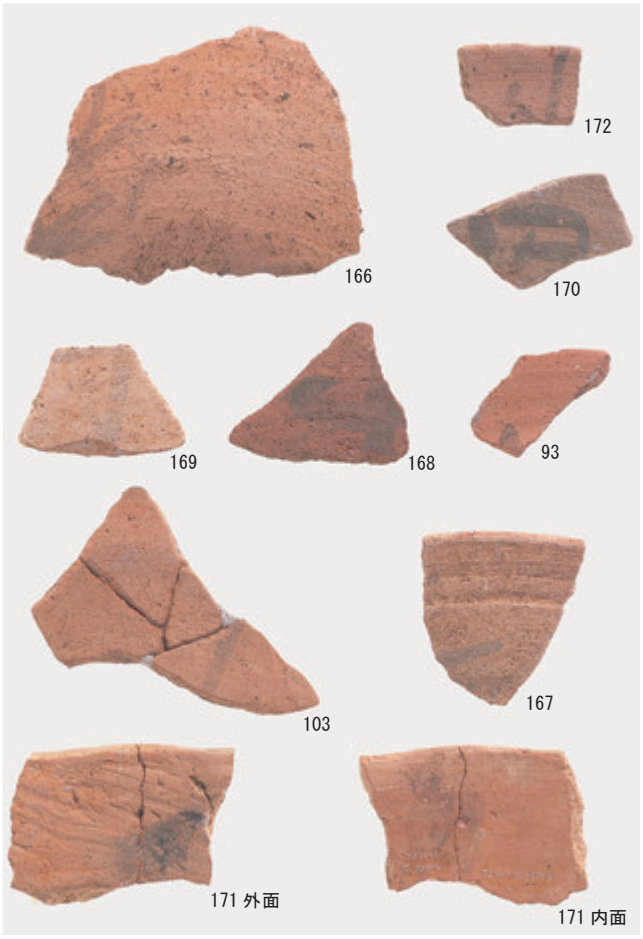

143

古代の土器３


118
119
120
121
122
124
125
123
126
128
127
129
130
94
94 内面


104


165


172
166
170
169
168
93
103
167
171 外面
171 内面

古代の土器 4

図版 22



古代の土器５


173
175
176
174
177
178
179
183
181
182
180
187
186
184
185
188
189
111

古代の土器６

図版 24







古代の土器 7



軽石加工品 1

図版 26



軽石加工品 2



土坑墓 1 号内遺物出土状況 1

図版 28



土坑墓 1 号内遺物出土状況 2



①～③土坑墓２号内遺物出土状況　　④土坑墓３号内遺物出土状況

図版 30















①土坑墓３号検出状況　　②～⑤土坑墓３号内遺物出土状況
⑥土坑墓４号完堀　　⑦土坑墓６号検出状況













①・②土坑墓５号内遺物出土状況　　③土坑墓５号内出土遺物
④・⑤土坑墓８号内遺物出土状況　　⑥土坑墓８号内出土遺物

図版 32





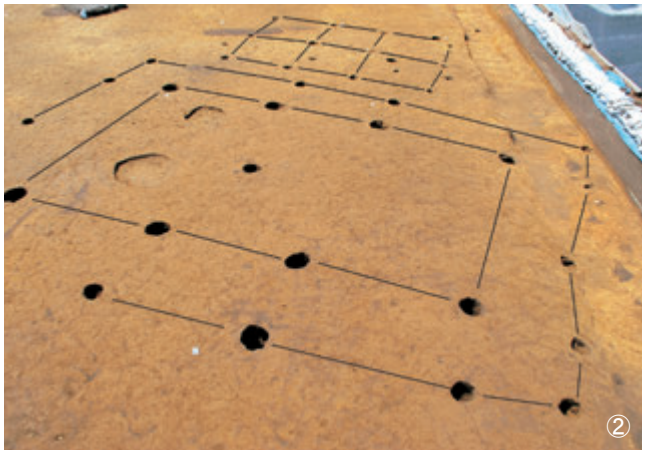






①・③～⑤土坑墓７号内遺物出土状況　　②土坑墓７号検出状況











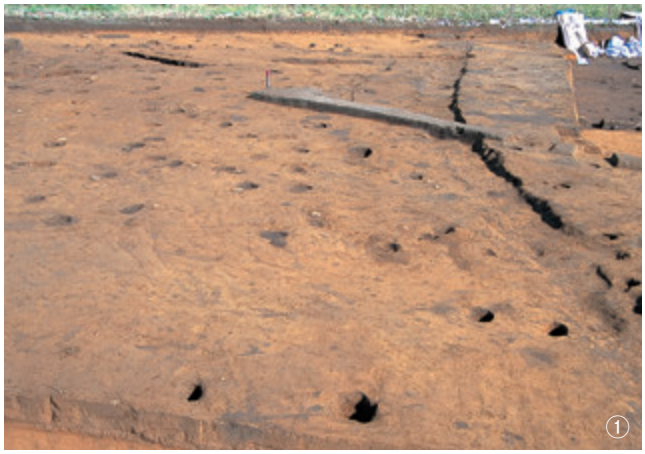




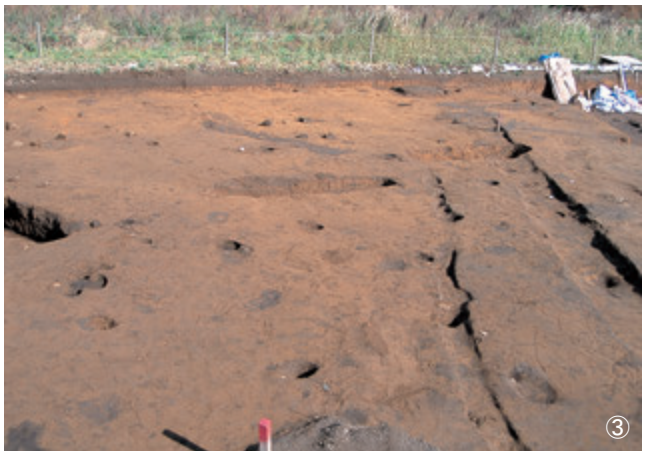


①掘立柱建物跡１号　②掘立柱建物跡１・２号　③掘立柱建物跡３号　④掘立柱建物跡６号
⑤掘立柱建物跡７号　⑥・⑦掘立柱建物跡８号　⑧掘立柱建物跡９号

図版 34

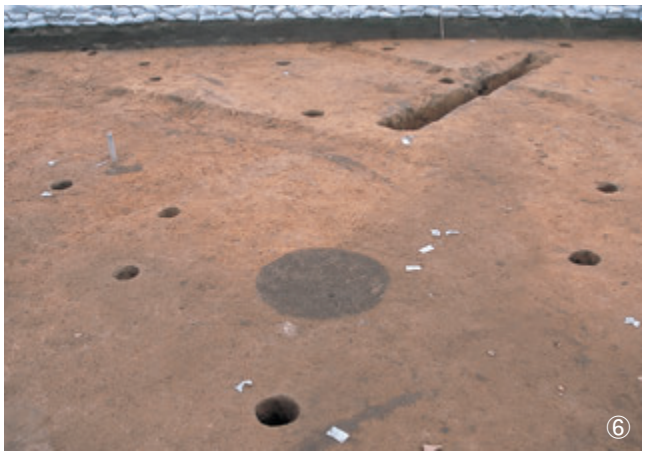
















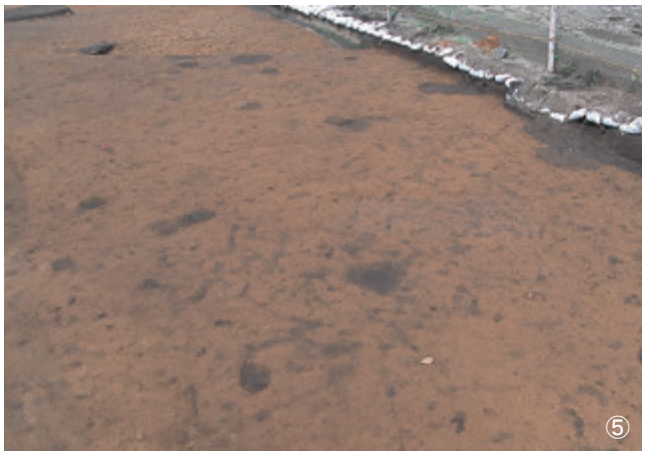
①・②掘立柱建物跡10号　　③掘立柱建物跡11号　　④掘立柱建物跡12号
⑤掘立柱建物跡13号　　⑥掘立柱建物跡14号　　⑦・⑧掘立柱建物跡15号



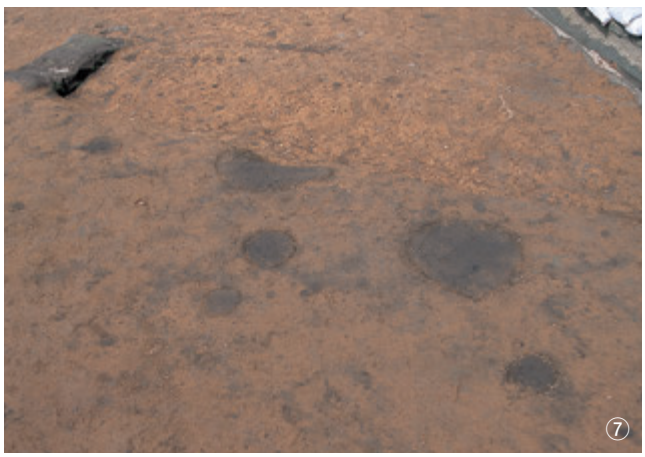














①・②掘立柱建物跡16号　③・④掘立柱建物跡19号　⑤・⑥掘立柱建物跡20号　⑦・⑧掘立柱建物跡21号

図版 36



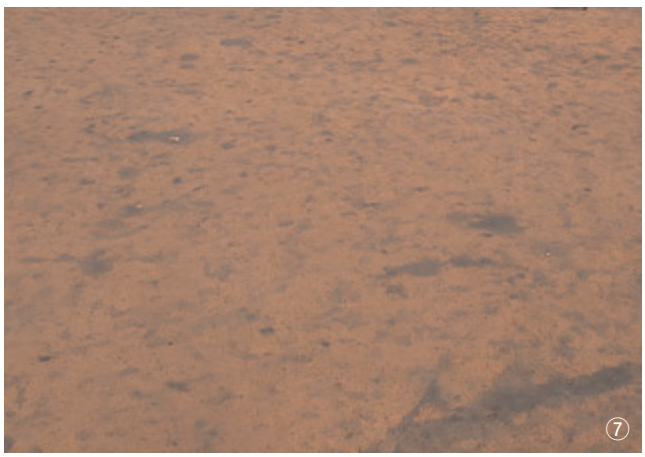


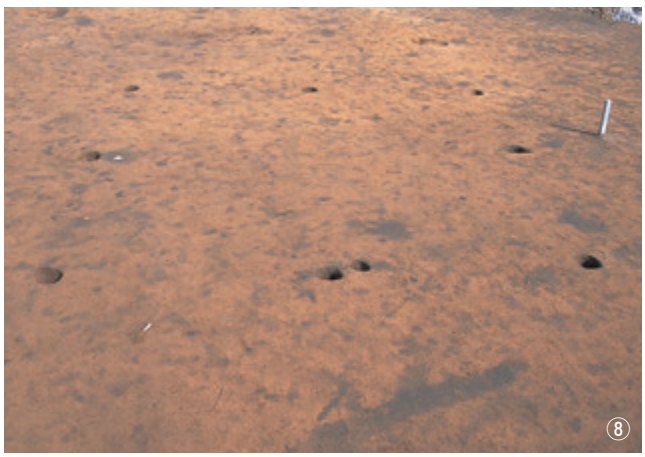




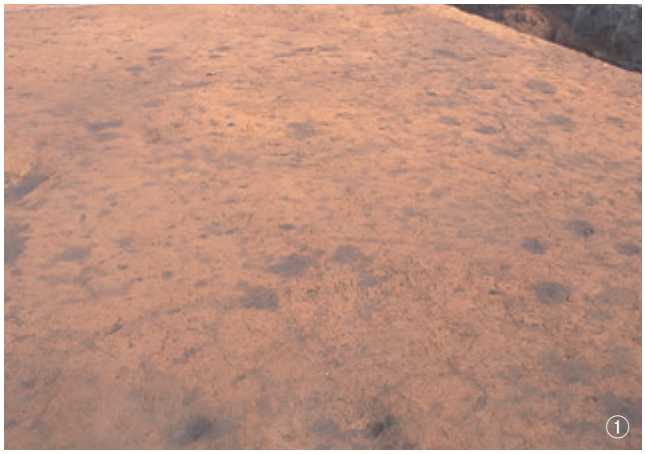






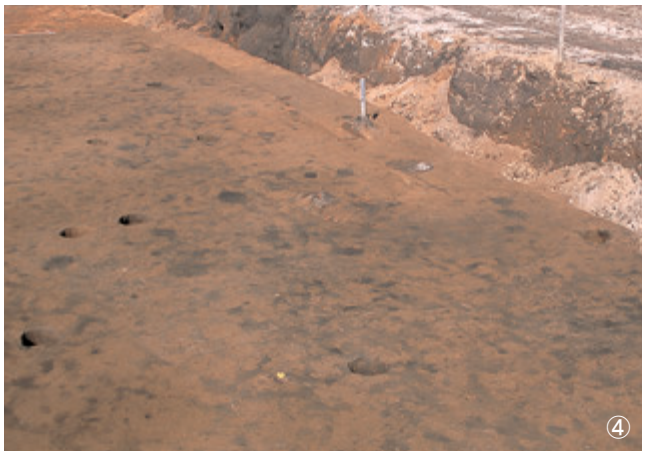


①・②掘立柱建物跡22号　③・④掘立柱建物跡27号　⑤・⑥掘立柱建物跡28号　⑦・⑧掘立柱建物跡32号



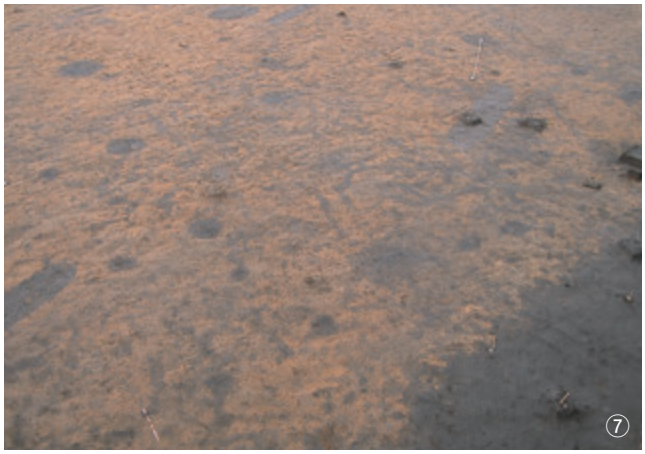


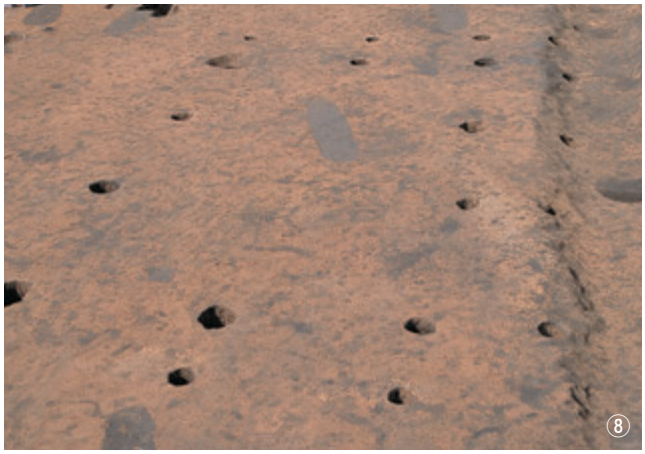












①・②掘立柱建物跡33号　③・④掘立柱建物跡34号　⑤・⑥掘立柱建物跡35号　⑦・⑧掘立柱建物跡37号

図版 38

















①・②掘立柱建物跡38号　③・④掘立柱建物跡39号　⑤・⑥掘立柱建物跡40号
⑦掘立柱建物跡41号　⑧掘立柱建物跡49号













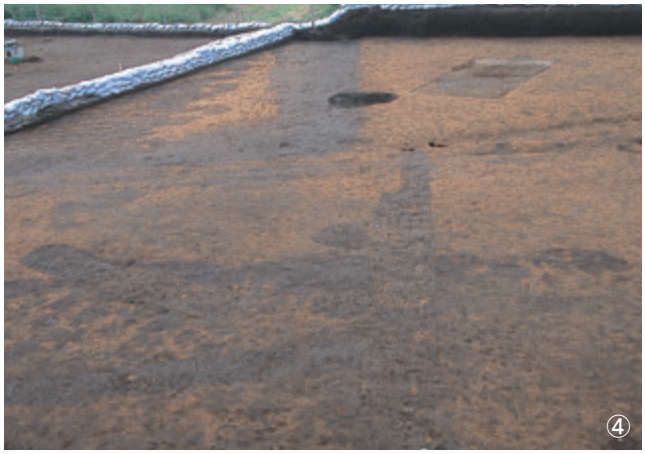
①溝状遺構２号　②溝状遺構４号　③溝状遺構５号　④溝状遺構７号
⑤溝状遺構６・７・９号　⑥溝状遺構14･15号

図版 40















①・②溝状遺構22・23号　　③溝状遺構29号　　④溝状遺構24・27号
⑤溝状遺構27号　　⑥・⑦溝状遺構28号













①～⑥溝状遺構29号

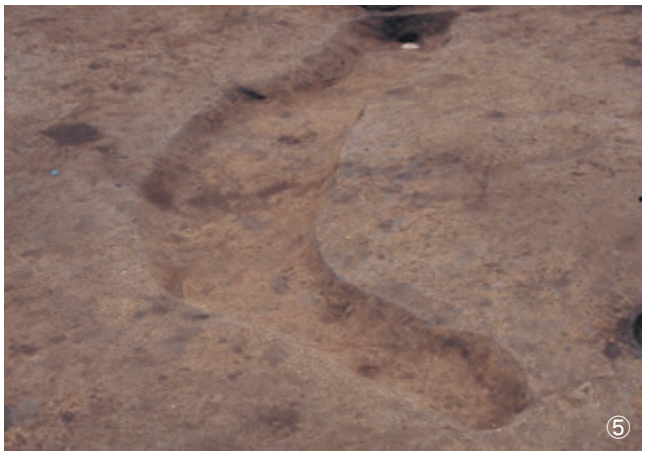
図版 42















①・②・④・⑥溝状遺構34号　　③溝状遺構35･36号
⑤溝状遺構35号　　⑦溝状遺構36号



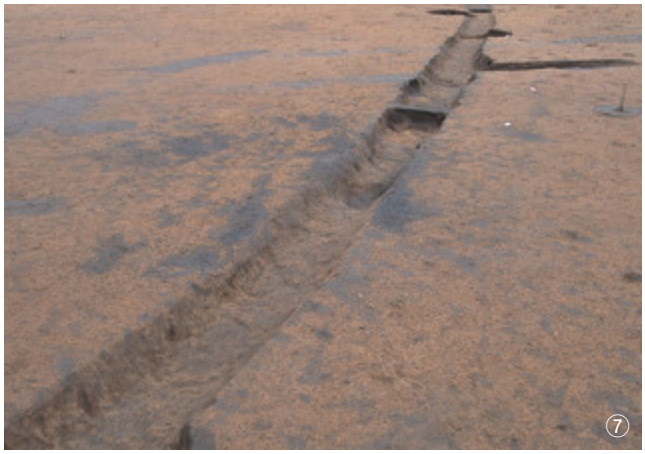














①溝状遺構40号　　②溝状遺構41号
③・⑤・⑦溝状遺構38号　　④溝状遺構43号　　⑥・⑧溝状遺構44号

図版 44













①溝状遺構47号　②・④溝状遺構49号
③・⑥溝状遺構48号　⑤溝状遺構58号













①溝状遺構52・54・55・56・57号　古道53号　　②溝状遺構30・31号　　③溝状遺構55号
④溝状遺構54号　　⑤溝状遺構56号　　⑥溝状遺構52号　古道53号

図版 46











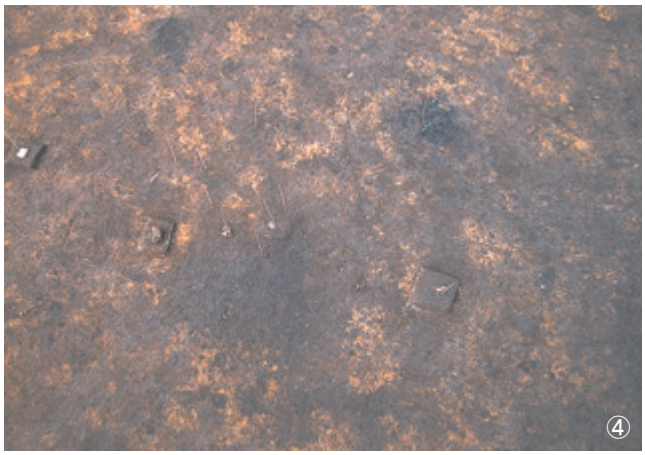


①溝状遺構59号　②古道60号　③古道61号
④溝状遺構63号　⑤溝状遺構65・66号　⑥溝状遺構64号















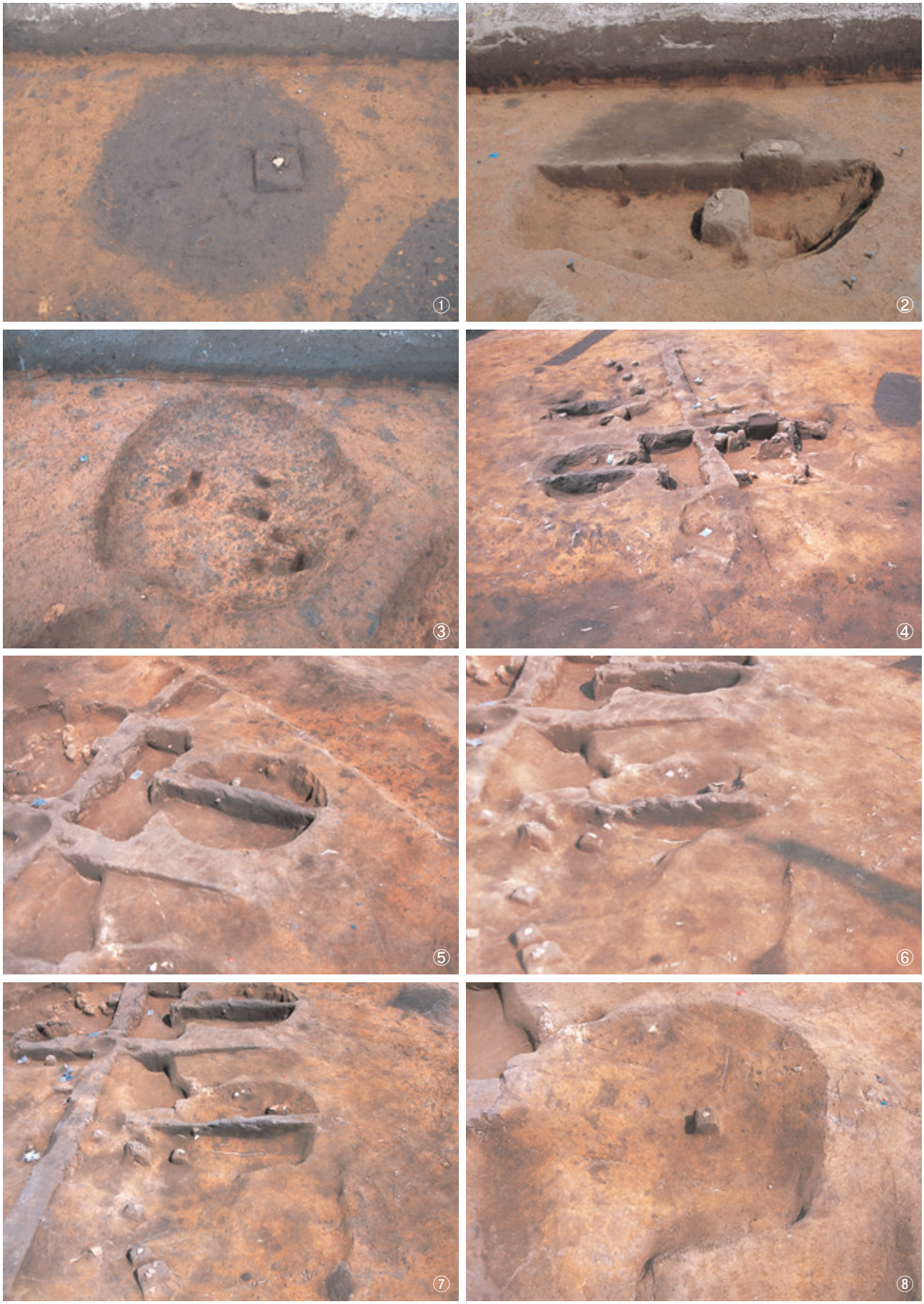


①～⑤鉄滓と出土状況及び土の変色部分　⑥変色部分の土の採取の様子　⑦・⑧鍛冶関連遺構内検出土坑

図版 48



①～③中世の土坑27号　　④・⑤中世の土坑32号　　⑥～⑧中世の土坑40号



①～③中世の土坑46号　　④・⑤中世の土坑48号　　⑥～⑧中世の土坑52号

図版 50

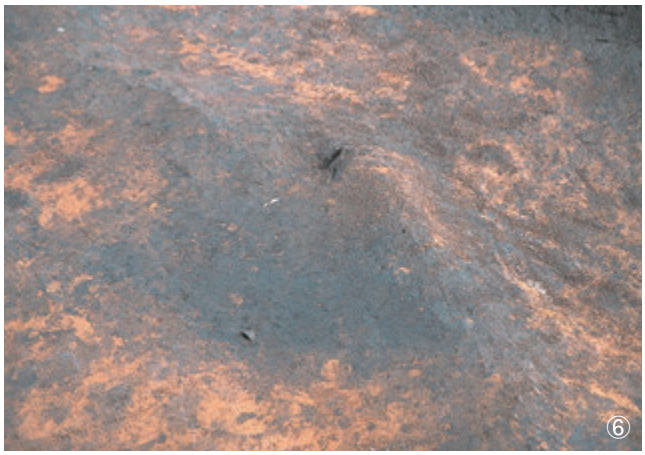


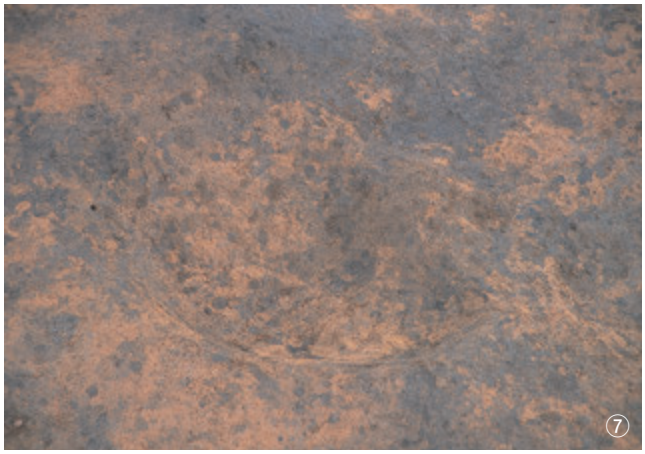














①・②中世の土坑81号　③中世の土坑81・99号　④・⑤中世の土坑94号
⑥・⑦中世の土坑102号　⑧中世の土坑113号









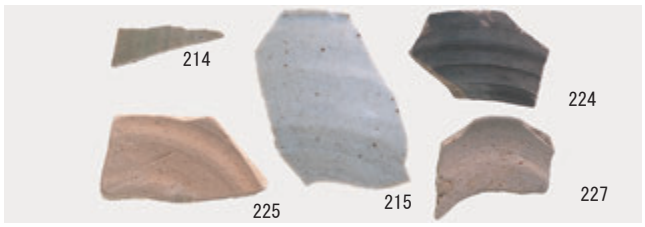














土坑墓 1 号内出土遺物 1

図版 52







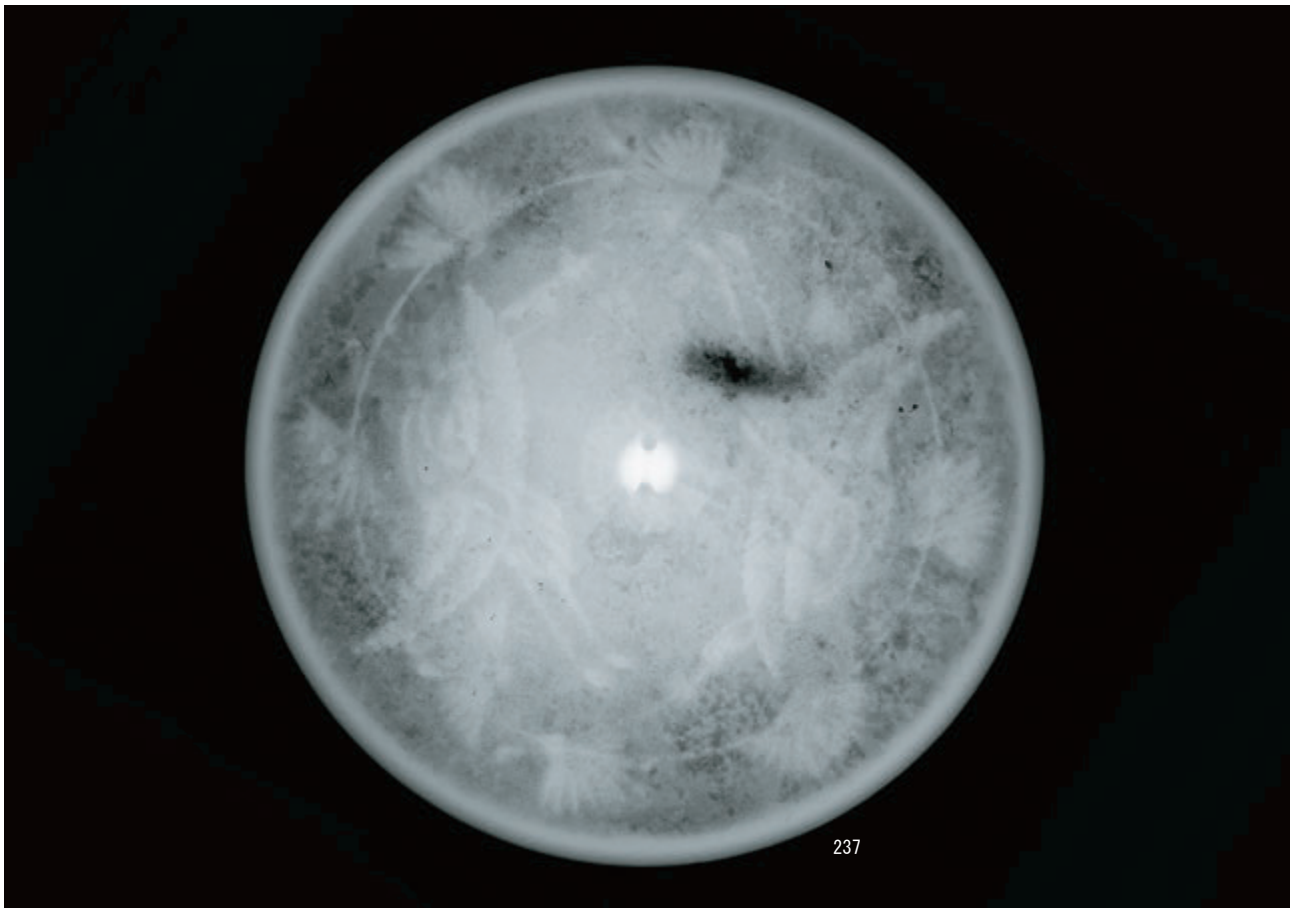






土坑墓１号内出土遺物２



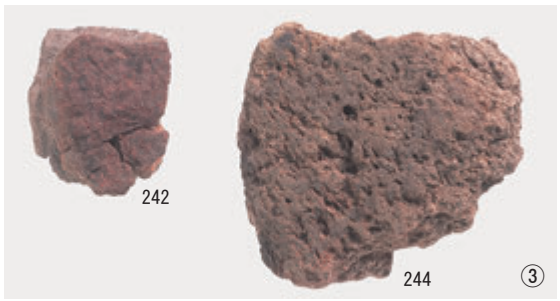


土坑墓１号内出土遺物３

図版 54











①土坑墓１号内出土遺物４　②～④土坑墓２号内出土遺物　⑤土坑墓３号内出土遺物１



土坑墓３号内出土遺物２

図版 56





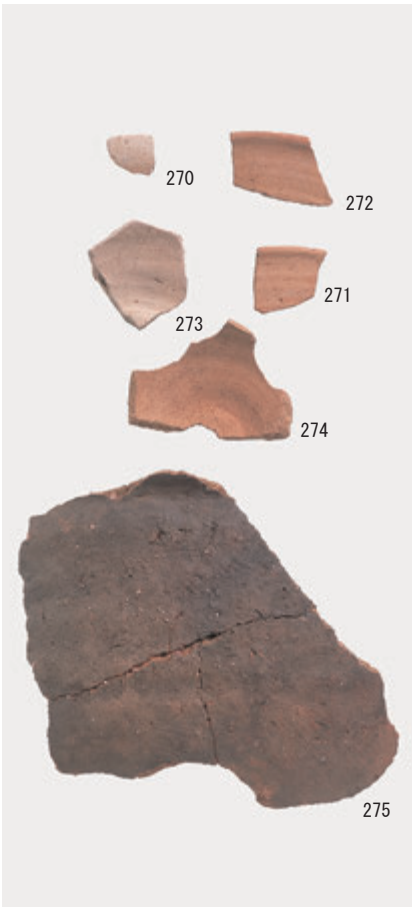
①土坑墓３号内出土遺物３　　②土坑墓５号内出土遺物















土坑墓 7 号内出土遺物 1

図版 58







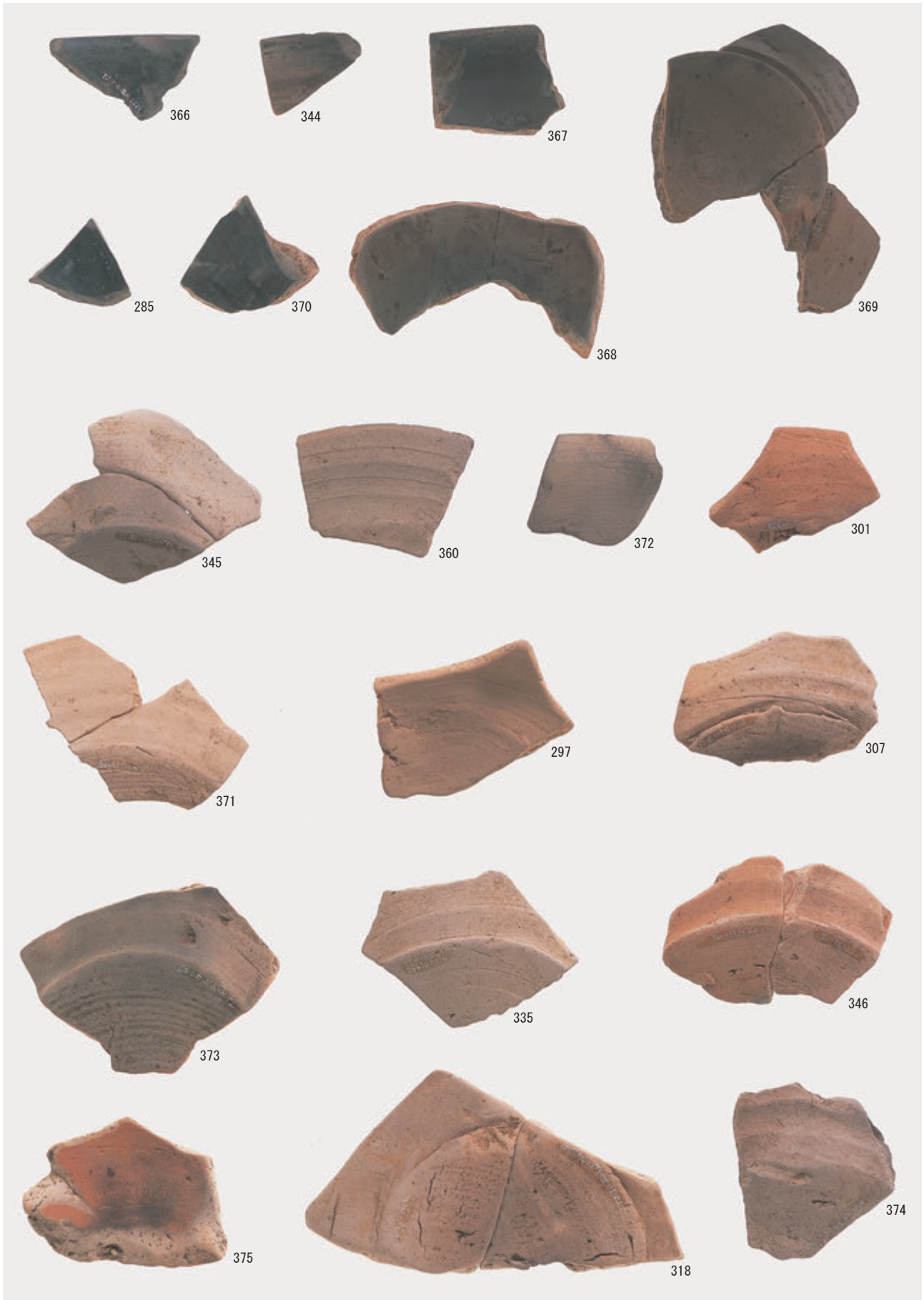






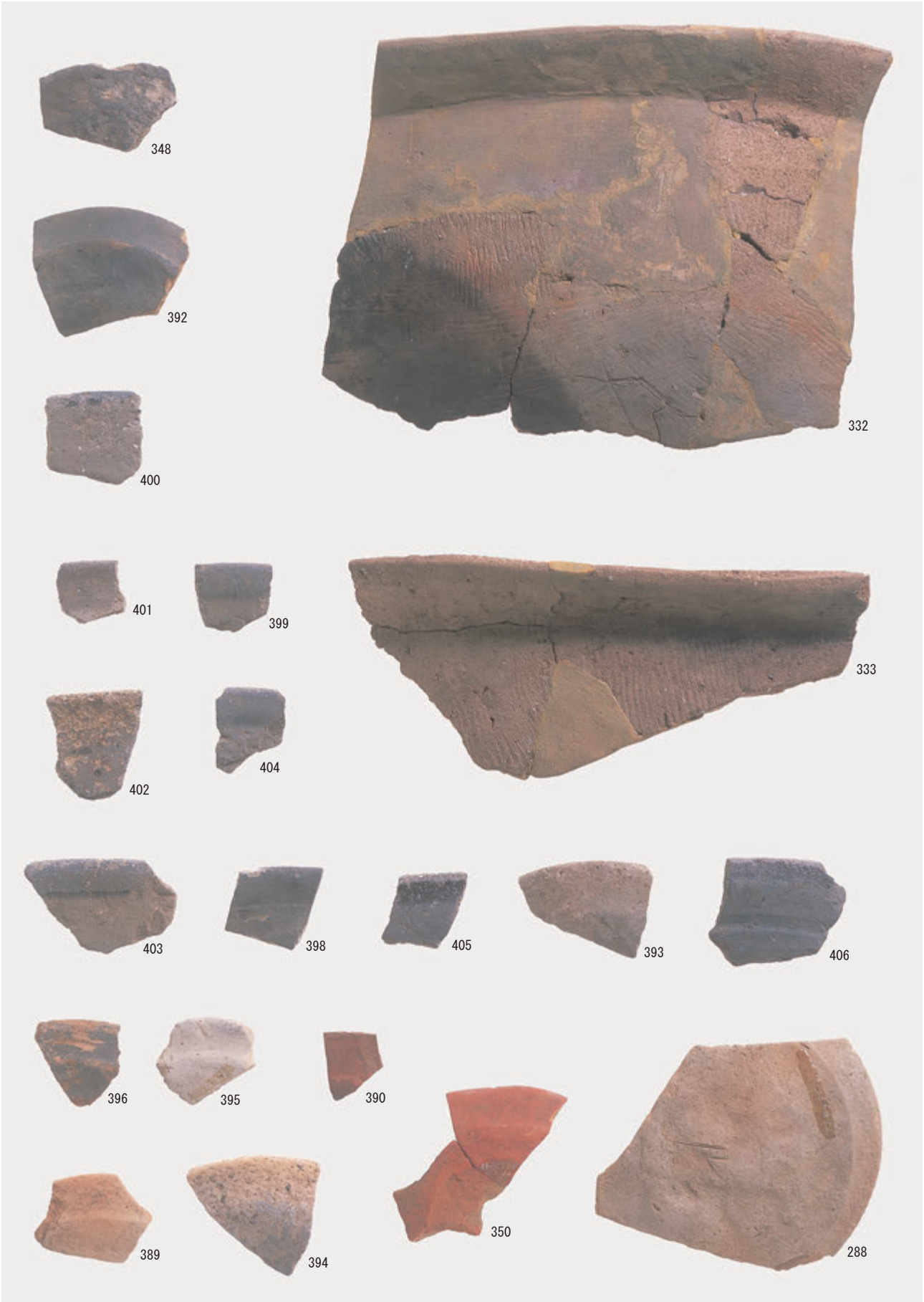


①土坑墓７号内出土遺物２　　②～⑦土坑墓８号内出土遺物

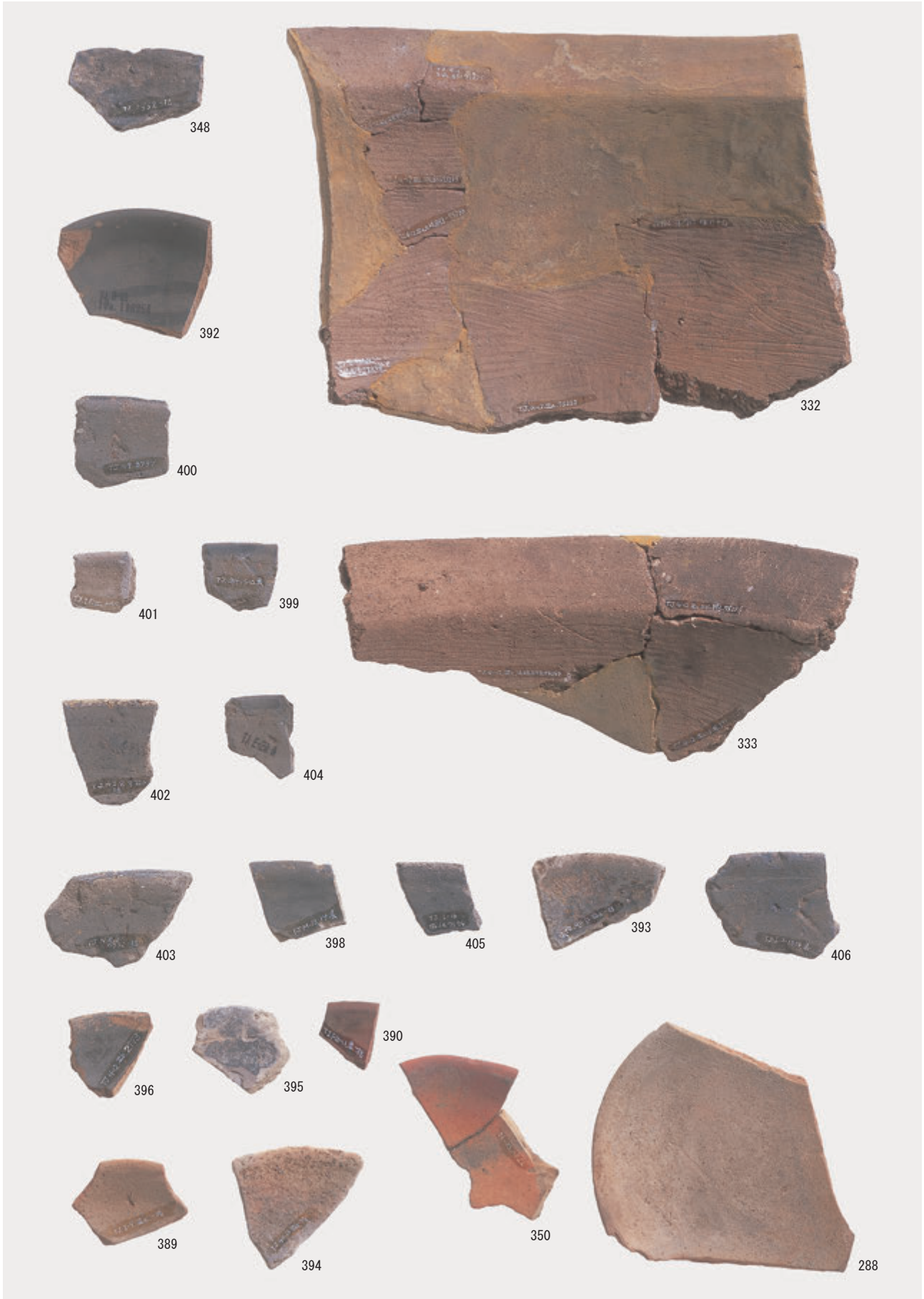

366
344
367
369
285
370
368
345
360
372
301
371
297
307
373
335
346
375
318
374

中世の遺物 1

図版 60

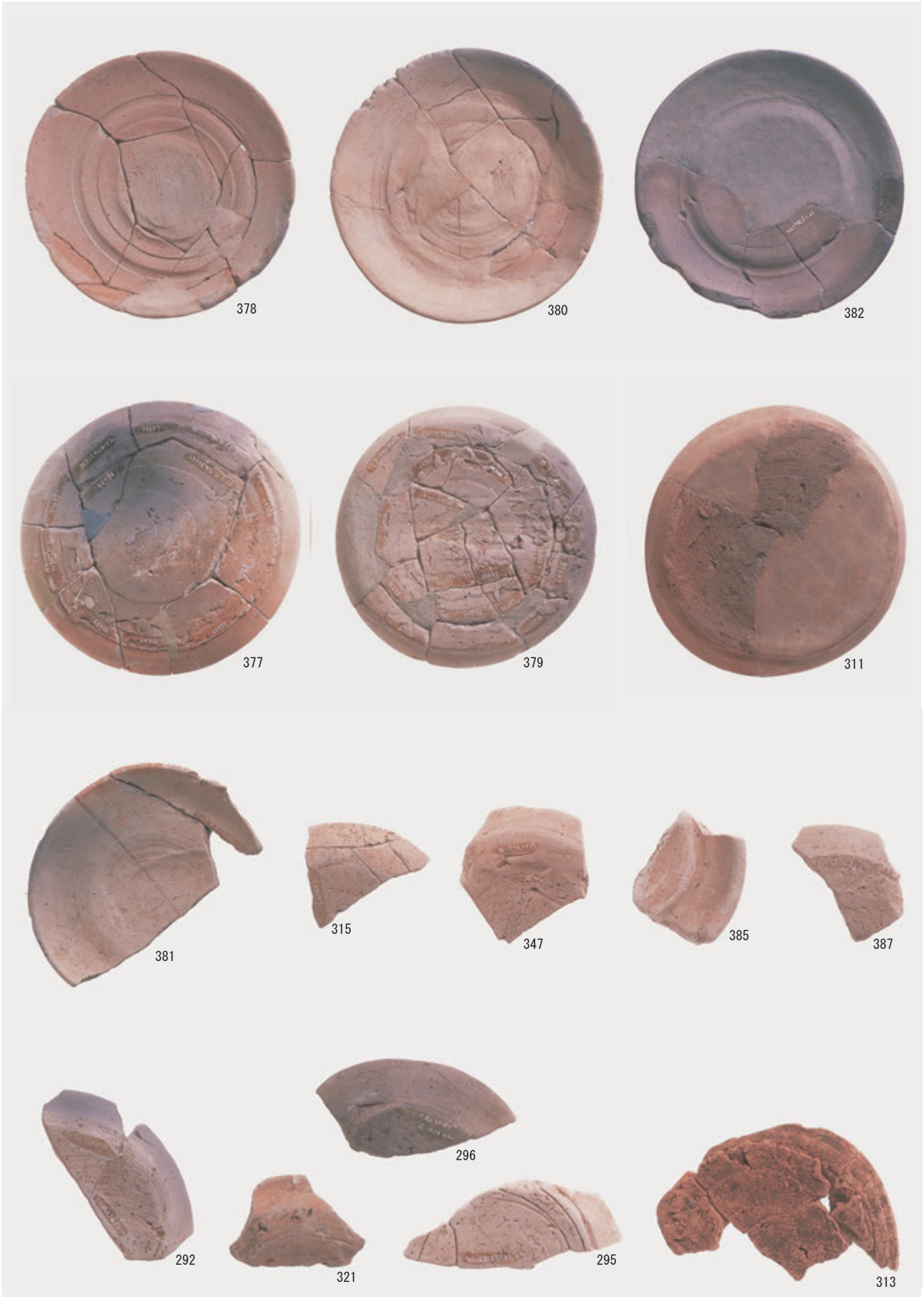


中世の遺物２（外面）

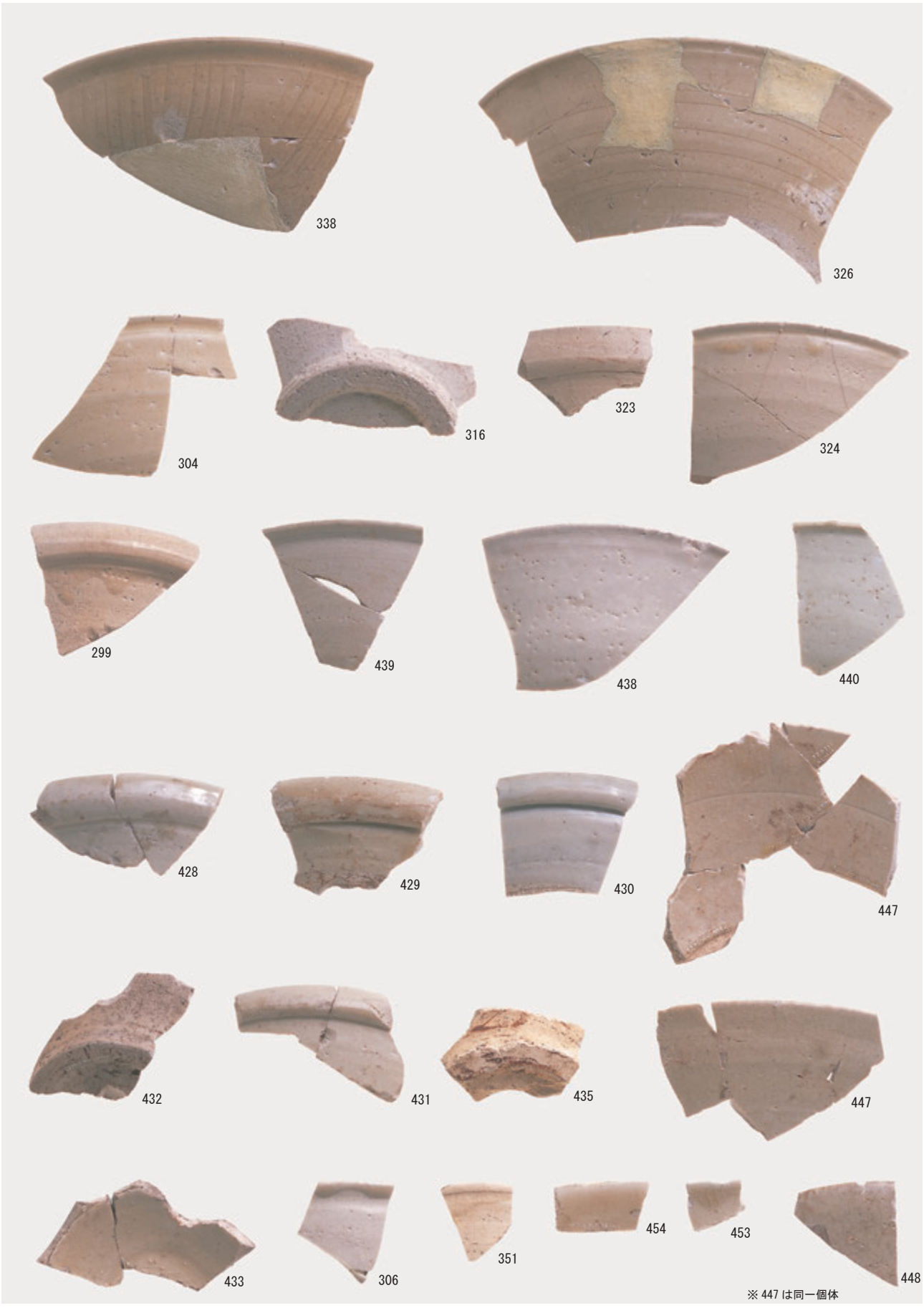

348
392
400
332
401
399
333
402
404
403
398
405
393
406
396
395
390
389
394
350
288

中世の遺物２（内面）

図版 62



中世の遺物３

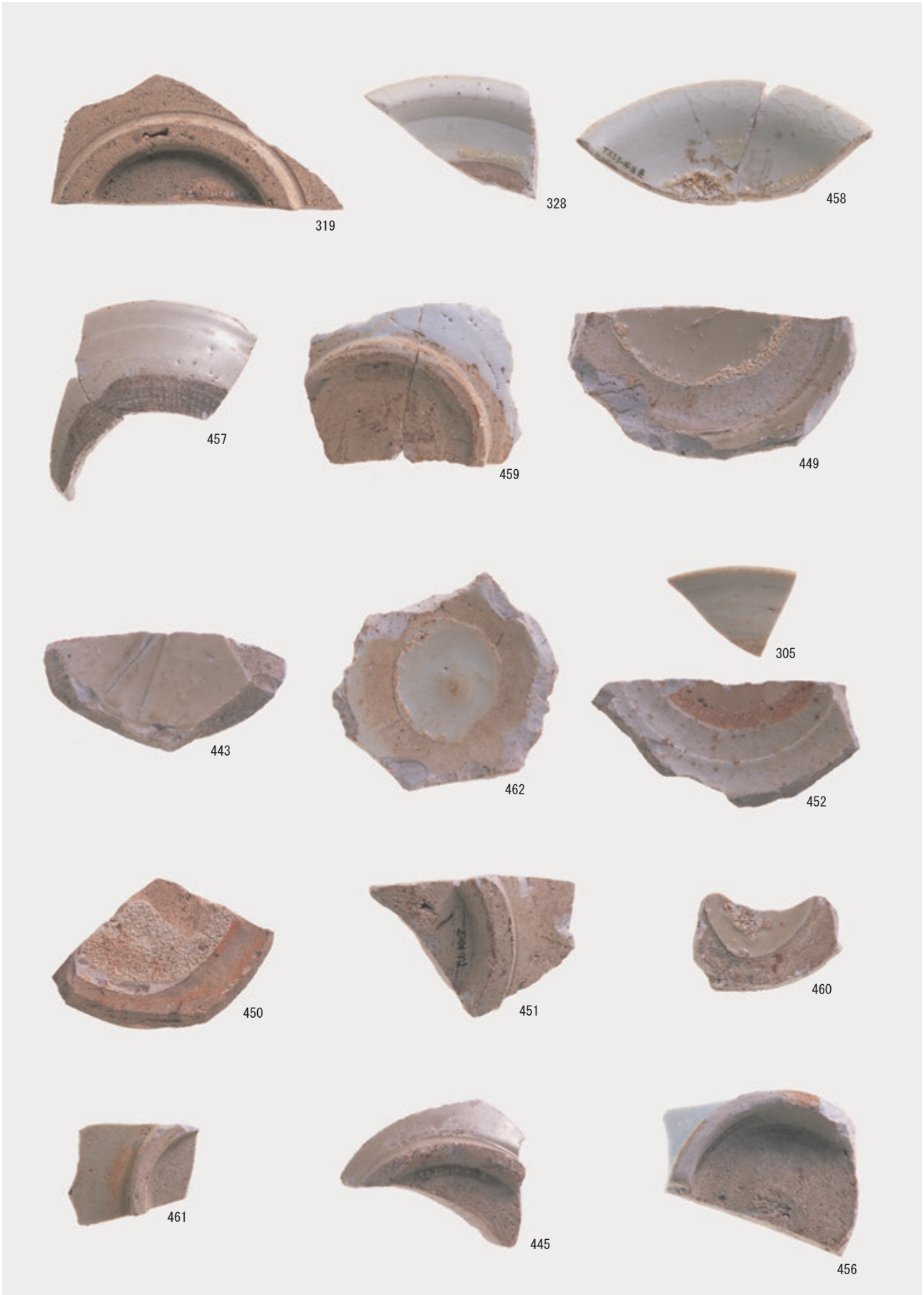

338
326
304
316
323
324
299
439
438
440
428
429
430
447
432
431
435
447
433
306
351
454
453
448
※ 447 は同一個体

中世の遺物４

図版 64

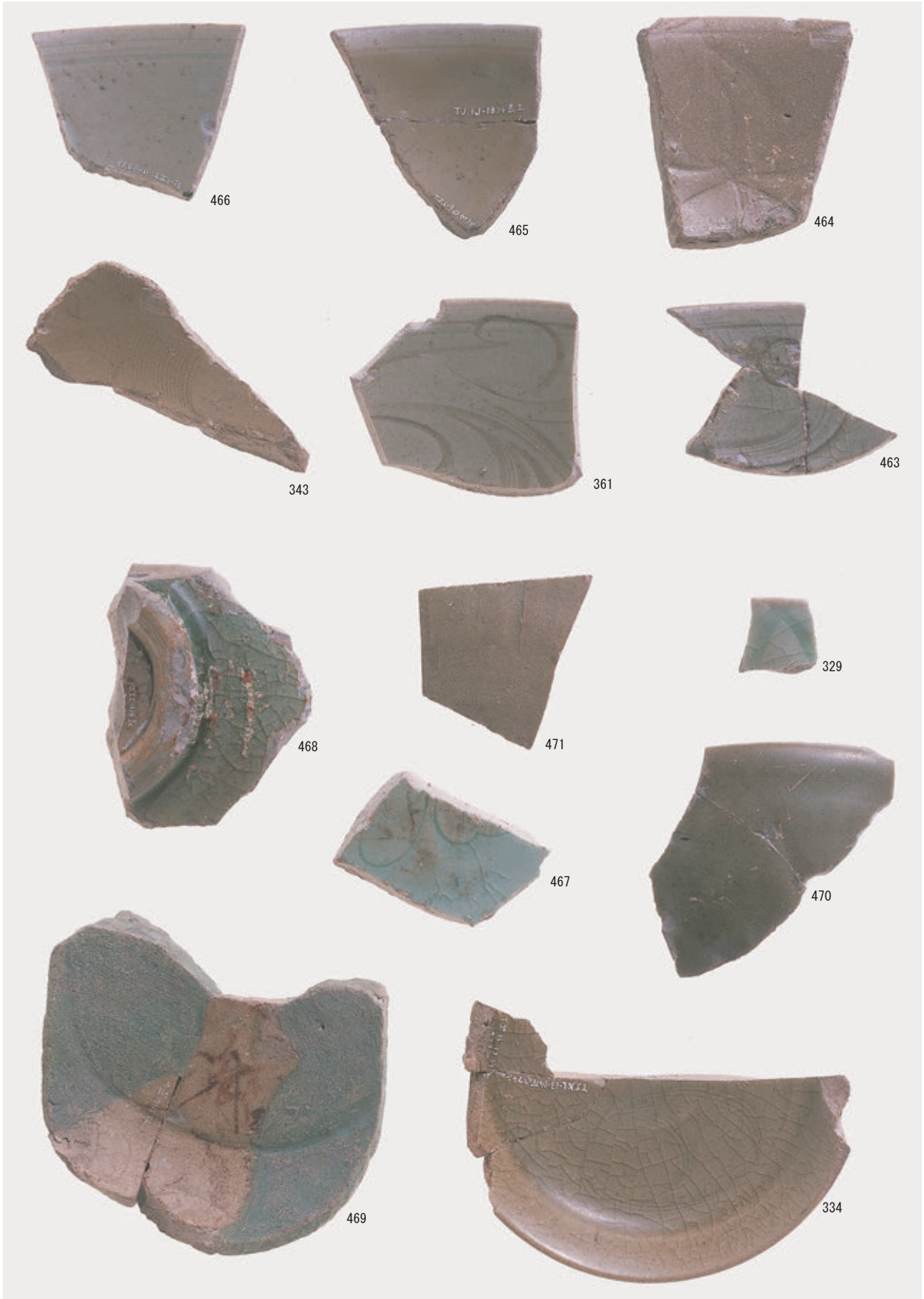


中世の遺物５

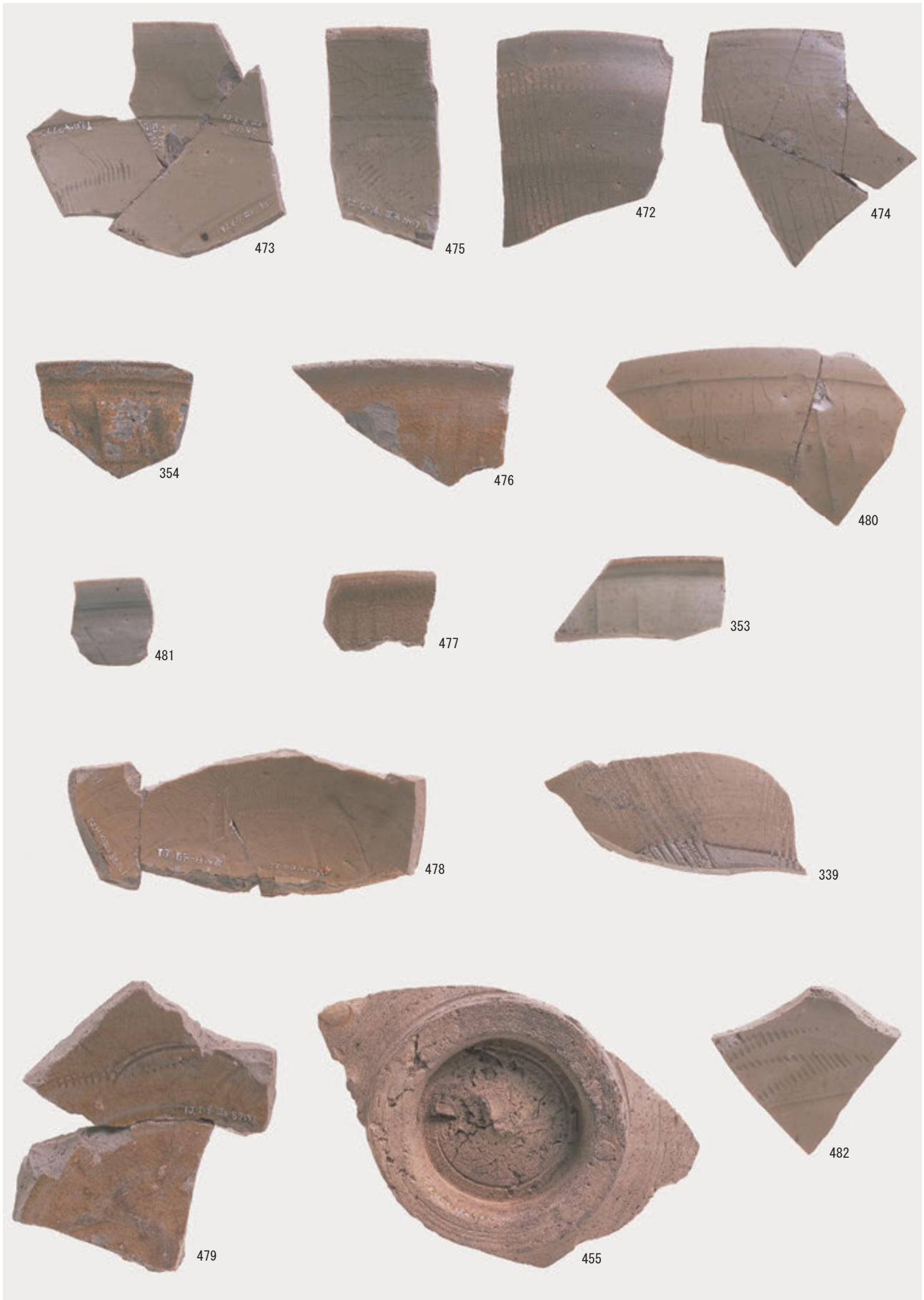


中世の遺物６

図版 66

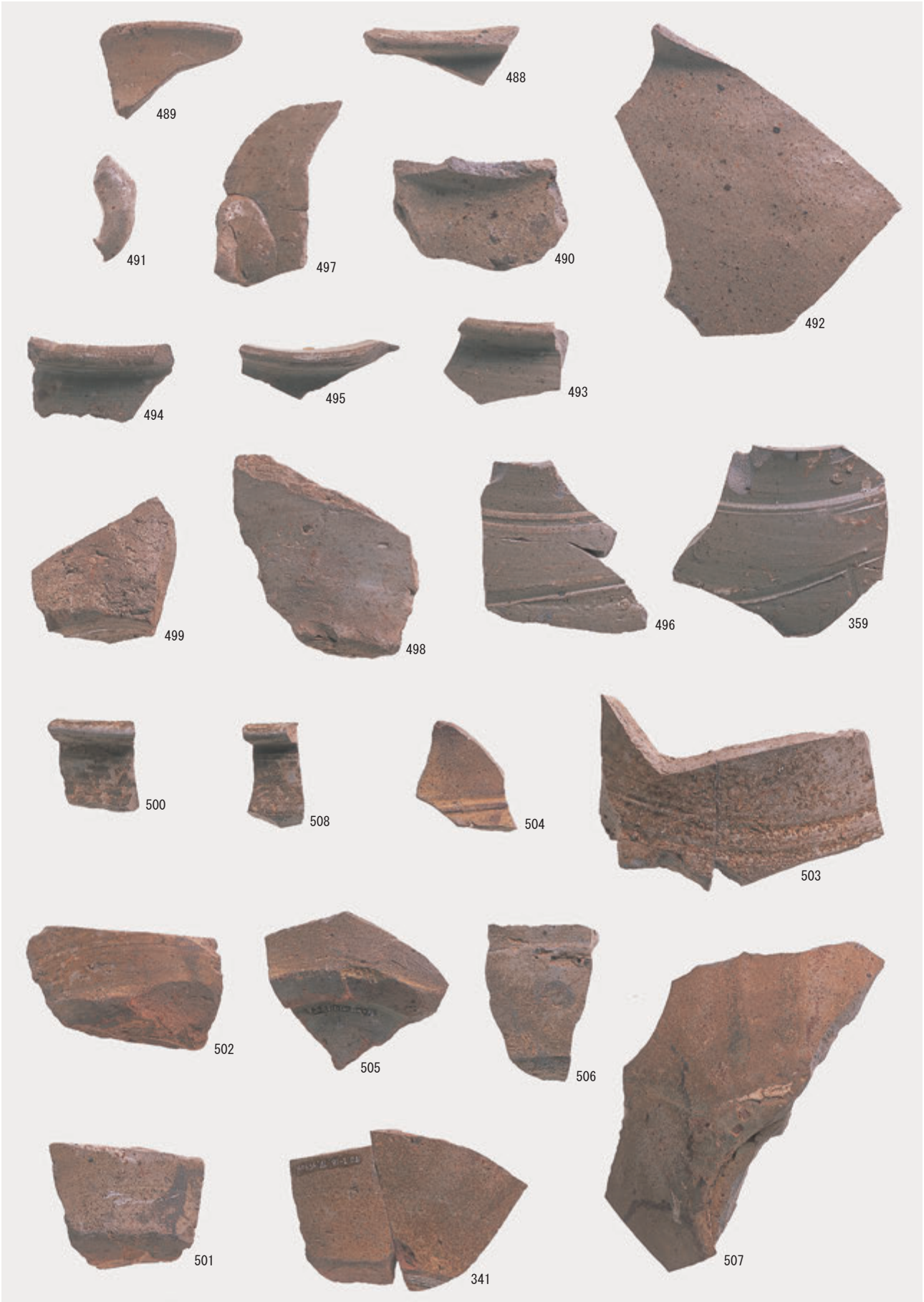


中世の遺物７



中世の遺物８

図版 68


489
488
491
497
490
492
494
495
493
499
498
496
359
500
508
504
503
502
505
506
501
341
507

中世の遺物９


512
510
511
509
513
514
291
515
519
516
331
518
362
520
517
521
525
524
523
522
340
342
342内面

中世の遺物 10

図版 70

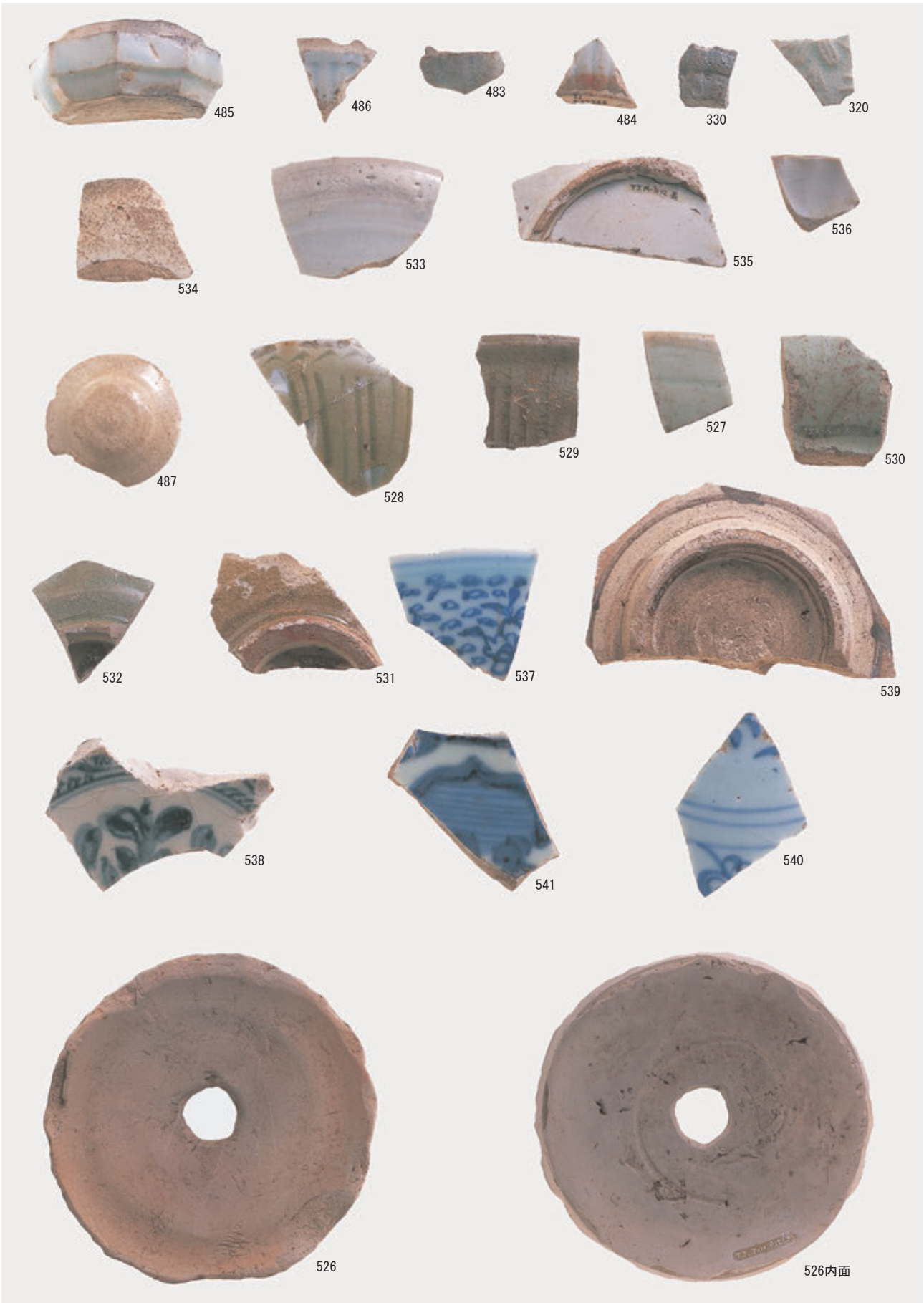


中世の遺物 11

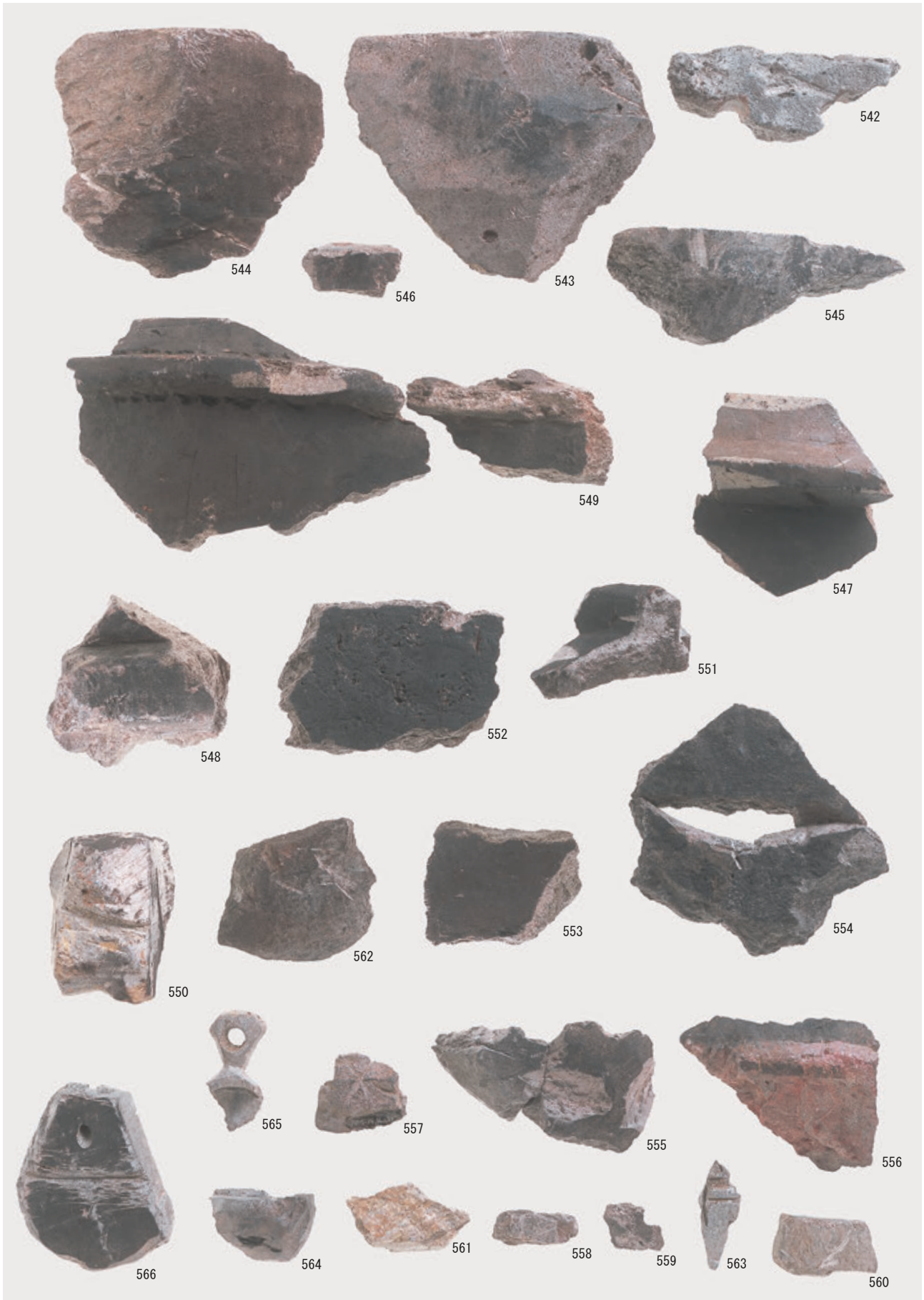


中世の遺物 12

図版 72



中世の遺物 13


542
544
543
546
545
549
547
551
548
552
553
554
562
550
565
557
555
556
566
564
561
558
559
563
560

中世の遺物 14

図版 74





中世の遺物 15











①～④近世の畝状遺構　　⑤近世の土坑５号（手前）

図版 76

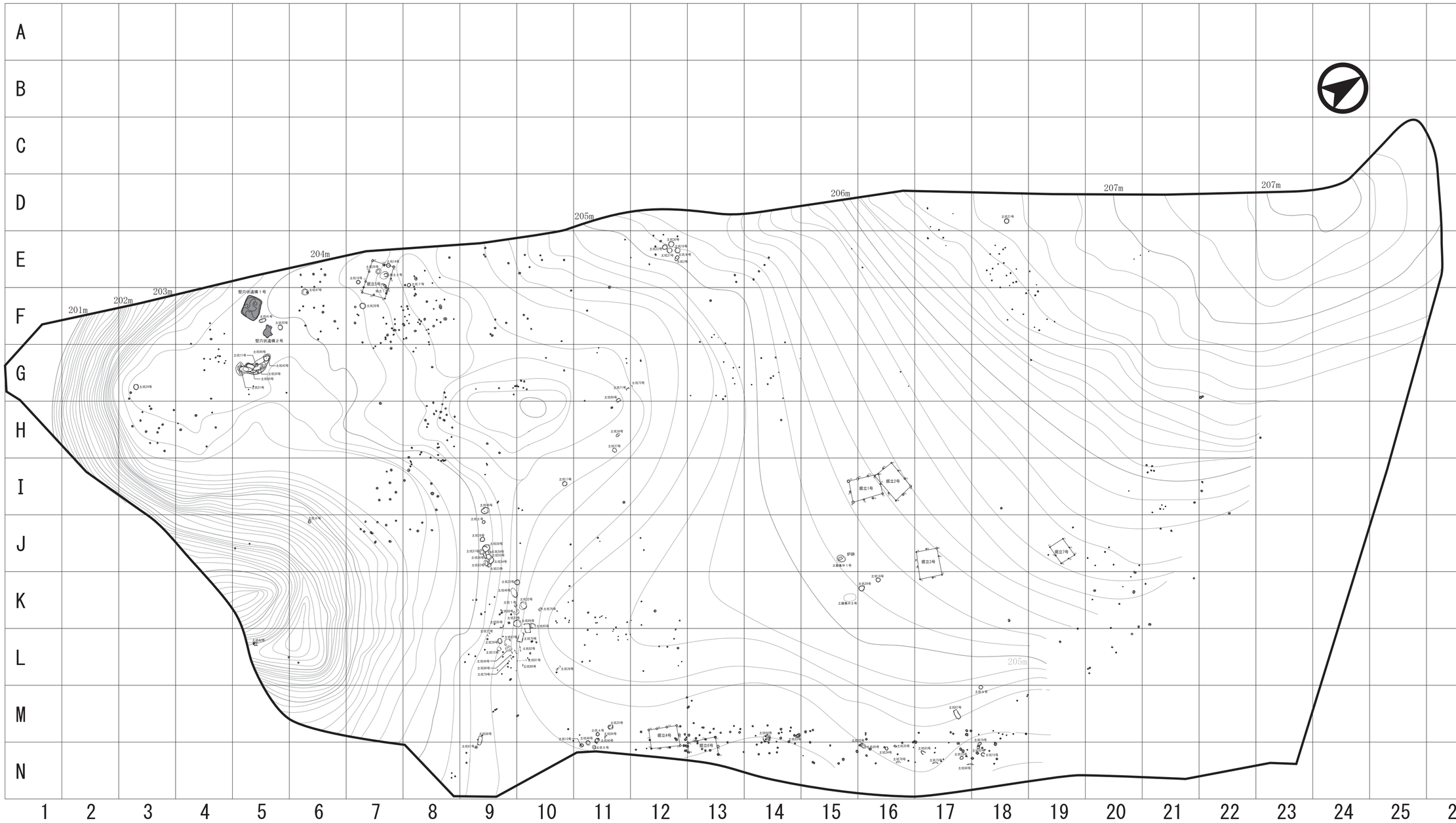

589
594
591
596
605
606
608
611
592
593
595
602
598
597
600
604
599
607
601
609
610

近世の遺物

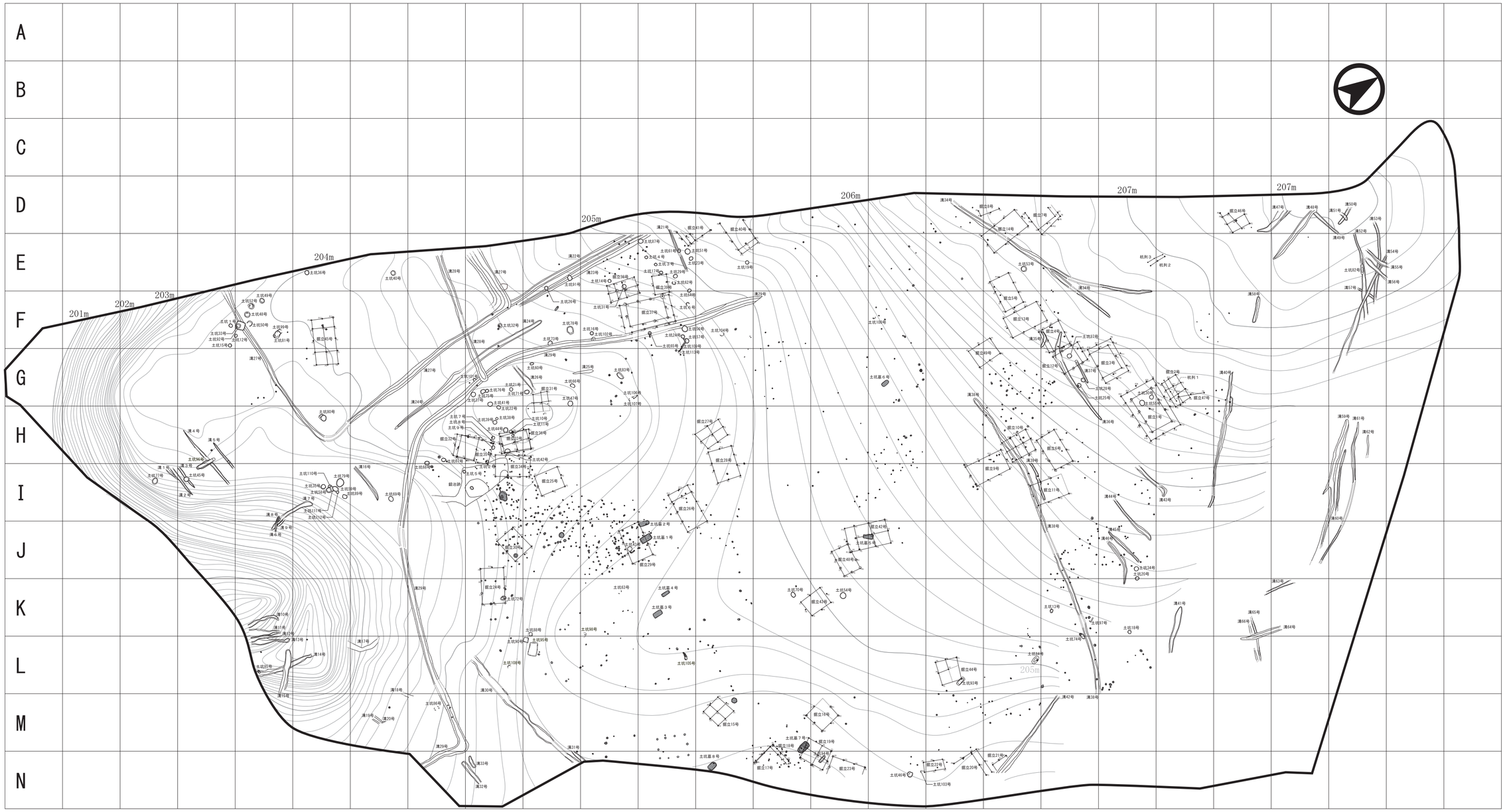
中世の土坑墓に関する参考文献等

中世の土坑墓に関する文献等について紹介しておく。

・狭川真一 「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景―北部九州を中心として」
『貿易陶磁研究』№13 日本貿易陶磁研究会 1993
・橘田正徳 「中世前期における土坑墓の出土供膳具の様相」『貿易陶磁研究』№13 日本貿易陶磁研究会
1993
・『太宰府市史』考古資料編 太宰府市史料編集委員会 1992
・『太宰府条坊跡ⅩⅤ―陶磁器分類編―』太宰府の文化財第49集 太宰府市教育委員会 2000
・「よみがえる！中世の輝き～海を渡った輸入陶磁器と木棺墓の発見～」薬師の森遺跡第３次調査 現地説明
会資料 大野城市教育委員会 2008
・新里亮人 「滑石製石鍋の基礎的研究」先史琉球の生業と交易 ―奄美・沖縄の発掘調査から― 熊本大
学文学部 2002
・「小田松木薗遺跡」『年報』第２号 隼人町立歴史民俗資料館 1991
・『平安京左京八条三坊九・十町』―七条町の調査― 古代文化調査会 2007
・『多利遺跡群』近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅶ） 兵庫県教育委員会 1987
・『山岳信仰の遺宝』 奈良国立博物館 1985
・『古鏡の美』～出土鏡を中心に～ 福井県立博物館 1986
・『郡元地区遺跡群』都城市文化財調査報告書 第51集 宮崎県都城市教育委員会 2000
・上村俊雄 「南九州出土の湖州鏡について」 鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集第39号 1994
・『柳之御所跡』 岩手県文化振興事業団文化財調査報告書228集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995
・『國學院大學考古学資料館紀要』第14集 國學院大學考古学資料館 1998
・『長田遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（２） 鹿児島県曽於郡有明町教育委員会 2003
・『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ―中世瀬戸内の集落遺跡―』 広島県教育委員会 1996
・『佐知遺跡』大分県文化財調査報告書第81集 大分県教育委員会 1989
・『芝原遺跡３』―古代・中世・近世編― 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（170） 2013
・『鍛冶屋馬場遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（39） 2002
・『上野城跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68） 2004


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
201m
202m
203m
204m
205m
206m
207m
207m
竪穴状遺構１号
竪穴状遺構２号
掘立1号
掘立2号
掘立3号
掘立4号
掘立6号
掘立7号
炉跡
炉跡
0m
50m

古代の遺構配置図



中 世 の 遺 構 配 置 図

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（3）
東九州自動車道建設（鹿屋串良 JCT ～曽於弥五郎 IC）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

天神段遺跡

（弥生時代～近世編）

発行年月　２０１５年2月
編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒 899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印刷所　濱島印刷株式会社
〒 890-0052　鹿児島市上之園町 17 番２号
TEL　099-255-6121　　FAX　099-259-1629



鹿児島県